

2014 年度博士学位申請論文

日中通訳者の通訳規範意識とその形成要因

平塚ゆかり

立教大学大学院

異文化コミュニケーション研究科

2014 年度 博士學位申請論文

指導教授	鳥飼玖美子 教授
------	----------

論文 文 題 目	和 文	日中通訳者の通訳規範意識とその形成要因
	英 文	Oral History of Chinese-Japanese Interpreters: How Their Norms are Formed

研究科	異文化コミュニケーション研究科
専攻	異文化コミュニケーション専攻

学 生 番 号	10WT002J
氏 名	平塚ゆかり

要旨

本論は、中国語-日本語を使用言語とする通訳者の規範意識を検証する研究である。日中通訳者の規範意識を検証するため、本論の前半では、中国の通訳における歴史と、中国というコンテキストにより産出されてきた通訳翻訳論を時系列的に概観する。次に、近現代の中国外交に携わった通訳者の論を例に、その言説から規範意識と、その形成要因を検証する。これらを元に、これまでの中国における通訳規範とは何かを検証する。本論の後半では、現代の日中通訳者の規範意識を、通訳者のオーラルヒストリーから浮き彫りにし、前半の文献研究により導きだされた中国の通訳規範と、現代の通訳者の持つ規範意識の分析を行う。本分析の際には、Chesterman (1997) の規範論と、Toury (1995)、Chesterman (1997) の理論的枠組みを踏襲して中国の外交通訳者の規範研究を展開した王斌华 (2013) を分析の枠組みとして用いる。そして、現代の日中通訳者の実践に基づく規範意識からその形成要因を考察し、通訳を取り巻く社会的コンテキストと規範意識の関係を明らかにすることが、本論の目的である。

まず、本研究の目的、背景、研究の意義を述べる。本論はこれまで日本では研究の比較基準点とされてこなかった中国の翻訳通訳研究の視点を日本の翻訳通訳研究に取り入れた研究である。若林(2011)は、日本と西洋との二者間の相互関係だけではなく、現代中国を含んだ三者間での通訳研究の視点は、今後の翻訳研究の学問的姿勢のバランスと適合性を図るために有益であると指摘するが、本論の第1章、続く第2章で示した先行研究を通して、現代中国における通訳研究の一端を伺うことが可能となる。第1章では、本論の鍵概念である規範についての論考を概観し、本論で述べる「規範」の定義はToury (1995/2012) の概念を用いることを示す。すなわち、通訳行為における「規範」は通訳に関する「規則」と「特異性」の間に存在するという概念である。本論では「規範」という用語を、Toury (ibid.) の概念である「規範 (norm)」の意味で用いるが、中国語の「規範」とは「通訳翻訳のあるべき姿」との意味で多用されているため、その含意は異なるとの見解も示す。続いて、規範研究である本研究の理論的枠組みとなる王 (2013) に言及する。王は、Chesterman の規範論を援用し、AIIC (Association Internationale des Interpretes de Conference) の倫理規定や中国で策定された国家基準である「口译规范 (通訳規範)」などの通訳者の職業倫理規定を分析し、そこから抽出した規範概念を「規定性規範」と名付け、外交通訳者の中英対訳コーパスのデータからこの「規定性規範」と通訳スクリプトを比較検証し、シフト (ずれ) を抽出した。そのシフト (ずれ) から通訳者の「実際の規範」を抽出し、両者を比較分析した研究である。本論は第2章で示した先行研究をふまえて、「規定性規範」(王, 2013) をこれまでの中国における通訳翻訳論および通訳者の言説から抽出し、オーラルヒストリーという方法を用いて、現役通

訳者に内在する規範意識である「実際の規範」との比較検証を行なう。研究方法はオーラルヒストリーを採用し、通訳者の口述資料から規範の抽出を行なう。これは、Tourey (ibid.) の示したふたつの規範の抽出方法、すなわち①翻訳されたテキスト(王 (ibid.) では通訳スクリプト) ②テキスト以外の資料、通訳者(通訳者)が規範に対して明言した言説など、の②を採用することを意味する。故に、本研究では、起点言語から目標言語へ通訳されたスクリプトそのものは用いていない。しかしながら、本論で分析する対象は「規範」について通訳者が明言した言説だけではなく、その規範と相反すると考えられる行為に現れる「実際の規範」(王, ibid.) も含める。インタビュー全体の文脈から、通訳者の「規定性規範」(王, ibid.) と、通訳者に既に内在化している規範、すなわち「実際の規範」を探ることを目的とする。本論では通訳者の「規範」と「実践」には、一定の矛盾が存在することを前提とし、論を進める。また第2章では、本研究の先行研究である中国における翻訳学、通訳学領域の規範研究を概観した後、オーラルヒストリーによる通訳者研究について述べ、本論の位置づけを行う。

過去を振り返ると、これまで中国においては、仏典の翻訳が盛んに行われた古代より、「翻訳・通訳はこうあるべき」という、あるべき姿を示す「規範(中国語)」が時代毎に存在した。社会的背景や通訳の目的などの複合的要因により、「規範」論も時代とともに変化を遂げてきた。1950年代には、外交通訳者である姜椿芳が「翻訳の善し悪しは政治問題に直結する」との翻訳論を展開するなど、イデオロギーや政治的目的と通訳・翻訳行為との密接な関係を伺わせる論も存在した。その後、文化大革命により通訳者、通訳行為は多大な影響を受けることになるが、1970年代後半から実施された改革開放政策により西洋の通訳理論を吸収し、外交政策の一環として通訳・翻訳事業の推進を図ってきた。これらの事象を第3章、第4章、そして通訳者のオーラルヒストリー分析である第5章で具体的に詳述する。

第3章では、中国における通訳史と中国における通訳翻訳論を、歴史的流れに沿って概観する。通訳翻訳論では仏典翻訳まで遡り、草創期、発展期、全盛期の各時代における仏典翻訳理論の特徴について述べる。仏典翻訳の時代から中国では「文」訳という目標言語重視・文体重視の訳と「質」訳という起点言語重視・内容重視の二項対立が存在し、当時の民衆の受容度や時代の為政者との関係などの社会背景により、いずれかに偏向した翻訳が行なわれ、最終的に鳩摩羅什に代表される漢文の優位性を生かした翻訳が民衆に受け入れられた旨を紹介する。次に、今日に至るまで中国の通訳翻訳に影響を及ぼし、今も様々な研究がなされている19世紀末から五四運動前後における翻訳論を概観する。中国の翻訳論は膨大であり、すべてを詳述することは本論では行わず、ここでは代表的な論のみを取り上げることにする。嚴復の「信达雅」、魯迅の硬訳論、林語堂

の「忠実、通順、美」陳西滢の「三似」論などを取り上げ、その特徴を述べる。また、中華人民共和国が成立したのち、外交通訳者として政府首脳など要人の通訳に携わってきた姜椿芳と李越然の『通訳者の心得』「準、順、快」の通訳規範論を取り上げ、実践通訳者としての規範と歴史的背景との関連性に言及する。姜と李、両者の論考は、①厳復の「信達雅」を根底としている、②音声を用いてのメッセージ伝達という通訳行為の特徴が現れている、③通訳行為への理解を促す論調である、そして、④実践の重要性を提起している、などの共通点が見いだされた。

第4章では、第3章で取り上げた近代中国の外交通訳者として、政府首脳など要人の通訳に携わってきた姜椿芳と李越然の言説とその通訳論から、実践通訳者としての規範と社会的歴史的背景との関連性を分析し、結果を示す。

第5章では、現代日中通訳者のオーラルヒストリー分析を行う。中国語を母語とする通訳者3名と日本語を母語とする通訳者3名に二分し、プロ通訳者として認識している規範についての語り、その規範意識に矛盾する通訳行為に関する語りを検証する。その上で、通訳者が語りで明示した「規定性規範」と、「語り手を表す表象的な表現」(桜井, 2012) から「実際の規範」を抽出し、通訳者を目指した動機や言語習得の背景、通訳訓練の有無、通訳業務形態などに着目しつつ、それぞれの要因と規範意識の関係について分析する。

第6章はデータ分析結果から導き出された通訳者の規範意識に関する考察である。中国語母語話者の規範意識には、これまでの中国の通訳規範や「忠実」が規定性規範となって意識の上で現れていることが伺えたが、実際の規範とは乖離が認められ、コミュニケーションを円滑にするという意識が、より優位となり訳出行為に現れる可能性が示された。また、中国語の背景にある歴史的言語観は、すでに中国語を母語とする通訳者の意識に内在化しているが、中国語母語話者、日本語母語話者のどちらの通訳者も「関係者間のコミュニケーションを最大化する」という Chesterman (ibid.) の「コミュニケーション規範」、王 (ibid.) の「コミュニケーション促進規範」が、現場での実務を通して構築されている点について考察する。そして、①中国語母語話者の「忠実」の対象は人であり、日本語母語話者の「忠実」の対象は言語であることが推察される点、②通訳経験の最も長い日本人通訳者と、日本で訓練を受けた経験の浅い中国人通訳者にはそれぞれ他の母語話者とは異なる規範意識の傾向性などがみられた点を取り上げ、その要因として、日本という日中通訳市場における両母語話者の共存という特徴が推察される。また、規定性規範と実際の規範にシフト(ずれ)が生じる理由は、通訳者が毎回異なる通訳の場で、コミュニケーションの最大効率を実現しようとする「コミュニケーション促進規範」に起因する旨を考察する。最終章である第7章で、本論の結論を示した後、

本研究の限界として、語りと訳出分析の比較分析を行っていない点に言及し、当事者研究としての通訳規範研究を進める上での今後の課題にも触れる。最後に、本研究を通し日中通訳者の規範を理解することで、規範に基づき展開される通訳行為をより多面的にとらえることが可能となり、日中相互理解の一助ともなり得ることを示し、論を終える。

目次

第1章 序.....	1
1.1 本論の目的と意義、背景.....	1
1.1.1 研究の目的.....	1
1.1.2 研究の意義.....	2
1.1.3 研究の背景.....	4
1.2 規範の概念について.....	8
1.2.1 社会学における規範の概念.....	9
1.2.2 通訳翻訳学における規範論と本論での「規範」の定義.....	10
1.3 リサーチデザインと研究方法.....	11
1.3.1 Toury(1995/2012)の規範研究.....	11
1.3.2 Chesterman (1997)の規範研究.....	12
1.3.3 翻訳規範研究の通訳翻訳研究への応用.....	13
1.3.4 本論の理論的枠組－王斌华の通訳規範研究.....	14
1.3.5 研究方法.....	14
1.4 論文の構成.....	20
第2章 先行研究.....	22
2.1 通訳翻訳学における本論の先行研究.....	22
2.2 中国の通訳翻訳学における規範研究.....	23
2.2.1 翻訳規範研究.....	24
2.2.2 通訳規範研究.....	26
2.3 オーラルヒストリーによる通訳者研究.....	32
2.4 本論の位置づけ.....	35
第3章 中国における通訳史と通訳翻訳「規範（規範）」.....	36
3.1 中国の通訳史.....	36
3.1.1 先秦時代の通訳.....	37
3.1.2 漢、隋、唐時代の通訳.....	38
3.1.3 宋、元時代の通訳.....	38

3.1.4 明時代の通訳	39
3.1.5 清時代の通訳	40
3.2 中国の通訳翻訳論	40
3.2.1 中国における翻訳の始まりー仏典翻訳	40
3.2.2 明朝末期から清朝初期における科学技術翻訳	49
3.2.3 19世紀末から五四運動前後における翻訳論.....	50
3.2.4 近現代の翻訳論	55
3.2.5 現代中国の通訳論.....	58
3.3 考察	60
第4章 近現代中国における通訳者の規範論ー時代考証と言説分析	63
4.1 姜椿芳	64
4.1.1 略歴.....	64
4.1.2 姜の通訳論.....	65
4.2 李越然	68
4.2.1 略歴.....	68
4.2.2 李の通訳論.....	68
4.3 考察-近現代通訳者の規範意識.....	70
第5章 言説から見る現代日中通訳者の規範意識.....	73
5.1 調査協力者とインタビュー設問	73
5.1.1 調査協力者.....	73
5.1.2 インタビュー設問.....	75
5.2 通訳者のオーラルヒストリー	76
5.2.1 A氏のインタビュー	76
5.2.2 B氏のインタビュー	86
5.2.3 C氏のインタビュー	98
5.2.4 D氏のインタビュー	105
5.2.5 E氏のインタビュー	111
5.2.6 F氏のインタビュー	119
5.3 分析.....	130
5.3.1 通訳経験年数による規範の内在化.....	131

5.3.2 通訳者の仕事のフィールドと規範意識.....	131
5.3.3 通訳者を目指した動機と規範との関係.....	132
5.3.4 通訳訓練の有無と規範との関係.....	133
5.3.5 通訳者としての立場、従事する実務と規範意識.....	133
5.4 Chesterman 規範論からの分析結果.....	135
第6章 考察.....	140
6.1 現代通訳者の「規定性規範」と「実際の規範」.....	140
6.1.1 中国語を母語とする通訳者の規範意識.....	140
6.1.2 日本語を母語とする通訳者の規範意識.....	145
6.2 まとめ.....	146
第7章 結論.....	149
7.1 本論のまとめ.....	149
7.2 本論の限界と今後の課題.....	151
補遺.....	153
【A氏のオーラルヒストリー】.....	153
【B氏のオーラルヒストリー】.....	163
【C氏のオーラルヒストリー】.....	193
【D氏のオーラルヒストリー】.....	208
【E氏のオーラルヒストリー】.....	259
【F氏のオーラルヒストリー】.....	309
参考文献.....	359

表のリスト

表 5.1 調査協力者の「規定性規範」と「実際の規範」を表すキーワード.....	130
--	-----

図のリスト

図 2.1 通訳行為及び通訳者の訳出表現を決定する主な要因(王, 2013).....	27
図 2.2 通訳規範描写研究の枠組(王, 2013).....	28
図 6.1 中国語母語通訳者の通訳規範と形成過程.....	144

補遺

- 【A氏のオーラルヒストリー】
- 【B氏のオーラルヒストリー】
- 【C氏のオーラルヒストリー】
- 【D氏のオーラルヒストリー】
- 【E氏のオーラルヒストリー】
- 【F氏のオーラルヒストリー】

宣誓書

私 平塚ゆかり は、

下記の論文、

日中通訳者の規範意識とその形成要因

及びそこに提示された研究内容の著者であることを宣誓し、以下の項目を確認する。

- 本研究は、本学における学位取得を目的とする研究に従事する期間内に、全面的もしくは中心的に行われたものである。
- 本論文の内容のうち、本学又は他の研究機関における学位もしくは他の資格取得のためにすでに提出されたものがある場合には、その旨を明記している。
- 他の刊行物を参考にした場合には、常にその出所を明記している。
- 他の研究から引用した場合には、常にその出典を明記している。そのような引用箇所を除けば、本論文はすべて私自身の著作になるものである。
- 主たる研究支援については、すべて明記している。
- 他と共同して行った研究に本論文が依拠する場合には、他による研究の部分と自らの研究による部分を明確に区別している。
- 本研究は一部発表済みである。

平塚ゆかり(2008). 『「信、達、雅」再考:現代日中通訳者の役割分析から』立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科修士学位論文[未刊行].

永田小絵・平塚ゆかり (2009). 「翻訳者の内的世界における再構築としての翻訳―村上春樹『海辺のカフカ』の翻訳を例に―」『通訳翻訳研究』第9号, 211-233頁.

平塚ゆかり(2010a). 「現代日中通訳者の『信達雅』:インタビュー分析を通して」『異文化コミュニケーション学会論集』第8号, 45-55頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション学会.

平塚ゆかり(2010b). 「中国翻訳規範概念『形似』, 『意似』, 『神似』と日中通訳者の規範意識」『立教・異文化コミュニケーション学会第7回大会発表論文集』19-22頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション学会.

平塚ゆかり(2011). 「村上春樹『1Q84』中国語簡体字翻訳版から見る中国の文学翻訳規範」『立教・異文化コミュニケーション学会第8回大会発表論文集』17-20頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション学会.

平塚ゆかり(2012).「オーラルヒストリー・インタビューから見る日中通訳者の規範形成」
『通訳翻訳研究』第12号, 69-82頁.

鳥飼玖美子・平塚ゆかり(2013).「長崎通詞」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(16-17頁). ミネルヴァ書房.


平塚ゆかり(2013).「中国の通訳」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(32-33頁). ミネルヴァ書房.

平塚ゆかり(2013).「中国の翻訳史と仏典翻訳」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(40-41頁). ミネルヴァ書房.

平塚ゆかり(2013).「通訳者の役割」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(46-47頁). ミネルヴァ書房.

平塚ゆかり・齊藤美野(2013).「透明性, 中立性」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(50-51頁). ミネルヴァ書房.

平塚ゆかり(2013).「中国の通訳論: 嚴復の『信達雅』」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(148-149頁). ミネルヴァ書房.

署名 平塚 ゆかり 

日付 2015年1月10日

第1章 序

1.1 本論の目的と意義、背景

1.1.1 研究の目的

本論は、中国語-日本語を使用言語とする通訳者の規範意識を検証する研究である。

一般的に、ある言語メッセージを、別言語を用いてメッセージを伝達する行為である通訳行為において、起点言語は同じでも通訳者・翻訳者によって目標言語のメッセージ形式や表現、時には内容までも異なる場合がある。プロである通訳者が会議の現場など、通訳を行う上で環境の整った現場で通訳に望む場合も、訳出表現は完全にはなり得ない。ここには、通訳者の中立性、透明性などの役割観、そして通訳者の訳出に臨む際の規範意識等の要因が密接に関わっていることは想像に難くない。

王斌华(2013)は、通訳者の訳出に影響を及ぼす要因を①通訳者の通訳能力、②通訳現場の認知的処理条件、③通訳規範、の三点を挙げている(王斌华, 2013, p. 78)。また、王恩科(2007)は翻訳(通訳)に影響を与える主な要因として、①言語的差異、②文化的差異、③意識形態、④翻訳(通訳)者の言語的能力と文化的素養、文化意識、前構造(Cultural Pre-Structure)、を挙げている(pp. 6-9)。王恩科は規範という言葉は用いていないが、④で挙げた「翻訳(通訳)者の言語的能力と文化的素養、文化意識、前構造(Cultural Pre-Structure)」が規範を形成する要因であり、そして③の「意識形態」が、すなわち内在化された規範である、と推察できる。また、中国においては、かつての外交通訳者である姜椿芳¹が「翻訳²の善し悪しは政治問題に直結する」との翻訳論を展開していた時代があり、イデオロギーや政治的目的と通訳・翻訳行為とは密接な関係がある。しかしながら、中国人通訳者がどのような規範意識を有して訳出行為に臨んでいるか、という視点がこれまでの研究には欠けていた。近年、現在実務に携わる通訳者の実際の規範研究として、Wang(2012a)、王(2013)では通訳の訳出コーパスから規範を抽出し、明文化された通訳者の倫理規定とのシフト(ずれ)を分析した。研究成果の概要は英語論文として示されたが(Wang, 2012a)、詳細な内容は中国語論文(王, 2013)で示されたため、日本ではその研究結果はあまり周知されておらず、日本の通訳者との相違点は認識されていない。

通訳者の規範意識を検証するため、本論はまず、中国の通訳における歴史と中国という

¹ 姜椿芳(1912-1987)は、中国の中国語-ロシア語の外交通訳者・翻訳者。詳細は本論4章を参照。

² 中国語の翻訳(翻译)の意味には「翻訳 Translation」「通訳 Interpretation」の両方を含み、また、「通訳者」「翻訳者」の意味でも使われる。

コンテキストにより産出されてきた通訳規範論を時系列的に概観する。次に、近現代の中国外交に携わった通訳者の通訳論を例に、その言説から規範意識と、その形成要因を検証する。これらを元に中国における通訳規範とは何かを検証する。その上で本論では、現代の日中通訳者の規範意識を、オーラルヒストリー・インタビューから浮き彫りにし、先の文献研究により導きだされた通訳規範と、現代の通訳者の持つ規範意識を、Chesterman (1997) と王斌华 (2013) を援用し比較分析を行なう。そして、これまでの通訳論と現代の日中通訳者の実践に基づく規範意識からその形成要因を考察し、通訳をとりまくコンテキストと規範意識の関係を明らかにすることが、本論の目的である。

1.1.2 研究の意義

中国においては2006年9月に国家品質監督検査検疫総局が国家標準としての「翻訳(通訳を含む)サービス規範³」を制定、同年12月に施行された。これは「規範」と命名されているが、内容は日本で言うところの「倫理規定」と同義である。この「規範」の下で、通訳者は以下の条件に合致せねばならないと規定されている。

1. 国が定める部署の発行した通訳資格証を持つ者もしくは相応の通訳能力を備えている者
2. 通訳訓練受講経験者もしくは現在の受講者
3. 職業道徳を備えている者

国家標準名称に「規範」という語彙が使われてはいるものの、通訳者側の意見としてクライアント側に事前に十分な資料提供を行うことが記されている以外は、単にクライアント側からの、通訳サービスを提供するエージェントと通訳者に対する「期待規範⁴」を文章化した内容になっていると言っても過言ではなく、これまでの「規範」に関する研究の知見は取り入れられていない。中国では2007年から専門修士として翻訳通訳専門の修士学位である“全国翻译硕士专业学位”(翻訳通訳修士専門学位、Master of Translation and Interpreting, 略称: MTI) が新設され、理論と実践を組み合わせた訓練による人材育成が行なわれている。MTI の教材は外语教学与研究出版社より“全国翻译硕士专业学位(MTI)系

³ 名称に「規範」という用語を用いているが、ここでは、「規則」の意味で「規範」ということばが用いられている。「規範」という名称の語義に関しては後述する。

⁴ 後述する Chesterman の期待規範を指す。

列教材”（MTI シリーズテキスト）として、『交替口译（逐次通訳）』、『外交口译（外交通訳）』、『翻译概论（翻訳概論）』など数多く出版され、全国で利用されている。通訳理論の紹介部分は欧米偏重の傾向が見られるが、中国の通訳のあるべき姿として「信达雅」「准顺快」は取り上げられているものの、実践に即した規範に関する研究の知見は教材には反映されていない。

一方、日本の現状を俯瞰すれば、これまでの日本における通訳翻訳研究における研究対象言語としての外国語は、英語を主とする欧米言語が中心であった。中国語をはじめとするアジアの言語を対象言語とする研究は、近年は『通訳翻訳研究』などで、中国語母語話者による論考が多く掲載されるようになってきたものの、その多くは翻訳（作品）を取巻く社会、もしくは訳語の選択などを主たる研究対象としている。翻訳規範研究としてはToury(1995)の記述的翻訳研究の枠組を用いて、日本の小説「春琴抄」の異なる二つの中国語翻訳の方略と翻訳を左右した規範を研究した尹(2009)があるが、日中間の通訳者を対象とした研究は未だ少なく、日本語文献としての通訳規範研究は本論以外見当たらない。

一方、近年の中国では、通訳者を「通訳行為の主体者」と看做し、その主体性が表現された訳出表現や通訳行為に焦点を当てた研究も見られるようになってきている。中国翻訳通訳学の博士論文論叢第6冊目として発表された任文（2010）は、通訳者の役割観を通訳者の主体性と権力性、非中立性に着目し、アンケート調査と実例を元に分析した研究であるが、結論として、主体的役割を果たしている通訳者の姿が示されている。中国における著名な通訳研究者である劉和平は、任（2010）の「序」（pp. 13-17）において、中国の通訳研究の進展に伴い、近年の研究テーマは実証研究と描写的研究の融合などの研究が見られるという特徴を示し、通訳研究はさらに学際化が進んでいる旨を紹介している（劉, 2010）。

今日の中国において英語—中国語を対象とした翻訳規範に関する研究は、多数存在する。主なものだけでも廖七一(2010)、王晓元（2010）、王小娣(2011)、章艳(2011)などが挙げられるが、多くは近代中国における翻訳規範に関する論文である。一方、通訳規範に関する研究は前述の王斌华(2013)が挙げられるが、日本語と中国語間の通訳規範研究は、中国及び日本においては、今のところ本論以外には見当たらない。通訳者という「人」のオーラルヒストリーを研究手法に取り入れているのは、後述する鳥飼(2007；2013)の日英通訳者のみである。ゆえに本研究は日中間の通訳者を研究対象とした、通訳者による当事者研究として数少ない通訳規範研究となる。

若林(2011)は、日本の通訳翻訳研究において、これまで西洋に偏重していた日本との比

較基準点として、アジアの近隣諸国に目を向けることを提唱し、日本と西洋との二者間の相互関係だけではなく現代中国を含んだ三者間で検討することにより、翻訳研究の学問的姿勢のバランスと適合性を図ることが可能になると指摘する(p. 275)。本論はこれまで日本では研究の比較基準点とされてこなかった、中国の翻訳通訳研究の視点を日本の翻訳通訳研究に取り入れ、従来の欧米偏重型の通訳翻訳研究の射程をアジア、日本へ向かわせ、より複合的な視野からの研究を推進するきっかけになると考える。通訳者の規範意識を理解していくことで、規範の現れとなる通訳行為をより多面的にとらえることができ、今後の中国語-日本語間の通訳教育分野にも応用が可能と考える。

1.1.3 研究の背景

中国と日本は一衣帯水の隣国であり、古くから交流を重ねてきた。飛鳥時代など古代日本においては当時の唐、隋に遣唐使、遣隋使を派遣し、日本は多くの学問、文明を中国から学び吸収してきた。異国間、異言語間に交流のあるところには、通訳を担う者の存在があったことは疑いない事実である。

中国における通訳に特化した歴史研究の文献としては、黎难秋『中国口译史』(2002)が挙げられる。黎によると、中国においては夏、商王朝から周辺各国と外交活動が行なわれており、『周礼』⁵には「象胥」という下級役人の官名が記載されており、その職責として「異国の使者のメッセージを伝える⁶」「通訳を行ない、四方からの使者の接待を行なう職務を担った⁷」(黎, pp.1-2)と記されている。これは、古代中国ではこの時代にすでに外交通訳を行なう官員の存在があったことを示唆している。

中国における翻訳の歴史はどうであろうか。中国では、翻訳は仏典翻訳を起源にすると言われてきたが、先述の黎(ibid.)や馬(2006)など、仏典翻訳に論及した研究者が指摘するように、インドから伝わった釈迦の仏教経典の翻訳には、口述翻訳が用いられていた。現代の筆記翻訳とは性質が異なり、実際には現在のようなテキストからテキストへの翻訳ではなく、訳経僧が口頭で訳出したものを筆記していたため、その行為の性質は翻訳というよりはむしろ通訳に近かったと考えられる⁸。黎(ibid.:177-278)によれば、仏典翻訳以外にも、科学技術、文学などの諸領域においては、口頭による翻訳が漢の時代から近代まで行

⁵ 中国の十三経の一つであり、『周官』とも呼ばれる。周の時代の官制、すなわち国家官庁の分業制や官吏の職責などを示した文献。

⁶ 中国語文献の翻訳は筆者による。

⁷ 中国語文献の翻訳は筆者による。

⁸ 永田(2007, pp.70-71)では、当時の翻訳は、現代の「サイトトランスレーション」に近かったと考えられると述べている。

なわれていたという。これらの諸説から、中国の歴史を概観すると、通訳の歴史は翻訳のそれよりも遙かに悠久の歴史を有していることがわかる。しかしながら、先述の黎の論考以外には、過去の外交交流史など通訳行為を中心に扱った文献は見当たらない。通訳行為は翻訳と異なり、「今ここ」で音声により行なわれるため、記録として残りにくい、という通訳の宿命の証左であろう。

通訳は翻訳と異なり「記録には残りにくい」という宿命を背負ってはいるものの、外交通訳、軍事通訳、経典の口頭翻訳や科学技術、文学など諸領域での口頭（音声）翻訳などは、それぞれの時代にあって、国の発展に大きく寄与してきたことは、これまでの研究（例えば王向遠(2001)など）で明らかにされている。換言すると、通訳行為は、文字として後世に伝承されている翻訳行為と同様に、国の発展に大きく寄与してきた行為であるといえる。近現代の中国を例にとれば、1978年の改革開放政策の開始と共に、中国では周恩来をはじめとする為政者が、通訳行為そして通訳者の存在を重視したうえで、積極的外交を行ってきたことが、通訳者から教育者や外交従事者に転身した多くの人物によって語られている（李越然, 2001；劉徳有, 2006；孫平化, 2009 など）。

中国では、中国外文局直轄の組織として、1982年には「中国翻译工作者协会」（後に「中国翻译协会」と改名）と呼ばれる、企業などの団体と通訳翻訳に携わる実務者・研究者対象の機関が設立された。1980年には通訳翻訳領域の学術誌が発刊され、国を挙げて通訳者・翻訳者の権益を守り、国家建設のため、通訳翻訳に関する研究の深化と質の向上を図る施策がとられている。中国為政者の通訳翻訳に対する関心の高さは、通訳者であった李越然⁹(2001)などの記述や、近年では同じく通訳者であり、外交官であった吳建民¹⁰のインタビュー内容¹¹から明らかにされているが、これら通訳者の言説は、通訳が現在の中国の急速な進展と外交戦略とに密接な関係があることを示唆している。ゆえに、中国における通訳行為に関する研究は、国の進展の歴史を知る研究であるといえる。また、本論は規範という概念を用いた研究であることから、中国という社会において過去、どのような規範意識をもとに通訳・翻訳をなすべきとされてきたか、もしくは実際になされてきたかを検証することで、翻訳・通訳規範に裏打ちされた時代の潮流や社会の変遷を理解することが可能となる。通訳規範研究を通して、中国などこれまで日本ではその通訳研究があまり着

⁹ 中国の外交通訳者。詳細は第4章を参照のこと。

¹⁰ 吳建民（1939年3月30日～）中国駐オランダ特命全權大使、中国駐フランス特命全權大使、中国外交学院院长などを歴任。毛沢東、周恩来など国家要人の通訳を勤めた。

¹¹ 中国网（チャイナネット）吳建民氏インタビュー「吳建民：翻译链接全世界的梦」2008年8月5日
http://www.china.com.cn/book/zhuanti/2008fy/2008-08/05/content_16138575.htm

目されてこなかった国の、外交の方向性を検証していくことも可能となるであろう。

話を日本に戻すと、近年日本の通訳研究においては、鳥飼(2007)、新崎(2010)のように、通訳者自身に焦点を当てた研究が見られるようになってきている。それまで通訳者の可視性/不可視性についての研究は多く見られたが、多くは解釈の違い、そして役割研究の範疇にとどまっていた感があった。通訳行為には必ず通訳者の解釈という行為が伴う。そして産出される訳文にはどのような形式の通訳であれ、通訳者自身の規範意識と主体性が多かれ少なかれ関わっている。通訳者の役割研究が進展する中で、通訳という行為の主体者たる通訳者の存在に焦点を当てることは至極当然のことといえる。

英語とは異なる言語である中国語を介した通訳行為の規範意識とはいかなるものか、本論では、中国の通訳翻訳論に通訳規範を形成する要因の一端があると仮定し、本論ではまず、中国というコンテキストにおける通訳と翻訳に関する論考を、通訳翻訳のあるべき姿、いわゆる中国語の「規範」に関する論を中心に、歴史的流れに沿って概観する。

先述した古代中国の文献には、当時、通訳行為を行なった旨の記述は存在するが、音声を主に用いる通訳行為に特化した「通訳はかくあるべき」という規範論を示した記述は現存しない。「通訳・翻訳はかくあるべき」という論が文献に登場するのは、文字を主に用いる翻訳行為としての仏典翻訳が行われるようになった後漢時代に到ってからである。

釈道安の「五失本、三不易」、玄奘の「五種不翻」、彦琮の「八備十条」など、仏典翻訳が行われた後漢時代から唐の時代にかけては、「翻訳・通訳はかくあるべき」という翻訳通訳論が多く生まれた。

その後時を経て、1896年の日清戦争敗戦以降、中国では嚴復、康有為、梁啓超など多くの啓蒙思想家や政治家などが、救国策として西洋思想の吸収に取り組み、多岐に渡る分野の文献翻訳を開始した。1898年、嚴復は、トマス・ヘンリー・ハクスリー (T. H. Huxley) の著書である“*Evolution and Ethics*” (邦題『進化と倫理』) を中国語に翻訳した書である『天演論』の序文で、「信、達、雅」という翻訳基準を提唱した。そして1919年に起きた五四運動¹²を契機として、魯迅・周作人兄弟、矛盾、郭沫若らが外国文学から種々の新しい文化を学び、文学運動を通しての新社会構築を目指す動きが活発化した。「西洋(日本も含む)の文献の翻訳は如何に行うべきか」という議論が始まった時代である。「信、達、雅」論を

¹² 五四運動とは、1919年5月4日に北京で起こった反帝国主義、反日運動を指す。発端は第一次世界大戦後のパリ講和条約において、山東半島の権益をドイツから日本に移行させようとした列強に不満を持った学生が主体となって起こした学生運動であったが、後に一般市民も参加し、日本品排斥運動や工場ストライキなどに発展した。その結果、北京政府は講和条約の調印を拒否し、親日政治家の罷免を発表した。五四運動は中国人の民族意識向上に大きな役割を果たした。

発端とした翻訳の基準・規範論争が、文学者の間で書簡交換や雑誌への投稿などの形で頻繁に行われ、それぞれが独自の翻訳論を提唱するとともに、自身の翻訳理論に基づき実際の翻訳活動に従事した。

罗(1984/2009)は、嚴復研究で知られる賀麟の1925年当時の論考を紹介している。賀麟は『嚴復的翻訳（嚴復の翻訳）』において、「嚴復の三基準に到達できる人間は少ないが、その影響は大きい。[中略] 嚴復がまずこの三基準を提出したことにより、後の翻訳者はこの翻訳三基準の支配を免れることはできないだろう」と述べている (p. 217)。まさに賀麟の論述通り、嚴復の「信、達、雅」三基準は今日に到るまで多くの議論を起し、魯迅の「硬訳」論や林語堂の「忠実、通順、美」論、そして陳西滢の「三似」論、錢鐘書の「化境」論、そして許淵冲の三美論など、多くの翻訳論を生むきっかけとなった¹³。

中国では為政者や民衆が何か新しい運動を起こすときには「口号（スローガン）」が常に用いられる。スローガン的なものはその理想に到達していないために、その理想のことばを多用して近づこうとする目的を帯びたものであるが、過去に中国で誕生した翻訳論は実現目標としての理想論と考えることもできる。孫(2003)や王宏志(2007)、王少娣(2011)のように、「信、達、雅」や「忠実、通順、美」は理想論的なものであり、翻訳「規範」ではない、という論がある。これは嚴復や林語堂の実践としての翻訳が、自身の論じた翻訳論と矛盾することから生じている¹⁴。無論、これらは後述する Toury(1995/2012)や Chesterman(1997)などの翻訳規範研究のように、実証研究における結果としての「規範」の意味とは異なり、同義に考えることは適切ではないが、ある個人が提唱した、あるべき姿としての通訳翻訳規範論と実際の翻訳通訳行為には矛盾があることを示す一例である。

通訳者は通常、これまでの通訳訓練や経験などから、様々なケースに対応するプロとして「こう訳出するべき」という通訳規範を程度の差こそあれ、意識しており、通常はこの規範に依拠した通訳を行なう。しかし、時と場合により、通訳者の潜在意識に内在化されている規範意識が顕在的に意識している通訳規範を凌駕し、訳出を行なうことがある。王(2013)では、先述の規範意識を「規定性規範」、後述の規範意識を「実際の規範」と名付けている。本論では以上の仮説を立て、これらの規範意識をこれまでの中国における翻訳通訳規範、過去において通訳者が発した言説、そして現役通訳者のオーラルヒストリーのそれぞれから導き出し、分析する。通訳者の文化的・言語的背景や信条、思想などの価値

¹³ 各論の詳細は第3章に記載。

¹⁴ 王少娣(2011)は林語堂の翻訳理論とその翻訳作品を分析し、矛盾する点について言及している。詳しくは第2章で触れる。

観が通訳者の規範意識の形成に与える影響の有無と形成過程についても考察する。

日中通訳は古来より、中国から日本に移住した、いわゆる渡来人と呼ばれる帰化人が担ってきた歴史がある。飛鳥時代、遣隋使を派遣していた時代には、こうした帰化人を通訳者として同行させた歴史があり、日本書紀にも登場する通詞である鞍作福利や日本人以外にも、「漢人」、「新漢人」と呼ばれた渡来人の末裔である華僑数名が隋に赴き、仏教を学びつつ、通事（通訳者）の役目も担った（黎, *ibid.*: pp. 23-24）。そして、長期間中国に滞在した後、日本に帰国し国づくりの中心的役割を果たし貢献したという（黎, *ibid.*: pp. 23-24）。

また、日本における中国語の通訳として一般に知られているのは長崎通詞であるが、長崎通詞はオランダ語と日本語の通訳を担当する阿蘭陀通詞と、中国語と日本語の通訳を担当する唐通事に分かれ、江戸時代の外交、貿易の第一人者としてその責任を担ってきた。阿蘭陀通詞と唐通事¹⁵の最大の違いは、阿蘭陀通詞の出自は日本で生まれ育った日本人であり、阿蘭陀語を学び通詞としてその任務を全うしていたのに対し、唐通事は、その多数が中国から渡来し日本に帰化した中国人を祖先に持つ者が担っていた（林, 2000）。両者には出自に大きな違いがある。この点は現在の通訳者事情と相通ずるものがある。

現在の日本で通訳を生業としている通訳者のうち、英語を含むヨーロッパ言語に関してはその言語を母語とする通訳者の占める割合は多くはなく、日本人の通訳者が中心となっている。一方でアジア言語、特に中国語通訳者においては日本人の占める割合はそれほど高くなく、中国語に関しては通訳学校などで訓練を受けている受講生も、中国語母語話者の率は、両国の関係などにも左右されることはあるものの、他の言語に比べると高く、母語話者が半分以上を占める事も少なくない¹⁶。この背景には歴史的要因も影響している可能性があるだろうが、同時に、母語話者の比率が高いことが、日本における日中通訳規範の形成と通訳者の規範意識に何らかの影響を与えてはいないだろうか。このような視点からも本論では分析を試みる。

1.2 規範の概念について

「規範」とは、「行動や判断の基準となる模範。手本」であり、ドイツ語の Norm（規範）は「哲学で判断・評価、行為などの基準となるべき原則」である（大辞泉第2版）。Norm

¹⁵ 杉本（1990, pp.9-10）によれば、「通事」と「通詞」という二つの名称が生まれた由来には、中国語の通訳・翻訳を担当した「唐通事」との差別化を図るためオランダ語の通訳担当者を「阿蘭陀通詞」とした、という説がある。

¹⁶ 例えば、筆者が講師をしているアイエスエスインスティテュート中国語通訳コースにおける、2012-2014年度の日本語・中国語母語話者の比率は下位2クラスが約6:4、上位2クラスは約5:5だが、受験生の割合は4:6と中国語母語話者の方が多い。

(規範) という概念は今日、法学、哲学、社会学などあらゆる学問領域で用いられている概念である。ここでは当該概念を定義するために、社会学的規範の定義について概観した上で、通訳翻訳学における規範と本論での定義について述べていく。

1.2.1 社会学における規範の概念

社会学者である安田三郎は「規範」を2種類に大別する。まず、「社会規範」とは「社会秩序を維持するために、行為のルールとして拘束力を持たせられた行為のルール」(安田, 1980, p. 59) を指す。また、社会全体の規範ではなく、社会の中のある地位・役割を占める成員に対してだけ適用される規範を「役割規範」と呼んでいる。これはその成員の集合体の存続に貢献するものではなく、全体社会の存続のために役割上守らねばならない規範のことである(安田, 1980, p. 59)。

安田の概念を用いれば、通訳者の規範は、この役割規範に相当すると考えられる。通訳規範は、通訳者という成員の集合体とその業務を遂行するための規範であるが、同時に、通訳業界というカテゴリーの社会にも「社会における規範」が存在し、役割規範という概念はそのどちらにも存在する。換言すれば、通訳者という狭義の社会が存続するために規範があるのではなく、社会全体のために、通訳者がその役割を果たす上で守らねばならぬ規範が、通訳者の役割規範である、と捉えることができる。

また、同じく社会学者の友枝敏雄によれば、規範には「約束事としての側面」と「のぞましきとしての側面」があり、それ故に規範は歴史貫通的なものとも、時代によって変わるものとも、どちらか一方に収束することはないとする。規範研究の難しさもこの2つの側面があるためといえるであろう。友枝は以下のように指摘する。

規範が「約束事としての側面」のみであれば、規範の時間的・空間的な変化を論ずれば、研究として十分に成立する。ところが、「のぞましきとしての側面」があるから、のぞましさを判断する基準は何か、判断する基準の妥当性は、何によって保証されるのかという難問が生ずる。(友枝, 2008, p. 112)

また、友枝は、規範と規則を同義のものとしてとらえているものの、規範の中に何らかののぞましき状態を施行している側面を認めるならば、それはすなわち規範であり、人間社会の仕組みを中立的にながめることを強調するものはルール(規則)である、との再

定義を行っている。さらに、社会学の世界では、ある社会が有する理念や価値を重要な研究対象としてきたために、これまで主に「規範」ということばが用いられてきた、と指摘する(友枝, *ibid.*: p. 114)。ものごとを「のぞましい」と考える基準自体が、人間の道徳観や価値観が影響していることが伺える。ゆえに、「のぞましさととしての側面」を決定づけるのは人間の内面に存在すると言え、これがすなわち内在化された「規範意識」であると考えられる。

以上、社会学での規範の概念を概観した。次項では通訳翻訳論での規範論を概観し、本論での「規範」の定義を行なう。

1.2.2 通訳翻訳学における規範論と本論での「規範」の定義

「規範(norm)」という概念を翻訳研究領域に導入した最初の研究はチェコの研究者 Jiri Levy(1969[1963])、そして James S Holmes(1988)であった(Toury, 2012, p. 61)。その後、イスラエルの研究者である Gideon Toury が、翻訳を目標文化の経験的事実とみなし、目標言語指向アプローチを導入し、記述的翻訳研究 (DTS) という研究手法により、翻訳領域に特化した規範研究を行なった(Toury, 1995/2012)。

Toury(1995)によれば、通訳翻訳学における規範 (norm) の定義とは、ある社会 (コミュニティ) で共有されている一般的な価値もしくは理念—何が正しく、何が間違っているか、何が充分で何が不十分であるか—を特定の状況にふさわしい、もしくは適用可能な行動の指標に翻訳したものである(p. 55)。そして、通訳・翻訳行為をおこなう際に、翻訳・通訳者が受ける文化的、言語的な慣習や制約が規範 (norm) となり、実際の通訳翻訳行動に現れるとした。Toury の規範論では、規範とは規則(rules)と特異性(idiosyncrasies)の間に存在すると位置づけ(*ibid.*:p.54)、翻訳は二種以上の言語、文化、伝統的行動に関連し、起点言語と目標言語双方の規範システムの影響を受けるため、翻訳の背後に存在する価値はこの二種の要素を包含する(*ibid.*:p. 56)と述べており、文化や言語が異なる翻訳、通訳には異なる規範が存在することを示唆している。

本論で述べる「規範」の定義はこの Toury の規範の概念を採用し、通訳行為における「規範」は通訳に関する「規則」と「特異性」の間に存在するものとする。「規則」とは本章3節4項および第2章2節2項で後述する王斌华(2013)の「規定性規範」の概念が含まれている。また、「特異性」には王恩科(2007)の「翻訳(通訳)者の言語的能力と文化的素養、文化意識、前構造 (Cultural Pre-Structure)」から形成された「意識形態」とも通じる概念が

存在する。

Toury の手法は今日まで翻訳規範研究の手法として多く援用されている。ベイカーは、「Toury による規範研究の基本概念は、翻訳を評価することではなく、特定の社会文化的文脈における翻訳を記述するための評価的尺度を考察することであった」(Baker, 1998)として、Toury が考える翻訳規範とは、「記述分析の範疇であって、規範という言葉から連想されるような、分析者や研究者が望ましいと考える規定的な選択肢の集合ではない」とする(ベイカー・サルダーニャ, 2009)¹⁷。ゆえに、norm の訳語としての「規範」と、中国語における「規範」とは、前節で述べた通り、意味のずれが存在することに気をつけなければならない。中国語での「規範」は名詞、動詞の用法があり、「世間で正しいと認識されているか、明文化されている規定に則る基準」を指している。本論第3章で取り上げる古代中国の文献に記述されている「通訳はかくあるべき」という「规范(規範)」は、Toury の翻訳規範研究ではパラテキスト(翻訳者の序文、あとがき)、もしくはメタテキスト(翻訳者や編集者などによる翻訳に対するコメント、翻訳者による団体の倫理規定)であり、翻訳文それ自体と並んで、規範を抽出する源とされる。本章第2項で述べた中国の国家基準としての「規範」は明文化された規定であり、通訳翻訳の各職業団体が規定する倫理規定も中国語の意味での「規範」ととらえることができる。そのため、本論では原則的に「規範」という用語を、Toury の概念である「規範(norm)」の意味で用いるが、中国語の「規範」の意味で用いる「規範」はその都度注記し、混同を避けることにする。

1.3 リサーチデザインと研究方法

前項で本論における規範の定義を行ったが、本項ではリサーチデザインとしての規範を確認し、本論の分析の枠組となる王(2012b ; 2013)の通訳規範研究について述べる。

1.3.1 Toury(1995/2012)の規範研究

Toury は翻訳規範の抽出には二つの方法があると述べている。ひとつは翻訳規範に則り産出されている翻訳テキストであり、もうひとつはテキスト以外の資料、具体的には翻訳テキストの批評論や翻訳参与者(翻訳者本人、出版者、評論家)が、翻訳テキストや翻訳規範に対して明言した言説である。しかし、後者は実際の翻訳実践とかけ離れていたり、矛盾していたりする可能性もあるため、慎重に扱うべきである、と指摘している(ibid.:pp.

¹⁷ 訳文はベイカー, M・サルダーニャ, G (2013)『翻訳研究のキーワード』(藤崎文字子監修・編訳)による(p. 143)。

65-66)。

本論は、通訳者のオーラルヒストリーという口述資料から規範意識の抽出を行なうため、起点言語から目標言語へ通訳されたテキストそのものは用いていない。Toury の示した方法のうち、後者の方法を採用することを意味している。しかし、本論で分析する対象は「規範」について通訳者が明言した言説だけではなく、その規範と相反すると考えられる行為に現れる「実際の規範」¹⁸ (王, 2013) も含める。インタビュー全体の文脈から、通訳者の「規定性規範」¹⁹ (王, *ibid.*) と、通訳者に既に内在化している規範、すなわち「実際の規範」を探ることを目的とする。ゆえに、本論では通訳者の「規範」と「実践」には、そもそも一定の矛盾が存在することを前提としている。

Toury は翻訳規範を、「初期規範」(initial norm)、「予備的規範」(preliminary norm)、「運用規範」(operational norm)に分け、それぞれを以下のように定義した。

「初期規範」とは通訳者の一般的選択に関わる規範であり、起点テキストにある規範への従属の場合は適切な翻訳となり、目標テキストにある規範への従属が行われた場合は、受容可能な翻訳となる (Toury, *ibid.*: p. 57)。

「予備的規範」とは、翻訳政策と翻訳の直接性と関連する規範であり、目標文化の社会的な受容度など政治的な方針などに関連する (Toury, *ibid.*: p. 58)。

「運用規範」は目標言語の提示の仕方そして言語的要素を記述するものであるが、Toury はこの運用規範を基質的規範、テキスト・言語的規範に分けて説明し、基質的規範は目標言語の構造配置などに関する規範、そしてテキスト・言語的規範とは、目標言語の言語選択に関する規範であると定義している (Toury, *ibid.*: pp. 58-60)。

1.3.2 Chesterman (1997)の規範研究

Chesterman (1997)は、Toury (1995)の規範研究を踏襲し、翻訳規範を「期待規範」(expectancy norms)と「職業規範」(professional norms)に分類し、且つ「職業規範」(professional norms)を「責任規範」、「コミュニケーション規範」、「関係規範」という三種の概念に分類し、分析した。

「職業規範」(professional norms)とは訳出過程の規範 (process norms)とも捉えられ、「期待規範」の制約を受けるものである。「責任規範」は道徳規範もしくは倫理規範であり、エージェントや読者、そして仕事に対する責任を通訳者がもつことを示すものである。「コミュ

¹⁸ 本章4節で詳述する。

¹⁹ 本章4節で詳述する。

「コミュニケーション規範」は一種の社会規範であり、コミュニケーション参加者としてコミュニケーションが取れる、成功するように最大限尽力する、という規範である。「関係規範」は起点言語と目標言語の間の言語的規範である (Chesterman, *ibid.*: pp. 64-70)。また、Chesterman は規範を制約するものとして 4 つの価値観 (明晰性、忠実性、信頼性、解釈) を挙げて、それぞれが個別の規範に制約的作用を及ぼし、翻訳行為にあらわれる翻訳方略は規範の制約を受ける、と主張した (Chesterman, *ibid.*: pp. 175-187)。

Chesterman(*ibid.*)では規範を「外的なもの」として取り扱っているものの、翻訳者は規範よりも価値観の方を優先する場合があります、また翻訳規範は価値観を具体化したものであると述べ、翻訳規範の内在化に触れている (pp. 172-173)。本論では上述した職業上のルールから形成された規範を後述する王 (2013) の「規定性規範」と同義であると定義し、通訳者にすでに内在化していると考えられる規範意識を「実際の規範」として捉えた上で論を進める。

1.3.3 翻訳規範研究の通訳翻訳研究への応用

通訳規範に論及した研究としては、Andersen (1978)、Shlesinger (1989)、Gile (1999) などが挙げられる。

Andersen (1978) は、AIIC 登録通訳者 9 名、その他の通訳者 8 名の計 17 名にインタビュー調査を行い、その結果から通訳者の「中立」という規範と通訳が行われた状況・場面との関係について論及した。研究における調査協力者は国籍、使用言語、立場、経験も全て異なる、学生通訳者 2 名を含む英語-外国語通訳者である。結論として Andersen (*ibid.*) は、通訳者がいずれか一方に肩入れすることは職業規範に反するが、その一方でユーザーと同様の身分を保持することは難しいとの回答があったことを示し、通訳者のあるべき姿と実践での乖離について論及している(pp. 222-225)。

Shlesinger (1989)は Toury の翻訳規範研究をもとに、通訳規範について述べた論考であり、通訳者による規範の内在化の問題や、通訳規範と通訳の場やテキスト等の要素との関連性にも言及し、通訳規範抽出の課題などを指摘した。

Gile (1999) は翻訳規範研究であるが、その中で通訳規範にも言及している。Gile は通訳規範の抽出方法として、通訳者の同業者間におけるフィードバックから形成される「集団的規範」と通訳訓練を受ける課程で実務者である講師からの実技指導を通して「初期的規範」が形成されるとし、通訳規範を研究する際、通訳規範の抽出には大量の通訳言語コ

コーパスを用いる以外に有効的な研究方法として、通訳者へのインタビューによる規範分析や通訳教本などの文献内容からの規範抽出、通訳ユーザーによるフィードバック評価による規範分析が可能だと言及している。両者の研究では通訳行為における認知的制限が通訳規範に大きく影響を与えている要因であると述べている。

1.3.4 本論の理論的枠組－王斌华の通訳規範研究

Wang(2012a)ならびに王(2013)は、Chestermanの規範論を援用し、これまでの職業規範とされてきたAIIC (Association Internationale des Interpretes de Conference)²⁰をはじめとする通訳者の職業倫理規定を分析し抽出した規範を「規定性規範」と名付け、外交通訳者の中英対訳コーパスのデータからこの「規定性規範」と実際の通訳を対比したうえで、シフト(ずれ)を抽出した。その上で、なぜシフトが生じたかに着目し、シフトの要因から「実際の規範」を抽出し、両者を比較分析した研究²¹である。本論は中国語文献である王(2013)に依拠し論を進めるが、結論として王(2013)は、社会的職業能力団体において形成されるコンセンサス(共通認識)が「規範」であり、通訳者と起点言語発話者、目標言語聴衆と会議主催者(クライアント)など通訳ユーザーの間で長期的な相互行為を通じて形成される「協議的規範」でもあるとする。具体的には、通訳規範は①起点言語－目標言語間の関係規範(意味の一致、情報内容の完成度、忠実性)、②目標言語のコミュニケーション規範(言語形式の適切さ、表現の妥当性、話の論点が通っているか、コミュニケーション効果、発表方式[発音がはっきりしているか、口調は流暢か])、③職業倫理規範(通訳者の役割意識、職業的忠誠心、職業道徳)の3方向から描写が可能か、との論を展開している。なお、王(2013)については第2章の先行研究で詳述する。

本論では、Chesterman(1997)を援用して中国の外交通訳者における通訳規範を研究した王(2013)を分析の枠組として用い、日中通訳者の規範を分析・考察する。

1.3.5 研究方法

本論は、オーラルヒストリー、口述史と呼ばれる研究方法を用いる。

質的研究で行われるインタビュー方法は、その形式から「構造化インタビュー」「非構

²⁰ 国際会議通訳者協会(英文名称はInternational Association of Conference Interpreters)。1953年にスイス・ジュネーブで設立された会議通訳者団体。AIICの公式ウェブサイトによると、2014年9月現在、100ヶ国以上の2900名を越える会議通訳者の会員を有する。

(<http://aiic.net/node/2379/who-we-are/lang/1>) 本論では“AIIC”の略称を使用する。

²¹ 詳細は第2章参照のこと。

造化インタビュー」、「半構造化インタビュー」、そして「ナラティブ・インタビュー」、「オーラルヒストリー・インタビュー」などさまざまな手法がある。構造化インタビューとは、インタビュアーがあらかじめ質問票を作成しその質問を形どおりにインタビューするタイプのものであり、この場合、インタビュー協力者は「回答者」(トンプソン, 2002, p. 391)としてその質問に答えることになる。一方、非構造化インタビューは、質問用紙などあらかじめ提示されず、インタビュアーとインタビュー協力者の自由な会話によって行われるインタビュー手法である。どのような調査を行うか、そして調査の目的によってインタビューの形式を選択することになるが、本研究では、これまであまり一般的に調べる機会がなかった通訳者の生の声を歴史に残すことを試みるため、トンプソン (p. 24) の「歴史の社会的な目的は、現在に直接的ないし間接的に関連している格好を理解することである」という視座から、オーラルヒストリーというインタビュー方法を選択した。

ヤウ (2011, pp.22-23) によれば、オーラルヒストリーは「テープに記録された回想」「タイプ打ちされた口述記録」「綿密なインタビューを伴う調査法」のすべてを指す、と定義されし、例えばライフストーリー、ライフナラティブなどの用語はオーラルヒストリーと同義に用いられている、という。本論でもヤウの定義に依拠し、オーラルヒストリーという包括的な用語を用いることにする。

トンプソン (2002) が指摘するように、オーラルヒストリーは、現在に至るまで地域を問わず、また様々な分野の研究に使われてきた。

本論文の題目にもある「規範意識」という用語は、もとはドイツの哲学科であるウィンデルバントが哲学用語として用いたことばである。規範意識とは、一般的には「相対的な現実の価値判断を越えて、あらゆる評価に対し普遍的、絶対的な勝ちを規範として妥当させ、かつ担う意識」と捉えられている。オーラルヒストリー研究の先駆者であるトンプソンは、記憶の過程について「個人の理解だけでなく、個人の関心の影響も受けている」(2002, p. 237) と述べている。個人の半生という記憶の過程を辿るオーラルヒストリー研究は、人生の一部として「通訳行為」を振り返り、その行為の規範を浮き彫りにすることから、本研究に妥当であると考えた。

またトンプソン(ibid; p. 23)は、オーラルヒストリー研究について「一般的に、あらゆる種類の人々の人生経験が生資料として歴史研究に使われるようになれば、新しい方向性が歴史に与えられる」と述べ、また、「分野によっては、オーラル・ヒストリーはたんに研究の焦点を移すだけではなく、重要な疑問を含む新たな領域を切り開くようになる」

(ibid., p. 25) とも述べている。本研究は、新しい学問領域ともいえる通訳翻訳学におけるアプローチからの通訳規範研究である。これまでの通訳翻訳研究で主に行われていたテキストデータ分析ではなく、通訳者自身の研究として、これまで表に出ることのなかった中国語と日本語という言語間の現役通訳者のオーラルヒストリーという語りをデータとして分析・考察することで、日中間の通訳者研究の進展を図っていきたいと考え、当該研究方法を選択した。

オーラルヒストリー研究のアプローチとして、歴史的アプローチと社会的なマイノリティ研究アプローチが存在する。江頭 (2009, p. 70) は、オーラルヒストリーは政治史、労働史、地域史などのように、歴史自体にフィールドワークの伝統が残っているところ、また学際的な交流がなされたところで発展してきた歴史的な研究手法であるとしている。

酒井・トンプソン (2002) が補論で「後述の伝承、ライフヒストリー、地域の聞き取りなど、本書で『オーラルヒストリー』の範疇に入れられている学問分野はすでに日本に定着している」(ibid., p. 553) と述べているとおり、近年の日本において、オーラルヒストリー研究は進展を遂げている。過去よりこれまで、日本においても生活史、口述史という手法は、歴史学、社会学様々な研究分野で用いられてきた。しかしながら、国内において学術的にその手法が広く認知されたのは 21 世紀に入ってからのことであり、オーラルヒストリーの学術研究団体、JOHA (日本オーラル・ヒストリー学会) の設立は 2003 年である²²。JOHA は 2006 年に当該学会の専門学術誌として『オーラル・ヒストリー研究』を創刊、以後毎年発刊され、これまで戦争の記憶、ジェンダー史、地域研究、マイノリティー研究など、さまざまな領域における口述史研究成果が発表されている。

通訳者のオーラルヒストリー研究としては、戦後日本の日英通訳者のオーラルヒストリーから通訳者の役割をブルデューのハビトゥスの概念から分析・考察した鳥飼 (2007) が挙げられる。鳥飼 (ibid) が言及したように、通訳という仕事は、話し手と聞き手が存在してはじめてその発話が意味を持つため、通訳者自身の声そのまま取り上げられることはなく、通訳者の発話はその個人のもつと見なされることはない。鳥飼 (2007 ; 2013) で語られた通訳者の声は、自らのことばで自己を語ったものである。また、本研究で目指した点も鳥飼同様、通訳者に自らのことばで、通訳行為を自らの人生に位置づけたうえで、主観的に語ってもらうことにある。プラマー (1991) は、オーラルヒストリーの特徴を「個人の主観的現実」「過程、多義性、変化」などの視点から他の質的研究との違いを述べ、「生

²² 2006 年から学会の学術研究誌として『日本オーラル・ヒストリー研究』を定期的に刊行、2014 年 7 月現在、第 9 号まで刊行されている。

活史研究はほかでもなく、主観的なものの領域を明らかにしようとするものである²³」(1991, p.24)と主張している。オーラルヒストリーという手法は、通訳者に内在する規範意識を浮き彫りにするには最適な研究法といえる。

近現代の中国におけるオーラルヒストリー研究を回顧すると、第二次世界大戦前の南満州鉄道株式会社調査部による「中国農村慣行調査」に、近現代史研究の一環としてオーラルヒストリー手法が用いられたとされている(高田, 2010, p. 2)。その学術的価値も1980年以降に日本の研究者らによって再調査され、確認されている(高田, *ibid*)。

政治史に関する聞き取り調査としては、文化大革命時代に広東省の村から香港に逃亡した村民の口述調査などがある(高田, *ibid*)。その他、中国におけるオーラルヒストリーの題材としては、日本の中国侵略の際の被害者への口述史があり、オーラルヒストリーの研究機関である中国近代口述史学会²⁴は、日本侵略の歴史を口述で残すことを主たる目的として成立している(禰, 2010, p. 1)。当該学会の設立発起人である唐徳剛は、これまでに張学良²⁵、胡適²⁶などの口述史を世に送り出している²⁷。

台湾においては、中央研究院近代史研究所が、1989年から『口述歴史(オーラルヒストリー)』を刊行し、主に二・二八事件²⁸や美麗島事件²⁹など、台湾の近代における事件の当事者などの口述を発表している。しかしながら、通訳者や翻訳者のオーラルヒストリーは、現時点ではそれらの書籍には含まれていない。2011年以降、北京で発刊されている通訳翻訳専門学術誌、『中国翻訳(中国翻译)』において、往年の翻訳者・通訳者へのインタビュー内容が定期的に特集として組まれているが、インタビューは見開き2頁ほどの分量で、他の媒体などで周知されているエピソードが中心となっている。また、これまで登場した多くの通訳・翻訳者は中国語-英語の通訳・翻訳者である。

また、中国語と日本語間のこれまでの通訳者の語りを概観すると、現在は中国の要職にある元外交通訳者である劉徳有³⁰、王効賢³¹などのインタビューは、書籍や回顧録として残

²³ 訳文は桜井(2002, p. 56)より引用した。

²⁴ 1991年の設立当時は中国大陸ではなく、ニューヨークで学術団体登録を行ない、認可を受けている。

²⁵ 張学良(1901~2001) 遼寧省台安県生まれ。中華民国の軍人・政治家であり、西安事件で知られる。張作霖の長男。

²⁶ 胡適(1891~1962) 江蘇省川沙県生まれ(本籍は安徽省績溪县)。文学者、思想家、外交官。文語体中心であった文学界において白話(話しことば)文学を提唱した人物。北京大学学長を勤めた後、国共内戦での共産党勝利により米国へ亡命、後に台湾へ移住し、中央研究院院長に就任。

²⁷ 詳細は第4章を参照のこと。

²⁸ 1947年2月28日に台湾で起きた、中国大陸からの軍隊が地元住民を弾圧した事件を指す。

²⁹ 1979年12月に台湾で起きた反国民党運動を指す。

³⁰ 劉徳有(1931~) 中国遼寧省生まれ。光明日報日本特派員記者、中日友好21世紀委員会中国側委員、中国翻訳工作者協会(現・中国翻訳協会)副会長などを歴任。北京大学兼任教授。1986年より中国文化部副部長。日中間における外交舞台で通訳を務めた。

っているものの、第一線で通訳現場に立っている通訳者たちの声は世に出ておらず、現役通訳者の語りから規範意識を分析した研究も今のところ見あたらない。

桜井は「ライフストーリー研究では多少なりとも次のような認識が共有されている。実際に起こった出来事や語り手の経験と、それを語ろうとする言語行為にはギャップがある、というものだ」と述べたうえで、経験と言語行為の間のギャップについて、E・ブルナーの論を援用し「体験、経験、語りの三つの生(ライフ)」に分けて説明している(2002, pp. 31-32)。

桜井(2002)によれば、第一の生である「体験」は現実には起こった出来事のことであり、外的な行動として現れた振る舞いであるため第三者も観察可能なものであるとする。第二の生である「経験」は語り手のイメージ、感覚、感情、思想、意味などを伴うものとして成立し、記憶の在庫に送り込まれ何度も思い起こされるものである。そして、最後の「語り」としての生は、口述された生であって、ライフストーリーを中核とする言語的表象言語行為としての文化的慣習であり、聞き手との関係や社会的文脈によって左右されるものである。また、語りとしての生が、たとえその人が属するカテゴリー集団に代表される標準的なものであったとしても、「生活としての生もまた標準的、代表的であるとはかぎらず、むしろ個性的で自律的であると考えの方が自然である」と指摘し、続けて以下のように述べている。

生活としての生としての外的行動、経験としての生としての内的行動、それらと語りとしての生とのあいだにギャップがないと想定することは、個人が当該の集団や文化の完全なコピーにすぎないことを前提にしないかぎりありえない。(桜井, 2002, p. 32)

通訳者に置き換えていうならば、生活としての生(ライフ)は、第三者が聞くことのできる実際の訳出行為であり、経験としての生とは既に自身に内在化された通訳規範であり、語りとしての生とは、オーラルヒストリーで語られた表象的なナラティブであるにとらえられよう。また、「忠実」などの通訳規範は、プロとして通訳業務に従事していく中で、通訳者間ではすでにそのように振る舞うことが「規範意識」として形成されているともとらえられることことから、これらの規範意識は、通訳者の「語りとしての生(ライフ)」として、明示化されると推察できる。すなわち、「通訳はこうあるべき」という語りに現れた規

³¹ 王効賢(1930～)中国河北省生まれ。北京大学日本語学科卒業。中国外交部アジア局処長、中国翻訳工作者協会(現・中国翻訳協会)副会長、中国人民対外友好協会副会長などを歴任。日中間における外交舞台で通訳を務めた。

規範が「規定性規範」であり、「経験としての生（ライフ）」である規範意識が、すなわち「実際の規範」を示すことになるといえる。

本論では、通訳翻訳学における「規範」という概念に依拠し、日中通訳者のオーラルヒストリーを用いて、語りからと実際の経験を元に生成された規範意識を浮き彫りにする。

具体的な研究方法としては、オーラルヒストリーの文献研究を行なった後、筆者はライフストーリーを語ってくれる協力者を募った。主に中国というフィールドで通訳を行っている現役通訳者の選定は、かつて筆者が中国で働いていた商社の中国人同僚に依頼し、同僚の知人である会議通訳者A氏を紹介された。メールで連絡を取り、筆者の自己紹介、本研究の概要と目的を伝え、インタビュー調査協力に快諾頂いた後、インタビュー内容公開の際には匿名性を確保すること、スクリプトを確認して頂くことなどの注意点とともにインタビュー設問を送付した。当日は設問にこだわらず、自由に語って頂きたい旨も伝達した。一兩日後に個別に電話で連絡を取り、改めてお礼を述べ、具体的なインタビュー日程を決定した。後にA氏からB氏を紹介され、B氏にもA氏と同様にコンタクトを取り、資料を送付し、後日北京に電話をかけて打ち合わせを行った。両氏には個別に北京でインタビューを行ったが、電話での打ち合わせを事前に行い、インタビュー前に打ち解けるよう努めた。

桜井は、「客観的」で「正確な」データを協力者から聞き出すには「一定の友好的関係」（桜井, 2002, p. 64）の構築が必要として、ラポールとオーバーラポールの問題について以下のように指摘する。

データについての「客観的」とか「正確な」という形容も、「一定の友好的関係」と関連しており、それはラポールを築けないと正確なデータを得ることができないことを意味するだけでなく、オーバーラポールといわれる過度な親密さや同一化も、不正確なデータをもたらしたり調査者の客観性を失わせたりすることを含意している。

（桜井, 2002, p. 64）

この点、A、B両氏とは桜井の言う「一定の友好的関係」のもと、数時間のインタビューを行うことができた。しかしながら、日本語を母語とする通訳者D、E、Fの三氏とは、通訳コミュニティにおいて筆者はすでに面識もあり、ともに仕事をした経験もある知己であったため、オーバーラポールの問題が生じやすい環境にあったことは否めない。しかし、

本題の通訳規範に関する質問などに対しては、質問の意味を分かりやすくする補足説明を行い、対話を構築させつつも、「過度な親密さ」により当事者の視点を自分のものにしてしまう（桜井, 2002, p. 64）ことのないように心がけ、インタビューを行った。

事前に電話等で打ち合わせを行っていたにも関わらず、インタビューが実現しなかった例もあった。A、B両氏以外にも、中国訪問の際にインタビュー依頼を行なった通訳者がいたのだが、筆者が本研究のため北京に訪問した2010年秋には急遽仕事が入ったとの理由で逢うことができなかった。また、研究のための二回目の訪問の際には変更も可能な日程を組み、アポイントを取った後に訪中したが心労のため逢えないとの連絡が紹介者から入り、結果的にインタビュー自体を諦めざるを得なかった。

主に日本での通訳業務に携わっている通訳者として、筆者が非常勤講師を勤めている通訳学校を修了し、通訳業務を始めたばかりのC氏にもインタビューを同様に依頼した。C氏はインタビューの依頼をした当時、著名な音楽家の中国公演の同行通訳者を勤め、帰国した直後であり、その通訳の様子が中国の動画サイトに掲載されており、オーラルヒストリーの分析とともに、動画の原文と訳文をスクリプト化して訳出分析を行う予定であったが、後に日本関連の動画自体が中国のサイトから削除されてしまい、この計画は頓挫することになった。そのため、実際の訳出分析は本論では行っていない。

インタビュー終了後、スクリプト起こし、音声の再生を行う中で不明点が生じた場合は、その都度電話やメールで協力者に追加の質問を行った。

1.4 論文の構成

本論の構成は下記の通りである。

まず、序章（当該章）では本研究の目的と背景、意義、規範の概念を概観したのち、本研究における規範の定義、リサーチデザインと分析の枠組である王（2013）の研究を示し、研究方法であるオーラルヒストリーについて述べ、本論の構成を示す。

続く第2章では、本研究の先行研究である通訳翻訳学における規範研究、オーラルヒストリー研究を概観する。

第3章では中国における通訳の歴史を紹介し、次に中国というコンテクストにおいて生まれた仏典翻訳（実際には口述筆記としての「通訳」が行われていたため、厳密には翻訳という概念とは異なる行為である）、清朝末期から始まった翻訳論争と文学翻訳の訳出における翻訳（通訳）論、近現代の通訳実践者の通訳論を歴史的な流れに沿って概観する。こ

れらは翻訳・通訳行為の実践を行う上で語られてきた中国語における意味での「規範」に関する論考であり、翻訳や通訳行為に対する中国の思想を浮き彫りにするために必要である。また、本研究の研究対象である現代の通訳者の規範意識を分析する際に、これら中国の伝統的な「あるべき規範」との相違点や、規範の形成過程を考察する上で有益な資料となる。その後、王（2013）の「規定性規範」との関連性を考察する。続く第4章では近現代における通訳者の規範論として、近現代の中国において外交舞台で活躍した通訳者である姜椿芳、李越然の言説を取り上げ、社会的時代的背景と通訳者の持論との相関関係を考察する。

第5章では、現代日中通訳者のオーラルヒストリー・インタビューを詳述し、そこから見えてくる各通訳者の規範意識を分析する。主には、語りから見える「規定性規範」と「実際の規範」を、通訳経験年数や通訳者の仕事のフィールド、通訳を目指した動機、通訳訓練の有無、通訳者としての立場や従事する業務形態やその内容などの角度から分析し、検証を行う。Chesterman(1997)の規範論からの分析も試みる。

第6章では本研究のデータ分析結果から導き出された通訳者の規範意識、過去の通訳翻訳論との関連性を考察する。第7章では本研究の結論を述べ、今後の課題についても言及する。

第2章 先行研究

2.1 通訳翻訳学における本論の先行研究

序章で紹介した Toury、Chesterman の規範研究は、主に翻訳研究の理論的枠組であるが、通訳規範研究に関しては、Shlesinger(1999)が Toury、Chesterman の規範論を元に、通訳者の規範研究への応用可能性を論じている。このほか、通訳規範に関連する研究としては、Anderson(1978)や Gile(1999)、Pochhacker(1992; 1994)などが挙げられる。

Anderson(1978)の研究は、AIIC 登録通訳者 9 名、テキサス大学所属のロシア語ツアー通訳ガイド経験者の学生通訳者、中米出身のスペイン語コミュニティ通訳者など、異なる立場の通訳従事者計 17 名に対するインタビュー調査による研究である。Anderson によれば通訳者の役割に関して、聞き手と話し手の間で中立な通訳が可能かとの質問に対し、AIIC 登録通訳者を含む調査協力者である通訳者は全員「忠実に話し手のメッセージを伝達することが通訳者の責任である」と述べたものの、実際の通訳の現場での経験を元に再度回答を求めた際には、多くの通訳者が、その困難さについて述懐したという。ある会議通訳者は、「ブースの中で同時通訳していて、尊大な話ぶりのクライアントの話し方をどう表現したらいいか」に心を砕いたことを吐露し、スポーツイベントに従事した学生通訳者は、試合後の選手へのインタビューで「記者からさえくだらないと思った質問が繰り返されたときなどは、苛々して質問を訳さずに選手の代わりに通訳者自身が答えをいってしまう事があった」と語り、スペイン語の司法通訳者は「被疑者は平気でうそをつくので、通訳する気をなくさせる」と語るなど、それぞれ異なる立ち位置の通訳行為において、中立という建前とは異なる本音が漏れたことについて論じている (1978, pp. 221-228)。これは、通訳者の責任規範と実際の通訳現場での行為が必ずしも一致してはいないことを示唆する結果である。Anderson は、通訳者の役割形成は、通訳の物理的な立ち位置（同時通訳ブース内か、対面での通訳か）、ブースでチームとして交代で同時通訳する同業者やクライアントのモニタリングによる評価、AIIC（業界団体）からのフィードバックが影響している点を指摘すると同時に、通訳者の役割意識がその通訳者自身のアイデンティティによって異なることにも触れ、バイリンガル（二言語併用）、バイカルチャル（二文化併用）などの言語文化的要素だけでなく、通訳者の社会的立場や国籍、クライアントとの関係性などの要素を総括して分析するべきである (ibid., pp. 228-229) と述べている。

Gile (1999) は翻訳規範と通訳規範の最たる違いは認知的制約にあると論じている。ま

た、通訳規範の抽出方法として、通訳者の同業者間におけるフィードバックから形成される「集団的規範」と、通訳訓練を受ける過程で実務者である講師からの実技指導を通して「初期的規範」が形成されるとし、通訳規範研究のための通訳規範の抽出には、通訳言語コーパスからの抽出以外にも、通訳者へのインタビューからの抽出による規範分析や、通訳教本などを用いた規範抽出、通訳ユーザーによるフィードバック評価による規範分析が可能だと主張している。

近年は、日本においても通訳翻訳の規範研究が進展している。翻訳研究としては、古野(2002)、水野(2007; 2011)、佐藤(2008a ; 2008b)が Toury の翻訳規範を元に翻訳に関する理論的言説を翻訳規範抽出の指標として用いている。また山田(2008)は Toury の翻訳規範とブルデューのハビトゥス概念との交点を考察した新しい翻訳研究の分析枠組を模索した。瀧本(2006)は Chesterman の規範における「翻訳」を「通訳」と置き換えたうえで分析の枠組とし、オーストラリアにおけるビジネス通訳者への半構造化インタビューから通訳者の行動と倫理規定の関連を分析・検証している。武田(2008, pp. 201-202)は、Toury のバイリンガル通訳者の規範形成と内在化という通訳規範習得過程(Toury, *ibid.*:pp. 241-258)に言及し、「自然独習型」通訳者の東京裁判での通訳規範を検証している。

新崎(*ibid.*)は、異文化コミュニケーション研究の視点から、通訳者の「不変・不介入」原則からの逸脱行為が起こるのは、通訳者の「コミュニケーション調整」によるものである、という仮説を唱え、原則からの逸脱行為と通訳者の意識との関連性を、訳出分析と半構造化インタビューから分析した。(p. 11)。「不変・不介入」とは、通訳者が既に職業上果たすべきであると感じている「規定性規範」であり、通訳者が訳出行為という実践を行うときに「不変・不介入」から逸脱する理由は、通訳者に既に内在化した「実際の規範」が作用していることは想像に難くない。しかしながら新崎論文は、規範概念や通訳翻訳の規範研究ではないため、規範概念を用いて論及していない。

中国語圏における翻訳通訳規範研究も最近は盛んに行なわれており、博士学位論文として刊行された研究もいくつか存在する。次項では中国の通訳翻訳学における規範研究を概観したのち、本論の規範研究としての位置づけを行なう。

2.2 中国の通訳翻訳学における規範研究

中国においての規範に関連する研究は、通訳者、翻訳者の主体性に論じたものが多い。通訳者・翻訳者の主体性は、背景にある政治的要因を表象しており、政治的もしくは歴史

的要因が翻訳者・通訳者の訳出を決定している、との論考が多くみられる。本節では中国における翻訳規範研究、通訳規範研究の近年の論考と、本論の分析的枠組となる王(2013)の研究について考察した後、本論の規範研究における位置づけについて説明する。

2.2.1 翻訳規範研究

2006年に上海外国語大学に提出された博士学位論文をもとに刊行された陶麗霞(2013)は、多元システム理論を援用し、共通の歴史的コンテキストの中で翻訳に携わるようになった魯迅と林語堂の翻訳例を取り上げた比較研究である。陶によると、魯迅は「外国文化を輸入するための翻訳」、林語堂は「中国文化を輸出するための翻訳」を行った(陶, 2013, pp. 128-129)。魯迅は中国の国民性の改造および向上という確固たる目的を有し、思想と革命精神を重視し、国を変革するという理想を掲げて翻訳を行い、それ故、魯迅は「異質化」という翻訳方略を用い、翻訳を政治の方向に向けさせた(陶, 2013, pp. 146-149)。対して林語堂は、政治から離れることを選択し、自然とのふれあい、人生哲学や人生の楽しみなどを大切にし、中国の古典文学や哲学を西洋に伝えるための翻訳を主として行なった。それゆえ自己の作品を西側の読者が受け入れやすく、読みやすい作品とするために、中国語から英語への翻訳では「受容化」という翻訳方略を採用した(陶, 2013, pp. 155-159)。陶は、翻訳者の文化に対する主観の差異が翻訳の実践において異なる方略を取らせたと説明し、翻訳方略を決めるのは最終的には翻訳者自身であり、翻訳方略の選択は主観的なものであると結論づけた上で、「多元システム理論は、ある時代にとられてきた翻訳方略の主流が何かを分析する上では有益だが、翻訳の主体である翻訳者の主観的行動という視点が重視されていないため、中国文化の翻訳を考察する上では限界がある」(陶, 2013, p. 181)とした。そして、翻訳者は各自が自文化と異文化に対する異なる見解を有しており、その見解が翻訳者の翻訳方略を選択する上で非常に大きな作用を及ぼしていると論じ、それゆえに、同じ時代、同じ文化の下に身を置いていた林語堂と魯迅の翻訳が受容化、異質化という正反対の方略を採用するに至ったことが「自文化と異文化に対する主観の相違」から説明できる(陶, 2013, p. 180)とした。陶の論考では「規範」という概念は用いていないものの、「翻訳者の主観」という自身の主体性が文学翻訳の方向付けをする重要な要因であるとして、中国語から英語、英語から中国語という訳出方向の違いと翻訳行為の目的意識の違いが、異なる翻訳方略を選択させたと主張するものである。

本論では、陶が「主体性」と呼ぶものが規範概念に依拠したのものであると仮定し、「通

訳方略」と「通訳規範」の関係、時代と環境など外的要因の影響についても考察する。

章艳(2011)は、上海外国語大学大学院に提出された博士論文をもとに加筆された論考である。清朝末期から民国の時代に翻訳された小説作品の規範を分析し、且つ当時の翻訳作品に対する後の研究を時代ごとに分けて考察したものであり、主に Toury (1995) を分析的枠組として論じている。中国において清朝末期から中華民国の時代には、多くの海外の小説が中国語に訳されており、この時期は中国における翻訳の高潮期のひとつとして、その後の産業翻訳、文学翻訳の発展にも大きく貢献し、中国の翻訳史の中で重要な位置を占めている¹。章は、これまでの中国における翻訳研究では、当時の翻訳作品は原文に忠実ではないため、翻訳研究で用いられる正当な翻訳作品とは認められていなかったと指摘し、これまで主流の研究手法として行なわれていた起点テキストと目標テキストの比較研究以外でも、当時の社会的背景や文化的事象に鑑みれば、これらの翻訳作品も研究対象になり得ると論じた。Toury は規範を抽出する方法として、テキストからの抽出とテキスト外からの抽出を挙げているが、章論文では主に翻訳作品の序文と跋文²から規範の抽出を行なっている。当時の小説翻訳の規範³と翻訳者の翻訳規範を抽出し、当時の翻訳者が直面していた複雑な社会文化的状況と当時の文学規範のもとで、どのように翻訳に向き合っていたかを分析した。この時期の小説の翻訳が「忠実」ではなかった理由は、多くの外国小説を翻訳した林紘の翻訳が主流の文学規範として君臨していたことと、後の白話⁴中心への規範の変化途上であったことを挙げ、翻訳作品が目標言語である中国語の文化全体に与えた意義について論じている。結論としては1つの時期の翻訳作品というのはテキストと文学の価値だけから判断することはできず、目標言語と目標文化が翻訳活動に制約を与えたことを重視するべきである、と総括した。そして主流の規範を作った林紘、梁啓超、周兄弟（魯迅、周作人）の遵守した異なる規範の分析を行い、翻訳規範という概念を考察するときには、動態的な歴史的見地に立って考察する必要性を主張している。王晓元(2010)も Toury (1995) の論を用いて中国の近代文学翻訳における規範を研究した書であるが、主には

¹ 詳しくは本論第3章を参照のこと。

² 章(2011)の研究によれば、当時の翻訳作品の多くは、翻訳者がその姿を現す場として、翻訳文本文の前後に序文、跋文（あとがき）を記述しており(p. 70-73)、当該箇所には翻訳の目的や翻訳姿勢などを記述するケースも少なくなかった。

³ ここでは林紘の翻訳にみられる古典文体への翻訳を良しとする規範を指す。林紘は福建省生まれの翻訳家であるが、本人は外国語を解せず、外国語を理解する仲間の口述通訳のもと、英語、フランス語その他多言語の文学作品の翻訳を行なった。錢鍾書は『林紘的翻譯』（1963）で、林の翻訳には訳漏れや誤訳も多いが、その作品は原文の作品を越えているとしてその価値を認めている。

⁴ 「白話」とは、口頭語をもととする現代中国語の書きことばを指す。中国における文章語の二大分類のうちの一つで、伝統的な文語文を「文言」と呼び、日常生活で話される口語に近づけて書かれた文章を「白話」と呼ぶ。

当時の翻訳とイデオロギーの関係性について論述している。

また、同じく上海外国語大学大学院の博士論文である王少娣(2011)は林語堂の翻訳観と翻訳作品を異文化コミュニケーションの視点から論じ、林語堂の翻訳論と自身の規範からの逸脱の背景を研究した。王の論考では、これまでの研究を通して、林語堂は「受容化翻訳」方略を用いて翻訳を行なったと認識されているが、英語から中国語への訳出の際には、必ずしも受容化方略をとっていたとはいえ、英語への訳出の際にも異質化の傾向がみられる作品や箇所があると指摘している。これは、一人の翻訳者の中に異なった規範が存在し、訳す作品、また訳出の方向によっても規範が異なるという可能性を示している。

2.2.2 通訳規範研究

次に、本論の主たる論点である通訳規範を扱った研究を挙げる。

楊明星(2011)は、中国においてこれまでの通訳教育には通訳規範という視座が欠けていると指摘している(p. 49)。特に外交通訳の育成においては、通訳教育従事者が規範意識を受講生に教えていくべきであるとの論を展開している。楊によると、外交通訳は予測不可能なメッセージの伝達活動であり、且つ複雑なコミュニケーションプロセスを経る、特殊な領域の通訳である(p. 50)。四層に渡る規範、すなわち「政治的、言語的、文化的、審美的」(pp. 50-51)という多層な規範意識を強化し、訳出の際には、中国の言語的規範に則り、美しい表現を選ばなくてはならず、また起点テキストに存在する政治的な意味合いと、その背景にある文化を伝え、「神似と形似の統一」(p. 50)を図るよう教えるべきだと主張している。政治レベルでの規範意識とは、例えば person ということばは、中国では政治的なレベルで考えれば、中国社会主義唯物論に則った「人民」と訳さなければならず、西洋資本主義の唯心論的なヒューマニズムを指す場合には注意が求められるなど、訳語は国情にあわせて選択することが必要である(p. 50)。第2の言語レベルの規範意識には、文法的に正しい訳出を行うことや美しい発音、ふさわしい語気で訳出を心がけることが含まれる(p. 50)。第3の規範意識は、文化レベルでの規範であり、Newmark(1988)の「異文化コミュニケーションにおける翻訳において、文化的等価は重要な基準の一つである」との文言を引用し、文化的等価を実現するために、字面の意味ではなく、その言葉に含まれる文化的メッセージを訳出するべきである(p. 50)と主張している。第4のレベルは審美的な規範であり、外交通訳の現場においては、例えば孔子の『論語』を訳出する際には、英語でも芸術的等価を目指すことを規範としている(p. 51)。これらの規範を通訳教育に取り入

れていくために、楊は特に文化的規範と異文化コミュニケーションについて教えた上で、中国文化と外国文化の差異を汲み取り、様々なマルチメディアシステムを応用した教育を行なうべきであると推奨している (pp. 52-53)。等価概念をもとにした規範を通訳教育に取り入れ、言語間の文化的な等価の実現を図ることを論じた、外交通訳者教育の試論である。

王斌华(2013)は、2009年に広東外語外貿大学に提出された博士学位論文を元とする通訳規範研究である。王は、Toury、Chestermanの翻訳規範、Shlesinger、Gileの通訳規範理論を元に、中国の两会⁵における首相記者会見時の中国語—英語通訳のコーパスデータを用いて、中国における外交通訳者の規範を分析している。

王は、会議通訳の現場において、通訳者の通訳行為は通訳者自身の内部、そして外部に存在する多くの要因の制約を受け、通訳者の産出する訳出表現は、これらの多くの要因が互いに作用し生まれた産物であるとし(王, 2013, p. 78)、通訳者の訳出表現、また通訳行為そのものを左右する要因を三種類挙げている。

- 1) 通訳者の通訳能力：通訳者の二言語能力、背景知識、通訳スキル
- 2) 通訳現場の認知的処理条件：仕事の諸条件、発話者の話す速度、発音など声量と声質、起点言語の情報密度と内容の難易度
- 3) 通訳規範：通訳職能団体が規定し明文化している職業規則及び職業倫理規範。通訳訓練を受ける過程、通訳現場での業務を遂行する中で、通訳教師や先輩同業者から身を以て学習し、内在化した規範を含む。

王 (ibid) は、これらの関係を下記のように示している (p. 79)。

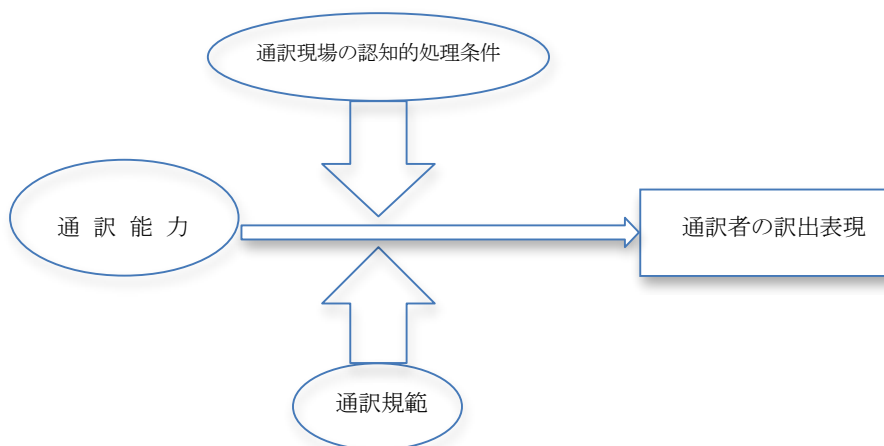


図 2.1 通訳行為及び通訳者の訳出表現を決定する主な要因 (王, 2013)

⁵ 中国全国人民代表大会と中国政治協商会議を指す。

王は通訳規範について三点から描写が可能であるとして、Chesterman(1997)を踏襲して、下記のように分類している。

- 1) (通訳の) 起点言語と目標言語の関係規範
- 2) 目標言語のコミュニケーション規範
- 3) 職業倫理規範

王は、これら三種の規範にそれぞれ含まれる要素を以下の図で示した (p. 81)。

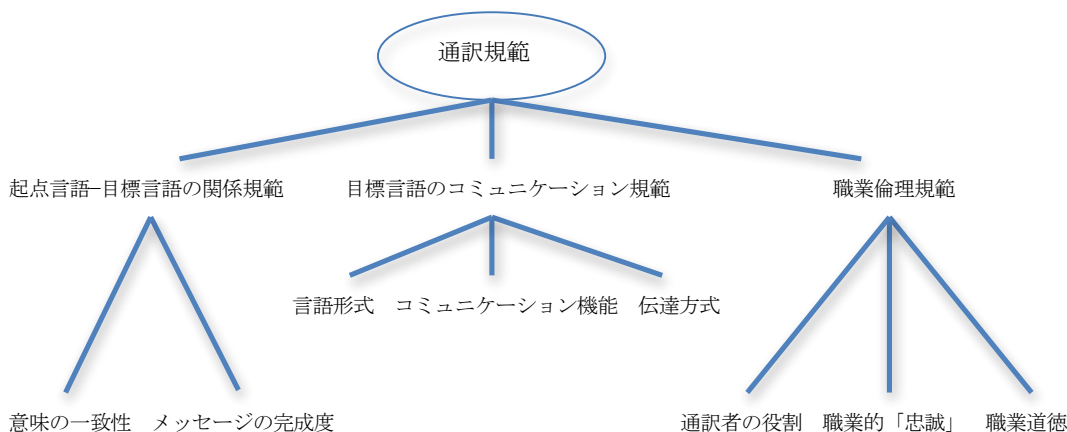


図 2.2 通訳規範描写研究の枠組 (王, 2013)

そのうえで、これら三種の規範を抽出するアプローチとして、以下の4点を挙げた (ibid; p. 82)。

- 1) 通訳者の訳出をテキスト化し、起点言語と目標言語に現れたシフト (ずれ) のうち、選択性シフト (optional shifts) (Toury, 1995, p. 57) を抽出し分析する。
- 2) 通訳者により産出された訳出テキストの言語スタイル、コミュニケーション機能、伝え方などの特徴を分析し、目標言語のコミュニケーション規範を考察する。
- 3) 通訳者自身による自身の通訳パフォーマンスに対する評価を記した文献、インタビュー内容を用いて、遵守するべきと考えられている職業道徳、役割を重点的に分析する。
- 4) 通訳業界の規範に関する文献を調査・分析し、通訳業界に存在する規定性規範を同定する。その上で、通訳現場での実際の規範との比較検討を行う。

具体的な分析として、まず国際会議通訳協会 (AIIC) や米国翻訳協会 (ATA)、オーストラリア通訳翻訳者協会 (AUSIT)、中国の通訳規定として国家基準とされる「翻译服务规范

第2部分:口译⁶などの規定条文から、通訳業界におけるルールとみなされている「規定性規範(prescribed norms)」を抽出、当該規範との比較対象として、外交通訳者の訳出に現れるシフト(ずれ)の形態から、通訳者の「実際の規範(actual norms)」の抽出を試み、この二種の規範の関係性を Chesterman の規範論から考察する。職業倫理規範の分析の際には、実際の通訳者8名による自身の通訳行為に関するインタビュー資料から分析を行なっている。

王は分析結果から、規定性規範として「忠実規範(faithfulness)」「秘密保持規範(confidentiality)」「専門技能規範(professional competence)」「中立規範(impartiality/neutrality)」「利益衝突回避規範(avoiding conflict of interest)」「職業行為規範(professionalism/professional conduct)」「職能レベル向上規範(professional development)」「チームワーク規範(professional solidarity/team work)」「業務(遂行のための)条件保持規範(ensuring professional working conditions)」「コミュニケーション促進規範(promoting communication)」の10項目を挙げ、Chesterman の理論的枠組からこれらの規定性規範を分類した(ibid.; pp.129-139)。

王(2013)による規定性規範の概念では、「起点言語と目標言語の関係規範」は主に「忠実規範」であるにとらえられ、「的確」に、「忠実」に、「完全」に起点言語のメッセージを伝達することが規範であると定義した。「コミュニケーション規範」とは「コミュニケーション促進規範」を指し、通訳者は目標言語を流ちょうで聞きやすく発音し、表現力豊かで、且つコミュニケーションが取りやすく行うべき、との規範であるとした。また「職業倫理規範」として、中立規範、専門技能規範、秘密保持規範、職業行為規範、衝突回避規範、レベル向上の努力規範などが含まれるとした(ibid.: pp.137-139)。

次に、上述した「規定性規範」と通訳者の「実際の規範」を Chesterman の規範論を援用し分析を行い、以下の結果を導き出している(ibid.: pp.139-141)。

1. 通訳の起点言語と目標言語の関係規範

関係規範の「規定性規範」は「忠実規範」であるとした王だが、実際の通訳者の訳出には下記の傾向がみられたと論じている。

- (1) 既出情報の圧縮や削除、言い間違い情報を修正する
- (2) 論理を明晰にするための構造の変化と情報補填
- (3) メッセージ内容の具体化、顕在化を図るための情報の補充

⁶ 本論第1章を参照されたい。

王の研究では外交通訳の中-英通訳者が調査対象となっているため、政治的な意図を持って人物名を挙げたときなどは、英語の人名の前に修飾語を付け加えて、中国の政治的立場を明確にするなどの情報補填なども見られ、通訳者の言説から、そのような訳出を「するべきである」と認識している姿も示された (p.122)。これらを総括し、中国の外交通訳者には、発話者が既に通訳者と信頼関係の構築されている人物であり、且つその発話者から明らかに不明瞭な発話、常識から判断して明らかだと思われる言い間違い、解りにくい比喩などが発話された場合は、情報の補填や、修飾語を付け加える、より伝わりやすいような訳語を選択する傾向が見られ、王はこれらの傾向を「論理の明晰化」「メッセージ内容の具体化」「発話の意味の顕在化」(pp.97-107)の通訳規範であるとした。そして、これらの実際の通訳規範には、規定性規範である「忠実規範」との完全な一致は見られない、と結論づけた。

2. コミュニケーション規範

王は通訳者の語った通訳論として、通訳者の言説を分析したが、そこから浮き彫りになった規定性規範は「コミュニケーション促進規範」であった。また、実際の通訳者の訳出からは、上述したように「目標言語における情報の論理明晰化」、「内容の具体化」、「意味の顕在化」が図られていることが示され、また、通訳者は、スピードの極度に遅い発話も、聞きやすいスピードになるよう、若干発話者よりもスピードをあげて通訳するなど、適切な語調、発音、声量、発話スピードを保ち、目標言語のコミュニケーション効率の向上に配慮する傾向が見られた (pp.108-121) と指摘した。これは目標言語の聞き手に話し手の意志を理解しやすく伝達する「コミュニケーション促進規範」の表れであり、「実際の規範」と「規定性規範」は一致していると結論した。

3. 職業規範

職業道德に関する規範、すなわち秘密保持、通訳の訳出レベル保持などの規範は、いずれの通訳者にも見られ(pp.121-126)、「職業に対する忠誠」規範は「規定性規範」と一致している。しかしながら、中立性、透明性など、通訳者の役割に関する規範については、実際の訳出では、情報の修正、追加、削減など様々なシフトが見られ、「規定性規範」とは必ずしも一致していない、とした。

王の論考は、これまで主に翻訳規範研究として用いられてきた記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies、略称：DTS)を通訳者の規範抽出の手法として用い、通訳業界の倫理規定である「規定性規範」と中国語-英語間通訳者の「実際の規範」との違いを分

析したものである。結論として、規定性規範は、通訳という職業の真実の姿を現してはならず、必ずしも実際の規範を反映したものとはいえないと結論づけた。その上で、現実在即した倫理規定の再考が必要であると主張し、そのためにも通訳者の役割研究の深化が必要であると述べている。

王（2013）の研究の問題点を挙げるとするならば、王は「規定性規範」を論じる際に用いたデータの妥当性がある。王(ibid)では AIIC のほか、米国、英国、オーストラリア、英国、カナダ、中国と、さまざまな国の倫理規定が対等のデータとして扱われている。これらのデータから、王は先述した 10 項目の「通訳者としてあるべき姿」を明文化した箇所を取り上げているが、各国の倫理規定を一括して扱っているため、中国の倫理規定である「翻译服务规范⁷」（翻訳通訳サービス規範）に含まれていない項目も規定性規範としてみなし、考察している点は、妥当性の可否を論じなければならないだろう。例を挙げれば、先に挙げた王の 10 項目の規定性規範のうち、「中立規範」「チームワーク規範」「業務（遂行のための）条件保持規範」「コミュニケーション促進規範」は中国の倫理規定では明示化されていない。そのため、王の論では、中国とその他の英語圏で用いられている倫理規定との間に存在する社会環境などコンテクストによる差異が捨象されている。王は、「中立規範」の分析をした箇所において、主観的には「中立」であると語ったある通訳者も、別の語りの部分では「外交通訳者として、発話者である国家幹部が重要な方針を言い忘れた際には、通訳者が情報を補填するべきだ」との見解を示したことを例に挙げ、外交通訳者は、実際には「中立」の立ち位置ではない、と論じた（p.122）。しかしながら、その要因を直接的には明示していない。

また、王の研究は中国語から英語への訳出方向の通訳テキストを分析対象としており、英語から中国語の訳出に関しては分析していない。これは使用したコーパスが総理の記者会見スピーチの英語通訳のためであるが、訳出方向によっても異なる結果が導きだせる可能性があり、その点は分析対象としていない。

また王が言説分析で通訳者の職業倫理規範抽出の際に用いられたインタビューは、王自身が行なったインタビューではなく、通訳者がインターネット上の対談やメディアのインタビュー、もしくは既存文献からの過去の引用データのみを用いている。

王が、「規定性規範」と定義している規範は、すでに通訳業界において遵守しなければならない周知の規範であると認識されているとした上で、中国語 - 英語通訳者の訳出を「規

⁷ ここで用いられる中国語の「规范（規範）」も序章で述べた通り、日本語の「倫理規定」の意味で用いられている。

定性規範」とのシフト（ずれ）に着目し、シフトから「実際の規範」を抽出している。王が言うところの「実際の規範」は、通訳者が実際の業務遂行を通して内在化された規範意識を指しているにとらえられる。本論では王（2013）の論に依拠し、まず、中国で生まれた通訳翻訳論ならびに通訳教育者でもあった、かつての通訳者の論考から、中国という社会コンテキストに基づいた「規定性規範」を抽出する。そして通訳者のオーラルヒストリー・インタビューのデータから、訳出の姿勢における「規定性規範」とのシフト（ずれ）を見つけ、そこに「実際の規範」を見だし分析することを試みる。その際、通訳者個人のバックグラウンドなどにも着目し、考察する。

次節では、本論の研究方法であるオーラルヒストリーを概観する。

2.3 オーラルヒストリーによる通訳者研究

会議通訳者のライフストーリー・インタビュー研究としては、先述の鳥飼（2007）がまず挙げられる。鳥飼論文は、戦後の日米外交に尽力した5名の日英通訳者へのライフストーリー・インタビューデータをプルデュエの社会学的アプローチから分析を行い、通訳者の役割を考察した研究である。また、鳥飼(2013)は、5名の通訳者の語りとともに、筆者である鳥飼自身のライフヒストリーも含めて考察した研究書だが、通訳者とその生きた時代という歴史的見地から通訳者という「生（ライフ）」に焦点を絞り、記述されている。

本研究の調査協力者は日中間の通訳者であり、鳥飼の研究の調査協力者とは扱う言語が異なっている。これまでの通訳研究論文でも、中国語通訳者という、人に主眼を置いた規範に関する論考は見当たらないため、本論では、日中両言語での規範意識分析を通し、英語とは異なる言語、中国語を扱う通訳者には独自の規範意識が見られるのか否かを探っていく。

オーラルヒストリー研究の第一人者であるポール・トンプソンは、「20世紀にいたるまで、歴史学は本質的には政治問題に焦点を当ててきたため、権力を持たぬ人間や少数の声は、歴史の中に埋もれてしまっていた」（トンプソン, 2002）と指摘する。

歴史を描くための生の史料や文書は、やはり政治や行政に重きを置く人々によって、保存されたり破棄されたりしてきたからだ。記録が個人的であったり、地域的であったり、また非公式なものであればあるほど、保存される可能性は少なかった。まさに権力構造そのものが、そのイメージに沿って歴史を形作る偉大な記憶装置として機能

してきたのである。(トンプソン, *ibid.*: p. 21)

トンプソンが指摘するように、通常、これまで我々が学んできた「歴史」と呼ばれるものは、往々にして権力者側、為政者側が作り上げてきた場合が多い。多くの口述史研究家たちが指摘するように、20世紀以降、テクノロジーの発達により、個人の口述をありのままの史料として残すことが可能となった(トンプソン, *ibid.*; 桜井, 2002; 桜井, 2012; ヤウ, 2011)。これは物理的にはその通りだが、史料として残ることと、一般に知られることが一致するとは限らないことも事実であろう。

中国においてはその国情から、ありのままの史料としての口述史が、当時の政治的思惑に合致しない場合は世に出ないことも考えられる。後述する中国の通訳者である姜椿芳、李越然の語りも、出版物として世に出ているものであるため、検閲の際に省略された部分、もしくは検閲を通すために通訳者自身があえて語らなかった部分もあったであろうことは想像に難くない。今回の調査協力者である中国語母語話者の通訳者に関しては、検閲のわからない日本語での研究であるために、生の声を聴くことができた。インタビュー自体は日本、中国の両国で行なっているものの、日本というフィールドにおける日本人が行なった研究であることが優位に働いた可能性も指摘しておきたい。

オーラルヒストリーは歴史を多面的に見直すことが可能な手法として、今日、特にマイノリティと呼ばれる少数の集合体の声を研究する方法として多く用いられ、歴史学のみならず、社会学や文化人類学、女性学など様々な分野で用いられている。

ポール・トンプソンは、以下のようにも述べている。

一般的に、あらゆる種類の人々の人生経験が、生の史料として歴史研究に使われるようになれば、新しい方向性が歴史に与えられる。オーラルヒストリーは、刊行された自伝と非常に似通った歴史史料であるが、自伝よりもはるかに広い範囲におよんでいる。(トンプソン, *ibid.*: p. 23)

このトンプソンの研究理念に照らせば、本論はオーラルヒストリーという手法を用いて、語られた自伝から、通常は歴史に残らない通訳者の「人」としての生きざまから、その通訳行為の根底にある規範意識を分析するもので、自伝の領域を越えた通訳学における史料としての新たな可能性を示す試論ともいえるだろう。

尚、本論は鳥飼(ibid.)と同じく、通訳者による当事者研究である。筆者は中国語-日本語間の通訳者であり、今回の調査協力者とは同じ通訳現場で通訳を担当することも少なくない。桜井(2012)は「調査者が当事者か否かで語り方や語られる内容が大きく異なることも少なくない」(p. 48)と、当事者間で行われるインタビューには「当事者ならこれは言わなくても解るだろう」(ibid.)という、いわば阿吽の呼吸が存在し、これはプラスにもなれば、マイナスにもなりうることを指摘する。

鳥飼は、日米通訳者の役割研究を行なった際に、自身も通訳者という当事者であったことのマイナス要因とプラス要因に言及し、通訳者という内部の世界を熟知している利点を最大限生かしつつも、内輪話にならないよう注意を払いインタビューを行なった旨述べている(ibid.:pp. 16-21)。

筆者自身も、日本語-中国語通訳という行為に従事するものとして、近くて遠い双方の文化の狭間に立ち、対面通訳の場や会議通訳のブースの中での相互理解促進を目的とした会議、会見などのあらゆる場において、通訳者として業務を遂行しながらも、時にはその行為が相互理解に結びつかなかった数々の現場を体験してきている。そのような際、ジレンマを感じる人間は言語的橋渡しの行為者である通訳者のみであることが多いが、その悩みを理解できる人間もまた、通訳者という仕事に従事したものであろう。今回の通訳者のオーラルヒストリーは、通訳者として自身のアイデンティティを脅かすような出来事に遭遇した経験も言語化され、調査者である筆者に語られた。これは、上述した体験の共有がなされない語りの場では、一般的な、すなわち通訳者ではない研究者であったなら、前提となる共通認識が存在しないために語られなかった可能性がある。これらの語りの生成は、通訳者の意識の中に、調査者が単なる調査者ではなく、同業者として認識した上での結果とみるのが妥当であろう。

ローリー・マーシェ(2006)は、オーラルヒストリーを織りなす口述のナラティブは、それ自体で成り立つものではなく、ナラティブの持つ力強さや直接性、雄弁さなどはその本の著者や編集者に負うところが非常に大きい、と指摘する。と同時に、オーラルヒストリーの持つ口述性に忠実でありつつ、それを書き換えるという、オーラルヒストリーが内包する主観性の問題と複雑さも指摘する(pp. 4-5)。口述という研究方法を用いる研究者にとっては、語られたナラティブをオーラルヒストリーとして残す場合、「語りを如何に解釈するか」という問題がつかまとう。研究者自身が調査者と同じ世界を共有している、もしくはかつて共有していた場合、ナラティブの解釈に関しては、当事者研究であることが効

を奏するともいえるだろう。

本論の調査において筆者は、鳥飼 (ibid.) を踏襲し、インタビュー中はできるだけ聞き手に専念し、話の腰をおることがないように心がけた。しかしながら、互いに既知の話題に関しては、当事者としての立場で対話に参加しながら、それぞれの通訳者が話しやすい環境づくりを心がけた。

2.4 本論の位置づけ

本論は上述した先行研究をふまえて、王(2013)が示した「規定性規範」をこれまでの中国における通訳翻訳論および通訳者の言説から抽出し、オーラルヒストリー・インタビューという方法を用いて、現役通訳者に内在する規範意識、王がいうところの「実際の規範」との比較検証を行なうものである。

まず、日中通訳者の規範意識を検証するため、次章の第3章ではこれまでの中国の通訳における歴史と、中国というコンテキストにより産出されてきた通訳翻訳論を中国の文献から時系列的に概観する。次に、近現代の中国外交に携わった二人の通訳者のオーラルヒストリーを取り上げる。文化大革命という大きな社会的コンテキストの変化をもたらした時代に生きた通訳者を例に、その言説から規範意識とその形成要因を第4章で検証する。そして本論の第5章では、現代の日中通訳者の規範意識を、通訳者のオーラルヒストリーから浮き彫りにし、前半の文献研究により導きだされた中国の通訳規範と、現代の通訳者の持つ規範意識の分析を行い、現代の日中通訳者の実践に基づく規範意識からその形成要因を考察し、通訳を取り巻く社会的コンテキストと規範の関係性の検証を行う。

次章では中国社会に存在する規定性規範の形成過程を探るため、中国における通訳史と通訳翻訳論を時系列ごとに概観し、考察する。

第3章 中国における通訳史と通訳翻訳「規範（規範）」

本章では、「中国」というコンテキストにおける通訳翻訳論を、歴史的流れに沿って古代から現代に至るまで概観する¹。まずは通訳史を概観し、その後、中国における通訳・翻訳行為に言及した「通訳翻訳論」をみていくことにする。

本章で取り上げる論は、通訳・翻訳行為に従事するにあたり、「通訳・翻訳は如何に行なうべきか」に言及した言説もしくは論考である。これまでに中国の通訳翻訳論を紹介した中国語文献は数多く存在する(陳福康, 2000/2008; 馬祖毅, 2006; 劉, 1989/2004; 羅新璋・陳応年, 1984/2009)。これらの文献では、古代から現代に至るまでの、相当数の中国における通訳翻訳論を紹介している。羅新璋・陳応年(1984/2009)では、仏典翻訳の行われた時代の訳経僧の翻訳論から始まり、近現代に至るまでの100名におよぶ翻訳実践家、研究者、文学者などの翻訳論を紹介している。陳(2000/2008)は、古代、清朝から中華民国成立初期、中華民国時代、新中国成立時期の4つの時代に焦点を絞り紹介しているが、それでも72もの翻訳論を500頁以上の紙幅を用いている。また、中国の通訳翻訳に関する言説を時系列的に英語で紹介した文献も出版されている(Cheung, 2006; 張佩瑤, 2010)。いずれも、通訳翻訳従事者が通訳翻訳を行なう際にあるべき姿を明文化したものである。これらは中国語の意味における「規範理論（規範論）」であり、Toury や Chesterman の研究、すなわち記述的アプローチから明らかになった規範(norm)ではなく、通訳・翻訳を行う上での指針となる規範(prescriptive)である。王(2013)の研究では、これらの規範論と「規定性規範」との関連性を説いてはいないが、本論の本章では、中国社会における「規定性規範」を、それぞれの時代とともに変貌しつつ存在し続けた「規範論」の中を探ることを試みる。本研究において、これらの中国通訳翻訳論をすべて紹介することは難しいため、ここではその一部分の代表的な論のみを紹介する。

3.1 中国の通訳史

中国の通訳翻訳理論は中国古代の仏典翻訳に始まるといっても過言でない。王鉄鈞『中国佛典翻译史稿』や馬祖毅等（編著）『中国翻译通史古代部分』では、支謙の「文派」論、道安の「五失本、三不易」、玄奘の「五種不翻」、彦琮の「八備十条」などを取り上げ、それぞれの歴史的意義について考察している。また、馬祖毅等『中国翻译通史近現代部分』

¹ 本章で引用した翻訳論の原文は、基本的に羅新璋・陳応年の2009年版『翻译论集』から引用し、その他の出典から引用の場合は注釈に記載した。

では、厳復をはじめとする中国における近現代の翻訳通訳に関する論考を挙げている。

翻訳関連文献として現存しているもの以外に、翻訳行為よりも遙か昔より行なわれていた通訳行為に関する文献も存在している。それらの文献には、通訳者がそれぞれの時代においてその役割を果たしていたことが記されている。黎难秋(2002)『中国口译史』は、中国の古代から近代までの通訳史を紹介している貴重な論考であり、先述した马祖毅(2006)『中国翻译通史古代部分』は、翻訳論が誕生する以前の通訳の歴史について論じている。英語文献では、2006年に出版された Cheng(2006)の

“*An Anthology of Chinese Discourse on Translation, Volume 1: From Earliest Times to the Buddhist Project.*”²がある。张佩瑶は通訳翻訳「理論」ではなく、通訳翻訳「ディスコース(话语)」という概念を用いて、中国におけるこれまでの通訳翻訳を英文で紹介した。まず英語圏で発表され、後に中国でも英語版のまま出版された。

また、近年では香港中文大学翻訳³研究中心(香港中文大学翻訳通訳センター)が、2011年より、翻訳⁴史に特化した学術研究書を毎年発刊している。

これらの先行研究をふまえて、本論では通訳翻訳規範に関する記述を抜粋し、中国の通訳史とそれぞれの時代の通訳翻訳規範について紹介する。

3.1.1 先秦時代の通訳

马(ibid.: pp. 4-5)によれば、先秦⁵時代と呼ばれる古代中国における通訳に関する記載で最も古いとされるものは、『后汉书(後漢書)』第86巻『南蛮西南夷列傳』における越裳国⁶からの使者と周公旦(周公姫旦)との対話である⁷と指摘している。ここでは、三度の「象⁸(通訳を行う者)による重訳を経て互いにコミュニケーションが可能になったことが記されている。

² 中国では、张佩瑶(2010)『中国翻译话语英译选集(上册):从最早期到佛典翻译中国』の書籍名で出版された。

³ 中国語における「翻訳」の意味は通訳も含んでいるため、日本語では「翻訳・通訳センター」となる。

⁴ ここでは広義の「翻訳」の意味として、「通訳」史も含む。

⁵ 始皇帝が建てた秦国による中国統一以前の時代(紀元前221年以前)を指す。

⁶ 現在のラオス、ベトナムのある地域を指す。

⁷ 後漢書86巻には以下のような記述がある。「交阯之南有越裳国。周公居摄六年，制礼作乐，天下和平，越裳以三象重译而献白雉，曰：“道路悠远，山川阻深，音使不通，故重译而朝。”成王以归周公。公曰：“德不加焉，则君子不殫其质；政不施焉，则君子不臣其人。吾何以获此赐也！”其使请曰：“吾受命吾国之黄耆曰：‘久矣，天之无烈风雷雨，意者中国有圣人乎？有则盍往朝之。’”周公乃归之于王，称先王之神致，以荐于宗庙。周德既衰，于是稍绝」

⁸ 通訳を行なう者の呼称。马(ibid.: p. 4)によると、周王朝では訳す言語によって通訳をする者の呼称が異なっており、例えば東方(現在の山東省)の言語を通訳する者を「寄」、南方(現在の長江以南と淮河以南の地域を指す)の言語を訳す者を「象」、西方(現在の山西省、陝西省、甘肅省一帯を指す)の言語を訳す者を「狄鞮」、北方(現在の河北省)の言語を訳す者を「译(譯)」と、各々呼んでいたという。

また、黎(ibid.)によると、中国においては夏⁹や商の時代より通訳行為が行われていたことを示す文献が存在するという。例えば、後漢¹⁰の文献『吕氏春秋』には「反舌」という表記があり、これは中国語と異なる外国語を指し、それを通訳する人間を「舌人」と呼んでいたという記述や、孔子が、「地位の高い人間は学問にかけられる時間がいくらあっても足りないため、ことばの伝達を行なう業務は地位の低い官僚に行なわせれば良い」と考え、「反舌（外国語）」を伝達する役職を「象胥」と呼んでいたとの記述がある(黎, ibid.: p.3)。

これらの記述から、当時の中国では、通訳を行なう官職の地位は高くはなかったことが覗えると同時に、この時代には既に高級官僚の業務とは別に、通訳業務を専門的に行なう人員を配置していたことが分かる。

3.1.2 漢、隋、唐時代の通訳

後漢時代になると、国外との外事務を司る「大鸿臚¹¹（大鴻臚）」と呼ばれる官庁の業務内容に既に通訳が含まれており、その後も地位や官名の変化はあるものの、外交の窓口として通訳に従事していたことが『魏書』などの文献に記されている(马, ibid.: pp. 8-9)。

また、隋の時代では煬帝と日本からの遣隋使との対話も通事を通して行なわれたことが『随書』にも記載されており、唐の時代に関する文献では、外交に携わる通訳者以外にも国外との通商貿易に携わる通訳者やガイドを兼任する通訳者に関する記述も見られるようになる(马 ibid.: pp.18-31)。また、『全唐文』卷七十五开成改元赦文条には、外国人や他民族とのコミュニケーションをとる際に通訳者の役割を重視した唐政府が、译语（通訳者）に対し適性試験や訓練を行なったことが記されている¹²。また通訳者が誤訳をした場合の処罰規定を『唐律』という法で定めていた(马, ibid.: p.21)。

3.1.3 宋、元時代の通訳

中国はその後、五代十国時代の混乱期を経て、宋王朝¹³の時代を迎える。宋の時代は日本をはじめ、東南アジア諸国など海外との交易が回復した時期であった。宋太宗は日本僧

⁹ 夏王朝は歴史学的には諸説あり、その存在は確認されていない。日本では一般的に商（殷）から王朝が始まったとする説を用いることが多く見られる。

¹⁰ 西暦 25 年～220 年。

¹¹ 「大行令」と呼ばれた時期もあるが、漢武帝の時代に再び「大鸿臚」と改名された。後に「鸿臚寺」と命名された。「鸿」は大きい声を表し「臚」は伝達を表すため、もとは「大声で伝える」との意味を持つ。

¹² “其边州令制，译语学官，常令教习，以达异意”との記載がある。《全唐文》卷七十五开成改元赦文条，中华书局影印本，第一册，1982年版，第797頁。

¹³ 西暦 960～1279年。

を受け入れ、宋からも日本との交易のための商人が度々日本を訪れるなど、僧侶だけでなく貿易商人の往来も増加した時代である(黎, *ibid.*: pp. 35-36)。宋王朝では、通訳者の体制も唐の時代から変化を見せている。それまで朝貢に対応する通訳者を一手に管理していた鴻臚寺の元に下部組織を設立し、それぞれの組織で通訳者を抱え、担当する国との朝貢に関する業務を行なっていたことが『宋史・職官志』に記載されている(黎 *ibid.*: p. 36)。しかしながら通訳者の地位は依然として低く、『宋史・礼志』などの文献には当時の外国使節と通事の対話が記されているが、その中に、「通事は地位が低く、皇帝とは直接ことばが交わらなかったため、使節のメッセージは通事が舎人を介して皇帝に伝えられた」と記述されている(黎, *ibid.*: p. 38)。

元¹⁴の時代における中国では多民族国家が確立され、多くの海外との交流が行われた。キリスト教の布教が中国で盛んになった時期でもある(黎, *ibid.*: p. 42)。元の時代は漢族ではなく、モンゴル族の王朝であり、在位した皇帝はほぼ中国語を解さなかったため、モンゴル語と中国語による通訳翻訳が日常的に盛んに行なわれていた(黎, *ibid.*: p.42)。日本との交流は二度に渡る元寇、そして元寇を起因とする使節の殺害などから通商などの交流が滞っていた時期にあたる。しかしながら、黎(*ibid.*: p.44)では『明史・外夷傳・日本』を引用し、元の時代における日本語通事¹⁵に関して言及しており、紛争時期にあっても通訳者がその業務を行っていたことが示されている。

3.1.4 明時代の通訳

朱元璋が明¹⁶王朝を打ち立てたのち、中国は外交の領域を広げ、より一層の対外開放が行われた時期であった。それゆえに多くの外交通商にたずさわる翻訳者・通訳者が必要になり、会同館¹⁷(会同館—通訳者を携える官庁)、四夷館(四夷館—翻訳者を携える官庁、翻訳者の育成も担当)が増設、設立された。日本との外交記録も『明史・日本傳』に記述が残されているが、通訳者に関する記述で言及されているのは3名の中国籍日本語通訳者である(*ibid.*: p. 44)。またこの時期の中国は、西洋から多くの技術を翻訳通訳者の訳出を通して吸収した時期である。

¹⁴ 西暦 1271～1368 年。

¹⁵ 当該箇所では日本語を解する中国籍の日本語通訳者、曹介升について言及している。

¹⁶ 西暦 1368～1644 年。

¹⁷ もとは元の時代に設立されたものであるが、明の時代になりその規模が拡張され、増設された。

3.1.5 清時代の通訳

清¹⁸の時代においても、明の時代と同様、通訳者が会同館で外交使節との交流接待を担当していたが、1748年に会同館は四夷館と合併し、「会同四译馆」と改名され、官庁としての外交通訳業務と人材育成教育の職責を一手に担うことになる(黎, *ibid.*: pp. 64-65)。

清王朝は1862年、北京に京师同文馆、广州同文馆、上海広方言馆を設立し、1900年まで公式な外交通訳者、翻訳者の育成にあたり、多くの外交官や在外公使を輩出している。卒業生の活躍の場は、外交領域にとどまらず、黎(*ibid.*: pp. 78-87)によれば、国や地方の官僚、税関、鉄道、郵便事業など国のインフラ整備に関わる専門通訳者・翻訳者となり、また海外から訪中した外国語教師の通訳者や、自身が外国語の教師になる例もあったという。

以上、中国の古代から近代までの通訳史を概観した。興味深い点として、過去の中国では通訳者の地位は低かったこと、日本との交流の場では、中国籍の日本語通訳者が用いられていた記載が多くみられること、そして過去においても通訳者は「こう訳すべき」という規範、すなわち「規定性規範」(王, 2013)が存在し、時代にあっては誤訳に対する処罰規定すら存在したことが挙げられる。

次項ではそれぞれの時代における通訳翻訳に関する論考を概観する。

3.2 中国の通訳翻訳論

次に中国における通訳翻訳に関する論考を取り上げ、内容の相違点と時代背景に着目しながら時系列順に見ていくことにする。

马祖毅(2006, p. 2)は、中国ではこれまでに4度の翻訳高揚期があったと指摘している。①後漢から宋の時代に行われた仏典翻訳、②民朝末期から清朝初期の科学技術翻訳、③アヘン戦争以降から五四運動までの西洋学の翻訳、④そして1978年以降から現在に到る改革開放時代以降の翻訳、の4つの時期である。本節ではこの4つの時期の前後における個別の翻訳論を概観し、それぞれの時代の根底に存在する規範について考察を試みる。

3.2.1 中国における翻訳の始まり－仏典翻訳

本節では、中国における翻訳論の出発点とも言える仏典翻訳理論について概略を述べる。

銭鍾書が『管錐編』において「仏典の漢語翻訳が始まったことで、中国に翻訳理論が誕生し、数千年後における西洋著作の翻訳者が直面するであろう問題を打ち出した」(1990, p.

¹⁸ 西暦1616～1912年。

366)と論じたように、これらの仏典翻訳理論では近現代の翻訳理論に直結する論、すなわち意識/直訳や受容化/異質化の問題、文雅な訳への誘いなどが提起されており、嚴復の「信、達、雅」などの近代中国翻訳理論、文学翻訳における翻訳美学論など後世の通訳翻訳の理論と実践に与えた影響をうかがい知ることができる。故に、中国における仏典翻訳理論は現代の翻訳行為の実践や翻訳規範を研究する上で欠かせない論点を備えているといえる。

中国での仏典翻訳は、草創期（148-316）、発展期（317-617）、全盛期（618-906）、終結期（954-1111）の4つの時期に分割される（馬, 2006, p. 69）。ここでは草創期から全盛期の翻訳論、特に後世の翻訳論に影響を与えた（馬, 2006; 陳, 2000）とされる下記の論について中心的に概略を説明し、仏典翻訳理論の特徴について考察する。

①支謙の「文派」論

②道安の「五失本、三不易」

③玄奘の「五種不翻」

④彦琮の「八備十条」

3.2.1.1 仏典翻訳草創期（148-316）－支謙の「文派」論

仏典はインドに生誕した釈迦が説いた教えである。釈迦在世の当時、釈迦の教えは口伝、いわゆる口述で伝達され、弟子が暗記して心に刻むものとされていた。仏典は釈迦入滅後に弟子が口述で暗記し留めていたものを文字に書きおこしたものである。インドで生まれた釈迦の教えは西暦 148 年、中国の後漢末期に、安世高¹⁹により初めて漢語に訳されたとされる（馬, *ibid.*: p. 67）。

この時期は、当時の中国において、仏典翻訳の草創期であり、当時の翻訳僧は仏典に対する敬虔の念が深く、経に背いてはならないというおそれを抱いていたという。またこの草創期の時代には、翻訳僧の翻訳経験不足を補う方法として、音訳による直訳法も取り入れられ多用されていたようである（馬, *ibid.*: p. 69）。

丘山（1983, p. 85）によれば、その後三国時代になると、仏典翻訳は、文派（文体重視、文雅な文体）と質派（内容重視、質実な文体）の論争が起こる。当時の翻訳は、自国の人間ではなく、外国僧による漢訳が行われていたこと、しかも口述筆記が主流であったため、起点言語であるサンスクリット語やバーリ語の口伝表現により、目標言語である漢語の翻訳文が影響を受けていたことが背景にあるとみられる。

陳（2000）によれば、当時の翻訳は、仏教に対する時の統治者からの迫害を防ぐため、

¹⁹ 安世高（生年没不明、2世紀頃）西域の国である安息国の王太子。後に漢土（中国）に渡り、翻訳僧として小乗仏教の仏典翻訳に従事。現在の研究では初めに仏典を漢語に訳した人物とされている。

道教、儒学との融合をはかり、これらの概念や名詞を仏典翻訳に応用していたとされる。

支謙はそのような仏典翻訳草創期、三国時代に活躍した文派の代表として知られている。支謙の原名は越、字は恭明。月支（氏）国からの第3代移民として支識に学び、6種の言語に精通していた支謙は、後に呉の孫権のもとに渡り、30年の間に『維摩結経』『法句経』の漢訳を行い、それまでの直訳調で意味の通じにくい漢訳を文雅で、しかも衆生にわかりやすい漢訳に改訂した。たとえば、釈迦の弟子智慧第一の舎利弗の名前を意識して、秋露子と改訳するなど、それまでの音訳を訂正し加筆を行なった（王, 2006, p. 73）。支謙は過去に訳された仏典翻訳の音訳部分を削減し、原文の難解度を和らげ典雅な訳語を使い、改訳や新たな翻訳を行なったが、同時に、原文を大幅に削ったために、元々の意を伝えていない訳文ができあがった。

支謙は他の仏典翻訳を行なった訳経僧とは異なり、出家僧ではなく在家信者の立場で仏典翻訳に従事していた。支謙の翻訳行為は、仏典の意義は衆生に理解されることが第一義であるとの信念から、在家の衆生の機根²⁰に合わせて翻訳をしているとの見方ができよう。支謙が翻訳の際に持ち合わせていた規範は、立場や翻訳のストラテジーは異なるものの、後の鳩摩羅什にも通じると考えられる。

草創期の仏典翻訳はその後、竺法护が修正を加えて再び実直な「質」に傾いた訳が中心となっていった（馬, *ibid.*: p. 75-77）。

3.2.1.2 仏典翻訳発展期（317-617）

この時期は、仏教が統治者の庇護をうけた時代であり、統治者が翻訳の場を設け、翻訳活動に参加する僧を募り選抜し、仏典翻訳に従事させた時代である。任（1985）によれば、この時代は、草創期のような在家僧による個人翻訳ではなく、「訳場」と呼ばれる翻訳コミュニティにおけるグループ翻訳が行われ、仏典と言語に精通した僧（訳経僧）が中心となり、弟子を従えて翻訳作業を行っていた。船山(2013)によると、訳場の代表である訳経僧は訳主と呼ばれ、翻訳作業の総監督であった（p. 71）。弟子としての翻訳従事者も、この頃からは、民間人ではなく役人が取って代わり、翻訳作業は梵語での口述、梵語の筆記、漢語への口頭通訳、漢語の筆記、解釈、校正、といった具合に分業化されていた。

釈道安の翻訳論

この時期の訳経僧として、まずは釈道安(314-385)が挙げられる。釈道安は、姓は衛、常山扶柳（現代の河北省衡水県）の生まれで、佛図澄の弟子として知られている。後に数千

²⁰ すべての人に備わる、仏の教えを受けて発動する能力のことだが、ここでは仏典を解する理解のレベルを指す。

人の弟子を率いて仏典漢訳研究に従事したが、梵語は解さなかったようである（王，ibid.:p.78）。道安は漢訳教典の比較分析を行なう中で《摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序》を訳すとともに、仏典翻訳の論考として、「五失本、三不易」、すなわち梵語の仏典を漢訳する際に原文の形を失うことになる（失本）5つのケース、そして原文の意を伝えるために変えてはならない（不易）3つのケースに言及した。下記がその原文と訳文²¹である。

原文

言翻译梵经，有五种失原本之义并三种之不容易者。晋道安摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序曰：“译胡为秦，有五失本也：一者，胡语尽倒而使从秦，一失本也。二者，胡经尚质，秦人好文，传可众心，非文不合，斯二失本也。三者，胡经委悉，至于咏叹，丁宁反覆，或三或四，不嫌其烦，而今裁斥，三失本也。四者，胡有义记正似乱辞，寻说向语，文无以异，或千五百，刈而不存，四失本也。五者，事已全成，将更傍及，反腾前辞已，乃后说而悉除，此五失本也。然般若经，三达之心，覆面所演，圣必因时，时俗有易，而删雅古，以适今时，一不易也。愚智天隔，圣人叵阶，乃欲以千岁之上微言，传使合百王之下末俗。二不易也。阿难出经，去佛未远，尊大迦叶，令五百六通，迭察迭书，今离千年，而以近意量截，彼阿罗汉乃兢兢若此，此生死人而平平若此，岂将不知法者勇乎，斯三不易也。涉兹五失。经三不易，译胡为秦，诘可不慎乎。”

「五失本」訳文

サンスクリットの語順は秦(中国)の語順とは全く逆さであるが、漢語の語順に従って訳す――の失本

声域の教典は質実を尊ぶが、秦（中国）人は文雅を好む。教を伝え衆人の心に届かせるには文雅でなければいけない。――の失本

教典は委細を尽くしており、詠嘆の箇所では何度も繰り返し反復し面倒をいとわないが、このような部分は、今は切り捨てる――の失本

西域には本文要約の「乱辞」のような「義記」があり、先のことばを繰り返し説明している、文は異なっていないが千五百字にも及ぶところがある。これは省略して残さない。――の失本

ある事例を全て説き終わった後に、さらに他の事柄を説く前に前のことばを繰り返し

²¹ 訳文は北村（2007）（2008）から引用した。

てからそれが終わってから説き始める、これらは全て除く。一五の失本

「三不易」訳文

聖人の言葉は必ずその時に応じたものであり、時の習わしには変化がある。古雅なる者を削って今の時代に合わせようとしてはいけない。

愚者と賢者とのあいだには甚だしい隔りがある。聖人は凡人にとって及びがたい存在である。先年も昔の微妙な言葉を伝えて、百代も隔てた末世の流俗に合わせようとする事はあってはならない。

阿難が経を詠出したのは仏滅後間もないころで迦葉尊者が500人の六通に互いに考えながら書かせたものであるのに先年を経た今、近い意味で裁量してしまう。今の生死を離れられない凡夫達がこのようにたやすく扱うことはしてはいけない（すなわち、法を知らないという前提に立って慎重に行なうべきである。

この釈道安の論「五失本、三不易」は仏典漢訳における、草創期から続く直訳/意識論争の折衷案とみられる。「五失本」における訳文は漢語の習慣に合わせて、典雅な、受け入れやすい文章にするという主張は、現代の受容化翻訳につながることも推察できる。仏典の精神はそのまま伝えるべきであり、訳出の際には翻訳者は法を知らない凡夫²²であるという前提に立って、自分の裁量だけで判断してはならず、慎重に行なうべきであるという三不易の主張は、異質化翻訳の概念や厳復の「信」概念に通じるものと見ることが可能であろう。

王 (ibid.: pp.80-81) は、「五失本三不易」は釈道安の招きに応じて長安入りした鳩摩羅什が遵守して翻訳に臨み、その後も訳場において遵守された規範として用いられたと述べている。下記では鳩摩羅什の翻訳論をみていくことにする。

鳩摩羅什の翻訳論

鳩摩羅什(344-413)²³は、現代では玄奘三蔵と並び、二大訳経僧と称される人物である。龜茲国²⁴出身であるが、幼くして仏典に精通し、釈道安の招きで長安に向かう途上、紛争に巻き込まれ身柄を拘束された結果、16年間の捕虜生活を涼州²⁵で送ることとなる。そのため漢語にも精通し、後に長安に入り、没するまでの7年間で300巻余りの重要な仏典の漢訳に携わった(陈, 2000, pp. 15-16)。鳩摩羅什の翻訳論として現存しているものはほとんど

²² 仏教用語で、法を解さず、煩惱や欲に支配されて生きている愚かな人間のこと。

²³ 鳩摩羅什の生没年には諸説あり、(350-409)とする説もある。

²⁴ 現在の中華人民共和国新疆ウイグル自治区クチャ県にあたる。

²⁵ 現在の甘肅省、寧夏回族自治区一帯を指す。

ないが、弟子に残した言説として伝えられる資料は存在する。以下は『出三蔵記集』巻十四の『鳩摩羅什伝』に記載されている羅什のことばであるが、弟子の一人である僧睿へ残した翻訳に対する所感である。

天竺国俗，甚重文藻，其官商体韵，以入弦为善。凡覲国王，必有赞德。见佛之仪，以歌叹为尊。经中偈颂，皆其式也。但改梵为秦，失其藻蔚，虽得大意，殊隔文体，有似嚼饭与人，非徒失味，乃令呕秽也。(馬, 2006, p. 82)

天竺(インド)の国民性は文章の装飾を重んじ、その調べは音律の如くを良しとする。国王に謁見する際にはその徳を賛嘆し、見仏の儀においては吟詠を以て尊ぶ。教典の偈頌はみなそれらの形式である。しかし梵語を漢語に翻訳すると、もとの優雅な文体は失われてしまう。大意を伝えてはいたとしても、文体はまったく異なるものである。これはあたかも食事をかみ砕いて咀嚼したものを他人に与えるようなもので、味がなればかりか、嘔吐をもよおすほどである²⁶。

鳩摩羅什は梵語から漢語への翻訳は質訳(起点言語である梵語の内容を重視した訳出)ではなく、文訳(目標言語である漢語の言語形式を重視した訳出)を行なった(陈, *ibid.*: pp. 17-18)とされ、一般的には、仏典翻訳における文訳の代表格とされている。

馬(*ibid.*)は、鳩摩羅什が文訳を行った理由として、「梵語の原文に忠実に訳出する事に力を注いだため」とであると分析する(p. 82)。これは原文の梵語の形式美を重んじ、訳文である漢語も同様に形式美を実現し、より原文の形式に沿う訳出を試みたと考えられる。換言すれば、起点言語が形式的に起点文化において美辞麗句を用いた文章だとするならば、目標言語の訳文もその目標文化の美辞麗句を用いて訳出するべきという考えではないかと推察される。

3.2.1.3 仏典翻訳全盛期 (618-906)

この時期は時の統治者の庇護を受け更に仏典翻訳が盛んになった時代である。翻訳作業は分業制が更に進み、11種もの役割が存在したという(王, *ibid.*: pp. 95-96)。

この時代に活躍した訳僧が、彦琮(557-610)と玄奘(600-664)である。

玄奘の五不翻

玄奘(600-664)は通称三蔵法師と呼ばれ、仏教原典を求め西域に赴き、大量の原典を携

²⁶ 『出三蔵記集』巻十四『鳩摩羅什伝』より。訳文は筆者による。

えて帰国、持ち帰った教典 657 部のうち 75 部 1335 巻を 19 年の歳月を掛け翻訳した翻訳僧である。玄奘が中心となり訳場で翻訳された経典は、唐の時代になり新たに訳された教典の半数を占めるといわれている（馬, *ibid.*: p. 98）。

玄奘の提唱した「五不翻」は、梵語を漢訳せず、音訳²⁷した方がよいものの五種を指した論考であり、専門用語の訳出に関する理論といえる。原文と訳文は下記の通りである。

原文

- 一、秘密故，若“陀羅尼”；
- 二、含多義故，如“薄伽”，梵具六義；
- 三、无此故，如“閻浮”樹，中夏实无此木；
- 四、順古故，如“阿耨菩提”，非不可翻，而摩騰以來，常存梵音；
- 五、生善故，如“般若”尊重，“智能”輕淺；

訳文

一神秘的なもの。DhaRANI 陀羅尼（だらに：梵語のママ）の音写や真言の意味などは音訳するべきである。

二、多義語。薄伽は自在、名称、吉祥、尊貴、きわめて盛ん、莊重（そうちょう）であるなど合計 6 種の意味をもつ多義語のため、音訳がふさわしい。

三、この地に存在しないもの。閻浮とはインドにしか見られない植物（木）であるため、これらは音訳するべきである。

四、昔から既に音訳されているもの。既に定訳として音訳が流布しており、わざわざ漢訳する必要はない。

五、特に大事な仏教用語。般若（Bōrē）とは諸仏の母である真理を見極める智慧を指すが、漢訳で智慧と訳しては真意が伝わらないので、後世の誤解を生まないためにも音訳するべきである。

前述の通り、仏典の草創期においては儒学、道教の用語を用いて漢訳がされていた。玄奘の提唱した「五不翻」はその誤りを是正するためだとも推察できる。

²⁷ 梵語の発音をそのまま残し、発音が似ている漢字をあてて訳語にする翻訳方法。

彦琮の「八備十条」

彦琮（557-610）は趙郡柏県（現在の河北省内丘県）の生まれで、俗姓は李、漢人であったが梵語に精通した訳経僧である²⁸。中国では初の翻訳専門理論書《辯正論》を執筆・編さんしたことで知られる（王, *ibid.*）。尚、「十条」の部分の詳細は不明である（馬, *ibid.*: p. 92）ため、ここでは八備の原文と訳文を示す²⁹。

原文

诚心爱法，志愿益人，不憚久时，其备一也。将践觉场，先牢戒足，不染讥恶，其备二也。筌晓三藏，义贯两乘，不苦暗滞，其备三也。旁涉坟史，工缀典词，不过鲁拙，其备四也。襟抱平恕，器量虚融，不好专执，其备五也。耽于道术，淡于名利，不欲高衔，其备六也。要识梵言，乃闲正译，不坠彼学，其备七也。薄阅苍雅，粗谙篆隶，不昧此文，其备八也。八者备矣，方是得人。

字音一，句韵二，问答三，名义四，经论五，歌颂六，咒功七，品题八，专业九，异本十。个疏其相，广文如论。

訳文

- 一、心より仏法を信奉し、志高く人を助け、時間を懸けることを厭わないこと。
- 二、翻訳に携わる前に、まず品行方正、善く戒律を守り、悪に染まらないこと。
- 三、仏典を幅広く修め、その真意を理解していること。
- 四、仏典に通じているのみならず、文学、歴史などの事象にも精通していること。五、胸襟を広げ寛容であるべきで、主観による判断を避け、自説に固執してはならない。
- 六、道徳学術を尊び、名聞名利に流されないこと。
- 七、梵語に精通し、正確な翻訳方法を習得し、梵語の表現力に長けていること。
- 八、伝統的な文字学や書道などにも多少は通じていること。

この八つを備えている者が（訳経僧として）ふさわしい。

3.2.1.4 仏典翻訳論の特徴

以上、仏典翻訳が行われた時代とそれぞれの時代において代表的な翻訳論を概観した。以下にその特徴を挙げてみたい。

1. 仏典の漢訳は一般的に「仏典翻訳」と呼ばれるが、実際には、訳場において原典を

²⁸ 当時の中国で仏典翻訳に携わる訳経僧のほとんどが外国から来た僧であった（馬, *ibid.*: p. 92）。

²⁹ 訳文は筆者による。

音声で読みあげ、それを口述筆記するという方式で漢訳が行われていた。

2. 役割分担の明確な分業制度がとられていたが、草創期から発展期には梵語のみを解し、漢語を解さなかった訳主も存在した。鳩摩羅什は外国人ではあったが、漢語を解し梵語と漢語を直接訳すことのできた希有な存在だった（船山, 2013, p. 96）。

3. 当時の訳経僧の翻訳は、庶民に仏教の根付く土台がない時代（草創期）は主に直訳法で翻訳が行われ、その後訳文が難解で、庶民に受け入れがたいと解ると、受け入れられやすい、漢語の言語習慣に寄り添った意識法が行われた。

4. 仏典翻訳発展期以降の訳経僧は、為政者や師匠である高僧から翻訳の場所を与えられ、明確な役割分担を与えられた上で翻訳に従事していた（王, *ibid.*）。そのため、翻訳の分業を行なう上で、作業に当たった翻訳従事者には翻訳規範が必要であったと推測できる。

この時代の翻訳（通訳）規範は、翻訳された仏典を受容する受け手である衆生、そして訳場を提供する為政者の反応に左右される形で、様々な論が生まれ、時には質派（原文・内容重視）そして時には文派（訳文・文体重視）へと変化を続けていたといえよう。任（1985）によれば、その後仏典翻訳は、道教の言葉を引用するなどの技巧も採用され、わかりやすい、伝わりやすい訳文重視へと変化し、庶民の仏教受容度が上がるにつれ、本来の仏の意をいかに正しく伝えていくべきかという論議が可能になり、最終的に文雅な文体で、且つ教えを誤りなく伝える翻訳という理想を目指すようになったという。

釈道安の五失本三不易に関して、横超（1983）が「古来、この道安の五失本三不易が永く訳場の厳訓視されてきたこと、まことに故なしとせぬ。尚、この後名訳の誉高い鳩摩羅什が重要な諸大乘経を翻訳し、それが今日まで千五百余年に亘り権威視されてきたのも、道安のこの厳訓が預って力あったことを思われる」と論じているように、五失本三不易、五不翻、八備十条は、仏典の訳場における、訳経僧はじめ翻訳従事者のあるべき姿を提示した規範として存在していたと考えられる。

また、船山によれば、仏典翻訳の現場における訳主である訳経僧が漢語を母語としないインド人で、漢語に精通していない場合は、「伝訳」と呼ばれる通訳者が間に入り、梵語と漢語の通訳を行っていたという（船山, *ibid.*: p.76）。しかし、中国の仏典翻訳関連の文献にはこれらの通訳者の名前を記載した文献は二種にとどまり、いずれも翻訳者としてその名に言及されているものの、通訳者としての貢献には触れていないと指摘する（船山, *ibid.*: p. 77）。本項で述べた規範は、上述した当時の仏典漢訳における分業制度を考えれば、実際には訳場における口述通訳を行う通訳者「伝訳」の「規定性規範」でもあり、翻訳論を展開

した鳩摩羅什や玄奘ら訳主が、最終的に確認作業をした後に奉納されていたとすれば、これらの「規定性規範」である翻訳論と「実際の規範」との間には乖離がないとみることができる。しかしながら、各々の翻訳論のままに翻訳し世に残しているかは、議論が分かれるところである。先の船山によると、簡潔なわかりやすい訳をめざした鳩摩羅什も原語を音訳にとどめ、意識を行わないこともあったと指摘している(p. 100)。

なお、現在まで仏教界において用いられている訳は、新訳と呼ばれる玄奘の訳ではなく、旧訳の鳩摩羅什の訳である。

3.2.2 明朝末期から清朝初期における科学技術翻訳

馬(1980)によると、この時代は西洋の自然科学の翻訳が盛んに行えた時期であった。この時代の翻訳は、中国にキリスト教の不況のために中国にやってきたイエズス会の宣教師と、科学研究に従事していたか、もしくは科学に興味のあった中国人が、互いに協力し翻訳活動を行っていた(馬, 1980, p. 23)。未だ封建社会にある当時の中国において、「西洋から自然科学などの知識を吸収し、富国強兵を図りたい」という思いがあった徐光啓などの知識人と、中国での布教活動を円滑に進めるために「今は数学を以て中国人の心を籠絡するしかない(マテオリッチ通信集)」との思いがあった宣教師側が互いに協力し、共同作業で翻訳活動に従事したという(馬, 1980, p. 24)。馬(2006, p. 308)は、1584年から1790年にイエズス会宣教師が訳した437の文献の分野を図で詳述しているが、それによると、キリスト教関係の書籍は57%と全体の半数以上を占めるものの、数学、天文などの自然科学分野が、全体の30%を占め、ており、倫理学や哲学、地理学などの人文学分野も13%ほど占めていた。この時代、文学領域では1つの文献しか翻訳されていない。

永田(2006)は馬の『中国翻訳簡史』を引用し、マテオリッチなどの宣教師と徐光啓などの中国人翻訳者の共同作業を紹介しているが、そのなかで「中国においては翻訳に参加した中国人士大夫も、翻訳を口述した外国人宣教師と同様に翻訳者としての地位を与えられている」と指摘し、後の時代における、林紓の翻訳小説にもこの例が当てはまるとしている(永田, 2006, p. 214)。この時代は長期間にわたって、外国人と中国人が共同作業により翻訳作業を行っていた。すなわち、外国語の文章が外国人によって中国語に口述され、それを中国人が文語に筆述するという作業であった。このような作業形式は、仏典翻訳時代にも見られた形式である。このような翻訳形式で翻訳作品を生み出す作業が長期間、普遍化されていたことが、Hermans(1991)の言う慣例(p.161)、そして慣例から規範に変化

する過程であると考えられる。

3.2.3 19 世紀末から五四運動前後における翻訳論

中国では清朝末期になると、言文一致と国語統一を目的とした国語運動が起こり、その流れのもと、1917 年から翌年にかけて白話文学推進運動が起こった。五四運動は、1919 年 5 月に起きた反帝国主義、反日運動である。この時代は、文学作品の小説をはじめ、実学分野でも様々な翻訳が行われ、海外からの思想を学ぶことで民意向上が図られた時代である。

3.2.3.1 嚴復の「信、達、雅」論

嚴復(1853-1921)は中国清朝末期から中華民国初頭にかけて活躍した啓蒙思想家であり、翻訳家である。1877 年から 2 年間の英国留学で海軍航海技術を学び、さらに西洋の文化を吸収し、哲学や倫理学など西洋の学問を学んだ後、1879 年に帰国。その後、嚴復は李鴻章に招かれ、天津の北洋水師学堂の校長に就任する。そして 1895 年に日清戦争が起こり、母国の敗戦を目の当たりにすることになる。この敗戦がきっかけとなり、西洋の学問を翻訳し、自国民の民意向上に寄与することを願った嚴復は、啓蒙活動家、翻訳家としての人生を歩み始めることとなる³⁰。

序章でも触れたが、嚴復はまず、1898 年にトマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas・Henry・Huxley)の著書である“*Evolution and Ethics*”(邦題『進化と倫理』)を翻訳、その中国語翻訳版として『天演論』を出版した。

『天演論』の序文である『譯例言』の冒頭において、嚴復は後に人口に膾炙する「信、達、雅」という翻訳論を発表した。原文及び訳文は以下の通りである³¹。

譯事三難信達雅。求其信已大難矣。顧信矣不達。雖譯猶不譯也。則達尚焉。

(嚴, 1898, p. 1)

翻訳作業には三つの難事がある。すなわち内容に忠実であること、ことばをわかりやすくすること、上品で典雅な文章にすること、である。内容に忠実なだけでも実に難しいが、忠実さに気をとらわれて訳がわかりにくければ、訳したとしても訳していないことと同じである。故にことばをわかりやすくすることを重視しなければならない。

³⁰ 1896 年の日清戦争敗戦以降、嚴復以外にも、康有為、梁啓超など多くの啓蒙思想家や政治家などが救国策として西洋思想の吸収に取り組み、多岐に渡る分野の文献翻訳に携わった。

³¹ 訳文は平塚(2009, p. 46)による。

王恩科（2007, p. 8）は嚴復の提唱した翻訳論「信、達、雅」と嚴復の第1号の翻訳作品である『天演論』が嚴復自身の翻訳論に背いていたことを例に挙げ、「嚴復の初期の作品（『天演論』）が『信』に背いていた理由は、嚴復が言語不一致だからではなく、嚴復は翻訳の目的を民衆喚起と救国の武器として考えていたからである」と述べている。嚴復の翻訳論と実践としての翻訳行為の乖離は、翻訳の目的に即した恣意的なものであるとともに、翻訳者の規範意識の現れともとらえられ、翻訳者は、自身が掲げた理想としての翻訳論とは異なる訳出を行う可能性を示している。

3.2.3.2 林纾の翻訳論

中国近代翻訳の歴史上、林纾は嚴復と並ぶ翻訳家として知られている（陳, 2000, p.120）。しかしながら、林纾は実際には翻訳作業は行っていないため、「翻訳者」という名称が適切であるか否かは諸説存在する³²。林纾は嚴復と異なり、海外渡航経験はなく、外国語をまったく解さなかったが、口述翻訳者との共同作業で中国語版『椿姫』を翻訳、出版し、好評を博したことがきっかけとなり、その後日本の小説を含む様々な言語の多くの文学作品を中国語の作品に仕立て出版した（黎, 2002, p. 255）。1898年から1924年までの26年間で、林纾が中国語に翻訳した作品は海外の文学作品180点余りにのぼる（黎, *ibid.*: p. 255）。もともと古文家であった林纾の翻訳方法は、まず海外の著作を外国語に精通する王壽昌、魏易、王慶驥、王慶通らに原典を口頭で翻訳してもらい、その内容を中国語の格調高い文言を用いてリライトするというものであった（陳, *ibid.*: p. 121）。故に、原典に忠実には訳されず、大幅な内容削除や書き換えが行われており、後に鄭振鋒が林の翻訳姿勢を批判する所感『林琴南先生』³³を發表し、以下の批判を展開した（鄭, 1924）。

- ① 林が翻訳し發表した作品の中で、一流作品と呼べるものは僅かであり、多数の小説は、二流もしくは三流の作品である。これは翻訳の手助けをした通訳者が文学的知識を持っていないことに起因する。
- ② 内容の大幅な削減が行われ、原典の内容を改ざんしているにもかかわらず、原典の名を表に出してその翻訳小説だと名乗ることはふさわしくない。
- ③ 林の翻訳小説は、当時上海に多く存在した乱訳の翻訳家の姿勢を助長させるもので

³² 例えば、中国大陸で発行されている羅・陳（1984/2009）『翻譯論集』には林纾の序文を掲載し紹介しているが、台湾発行の劉（1993）『翻譯論集』掲載されていない。

³³ 原典は『中国文学研究』作家出版社1957年版に掲載。引用は羅・陳（1984/2009）『翻譯論集』（pp. 246-254）による。

ある。

しかしながら、当時の中国では翻訳小説というジャンル事態が珍しいものとして民衆に受け入れられたこと、そして小説自体が読者である中国人の受け入れやすい内容と文言に書き換えられていたため、林の作品は人気を博し「典雅な古文を用いて西洋の小説を翻訳するという規範」(章, p. 104)を確立させるきっかけとなった。

3.2.3.3 魯迅の硬訳論

20世紀初頭の中国では、1919年に起きた五四運動が契機となり、魯迅・周作人兄弟、茅盾、郭沫若らが外国文学から種々の新しい文化を学び、文学運動を通しての新社会構築を目指す動きが活発化した。翻訳に対しても、嚴復の「信达雅」論を発端とした翻訳規範に関する論争が、文学者の間で書簡交換や雑誌への投稿などの形で頻繁に行われ、それぞれが独自の翻訳論を提唱するとともに、自身の翻訳理論に基づき実際の翻訳活動に従事していった。ここでは、魯迅(1931)の論を取り上げる。以下は訳文のみを表記することにする³⁴。

翻訳の際には読者層を考えた上で翻訳しなければならない。読者層は主に三種類に分類できる。甲：相当の教育を受けたことのある人間、乙：ある程度の文章は読める人間、丙：文字を読むことすらおぼつかない人間、の三種である。我々の翻訳本の読者は甲と乙であるが、乙に対する翻訳の際に「信(忠実)」に重きをおくと、難解で理解できない可能性がある故、白話(口語)で訳さざるを得ないケースもある。しかしこういった訳本は、反対に甲には受け入れがたいものになってしまう。甲は文語で翻訳されていたり、もしくは原文に忠実すぎて硬い訳文でも、受容できる素養を備えている。故に読者層が異なれば翻訳方略と(翻訳)評価基準も異なってしかるべきで、翻訳を全て画一的に行う必要は無い。翻訳の際の姿勢は、その対象とする読者層によって「信(言文に忠実)」と「順(訳文が滑らかで読みやすい)」の取捨選択を行う必要がある。(魯迅, 1931)³⁵

魯迅が、硬訳を主張したのには、当時の目標言語の美文のみを見て判断し、良い訳であ

³⁴ 訳文は筆者による。

³⁵ 出典は罗新璋・陈应年「魯迅の返信(原題：魯迅的回信)」『翻譯論集』(pp.344-349)。

るとしていた当時の文学規範意識に危機感を持ち、林の翻訳論に対する批判が根底にあったとみられる。

王向远(2001)によれば、この時代は翻訳者のレベルの問題と言文一致運動が始まってまだ間もない時代であったため、文語と口語が混在した訳文や、思想改革を全面的に打ち出すために翻訳者や出版社が故意に内容を添削、削除を行った「豪杰译(豪傑訳)」「乱译(乱訳)」と呼ばれる翻訳が主流であった。また、この当時の翻訳には日本語からの重訳が多く行われ、翻訳に携わった文学者は、日本語に訳された西洋語の概念をそのまま文字として輸入し、新しい中国語を創作し、中国語の表現力向上を意図していた。そして、豪傑訳や乱訳などの翻訳が「読みやすい」ということで世に出回り、人びとの間に普及することを防ぐため、魯迅は「宁信而不顺(読みやすさよりもむしろ忠実を重視するべき)」という論を提唱したと考えることができよう。

3.2.3.4 林語堂の翻訳論

林語堂は、1895年、清朝時代に福建省龍溪県に生まれた英語－中国語の翻訳者、言語学者、文学者である。牧師の家に生まれ、貧しいながらも教育熱心な両親の元で育った林語堂は、上海のキリスト系大学である聖ジョージズ大学に進学。卒業後、半公費留学生としてアメリカに渡るも、資金提供先の清華大学に資金提供を半年で打ち切られ、北京大学に資金援助を申請し、胡適の援助を受ける。一年後にドイツイエナ大学に移籍。イエナ大学でハーバード大学での未履修単位を補い、文学修士号を取得した。引き続き胡適の援助を受け、ライプチヒ大学で言語学博士号を取得し帰国。帰国後は北京大学英語学部教授として教鞭を執る傍ら、中国の文学作品の英訳、英語による文学作品を執筆し、国際的に著名な中国人作家となった。1936年にアメリカに移住した後、シンガポール南洋大学の学長などを歴任した。林はその後も精力的に執筆活動を続け、晩年は台湾に居を構え、香港で没した。林の「論翻譯」(1932)によれば、嚴復の提唱した「信、達、雅」には「翻訳者が原文に対峙する際の問題」、「翻訳者が中国語(訳文)に対峙する際の問題」、「翻訳と芸術(文)の問題」が欠落していると指摘し、これらの問題を翻訳者の責任論という視点から論じ、それぞれを「翻訳者の原著に対する責任」「翻訳者の中国語読者に対する責任」「翻訳者の芸術に対する責任」と言い換え、この三種の責任感を持つものこそが翻訳者の資格を持つと主張した。また、この責任感を備えた上で翻訳・通訳のあるべき姿を「忠実、通順、美」という新たな三基準で表現した。通訳翻訳者の「責任」という論点を翻訳通訳規範に結びつけた主張は当時の中国語圏では林語堂一人が唱えていたものであった。

また、翻訳は芸術である、との認識を示した上で、「翻訳の芸術が頼るのは、1. 翻訳者の原文の字句とその内容に対する透徹した理解力、2. 翻訳者の非常に高度な中国語の運用力、筋の通った流暢な中国語を書く能力を備えていること、3. 翻訳の訓練を積むことと、翻訳者は翻訳基準と処理方法について正確な見解を有していることであり、この三者を除いて、翻訳にはいかなる規律や翻訳者の規範も存在しない」と述べている。そして絶対的な「忠実」な訳は不可能であると認識した上で、翻訳者が忠実に伝えるべきものは原文の「文字」ではなく、原文に存在する「語意（メッセージ）」であり、原文にある精神（フィーリング、トーン）を伝えることが必要であると強調した³⁶。

「忠実、通順、美」論の「美」の根拠として、林は「翻訳／通訳は芸術である」と主張したが、これは林の規範論が、当時盛んに行われていた欧米言語から中国語への文学翻訳の際に散見された「死訳」や「胡訳」への警鐘であったためと考えられるが、「美」という概念を翻訳に導入するという考えは、古代の仏典翻訳時代から存在しており、嚴復の「信、達、雅」の「雅」とともに、過去の翻訳論からの影響を彷彿とさせる論考である。

王少娣(2011)は、林語堂の翻訳論は起点言語、目標言語そして翻訳者の文化的要素などには詳しく論及はしておらず、また翻訳の言語学的、心理学的な作用等にも触れていないため、翻訳理論として完全なものとはいえないと指摘する(p. 103)。しかしながら、「翻訳は一種の芸術であり、芸術は翻訳不可能である。故に絶対的な忠実というのは不可能である」という見方は、翻訳者に客観的かつ公正な翻訳姿勢を確立する上で有益であり、翻訳への客観的公正な認識は翻訳研究の可能性を広げるものであり、林の翻訳論は中国の翻訳学発展の礎となる論考であると主張し、その価値は正当に認められるべきであると述べている(王, 2011, pp. 103-104)。

3.2.3.5 陳西滢の「三似」論

文学評論家、翻訳家である陳西滢（1896-1970）は、1929年『新月』第二卷第4号において『論翻譯』という論文を発表し、嚴復の「信、達、雅」論を批判した(程, 2006, p. 307)。

陳は、まず文学作品と非文学作品では規範が異なることを主張し、特に非文学作品の翻訳においては「雅」は不要だとしたうえで、文学翻訳では「信」が規範であると提唱した。陳は、「信」には「形似、意似、神似」の三段階のレベルがあり、翻訳が原書の内容を伝達できた状態を「形似」、原書の風格を訳出できた状態を「意似」、そして作家の個性と原作の気品や持ち味、気品等のスピリットを伝えていれば「神似」とし、文学翻訳にお

³⁶ 引用は劉靖之『翻譯論集』（1989/2004, pp. 32-47）による。初出は吳天曙編『翻譯論』（1932）。

いては、原文作家の個性と原作の持つ精神を訳す「神似」、すなわち最高のレベルに到達するべきである、と主張した。

3.2.3.6 五四運動前後期における翻訳論の特徴

嚴復、魯迅、林語堂はこの時代を代表する翻訳実践者であると同時に、それぞれが翻訳のあるべき姿を文字として残している。当時は嚴復の提唱した「信、達、雅」が、実際には嚴復自身がその論に背く翻訳をしたことから物議を醸し出し、翻訳論争にまで発展したのだが、実のところその他の翻訳者たちも、それぞれの翻訳実践において、自身の提唱したあるべき姿の規範から逸脱した翻訳を行っていたことが、近年の研究結果から明らかになっている（王少娣, 2011 ; 陶麗霞, 2013）。また、19世紀から五四運動の時期の翻訳規範の変遷、すなわち林纾の「中国語として受け入れやすい文学作品」へという翻訳規範、その規範を是正せんとする魯迅の硬訳論は、近年の中国における、村上春樹の翻訳をめぐる主張などにその片鱗を見ることができる³⁷。

3.2.4 近現代の翻訳論

3.2.4.1 傅雷の「神似」論

傅雷の「神似」論は上述の陳西滢の「三似」論を受け発展させたものである。翻訳家である傅雷（1908-1966）は1951年に発表した『『高老头』重译本序(高爺さん重訳本序文)』において以下のように自身の翻訳理論を展開した。

以效果而论，翻译应当像临画一样，所求的不在形似而在神似。[中略] 像英、法、德那样接近的语言，尚且有许多难以互译的地方；中西文字的扞格远过于此，要求传神达意。[後略]（劉，1989/2004，p. 68）

翻訳は(原画を手本として描く)絵画と同様で、その求めるところは形の相似ではなく、精神の相似であるべきである。[中略] 英仏・英独間のような共通性のある言語間でも相互翻訳の難しいところが多いが、西洋の言語と中国の言語のように全く異なる言語間では、なおさら原文の精神を生かして意を伝達することが必要となる。

傅雷の翻訳論は、翻訳の実践者の立場を強調した論であり、翻訳作業においては「三似」のうち、精神を生かして意を伝達するという「神似」を最重要視することを主張し、この

³⁷ 村上春樹の翻訳作品を巡る主張は、本論の主題ではないためここでは詳述しないが、その内容は藤井（2009）、永田・平塚（2009）、平塚（2011）を参照されたい。

境地は下記に紹介する銭鐘書の主張する「化境」と同様であると語っている。

3.2.4.2 銭鐘書の「化境」論

銭鐘書（1910-1998）は、文学翻訳における規範は「化境」であるとし、1964年に発表した『林纾的翻译(林纾の翻訳)』の中で、「文学翻訳の最高基準は『化』であり、文学作品を一つの国の言葉から別の国の言葉に転換するときには、言語習慣の差異による生硬で牽強な痕跡が見てわかるようではならないし、元来の風格や味わいを保ってこそ『化境(化の境地)』に入ることができたと言える」と述べている（劉，1984/2004；程，2006）。

3.2.4.3 巴金の翻訳論

巴金（1951）は、翻訳に携わる際には、誰のためにその翻訳を行うのかをまず考慮するべきである。読者のためであるならば翻訳者は読者への責任を果たすべきである³⁸。読者の期待規範に翻訳者が合わせるべきだというのが基本的な考え方である。

3.2.4.4 郭沫若の翻訳論

郭沫若（1955）は、翻訳の原則は翻訳する作品の性質に基づいて決定されるものであり、翻訳作品が文学作品であれば、原文のメッセージを伝えるだけでなく、訳文も文学作品としての価値を要求される。（実務的な）科学著作であれば、正確にそのメッセージを伝えるだけでよしとされる。³⁹

3.2.4.5 季羨林の翻訳論

季羨林（1911-2009）は中国山東省生まれの言語学者、翻訳者であり翻訳研究者である。北京大学副学長、中国言語学会会長などの要職を歴任した。研究分野はインド古代言語、仏教史、比較文学、東方文化など多岐に渡る。

季は『中国翻译词典序（中国翻訳辞典序文）』において、漢唐の時代に繁栄を極めた中国文化が今日まで衰退の道を辿らなかった理由は、翻訳であったと述べている(季, 1995, pp. 2-3)⁴⁰。

中华文化这一条长河，有水满的时候，也有水少的时候；但却从未枯竭。原因就是有新水注入。注入的次数大大小小是颇多的。最大的有两次，一次是从印度来的水，一次是从西方来的水。而这两次的大注入依靠的都是翻译。

中国の文化を河に例えると、河水が満ちるときもあれば水の少ないときもあった。し

³⁸ 出典は羅新璋・陳應年《翻譯論集》、訳文は筆者による。

³⁹ 出典は羅新璋・陳應年《翻譯論集》、訳文は筆者による。

⁴⁰ 初出は1996年発行の《中国翻译词典》。本論では、当該辞典発刊直前に《中国翻译》1995年06期でも発表された文章から引用した。訳文は筆者による。

かし、水の枯れることは一度もなかった。その理由は新しい水が注がれたからである。注がれた頻度は大小含めとても多いが、最も多く注がれたのは二度ある。一度目はインドからの水であり、二度目は西洋からの水である。そしてこの二度の大規模な注水は翻訳に寄ってなされたのである。

季羨林は嚴復の論をもとに、『信、達、雅』は三文字のみで、作品と読者と言語の三者間の関係を体現している」と語り、「信、達、雅」を『信』とは原作に忠実であること、『達』とは読者に忠実であること、『雅』とは文学言語に対する忠誠である」と定義づけ、原作、読者、言語という視点から忠実性を追及することが翻訳基準になるとの論を展開した（季・許, 1986. p. 4）

3.2.4.6 許淵沖の三美論

許淵沖（1921-）はノーベル文学賞候補にもノミネートされた経験を持つ英語-フランス語の文学翻訳者、北京大学教授である。中国の『诗经』『楚辞』『李白诗选』『西厢记』などの作品を英語、フランス語に翻訳して海外に紹介する一方、『赤と黒』など海外小説を中国語に翻訳した。文学、詩学翻訳者である許は、翻訳美学を主張し、「三美論」という持論を展開した。以下に概要を示す。

「意美、音美、形美」すなわち「情意、音律、形式の美」という三つの美を備えた翻訳こそが優れた作品である。三美は三似を基礎とするが三似を越えるものである。三美を実現するために深化、等化、浅化という方略を用いる。外国語文学を中国語へ翻訳する際は中国語の優位性を最大限に生かし、原文を越えることもありえる。

（程, *ibid.*:pp. 314-317）

3.2.4.7 近現代における翻訳論の特徴

近代の翻訳論の特徴は、分野によって異なる規範があったことが挙げられる。文学翻訳においては「達意」と「審美感」の両立を理想として翻訳に望むべきであり、当時中国が海外からの文献翻訳により導入を進めていた科学技術分野の翻訳に関しては、「忠実」に訳すことが規範とされていた。これは翻訳を必要とする領域がますます多様化していく当時の中国にあって、至極当然のことであったといえる。

分野の違いにより、あるべき規範も異なっているが、これは外国の事象を学び体得するという実利を主な翻訳目的とするのか、外国との交流そのものが目的なのかによって、翻

訳のあるべき姿としての規範が左右されることを示している。そして、これらは現代の通訳規範にも通じるのではないだろうか。いずれにしても、本節で紹介した論は翻訳に関するものであったが、中国における異文化の受容姿勢とそれに裏打ちされる翻訳「規範」を理解することができた。これらは「通訳」のあるべき姿としての「規範」にも影響を及ぼしている。次節では、中国の外交という分野における通訳論を概観する。

3.2.5 現代中国の通訳論

本節では、「信达雅」などの翻訳論をもとに展開された、通訳実践者が提唱した通訳論について述べる。

3.2.5.1 姜椿芳の『通訳者の心得』

姜椿芳（1912-1987）は、ロシア語の通訳者・翻訳者として知られ、後に上海外国語大学を創設した。2012年には姜椿芳生誕100周年を祝して、『姜椿芳記念全集』が中国大百科全書出版社から出版されている。程(ibid.: p. 382)によると、「翻訳の善し悪しは政治問題に直結する」と主張した姜は、1953年に通訳における6つの問題について論じた論文『略談口译问题』を発表し、通訳翻訳の一般的な問題点、通訳業務の意義、通訳者が備えているべき条件、通訳の種類、どのように通訳に従事するべきか、その他注意すべき関連事項の6項目について、自身の見解を述べた。姜は通訳翻訳における一般的な問題点として、翻訳に比べて通訳が軽んじられている現状を挙げ、通訳の重要性を指摘した。そして姜は、通訳の基準は翻訳と同じく「信达雅」であると述べたが、中でも信、すなわち忠実を第一に考えるべきと主張、続いて達、そして最後に雅であると基準の重要性に順序をつけて説明した。そして、雅を重視するあまり、信、すなわち忠実性を損なうことは、重大な問題であり、危険な通訳である、と述べている（程, ibid.: P. 382）。また、当該論考で、姜は、通訳者が規範として備えるべき『通訳者の心得』についても提示した(程, ibid.:p.383)。

『通訳者の心得』⁴¹

1. 事前準備をしっかりと行う
2. 話し手と事前に打ち合わせをしておくこと
3. 話し手の論理的ではない混乱したスピーチも整理して段落毎にわけて論理的に訳すこと

⁴¹ 日本語訳は筆者による。

4. 通訳は編集も兼ねること
5. 要点をおさえて数字などは漏らさない（メモを取る）
6. 第一人称で訳し、話し手の語気、精神、感情、表情、姿勢なども極力まねて訳すこと

3.2.5.2 李越然の「準、順、快」

李越然(1927-2003)は、1945年から1965年の20年間、ロシア語通訳者として中国とソ連の外交通訳に従事した通訳者である。北京第二外国語学院副校長、中国翻訳者協会副会長を歴任した。李越然は国務院所属の通訳者として、中ソ蜜月時代において毛沢東、周恩来、劉少奇など歴代国家要人の通訳を担当していたが、ソ連と中国の関係悪化により職務を外され、文化大革命により、ソ連のスパイ容疑をかけられ、1967年に逮捕、7年にもわたる牢獄生活を送るという体験を持つ通訳者である⁴²。1980年に外国語関連学術誌『外国語教学与研究』において『谈谈口译工作』を発表、また1983年の『翻译通讯』において通訳研究に関する論文『建议开展口译工作的研究』を発表した。李は、通訳行為は翻訳行為と異なり、音声を用いて情報を伝達すること、即時的に訳出しなければならないこと、という通訳の特徴をふまえ、翻訳規範に偏向して用いられてきた「信、達、雅(信、達、雅)」に代わる通訳規範として「准、順、快(準、順、快)」を主張した(李, 1980, pp. 51-52, ; 李, 1983, pp. 36-38)。

「準、順、快」の含意は下記の通りである。⁴³

准(準)－話し手の発言の真意をとらえ、的確（≠正確）に訳す

順(順)－自然なわかりやすい表現で聞き手に伝える

快(快)－敏捷に反応し即座に訳出を行い、話し手の発話のスピードに合わせた訳出を行う

李は、自身が教鞭を取る北京第二外国語学院（現在の北京第二外国語大学）にて、自身の通訳規範を用いて多くの後輩を育成した。李の論考自体は4000文字に満たない短いものであるが、中国における通訳教育現場では、今も「信達雅」と並んで、通訳のあるべき姿として引用されている。

⁴² 李越然については、自伝『李越然回忆录：中苏外交亲历记』に詳しいが、李本人によれば、「牢獄に入ったのは不幸中の幸いであり、もし監禁されず外にいたとしたら、おそらく今日まで生き延びることはできなかっただろう」(p. 243)と語っている。

⁴³ 翻訳は筆者による。

3.2.5.3 齊宗華の通訳論

齊宗華(齊宗華 1929-) は英国に生まれ、幼少期をフランスで過ごした後に中国へ帰国した女性のフランス語・英語通訳者である。中国外交部の通訳者として、1952年から約二十年間、周恩来、毛沢東の国家要人や、郭沫若など文化人のフランス語・英語の通訳を務めた。後に北京国際関係学院教授に就任した⁴⁴。

1983年に発表した論文『略論口译』において齊は、これまで「信達雅」が通訳原則としてもとらえられてきたが、音声を用いる口頭通訳においては「信達雅」のうち、「信」と「達」が最も大事であると主張し、通訳行為のプロセス、すなわちメッセージの聞き取り、メッセージの理解、そしてメッセージを別言語で表現するという三段階のプロセスにおいて、「理解」が最も大事なプロセスであると主張した。そして、通訳者の理解力は必須の能力であると主張するとともに、メッセージに含有する実質的な神髄（である情報）を伝えるために、通訳者は取捨選択をする高い判断能力も必須であると主張した。表現というプロセスに到っては、通訳者が発言者の手振りや表情を真似することまでは不可能でも、語調や感情、語気、声量の大きさや話の速度などは、できるだけ話し手に合わせる事が大事で、そうして初めて発言の精神を聞き手に伝達できたとと言える、と論じた。また、通訳者育成における実践の重要性にも齊は言及している(1983, pp. 36-40)。この論考は、上述した姜の『通訳者の心得』との共通点が見いだせるものの、姜の主張に比べて、通訳者が主体性を発揮する幅をより狭くしている論考であり、より規範性に富んだ論であることが読み取れる。

3.3 考察

本章では中国の通訳翻訳論を歴史的流れに沿って概観してきた。古代の仏典翻訳についての研究は、仏典の口頭翻訳が行われていたため、書き言葉としての翻訳だけではなく、音声を用いた通訳という行為についての論とも捉えることができる。しかしながら、先達の論考は、多くが書記言語による翻訳行為を前提とした論が主流になっている。その中で、姜のように、早くも1950年代に、通訳という音声言語を前提とした通訳規範を打ち出していることは特筆に値する。

歴史をさかのぼると、中国においては、かつて梵語から漢語への仏典翻訳が盛んに行われていた時代から「文」訳と「質」訳の二項対立が存在したことがわかる。

⁴⁴ 齊宗華(齊宗華)のプロフィール情報は百度百科による。<http://baike.baidu.com/view/269809.htm>

仏典翻訳の草創期における当初の翻訳僧は、仏典に対する敬虔の念が深く、経に背いてはならないというおそれを抱いていた。また経験不足もあり直訳法(音訳も多く見られた)を採用していた(馬, *ibid*)。その後、支謙が音訳部分を減少させ、原文の難解度を和らげ典雅な訳語を使い改訳や新たな翻訳を行なったが、原文を大幅に削ったため、元々の意を伝えていない訳文ができあがった。そしてその後竺法护が修正を加えて再び実直な「質」に傾いた訳語が中心となっていった。

衆生に仏教の根付く土台がない時代(草創期)は翻訳作業を手がける人間も外的規範が存在しなかったために、まずは質派(内容重視)から始まり、その後訳文が難解で衆生が受け入れ難いと解ると、質派から文派(文体重視)へ変化していった。

その後、仏典翻訳は最終的に鳩摩羅什に代表される漢文の優位性を生かした翻訳が民衆に受け入れられ、衆生に流布されていくことになる(任继愈, 1981)。

また、民国時代末期から近代中国においては、魯迅のような硬訳を支持する動きもあったが、これは一定時期に限定される動向であった。

現代に入り、中国の翻訳は許淵冲に代表されるように、情意、音律、形式の美という三つの美を備えた翻訳こそが優れた作品であるという翻訳美学を提唱する翻訳者が主流となって進展してきた。近年においても、刘宓庆が1986年に『中国翻译』にて発表した翻訳美学理論『翻译美学基本理论构想』や、傅仲选『实用翻译美学』、奚永吉『文学翻译比较美学』など多数の論考があり(程, *ibid*:pp. 317-325)、翻訳美学を継承する動きは今なお続いている。

翻訳に「美」という漢字を用いて概念を提唱したのは林語堂であるが、程は中国翻訳における「美」の概念について以下のように説明する。

我が国における近現代翻訳美学の発端は嚴復と林語堂にさかのぼることになる。嚴復の「信达雅」の「雅」は我が国の現代翻訳美学の源と見なすことができる。なぜなら、林語堂の「忠实、通順、美」は信达雅の批判という基礎の中で打ち出されたものであり、「美」は「雅」を継承し、発展したものであるからだ。(程, *ibid*:p. 313)

李の論考は1980年に外国語関連学術誌『外语教学与研究』に初出され、後に1983年に通訳論考として通訳翻訳の学術誌『翻译通讯』に投稿、齊の論考は1983年『翻译通讯』同号に投稿されたものである。両名は文化大革命という迫害時期を生き抜き、その後は国策により大学において教務を取るようになった通訳者である。両者の論考からは、①嚴復の

「信達雅」が論の出発点となっている②即時性や、通訳者の音声を介して聞き手にメッセージを伝えるという通訳行為の特徴を前面に打ち出し、通訳行為への理解を促す論調となっている③実践の重要性を提起している、という3の共通点を見いだすことができる。これらは次世代の通訳者、或いは通訳者を目指す者への規範提示の意味で書かれた論考であるとともに、両者のこれまでの人生の一端を感じ取ることができる論考ととらえられる。

また、本章3節で概観した、近代において翻訳論を提唱した人物は、魯迅、林語堂など文学者、啓蒙活動家であり、翻訳行為を通して啓蒙運動を行なった以外にも、多くの文学作品を残してきた人物である。この点、20世紀後半の中国において通訳に奉職してきた李、斉などの通訳者とは背景が異なる。また前者の翻訳論についての翻訳研究論考は多く存在するが、後者の通訳論を題材にした研究論考は、中国でも馬(ibid)以外は今のところ見当たらない。これは、これまでも多くの研究者が指摘しているように、文字として記録に残る翻訳と、音声として記録に残りにくい通訳という特徴が研究にも影響している例ととらえられよう。

本章では、仏典翻訳を行っていた時代の翻訳の規範には、当時の漢語を解する人々に理解しやすくするため、そして一般民衆に受け入れやすくするため、また、当時の世情を考慮し仏法が為政者に迫害を受けずに生き残る道を探るためなど、あらゆる背景から文と質との二項対立が存在したことが示された。そして、清朝から中華民国初期に行われた文学翻訳に関しても、目標言語である中国語の美文翻訳から人々の意識改革を行うという林紓の翻訳観と、国外の思想、文化を起点言語に描かれているままに民衆に伝え、思想改革を行うという魯迅の翻訳観、そして目標言語重視の美文訳と起点言語重視の硬訳との接点を探り、翻訳者の責任という概念を提唱した林語堂の翻訳観など、どの時代にあっても中国においては翻訳通訳に関する規範が常に問われていたと言える。

実際の現代翻訳者、通訳者の規範意識には、果たしてこれらの論の影響が見られるのであろうか。次章では姜椿芳と李越然の言説や出自などの背景から、近現代の通訳者の存在する規範意識を考察する。

第4章 近現代中国における通訳者の規範論—時代考証と言説分析

通訳者はコミュニケーション行為の証人であり、外交交渉の証人でもある。中国では、これまで外交通訳に携わった通訳者が、通訳行為を通して自らの目で、リアルタイムで体感した外交交渉の様相を口述史として出版するなどのケースが多く見られる。通訳翻訳領域の学術誌である『中国翻译』においても、通訳者・翻訳者の口述史としての意味合いを持つインタビュー記事が定期的に掲載されるなど、近現代における中国共産党の外交記録を通訳者・翻訳者の語りから後世に残そうという取り組みが行なわれている。

中国におけるオーラルヒストリー研究はいまだ発展途上段階にある。これは、中国には憲法に言論の自由が謳われているものの、現実には中国共産党一党による政治体制が続いており、言論の自由にも一定の制約が存在することに起因する。過去においても現在においても、政治体制など社会的歴史的要因から、口述を残すことが一定のリスクを伴うものであることは容易に想像できる。

安徽省出身で日中戦争終結前に米国コロンビア大学へ留学し、長年米国で教鞭をとった歴史学専攻の唐徳剛は、米国ニューヨークにおいて中国近代口述史学会を設立し、これまでオーラルヒストリーによる歴史研究を進めてきた第一人者である。中国近代口述史学会は2007年末、中国の特別行政区である香港において学術的非営利団体として正式登録を認められ、これまで中国を含む各地で口述史研究会を主催している⁴⁵。これまでの研究対象は、その多くが抗日戦争で戦った元兵士、日本軍の元捕虜の口述であるが、唐徳剛は中国近代の翻訳家でもあった胡適の口述を『胡適口述自傳』⁴⁶として出版するなど、今日、歴史上の人物として知られる要人のオーラルヒストリーも記録として残している。しかながら、これらの書籍は台湾など、全て中国大陸国外で出版されている。

後述する姜椿芳、李越然と同様に、中国でロシア語の外交通訳に携わった師哲（1905年-1998年）の『我的一生一師哲自述』⁴⁷など、近年中国で出版されている通訳者の口述史は、その多くが外交史研究の位置付けをされており、通訳者は中国共産党の外交交渉の証人という立ち位置で自身のヒストリーを語っていると考えられ、それゆえに語りにはプロパガンダ的要素が含まれていることは否定できないであろう。日本の外交通訳者は、外交通訳

⁴⁵ 中国近代口述史學會編輯委員會編(2010).『唐徳剛口述歴史：唐徳剛教授逝世周年紀念文集』による

⁴⁶ 第一版は台湾の傳記文學出版社から1981年に発刊。1993年に中国上海の華東師範大学出版社から発刊されている。

⁴⁷ 師哲口述・師秋朗筆録(2001).『我的一生一師哲自述』人民出版社。

で知り得たことは口述せず、「秘密を墓場まで持って行く」と言われており、この点は日本との大きな違いといえる。中国では、かつて要人の通訳を行っていた通訳官が後に外交官として活躍するケースが多く、その役割意識が明確に分かれていないことが、口述を残しても倫理的に問題がないとされる要因と推察されるが、口述が出版された時点で、それは国威発揚のための口述であるという性格を帯びることになる。

しかし、これらの口述には、通訳者がどのような姿勢で通訳に携わり、結果としてどのような外交が展開されていたか等の詳細が描写されており、中国における通訳者の規範意識を浮き彫りにするには貴重な資料といえる。

本章では、第3章で述べた中国における通訳者の先人である姜椿芳と李越然の言説から、その時代考証を行い、言説に現れるそれぞれの通訳者の規範意識を抽出することを試みる。

4.1 姜椿芳

4.1.1 略歴

前章で述べた通り、姜椿芳は中国におけるロシア語の通訳・翻訳者であり、後に上海外国語学院（現・上海外国語大学）の初代学長となった人物である。中国大百科全集の編著者としても知られる。

まず、姜椿芳の略歴⁴⁸を紹介する。

姜は1912年4月江蘇省の現在の常州市で誕生、1919年春から私塾に入り学問を開始した。当時の中国は五四運動⁴⁹の真最中であつた。1921年中国共産党が上海にて結成された頃、姜は通っていた私塾の閉鎖に伴い、3度転校を余儀なくされている。1924年より、姜はキリスト教教会に併設される東呉大学附属第十二小学校⁵⁰に入学した。入学時の年齢は12歳であつた。

1928年、高等小学校を卒業した姜は、在学中に学生の代表として北伐運動にも参加している。当時の校長の勧めでキリスト教に帰依したのはこの頃であつた。8月、失業していた父親が身を寄せているハルビンに姜は母親とともに赴き、東省特別区⁵¹の第三中学の一年生として勉強する傍ら、中国籍ロシア人の教師に師事し、一年間毎日1時間ロシア語を勉強した。この年の冬、ハルビンで行なわれた学生抗日運動に参加し、抗日意識に目覚め、

⁴⁸ 姜椿芳の自伝である『怀念集』（1997、奥林匹克出版社）から引用。

⁴⁹ 五四運動とは、1919年5月に、主に北京の学生を中心としたデモ行進から発展した反帝国主義、反日運動である。詳細は本論3章4節を参照されたい。

⁵⁰ のちに愷楽（恺乐）小学と改名。

⁵¹ 当時の中華民国特別行政区、現在の黒竜江省と吉林省を指す。

自身の思いを執筆し、市が発行する新聞に投稿するようになる。翌年、中学2年で学費が払えず退学を余儀なくされた姜は、就職活動を開始、まだ学び足りないと考えていたロシア語だが、語学で身を立てていこうと決意し、当時張作霖爆破事件後の混乱状態にあった中東鉄道に属する事務所でロシア語の筆耕係として働く。姜は当時の仕事を通して、社会科学領域の書籍を読む機会が増え、政治意識が芽生えてきたと語っている。中国とソ連の和解の後、姜が働いていた事務所は非合法であるとして解雇、失業する。その後、教会の牧師の紹介により光華通信社でロシア語の翻訳に携わるようになったが、通信社の責任者であり、国民党党员であった刘天佑と、ニュース記事の扱いに関してしばしば衝突するようになる。この頃から徐々に左寄りの思想に傾倒していった、と姜は振り返っている。同じ職場の同僚であった刘天佑の弟、刘天任は左翼思想を持った人物であったことから、姜は刘天任に信頼を寄せ、彼の紹介で様々な文芸書籍に触れることができたと語る。1931年に中国共産党青年団に入団、翌年中国共産党に入党。その後、中国共産党青年団のハルビン市宣伝部の部長や満洲省（当時）の宣伝部部長等を歴任した。1936年ころ上海に赴きアジア映画会社で通訳翻訳を担当。1938年に中国共産党上海局で文化委員会文化相処分の書記に就任している。1941年にソ連のタス通信等の協力のもと、日本の占領下に置かれていた上海で『時代周刊』を発刊し、編集作業に携わった。1945年に『時代日報』を創刊した。

中華人民共和国が成立した後、姜は上海ロシア語学校、現在の上海外国語大学の初代校長に就任。その後は上海市文化局対外連絡處處長や、中国共産党中央マルクス・レーニン著作編集局の副局長並びに顧問など要職を歴任した。しかしながら、文化大革命による迫害に遭い、秦城監獄に7年もの間投獄され、1975年に釈放された。釈放後、1978年には『中国大百科全集』の編集委員副主任を務め、中国大百科全集出版社の設立に尽力、編集長を務めた。1982年には、現在の中国翻訳協会の前身である中国翻訳工作者協会の会長となり、政治分野にあっても、第5回、第6回の中国全国政治協商委員会の常務委員を務め、1987年死去。

4.1.2 姜の通訳論

姜は度々「ロシア語が自分と家族の生活を支えた」と語っているが、通訳翻訳の訓練は一切受けておらず、ロシア語を学んだ期間は一年間だけであった。通訳翻訳スキルは、実際の仕事現場での実務を通して習得していたことが語られている。通信社での仕事は、大量の新聞記事を短時間で読み、それを当日中に訳すという仕事であった。2、3時間の短い

時間に 2000 文字の新聞原稿を訳す毎日の繰り返しの中、姜はニュースとして伝えられる文字は読みやすくしなければならない、と心を砕いたという（姜, 1997, pp.172-173）⁵²。

私がロシア語を学習し、通訳・翻訳を始めたころ、そのレベルはとても低く、特に会話能力に劣っていた。もともと口下手であった私は、長期的に任務のため口を開いていくことによって、徐々に話すことに慣れていった。業務に必要なために自分を追い込んでロシア語の会話を勉強したのである。アジア映画会社に勤めていた際には、ソ連人との交流もあり、ロシア語で会話をするチャンスは非常に多かったので進歩が見られたのである。1949 年に上海が解放され、中華人民共和国が建国した当初、ソ連から代表団や専門家がわが国に多数訪れたため、私は第一線で通訳の仕事を行った。しかしながらその頃のレベルは全く足りなかったと自覚していた。党の任務を遂行するため、仕方なく覚悟を決めて業務を行なったのである。

（姜, *ibid.*: pp. 184-185）⁵³

姜は文化大革命が起こる以前に、さまざまな論文を発表している。中国の CNKI 学術論文データベースの検索結果からは、1956 年から 1961 年までの 6 年間で少なくとも 16 篇の論考を発表していることがわかる。内容は「中国文字の改革に関する論考」、「東ドイツ訪問記」、「中国におけるマルクス主義」「中ソ同盟と世界平和」などである。1950 年代前半には旧ソ連の社会システムに関する紹介文や当時の共産圏国の事情を『历史研究（歴史研究）』などの刊行物に論文を発表しており、50 年代後半から 60 年にかけては『世界知識（世界知識）』に多くの社会主義革命に関する文章を寄稿している。

文化大革命により拘留され釈放されたのちも、姜は再び多くの散文や寄稿文を発表している。同じく中国の CNKI からの検索結果から、1978 年から 1987 年の 10 年間で 29 篇の論考、散文を発表しているが、内容を分析すると、後半生をかけて取り組んだ百科全集についての論、翻訳通訳に関する所感、芸術に関する散文など、直接政治に関わる発言はみられず、多くがソ連文学や辞書編纂の意義、京劇俳優に関する所感など、文化に関する語りである。また、1983 年から『翻译通讯』⁵⁴が発刊されたのちは、翻訳・通訳に関する文

⁵² 原典は『語言教学与研究外国文学与研究版』1982 年第 2 期。

⁵³ 原典は『語言教学与研究外国文学与研究版』1982 年第 2 期、訳文は筆者による。

⁵⁴ 現在の『中国翻译』の前身である通訳翻訳領域の学術論考集。出版元は中国翻译工作者协会（現在の中国翻译协会）。

献も数多く残している。1984年発表の『翻译工作新貌』⁵⁵では、中国のこれまでの翻訳の歴史に触れ、中国革命が勝利した理論的基盤となったものはマルクス・レーニン主義であり、共産党の翻訳に対する重視政策あつての革命勝利であると言及している(姜, 1984, p. 2)。そのうえで姜は、今後の中国社会主義の現代化建設を進める上で、通訳翻訳の役割はより重要性が増しており、質量ともに充実を図るべきであると訴えている。中でも今後は質のレベルアップが最重要課題であるとし、これからの通訳翻訳者は外国語、中国語、専門知識ともに高度な能力が求められ、尚且つ正確に通訳翻訳を行うという規範を堅持すべきだ、と述べている。また、姜は今後の通訳翻訳のあり方として、以下のように論述している。

厳復ら翻訳界の大先輩は「意識」を翻訳のスタイルとした第一世代である。魯迅が提唱した「守信不雅(美しくなくとも原文に忠実に訳すべき)」とのスタイルは第二世代のものである。1949年の建国以降の翻訳界はいわば第三世代である。第三世代の翻訳スタイルは、厳格に原文にのっとり翻訳を行い、原文メッセージに付け加えたり差し引いたりしてはいけない。(訳文の)美しさ、分かりやすさのために原文から離れることをよしとせず、中国語の表現は分かりやすく文才に優れ、原文の風格をも伝えなくてはならない。これは意識でもなく、直訳でもない、真の等価翻訳である⁵⁶。(姜, *ibid.*: 1984, p. 3)

『通訳の心得』において、「通訳は編集も兼ねる」としてきた姜だが、本項で取り上げた論においては、原文のメッセージは「付け加えたり差し引いたりしてはいけない」としている。その上で、中国語の表現はわかりやすく文才に優れ、原文の風格を伝えなくてはならない」とは、古代の鳩摩羅什の翻訳を彷彿とさせる論であり、「精神を生かして意を傳達する」という傳雷の「神似」論を想起させる。

『通訳の心得』は文化大革命以前に発表された論であるため、文化大革命以降、姜の通訳翻訳規範に変化があったことを示した例といえる。また、文化大革命以降の論説では通訳者翻訳者また辞書編纂者としての政治的見解は語っているものの、一個人としての政治的見解はまったく語っていない。これらの事実は、社会に存在する政治体制や政治思想などが通訳翻訳の規範に影響することを示唆している。

⁵⁵ 初出は『红旗』1984年第18期。

⁵⁶ 訳文は筆者による。

4.2 李越然

4.2.1 略歴

李越然は 1927 年中国黒龍省生まれのロシア語通訳者である。日本の侵略下にあった中国東北部で幼少期を過ごした。父である李芳中がロシア語通訳者であったため、幼い頃から父とロシア人がコミュニケーションをとる姿を見て育った。通訳者である父の教えのもと、李越然は「4 歳からロシア語が話せるようになった」(李, 2001, p. 1)という。日中戦争が日本の敗戦で終結し、日本軍が東北より撤退した 1945 年秋、李は単身ロシアに留学する。留学はソ連との地下工作に携わっていた李の父、そしてソ連側の意向であった。ソ連で約半年間、ロシア語と中国語間の通訳翻訳とともに、李はラジオのオペレーションなどの技術、そしてマルクス・レーニン主義など政治イデオロギーを学び、1946 年春、中国に帰国する。その後李は 1948 年からハルビンの中ソ友好協会で数ヶ月通訳翻訳業務に携わり、東北鉄道の通訳者として主に中ソ政府の通訳に携わるようになる。以後 1965 年まで劉少奇、毛沢東、周恩来など中国要人とソ連高官の外交交渉、国際会議などの通訳を担当した。

文化大革命前夜、中国はソ連との対立が決定的となった 1965 年、李は突如北京第二外国語学院講師への転職を命ぜられる。その後 1967 年 12 月、ソ連のスパイであるとの嫌疑をかけられ、外部から隔離され審査を受けることになる。拘留期間は 7 年間ものあいだに及んだ。逮捕、拘留に対し、李は「当時は不幸な出来事と考えていたが、実は不幸中の幸いだった。もし拘留されていなかったなら、おそらく今日まで生きてはいられなかっただろう」(ibid.: p. 243)と語っている。このほか、李は、拘留生活における理不尽な矛盾に満ちた尋問や、妻、子どもたちなど、李の家族が受けた苛酷な差別的出来事を自身の回想録⁵⁷に綴っている。北京第二外国語学院の副院長、中国翻訳協会の副会長全国人民代表大会の外事委員会顧問等の要職を歴任した。2003 年死去。

4.2.2 李の通訳論

李は 1980 年に『外语教学与研究』第 02 期に寄稿文をよせ、その中で、通訳者の訳出は『準、順、快』⁵⁸を目指すべき、と主張した。これ以外にも李は多くの文章を発表し自身の論考を残しているが、いずれも文化大革命以後のものである。李は姜と異なり、文化大革命以前は通訳実務に専念していたため、研究論文を残していなかったと思われる。1980 年以降、李は 21 篇の文章を記しているが、その多くは中国指導者、毛沢東、鄧小平の外交

⁵⁷ 李越然(2001).

⁵⁸ 中国語表記では「准, 順, 快」となる。

回顧録及び自身の通訳回顧録である。1978年以降、中国は改革開放政策を実施、海外との交流のため、政治分野だけでなく様々な分野において通訳・翻訳のニーズが高まっていた。そのため、80年前後から通訳に関する「指針」の意味での「規範（規範）」を確立することが、国づくりのための通訳者育成とともに急務であったことが推測される。李は「準」について、「最も大事であり通訳の前提である」（李, 1980, p. 51）として、以下のように述べている。

ある場面では発話者が話した話はとても少ないかもしれない。しかしそこに重要なメッセージを含む場合もある。こういったメッセージほど慎重に訳すべきである。[中略]
「準」の実現のため、まずは慎重に心を配るべきである。「順」は「準」の前提のもと、語句の選択に注意を配り、修辞に凝るとともに、中国語風外国語や外国語風中国語になってしまわないよう気をつけ、且つ訳文は簡潔で解りやすくするべきである。[中略]
「快」は、タイムリーに、という意味であり言葉の流れを早くするという意味ではない。現場に即した、討論されている話題の性質などを鑑み、スピードを上げなければいけないと思われる場合は速度を上げ、ゆっくり訳出した方が良い場合はそのように行う。一般的に、通訳はその場で話されている問題や事象をはっきりと表現しなければならない。口ごもる、のろのろと訳すなどして、周りを苛立たせてはいけない。（李, *ibid.*: pp. 51-52）

次に、上述した規範意識が、李の実際の訳出にあらわれた簡単な訳例を挙げてみたい。ここでは「準」の例として、李が初めて毛沢東の通訳を行った時のエピソードをとりあげる。以下は1992年中国共産党のインタビューからの抜粋である。

「(毛主席は) ああ、通訳者さんですか、ではソ連の同志に伝えてください。我々はとても感謝しています。道中お疲れ様でした」と。これは一見普通の挨拶言葉ですが、私にとっては一つの試験だったのです。「お疲れ様でした」これは通訳の仕方が悪ければ、ロシア語では「あなたたちは疲れている」と理解されてしまい、不適切であると考えました。私はそのとき、「皆様の奉仕と労働に感謝します」と訳しました。ソ連の同志はとても喜び、「毛主席にお目にかかれて感謝しています。列車の中で業務をするのは当然のことです」と即座に答えられました。そのあと、毛主席とソ連の同

志は和やかに懇談されました。この仕事（通訳）のあと、私は瀋陽の鉄道局から北京に転勤となり、ソ連顧問団の仕事を行なうことになりました。

“噢！翻译，那好啊，请你告诉苏联同志，我们很感谢，他们一路上辛苦了”。这是一句普通的寒暄语，可对我来说却是一次考试。“辛苦了”，如果翻译不好，在俄文上会被理解为“你们累了”，这样就不确切了。当时我译成“谢谢你们的服务和劳动”后，苏联朋友很高兴，忙说：“感谢毛主席接见我们，我们在火车上做了点工作是应该的”。然后毛主席和苏联朋友作了亲切的交谈。这次工作以后，我就从沈阳铁路局调到北京，被派在苏联顾问团工作。⁵⁹

この訳例から、李が通訳規範と考える「準」とは、語句を忠実に訳すことではなく、言語間の差異と文化的差異を瞬時に汲み取り、尚且つ話し手と聞き手の状況をも瞬時に判断し、その場にふさわしい的確な訳を行なうことを意味すると推察される。

また、李はこの「通訳試験」に合格したことから、北京へ栄転し、より重要な通訳を任せられるようになる。

このエピソードは、通訳者はさまざまな通訳経験から、通訳使用者である話し手と聞き手の「期待規範」に即した通訳を行なうようになり、その積み重ねが通訳規範を形成していく可能性を示唆する一例である。

4.3 考察-近現代通訳者の規範意識

姜も李もともに新中国成立後、通訳という自身の役務を通して、中国の外交を支えてきた功労者といえる。

両者とも人生の前半においては外交通訳者、そして文化大革命という政治的動乱に遭い、辛くも難を逃れ、その後は教育者として次世代の通訳者翻訳者を育成する道に入っている。

王(2013)の研究においてその研究対象とされた現代の外交通訳者も、無論、国のおかれた環境や外国との関係性、通訳を行う環境など種々の条件が当時とは格段に異なっているが、外交を陰で担う、という役割に関しては、姜や李と同様であると見てよいだろう。

ここで再度、姜の『通訳の心得』を確認しておきたい。

⁵⁹ 出典：『共产党新闻』<http://cpc.people.com.cn/GB/69112/70190/70193/5230867.html>

初出は、张素华・边彦军・吴晓梅（1992）『说不尽的毛泽东:名人学者访谈录』。訳は筆者による。

1. 事前準備をしっかりと行う
2. 話し手と事前に打ち合わせをしておくこと
3. 話し手の論理的ではない混乱したスピーチも整理して段落毎にわけて論理的に訳すこと
4. 通訳は編集も兼ねること
5. 要点をおさえて数字などは漏らさない（メモを取る）
6. 第一人称で訳し、話し手の語気、精神、感情、表情、姿勢なども極力まねて訳すこと

『通訳の心得』のうち、1と2は通訳現場ではなく、事前準備に関する心得だが、これら二項目以外の心得は、王(2013)の研究において、中国の外交通訳者のシフト（ずれ）に共通性を見つけることができる。王の分析で明らかになったのは、通訳者のシフトは①内容の補填、②内容の省略、③内容の修正が見られ(pp. 97-117)、王はこれらのシフトが起こる要因として、通訳者は首相記者会見での通訳に臨む際に「論理（ロジック）の明晰化をはかる」「メッセージの内容を具体化させる」「話の意図を強調する」(pp. 118-119)、という「実際の規範」を挙げており、「忠実」「中立」など通訳者の語りに示された「規定性規範」とは異なっている旨を指摘した(pp. 121-125)。また、王は外交通訳者に一般的に見られる訳出姿勢として、ベテランの外交通訳者、施燕华(2007)の下記インタビュー内容を挙げている。

通訳を行うとき、(話者である)指導者⁶⁰が言い間違いをすることがあります。その際、通訳者は誤りを是正するという働きをします。自動的に修正するのです。言葉の中にふさわしくない語句があった際には、それも修正します。通訳というのは解釈という任務も負うのです」(王, p. 122)

4.1.2 項で前述したとおり、姜は文化大革命以降、当該心得とは異なる言説も残している。しかしながら、現代中国において外交を担う通訳者には、『通訳の心得』が、既に「規定性規範」と「実際の規範」に現れていることが王の研究と本章を通して示された。これは外

⁶⁰ 原文は「领导」。ここでは中国の国家幹部を指す。

交通訳という領域の通訳には、かつての外交通訳者の残した『心得』を体現する規範意識がすでに内在化していることの証左であり、そして、中国の外交通訳者が主体性を発揮する存在であったことを示す一例である。

以上、本章では通訳のあるべき姿としての「規範（規範）」を提示した二人の近現代中国における通訳者の論と背景を概観し、これら通訳論が現代外交を担う通訳者の「実際の規範」として現れていることが示された。次章では、中国語、日本語を母語とする通訳者のオーラルヒストリーを通して、「規定性規範」と「実際の規範」を検証する。

第5章 言説から見る現代日中通訳者の規範意識

前章では、新中国誕生後、文化大革命前まで現役通訳者であった姜椿芳、李越然という二人の外交通訳者の語りを取り上げ、近現代の通訳論と現代外交通訳者の規範意識との関係を検証した。

本章では、現代の中国語-日本語の通訳者を調査協力者として、それぞれのオーラルヒストリー・インタビュー・データの分析を行なう。調査協力者である通訳者のオーラルヒストリー・インタビューは、口頭により一対一で行ない、音声データを文字におこし、各通訳者の語りに現れた規範意識を分析した。分析の焦点は以下の8点である。

- 1) 通訳者を目指した動機
- 2) 言語習得の環境と通訳訓練の有無
- 3) 通訳訓練の内容
- 4) 訓練前と訓練後の変化
- 5) 普段請け負っている通訳業務形態と内容、その理由
- 6) 通訳者の役割観
- 7) 通訳を行なう上での規範としていること、その理由
- 8) 規範に矛盾する通訳行為（自覚あり、なし）とその背景、理由

5.1 調査協力者とインタビュー設問

5.1.1 調査協力者

本論の調査協力者は、いずれも日本語-中国語の会議通訳者である。内訳は中国語を母語とする通訳者 A、B、C の3名、日本語を母語とする通訳者 D、E、F、の3名である。A、B、C の各氏には2010年から2012年にかけてインタビューを行った。D、E、F の各氏へのインタビューは2011年に行った。インタビュー時の使用言語は協力者の母語で行なうことを基本とした。それゆえ、A、B、C 各氏とは基本的に中国語で行うはずだったが、通訳例などを語るときは日本語で説明的発言が行なわれるなど、日中両言語交えてのインタビューとなった。日本語母語話者である D、E、F 氏へのインタビューも通訳例は中国語で説明がなされたため、若干ではあるがこちらも日中両言語交えてのインタビューとなっている。

以下に各氏のプロフィールを示す。これらのプロフィールはインタビュー時（2008 年～2011 年）のものである。通訳者の選択方法は「機縁法」（桜井，2002）を用いた。

[中国語母語話者]

A 氏—女性、40 代前半。中国北京市生まれ。大学での専攻は日本語。大学ではガイド通訳を主に学ぶ。日本留学時に選択した専攻は歴史学。中国に帰国後、通訳業者に登録し 1996 年から通訳者として仕事を開始。現場のたたき上げで通訳技術を取得。現在は研究者としての活動が多く、会議通訳は月 2 回程度にとどまる。中国北京市在住。

B 氏—女性。50 代後半。母語は中国語。大学の専攻は日本語。実父は日中交流事業の先駆的存在の政治家である S 氏。80 年代初頭より日中間のあらゆる通訳に従事。1992 年に通訳翻訳会社を設立し、自らも通訳者として稼働する傍らエージェント業務を通して通訳者育成にも携わる。現在は企業経営者として活躍。

C 氏—女性。30 代前半。母語は中国語。中国陝西省生まれ。大学時代に日本語を専攻し、在学中に一年間日本へ公費留学。帰国後は母校の日本語学部の講師として 6 年間校務に携わり、そのうち一年間は在外研修として日本の大学院で学ぶ。後に日本人と結婚し、日本で中国語教師として働きながら、通訳養成所で通訳訓練を受ける。2010 年よりフリーランス通訳者。現在は母校である通訳養成所の講師も務める。

[日本語母語話者]

D 氏—女性。50 代後半。母語は日本語。日本生まれ。祖父は日中長期貿易関係締結に尽力した政治家。幼少期より祖父が推進する日中間事業の関係で中国・中国人との交流の機会を多く持つ。大学の専攻は日本文化。大学時代にダブルスクール¹で中国語学習を開始し、草創期の公費留学生として北京に 2 年半留学。70 年代後半に帰国。以後今日まで日中交流の第一線でさまざまな通訳業務に従事する。現在は主に随行通訳に従事。

E 氏—女性。40 代後半。母語は日本語。東京都生まれ。中学時代から中国語の学習を始める。大学時代の専攻は中国文学。大学卒業後、中国の大学へ 2 年間留学。帰国後すぐに通

¹ 和製英語で、同時期に二つの学校に通う「二重通学」を指す。

訳者として稼働を開始。一時期は技術専門職を目指して通訳の仕事を中断し、気象協会に務めるも、後に再びフリーの会議通訳に従事。気象予報士や防災士の資格を持つ。通訳歴は約 20 年。

F 氏—女性。50 代前半。母語は日本語。日本生まれ。幼少期から漢文などに多く触れる環境で育つ。大学時代は中国哲学を専攻する。ダブルスクールで中国語を習得したのち、卒業後は香港の大学へ留学。帰国後、商社の社内通訳者・翻訳者として稼働。通訳養成所での訓練を経た後に会議通訳者としてフリーランスの道に。現在は会議通訳者、大学教員、研究者に従事。

5.1.2 インタビュー設問

筆者が事前に用意し、各調査協力者に送付したインタビュー設問は以下の通りである。

- ①通訳者になるまでの貴方のこれまでの経緯をお教えてくださいか。
- ②外国語（中国語、もしくは日本語）をどこで何年学びましたか。
- ③通訳訓練を受けたことがありますか。それはどこで、何年学びましたか。
- ④現在までの通訳歴。
- ⑤現在行っている通訳の形式と頻度を教えてください。
- ⑥仕事を受ける際の判断基準はありますか。
- ⑦対面通訳の現場において二者の間で通訳者はどのような立ち位置にあると思いますか。
- ⑧通訳の現場で文化的差異を感じることはありますか。その場合、訳出の際、どのように対処しますか。
- ⑨通訳する場の違いにより通訳者の役割に違いがあると思いますか。
- ⑩貴方にとって通訳者の規範とは何ですか。
- ⑪貴方が考える通訳者の役割とは何ですか。

この設問はインタビューの了解を得た後、調査協力者へ事前にメール添付にて送付した。実際のインタビューは筆者が各協力者の指定した場所に赴き、行なった。当日は設問や時間にはこだわらず、協力者が自由な語りを行えるように配慮しながら進めた。インタビューは録音し、後日書き起こしを行った。必要に応じて日本語に訳した。調査協

力者には書き起こし、翻訳ともに確認してもらい、使用の了解を得た。

5.2 通訳者のオーラルヒストリー

5.2.1 A 氏のインタビュー

A 氏は中国生まれで中国語を母語とする通訳者である。A 氏へのインタビューは 2010 年 8 月に A 氏自宅近くのレストランの個室で、主に中国語で行った。本論で使用したデータは筆者が日本語に翻訳したものだが、元々日本語で発言された箇所はそのまま表記する。

A 氏は高校を 16 歳で卒業し、北京第二外国語大学に入学した。大学入学後に日本語を専攻し日本語と出会う。北京第二外国語大学は今でこそ通訳ブースも併設し、通訳訓練コースもある大学として知られているが、A 氏が学んでいた当時は観光ガイドを主に養成する大学として知られており、正式な通訳訓練は受けなかったという。大学在学中に日本語能力を表彰され、大学 2 年の時からアルバイトで観光ガイドを務め、また、時には大学側に依頼されて通訳を行うなど、通訳者として経験を積んでいた。

A 氏は大学卒業後、北京外国語大学内に併設された修士課程である日本学研究センター、通称大平学校²で引き続き日本語学習を続けることとなる。A 氏は教授陣がほぼ全員日本人という環境のもと、日本語教育と日本研究に 2 年間携わり、研究と並行して引き続き通訳を続けた。日本には修士課程在籍時に留学で訪れている。日本留学から帰国した後、大学の先輩であり、通訳の先輩である B 氏から依頼を受け、初めて金融に関する会議の通訳に携わった際、自身の実力のなさを痛感したという。

A：その時は今みたいに外国語に精通している人は多くなかったので…、それで、私が呼ばれたんです。呼ばれて、通訳がまったくできないことに初めて気がついたんですよ。

筆者：ええ？

A：私の理解している通訳と同時通訳（日本語）は、まったく違っていたんです。なので、（依頼した）B さんは怒ってしまっただけ。

筆者：ええ、そうですか。

A：ええ、B さんは「あなたね、まったくこんな…（舌打ち）」

² 大平学校とは、中国における日本語・日本研究、日本との交流に携わる人材の養成を目的として、大平正芳首相(当時)と華国鋒主席(当時)の合意に基づき、1980年に設立された「日本語研修センター」を指す。当該センターは設立の5年後に、国際交流基金と中国教育部共同で、北京外国語大学内の「日本学研究センター」として改めて設置された。

筆者：でも二外³では通訳を…。

A：我々が学んでいたのは旅行通訳でしたから。

筆者：旅行通訳？

A：そう、なので、一般的に言う「観光案内」（日本語）なら全く問題なかった。少し学術的な内容になってもそれも問題なかったでしょう。でも、その頃、中国人は知らなかったんですよ。92年ですから。よく憶えています。日本から帰国したばかりの頃で。92年の10月、釣魚台⁴で会議があったんです。その頃、中国人で「株式」を知っている人間なんかほとんどいなかった。

A氏：那时候，没有像现在这样，有这么多懂外语的人。不管怎么样，就把我叫去了。叫去了，才发现我完全不能干。

筆者：真的？

A：我知道的那点翻译，跟同声，日本語：同時通訳，完全不是一回事。所以她很生气。

筆者：是吗？

A：嗯。她说，“你，你这样，啧”。

筆者：可是您在二外读书的时候，

A：我们学得都是旅游翻译。

筆者：旅游翻译？

A：对。所以，一般的“観光案内”（日本語）一点问题都没有。像学习的内容，稍微学术点的东西，也没有问题。但，那时中国人不知道什么，92年，我记得很清，我刚从日本回来的时候，92年的十月份。那时刚在钓鱼台开会。那个时候，没有几个中国人知道什么叫做股票。（中国語原文）⁵

その後、B氏は翻訳エージェント会社を立ち上げ、A氏を通訳者として使い続けるが、それは同時通訳者としてではなく、会議以外の逐次通訳が主であった。そして、その後A氏に再び同時通訳を行なうチャンスが到来する。ある会議でA氏はB氏、大学の先輩であるY氏ともに三人で同時通訳を行う。その際、聴衆からの感想にA氏は落胆する。

A：その時は、YさんとBさんと私で。私の担当部分は少なかった。その時は、確か…、

³ 北京第二外国语学院（北京第二外国語学院）を指す。現在は北京第二外国语学院（北京第二外国語大学）と改名。

⁴ 中国北京にある国賓館を指す。

⁵ 以後、インタビューの原文を日本語訳文の後に記すことにする。

なんていったらいいか……、仕事自体は少ないんだけど、毎回みんな新しい内容で、例えば……、その時のテーマは会計基準だったんです。国際会計基準などのね。それも同時通訳。あまりうまくいかなかった。休憩時間に、別の人が、彼女たち（B、Y 両氏）は知り合いが多かったんですが、私を知っている人はいませんでした。コーヒースタイルのときに、ある方が B さんに「君の訳と Y さんの訳は、我々みんな聞いてわかるんだけど、もう一人の通訳者の訳はわからないね」と言ったんです。その時はとてもショックでした。

那么，就是，就是 Y，B，加上我。我呢，就做一小点。那时，我觉得做的事比较……怎么说呢？工作比较少，但每次都是新内容。比如说……那个时候是来讲会计准则。国际会计准则的那种，而且是同传。好像做的效果不是很好。等我们休息，别的人，他们认识很多人，没人认识我。我们都站在那儿喝咖啡。然后就有人跟他讲，说你讲的，和杨晶讲的，我们都听懂了。另外一个翻译讲的，我们就没有听懂。那个时候我很难受。

自信をなくしかけた A 氏だったが、その 2 年後、ある会計研修プログラムの研修通訳を一ヶ月間 B 氏とともに担当することになる。もともと研究テーマが日本の歴史であった A 氏にとって、財務会計などの領域は得意ではなく大変な仕事だったようである。しかし、この長期的な通訳業務を通して「やっと経済分野に少し明るくなったね」と B 氏から褒められたことを語った。

その後、94 年だったと思いますが、えーと、95 年ですか。95 年か 96 年、そのころだったと思いますが、日本開発銀行、JDB が、世界銀行の援助で中国に開発銀行を設立して銀行員の訓練を行っていたんですね。そしてそこで会計制度や帳簿のこと、会計監査とは何ぞや、とか研修をしてたんです。そのときそこで私と B さん、2 人で協力して通訳をしました。B さんはあまり時間がなかったのですが、研修期間は毎回 2 週間ほど続きました。夏休み中にも 4 週間ほど研修がありました。その時は私が大部分を担当したんです。毎日通訳しなければいけませんでした。研修生の人たちと香山に泊って毎日やりました。そしてその後、B さんから「少しは経済にも詳しくなったんじゃないかな」って言われたんです。私の専攻はもともと歴史ですからね。[中略] このときでした。B さんはこれまで私に面と向かって、私を褒めることはありませんでしたが、このとき、B さんは「今後（A 氏は）ひとりで通訳できます」と人に伝えて

くれました。

然后，大概是在94年吧，95...应该是95年。忘了是95年、96年，反正是两年。日本开发银行，JDB。JDB利用世行的钱，给中国刚刚成立的开发银行培训员工。然后在那里给他们讲什么叫做会计，什么叫做账簿，什么叫做会计审查。在那里，我跟孙老师，我们俩合作，她没有很长的时间。每次上课要两个星期，一个暑假总共有四个星期的课。那么我就坐了大部分。据他说，那一次做完了。因为每天都要做，就跟他们住在香山那个地方，每天都做。那次以后，他说好像懂点经济了。因为我是学历史的，所以。就这一次。他从来不跟我讲，当着我面，他从来不表扬我。但就这一次，他跟别人讲，「以后，她就可以独立做了」

A氏は「私たちの時代には訓練コースはありませんでした。ですので、先輩の通訳を見て、見て、聞いて、どのように訳すのか聞いて、通訳を憶えました」と答え、そして現在は母校で数人の先輩同業者と同時通訳コースを受け持っている、と語った。

これらの発言は、A氏にとって、先輩が同席する実際の現場での経験が通訳スキルを体得する場になっており、先輩やクライアントからのフィードバックは、「どのような通訳スキルを身につけるべきか」、そして「通訳者としてどのように訳すべきか」と、通訳規範を意識するようになっていったことを示す語りである。

中国の通訳者の業務獲得は日本と異なり、ほぼ「クライアントとの直接取引」であるとA氏は説明する。現在では、中国にも日本と同様、通訳エージェントと呼ばれる業種の会社が多数存在している。しかし、A氏は「オファーがあるので履歴書を送ると言って連絡しておきながら、送るとその後は連絡も来ない。我々の履歴を利用してクライアントから会議通訳案件を請け負っておきながら、実際の会議には我々ではなく安価に使える別の通訳者を派遣する」など、問題があるエージェント業者が多いと指摘している。かつて筆者がインタビューを行なったA氏の同業である中国語母語話者の通訳者も、エージェント業者に対してA氏と同様の問題提起を行なっている⁶。それゆえ、中国における通訳依頼は信頼できるクライアントからの直接取引となり、この点も日本の事情と大きく異なる。クライアントからの直接取引が行なわれると、通訳パフォーマンスに関するフィードバックもエージェントを通すより比較的容易に行なわれる可能性があり、またクライアントの要望やどのような通訳が好まれるか等も判断しやすいと推察できる。この件を裏付ける語

⁶ 平塚ゆかり（2008）『「信、達、雅」再考：現代日中通訳者の役割分析から』立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科修士学位論文。[未刊行]。を参照されたい。

りが、以下の自身の失敗談である。

A：私が当時通訳を教えていた時は「現場の空気になれ」と受講生に教えていました。スピーカーの発言は必ず訳さねばならない、しかも忠実に。でも自分の意見は述べるな、と。空気であるべき、と。これが原則です。ただ私自身は若い頃はクライアントの利益を守ることを第一義と考えていました。

筆者：クライアントの利益を守る……。

A：ですので、それで失敗もしました。通訳を続けることができなくなったケースも2件ほどありました。[中略]それからは自分の考えを入れないで、と肝に銘じました。通訳者は空気なんですよ。今は空気を越えるようなことはしません。

A：我当时给学生上翻译课的时候，就经常给大家讲，你要变成那个场所里的空气。视有若无。就需要你讲话的时候，你一定要讲话，而且只能够忠实地传别人的话，你不能有自己的思想。就是……空气。我自己当年，年轻……的时候，太过于觉得我是这个客户的翻译，我要维护他的利益。然后就是。

筆者：哦，维护他的利益啊……。

A：然后就差点弄得这件事没办法谈下去。所以呢，有这么两次吧，所以以后就，[中略]最主要的就是不拿出自己的想法来。我觉得你就是空气。你不能超过空气。

A氏は自身の通訳規範は「忠実」、そして「空気になることだ」と明言した。A氏のいう「空気」ということばは、語りの文脈から「透明な存在」の意味で用いていると推測できる。しかしながら、A氏は「忠実」や「空気であれ」という通訳規範意識は、多くの通訳経験を積んだ現時点での規範意識であり、かつてはクライアント寄りの通訳、また自身の考えを反映させた通訳をしていた、と続けて語った。そして、失敗を経たのちに「話し手の発言に忠実」で「現場の空気」のように透明な存在であるべきとの意識が形成されたと話した。これは、自身の通訳の経験と通訳依頼者／顧客からのフィードバックをもとに、職業倫理に関する規範意識が変化していったことを示している。また、通訳訓練を全く受けず、通訳の現場で経験を重ねながら、自身の中で調整をしていく中で規範意識が内在化されていったことを示唆する語りでもある。

しかしながら A氏は、上述した語りの後には、「忠実」という自身の規範に背くとみられる行為の例を挙げている。それは、ある日中間の政治家の対面通訳の場での出来事であ

る。A氏は、その場の雰囲気盛り上げるために「忠実ではなく大げさに訳出した」例を挙げ、それがクライアントの評価を受け、その「訳出は適切だった」と肯定した。

A：その場にいた人はみんな政治家 F 氏夫人のことが気に入ったんです。F 氏はちょっと亭主関白なところがあって、皆で「K さん (F 氏夫人)、これからは食事の注文も、貴女の言うことを聴いて、F 氏の言うことは聴かないことにするよ」ということを話していました。すると F 氏が、「僕、悲しいよ」と言ったので、それを私は「太欺负人了。(註：ひどいいじめられようだ、の意)」と訳しました。当時は特に意識しなかったのですが、それは、生活感覚からいって、実は「とてもうれしい」なんだと。F 氏は多分そんな心境だったのではないかと、思ったのです。そうしたら当時大使館に勤めていた O さんが、

筆者：ああ、O さん。

A 氏：そう、大使館の O さんが「これは私が聴いた中で一番いい通訳だ」とほめてくれました。O さんも中国語を勉強した方なのでね。あのとき「我要哭 (註：私は泣きたい、の意)」とやってはダメだし、「我很悲伤 (註：私は悲しい、の意)」ではもっとダメ。なので、これは工夫とかいう簡単な問題じゃない。言うなれば、生活感覚がないと。例えば相手には相手の言葉があり、私には私の言葉がある。人それぞれの言葉がある。そのことを十分に体感できたとき、それらの言葉が自分にとって自然で、なおかつ相手にとっても自然なことばになるんです。

A：北京这帮子人呢，都很喜欢她。然后呢，F さん有点大男子主义。然后他们就笑他，说我们都喜欢夫人，然后下面就不说了。然后 F さん就问我：“他们说了些什么？”，我说：“大家都说喜欢 K さん。说以后去哪，吃什么菜，都听 K さんの，不听您的。”。F さん就说了一句：“日本語：僕、悲しいよ”。但是呢，实际上我们应该讲，就是说，这个属于，叫做日本語：うれしい悲鳴，是吧？然而我翻的时候，翻成“太欺负人了”。当时自己没觉得。在我生活感觉里，他就是这样一种心情。但当时在大使馆工作的 O さん、
筆者：啊，O さん

A：O さん就说了，这是我听到的最有意思的一句翻译。O さん因为他自己也学中文，我要是翻译成“我要哭”呢，那肯定不对，“我很悲伤”那更不对，所以，这个事情好像，也不是说“日本語の工夫”这种简单的事情。就是说，你要有一个生活感觉。就比如说，他有他的语言，我有我的语言，你有你的语言。然后，你要充分知道这个时候，这个语言

对我来讲很自然的，对你也是很自然的就行了。

このA氏の語りは、Chestermanの論じる「職業規範」よりも「コミュニケーション規範」のほうが優先され、同時にクライアントの「期待規範」にも応える結果となった一例とみられる。

王(2013)の研究結果では、外交通訳者は「中立な役割を保つべき」と自身の役割に言及しつつも、一方では現場のコンテキストから判断し、オリジナルの文を超えた訳出をする(pp. 121-122)と指摘した。これは、中国外交部の通訳者として、発話者の意図するところを瞬時に汲み取る事が可能な、長期的な信頼関係が構築されている場合に実現可能となると思われるが、フリーランス通訳者であるA氏も同様の意識でオリジナルの発話を越えた通訳を行なっていることが示された。

目標言語にシフトが表れる主な理由として王は、「通訳者は目標言語でメッセージを表現する際にコミュニケーションの最適化を追求する傾向がある」とし、「通訳者は言語の転換者や言語メッセージの伝達者というだけではなく、異なる言語で行なわれるコミュニケーションのファシリテーターでもある」として、異文化コミュニケーション活動における通訳者の役割はコミュニケーションの仲介者であり、異文化間の仲介者の役割を果たしている旨を指摘している(p. 119)。

A氏はさらに続けて「我々はある規範に従わなければいけない。その規範とは、私が思うに誠実であること、それはクライアントに対しても同じ」と語った。このことから、A氏は自身のオリジナルを超えた訳出を肯定し、前述の「忠実」や、後に語った「誠実」という通訳規範にも矛盾していないととらえている。

王の研究で分析した通訳者の言説では、「忠诚」(pp. 122-125)ということばを用いて、「規範」を説いており、王は、発話者とクライアント、そして聴衆に忠実、誠実であること、職業道徳を遵守することが通訳現場における職業倫理規範であるとした。その上で王は、通訳者の通訳シフト、すなわち発話と訳出の間に現れた情報の補充、削減、修正などのシフトから通訳者の現場での役割は完全な「中立」「透明」とはいえないと結論づけているが、その意図するところは下記のA氏の語りにも現れている。王の調査対象は英語-中国語の外交通訳者であり、A氏は中国語-日本語の会議通訳者であるが、使用言語の違いはあれども、中国では「従わなければいけない」という職業倫理規範はすでに内在化していることが推察できる。

通訳者の規範は、「誠実」です。誠実であれば、例えば、時間を守るとか、守秘義務とかも誠実に含まれます。誠実に守らなければならない。例えば、知っていることと知らないことがあって、とりわけ、E先生のようなレベルまでになるなら、国務関連のことは話してはいけない。このようなときは自分に言い聞かせる。多くは規則に従わなければならないんですが、誠実であればいいんです、お客さんに対しても。

通訳者の規範、就是诚实。这个诚实，你只要做到诚实这两个字，那么你就比如说，守时啊，守密啊，这都在里头。你就得去诚实地去遵守。你比如说，你知道什么事情和不知道什么事情的时候，尤其是你做到像孙老师那样的程度，有的时候有关国务的话，那就不能讲。那么这个时候呢，你就要告诉自己，就是说很多东西，我们就是要听令一种规则。那么我觉得诚实就够了，包括对客人。

A氏は通訳の役割について「架け橋になること」と、現在自身の研究所で行っている通訳について例を挙げ語った。

現在私がいる研究所で我々の研究分野での通訳を行うことがあるのですが、これはとてもおもしろい。例えば、日本の農学史の専門家、T先生、大阪にいる方ですが。我々の方にも農学研究者がいるのですが、このお二人の考えていることは一緒なんです。中国の農学史研究者と、日本の農学史研究者が、いろいろな分野でコミュニケーションをとりたいと願っている。でももし私がいなければ、お二人はコミュニケーションすることはできない。なので、こういうときは嬉しいですね、手助けができるんですから。なので、私が思うに、ああ、もちろん研究所では、私が通訳をし終わっても、私自身も得るものがありますし。もちろん、いつでも「勉強（日本語）」ですが、私も学ぶことが多くあります。

因为我现在在我们的研究所，要去做一些我们自己研究方面的翻译。那么就很有意思。比如说，有一个日本农学史的专家，叫T先生。他在大阪。然后呢，我们这边有个农学家。实际上他两个人脑子里想的东西是一样的。一个中国的农学史家和一个日本的农学史专家，两个人有很多地方想交流，但是，如果我不在，他们就没有办法交流。所以，这个时候我也觉得很高兴，我能帮到他。所以，我们觉得。就是，当然在研究所，我做完了，我也能够得到一些。当然，任何时候都是日本語：勉強 我也能学到东西。

通訳する場の違いにより通訳者の役割に違いがあると思いますか、という質問に対しては、以下のように語っている。

我々は自分が偉大だと思っははいけない、なぜなら、時には、例えば、クライアントのために交渉するとき、この取引が成立するか否か、すべて通訳に関係があるんです。例えば、双方互いに信用させられるか、などね。もちろん、彼らが互いに信用に足ることが前提ですが。

我们不能够认为自己太伟大。因为有的时候，你比如说，我们帮人家去谈判。这个生意做得成做不成，都会跟翻译有关系。比方说，你能不能让双方互相信任。当然，这个前提是他俩双方能够互相信任。

しかしながら A 氏はこの発言のすぐ後に、「通訳がその役割を果たせないときもある」と、過去に担当した国家レベルでの貿易交渉の通訳について語った。この部分は、それまでのよどみなく話す A 氏の口調が変化し、トーンダウンした箇所である。

私は日本側の通訳を担当したんですが、[中略] LT⁷は、日本側にとっては現実には……もう必要なかった。でも出来る事なら継続させたかったんです、その契約は歴史の一部分を代表するような契約だったから。それで、でも中国側の石油会社が言うには、これはもう続けられないと……。

我是日方的翻译。那么，因为日方觉得 LT 这件事情，它(日方)……实际上是没有必要。但是呢，它是一个，能够的话，还是持续下去。因为它代表一部分历史。那么，但是中方呢，那个石油公司说，这件事情实在是干不下去……。

この時、A 氏が通訳を担当した日本側は長年通訳を担当している知己であった。結局、この交渉は中国側の申し出通り、締結には到らず終了する。A 氏は当時の状況について下記のように語った。

⁷ LT とは 1962 年に調印された「日中長期総合貿易に関する覚書」、もしくはこの覚書により行なわれた貿易取引を指す。かつて日中両国は 72 年の国交回復以前にも、互いの貿易連絡事務所を相手国に設置し、政府保証の融資を利用して貿易を行っていた。最盛期には日中貿易総額の半分を占めていたとされる。LT は、当時この覚書に署名した両者（中華人民共和国側：廖承志（Liào Chéngzhì）後の中日友好協会会長）と日本側：高碕達之助（元通商産業大臣）の頭文字 L と T から LT 覚書と命名された。1972 年 11 月 22 日に設立された財団法人日中経済協会は LT 貿易を引継ぐ形で設立され、その後もかつての貿易形態は一定の期間存続された。

政策が中に入ると、通訳の役割は実際にはとても小さく、機械でしかないんです。普通の人間同士で通常のコミュニケーションをとるときは、通訳の果たす役割は大きくなる。でもそういったケースでも、我々はできるだけ自分を目立たせないようにすることが必要です。何故なら我々は通訳者でしかないのだから。

这种时候呢，就是说跟普通意义上的谈判，我想说有关政策夹杂在里面的时候，翻译的作用实际上很小，你只是一个机器。那么在普通人的交往，两个人能否成为朋友的时候，这个时候，这个时候可能翻译起的作用要大一些。但是大部分时候，我们尽量还是让自己不显眼一点，因为我们就是个翻译。

A 氏の語りには、日本側に対して、交渉が成功して欲しい、との思い入れがあるなかで、実際には交渉が失敗に終わり、「役に立てなかった」という慚愧の思いが現れている。そして、政策交渉は両者の思惑が交差する場であり、交渉がうまくいかなくても、通訳者として冷静に受け止めるべきである、との通訳規範意識と当該案件に対する思い入れが交錯しているように聞こえる。「忠実に訳すことが通訳者」であり、「その場の空気を越えてはならない」という、A 氏の通訳規範意識とは矛盾する語りである。

桜井(2005)は、「当然のことだけど」「せざるを得なかった」といったよくきかれる言い回しは自己と社会の同一化、受容、妥協、あるいは反抗、拒絶の意志などを表している、事故と周りの社会との関係を表す重要なフレーズが込められている、と論じている(pp. 170-171)。ゆえに、A 氏のこのような否定的な言い回しのフレーズは、通訳者があるべき姿と考える規範と、実際の現場での訳出行為にギャップがあることを示すと考えられる。

当時の A 氏の立ち位置は、日本側の通訳を担当していた。A 氏の語った「LT」とは、日中国交が未だ回復していない時期に、高崎達之助と廖承志がサインした「日中長期総合貿易に関する覚書」という名の覚書を指し、これにより 1972 年に国交が回復するまでの時期もこの覚書を基に両国で貿易が行なわれていた。その後、LT 貿易は 1973 年に終了するのだが、プラント、石油分野など、分野によっては日本政府が仲立ちする形で、中国国有企業と日本企業との間で契約が継続されていた。日本側は利益追求ではなく、日中間の歴史的案件であることで継続の意を表わしていたことが伺え、それに対し中国側は、実利追求を考えると今後は継続できない、と申し入れたケースである。A 氏は日本語を大平学校で学ぶなど、語学学習環境と日中の国交回復事業とは深い関わりがあり、日本の教育者か

らも教育を受けている。長年担当した本件は、特に思い入れが強かったことが窺われ、そのために、「コミュニケーション」を成立させるという通訳者の役割を越えて、「交渉」を成立させる役割を果たそうと通訳行為に臨んだと推察される。しかしながら自らの希望は叶わなかった。この経験を通して、A氏は一層、通訳者としての役割観を認識したのではないかと考えられる。

5.2.2 B氏のインタビュー

B氏は中国在住の日中通訳者の先駆的存在である。実父は戦前日本に留学した経験を持ち、1972年の日中国交正常化に尽力した中国の政治家である。B氏は文化大革命の混乱期に大学へ進学、日本語を専攻し、79年から80年まで日本へ留学、帰国後は日中間のあらゆる通訳に従事し、1992年に通訳翻訳会社を設立し、自らが通訳翻訳を行いながら、先述のA氏をはじめとする通訳者の育成にも携わる。2002年より金融関連企業に入社し、国際交流事業に従事し、同社で副総経理⁸を務めている⁹。B氏へのインタビューは2010年9月、B氏のオフィスに程近いホテルで行った。本論で使用したデータは筆者が日本語に翻訳したもののだが、元々日本語で発言された箇所はそのまま表記する。

筆者がインタビューを行う数ヶ月前、実父の回想録が出版され、その関係でB氏は日本のある新聞社からインタビューを受けていた。その際、日本語という外国語を学んだきっかけは父とは無関係だったと語っている。当該記事の事も引き合いに出しながら、B氏は、「日本語学習を始めたのは偶然だった」と語った。

B:その時も話したんですけれども、私が日本語を勉強したのは、実は偶然だったんです。

筆者：ええ。

B:文化大革命で下放されていたんですよ。その後、4～5年経ってから中国の大学に(入学しました)。当時はまだ改革開放(政策)も始まっていませんでした。1970年ですね。当時は鄧小平が仕事に復帰した後、まず学校を再開させることを主張しました。

[中略] 当時は学生募集の時に特に試験はありませんでした。あったとしても合格基準が別にありましたね。推薦やら面接やらと。

B:恩、我那个时候就说过，我学习日语其实很偶然。

⁸ 「副総経理」とは日本語で一般的に「副社長」を指す。

⁹ 役職はインタビューを行った当時のものである。

筆者:啊

B:因为文化大革命,上山下乡。然后呢,就是经历了四五年之后,当这个中国的大学的,当时还没有改革开放。1970年吧。就是邓小平恢复工作以后,首次,就是主张呢,恢复复课吧。[中略]那么当时呢,开始招生的时候,没有什么考试。也有过考试,但是它有其他标准。就是有推荐啦,有什么面试啦。

文化大革命により、中国では1968年から学校が完全に機能不全に陥ってしまっていた。B氏は10代後半から大学進学前の22歳まで、陝西省の農村で労働に参加していたという。

B:そのころは、個人に希望なんてなかった。もし聞かれても、誰も自分の希望なんて答えることはできなかった。とにかく(下放先から)帰れるだけで良かった、完全にこんな感じで。当時は大学面接の時、英語を受けたんです。自分は英語を勉強することになると思っていたんです。

筆者:そうですか。

B:もし外国語学部なら英語を選択したでしょう。フランス語やロシア語みたいに舌を曲げるのは、ちょっと恐かった。

筆者:舌を曲げる。

B:私は曲げられないんですよ。それから、北外¹⁰に入ってから...、みんなが英語を希望したので、私は日本語学部になったんです。これが日本語学習の始まりでした。

[中略]当時の私たちにとっては、個人の選択の余地なんてなかった。それから、勉強できるチャンスがあるだけでみんな満足だと思っていたんです。なので、それほど強い責任も感じていませんでしたね。

B:个人没有什么愿望。他如果问你的话,谁也不敢讲愿望,就是说主要能回去就行了。所以完全是这种。当时呢,面试过我的时候,面试是英语。我以为呢,我会学习英语。

筆者:啊,这样啊。

B:如果是外语的话,我选择。我害怕学法语啊,俄语啊,那种舌头转的。

筆者:那种舌头转的。

B:我觉得我啊,まがらない。然后那个,进了北外以后呢,就给那个。因为大家都希望学习英语嘛。就给发了到日语去了。这就是日语的开始。[中略]但是,当时对我们来讲,

¹⁰ 北京外国語学院。現在の北京外国語大学。

不可能有很大的个人选择的余地。另外呢，有一次学习机会呢，也都觉得很不错。所以还是呢，没有什么太强的砥柱。

B氏が実際に大学へ進学した時期は、日中国交正常化が実現した直後だった。中国は1972年9月に実現した国交回復の直前に北京や上海の外国語大学の授業を再開させていた。下放し、農村労働作業に従事させていた外国語の教員たちを大学に呼び戻し、同じく農村で労働に従事させていた若者たちを入学させたのである。しかしながら、農村にいた学生がすべて都会に戻れたわけではなかった。大学入試に関して、「推薦とか、面接とか」とB氏が述べているように、B氏が北京に戻ることができたのは、実父の影響もあったようである。B氏の実父は日本語に精通している事を理由に、文化大革命が始まると同時に迫害を受け、下放されていたが、日中国交正常化の事前準備交渉という任務を押し、職場復帰していたのである。

B氏の日本語学習の動機は、当時の政治状況による偶然の産物とも言えるが、その後のB氏の辿った軌跡、そして実父との関係を考えれば、必然であったと考えることもできよう。B氏によると、当時はいまだ文化大革命の最中であり、政治的状況が日本文化を学ぶことを許さなかった。日本語学科でありながら日本文化に関する授業は少なく、日本語の文章の精読や、魯迅の小説講読などが主な授業内容であった。それ以外は「工業は大慶に学べ、農業は大慶に学べ」とのスローガンの復唱など、政治学習が通常の授業の中で盛んに行われていたという。しかし、その後文化大革命の終焉が近づくとつれて、日本語の学習が本格的に開始された。外国語大学の教師も文革により下放された犠牲者であり、かつての通訳者も多くが迫害を受け、李越然のように投獄された人物も少なくない。その後70年代後半以降、通訳者たちは外国語教育にも携わるようになり、次世代の育成に力を注いだ。中国ではこの時代の外国語教育には、すでに翻訳通訳という要素が取り入れられていた。

強調されたのはね、外国語の学習はバランスが大事ということ。何を要求されたかと言うと、「聞く、話す、読む、書く、訳す」の5つ。

「聞く、話す、読む、書く、訳す」それから基礎的な発音から勉強を始めました。毎朝みんな早く起きて朗読に行くんです。そして朗読したものを録音して聴きに行くんです。授業は精読の授業と会話でした。[中略] それから聴解力の授業もありまし

た。

強調的呢。是外语学习不可偏废。要求是什么呢，听·说·读·写·译。五个这样。听说读写译。然后学习是从基础发音开始。发音呢，一定要运动你的舌头。就是每天呢，每天早晨大家可能会，都要起来就是去朗读。然后这个朗读呢，还要去听录音。然后课呢，就是精读课和会话课。[中略] 然后有听力课。听力课听。

当時は、通訳の基礎訓練としての授業も行われ、聴解力強化の授業では毎回 5 分ほど NHK のオリジナル速度の録音を聞き、デクテーションの練習も行ってた。「私は書く速度はまあまあだったけれど、先生に『これは当てずっぽうでしょう、適当に書いてもごまかしはききませんよ』と。私は全部きちんと聞き取れていたわけではなかったの。(音声の) スピードが速かったですからね」と教師に叱られたこともあったという。

B 氏が在学中の 1976 年、4 人組が逮捕され、文化大革命は終わりを遂げた。国交回復した日中間は、その頃から徐々に、経済交流が盛んになっていく。

B：その後、日本語の私たちは、実際の通訳に触れる機会があったけれど、翻訳の方は多くはありませんでした。でも、日本の経済活動が盛んだったので、あるときは、北京の展覧館で、日本の旋盤展示会やら、工業展覧やらで、(通訳) 要員が必要なときは外語学院で人材捜しをしたんです。それでブースに待機させる。ブース付き(通訳)。それから、時には、今日は 5 人、明日 5 人と、1-2 ヶ月旅行社に出で行ったり。

筆者：そうなんですか。

B：そう、旅行社に行って、私も西安に 2 ヶ月行きましたよ。陝西省の外事弁公室へ。

筆者：外事弁公室。外事弁公室で仕事を？

B：そう、陝西省外事弁公室で(外国客の)接待係を担当しました。

筆者：接待。

B：ガイドですよ、今日は紡績工場、明日は幼稚園、明後日は乾陵。北京では故宫とか。それを全部暗記する。外国語学習は暗記なんですよ。

B：然后日语我们有的时候接触实际翻译，笔头的翻译确实不多。但是呢，日本的经济活动比较活跃。有的时候，在北京展览馆。有那种日本什么机床展啊，日本的工业展览啊，可能它需要人的时候会到外语学院来找人。然后就站展台。站展台。然后可能有的时候，大家会今天 5 个人，明天 5 个人。1 个月，2 个月的到旅行社。

筆者:啊, 这样啊。

B:恩。到旅行社去。我就在西安呆了2个月。陕西省外办。

筆者:外办。在外办工作啊。

B:恩。在陕西省外办搞接待。

筆者:接待。

B:导游啊, 今天是纺织厂, 明天是幼儿园, 后天是乾陵。在北京就是故宫, 你都把这些背下来。学外语就是一个背。

この語りは、前述したA氏と同様、当時大学での通訳の授業は、商業的目的での通訳やそれに付随する観光ガイドとしての位置づけであったことを裏付けている。

当時の授業では、日本から招聘した同時通訳者による特別授業が行われたり、学生アルバイトとして通訳現場に出て行ったりと、通訳に実地で触れる機会も少なくなかったB氏だったが、同級生のうち、通訳者・翻訳者として仕事をした経験のある学生は日本語専攻の30数人中5人ほどだったという。優秀な学生のみが学部生の時から選抜されて通訳業務を行っていたようである。B氏は大学卒業後、毛沢東選集翻訳局に配属され、台湾華僑や日本華僑という日本語を母語とする翻訳者の大先輩に囲まれながら、10年間仕事をすることになる。

B:毛沢東選集や党大会の文献、人民代表大会の文献を訳していました。その後劉少奇や朱徳、鄧小平文選などを訳しました。そこでは周りがみんな先生でしたからね。かつて台湾にいた人、日本で暮らした華僑などが周りにいました。彼ら彼女たちの母語は日本語でした。ですので、日常的に日本語を聞く機会は多かったですね。

B:毛泽东选集, 党代会, 人代会文件。到后来翻刘少奇, 朱徳, 邓小平文选。那个地方呢, 它周围等于都是我的老师吧。都是那些呢, 或者曾经在台湾, 或者曾经在日的华僑。他们的母语就是日语。所以日常听的机会比较多一点。

周囲の同僚が皆通訳翻訳の師という環境の中、B氏は翻訳原稿の修正や、適切な訳の教えを請うなど、翻訳者としては恵まれた環境で過ごした。この頃は中国の社会改革期であったため、通訳の人材が不足していることもあり、専門分野であるとか、できる、できないに関わらず、様々な分野の通訳にかり出され、様々な領域の通訳を担当したという。そ

のころは通訳者、翻訳者も給与体制はその他の職員と同様に、1ヶ月何十元の給料制であった。B氏は当時を回想しながら、通訳者として「鍛錬を積むことができた」と語ったが、その後は別の企業に移り、金融分野を専門に通訳するようになる。そして通訳翻訳エージェントを立ち上げ、自らも通訳者として稼働しながら、後輩の育成にも携わる事となる。

後に、通訳業務は多くの収入が望めるようになりましたが、当時は社会的な収入レベルが低かったから。当時は通訳をするのは、自己鍛錬の機会を求めて行なうものでした。今では、ガイド通訳ができるような人材を探すのはとても簡単になりましたけれども、当時は非常に難しかったです。現在はそれぞれの業種での交流は細分化され専門化されていますが、当時は中国国際旅行社を通して、とか日中友好協会を通してとか、ほとんどが中央機関を通してのものでした。他のルートがなかったんです。旅行者にいれば、様々な専門に触れることができたんです。彼らは当時非常に優秀な通訳者を抱えていました。

后来做翻译可能会有很多收入。当时整个社会的收入水平也低。当时呢，做翻译也就求一个机会锻炼锻炼自己。并不是说，像现在这样，就是说他可以有多少的收入啊。现在想找一个能做导游的翻译太容易了。当年连这么一个都不容易。

而且现在呢，各行各业的交流都比较专业化。当时都是通过国旅来啊，通过友协来啊，大概没有通过党中央，没有其他的途径。[中略]所以，你在旅行社接触很多专业的，那种交流。他们旅行社当时也是有非常好的翻译。

通訳者の派遣ルートは、日本の状況とは全く異なる事情であったが、当時の通訳者は専門的な通訳を行なうといっても、フリーランス通訳者ではなく、あくまでも旅行社所属の社内通訳者として扱われていた。

B氏は通訳者の条件として、連続して仕事を受け、日本語と中国語の思考方式を頭に植え付け、素早く転換できるように、毎日両言語に触れ、また日々通訳の現場にいなければならないと強調し、また、どんな分野でも引き受けなければならない、と主張した。

まず業務は毎日なければいけません。仕事に呼ばれれば、すぐに駆けつける。例えば代表団のアテンドも、次の団につくまでの間は3日以上空けないこと。一つ終わったらまた次、というように。もう一つの条件はどんな分野でも引き受けなければいけな

い。そうでしょうか？毎日毎日通訳をしていなければならないんです。頭の中で、いわゆる能力を訓練する、言語転換能力を訓練しなければいけません。

必須得は天天有。随叫随到。如果说是，去跟团。那就是一个接一个。回来不会有两三天时间，就一个接一个。然后呢，什么都得干。对不对啊？每天每天都在接触。就是这个脑子每天处于那种，就是说它要锻炼一种什么能力呢，脑子的转换能力。

このような転換能力というのは思考の転換です。例えば、日本語で喋った時は日本語で思考する、中国語を喋った時は中国語で考える。頭の中で通訳するというのは間違いです。ですので、訓練と言うのは思考能力の訓練でもあります。そして口に出すこと。口に出して喋る事です。

这种转化能力是一种思维的转换。就是说，你用日文讲的时候你要用日文思维。你用中文讲的时候用中文思维。如果在你的脑子里在做翻译，这个就错了。因此呢，人们锻炼这种思维能力呢。就是一个是开口。开口讲。

通訳基準に関する話の中で、B氏は嚴復の「信達雅」を強調し、通訳は「忠実に、わかりやすく、そして美しく訳す」ことが必要であると語った。E氏は、特に通訳者の訳出は音声として「美しいこと」「聞いて心地よいこと」を強調した。

B:要求される基準というのは、文法が正確であること、それ以外は基準としては「信達雅」

筆者：そうですね。「信達雅」

B「信達雅」、まずは正確に訳す。

筆者：はい、正確に。

B：正確に。そして正確に訳しても、相手が聞いて解らないんじゃダメ。伝えることができないと。最後に通訳は美しくないといけない。英語で言うところのナイスな訳でない。

筆者：ナイスですか。

B：聞いていて心地よいように。

B:要求的标准很，就是说语法正确啊，除了这些呢，给你讲的是一个大方向的标准。是“信,达,雅”。

筆者:对。就是信达雅。

B: 信达雅。首先要翻准确。

筆者:对。准确。

B: 准确。然后你准确了, 人家没听懂还不行。要传达到。最终呢, 你翻译的应该美。就是说, 听上去以后用英文讲 NICE.

筆者:NICE, 恩。

B:听上去舒服。

B 氏は、同時通訳はブースにいて、聴衆から見えないところに隔離されているため、より伝わる話し方をすることが必要で、音声でメッセージを伝達する通訳者にとっては、外国語の音読訓練が特に重要で、自身の語学訓練時代を振り返りながら、通訳訓練は「習うより慣れる（熟能生巧）」である、と続けた。

時には聴衆から何か言われる場合があります。私は現場を離れて久しいですけども、聴衆が、あの時の通訳はどうだったとか言う場合もありますね。同時通訳ですから、ブースに入っているわけで、通訳者は（聴衆に）見えないんです。で、声だけを聞いて、どこどこで通訳をしていなかったか、とか聞かれるわけです。聴衆は声を覚えているわけで。ですので、まず音声を通ることが通訳には必要で、それが基本的条件です。通訳の基礎はできているんだけど、実際の現場でくどくどと話すような話し方をしたり、声がこもっていたら（いけない）。それから訳出の仕方があまりに人倫道徳すぎて…。通訳者は、時と場合によっては…感情を全面的に出して訳さなければいけないし、時には聞き手の感情をかき立てなければいけない場合もあります。

有的时候, 听众会给你讲。就是说, 我都离开好多年了。我一说话, 他们还说是不是那一次那一次翻译的。那是因为做同传, 座小阁子里。看不见人。你是不是翻过哪一次哪一次, 就是说他对你的声音的熟悉啊, 什么的。那你的声音应该有穿透力。这些基本的, 基本的条件。如果你基础很好。到时候, 你就哆里哆嗦地说话, 声音也放不开…。然后, 说话就会伦理性太强, 或者说是都…唉, 都不会呢, 就是说, 就, 翻译应该, 有的时候…什么场合需要带一点儿激情的。有的时候你得把他们调动起来。

B 氏は、通訳者としての条件を、「母語である中国語の基礎があり、中国語を通して外国

語を学んだ人間であること。そして留学経験があり、反応が早く、ことばがはっきりしていること、そして表現能力に優れ、緊張しすぎないこと」「専門的な分野の通訳においても「最初は不出来でも、その後きちんと訳出ができるように、飲み込みが早いこと」を挙げ、通訳者で一番大事なことは母語の基礎がしっかりしていること、を強調した。これは多くの通訳講師が強調することでもあるが、通常、外国語のレベルは母語のレベルを超えることはないと考えられており、B氏も同様に「一定のレベルになり、それ以上ブラッシュアップをしようとしても、母語がきちんとしていないとそれ以上のレベルには上がれない」と語った。また、ことばは「生き生きしたことばを使うべきで、教科書通りのことばではいけない」とも語った。これは自らも通訳を行いながら、同時にエージェントとして通訳を使う側に立ち、通訳者を育てる目線を持っているE氏ならではの語りであろう。そして、現場では「通訳者は主役ではなく裏方である」ことを自覚し、「クリスマスツリーのように着飾らない」「自分は脇役であるという意識を持つ」「クライアントに気を使わせない」ことが通訳者の基本条件であると語った。これらの条件に関して、B氏は「日本ではこのような問題はないかも知れないが、中国ではまだまだ時として問題になることがある」と付け加えた。

B：これらは基本的な礼儀ですが、こういった心構えは必要です。通訳者はクライアントのツールだと。通訳者はいなければならぬ存在だけれども、会話の主役ではない。主観的意見などない。ただ、当然ながら、通訳を頼まれたときは、「どのような方向に持っていくますか？」と（クライアントに）聞くこともありますが。

筆者：それを聞くんですか？

B：時にはね。それで自分が納得できれば、その方向性を理解できれば、その方向性目指して努力をする。話が成立するように。話が成立するように。さもないと文化的な摩擦が生じることもありますから。

B：反正这些都是基本的礼节吧。我觉得这种位置的心态，你就是说，你就是这个人使用的工具。没你不行。但你又不是谈话的主角。没有你自己的愿望。当然有的时候，人家请我作翻译，我就会问，朝哪一个方向もっていきますか？

筆者:还是问啊？

B：有的时候会问的。那有的时候如果我能够，納得できれば。我能够理解，这种方向性。我会去做努力。就是说，事情让它办成吧。事情让它办成。要不然会有文化冲突的。

B氏はまた、通訳スピードも日中双方の話者にあわせることが大事で、日本人はスピーチが早く、中国人はスピーチが比較的ゆっくりであるが、通訳者も話者のスピーチの速度に合わせる必要があると語った。これらは教室で語学を勉強しても身につかず、通訳現場で感覚を身に付けるしかなく、他人が教えられるものではない、と指摘。通訳現場で先輩の姿を通してこれらのスキルを学ぶことができる現場訓練の重要性を訴えた。

さらにB氏は、中国と日本とは国の文化の差異が存在し、国家体制の違い、ビジネスの仕方にも差異があるために「翻訳通訳以外のところで工夫をしなければいけない」と述べ、語学を学ぶだけではこれらの文化は学べないため、通訳者・翻訳者はまず文化知識を学び自分のものとするべきだ、と主張した。さらに、それらの知識を自分のものとするには、まず自国の文化知識を学ぶ事から始めるべきだ、と語り、その理由として「自分のことが理解できて初めて他人のことが理解できる(只有了解了你自己,才有可能更好地了解别人)」と語った。そして通訳者として仕事をする中で、現場で日中の国の事情が異なることにより双方に誤解が生じていると考えられるときは、通訳者が積極的にそれを伝えて意思疎通させるべきだと語り、それゆえに通訳者はあらゆる古今東西の書物を読み、知識を豊富にした状態で備えなければならない、とした。

通訳規範とは何か、という質問に対しB氏は、「スピーカーが10分話した場合、通訳者は最長で10分以内、できれば8分位にまとめるべき」と語り、通訳者が自身の表現能力不足や簡潔にまとめられず冗長的に訳したことにより、会議参加者の時間を浪費することがあってはならない」として、「快」、すなわち時間の把握も通訳規範とするべきであると語った。同時に、通訳の時間を確保するために、通訳者として時にはスピーカーに時間を把握してもらうよう依頼することも必要と語った。それに対し、書き言葉を用いる翻訳は「人が見て理解でき、心地よいように訳すこと」と、「雅(美)」を強調した。

そして、現在中国で採用している通訳者の資格試験についてE氏は試験の採点基準にこれらの規範が生かされておらず、「認定を受けた通訳者で本当にできる人は見たことがありません」と否定的見解を示した。そのような資格よりも、コミュニケーションを学び身につけることが大事であると、以下のように語った。

(通訳翻訳の) もっとも大事なことはコミュニケーションなんです。

訳すという行為だけが、その作用が、実のところ過去の時代からとても明確なんで

す。過去の交流においても、多分特殊な通訳翻訳者などいなかった、専門的通訳者はね。でも、通訳翻訳者はとても大事。例えば、唐の時代の三蔵法師は仏典を翻訳した。その当時はそれ（仏典翻訳）が必要だったんです。

它的的最重要的就是交流。只有译。那么，他的作用呢，其实自古以来，是非常清楚的。在以往的交流呢，可能他没有一个特殊翻译的，那么一个专业。但是呢，他是这个很重要。你比如说呢，唐代三蔵法師，他翻译佛经。它是那个时候的一个需要。

B氏はインタビューの中で、自身の通訳体験について具体的な事例を多くは語らなかったが、30年ほど前の日本の技術者が中国の国営企業に対する技術研修の通訳において経験した出来事を紹介した。一つめの例は、中国西安での技術関連の通訳の際に、日本側の提示したある実験方法を中国側が受け入れなかった事例である。日本側がサンプル抽出を1時間おきに1度行うように指導したが、「サンプル抽出は日に1回くらいしかできない、もしくは半日に1回が限度だ」と伝えたことで、その計測を行うのが難しいと技術者が途中で日本側の説明を聴くのをやめてしまった、という例である。このことから日本側は、中国側に対し、「こんな簡単なサンプル抽出もできないのか」と憤ったという。中国側が拒絶した理由として、中国西安と日本では湿度差があり、西安の気候風土では、日本と異なり湿度が一定以上上がらないため、サンプル抽出が日に1度しかできないというものであった。しかしながら、西安の人間は日本の高温体質を理解していない、日本側は西安がいかにも乾燥しているかということも全く理解していない。このように、互いの状況の隔たりが大きいときには、研修通訳者は、互いの文化を理解している唯一の存在であるため、日中の異文化衝突を避けるために、発話者の発言だけを訳すのではなく、互いに理解が深まるように相手側の事情など、その都度互いの対話内容では示されていない情報も付け加えて説明する必要があると語った。

そしてもう一つ例に挙げたのが国や組織の体制、形式の違いである。

B:例えば、ある製鉄工場、エネルギー部門。日本人はこのエネルギー部門に重きを置いてると思います。日本人はエネルギーといえば省エネやクリーンエネルギー、こういったものも含まれます。日本人はエネルギー部門といえばハイテク技術に関連する部署だと思っている。これは間違いで、中国の製鉄工場ではエネルギー部門といえば石炭を購入する部署なんです。そうでしょう。例えば、どここの生産ラインではどれだ

けの石炭が必要か、とか。全ての石炭を一覧にしたリストを壁に貼っている。だからこの部署は5人いれば賄える部署なんですよ。

筆者：そうですね。

B：もしかしたら中国のエネルギー部門は日本の技術部に当たるかもしれない。

筆者：ああ、そうですね、その通りです。[中略]

B：中国は当時はね、国有企業でこういう出来事があったんですよ。国有企業だから起きたことなんです。なので…。

筆者：そうですね。ではそうしたら、通訳者としては…。

B：きちんとってあげるべきですね。

筆者：きちんと。

B：你比如说，一个钢厂，能源部。日本人太重视这个能源部了。日本觉得能源部包括减排，包括清洁能源，包括什么。他觉得能源部一定是一个高技术含量的地方。错了，中国的钢厂能源部是一个买煤的地方。对吧？哪个车间用多少煤，所有的煤都在我墙上一个表。我这个房间5个人就够了。是不是啊？

筆者：是

B：也许你那个能源呢，是他的技术部。

筆者：是啊，是啊。对呀。[中略]

B：中国当年也，这些国有企业会有这种现象。国有企业会有这种现象。所以呢，就是说呢，这种差异是随时随地都会有的。

筆者：是啊是啊，那比如说作为翻译的人就，

B：最好说清楚。

筆者：说清楚。

B：差异在哪儿。说不清楚的话，

B氏はまた、時代によって通訳の目的は様々で、経済のため、伝教のため、結婚などのためなど、あらゆる領域で目的を持って通訳翻訳という交流が行なわれているが、本来、通訳翻訳を通して最終的に残るのは、文化であり、文化が通訳を介して伝えられ、他国に自国に残っていく、と主張した。そのうえで、国を開き、偉大な歴史を築き上げてきた背景には通訳翻訳が行われたからである、とその役割を称えている。

ですから、通訳翻訳、本当の意味で通訳翻訳と呼べるものは、三蔵法師の翻訳のように、康有為のように、近代では康有為の翻訳ですね。その前の時代は封鎖されていたから。国に交通手段がない時代には、外国をみることはできなかった。でも外に出て見たものを自国に持ってくることは、その国にとって計り知れない歴史を作ることになるんです。

所以翻译，真正称得上翻译的，像三藏法师的那种翻译，还有像康有为的那种，近代康有为的翻译。在那之前很封闭。一个国家没有交通工具的情况下，很少有人出去能看到。但是往往出去看到的，他会带来，给这个国家带来一个不可估量的历史。

B氏は最後に、「中日間は、現在は口頭通訳ができる人材もどんどん増え、日本語を学ぶ中国人も多くなってきたが、両国のさまざまな体制や法律など、「日本に関する文字化された資料はまだまだ少ない」と指摘し、日中間は「近いようで」遠い国であると語った。その上で、日本の公務員法や環境保護政策など、中国が日本に学ばなければならないことはまだまだ多い、そのため両国政府は互いに協力していくべき、とも指摘した。

実際、B氏は「今後ボランティアで日本の文献を中国語へ訳していきたい」と述べ、文物保護に関する文献の翻訳に携わるなど、行動に移している。

5.2.3 C氏のインタビュー

C氏は中国語を母語とする中国生まれの通訳者である。大学時代4年間日本語を専攻し、卒業後は中国の大学で日本語学部の講師を6年間務めた後、日本人と結婚し来日。来日後は中国語の講師をする傍ら通訳学校に学び、フリーランスに道を歩むこととなる。今回の協力者の中では一番年齢が若く、2010年の上海万博から本格的にフリーランス通訳者の仕事を始めた、いわば駆け出しの通訳者である。現在は主に通訳教育と語学教育の講師を中心に仕事を受けている。C氏へのインタビューは2011年9月、氏が非常勤講師を勤める学校に程近いカフェで行った。本論で使用したデータは筆者が日本語に翻訳したものだが、もともと日本語で発言された箇所は日本語が使用されてことが分かるように表記する。

C氏が大学の専攻に日本語を選んだ理由は、「外国語の学習が好きだったから」という。今まで学んだ英語とは異なる言語である日本語に触れたのは、当時中国で放映されていたテレビドラマがきっかけだったという。その内容と主題歌に魅了されたC氏は、外国語大学を選択し、「欧米言語ではない」日本語を学ぶことを決意した。

C氏は大学に入学し、基礎から日本語を学ぶ。そして三重大学に一年留学し、生活習慣もすべてが中国とは異なる環境で、戸惑いながらも、純朴な周りの人に助けられながら、「とても楽しくて、良い思い出となった」一年を過ごす。留學生活を終えたF氏は故郷の西安に戻り、日本語の講師として母校で大学一年生の授業を担当、計6年間務める。そのうち一年間は京都外国語大学修士課程に研究員として留学していた時期があり、大学での教員生活は「正味5年だった」と語る。

C氏はもともと教員を目指していたわけではなく、「大学の講師になることは私の理想とは完全に違っていました。もともとはOL¹¹（女性会社員）になりたかったんです」と、大学の講師を自ら選択したわけではなく、日本留学の付帯条件として、仕方なく講師になったと語った。

大学3年の時、公費留学で日本に来る機会があって、日本に1年留学しました。ただ、これには条件があって、留学の機会をもらう代わりに、卒業後は大学に残って講師にならなければいけないということでした。

大学3年級的时候,有一次到日本来公费留学的一个机会,那个时候来日本留学了1年,但是这个当时呢,学校这个机会给我是有条件的,就是说我大学毕业后,必须留校做老师。

その後、C氏は日本での1年の研究留学時代に知り合った日本人男性と結婚し、2007年に大学教員を退職、再来日を果たす。来日後は、日本の専門学校や民間企業の中国語講師として働きながら、通訳学校の門を叩くことになる。そこで、通訳の訓練方法を初めて知ったという。

まだ私が京都にいるときは、通訳学校があることは全く知りませんでした。こんな、同時通訳を学べる学校があるなんて。後に日本人の友人に誘われて、彼女は東京のサイマル¹²（日本語）に通っていました。その子と会ったとき、学校の話聞き、私は「そんないいところがあるんだ、私も試しに通いたい」と思って。大阪で学校を探し、

¹¹ OLは、office ladyの略で、1969年東京オリンピックの頃に使われた和製英語。英語では、男女の別なくoffice workerと言う。(鳥飼(2013)『戦後史の中の英語と私』より)

¹² 通訳学校の校名。

サイマル（日本語）とインター（日本語）¹³を見つけました。その友人と会ったのがお正月で、会ってすぐに学校探しをしたので、まず行ったのがインター（日本語）でした。短期のコース、4回のコースに試しにいきました。とてもいいな、と感じましたね。私の自信なんか吹き飛ばされてしまって、無くなってしまいました。そこで、日本語というものはこう勉強するのか、と思いました。当時は自分の日本語にとっても自信を持っていましたから、でも、通訳学校で勉強して、自分の日本語はまだまだだな、と思い知らされたんです。その後（通訳訓練に）とても興味がわきました。

我在京都住的时候，我都完全不知道有这种翻译学校，有这样可以学同声传译的地方，后来是我的一个朋友，她是日本人，她在东京的サイマル上学，然后我们见面的时候，她就和我说了这个事，我就说这么好，有这样的地方，我也想试试，然后我就在大阪去找，去找了サイマル和インター。因为我们当时是元旦见的面，见完面我马上去找，当时找的是インター，短期的课，4次的课，我就去试了一下，感觉特别好，就是把我的自信都打消了，打没了，我才知道，日语原来是可以这么学习的，因为我当时还觉得自己日语不错，挺自信的，其实去学了一下，才发现其实自己差得很远很远，学了一下后，觉得自己对这个特别感兴趣。

通訳訓練に興味を引かれたC氏は、その年の4月からサイマルアカデミーの本科生として入学、入学試験の結果が優秀であったC氏は、いきなり最上級クラスに進むことになる。しかし、通訳訓練は短期コースの基礎訓練の授業しか受けた経験のないC氏は、授業でいきなり長文音源の訳出を命じられ、そこでさらに挫折を感じることになる。

いきなり、ワークショップクラスに入れられて、すぐに通訳しろと、私はノートテイキングも何も学んだことがなくて……。えー、今なんて？と、その後はわけがわからなくなって、もう押しつぶされそうでした。そこで、痛いめにあって、やっと自分の通訳力なんてたいしたことないんだ、と思い知らされました。そこで、一生懸命に勉強するようになったんです。三度目くらいの授業のときに、先生が「Cさん、最初の頃と全く違いますね。変わってきましたね、努力していることが伝わってきます」とおっしゃってくださいました。そこで一年勉強したんです。そしてその一年を通して、通訳はどう勉強し、どう訓練するべきかが解ったような気がしました。それは私が初

¹³ 通訳学校の校名。

めて通訳を理解した一歩目だったのだと思います。

我直接就是进到ワークショップ里面去，放一大段，开始让你翻译，我ノートテーキング什么的都没有学，哇，刚才说什么？然后就傻了，就这样，我都快崩溃了。我觉得受到很大打击，我才知道，自己原来离这个翻译还差的很远很远，所以就开始了自己努力学习，然后，过了两三次以后，老师就对我说，C、你和刚开始已经不一样了，开始有变化了，感觉到你是很努力的。然后后来我就在那里学习了一年，下来一年，我才明白了原来翻译是这样学习，这样训练的，这是我对翻译最开始的一个了解。

C氏はインタビューの2ヶ月前に著名な音楽家J氏の中国公演に同行して記者会見や演奏会の通訳を担当した体験を語った。C氏の通訳場面は中国の動画サイトに残っており、筆者は、C氏へのインタビューを行なう前に、C氏がオリジナルスピーチにない情報を付け加えて訳出している様子を見ていた。インタビューの際にその件に触れ、「原文（オリジナルスピーチを）越えた訳でしたね」と指摘したところ、「通訳学校で先生方に教えられたように、話がまとまるように、論理が通るように訳した」と語った。

C：まず自分の感情を冷静にすることに努めました。これがとても大事でした。J先生はそれほど難しいことはおっしゃらないと思いましたが、まず自分が平静を保つことが大事だと思いました。そして私は舞台上上がり、先生の後に通訳を入れました。その後何度も（自分の通訳スピーチを）繰り返し聞いたのですが、私が通訳したのは時には自分で編集したものでした。すべて発言どおりに訳してはいなかったかもしれませんが、でも、J先生は舞台から降りてきて、「Cさん、とても良かったよ」と言ってくれました。先生が中国語を聞き取れたかどうかは知りませんが、たぶん先生は私が通訳したその感覚を理解してくれたのだと思います。

筆者：そうですね、では原文メッセージを越えて通訳していたと。

C:そうですね。これは先生（筆者）が、それとH先生¹⁴も授業中に教えてくれたことです。訳は（聞き手に）通じるようにちゃんとまとめること、論理が繋がるようにすること。これを行ったんです。それもあのような大きな場面で、すべての人にわかるように訳さなくてははいけない。あの日は1万1000人と、多くの人がいましてから。

C：我觉得最主要抚平自己的情绪，很重要，我觉得他不会说什么太难的，就是自己把

¹⁴ 筆者と同じく中国語同時通訳コースを担当していた講師を指す。

自己的情绪调整好就是最重要的。然后，我就那么上台了，跟着他说，后来我反复听了很多遍，我觉得我翻译的时候有的地方是自己编的，可能不是完全按照他说的，J 先生下来后，对我说：“C，非常好！”我不知道他听懂了没听懂，他可能是感受到了我说的那种感觉吧。

筆者:啊，这样的呀。已经超过了，已经超过了原文

C：对，我记得您上课，还有 H 老师上课是曾说过，说话要怎么把话说圆了，整个要把他说的话给串起来，串好。我觉得就是把握着这个，而且是这么大的场面，要让所有的人都能听懂，那天是 1 万 1 千人，人特别多。

C 氏は、この演者の通訳をする際、中国において実際に演奏する客演の人たちと演者のあいだに入って様々な橋渡しをしたという。ときには演者の怒り声を和らげて通訳することも多々あったと語った。

私は通訳者というのも非常に微妙な立ち位置にあると思います。それは私の性格とも関係あるかと思いますがけれども、(通訳者は)ちょうど中間に立って両者を喜ばせなければいけないと思います。

我觉得翻译也是一个非常微妙的位置，我觉得，可能和我的性格也有关吧，觉得我要在中间把两边都哄开心。

また、通訳というのはどのような役割を果たすべきか、という質問に対し、C 氏は以下のように答えている。

役割、とても大事です。ただまずは自分の役割を理解し、あまり表立ってはいけないと思います。自分のやるべき仕事をやるだけで良いと思います。あまり自らが表にしゃしゃり出てはいけない、と思います。ですので私が通訳をするときは、私は楽団のリハーサルの時、一度も余計な話はしませんでした。通訳が必要な時に訳しただけです。自分の主観による意見を付け加える事はしませんでした。

角色，我觉得很重要，但要把握好分寸，不能太出头，做你做的工作就好，不要越雷池一步，不要太出风头，我觉得是这样子，所以我在翻译的时候，我在乐队排练的时候，我从来不多说一句多余的话，他们让我说什么我就说什么，我从来不把自己主观的东西

加进去。

例えばあるとき J 先生が後ろにいる合唱団を批判して言ったんです。合唱団は歌詞を覚えているのか、と。とっても厳しい日本語で発言しました。ただ私は通訳するとき、「J 先生はみなさんに『なぜいつも頭を下げて歌っているのですか？歌詞を覚えていないのですか？』と聞いています」と語気を和らげて伝えました。厳しく伝えることが怖かったんです。中国人は怒りっぽいですから。ですので、私は「皆さん歌詞を覚えていますか？」と訳し、J 先生は続けて「なぜみんなずっと楽譜を見て頭を上げないのか、なぜ指揮者を見ないのか」と。J 先生は「お願いがあります。私を見て下さい」と続け、私は、「J 先生は皆さんに 1 つお願いがある。皆さん、歌う時は彼を見て下さい。手元の楽譜を見ないでください」このように少し和らげて…。

比如说，有一次 J 先生批评后面的合唱团，问你们合唱团那些词都记住没有啊，就是非常严厉地用日语说，但是我翻译的时候，我就说 J 先生问大家为什么总是低着头啊，你们词是不是没记住呀。稍微把语气缓和一点，我害怕说的太厉害了，因为中国人很容易火起来的，我就说大家是不是没有记住歌词呀，J 先生说为什么大家都老是看着手里的谱子不抬头呀，都抬头看他的指挥呀。J 先生说：“お願いがあります、私を見て下さい。”我就说，J 先生对大家有一个要求，希望大家唱的时候都看着他，不要看手里的谱子。就是这样子，稍微把这个话…。

和らげて訳した際の、発言者の表情や態度はどうであったか、と質問したところ、C 氏は「それでよかったです」と、発言者とのコミュニケーションもうまくいっていたので判断は正しかった、と語った。しかし、このような通訳は特殊事例であり、「一般的には原文のスピーチを忠実に訳さなくてははいけないし、通常の場合には当然ながら忠実に通訳を行い、特殊な状況の場合は、その状況を見て判断する」とした。

C 氏の挙げた訳例では、通訳者が話者に成り代り「私」と訳すのではなく、「彼」と訳したことが示されたが、この場合、話者が「私」と発言した場合は、通訳者は中国語で「我（私）」と訳さねばならない。これは通訳学校ではじめに習う基本的規範であり、プロの通訳者が持ち合わせている規範といえる。筆者は通訳学校で C 氏の在籍するクラスを半年担当し、通訳パフォーマンスを幾度も聞いていたが、C 氏は授業中このようなミスは犯していない。当時、C 氏は訳しづらいメッセージを伝えるため、通訳者である自己を日本人話

者から切り離し、一個の中国人として、中国人には耳の痛いメッセージを伝達するために、自己の立場を聞き手である中国人に近づけたうえで訳出を行ない、結果として意図するところを聞き手に伝達することができた可能性がある。

C氏は通常は忠実に通訳をするべきであるとしながらも、通訳者が調整をする可能性を示唆する発言をした。

忠実に訳すべきだと思います。状況によりますが。一般的に、普通に通訳をする場合は特別なことをする必要はないと思います。さっき言ったような特殊な場面を除いてはね。通常は忠実です。

我觉得应忠实地，看情况吧，我觉得一般情况下，做普通翻译的时候不需要特别，不需要特殊处理，除了那些特殊场面，像我刚才说的那样，一般情况都是忠实的。

通訳規範とは何か、という質問に対し、C氏は以下のように答えている。

C：規範ですか。まず自分の能力をしっかり確保し、レベルを保持すること。本当の通訳者は勉強をやめてはいけません。勉強を継続していくこと。この点は特に大事です。そしてもう一つは、通訳者も向き不向きがある。また通訳者に向いている人、向いていない人がいます。

筆者：具体的にはどのような人？

C：内向的で表現能力が欠けている人は通訳者にあまり向いてないと思います。しかも中国で言うところの先入観を持たないこと、が必要ですね。それと一私はまだ経験がすごく少ないのですが、自分の経験をもとに言うならば、自分の立場をわかまえると言う事です。訳すべきところは訳しますが、言ってはいけない事は言わないことです。

筆者：そうですか。

C：多分規範はこの3点でしょう。学ぶことをやめない。永遠に勉強していく。続いて自分の長所と短所を把握する。そして3点目が、立場を把握し、通訳スキルを身につけること、です。

C：规范，首先，就是要一定确保自己的能力，要一定确保自己的能力，我觉得尤其是作为一名真正的翻译，学习是不能停止的，一定要坚持学习，继续学习，这一点很重要，

另外一个就是，我觉得翻译有适合和不适合，有的人就是适合，有的人就是不适合。

筆者:比如说，具体地说怎样的人？

C：我觉得……内向和表达能力比较差的，我觉得可能就不适合，而且，用汉语说就是……有眼色没有眼色……很重要。这个是重要，另外，我经验很少啊，以自己仅有的经验来说，要把握好分寸，该说的说，不该说的不说。

筆者:啊,这样。

C：我觉得大概就这这三点吧，第一就是学习不能停止，要永远学习下去，第二就是要知道自己的长处和短处，第三就是要掌握好分寸，我觉得掌握好翻译的技巧。

「訳すべきところは訳しますが、言ってはいけない事は言わない」と言うC氏の語りからは、前述したような「通訳の場の雰囲気把握して原文スピーチを和らげて訳す」ことや、「原文スピーチを聞き手に聞きやすいように論理的にまとめる」などの行為は状況に応じて通訳者が行うべき、との規範意識を備えていることが推察できる。そしてこのような規範意識は、C氏が明言したように、通訳学校で講師から教えられたことが基盤となっておりと考えられる。通訳の場数を多くは踏んでいないF氏だが、数少ない通訳の現場において、通訳学校で学んだ事をすぐに実践できるというのは、学校で習ったという通訳規範と自らの規範意識の間に矛盾が生じていないため、即座に実践に応用できたのではないかと推察できる。

以上、3名の中国語を母語とする通訳者のインタビューをみてきたが、次節では日本語を母語とする通訳者3名のインタビューをみていくことにする。

5.2.4 D氏のインタビュー

D氏は日本生まれの日本語を母語とする通訳者であり、幼少期より祖父の仕事の関係で中国・中国人との交流の機会を多く持っていた。大学での専攻は日本文化であったが、大学生の時代に、大学とは別に中国語の専門学校に通い、中国語学習を開始する。そして一般企業に勤めた後、公費留学生として日本人留学生が稀少だった中国・北京に2年半留学を果たす。帰国後、通訳者として仕事を始め、日中交流のあらゆる現場での通訳に従事する。後に結婚、出産や配偶者の転勤などで海外駐在した時期以外は、一貫して通訳の仕事を続け、これまでのキャリアは30数年にもものぼる。

D: うん。もうね、いつまで経ってもボポモフォ¹⁵だけでね、もうね、ちょっと嫌になっちゃって、1年経って辞めたの、一回。辞めて、それで、そしたら「中国行きませんか」っていう話になって。で、私、外国に行ったのはそれ初めてだったし、それから、言葉が外人と、に通じるっていうことを考えたことってなかったの。英語ってさ、その、勉強するためのものであって、話すための道具だって意識としてなかったの。

筆者: ああー。でも、そういう時代ですもんね、確かにね。

D: そうやってみなさん勉強するのかどうか知らないけど。だから私、日本……たまたまその前に、あの、電車の中でね……私、友だちと旅行に行っただすよ、中央線に乗ってね。で、帰りの電車の中にね、なんか訳の分かんない中国系の人が乗ってきてね、電車の中でね、地図広げてね、あの、磁石のつけてね、「この電車はどっち向かって走ってるか」ってやってた。

筆者: へえー。

D: うん、やってたのね。それでね、私の拙い中国語でね、「あんた、どっから来たの?」とかね、それで「どこ行きたいの?」とかって言ったら、あの、「いや、とにかく大阪まで行きたいんだけど」、でも、夜だったんですよ。だから、結局、それ、中央線に乗り間違えちゃってるから、「じゃあ、新宿まで行って、それからその、えー、東京駅のほうまで行かせて、大垣行きの鈍行に乗んなさい」と。で、「大垣行きの鈍行に乗りさえすれば、大阪のほうに行けるからね」って言って。

筆者: まあそうですね。はいはい。

D: それをなんとか意味が通じたの。ね。それで、香港の人だったものだから、住所聞いといて、

筆者: ああ、香港だった。はい。

D: で、その時代まだ直行便ないから、私たち中国行くの、みんな香港経由なんですよ。で、そこでその人に電話をかけて、「もしもし」って「ウェイウェイ」って。通じたわけよね。で、その電車の中でも通じたんだけど、その「ウェイウェイ」が通じたっていうことが、私にとってみたらすごく新鮮?

筆者: あー、はいはい。

D: ね。だって、言葉なんて通じるものだと思ってないしさ。ね。だから、「ああ、通

¹⁵ 中国語の基本的な発音である「bo,po,mo,fo…」を指す。

じるんだ」って、その時ね。で、それで「面白いな」と思って、旅行から帰ってきてからは、もうちょっと真面目にやろうかなと思って。

その後、大学3年の時には別な専門学校で中国語を1年間勉強し、女性の就職氷河期と呼ばれた時代に卒業したD氏は4年制大学を卒業したものの、短大卒と同じ待遇で民間企業に就職する。そして職場の近くにあった専門学校で再び中国語を夜学で学び続けた。その後、「お茶くみとコピーばかり」だった会社の仕事が嫌になり、会社を辞めるために中国への留学を思い立つ。懇意にしていた中国語の講師に依頼をし、当時10名の中国の留学生受け入れ枠に「走后門（裏口入学）」で入ったという。

留学を終えて帰国したD氏は中国で知り合った日本経済協会の通訳や日本の経済界や政治家の通訳などを務めるようになる。D氏は通訳訓練を受けるため、日中通訳コースができたばかりの通訳学校の門を叩く。しかしながら、当時通訳の仕事が「一番忙しい頃」だったD氏は、訓練を本格的に受ける前に通学を断念する。通訳の訓練は「結局はその仕事の中で鍛えてもらった」という実地訓練のみである。

通訳者の立ち位置、役割について、D氏は最近の通訳現場でのエピソードを交えながら以下のように語った。

D：役割としては別にどっちに立つということはないでしょう。その人の何を言うかによってですよね。で、たとえばね、あの、ある時に、あれはテレビ局、香港のテレビ局の取材だったと思うんだけど、靖国神社の参拝のすったもんだのあの時期ですね。で、そのことについていろいろ調べたくて取材に来て。で、ある大学の先生のところと一緒にいったわけですよ。ね。それで、大学の先生たち、それ、それにもう1人、中国人がついていったわけ。その人は、そういう、その、靖国とかそういうものはすごく、こう、燃えている中国人と一緒に付いて行ったのね。彼女の頭の中は、「この先生はこういうことを言うはずがない」という頭でものを聞いているわけ。

筆者：ああ、先入観でね。

D：先入観で。だもんだから、私が訳したのに、「あなた、訳が違う」って言ってきたわけ。

筆者：ええ？

D：そこで。で、「訳が違うって、いや、そんなことはね、そう、そう思いませんけど」

って言って、先生に「もう一回、こう、訳が違うっておっしゃってますけどね、こうこうこういう意味ですよ……」

筆者：日本語もおできになる方だったんですか？

D：あの、その中国人が？

筆者：その中国人が。

D：うん、少しはできる。

筆者：あ、少しはできる。うんうんうん。

D：少しはできます。だから、それが危ないところなんです。それで、日本の先生には、「先生、こうおっしゃいましたよね」って。「『違う』って言ってるんですけど、こうですよ」って言ったら「そうだ」っておっしゃるのね。だけど、「いや、そんなことは言わなかった」って言うから、「分かりました。先生、申し訳ないけどね、あの、ご納得いただけないのでね、先生、今の話、もう一回言ってください」って言って、もう一回言い直してもらって、それでもう一回、全部きちんと通訳して、やっと納得しましたけどね。

筆者：そうなんですか。

D：うん、うん。だから、そういう……ちょっと、自分としてはそういうふうなんで通訳をね、「意味が違う」って言われて、私は日本語のリスニングに対しては自信持ってますから。

筆者：いや、もちろん、もちろん、もちろん。

D：だから、日本語のリスニングと日本語の言葉のバックにあって意図することって
いうのはなかなか表面に出てきにくいことがあるんだけど、それをその探ること
も多分できていると思っているので、あの、そういう時に「あなたは間違っ
て通訳し
た」って言われたのはものすごくショックだったから、もう、ブルブル自分も震えた
んですけれどもね。だけど、あの、そういうことは、日本語を中国語に直すことに関
しては、稚拙な表現能力でしかないけれども、精一杯意図することを忠実に訳したい
と思います。

これまで数多くの通訳の場数を踏み、忌憚なく話ができる中国人の友人も数多いD氏が、中国人と日本人のコミュニケーションについては「絶対分かり合えない。絶対分かり合えるわけがない、日本人と中国人が」と前置きし、日本人のコミュニケーション方法の

危うさを指摘した。そして、日本の外交の行く末を「心配だ」としながら、「中国にはつきりとものをいえる」人物の通訳を担当したことを例に挙げ、「外交政策が変わってくる」ような対話の通訳ができたことに対し、「意義のある仕事の手伝いができて嬉しかった」と語り、果たせた役割に満足している体験に言及した。

また、通訳規範に関する質問に対して、D氏は「その人が言わんとする、意図することを、ちゃんと、きちんと伝えるということですよね。それが一番……」と答えた。

そして、通訳という仕事の面白さ、自身が通訳という仕事を続けている理由について、「人間観察の面白さ」を挙げ、以下のように語った。

D：でも、私、なんでね、あの、こういう仕事をし続けているのかなって思うとね、やっぱりね、あの、人を観察するのが面白いのね。

筆者：ああ……

D：うん。そこがやっぱりね、あの、一番の楽しみでやってるんじゃないかなっていう気がする。だからといって、その人のこと覚えているわけじゃないんだけど。要するに、その、ま、できない人がそんなようなことを言ってね、その、あの、ブースの中に入っているとき、その、もちろんそれはそれで、その、技巧的に、それから、それできるかできないという意味での満足感是多分あると思うんだ。だけど、その、そこで終わって、人との接触はきつとないんだと思うの。ブースで、「はい、終わり」で帰っちゃうでしょ？

筆者：うん、そうですね。

D：そうすると、私がやっぱり興味を持っているのは、そこじゃないんだよね。私はやっぱりね、その人たちがどういうものを考えたりするのか、血の通った人間なのかとか、そういうことのほうが面白いの。だから、その楽しみでやってるんじゃないかって気がする。このあいだなんかは、フェニックスTV。

筆者：フェニックスTV。はい。

D：うん。あっちこっち行って、それでいろんな話をしたんですよね。だから、そういう時に、まあ、たとえばMさんのところに行ったりとか、それから、あの、面白かったのはあれ、海上自衛隊行ったりとか。そうすると、そこで、その、海上自衛隊の学校の校長先生が出てきて、いろんな話をして、日本と中国の軍事交流の話とかしてくれたりとか、やっぱりそういうのが面白い。

筆者：ああー……。

D：うん。あ、こう……日本と中国は対立しているようなところもあるけど、その実、それぞれの間で、こういうふうな形で相手を、まあ、観察しているというか、交流を持ちながらね、警戒しているというか、そういう交流もあるんだっていうのが分かったりとか。私はそういうのが好きですね。

また、自らが同時通訳をやらない理由は、「スピーチの意図を汲み取り、瞬時に訳出するのは同時では無理」であるためと語り、D氏は、メッセージをきちんと伝えることが通訳の役割なので、同時通訳は『流しっぱなし』の訳出で「ストレスがたまる」ため、あえて、「逐次通訳しか担当しない」とのスタンスを示した。

ただ、それがちゃんと、なんていうのかしら、あの……汲み取らないで言ったら意味が分からないこともあるじゃないですか。ただ、その言っている字面のものをそのまま翻訳したらね、何を言いたい、言わんとしているのか分からないことが、特に日本人の話は多いから。だから、そういう意味で、やっぱりその人が言わんとしていることは何なのかを確認しつつもね、補充しながらいかなきゃいけないというのはありますよね。[中略]

だから、だから私はそういう意味でも、同通っていうのは何かしらと思うのね。だって、あんなのね、あんなのって言ったら怒られちゃうけど、私の性格にやっぱり向かないんだと思うのね。あの、ある程度、完全に100%できないのは当然なわけですよ。それを、まあ、そのままやりっ放しっていうかね、その…… [中略] 私はそうなんです。だから、あの……ちゃんと、きちんと話ししてくれる人が、いさえすれば、その人の言わんとすることをきちんと伝えるということには自信がありますよっていう感じ。うんうん。私にできるのはそれだけよね。うん。その人の話を勝手に解釈して何か付け加えてっていうことも、もちろんするつもりもないし、えー、かといって、その人が、書いた文章をそのまま、あの、相手が聞いて分かるうが分かるまいが、ただ読み続けていくっていうこともしたくない。

上記の下線を引いた発言部分は、一見、相矛盾する内容ともとらえられる箇所であるが、D氏の意識の中では、通訳の「忠実性」と、「わかりやすくメッセージを伝達すること」は

両立可能であると考えていることが示されている。「忠実、通順」は両立するべきものにとらえられており、互いに矛盾するものとは考えていないことを示唆しており、3章、4章で論及した李越然の「準」と同義であるにとらえることができる。

5.2.5 E氏のインタビュー

E氏は東京都生まれの日本語を母語する通訳者である。大学の専攻は中国文学であった。在学中に通訳学校に通学し、大学卒業後、中国の大学へ2年間留学。帰国後すぐに通訳者として仕事を始め、通訳歴は22年を越える。現在はフリーの会議通訳者であるが気象予報士や防災士の資格を持ち、防災関連のボランティアにも従事しているという、異色の通訳者である。

E氏と中国語の出会いは中学時代だったという。

E：出会いはですね、ええと、中学2年の時に、

筆者：え、中学2年…？

E：社会科の先生が、あの、歴史をずっと教えていて、最後のほうで、最後のほうは、最初は丁寧に教えるけど、最後のほう、時間なくなるじゃないですか。で、中国史の現代史のところプリントを配ってくれたんですよ。で、それが、文化大革命はもう終わっていましたがけれども、人民公社のこととか書いてあって、で、これは読まなくちゃ。で、プリントに書いてあったのが、中国が、「中国で国民全員が平等であって、労働に応じて働き、必要に応じて分配する」というのが書かれていたので、「こんな素晴らしい国があるのか」と感動して。

筆者：そうなんですか。

E：それで、中国とか共産主義とか、「その頃は共産主義が輝いていた時代、光を放っていた時代」と、ある学者が言ってたんですけども、まあ、共産圏の国もいくつかありましたし、で、まあ、ベールに包まれていたから、知らなかったんですよ。

筆者：ああ、確かに。

E：ふたを開けたら貧困国でしたけれども、それを知らなかったから、すごく素晴らしいと思って憧れて、それで中国語をやるようになって。

筆者：え、中2の時から。

E：そうです。[中略]で、勉強の話に入っちゃうんですけども、そうすると。中学

2年生の時にラジオ講座を聞き始めて、発音をその時に覚えたと思います。

しかし、高校に入学する頃は、中国に対する熱も冷め、中国語の勉強は大学で再開することにして、次に「気象予報」に興味の的が移っていったという。進路決定の時には、「気象学にするか、中国語にするか、って結構悩んだ」E氏は、結局初志貫徹し、中国語を選択した。

最終的には、でも、中国語のほう、中国語をやるんだっていう考えがずっと強かったので、そのまま、ちょっと迷いもありましたけれども、中国語を勉強することになったんです。

大学では中国文学を専攻したE氏だったが、中国語を学ぶために大学とは別な学校へ通い、会話と作文の勉強を始め、大学4年からは通学学校にも通ったという。その頃、すでにE氏は「将来は通訳者になる」と決めていた、と語る。

筆者：ということは、もう、大学に行っている間に、すでに通訳っていう道は…。

E：もう、あの…。

筆者：もう考えてらした…。

E：考えていました。[中略]だから、あの、語学をやっているからには、通訳が最高峰の仕事だろうと思っていたので。それは大学に行く前から薄々思っていたかもしれないですね。

E氏は中国の大学に留学をしているが、すでに通訳者の道へ進むと決めていたため、在学時代ではなく、日本の大学を卒業してから留学を決めたという。当時、外国人を受け入れていた大学は現在ほど多くなく、留学候補地には地方の都市も含まれており、留学生の希望よりは受け入れ先である中国側の意図が優先される時代であった。地方都市に留学すると、その土地の方言の影響を受ける可能性があるため、普通語（北京の発音を基準とした標準語）の発音習得が難しいと考えたE氏は、きれいな発音を取得するため、北京にある大学に留学したいと希望していた。その目的を達成するために、E氏は留学先で学ぶ大学での専攻をあえて中国語ではなく、経済を選んだという。

E：で、その頃は大学を選ぶことができなかったもので、あの、悪知恵を使いまして、で、あの、たとえばね、ええと、「中文系¹⁶に行きたい」というと、遼寧とか、いろんな、南京とか、いろんなところに分配¹⁷される可能性があったので、こう、ジューッと（留学パンフレットを）見て、経済（専攻）だったら人民大学¹⁸しかないんですよ。

筆者：ああ……。

E：経済は確かね、国際経済だと人民大学しかないの、「それを専攻する」と申請して。で、なんか試験があったんですけど、枠が決まっていたので。で、それで、あの、通知がきて、「人民大学に決まりました」って。「当たり前だ」って。ははは。[中略] そういう悪知恵を働かせて。北京に行かないと、発音が悪くなるんじゃないかと思っ

中国の大学は日本と同様に4年制の大学のため、4年間通学し単位を取得して初めて修了となるが、「4年間通学するつもりはなかった」E氏は、日本の大学で単位を取得している教科については中国の大学でも単位を認めてもらい、単位未修得の授業を中心に受けさせて欲しいと交渉し、見事成功している。

E：「数学とかね、そういうのはいいので、あの、できれば自分の取りたいカリキュラムを半年ごとに選ぶようなことはできないか」という話をして、で、学部の先生が困って、担当の人が。「学部の系¹⁹主任（学部長）に聞かなくっちゃ」って言った。そしたら、「あ、そこに系主任が」って。系主任が来た、学部長が来たんですよ。それで、「どうですか」って相談したら、「可以（よろしい）」って言って、決まったんです、それで。

筆者：えー、そうなんですか。

E：それで、あの、学期が始まる前に、ええと、学部の3年、4年生と、大学院の、あの、カリキュラムの表をもらって、時間が合うように組み合わせて、これを、「これこれを履修します」って届けて、で、あとはまあ、2年目には論文も書いて、それで一応卒業という、あの、学位はないんですけども、一応、まあ、修了しましたと。

¹⁶ 中国語で「中国語学科」のことを指す。

¹⁷ 中国語で「配置する、配属する」の意。

¹⁸ 正式名称は「中国人民大學」。中国北京にある国家重点大学の一つ。

¹⁹ 「系」は中国語で「学部」を指す。

筆者：修了。え、そうですか。すごい。まあ、要はすべて交渉術で。

E：交渉術ですね。そうなんです。それで、授業ビッシリ入れて、朝の8時から夜の10時まで。

E氏は帰国後、再び通訳学校に通い始め、すぐに通訳者として仕事を開始する。最初に担当した仕事は、「キリスト教宗派の会議通訳」だったという。その後は、主にODA関連の技術系通訳を担当する機会が増えていく。

E：(当時)まだJICAがODAを対中向けにやっていた頃だったので、JICEの試験を受けて、受かったので、そこからの仕事がすごく多かったので、

筆者：ああ、そうですか。

E：まあ、稼働も結構多かったし、すごく勉強にもなったので、最初にそのステップがあったのがすごくラッキーだったと思うんです。

しかし、E氏は、技術系通訳をする中で、通訳よりも技術に興味を持つようになったと語った。そしていつしか何も蓄積されない通訳という仕事に嫌気がさした、と言う。

E：嫌になったというのはね、あの、やっぱり、JICAの仕事を中心にしたりとか、あと、その延長でいろんなところを紹介してもらって、技術系の仕事をする人が多いんですよ。それで、やっぱり私も技術的なものは好きですし、あとはその、なるべく中味を理解して、こう、通訳をしたいということで、で、その頃はインターネットも普及……なかったので、

筆者：はいはい、そうですね。

E：専門書を買って勉強したりとかしてて、そっちのほうが面白いんです、実は。技術的な内容のほうが。で、技術者がすごくうらやましくて。何年も何年も仕事をしていけば、ひとつの技術がどんどん蓄積されていくでしょ？ 通訳ってそういうのがないんじゃないかと思って。

筆者：ないですからね。ないですよ。

E：広く浅くで、このプロジェクト終わったら、もう次のものを作って、せっかくこの、たとえばね、空港の建設とか土木とかそういうのを覚えても、何も蓄積されてい

かないと思って、すごくつまらなく思えて。なんか道具じゃないかと思って。で、しかも、なんか、忙し過ぎたっていうこともあって。忙しいと、やっぱり、やっぱり蓄積されないから、

筆者：そうですね。

E：なんか自分の、自分を切り売りしているような気が本当にあって…。

その後、E氏は高校時代に選択を迷ったもう一つの職業である気象予報士の試験を受け合格、一度通訳の仕事からは遠ざかり、気象予報の仕事に従事する。その間2年ほど東京を離れ、地方で仕事をしていたという。しかし、仕事の空き時間に、もともとつきあいのあったエージェントからの翻訳依頼を受けるなど、翻訳業務は引き続き行なっていたため無理がたたり、過労で体調を崩して東京に戻る事となる。その後は再び通訳者として仕事を再開し、今日に至る。現在は会議通訳を主に行っている。

筆者：あの、たとえば、その会議通訳をね、ずっとやってらっしゃって、何か、自分のその通訳の基準というか、規範というか、何か訳出の時にこうやるべきだとか、そういうものって何かありますか。

E：訳出だったらね……。訳出の時には……。うーん……。基本的には忠実に訳すのではないですね、考えてみたら。分かりやすくするっていうのが、

筆者：分かりやすくする。ええ。

E：一番ですよ。だから、だらだらする人は、結論を最初にまとめて、その、まあ、逐次だったらあれですよ。だらだら言って、ひとかたまりあって、結論がこの辺にきてたら、それを先に言っちゃうとか、そういうことは……。そうやって組み替えたりすることはあります。あとは、もう、あの、どなたもあると思いますけれども、揉めているとか、険悪であるとか、そういう時は、あの、ちょっと失礼な言い方を回避したりとか、うーん、あとは場を和ませるように。でも、中国語ってそんなに失礼って……。丁寧とか丁寧じゃないところ、ないじゃないですか。

筆者：あんまりね。そうですね。

E：だから、言い方とか雰囲気だけなんですよ。

そしてE氏は、時には通訳の場を「円滑にするために、和らげたり」するために、「私

自身も中国側の人と個人的にたくさん話をして、仲良くなって、話を聞いてもらいやすい環境にする」と語り、自らが主体的に環境づくりに尽力すると語った。そしてこれらの行動の根底には、自身の歴史認識の問題があることをうかがわせた。

E：そうだ、最近の例では、日系企業で世界的に展開をされていて、で、中国に支社があって、中国と電話会議をすとかいうのが結構あったのと、最近のたとえばITとかベンチャー系とかは、社長がワンマンで、で、社長に、まあくっついてる人も、それもワンマンじゃないんですけども、その人たちもキツイですよ。で、もう決断も早いし。で、あの、中国の現地法人の人たちに対して、ものすごい高圧的なもの言い方をするところがあるんですよ。たとえば、店舗を新しく出しますっていう時に、「この賃料はもう少し下がらないの？」とか、「ここに今出しているのがベストな数字なわけ？」みたいな言い方をするので。で、その、私が行く前に中国語ネイティブの中国人が行ったら、すごくビックリして高圧的だと感じたということであ…。

筆者：それは日本語でしゃべっているわけですよ。

E：そうです。で、それを中国語で。別にそれは、たとえば、あの、「賃料高過ぎるんじゃないの？」とか、「これがベストなわけ？」とか言って、それ、中国語で普通に言えば変じゃないんです。なんか高圧的ではないんですけど、ただ、通訳者が言って、すごい中国語ネイティブの人は怖いと感じたみたいで、それをなんか、なんとなく、日本人が中国人に高圧的に何かを言うっていうのは、これまでの歴史的経緯から考えても、ちょっとまずいぞと。

そして、そのような行動に出るきっかけとなったのが、長年勤めた ODA 関連の通訳だったと語った。そして対日感情、対中感情が交渉の障壁となる事に苦言を呈した。

E：そうですね。もう、なんか、そういうのが染みついちゃってるのかもしれないですね。なんか「揉めないでください」という感じで。で、特に、だから、「どっちかが怒って、どっちかがかわいそう」というシチュエーションを和らげたいという気持ちがあるんだと思います。

筆者：それは……どこからくるんでしょうね。

E：それは ODA で揉めたからかもしれないですね。中国人に日本人がさんざんいじめ

られたとかあって。今は逆で、特に日本人が中国人になんか命令してなんとかっているのは、それは中国人がもしひどい言い方をしているのが、日本語分かっちゃう人ならしょうがないですけど、それ聞いたら、なんか日本人から言われたら余計嫌な気持ちするでしょ？

筆者：余計にね。そうですね。

E：もしかしたら背景に、その、もともとのその日中関係の悪さ、お互いの対中感情、対日感情の悪さっていうのは、ちょっと離れると、やっぱり日本人同士で、こう、作戦会議とかっていうと、「なんか中国人は」とかって、まあ、そんなに言わないですけどね。中国人のほう行くと、結構ひどいこと言っている人もいる。

筆者：そうですね。

E：そういうのがあると交渉の障壁になるので、そういうのをやめてもらいたいと思っ
て……。

通訳規範に関する質問にE氏は、「忠実ではない」と語り、忠実な通訳は「当たり前」であり、「できなければいけない」としたうえで、コミュニケーションを円滑に行うために「忠実」を「第一に考えていないかもしれない」自身の訳出姿勢に言及した。

E：え、忠実にできるのは当たり前。そうだよ。できなきゃいけないことですよ。

[中略] その場にいる者として。うん。まあ、だから、橋渡しでもないですけど、仲立ちとして両方の言葉を分かるのは、もし1人しかいないのであれば、「お互いに喧嘩しないでくださいよ」みたいなところがあるのかもしれないですね。

筆者：そうですね。ふーん、そうですか。

E：うん。確かにね、だから、忠実ということを第一に考えてないかもしれないです。で、聞きながら、逐次の時とか、聞きながら「なんて言ったらいいかなあ」っていうのを、やっぱり考えているところがありますね。

筆者：それは、たとえば、わかりにくいっていう発言の場合……。

E：あ、わかりにくいとか、わかりにくいとか失礼だとか、そういう時。わかりにくいもありますね。わかりやすい言葉……わかりやすいっていうのも、こう、雰囲気の良いにつながるじゃないですか。

筆者：ああ、確かにそうですね。そうですね。

E：だから、効率は・・・効率よく進むっていうのも、やっぱり雰囲気がいいほうが、効率がいいですね。

[中略]

E：司法通訳とかだったら、忠実のほうがいいかもしれないですけども、

筆者：うん、そうですね。

E：でも、人と人が何かを、こう、交流する場であるならば、やっぱり場をよくするっていうのが、自分でできる範囲でできるのであれば、ということを考えているかもしれないですね。

筆者：それってやっぱり、あの、なんていうんですかね、その「両国の関係をよくしたい」という大前提があるんじゃないですか？

E：そうなんですよね。で、あともうひとつは、忠実っていうのは、できて当たり前だと思うんですよ。だから、内容は全部ちゃんと盛り込んだ上で………できているかわかんないですけど、でも、その上で、その関係をよくできるような、雰囲気をよくするようなやり方にするということができればいいんじゃないかなと思いますけどね。

E 氏の考える通訳者の役割は「スタッフ」だと語り、クライアント側のスタッフとしての立ち位置を強調した。

E：どっちもスタッフなんですけれども、で、あの、その、もうルーチン的になっている会議っていうのは、それはもうきちんと、その、大きな会場ですけども、その会議を、まあ、ほとんど一方的な講演ですよ。で、それを、まあ、ちゃんとやること。それは別に陰悪になったりとかしないで、それをちゃんと忠実に。

筆者：まあ、そうですね。そうですね。

E：でも、分かりやすく。台湾人とかもロジカルなところが無茶苦茶なので、それを分かりやすく伝えるとか、リレーがあることもあるので、なおさら分かりにくくしてしまうと、英語の人がかわいそうですから、そういうところは考えると思います。だから、それもやっぱり効率よく、分かりやすく、このたくさん聞いている人に伝えるっていうことができればそれでいいと思いますし。もうひとつは、その、遂次でお客様をお迎えするという場合は、その主催者の会社とか団体の一員になってとけ込んで

しまうことが必要だと常に思っています。

[中略]

E：だから……。私は「職人」じゃなくて「サービス業」だと思ってるんですよ。芸人であったりとか、サービス業寄りだと思うんですよ。だから、いろんなものに形を変えなくちゃいけない。

筆者：変幻自在ですね。

E：そう。そう。そうだと思うんですよ。だから、たとえばどっかの会社がお客さんを迎えて接待するなら、その会社の社員みたいにならなくちゃいけない。[中略]で、イベントのスタッフとして入るのであれば、そのイベントの主催者にならなくちゃいけないですよ。[中略]そうですね。だから、職人……「職人以上」って言ったら職人に失礼なんじゃないか。

筆者：そうですね。うん、うん、うん。まあまあまあ。

E：職人的なことは、やって当たり前なんです。[中略]だから、そこでスタッフとして果たす役割は訳出だと。だけど、その中の、そのチームの一員なんだっていうことで。だから、そのチームの一員に加えてもらえるっていうことがすごくうれしいですし、楽しいと思います。

E 氏の語りからは、忠実な訳出は最低限の規範であり、忠実性の保持＝内容を全部盛り込む、という行為は果たした上で、過去の通訳経験や自身の価値観などにより産出された「その場の雰囲気保持、円滑なコミュニケーションの達成」という通訳行為の目標が、自身の規範意識としてすでに内在化され、この規範意識にもとづいた訳出を行いたいと願う姿勢が垣間見える。

5.2.6 F 氏のインタビュー

F 氏は日本語母語話者の日本生まれの会議通訳者である。両親の影響で幼少期から漢文などに多く触れる環境で育ったため、漢文に興味を持ち、大学時代は中国哲学を専攻する。卒業後は香港の大学へ留学し、帰国後は自らの求めた道ではなかったものの、商社の通訳者・翻訳者として就職。その後フリーランス通訳者兼通訳学校講師となり、台湾の大学でも教鞭を執る。現在は会議通訳者、大学教員、研究者である。

F：うちにですね、唐代詩人選集があったんですね。うちの父、両親が、漢詩が好きだったので、だから、普通はまあ絵本の読み聞かせとかしますよね、小さい小学1年とか2年とか、幼稚園とか、うちの母は陶淵明の詩が好きでね、その唐代詩人選集、まだ家にあるんですけど、父親のもんですけど、そこから適当にピックアップして漢詩を読んでもくれたりしてたんですね。

筆者：えっ、それは小学生のとき・・・

F：もっと小さいとき、だから意味は全く分からないですよ。

筆者：ええー。

F：だから、漢文読んだ、耳から聞いた漢文のリズムっていうのは、結構、刷り込まれているんですよ。

筆者： ああ、ということはじゃあもう小学校に入るくらいには、普通に古文とかが読めるようになっていた・・・

F：いや、読めはしない、意味も分からないし、読めもしないけれども、その耳から入ったリズムみたいなもの。[中略]あると思いますよ。実際には漢文っていうのは中学以降しか習わないんですけど、ああこういうことだったのかって分かるわけね。なんか、古今和歌集でも、陶淵明の詩でも、李白の詩でもいいんだけど、「あっ、聞いたことある。これは、こういうことだったわけね」っていうのが、それは思春期以降に分かるわけですよ。13、4歳以降に・・・。

F氏は、大学では漢文を学びたいと考え、東洋哲学科に進んだ。そして、コマ数は少ないが、大学で初めて中国語に触れることとなる。

F：大学で、あの漢文を学べるから、中国哲学科だから、第1外国語は中国語、第2外国語が英語っていう、普通とは逆になるような感じです、はい。哲学と文学と合わせて、2つの専攻合わせて30人だから、15人、15人しかいないので、「君たちは漢文さえ読めればいいです」っていう学科ですから、ほかのことはどうでもいい。

筆者：で、将来的には、じゃあそちらのほうで教鞭をとってこうということで・・・

F：教鞭をとるつもりはなかったんですけど。

筆者：あっ、そうなんですか。

F：はい。あの、漢和辞典の編さんとか、ああいうことをしたかった。

大学の卒業論文執筆のために現代中国語知識の知識が必要になった F 氏は、当初卒業論文執筆のための参考資料を読むという目的のために中国語学習を始めたという。

F：ね、あの写真本とかだったら、漢字だけなんですけど、そのほかに印刷されたテキストは、論語なら論語で、論語のこう、一句があると、その下に細かい字で注釈が出てるじゃないですか？

筆者：はい、はい。

F：その注釈が案外、現代中国語的なものなんです。現代っていうか、近代？

筆者：近代、はい、はい。

F：近代中国語で、そうすると返り点打つのがとても苦勞するんですね。

筆者：うーん、そうですね。

F：もう、無理やり返り点打って、魯迅の作品にも返り点打って読んでいたぐらいだから、返り点打って無理やり読んでいたんですけど、どうもこううまくないので、あの、古典について書かれている注釈とか、評論とか、そういうものを読むために現代中国語が分からなきゃいけないですねっていう話で、それで、学校でやっているだけでは、全然足りないのね、それは、大人の書き言葉の現代中国語読みには、それで、あの大学3年のときに、専門学校行ったんですね。

大学卒業後はアルバイトをしてお金を貯めてから、大学院への進学を考えていた F 氏だったが、実父に香港への留学をお膳立てされ、それに従い、香港へ留学することになる。

F：あの一、私が中国語の専門学校に通って勉強していることを、どういうふうに思ったのか分からないんですけど、もうちょっと本格的に勉強させたいと思っただけで・・・

筆者：あっ、お父さまが？

F：はい。勝手に話をつけて帰ってきちゃったんですね。「行け」っていうことなんで、しょうがないからって思って、そんなに行きたかったわけじゃないんですけど、読み書きできればいいんですから、私は、しゃべるのとかあんまり好きじゃないですね、もともと。だから、それこそさっき言ったように辞書の編さんとか、あまり人と会わ

ないで、漢籍に囲まれて穴みたいなところにいるような仕事が自分には向いているとずっと思っていましたから。

筆者：そうですか。

F：はい。

筆者：で、そうお膳立てをされてしまって・・・

F：されてしまったので、しょうがないから、行ったんですね。[中略]

それで、あの中文大学²⁰の、その、一応留学生、外国人の留学生向けの語学センターがあるから、そこに一応入ったのね。でも、2年間、3年と4年のときに専門学校でやってたから、あの、7段階のクラスの内の4番目、そうですね、上から4番、ちょうど真ん中ですね、あの4番目に編入さしてもらって、えっと今まで使っていた教科書を見せたり、インタビュー受けたりとかして、「じゃあ、4番目」とかなって、で、4、5、6、7やって帰ってきたんですね。

筆者：そうですか。じゃあ、一応終わって・・・

F：で、もう、あの、現代中国語でペラペラしゃべるなんてなんていうこと目的には、あまり思っていないから、まっ、「やれ」って言えばやるんだけど、そんなに気が進む勉強でもないんですから、でも、聴講で文選の授業とか受けたんですけど、ちょっと分かんなかったです、やっぱり。

筆者：そうなんですか。

F：はい。ほかの大学院生たちが言っていることも、あまりよく分かんないし、あの読めるのは漢文だけで、先生の講義の内容も聞いてもあまりよくピンとこない。

筆者：行ってたのは、1年半？

F：そうですね。だいたい1年8カ月ぐらいになったですかね。

筆者：そうですか。

F：でも、その間、ちょっと帰ってきてはバイトしてとかいうのもあったから、そんなみっちりじゃないですけど。

筆者：ああ、そうですか。いやー、そのモチベーションを保持できた・・・

F：モチベーションなんかないですよ、それは。

筆者：なかったですか。ははは。

F：そういうところに、そういう境遇に放り込まれたらサバイバルするしかしょうが

²⁰ 正式名称は香港中文大学。香港大学が英語で教育を行うのに対し、香港中文大学は中国語と英語両言語で教育が行われる。

ないじゃないですか。

F氏の発言には、「しょうがない」という言葉が散見された。ここから、人生の岐路に立たされた時に、自らの判断というよりは、実父など他者が関与して方向付けをし、そしてそれを素直に受け入れていたF氏の姿勢を見ることができる。

帰国後、再度中国語の専門学校に戻り、中国語の勉強を「趣味的に」続けていたF氏は、その学校の恩師の伝手で、商社への就職を紹介されることになる。

F：やっぱり、顔を立てなきゃいけないから、もう面接に出掛けたんですね。

そして、えっとあれはですね、多分中国の北のほうで育ったバイリンガルのおじさんだと思うんですけど、上司に、後に上司になる人。その出てきて、中国語で面接があってね、履歴書、「じゃあ履歴書、中国語でね、読んで、説明して」ってそういうような感じ、それであの採用されたもんですから、入っちゃったんですね、横入りですよ。まあ、あの、のちのちのことも考えたら、その中国と全く縁のない仕事をするよりはね、そのそれこそ、単純なバイトをするよりは、いいんじゃないですか。

筆者：そうですね、そうですね。

F：中国人とか中国語とか触れ合うチャンスも多いですし・・・

入社後は出張が多く閉口したが、出張報告を書くこと、そして、商業通信文の翻訳作業を通して、中国語例文のファイリングをしていたところ、思いがけず上司の目にとまり、そのファイルが中国語と日本語商業通信文の例文集として出版されることになる。

F：そうですね。で、出張について、お客さん連れて出張についていくっていうのが、だんだん増えてくんですね。それで、なんだろう、自分の気に入ってた仕事は、出張報告を書くことですね。[中略] まあ、翻訳とか通訳もある意味面白いのだけど、その、あの出張中にどこに行って、何をして、どういう話をして、こういうことが起こっててということをレポートにまとめるのがすごい好きで・・・

筆者：そうなんですか。

F：面白い仕事だなと思ってた。[中略]

F：だから今でもちょっとねえ、あの通訳って、あとに記録を残す仕事じゃないって、

建前上教えるわけじゃない？

筆者：そうですね。

F：ノート取るけど、それを再現して議事録にしなくていいって、でもそれをまさに自分やってたんだけど・・・

筆者：あー、そうなんですか。

F：で、その中には、例えばこういう言葉遣いだから誤解が生じるけど、これをこう言い換えれば、あの分かりやすいというようなことも、メモとしては残していたんです。

筆者：メモで残してたんですか。それは貴重ですね。

F：それから、翻訳の文章がありますね、商業通信部の翻訳、それも全部ファイルにして集めておいて、で、あるとき、いいこと思いついたと思って、こう切り張りしてね、始めの言葉こんな感じとかね。で、あのおわびするときにはこんな感じというの、全部切り張りして、それ本になったんですよ。

6年間商社で社内通訳翻訳の仕事に従事していたF氏は、ある時、通訳学校の短期講座に参加する。後に、その通訳学校の紹介で、初めて国際会議の同時通訳を経験し、会議通訳の魅力を確認する。直後の1989年、中国で天安門事件²¹が起きた。日中関連業務はその影響を受け、社内の仕事がぱったりとなくなったF氏がフリーランス通訳者としての独立を考えたのはこの頃だったという。

F：あの、そこで、ええと、すごい話なんだけど、まだ会社員だったのに、電話がかかってきて、国際会議のね、通訳をね、「1人足りないから、入りませんか」って言われたの。なんかすごく大型の会議で、たくさん人数が必要だったのね。でも、まあ、誰でもよかったんじゃないかと思いますが、で、やったことないけど、それこそ同時通訳なんか、教室の中でしかやったことないですから・・・。

筆者：ああ、そう、じゃあ、OJT²²みたいな感じで・・・。

F：と、思いますよ、OJT だったんだと思うんですけど、いきなり、えっとやったんですよ。そのときは、えっと誰と、Yさんがここにいる、Hさんがここにいる、なんか

²¹ 1989年6月4日未明に北京市天安門広場で起きた事件を指す。民主化を求める学生中心のデモ隊に対する軍の武力弾圧が行われ、多数の死傷者を出した。その結果、中国は西側諸国から外交的制裁を受けることになり、日本も対中円借款停止、貿易関係の中断などの措置を実施した。

²² OJT とは on the job training の略称で、仕事をしながらの訓練を指す。

挟まれて座らされちゃって、できるところだけやればいいよみたいなね。

筆者：そうなんですか？

F：だから司会とか、途中で「これ原稿あるから、これちょっとやってみ」とか、そういうふうな、なんかほんと、なんていうんですか、みそっかす扱い、見習い扱いみたいなので、ちょっとやってみて、すごくできなかったのね、めちゃくちゃと思って、自分で、最初はもう失敗するに決まっていますけど、「困ったなあ」と思ったんですよ。それでも、さっき言った話じゃないんですけど、毎日ね、満員電車で揺られて遠いところ、会社通って、それで月給いくら、年収いくらぐらい、フリーになればずっと楽に、ずっとたくさん稼げるよ、みたいなことを言うんです。

で、そのときもらったギャラが自分としては破格に高かったですよ。こんなにくれていいのって思うほど、まあ、国際会議の通訳ですから、OJTで多分ほかの先生の半分くらいだと思うんですけど、それでもすごいなって思ったのね。そんなに、一生懸命働きたくないの、もともと、でも、ほら、やることはさ、あの一応の水準になってないと嫌じゃないですか。

筆者：はい、はい。そうですね、そうですね。

F：いくらあの、いいかげんでも、ある程度はもう、自分として合格点が取れてないと、嫌じゃない？だから一生懸命やっちゃうじゃないですか。一生懸命やっちゃうと、時間もなくなるし、エネルギーも奪われるし、で、同じことをやるんだったら、じゃあ、フリーのほうがいいな—と思ったのと、もう一つは、天安門事件で、あの89年の天安門事件で、あの、中国関係の仕事、だあ—って減って、会社に行ってもあまりやることなくって・・・[中略] そしたら、その仕事がなければ、あの、ほかの女子社員と同じ仕事をすればいいわけなんだけど、それができないのね。今までやらされてこなかったから、今まで全部翻訳とか通訳でやってたので、通関書類とか書けないし・・・。

その後、企業を退社し、フリーランス通訳者として通訳を行っていたF氏に、台湾での講師の仕事が舞い込む。F氏は興味を引かれ、講師を引き受ける。帰国後、再びフリーランスの通訳者・翻訳者として仕事を再開したF氏は、通訳学校で教鞭を執りながら、大学院に進学し、研究活動にも従事することとなる。

F：だから輔仁大学²³も ISS を通じてね、Y 先生が ISS でちょっと同時通訳の訓練を受けたんですよ、あの、翻訳研究所を立ち上げるに際して、その縁でね。

ほかの先生にも聞いたらしいんだけど、会議通訳をしている先生たちは、みんな、あの、仕事を失うの怖いでしょう。1年間も日本を空けたくないって、全員断ったんですね。でも、私はちょっと興味があったんですね。その通訳教育法みたいなことを全然やっていないから、どうやって教えているのとか、ちょっと興味があって。で、仕事はさ、フリーで翻訳とか通訳とかしていると、絶対この仕事を失いたくないとかいうことでもないの…。[中略] だから、あの、あつ通訳、翻訳に関しても、まだこんなに勉強できることいっぱいあるんじゃないですかというのが、そこで分かるじゃないですか、ほかの先生方は大学院出て、博士取ってとか、そういう人が、わーっついて、自分だけなんか単なる会議通訳の経験だけできているから、まっ、教えてることはね、中国語から日本語への通訳とかだから、まあ、教えるのはいいんだけど、でも、教授法とか分からない、理論も分からないで、ただ経験だけに頼って教えると弱いですね、やっぱりね。

文化的差異が原因で通訳に支障が出たことがあるか、という質問に対して、F 氏は「ロジカルでない発言が一番難しい」と、以下のように語った。

F：文化的背景が違うより、その個人個人のロジックがグズグズな発言とか、自分が理解できないことっていうのが一番困るんですよ。[中略]だから、時々、日本人の中にも、日本語をしゃべっていながら、周りの人に伝わっていないっていう人がいますよね。

筆者：あります、あります。

F：それはちょっと、訳したときに、このままグズグズで分かりにくく訳しちゃったら、どうなるんだろうって思うときがあるのね。

筆者：そういう場合とかって。

F：そういうときには、自分なりに解釈しちゃうんですよ。多分こういうことが言いたいのでしょうかっていう、あの、エイヤッって判断して、これでいっちゃう、私の解釈でいっちゃうっていうふうにしかならないですよ。

²³ 正式名称は天主教輔仁大学。台湾新北市にキャンパスを構える私立大学。

筆者:そうですね。だから本当にあの、文意が破たんしている状態で、それを訳せ……。

F:最初のうちは、確認すると思いますよ、こういう意味ですかって、でもずうっと訳の分からないままだと、もういちいち全部聞き返すわけにいかないの、ちょっとじゃあ、申し訳ないけど預けてもらってって、思うときがあるんですよね。

同時通訳やその他の会議の場での文化的差異についての訳出については、F氏は「その時々です。自分で説明とか補足とか加えちゃっていい場合と、分からない、お互いに分からないままにしといて、本当に知りたければ質問をするでしょう、って思うときと、両方あるので」と答え、「様子を見ながら」判断すると語った。また発言者の中には、「通訳者に頼り切ってしまう人がいる」と指摘し、その場合は言われたことしか訳しませんからという姿勢では「評価も悪くなるだろうし、雰囲気もおかしくなりますよね」と語り、臨機応変に対応することを示唆した。

そして、F氏は「通訳者はいくら見えない存在だと言っても、実際の現場では確実に見えちゃってる」存在であると語り、通訳の不可視性という論に疑問の意を投じた。しかしながら、通訳の規範としては、「目立たない」ことを挙げた。

F:まあちょっと、あれだよ。矛盾するみたいに聞こえるかも……、やっぱり出しゃばらないですね。そこにいるんですけどね、目立たない、だから服装とかも目立たないように、変に目立つと、派手だと。

筆者:まっ、そうですね。

F:派手でも、地味すぎても、両方とも駄目。

通訳者が訳出の際にはしてはいけないことに関して、F氏は以下のように語った。

F:自分の意見が入っちゃう。

筆者:自分の、あー、はい、はい、はい、はい。それって、さっきおっしゃった解釈って部分と……。

F:そうですね。だから解釈するのと、「自分はこう思う」っていうのは、また違うんですよ。

[中略]

F：自分が解釈したというのは、私はこのように聞いたっていうことを、ただ再現するっていうことだけであって、それはまあ、解釈なんですけれども、自分がこのように聞いたっていうことを言うのと、それは通訳なんですけど、あの、私はそれを聞いてこう思った。ということとは、また別でね。こういう凶悪な犯罪があったんですよということを伝えてもいい、こんな凶悪な犯罪は言語道断ですね、と言っちゃ駄目ですね。

F：全然なかった材料が入っている。ここレモングラスしか入ってなかったら、レモングラスだけの通訳しないとイケないでしょう。これの中にハイビスカス入れてみたりとかしたらちょっと困る。

筆者：そういうことですよ。

F：味が変わってしまう。効き目も変わってしまう。

筆者：うん、うん。そうですね。そうするとやはり、ある意味忠実について、話者のスピーチを、内容に忠実に。

F：言われたことに忠実に、ですね。

筆者：そうですね。言われたことに忠実に、そうですね。

F：言われたことと、本当に言いたいこと、違うかもしれないけど・・・

筆者：そうですね。

F：でも、あくまでも言われたことしか訳せないの。うん。相手がどう受け止めるか、聞いてる方がね、聞き手がどう受け止めるかっていう問題もあるのでね・・・。まあ、言ったことだけ訳すんだけど、聞き手がそれをどんなふうに受け止めるかまで考えるとちょっと難しいですけどね。

筆者：そうですね。

F：でももし、その言葉の真意が分からなければ、聞いてる人がまた問い返してくれるの期待するしかないんですよ。

また、F氏は発言者の言うことをその「キャラクターが乗り移ったように」訳していたら、「なんでそんなこと、通訳さんに言われなきゃならないんですか」と聞き手に反論された体験を語り、以下のように続けた。

F：まあ、私が通訳をするときに結構、なんかキャラつくってんのかもしれないです

よね。

筆者：えっ？

F：口調とかで。

筆者：そうですか。

F：うん。

筆者：というのは…。

F：淡々と訳してないのかもしれないですよ。だから余計に…。

筆者：淡々というの、何が淡々かっていうのが分からないですけど。

F：うーん。目立っちゃってんのかもしれないですね。その口調とか、声色とか…。

筆者：声色？えっ、例えばそのスピーチが男性だったら、男性っぽくとか、じゃなくて？

F：えっと、例えばそのスピーカーがおじさんでね、うちの娘がこんなこと言うんですよみたいなことで、娘っぽく言っちゃったりとか。

[中略]

F：一番、通訳がうまくいくのは、話している人の、その考え方の道筋に乗れて、共感できたときじゃない？

筆者：そうですね。うん、うん、うん、うん。

F：その共感が、自分はできているって思ってる状態だと、うまく通訳いくんだけど、それ正しいかどうか確かめる術はないですね。

[中略]

F：どういうとき、うーん。やっぱりちよつとこう、話し手がしゃべっていることと、隔靴搔痒の感があるときは、駄目なんだよね。やっぱり一体化しないと。

F氏は、「通訳者は目立たないこと」を規範に挙げたが、実際の現場で出来が良いと感じる通訳は、話し手に共感し、一体化ができたときであるとも語った。そして、出来が良いと感じる訳出の場合、淡淡と訳出するのではなく、話し手と一体化ができており、話し手の内容に矛盾がないよう口調や声色を変えるため、時には「目立っちゃってんのかもしれない」とも語った。これは規範として意識している「目立たないこと」よりも、通訳者の本分である「伝わる通訳をする」という規範意識が内在化されており、その達成のためには「話し手の口調をまねるなどの方法で一体化を図る」が、「一体化する故に外部からはか

えって目立ってしまう可能性」も潜在的に容認している姿であると推察される。

5.3 分析

本章では、中国語、日本語を母語とする通訳者各 3 名の語りから規範意識を概観した。桜井(2012)は、「トランスクリプトの分析には、まず、語り手がよく使う言葉を拾いだして、語り手が使用する基本的な概念を把握する必要がある」(p. 95)としている。ここでは、語りにおいて通訳者本人が明示したあるべき姿としての通訳規範を「規定性規範」として挙げ、語り全体の意図、特に「語り手を表す表象的な表現」(桜井, *ibid.*: p. 96)から、「実際の規範」を表すキーワードを抽出した。

それぞれの規範意識を表すキーワードは以下に示す通りである。

通訳者	母語	規定性規範（語りにおいて本人が明示した通訳規範）	実際の規範（語りの中で実際の通訳行為に現れた規範意識）
A	中	忠実、空気、誠実	場にふさわしいコミュニケーションを重視する
B	中	忠実、信達雅、簡潔かつ迅速な聞きやすい通訳	話者以上に感情を込める、文化的衝突を回避、「目的達成」というクライアントの利益
C	中	忠実（時と場合による）	文化衝突が起きないように配慮する
D	日	意図するところを忠実に、言語への忠実（忠誠）とわかりやすさの両立	正しい外交政策を実現する
E	日	円滑な関係構築（忠実は最低限実現させるべき必要条件）、職人ではない	わかりやすさ（忠実ではない）、良い雰囲気作り、サービス業
F	日	目立たない（不可視性の実現）、自分の意見を入れない	話し手と一体化する、解釈して訳す

表 5.1 調査協力者の「規定性規範」と「実際の規範」を表すキーワード

次に、インタビューの分析の焦点から、それぞれの規範意識を見ていく。

5.3.1 通訳経験年数による規範意識の内在化

調査協力者である日本語を母語とする通訳者の経験年数は 30 年、25 年、22 年である。一方、中国語を母語とする通訳者の経験年数は 30 年、22 年と同様だが、C 氏のみ 2 年と短い。規範意識が通訳の経験により形成されるのであれば、経験年数がもっとも浅く、最近まで通訳学校に通学していた C 氏の規範意識は、王 (ibid.) の規定性規範を通訳規範として認識している可能性がある。C 氏自身もコミュニケーションを円滑にするために原文を超えて行った通訳を「通訳学校で講師から教えられた」規範に則った訳出である、と語っていた。C 氏の語りからは、自らが通訳学校へ通学する前は「通訳はこうあるべき」という規範は全く意識していなかったと思われる。しかしながら、合計で 1 年程の通訳学校への通学と数回の通訳の現場で、すでに原文に忠実に訳すケースと調整を行うケースを体得している。そしてそれぞれの状況の判断は自らが主体的に行っている。

「当初はクライアントの利益を考えた訳出を行っていた」A 氏は、そのクライアントから否定的な評価を受け、数回仕事を失うことになった。通訳経験を積み重ね、クライアントやその他の聴衆から求められている役割を認識していき、その過程で「空気（という存在）を越えることはしない」との規範意識を持つようになったと語った。これは、規範意識は通訳経験を積むにつれて変化していくことを示している。

最年長であり、最も長い通訳経験を持つ B 氏は、長年通訳者を派遣するエージェントとしても活動しているため、クライアント側、通訳者側の両面から通訳規範を捉えており、インタビュー開始直後、通訳の基本として「信達雅」という厳復の翻訳規範を語ったが、その後自身のことばで語った規範意識に関する内容は、50 年前の姜椿芳『通訳の心得』と李越然の「准顺快」を彷彿とさせるものであった。

本研究における通訳者の語りから、通訳経験を経ることにより、規範意識の変化が起こることが示された。これは、「教師、先輩から教えられた、伝授された通訳規範」「クライアントの期待規範」が自身の規範意識に変化し吸収され、内在化していく過程を表わすものといえる。

5.3.2 通訳者の仕事のフィールドと規範意識

仕事のフィールド（中国もしくは日本）による規範意識の差異に関しては、中国を現場とする仕事の方が、C 氏が語ったような「特殊な場合」が多いことが示唆され、訳出行為が「原文を越える」訳出になりやすいことが示された。また、中国をフィールドとしてい

たB氏は「通訳を頼まれたときは、『どのような方向に持っていきますか?』と(クライアントに)聞くこともあります」と語り、通訳者は主役ではないものの、話者が方向性を決めるのではなく、通訳者も話の方向性に積極的に関わる可能性を示唆している。換言すれば、中国というフィールド、中国の通訳翻訳史に裏打ちされる通訳ユーザーなどの期待規範など複合的要素が、通訳者の主体性が積極的に発揮される現場を作り出していると考えられる。

一方、日本の通訳現場では、クライアントから事前に関連資料や原稿の提示、もしくは事前にレクチャーを受けることはあっても、クライアントの意思が事前にフリーランス通訳者に伝えられることは、長期的、定期的に請け負っている企業の業務以外は稀であろう。F氏が語ったように、「最初のうちは、(クライアントに)確認すると思いますよ、こういう意味ですかって、でもずうっと訳の分からないままだと、もういちいちいち全部聞き返すわけにいかないの」結果的に自らが解釈して訳すという、いわば消極的主体性を発揮せざるを得ないのが日本のフィールドであるといえる。

5.3.3 通訳者を目指した動機と規範との関係

通訳者を目指した動機は、各自それぞれであるが、中国語母語話者通訳者には、B氏がそうであったように、他に選択肢のない状況の下で通訳者の道に進んだケースが見られる。筆者がかつてインタビューをした中国語母語話者である通訳者も、実際には英語を学ばなかったが、中国の大学入学のシステム上、致し方なく日本語を学習したと語っている²⁴。かつての日中通訳者であり、中国文化部の元副部長²⁵(副大臣)である劉徳有氏も、大学に入学した時点で、将来進むべき日中通訳者の道は決まっていた、と述べている(劉, 2006)。今回の中国語母語話者協力者の中で、唯一自らが進んで通訳者の道に入ったのはC氏のみである。しかしC氏は元々中国で語学を教えていた教師であり、結婚という形で来日しなければ、通訳の道に入ることはなかったかもしれない。世代も異なる3名だが、中国という国の事情により、通訳者になった動機は自律的、他律的と異なるが、いずれも言葉をなりわいとする通訳者という仕事を全面的に受け入れ、積極的に取り組む姿勢が語られた。この点は、かつて筆者がインタビューをした別な中国語母語話者の通訳者も同様であった。語りを分析した結論としては、通訳をめざした動機と規範との関連性は顕著には認められなかったが、A氏がLT貿易の通訳を担当した際に、日本側への肩入れともとれる発言は、

²⁴ 平塚ゆかり(2008)。「『信、達、雅』再考:現代日中通訳者の役割分析から」を参照されたい。

²⁵ 中国において国家機関の部長は大臣を指し、副部長は日本では副大臣に相当する。

A 氏が大平学校で日本語を習得していった過程と無縁ではないと推察できる。本例だけで一般化はできないものの、どのような環境で外国語を習得したかという学習環境が規範意識の形成に影響を与える可能性を示唆する一例である。

5.3.4 通訳訓練の有無と規範との関係

通訳訓練の有無については、中国語母語の3名はともに中国の大学、もしくは大学院で、語学を学ぶ過程で、多かれ少なかれ通訳の基礎訓練と思われる訓練を受けている。しかし、実際に通訳に役に立ったかといえ、A氏は否定的な見解を示している。A氏も、B氏も、実際の通訳現場で経験を積んでいくことが訓練だったとの見解を示している。

両者の語りには、通訳現場で先輩方と共に通訳をしていくことによって、通訳のスキルとともに、規範意識を身につけたことが示されている。経験の一番浅いC氏は、自身の通訳規範を語る際に、「通訳学校で学んだ」と明言した。これは規範の取得過程についてGile(1999)が指摘したように、通訳訓練過程の実技指導による「初期的規範」の形成が、日中通訳者でも同様になされていることを示すものである。

日本語母語話者は、E氏、F氏ともに通訳訓練を通訳学校で受けている。E氏が通訳学校を経たのちに通訳者として仕事を始めているが、反対にF氏は商社で通訳翻訳の実務を数年行なった後に通訳学校に通っている。また、D氏は留学から帰国後すぐに通訳者として仕事を始めたため、「通訳学校に申し込んだが、結局は通わなかった」と語っている。それゆえ、通訳訓練過程で規範が形成されたか否かは、今回のインタビューデータだけで判断することは難しい。

5.3.5 通訳者としての立場、従事する実務と規範意識

中国にあっては、フリーランス通訳者というライフスタイルがまだ確立されているとは言い難いため、A氏、B氏もそれぞれ自身が所属する企業なり、研究機関なりをもっている。中国語を母語とする通訳者のうち、現時点で純粋なフリーランス通訳者と言えるのは日本に在住するC氏だけである。B氏の語りには、姜の「通訳の心得」と共通点が多くみられ、「実際の規範」と「規定性規範」とが混同して語られた。これはB氏が現在は通訳実務から離れているため、インタビューではまず、伝統的な中国における「あるべき姿」としての規定性規範を中心に語ったと推察できる。政治家であり日中交流の実務家であった父の影響も少なからず規範意識の形成に影響を及ぼしている可能性があるが、本人は父

の影響を語らなかった。これは、本論のインタビューを行う前に、実父の日記が中日交流を記した書籍として出版されており、それにともない各地でインタビューを受けた内容が既に記事となっていたため、あえて語らなかった可能性がある。実際、インタビューを行う前に、インタビューのテーマについて B 氏から再度確認されたのだが、それはこの書籍と、それに付随して行われた某新聞社のインタビューとテーマが重なるか否かであった。当時、反日の機運が高まっていたこともあり、公人である B 氏が当初警戒した可能性もゼロではないだろう。インタビューが進むにつれて、そのような雰囲気は薄れ、ざっくばらんに語っていった B 氏だが、実父のことは書籍の内容に関する日本の話題のみに終止した。

A 氏は仕事を受ける際の基準として「煩わしくない人（这个人不让我讨厌）。協力しやすい人」を挙げた。「私は気短な性格なので（我可能脾气比较大）」と笑いながら語った A 氏だったが、かつてエージェントやエージェントを名乗る怪しい人物や団体に利用されたこともあり、現在は同業者数名と同一行動をとる取り決めをして、通訳料の交渉や条件提示などを行っているという。現在は所属機関での業務が主となり、会議通訳は月に 2～3 回しか受けていない A 氏だが、クライアントも通訳者も対等な立場でコミュニケーションを図りたいとの意識の表れかもしれない。

日本語母語話者はどうであろうか。日本の場合は職業選択の際に、積極性の差こそあるものの、3 名ともが自ら望んでフリーランス通訳者という職業を選んでいる。

しかしながら、調査対象の通訳者が語った規定性規範には、職業形態の違いによる規範の有意な差はみられなかった。今回の協力者である通訳者は、経験の浅い C 氏を除き、外交や政治など、両国間交渉にも多く従事している通訳者であることが共通点としてあげられる。D 氏は同時通訳の仕事を受けない理由として「訓練を受けていないこと」ではなく、「同時通訳では、話者の意図することが伝わらない」という信念を示した。これは逐次通訳よりも、より即時性が求められる、また認知的制限も大きい同時通訳では、自身の規定性規範とする「言語レベルの忠実性」の実現が難しい、との現れであると推察できる。

E 氏と F 氏は会議通訳者として同時通訳の仕事を受けているが、会議通訳者の仕事を中心に行っている E 氏はあるべき規範は「忠実ではない」と答えている。忠実な通訳はプロとしてできてあたりまえであり、「コミュニケーションが円滑にとれる、よい雰囲気作りが最も大事」と語った。言語的なレベルを超えてコミュニケーションの参与者としての自覚を意識した発言である。F 氏の「（話者との）一体化」を図りつつも、「その個人個人のロジックがグズグズな発言とか、自分が理解できないことってというのが一番困る」ため、

時には「自分なりに解釈」し訳出する、との発言は、言語的忠実性だけでは足りないとの自覚に裏打ちされたものと推察され、規定性規範において「忠実は十分条件ではない」との意識が現れていると推測できる。

中国語会議通訳の現場は英語通訳のそれとは異なり、未だ分野を絞って仕事を受けられるまでには成熟していないため、時には会議通訳者も対話通訳などに従事する場合もある。E氏は国際結婚のカップルの離婚調停の現場での通訳姿勢を語ったが、そこでは、必要条件と語っていた言語の忠実性を逸脱し、「中国語のきつい言葉をそのまま訳したら終わってしまうので、相当和らげて訳した」と語っている。本論の語りは、従事する通訳業務によって、特化した規範形成がなされていく可能性が垣間見える結果となった。

5.4 Chesterman 規範論からの分析結果

調査協力者である通訳者の語りからは、通訳者を取り巻く環境、特に中国語母語話者の語りからは、現代の日本人にはあまり知る機会のないそれぞれの歴史が浮かび上がった。6名のオーラルヒストリーはそれぞれの人生観や価値観の形成過程を伺い知ることができる貴重な資料といえる。本節では、インタビューから見てきたそれぞれの規範意識をChesterman(1997)の規範概念に主眼を置き分析する。

A氏は自身の通訳規範は「忠実」で「空気になること」と明言した。A氏のいう「空気」ということばは、語りの文脈から「透明な存在」の意味で用いていると推測できる。しかしながら、A氏は「忠実」や「空気であれ」という通訳規範は、多くの通訳経験を積んだ現時点での規範であり、かつてはクライアント寄りの通訳、また自身の考えを反映させた通訳をしていた、と続けて語った。そして、失敗を経たのちに「スピーカーの発言に忠実」で「現場の空気」のように透明な存在であるべきとの規範が形成されたと話した。しかしながら、忠実とは相反する自身の訳出行為に言及し、それが「お客さんにとって正しい通訳」であると語り、クライアントの期待に応じてこそ、通訳者の役割が果たせるとの意向を示した。これらの発言は一見矛盾しているようにも感じられる内容だが、A氏は本論5章で記述した、最後の覚え書き貿易交渉でのエピソードを語った時以外は、最初から最後までよどみなく発言しており、これらの内容が、自身の「忠実」「空気である」という規範に逸脱しているという自覚はないように見受けられた。

通訳者の語りの中で、クライアント側に立った発言を繰り返していたのはB氏である。「通訳者はいなければならぬ存在だけれども、会話の主役ではない」ゆえに、通訳者は

主観的意見はあってはいけないと主張するが、一方で「通訳を頼まれたときは、『どのような方向に持っていきますか?』と話者に聞くこともある」と発言している。「話の方向を決めていくのは通訳者である」という意見とも判断できるが、これはE氏自身が通訳者とエージェント業務を兼任していた立場にあったため、特に話者を含むクライアントを意識して行った発言とも伺える内容である。B氏は、語りの中で研修通訳などは長く聞いていると聞き手が眠くなる場合がある、そのような場合は眠らずに聞いてもらうために、通訳者が「話者よりも感情を込めて訳出し、聞き手を鼓舞することも必要」と述べている。

C氏は数少ない通訳経験からのエピソードを語ったが、オリジナルスピーチにない情報を付け加えて訳出した行為は「通訳学校で教えられたように、論理が通るように訳した」と語り、同時に、「一般的な場面ではこのようなことは行わない」と語り、通常の現場では忠実に訳すとも語った。通訳規範は「最後に通った通訳学校で学んだ」と語ったC氏だが、C氏が当該通訳学校に通っていた際に講師として担当した筆者は、C氏はすでに教室内で行った初見の講演会での通訳の際に、情報を付け加えながら訳出するという行為を行っていたと記憶している。インタビューの時点で、C氏の通訳経験はオリンピックパビリオンでの通訳経験はあるものの、その他の実践経験は数えるほどであり、インタビューで語った音楽家の同行通訳は、フリーになって三度目の仕事のエピソードであった。

以上、3名の中国語母語話者の規範意識を概観したが、中国語母語話者の規範意識には、先述した姜椿芳の『通訳者の心得』、そして李越然の通訳規範「準、順、快」など、3章、4章で概観した通訳規範や、「原文を越える」というイデオロギーを含有した通訳姿勢を打ち出した許の通訳翻訳論が垣間見える結果となった。

これらの規範意識には、近現代の規範を築き上げた、古代仏典翻訳にまでさかのぼる中国の翻訳規範に、そのルーツを見つけることができる。通訳者の母語、中国語の背景にある歴史的言語観は、すでに通訳者の意識に内在化しており、規範として成立していることをうかがわせる。中国語母語話者ではないF氏も幼少時代から中国の漢文など漢字文化に親しんできた背景を持つが、F氏の語りには、中国語母語話者と同様の言語観や規範意識は現れていない。そのため、この要因は中国における言語学習環境と通訳の実践を通して培われたことが推察されるが、この点に関してはさらに言語規範と社会規範の関係を研究する必要があると思われる。

一方、日本語母語話者のE氏は忠実が第一の規範ではないと明言した。これまで経験した現場での忠実に訳出しなかった例を挙げて、自身の主義に基づき、その場を和ませる通

訳、わかりやすい通訳を行っている」と説明したが、インタビュー後半では忠実は最低限でなければいけないことと語り、通訳者が当然備えているべき規範との考えを示した。

D氏は「勝手に解釈して何か付け加える」非忠実な通訳²⁶も、「そのまま、相手が聞いて分かるが分かるまいが、ただ読み続けていくってということもしたくない」意味の通じない字面だけの忠実な通訳²⁷はしたくないと語った。これは「忠実性」と、「わかりやすくメッセージを伝達すること」は両立可能であると考えていることが背後にあるものと推察される。

F氏は規範意識としては自身が目立たないことを挙げたが、一方で通訳者の「不可視性」に疑問を呈するなど、通訳者は見えている存在であるとした。通訳の出来が良いときは「話し手に共感し、一体化ができたとき」と語ったF氏だが、これは「神似」に通じる概念である。しかしながら「話し手と一体化ができており、話し手の内容に矛盾がないよう口調や声色を変える」通訳を行うことで、「今ここ」で音声を紹介される通訳の場合はかえって「目立ってしまう」と、通訳と翻訳の最も異なる点に言及した。また、F氏も自分の訳出を「その時々に合わせて」変化させるという行為を行っており、「期待規範」を瞬時に汲み取り通訳に臨んでいることを示唆した。

日本語を母語とする通訳者にみられた共通点としては、各人ともに毎回異なる（はずの）クライアントの期待規範を十分に理解し、且つその期待規範に則った自身の果たすべき役割を理解した上で、異なる現場において職業規範に則り、訳出を行なっている点が挙げられる。また、どちらの言語に訳出するにしても、通訳者は訳出の際には両文化の差異を考慮した訳出を行なっていることも語りからうかがえた。

ポエヒハッカー（2008）は、「自分の訳出物やパフォーマンスに関し通訳者が持っているある種の期待に対する通訳者自らの気づきと、その期待を満たそうとする行為」（p. 158）と「期待規範」を説明したが、これはすなわち「期待規範が内在化」し、通訳者の中に存在することを示している。インタビューの結果から、通訳者はその役割を果たすために、「内在化された期待規範」に基づき、職業規範の下位概念である責任規範、コミュニケーション規範、関係規範により訳出の内容を決定し、通訳行為に臨んでいることが示された。

本論のインタビューでは、中国語母語話者は期待規範に言及し、それを意識しながら訳出している、と述べる傾向が見られた。日本語母語話者からも同様の意見は上がったものの、期待規範よりもプロフェッショナル規範に基づき訳出を行う姿勢のほうが顕著であっ

²⁶ 林語堂の言う“胡译”「でたらめな訳」と同義であると思われる。

²⁷ 林語堂はこのような字面に忠実なだけの翻訳・通訳を“死译”「死訳」と呼んだ。

た。このことから、通訳者が訳出方略を決定する要因は、中国人母語話者は期待規範によるところが大きく、日本語母語話者は通訳者本人のプロフェッショナル規範による、と推察できる。

インタビューの表層に現れたキーワードの分析結果から、通訳者はその役割を果たすためにプロフェッショナル規範の下位概念である責任規範、コミュニケーション規範、関係規範に基づき、これらの規範意識を内在化して咀嚼した上で訳出の内容を決定し、訳出行為に臨んでいるが、最終的な訳出内容は期待規範に左右される傾向にあることが判明した。この傾向は中国人母語話者に顕著に見られるが、母語にかかわらず、通訳者としてのバックグラウンドやこれまでの通訳経験、他国文化との接し方、特に相手国文化を肯定的に受け入れているか否か等の通訳者自身のパーソナリティから規範意識に差が生じることが伺える結果となった。

通訳者のインタビュー・データの分析を通し、これまでに明らかとなったのは以下の3点である。

1点目は、通訳者によって「忠実」の含有する意味を、「目標言語の文化的事象を含めた内容に忠実」「字面だけでの直訳の意での忠実」と二通りにとらえており、前者は「忠実」を規範であると語っているが、後者は「忠実」は規範ではないととらえていること、2点目は、通訳者は、「関係者間のコミュニケーションを最大化する」という Chesterman の「コミュニケーション規範」はすでに現場での実務を通して持ち合わせており、その通訳行動は中国の通訳規範に依拠していることがうかがえること、3点目は、通訳者は、主に通訳業務を通して蓄積された経験則などから、期待規範が内在化され、新規の通訳業務においても、瞬時に期待規範を汲み取り、主体的に通訳に臨んでいること、の3点である。

そして、関係者と通訳者の(物理的ではない意味での)距離、すなわち通訳現場における、通訳を必要とする聞き手や依頼主の期待規範と、通訳者が抱く期待規範との乖離が、通訳パフォーマンスの完成度に影響を与える可能性がデータから読み取れた。

日米通訳者を調査者としたオーラルヒストリーの先行研究である鳥飼 (ibid.:p.378) では、通訳者は『『黒衣』としての役割を果たす中で、共感と情熱、そして強い意志と洞察に支えられ、自身の判断で自立的に創造性に富む決定を下している』と述べているが、今回のオーラルヒストリーからも、あらゆる実践の場での「期待規範」を瞬時に理解し、「その場にふさわしい通訳者としての役割を果たす」という期待規範、もしくは役割規範ともいえるべき規範意識を持ち、自らの規範意識に則った訳出行為に臨んでいる通訳者像が浮かび上が

る。

第6章 考察

本論の前章で、中国語を母語とする通訳者と日本語を母語とする通訳者各3名のインタビューを分析した。分析結果から中国語母語通訳者と日本語母語通訳者の相違を見ていき、日中通訳者の「規定性規範」と「実際の規範」(王, 2013)、規範の形成要因について考察する。

6.1 現代通訳者の「規定性規範」と「実際の規範」

6.1.1 中国語を母語とする通訳者の規範意識

中国語を母語とする3名の通訳者のうち、A氏は「規定性規範」として「忠実」「空気になる」をあげた。と同時に、かつてはクライアントの利益を第一義に考えていたという。王(2013)の研究では、調査対象者である外交通訳者について、通訳行為に現れた「実際の規範」は、起点言語と目標言語の関係規範における「忠実」ではなかった。A氏の語りにおいても、「忠実」を現在の「規定性規範」として語っているものの、実際の通訳行為として語りのなかで挙げた例では、起点言語と目標言語の関係規範は「忠実」ではないことが示された。職業倫理規範に関しても同様のずれが見られた。「中立」であるべきと明言したA氏のことばからは「規定性規範」は「中立」であるととらえていることが示されたが、これまで通訳者として関わってきた経緯から、完全な「中立」にはなり得ないという役割感が垣間見える結果となった。このことにより、王(2013)の提示した三種の規範、すなわち起点言語と目標言語の関係規範、目標言語のコミュニケーション規範、職業倫理規範において、A氏の「実際の規範」意識はいずれも「コミュニケーション促進規範」であると分類できる。

B氏は、インタビューを実施した際には、既に通訳の現場から少し離れており、クライアントとして通訳者のあるべき心構えを語る時間が長かった。B氏からは今回の調査協力者のうち、唯一、中国の歴史的な「規定性規範」ともいえる審美観に関する規範意識、すなわち、聴いて心地よい通訳という「通訳美学」が語られた。これは、B氏が翻訳にも長年携わっていた経歴があること、そして通訳者をおっせんする側として、多くの通訳パフォーマンスを実際に聴いてきたことが要因として推察できる。通訳は「信達雅」を遵守するべきと語ったB氏には、既に中国の翻訳・通訳論が「規定性規範」となって形成されていることがインタビューの語りの随所に現れている。しかしながら、B氏は、これまでの

通訳人生を振り返り、観光通訳から始まり、文化や技術伝承のための通訳や翻訳行為を語った最後には「通訳で大事なのはコミュニケーション」である旨を強調し、自らが体験した例を具体的に挙げた。「双方の根本的考え方に誤解がある際には通訳者が積極的に関わって誤解を解くべきである」と、言語の橋渡しだけでなく中日文化摩擦を回避してきたことを語りながら、時代の変化により通訳の果たすべき役割は変化していくことを付け加えた。

B氏の「規定性規範」は第3章、第4章で概観した中国独自の通訳論が基盤となっていることが語りから示されたが、「規定性規範」が時代によって変化するものだとの認識も一方で示された。B氏の語りに現れた「実際の規範」は、通訳行為における具体例だけをみれば「コミュニケーション促進規範」であると考えられる。

C氏は、3名の通訳者のうち、最も経験が浅く、現在通訳者として規範意識が形成されつつある段階であると考えられたが、数少ない現場での経験談に、象徴的な例が提示される結果となった。それは、元の発話にないメッセージを加えて通訳したことであり、それは通訳学校で教えられた「メッセージの論理を明確にすること」という規範意識に基づいた実践を行ったことである。これは特殊な事例であり、通常は「忠実」に訳すことが第一義だが、その現場では通訳を通じて「両者をよろこばせる必要があった」と語った。C氏の語りからは、時と場合によっては通訳者が判断し、自己の立場を中国人に近づけて目標言語を伝達したことが示され、「規定性規範」と「実際の規範」が既に乖離していることが垣間見えた。一つの事例からの考察になるが、C氏の「規定性規範」は「論理明晰化規範」(王, *ibid*)であり、この形成要因は通訳学校での訓練が基盤となっていることが明示されたが、「実際の規範」としては「コミュニケーション促進規範」という意識が既に内在化していることも示された。

以上、中国語を母語とする通訳者には、「規定性規範」としての忠実規範よりも、「実際の規範」である「コミュニケーション促進規範」が優っていることが示された。

王(*ibid*)は、分析対象とした外交通訳者が、記者の質問の際に前置きを短くした例を訳語の削減シフト例として取り上げている。ここではわかりやすい一例を取り上げる。

中央电视台记者:朱总理,您好。我是中央电视台记者黄红。

(日本語訳:CCTV記者:朱総理、こんにちは。CCTVの記者で黄紅と申します。)

通訳者英訳:I'm with CCTV. (p. 101)

王(2013)ではこのようなシフトが起こる場面は、基本的には、記者の質問を通訳する際に起こっているため、その理由について「メッセージの重要性を考えたとき、最も重要なのは質問の内容であり、その前後の前置きや儀礼的挨拶は重要でないと判断している。そして、もう一つの理由としては「通訳者が通訳行為を行う際に忠実であるべき対象は、自らがサービスすべき対象、すなわちここでは総理であると考えている」ためと指摘している(p. 107)。起点言語-目標言語の関係規範である忠実規範意識よりもコミュニケーション促進という規範意識が勝った例であり、同様の事象が本論の通訳者の語り、例えばB氏の西安での技術研修通訳の例からも垣間見える。また、本論では分析対象とはしていないが、かつて筆者がインタビューを行った、中国での通訳業務を行っている別の通訳者Y氏も同様の語りを残しており、「忠実」もしくは「忠誠」の対象を明確に位置づけている姿が示された(平塚, 2008, p. 42)。以下に該当箇所を引用する。

Y: ある会議、毎回ずっと私と私のパートナーがやっていて、お客さんは両方とも大体知っているし、内容も技術的な内容、まあ自動車で。たまたま日本から来られた人がすごく遠まわしな人がいて、そういう時たまに切ってしまう時があるんですね。会議の時間もそんなに無い中、すごくくどい言い方する人がいて。周りの日本人からもあの人が話すと長くなる、とか言われるような人がいて、例えば現場でもっと近づけば部品がはっきり見えたんですけども、人が多かったので近づけなくて見れなかったの、「この場を利用して質問させていただきます」とか、だらだらと言ってからようやく質問が出るんですよ。私は訳出をすごく短くしちゃう時があって……。

筆者: ぱっさりと。

Y: そう、質問だけにして前置きをぱっさり切って、もしくは一言だけ「刚才在现没看清楚」(ただいま現場ではよく見えませんでした)と言って。

筆者: えーっ。

Y: 中国人は、何言いたいのかっていらいらしちゃう。中国側は質問を受ける側ですのであなたは何を聞きたいのかクエスチョンを早く言って欲しい、みたいな。問いに対して答えるわけですから前置きなんてどうでもいいと。

筆者: 日本のスピーカーの方から通訳が短いつて言われませんか?

Y: 場はたまたま中国語の分かる人がたくさんいるので。この方は中国語分からない

です。けれども、まわりの人がまたただ話しているなって。逆に私達通訳者に彼の話は訳さなくていいって言うてくる人もいて。

筆者：日本側がそう言うてくれればね。

Y：個人的な癖かもしれないですが、質疑応答の前置きは本当に短くします。

王(2013)の研究では、外交通訳者が「忠実」を体現する対象は言語ではなく、話者としての総理であったように、本研究からも、忠誠を尽くす対象は言語よりもその場に存在するクライアントであることが中国語母語話者の語りには現れている。

中国語通訳者の規範意識を分析すると、「規定性規範」と「実際の規範」にいずれもシフト（ずれ）があることが確認された。これはA、Bの両氏に顕著に見られたが、経験の浅いC氏は忠実という規定規範が、「時と場合による」ものであると自覚をしたうえで通訳を行っている。通訳行為における規範と実践にはシフト（ずれ）があることを認識していることが明示化された。A、Bの両氏は、これらシフト（ずれ）の存在を自覚した語りはなされなかった。文脈を追っていく限りは恣意的に語らなかつたとは考えにくい、その場合は語らなかつたことに意味を見いだす必要があり、更なる考察が必要となるだろう。

本研究を通して、中国においてはこれまで「文」（目標言語重視の漢語としてわかりやすい訳）と「質」（起点言語の内容に忠実な訳）との対立的訳出姿勢から、そのどちらも実現しようとする理想論が、時代によって文言は変わりつつも、いつの時代も厳然と存在していたことが示された。そしてその理想論はいつの時代も実務家、理論家の討論のテーマとなり、通訳翻訳の現場に影響を及ぼしてきたことも示された。また、外国語を中国語に訳す場合、中国語という言語の調べと文字の美しさは翻訳通訳行為を通して損なうことなく表現していくべき、という中国社会の根底に根ざしている規範が見える結果が示された。一方で、中国語から外国語に訳す場合は、メッセージ伝達による効果を第一義とする訳出をするべきという規範も垣間見えた。

いずれにしても「忠実」という規範意識はそれぞれの通訳者にとって第一義の通訳規範となっていることが示された。ただし、「実際の規範」としては、言語に対して「忠実」なのか、それともクライアントに対して「忠実」なのかは、中国語母語の通訳者は、クライアントに「忠実」であることをより強く示唆する結果となった。

「実際の規範」は三人三様それぞれの立場を表していることが示された。A、Cの両氏は「コミュニケーション促進規範」が「実際の規範」となっている。しかしながら、A氏は

がより積極的なコミュニケーション促進、または通訳者として役に立ちたいという主体性を発揮している姿勢が見えたのとは対照的に、C氏のコミュニケーション促進の姿は、文化的な摩擦など問題が起きないようにするという消極的な姿勢であると理解できる。これは通訳経験が未だ浅いC氏が、まさに現場でのクライアントや受け手などの参加者の状況を伺い、模索しながら規範形成を行っている途上の姿を示したといえる。

中国語母語通訳者の通訳規範意識とその形成過程を図式化すると以下のようになる。プロ通訳者としての形成過程には当然、職業としての言語能力向上、通訳スキルの向上も含まれるが、言語能力についてはここでは考慮しないものとする。

3名の中国語母語通訳者の語りは、通訳者の実践現場での規範意識、すなわち王(2013)の示した「実際の規範」である「衝突回避規範」は、通訳経験を重ねることで、「コミュニケーション促進規範」に変化していくことを示すものである。

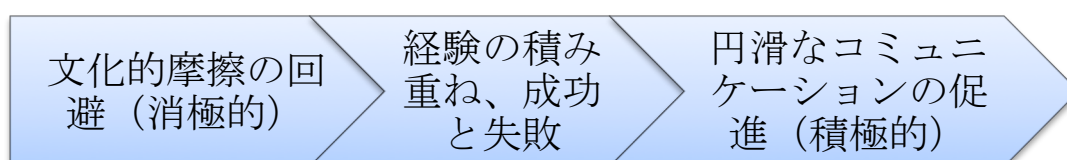


図 6.1 中国語母語通訳者の通訳規範と形成過程

今回の語りから見えた A 氏の規範形成に影響した要因は、5章と本章でも述べた通り、先輩通訳者との実務経験を重ねる中で得た失敗と成功の体験、そして自らの果たすべき役割観と果たしたいと希望する役割観のシフト（ずれ）であと考えられるが、それ以前に、大平学校（日本研究センター）で日本人の講師のもとで研究したことも少なからず影響があるのではないかと、訳出の立ち位置の非中立性から推察できる。

B 氏の規範形成の要因は、出発点は自律的な通訳者ではなかったことを考えると、時代背景と目的意識が大きく作用したと考えられる。すなわち、会議や研修など、すべてのテーマが中国人にとって初めて聞く内容であるという通訳実務の中で、コミュニケーションを進め日本の技術を学ぶという明確な目標が、「何のための通訳行為か」という疑問の答えであったことは想像に難くない。日中国交回復前後の現代日中コミュニケーション現場を政治家として支えてきた父の姿勢も影響した可能性も推測できるが、インタビューでは聞かれなかったため、この点は改めて調査が必要となる。

6.1.2 日本語を母語とする通訳者の規範意識

次に、日本人の通訳者の語りから、「規定性規範」と「実際の規範」を見てみたい。本論の第3章、第4章で見てきた通訳翻訳のあるべき「規範」は、中国というコンテクストに存在するものである。ゆえに中国の通訳翻訳論としての「規範」と「実際の規範」との関連性を、日本語を母語とする通訳者に当てはめることは難しいため、ここでは語りに現れた「規定性規範」と「実際の規範」のみを対比させて考察する。

語りだけから判断すると若干のシフトが見られたのはD氏のみで、E氏、F氏ともに明確なシフトは見られなかった。D氏は、通訳規範とは「忠実」に訳すことと語ったが、一方でD氏は自身の規範と矛盾した訳出行為の例を明示した。正しい外交政策を実施する場に居て訳出の手伝いできたことを嬉々として語ったD氏にとっての通訳の醍醐味は、正しい外交政策の実施であるとの語りを残した。これは、自己の考えと一致した発言を伝える際に、正しく伝えたいとの思いが強調され、神経は使いながらも、伝えきった結果、中国の対日姿勢に影響を与えたことに意義を感じていると語った。これは、話者の主張と自身の主張が一体化したとき、より「忠実性の実現」を図ろうとする意志が顕在的にも潜在的にも現れたことを示す。通訳行為を通して仮の自己実現達成の充実感であり、これはF氏が語った、「一番通訳がうまくいくのは話している人の、その考え方の道筋に乗れて共感できたとき」という「話者との一体感」も同様であると考えられる。

一方、E氏は「訳出の時には……うーん……基本的には忠実に訳すのではないですね、考えてみたら。分かりやすくするっていうのが」と発言し、「忠実」は通訳規範ではない、としたうえで、「忠実」の対立軸として「分かりやすくする」を挙げた。その理由を「わかりやすいついていうのも、こう、雰囲気の良いにつながるじゃないですか」と語り、規定性規範としては「コミュニケーションを円滑に進める」ことを示した。また、「忠実」な通訳は「できて当たり前」で、それ以上に、現場ではいい雰囲気作りを行うのが通訳規範である旨の発言があった。D氏とE氏、両者の語りは「忠実」の含有する意味を異なる概念としてとらえている可能性を示すものである。D氏は「目標言語の文化的事象を含めた内容に忠実」が本来の忠実の意味であるとしており、E氏は「字面だけの直訳の意」を「忠実」ととらえていることが文脈から判断できる。これは、通訳における「忠実」の概念は、個人によって異なるため、まず概念の同定が必要であるが、少なくとも日本語母語話者の場合は中国語母語話者と異なり、人への「忠誠」の意味では「忠実」という語を用いていないことが示された。

「忠実ではない」訳例を挙げた E 氏には、「規定性規範」と「実際の規範」との間には、明確なずれは見られなかった。

職業倫理規範として E 氏は、「事前資料ももらわず、当日いきなり動画の音声を訳してくださいと無理なことを言われた」として、100%は不可能だとしても、通訳を聞いている人が居る限りは訳出を行うべき」だと語った。通訳者は「職人」ではなく、「サービス業」だとした E 氏だが、このような職業倫理規範は、AIIC などの規定とは異なる。実際にコミュニティ通訳などの対話通訳ではこのような倫理の視点からの研究もなされており(任, 2010 など)、日本独自の「規定性規範」としての倫理規定は手話通訳者団体、通訳案内士団体が設定しているものがあり、2010 年には「医療通訳」の倫理規定として「医療通訳共通基準」が作成された(武田, 2013, p, 49) が、日本にはその他の領域における通訳者の明文化された倫理規定は存在しない。通訳を使う企業側と通訳者・翻訳者の利益が一致しない(武田, 2013, p.49) ことは規定作成が難しい主因とされているが、実際には通訳者の規範意識の齟齬という問題も存在することが本研究を通して示されたといえる。

F 氏の「規定性規範」と「実際の規範」にも、語りからは明確なシフト(ずれ)は見られなかった。「自分の意見を入れる」と「解釈して訳す」のは次元が異なるとも語った。研究者でもある F 氏は、長年通訳学校でも教鞭をとり、多くの受講生のパフォーマンスを聞いている。シフトが見られなかった理由としては、F 氏自身の訳出行為はもとより、これまでの教育経験や研究経験を通して、客観的に通訳行為における問題を認識していることが背景にあると思われる。

6.2 まとめ

本論文の目的は、通訳における「規範」を探求するため、オーラルヒストリー手法を用いて、日中通訳者の語りに現れた規範と、実際の経験を元に生成された規範意識を浮き彫りにし、その規範意識の形成要因を検証することにあった。

日本語母語話者の中にも、中国で中国語を習得した通訳者の中には中国語母語話者と同様の規範意識を示す語りが見られた。母語、中国語の背景にある歴史的言語観が、すでに通訳者の意識に内在化しており、通訳規範意識とその形成に影響を与えていることをうかがわせる結果となった。

日本語母語話者に関しては、自身の規範に関する語りでは「忠実」「見えない存在」がキーワードになっていた。F 氏は、「通訳者は見えない存在といわれるが、実は見えている

存在で、話し手のロジックが理解できないときは自分なりに解釈をして訳出をする」と語っており、日本のクライアントが通訳者に抱いている幻想である「通訳者は言ったことをそのまま訳すだけの見えない存在」はそもそも不可能で、自らが主体的にメッセージを解釈して伝達していることを示した。

中国語母語、日本語母語のどちらの通訳者も「関係者間のコミュニケーションを最大化する」という「コミュニケーション促進規範」は、いずれも現場での実務を通して持ち合わせている。両言語の関係規範としての忠実性よりも優先される可能性を示したのは中国語母語話者の語りであった。中国語母語話者の規範意識には、これまでの中国の通訳規範が「忠実」「通順」などの「規定性規範」となって意識の上で現れていることが示されたが、「実際の規範」とシフト（ずれ）が認められたのは中国語母語話者である A、B 両氏の語りであった。C 氏の語りからも「規定性規範」と「実際の規範」には同様のシフト（ずれ）が見られるものの、シフトを自覚している点から考えれば A、B 両氏とは異なり、日本語母語話者に近い規範意識ともいえる。また、通訳経験の一番長い D 氏の語りでも無自覚のシフトが見られたことは、本論序章で述べた通り、日本における日本語-中国語の通訳市場は、ほかの言語に比べて中国語母語話者の比率が高く、会議でもパートナーとして日中両母語話者の通訳者が仕事をすることが多いことに起因する。また、通訳学校の訓練段階でも同様の傾向がある。このような環境は、日本語母語話者と中国語母語話者双方の通訳規範に影響を与える要因となり得る。

また、本研究を通して、通訳者の「忠実」などの外的規範は、歴史的、社会的な変化に伴い変化を遂げていくということも示され、Toury の「競合的規範」という規範の変化は中国にも起こっていたことが示された。

「信達雅」を提唱した嚴復が、その翻訳では原文に忠実でなかったことからわかるように、近代中国に至るまでは、これらの通訳翻訳論は、それぞれの時代によって異なる通訳翻訳の社会的目的を実現するための理想論であった。この理想論に背いた訳出を行えば、ユーザーから非難を浴び、仕事を失う等、何らかの制裁が発生したため、理想論が実際の現場において規定的規範と姿を変えていた可能性が考えられる。

実際の規範意識も、通訳翻訳の社会的目的を果たすために通訳者個人がそれぞれ訳出の際に依拠としているものである。その両者にシフト（ずれ）が生じる理由は、通訳翻訳のコミュニケーションが行われる場が一律ではなく、コミュニケーションの場の参加者も毎回異なり、その都度通訳者は目標言語と起点言語の言語的文化的な差異を関係規範に基づ

き処理すると同時に、その場のコミュニケーションの最大効率を図ろうとの意識が働くためであろう。通訳を行う通訳者は、「今、ここ」で果たす役割は何か、と常に考える動的な存在なのである。

第7章 結論

本章ではこれまで本論で述べてきたことを総括し、最後に本論の限界と今後の課題を述べる。

7.1 本論のまとめ

第1章では本論の目的、背景、研究の意義を述べ、本論の鍵概念である規範についての論考と研究方法であるオーラルヒストリー研究法について論及し、論文の構成について述べた。中国通訳史、中国における通訳規範論を概観したうえで、近現代の通訳者の言説、オーラルヒストリー・インタビューデータから、既に存在している通訳規範と通訳者に内在する規範意識とを Chesterman (1997) と王斌华 (2013) を援用し比較分析を行ない、中国通訳翻訳論と現代の日中通訳者の実践に基づく規範意識との関連性を探ることが、本論の目的であることを示した。

第2章では、本研究の先行研究である中国における翻訳学、通訳学領域の規範研究を概観した後、研究手法であるオーラルヒストリーについて述べ、本論の位置づけを行った。

第3章では、中国における通訳史と中国における通訳翻訳論を、歴史的流れに沿って概観した。通訳翻訳論では仏典翻訳まで遡り、草創期、発展期、全盛期における釈道安の「五失本、三不易」、玄奘の「五種不翻」、彦琮の「八備十条」などを取り上げ、仏典翻訳理論の特徴を論じた。すなわち中国においては、仏典翻訳の時代から「文」訳という目標言語重視・文体重視の訳と「質」訳という起点言語重視・内容重視の二項対立が存在し、当時の民衆の受容度や時代の為政者との関係などの社会背景により、いずれかに偏向した翻訳が行なわれていたが、最終的に鳩摩羅什に代表される、漢文の優位性を生かした翻訳が民衆に受け入れられ、今日まで用いられていることを紹介した。

次に、今日に至るまで中国の通訳翻訳に影響を及ぼし、今も様々な研究がなされている19世紀末から五四運動前後における翻訳論を概観した。嚴復の「信达雅」、魯迅の硬訳論、林語堂の「忠実、通順、美」陳西滢の「三似」論に言及し、その特徴を述べるとともに、民国時代末期から近代中国においては、魯迅のような硬訳を支持する動きは民度高揚のための一定期間に終わり、その後は再び文体重視の翻訳支持に変わっていった旨を述べた。

さらに現代の中国では許淵冲に代表されるように、情意、音律、形式の美という三つの美を備えた翻訳こそが優れた作品であり、原文を越えることを良しとする翻訳美学が主流

となり進展している現状を述べ、その背景には仏典翻訳から続く翻訳規範の影響がみられることを指摘した。また、中華人民共和国が成立したのち、外交通訳者として政府首脳など要人の通訳に携わってきた姜椿芳と李越然の『通訳者の心得』「準、順、快」の通訳規範論を取り上げ、実践通訳者としての規範と歴史的背景との関連性に言及した。

両者の論考からは、嚴復の「信达雅」を根底としている点、音声を用いてのメッセージ伝達という通訳行為の特徴を前面に打ち出しており、通訳行為への理解を促す論調である点、そして、実践の重要性を提起している点の共通点が見いだされたことを論述した。

続く第4章では、第3章で取り上げた近代中国の外交通訳者として政府首脳など要人の通訳に携わってきた姜椿芳と李越然の言説とその通訳論から、実践通訳者としての規範と社会的歴史的背景との関連性を分析した。

第5章では、現代日中通訳者のオーラルヒストリー・インタビューの分析を行った。中国語を母語とする通訳者3名と日本語を母語とする通訳者3名に二分し、プロ通訳者として認識している規範についての語り、その規範に矛盾する通訳行為に関する語りを検証した。その上で、通訳者が語りで明示した「規定性規範」と、「語り手を表す表象的な表現」(桜井, 2012, p. 96) から「実際の規範」を抽出した。通訳者を目指した動機や言語習得の背景、通訳訓練の有無、通訳業務形態などに着目し、それぞれの要因と規範の関係について分析を行い、Chesterman(1997)の規範論を援用し分析を行った。

第6章ではデータ分析結果から導き出された通訳者の規範意識を、王(2013)の研究をもとに考察した。本論の分析結果として、中国語母語話者の規範意識には、これまでの中国の通訳規範が規定性規範となって意識の上で現れていることが伺えるが、実際の規範とは乖離が認められ、コミュニケーションを円滑にするという規範が規則性規範より優位となり訳出行為に現れたことが判明した。中国語の背景にある歴史的言語観は、すでに中国語を母語とする通訳者の意識に内在化しているが、中国語母語話者、日本語母語話者のどちらの通訳者も「関係者間のコミュニケーションを最大化する」というChestermanの「コミュニケーション規範」、王が論及した「コミュニケーション促進規範」が、現場での実務を通して構築されていることが示された。そして、中国語母語話者の「忠実」の対象は人であり、日本語母語話者の「忠実」の対象は言語である傾向性があることを示した。通訳経験の最も長い日本人通訳者と、日本で訓練を受けた経験の浅い中国人通訳者にはそれぞれ他の母語話者とは異なる規範意識の傾向性が見られ、その要因として、日本という日中通訳市場における両母語話者の共存という特徴を挙げた。

また、規定性規範と実際の規範にシフト（ずれ）が生じる理由は、通訳者が毎回異なる通訳の場で、コミュニケーションの最大効率を実現しようとする「コミュニケーション促進規範」に起因することを示した。

本論の結果を通して、今後、日中両母語話者の規範意識の相違を如何に考え、如何に訓練に活かしていくべきかという議論がなされることを期待する。若林(2011)が指摘するように、中国の通訳研究状況を知ることは、日本の通訳翻訳学の更なる進展のためにも今後必要となるだろう。今後の日本における自国の通訳者養成にも本論で述べた論点は有益であると考えている。

7.2 本論の限界と今後の課題

最後に、本論の限界と今後の課題を挙げる。

本研究は日本語と中国語の通訳者である筆者が、同業者である通訳者にインタビューを行った研究が主眼となっており、本研究は「当事者研究」として位置づけられることは序章で述べた。語りのテキストを翻ると、筆者が自らの意見を挟んで語りを誘導したと思われる箇所も少なからず見られる。特に、社会的文脈をより共有している日本語を母語とする通訳者へのインタビューにこの傾向が見られた。意見や同意の箇所が多かった点なども、同業者である関係性がマイナスに作用した可能性は否定できない。当事者研究に従事する鈴木(2010)は、「当事者研究者の利点と困難さは、実は表裏一体であるといえる」として、当事者研究の場合は、研究者の<立ち位置>をより明確に持つ必要があると指摘する(p.71)。この点、当事者研究のワークショップにおける猪俣(2010)の発言のように、「話し手と聞き手の関係性の変化により、互いの当事者性・非当事者性が変化する」(猪俣, 2010, pp. 50-51)とあった通り、筆者の立ち位置にゆらぎが生じたことを反省点として挙げておく。また、猪俣(ibid)は、インタビューの聞き手が当事者である場合、研究者によって、当事者、非当事者、当事者性の共有、など、自己規定が異なる点を指摘したうえで、「いずれの立場をとるにしても、その目的が『話し手の経験全体を受け止めること』にあることは共通している」(p. 50-51)と述べているが、今後、研究を進めるにあたり、当事者であることがマイナスに働かないよう、細心の注意をしていくことをここに明記したい。

本論の分析結果で示されたように、通訳者が語る通訳行為とそのあるべき姿と、実践の通訳行為には乖離が見られたことを鑑みると、本論が「人びとの『生きられた経験』の個別性」(西倉, 2005, p.53)を浮き彫りにするオーラルヒストリー研究であるとはいえ、実際

の訳出分析を行っていない点は本論の限界といえる。語りから見えた通訳者の規範意識は、実際の訳出行為に如何に現れる（もしくは現れない）のか、という本論では明らかにしていない課題については、今後、訳出のデータ収集や選定方法、及び訳出分析の手法を慎重に検討し、着手する必要があると認識している。

また、本論第3章で紹介した中国の通訳翻訳論は、歴大な数の論があるため、ここではその一部のみを紹介となった。これらは論を改めて紹介したいと考える。

中国語母語話者に見られた規範意識の要因は、中国における言語学習環境と通訳の実践を通して培われたことが推察されるが、今回のインタビューだけで理解するには限界があった。この点を実証するには、更なる精査が必要であるため、これは今後の課題とする。また、通訳者が語った「忠実性」については、通訳者がとらえている忠実の概念自体が個々により異なる可能性があり、「実際の規範」を抽出し分析するには、まず語られた概念の同定を慎重に行ったうえでの再考が必要となるであろう。この点も今後の研究課題として取り組んでいく所存である。また、本論は中国の通訳論から中国語母語話者の通訳規範意識の形成要因を分析・考察することに主眼を置いたため、日本語を母語とする通訳者における規範意識の形成要因の検討は表層的な分析にとどまった感がある。これらの分析・検討も今後の課題としたい。また、通訳規範の訳出方向性との関係、すなわち、日本語→中国語、中国語→日本語と訳出方向の違いにより規範の変化が見られるかについては、今回のインタビューでは多く語られなかったため、その他の手法を含めて分析するなど、研究を継続し解明に務める予定である。

今後も通訳者のオーラルヒストリー研究を引き続き行い、歴史には残りづらい人々の語りを残す試みを続けていきたいと考える。そして、日中間のコミュニケーション促進を図るためにも、中国語－日本語の通訳研究・翻訳研究に引き続き邁進していく決意を述べて、本論を終える。

補遺

【A氏のオーラルヒストリー】

A： 首先是，日本語：通訳者になるまでの経緯。

平塚： 我的意思是说，您，大概

A： 因为我大学是学日语的。

平塚： 哦，是吗？是在哪里学的？

A： 二外。

平塚： 啊，真的啊？

A： 所以，我是 R 的师姐。

平塚： 对啊，对啊，她就是二外毕业的。

A： 我 90 年从二外毕业。

平塚： 90 年毕业的？

A： 对。

平塚： 啊，这样的。

A： 在那之前，按日本人说的那个 日本語：通訳，通訳案内業 的那个 日本語：通訳的话，大学的时候就曾经做那个，

平塚： 就开始了？

A： 做 日本語：バイト。 日本語：観光案内。 就那种东西。大学，大概是二年级的暑假，

平塚： 是吗？

A： 就开始做了。然后，后来上了硕士。上了硕士，在，

平塚： 就是上了硕士，也是在二外，是吗？

A： 没有。在那个，他们叫 日本語：大平学校。

平塚： 大平学校？大平学校？

A： 叫日本学研究中心。

平塚： 知道。

A： 然后，因为之前，在一个国家级比赛得过奖，所以去了以后，有的时候就在。因为我们老师基本上都是日本人，有的时候，就会有些中国人来听我们的讲座什么的。偶尔会帮一点点忙。然后，就是我们图书馆的主任，他姓 H，叫 HQ，是 B 老师的同学。他们是大学的同学，在北外时的大学同学。有一次，那时 B 老师还在，他还在 Z，他的处接了个

会，需要翻译。是 S 证券的，现在已经没有了。

平塚： 现在已经没有了。

A： 那时候，没有像现在这样，有这么多懂外语的人。不管怎么样，就把我叫去了。叫去了，才发现我完全不能干。

平塚： 真的？

A： 我知道的那点翻译，跟同声， 日本語：同時通訳，完全不是一回事。所以他很生气。

平塚： 是吗？

A： 嗯。他说，你你这样，嘖。

平塚： 您在二外读书的时候，

A： 我们学得都是旅游翻译。

平塚： 旅游翻译？

A： 对。所以，一般的 日本語：観光案内 一点问题都没有。像学习的内容，稍微学术点的东西，也没有问题。但那时中国人不知道什么，92 年，我记得很清，我刚从日本回来的时候，

A： 92 年的十月份。那时刚在钓鱼台开会。那个时候，没有几个中国人知道什么叫做股票。

平塚： 是吗？

A： 也没有什么人知道什么叫一级市场，二级市场。

平塚： 对呀对呀。92 年，对呀。

A： 知道也不会教。那时就跟，我们叫连滚带爬，跟他做了一场。做了一场以后，发现他们中信总有会。然后呢，可能又做了一次，也不好。经常就有人。

平塚： 就是？

A： 在这儿。

平塚： 这个呢。

A： 93 年，大概是 4 月份，我知道他出来办了个翻译公司。她可能跟你讲过，那时没有很多翻译公司，不像现在。所以呢，客人很多。因为他父亲的关系，日本人也很信任他。我那时，怎么讲呢，去了以后也只是做普通的翻译，不是做会议翻译。

平塚： 就是没有做过同传。

A： 没有同传。开始的时候没有。我第一次跟她做是 92 年。然后就是 93 年做过一次。

她说感觉好一点，但是呢，好不了很多。我还有个师姐，叫 Y。

平塚： 啊，Y 老师！

A： 那个时候，同声传译还很神秘。一般一说同声传译就要四个人。

平塚： 四个人？是吗？

A： 对，那个时候都是要四个人，就是要换。至少要三个人。

平塚： 对，至少要三个人。

A： 那么，就是，就是 Y，B，加上我。我呢，就做一小点。那时，我觉得做的事比较……怎么说呢？工作比较少，但每次都是新内容。比如说……那个时候是来讲会计准则。国际会计准则的那种，而且是同传。好像做的效果不是很好。等我们休息，别的人，他们认识很多人，没人认识我。我们都站在那儿喝咖啡。然后就有人跟他讲，说你讲的，和杨晶讲的，我们都听懂了。另外一个翻译讲的，我们就没有听懂。那个时候我很难受。然后，大概是在 94 年吧，95。应该是 95 年。忘了是 95 年、九六年，反正是两年。日本开发银行，JDB。JDB 利用世行的钱，给中国刚刚成立的开发银行培训员工。然后在那里给他们讲什么叫做会计，什么叫做账簿，什么叫做预计审查。在那里，我跟孙老师，我们俩合作，他没有很长的时间。每次上课要两个星期，一个暑假总共有四个星期的课。那么我就坐了大部分。据他说，那一次做完了。因为每天都要做，就跟他们住在香山那个地方，每天都做。那次以后，他说好像懂点经济了。因为我是学历史的，所以。

平塚： 是啊。门客之外嘛

A： 大概是在九六年的时候，他说是，大概是第五次，我们俩去做一个翻译的时候，当时我很紧张。然后就“ハハハ，緊張”，但我自己不知道。有些人认识我，也认识他，就跟他说，今天另外一个翻译，听倒是听得懂，就是那个“赫赫赫”是什么意思啊。哈哈。

平塚： 真的啊？听出来啊。

A： 就是因为麦克风。

平塚： 麦克风，对对对。

A： 就这一次。他从来不跟我讲，当着我面，他从来不表扬我。但就这一次，他跟别人讲，以后，她就可以独立做了。大概这算是一个经历。

平塚： 是啊。

A： 日本語：日本語學習曆、就是从 16 岁开始上二外学习，

平塚： 16 岁就开始？

A： 对，是 16 岁。

平塚： 真的啊？

A： 嗯。就是上学的时候，在二外学，在研究生学。八年后，等到二十八岁的时候。然后，就是毕业后，就是去教书嘛。我把一个我的简历给你。然后,98年再去东大。

平塚： 东大。

A： 两年回来，又接着教书。反正一直在学习。我们这个 日本語：通訳の訓練 在我那个年代没有班。因为在中国办的第一个班是日本語：T 先生 在九八年、还是零几年办的一个班。

平塚： 对，99年吧。

A： 很晚。所以我们那个时候没有。我一直跟着师姐看。主要是看，听。听他怎么做。我们觉得，同样别人讲的一句话，他讲的，好像跟我想的不一样。就是这样子。如果这也算是训练的话。

平塚： 那么就是在二外的時候，就沒有受過？

A： 没有，没有。当时我们做的就是所谓的旅游翻译。

平塚： 旅游翻译？

A： 对对对。二外现在有同传翻译。二外除了刚才说的 Y，还有个人叫 S。

平塚： 啊，S san！

A： 对。

平塚： 他也采访过。

A： 是吧？

平塚： 是是是。是的。

A： 他高我三年。他是我师哥。

平塚： 真的啊？

A： 对。所以二外就觉得很有自信。我们已经有同传。所以我们现在开着同传班。然后是 日本語：通訳の経歴

平塚： 这个，刚才已经讲过了。

A： 日本語：形式と頻度。因为现在我不是专业做的，所以我尽量需要少投入时间，高产出收获。哈哈哈

平塚： 哈哈哈

A： 哈哈呵呵 所以，基本上。

平塚： 那比如说每个月

A： 每个月基本上同传两次。平均下来。同传两次的话，就是说因为不可能抽太多时间

去做。然后笔译，我很少做。除非太熟的人，比如说日经新闻，他们从 97 年开始做，就一直这么，每年反正都互相麻烦吧。我也给他们添了不少麻烦。他们来的时候，就他们的笔译，我会做。一般的，我不会接。因为我眼睛，看电脑会很容易疲劳。所以最近配了老花镜。估计会好一点。

平塚： 你还是年轻。

A： 没有没有。远视的缘故。

平塚： 是吗？

A： 日本語：通訳の仕事、受け入れる際の判断基準。

平塚： 就是说，就是接受这个。

A： 首先，这个人不让我讨厌。協力しやすい。

平塚： 您的意思就是客户？

A： 对客户的话，不能太夸张，不能太傲慢。我大概,可能脾气比较大。

平塚： 就是说中文的话，我听说，一般不通过经纪人？就是说直接跟客户？

A： 对。我们一般都是通过 口コミ 直接找。他还得告诉我，你是谁介绍来的。若是不认识的人，我就不会听电话。因为现在中国的翻译公司，北京的翻译公司很多，我经历过什么样的事情呢，这是老蔡告诉我的。有个小翻译公司，它想拿一个很大的翻译公司的活，那么它就需要一份很辉煌的简历。但是，一般的翻译没有。那好了，它给我打电话，给我一个 offer。我就同意了。我说我把时间空出来。但是等到那个会议期间了，发现任何联络都没有。但实际上这个会已经开过了。S 就说，这个就是拿你的名字，把这个活骗下来。然后再去找些更便宜的人给做。所以，我们一般不给完全不认识的人干。这样子就好像都排除了。最开始的时候，因为翻译比较少，所以大家很可能通过一个什么，这样子就弄过来。但是有些人太傲慢了。

A： 太不像话。

平塚： 比如说，这次工作是有关什么金融啊，有什么，经营方面的。就是说你是不是要准备。

A： 对，那个基本上都不会是一个急转。因为我们每天都面对着。中国发展很快。我们在完全不懂股票的时候在做股票，完全不懂会计的时候在做会计。所以现在还好了。现在起码有一点工业的基础，你要去做环保，环保还有工业基础。你要去做 碳排放，去做机床啊。现在都好。现在这个时代中国什么都有了。所以，从学习的角度来讲，好像已经不存在一个那种理由。最主要就是说，我有一个我的底线。就是说，你是我的客户，但我不

是卖的，我提供的是服务。所以基本上有这样一个。另外一个，就是，这个我不太清楚老蔡跟你讲过没有，因为在北京，英文翻译他们挣的工资很高，一天大概可以拿到 800 美金到 1000 美金。

平塚： 这样啊。

A： 是这样。而且他们连会议翻译，就是那种的话，每天也是毫不客气 500 美金，低于这个免谈。因为他们英语翻译，一个是有资格。他们有资格证书。另外有一个呢，就是我们，

平塚： 对，有资格证书。

A： 另外一个呢，他们有组织。他们是一个协会。

平塚： 有组织啊。

A： 比如说，你要是想进他们的协会，必须有三个已经是会员的人推荐。但是，如果你犯了规矩，那么以后。因为你要知道，日本語：同時通訳 都要带另外一个人嘛。

平塚： 对。对对对。

A： 那就没有人带着你玩，你的活不会有人跟你配合。

平塚： 哦，这样的啊。

A： 他们采取这样一种方式来。我大概在 2002 年刚回国的时候，我们跟老蔡聊这个事儿。老蔡说，那咱们就这样，成立一个所谓的价格同盟。同传五千，翻译公司呢四千，不能再低。出差怎么算。因为我在日本外务省有一个 IHCSA，我有那个资格，我就把那个工资拿过来，出差应该是补助多少，然后怎么怎么样，然后大家就。反正起码现在拿出来，一天没有太低的。最少的也是四千块钱。再低不会接。前两天，陈平给我打电话。我也跟他说，我这样不行，你可以找别人，我可以给你推荐别人。

平塚： 是不是她讲的太低了？

A： 对。他说，他们还以为他们是客人。突然的有事。所以呢，我也很理解他，但是说，我肯定不行。我们总共就几个人。我，S，J，Y 老师，Y 老师不在我们这个圈子里。因为她五十，她已经五十几了，我看，她大我十五岁，五十五岁了。

平塚： 真的啊？

A： 嗯。

平塚： 看不出嘛。

A： 你最近见过她？

平塚： 对，去年就见过她。

A：对对对。她已经五十五岁了，她现在忙着翻译一些他喜欢的书

平塚：啊对，我听说过。是是是。

A：所以，G，S，我，我们总共不到十个人，可能也就是十几个人。最忙的时候，稍微慢一点人也加上，每年日中经协那个环保会，每年要十二个人，那就全北京找不着翻译了。

平塚：这样啊。

A：你就看。因为它是那个发改委嘛，发改委呢，现在就有一个现象，中方出钱，它一般不会商量，他问是什么价钱，那好，就是这个价钱。因为它就跟采购一样。就是这样一个标准。反倒是日本企业呢，它有的时候会。当然有很多的理由。因为日本可能不像前些年，那当年我们也在日本也是那样子，一天十万的拿过来，所以现在也不能够算是。就是基本上我们的基准也很简单。一个是人要处得来，第二个就是工资要过得去。就这两条。哈哈。

平塚：是是是。

A：然后是，这个吧，我当时觉得，这个，对我个人来讲，我当时给学生上翻译课的时候，就经常给大家讲，你要变成那个场所里的空气。视有若无。就需要你讲话的时候，你一定要讲话，而且只能够忠实地传别人的话，你不能有自己的思想。就是……空气。

平塚：对对对。

A：我自己当年，年轻……的时候，太过于觉得我是这个客户的翻译，我要维护他的利益。然后就是。

平塚：哦，维护他的利益，啊啊啊。

A：然后就差点弄得这件事没办法谈下去。所以呢，有这么两次吧，所以以后就，我的。当然，他们后来也成了我的很好的朋友。三井物产的。他们就说，这个时候我讲这话的意思是要这样，不是说那样，你觉得我讲错了，我不是讲错了，我只不过是想说另外一个数字。所以呢，不去纠正。然后，最主要的就是不拿出自己的想法来。我觉得你就是空气。你不能超过空气。

平塚：啊

A：然后，这个文化差异。文化差异当然有，有很多地方需要我们去打圆场。比如说吃饭的时候，上一只整鸡，中国人就会很尊敬地把那鸡头冲着客人，然后客人就在那里哆嗦。你就会告诉客人，你一般要告诉客人说：“这是表示对您的尊重”，另外要赶紧跟服务员讲，把这个鸡头拿走。这方面，我师傅跟我讲的时候。你接着撤你的盘子，没问题。就是我师傅跟我讲，这些功夫实际上是叫做……功夫在翻译外。就是说，这些心思一定要花，好像

别的没有事情，因为生意嘛，大家都是在挣钱。我有钱你拿走，你有钱我拿来。这些事情的處理都比较简单，但是碰到这些个细节，比如说好像难一点，比如说把它翻译出来的时候，好像有的时候是自然的出来的。我记得有一次是，北京市宴请那个谁，现在已经落选了，原来的一个通产省大臣，叫 F 他跟他夫人来。他夫人非常聪明。一个就是瘦瘦的、小小的，什么都能干。领着那么一个夫人，叫日本語：K さん。然后呢，北京这帮子人呢，都很喜欢她。然后呢，F さん有点大男子主义。然后他们就笑他，说我们都喜欢夫人，然后下面就不说了。然后 F さん就问我：“他们说了些什么？”，我说：“大家都说喜欢 K さん。说以后去哪，吃什么菜，都听 K さんの，不听您的。”。F さん就说了一句：“日本語：僕、悲しいよ”。但是呢，实际上我们应该讲，就是说，这个属于，叫做 日本語：うれしい悲鳴，是吧？

平塚： 对呀，日本語：あたりまえ。

A： 然而我翻的时候，翻成“太欺负人了”。当时自己没觉得。在我生活感觉里，他就是这样一种心情。但当时在大使馆工作的 D さん

平塚： 啊，D さん，

A： D さん就说了，这是我听到的最有意思的一句翻译。哈哈。D さん因为他自己也学中文，我要是翻译成“我要哭”呢，那肯定不对，“我很悲伤”那更不对，所以，这个事情好像，也不是说日本語：工夫 这种简单的事情。就是说，你有一个生活感觉。就比如说，他有他的语言，我有我的语言，你有你的语言。然后你要充分知道这个时候，这个语言对我来讲很自然的，对你也是很自然的，就行了。

这个好像就是 日本語：通訳者の規範

平塚： 对，口译的规范

A： 就是诚实。这个诚实，你只要做到诚实这两个字，那么你就比如说，守时啊，守密啊，这都在里头。你就得去诚实地去遵守。你比如说，你知道什么事情和不知道什么事情的时候，尤其是你做到像孙老师那样的程度，有的时候有关国务的话，那就不能讲。那么这个时候呢，你就要告诉自己，就是说很多东西，我们就是要听令一种规则。那么我觉得诚实就够了，包括对客人。

平塚： 对客人哦。

A： 也是一样。就是说，还好吧，就是说没有碰到说太拿翻译过不去的人。

平塚： 对。是是是。知道了。知道了。

A： 然后是，日本語：通訳者の役割 那么最重要的就是做一个桥梁。

平塚： 桥梁，

A： 对。而且这个桥梁呢，

平塚： 交流的。

A： 对。因为我现在在我们的研究所，要去做一些我们自己研究方面的翻译。那么就很有意思。比如说，有一个日本农学史的专家，叫德永先生。他在大阪。然后呢，我们这边有个农学家。实际上他两个人脑子里想的东西是一样的。一个中国的农学史家和一个日本的农学史专家，两个人有很多地方想交流，但是，如果我不在，他们就没有办法交流。所以，这个时候我也觉得很高兴，我能帮到他。所以，我们觉得。就是，当然在研究所，我做完了，我也能够得到一些。当然，任何时候都是 日本語：勉強 我也能学到东西。日本語：場合の違いにより、这个，我看这个问题的时候，实际上就是说，我想说一句，我们不能够认为自己太伟大。因为有的时候，你比如说，我们帮人家去谈判。这个生意做得成做不成，都会跟翻译有关系。比方说，你能不能让双方互相信任。当然，这个前提是他俩双方能够互相信任。

A： 好的。谢谢。

A： 然后呢，就是说。怎么说呢···我，但是有翻译不起作用的时候。你知道有一个是 LT

平塚： 哦，LT。

A： LT，他们有一项内容，中国出口石油给日本。然后呢，因为中国现在进口石油。所以呢，那一年，我去做那个翻译。然后呢，就是说，我是日方的翻译。那么，因为日方觉得 LT 这件事情，它···实际上是没有必要。但是呢，它是一个，能够的话，还是持续下去。因为它代表一部分历史。那么，但是中方呢，那个石油公司说，这件事情实在是干不下去，因为我们要，你要的呢，都是当年大庆的石油。那么现在大庆没有石油了，我们要从印度尼西亚买全世界最好的石油，然后按当年那个价格给你。说那个，因为马上要···，合同也到期了，说不要这么干了。然后呢，因为日方来的是日中经协的领导，LT 的委员，然后呢，我也在那里帮他翻。大家都很真诚。但是呢，中方就，没有办法。说这个样子，我们也很重感情，但是，这个事确实，我们自负盈亏，说每年我们为国家做这件事情。然后，而且这件事情实际上没有必要，因为现在贸易要自由。但是，后来。原来是准备，上午去谈。日方的态度是尽力争取。但是呢，等到谈到十点半的时候，中方说，我们歇一会吧。下午一点半，你们再来。那好了，我们就出去。出去的时候呢。我因为跟日中经协做的的时间比较长，我就悄悄地问，您感觉怎么样？他说，不好说，有些时候，感情这种事情

管事，有些时候，感情这种事情就管事了。那我就觉得。他说这件事，他有了一定的心理准备。那么等到下午一点半，我们再去看的时候，就很简单。大家就，就是一个结果。就是说，这种时候呢，就是说跟普通意义上的谈判，我想说有关政策夹杂在里面的时候，翻译的作用实际上很小，你只是一个机器。那么在普通人的交往，两个人能否成为朋友的时候，这个时候，这个时候可能翻译起的作用要大一些。但是大部分时候，我们尽量还是让自己不显眼一点，因为我们就是个翻译。我们 S 有一句语录：你来，就是来吃饭。来了来了，把饭吃了走。就这样。哈哈。我认为这是一种哲学。就说你很简单。别的好像、我大概就是这么多。

平塚：啊，这样。

【B氏のオーラルヒストリー】

平塚:能不能听您的这个,比如说就是学习日语的一些过程吧。这个怎么说,

您为什么开始学习日语。从这个开始…

B:其实我都,有一次日本经济新闻采访我都是,大家都愿意。

平塚:啊,这个我看过啦。

B:恩,我那个时候就说过,我学习日语其实很偶然。

平塚:啊

B:因为文化大革命,上山下乡。然后呢,就是经历了四五年之后,当这个中国的大学的,当时还没有改革开放。1970年吧。

平塚:1970年。

B:恩。就是邓小平恢复工作以后,首次,就是主张呢,恢复复课吧。学校要人才青黄不接。那个时候呢,开始招收工农兵学员的时候,可有偶然的的机会。我在插队的地方就有了这样的机会。那么当时呢,开始招生的时候,没有什么考试。也有过考试,但是它有其他的标准。就是有推荐啦,有什么面试啦。因为当时的学生,插队的学生嘛,应该说是1968年时候的,从初一到高中三年级。也就是说呢,1952年出生。大致上可能还会有人1953,1954的。大致上应该是1952年出生到往上数6年。这样一个老三届,就是说高中一二三,初中一二三。通常呢,就说社会上称这帮人为老三届。

他们都在乡下,因此,他们大家共同可能进入从1968年以后就没有在上课。但是1968年以前,他们的女学历是不同的。因此呢,文化知识的水平都不同。因此那个时候,大家这个六届人坐在一起考试是不可能有什么。

平塚:对对。

B:对,他选择起很困难。他要选择年龄小的,他就文化基础会差一点儿。他要选择呢,那么就形成了一个数理化。他需要一些基础,另外往往他呢,不怕选择年纪再稍微大一点的。而且呢,政府也有规定。尽量给这些人机会吧。那么呢,外语呢,就是完全可以从零开始。

平塚:这样啊。

B:而且他希望小一点。所以呢,就是可能像我们这样呢,就比较容易进入到这个。然后个人没有什么愿望。

平塚:恩恩恩

B:个人没有什么愿望。他如果问你的话,谁也不敢讲愿望,就是说主要能回去就行了。所以完全是这种。当时呢,面试过我的时候,面试是英语。我以为呢,我会学习英语。

平塚:啊, 这样啊。

B:如果是外语的话, 我选择。我害怕学法语啊, 俄语啊, 那种舌头转的。

平塚:那种舌头转的。

B:我觉得我啊, まがらない。然后那个, 进了北外以后呢, 就给那个。因为大家都希望学习英语嘛。就给发了到日语去了。这就是日语的开始。

平塚:啊, 这样。

B:说这个, 舌头也不转。

平塚:啊, 是这样啊。

B:但是当时对我们来讲。不可能有很大的个人选择的余地。另外呢, 有一次学习机会呢, 也都觉得很不错。所以还是呢, 没有什么太强的砥柱。基本是让学生们, 学日语总得学阿拉伯语强。那发音。大舌音, 小舌音。

平塚:那, 您的同学当中也有就是开始学习阿拉伯语的?

B:对啊。

平塚:啊, 真的。

B:教室也是对面儿, 宿舍也是对面儿。天天听他们在那儿“her her her, di di”。就是大家互相都学几个语言的。

平塚:真的。

B:法语么, “hehe didi”。然后又是什么“siwaxili”, 大家都在一个楼道里。

平塚:啊, 这样。

B:宿舍是, 我记得我们阿语的女生少。四个人一个宿舍的话, 那么我们同宿舍的就是她们。

平塚:啊, 是这样。

B:是这样。就是说, 当时招了 12 个语种。我那一届。

平塚: 12 个语种。啊! 那您是从几岁开始学习?

B:那个时候我 22 岁。

平塚:22 岁, 啊, 已经 22 啦?

B:恩, 已经 22 岁啦。当时 22 岁这个年龄, 在这一批人里还算是比较低的。但是我们入学以后呢, 有都比我们, 年龄, 整个在日语年级里, 可能一半人, 一半以上的人都比我年纪还要小 1, 2 岁。

平塚:啊, 这样啊。

B:小 1, 2 岁到 3, 4 岁吧。就是他们可能有些是从农村招上来的。农村呢, 可能不是像上山下乡那样, 严格的卡在第几届学生上。他们可能就自己家上。还有部队招上来的。部队

呢，招生也不是说一定要从上山下乡那里面招。没有严格的规定。他就需要培养这个人才。他就给你一个合适的年龄。

平塚:啊。这个样子。

B:唉。所以是。这就是学日语的开始。学习在北外。

平塚:北外。

B:工农兵学员的课程是什么呢。不像现在这有文化，有历史。基本上呢，就是每年要学工学农，下乡什么收麦子啊，什么啊。军队里去呆一呆。有些这样。

平塚:这样啊。

B:另外呢，还有什么政治学习。然后其它的呢，就是一些课本上的也都是工业学大庆，农业学大寨。有一些这种内容，什么鲁迅先生的故事啊。不像，没有很多关于日本文化。

平塚:对呀，那时候。

B:不是很科学的内容课程。

平塚:对呀。对呀。

B:但是基本呢，课程的安排，很传统的是外语学院的教学方式。就是说呢，口译。有那个。

平塚:恩，那也有口译课。

B:有口译课就是说精读。

平塚:恩，精读。

B:精读。泛读。

平塚:恩，泛读。

B:啊。然后是课外阅读。就一般阅读。基本上是这几个。

平塚:这三个。

B:强调的呢。是外语学习不可偏废。要求是什么呢，听·说·读·写·译。五个这样。

平塚:这样，恩恩

B:听说读写译。然后学习是从基础发音开始。发音呢，一定要运动你的舌头。就是每天呢，

平塚:就要练。

B:每天早晨大家可能会，都要起来就是去朗读。然后这个朗读呢，还要去听录音。一种是模仿似的朗读和自己那种熟练的朗读。然后课呢，就是精读课和会话课。会话课里也有精的，有泛的。精读的呢，就是老师把这个语法先让你分析清楚以后，更多的要求是模仿。

然后有听力课。听力课听，

平塚:听老师的。

B:拿一段NHK。

平塚:啊, 这样啊。

B:让你听 5 分钟。然后呢, 看谁能把这个记下来。

平塚:记下来。

B:记得快的人呢, 一个字不差。记那个什么。我算记得比较快的。后来老师, 你这个是蒙的。就是说, 蒙我也能给你蒙出来。

平塚:这样啊。

B:也许意思我并没有全听得懂。但是基本上是 NHK 的那种一般的播音速度。偶尔会有它广播的那种座谈会。感觉就会很难。

平塚:啊, 座谈会。

B:座谈会就会,

平塚:比较难。

B:就会很难。就是说, 每天呢, 就是课程呢, 教材是老师自己编的。一本一本都是油印的那种教材。然后基本上呢, 就是处于这么一个, 就是学习四年。

平塚:恩恩

B:学习四年。我觉得相比之下还是很, 各种语言有各种语言的不同。我看那个阿拉伯语。当时她们, 给我感觉, 她们接触像埃及金字塔报。ピラミッド。

平塚:ピラミッド。

B:金字塔报的那种文章的翻译, 好像有过, 确实很难。像天慌夜潭的那种。

平塚:天慌夜潭。

B:一句话跟一句话连起来怎么那么不容易。就是说这个国家的语言, 像中国文化一样, 特别古老的一个国家的语言。希腊语啊, 什么什么。所以, 他们这种语言的学习, 可能比学习日语要吃力。

平塚:吃力, 对。

B:啊, 比学习。法语又显得比英语更吃力。

平塚:对对对。

B:所以呢, 那个时候呢, 就是说不同。然后日语我们有的时候接触的实际翻译, 笔头的翻译确实不多。但是呢, 日本的经济活动比较活跃。有的时候, 在北京展览馆有那种日本什么机床展啊, 日本的工业展览啊, 可能它需要人的时候会到外语学院来找人。然后就站展台。站展台。然后可能有的时候, 大家会今天 5 个人, 明天 5 个人。1 个月, 2 个月的到旅行社。

平塚:啊, 这样啊。

B:恩。到旅行社去。我就在西安呆了2个月。陕西省外办。

平塚:外办。在外办工作啊。

B:恩。在陕西省外办搞接待。

平塚:接待。

B:对。

平塚:这是导游啊,还是怎样。

B:导游啊。

平塚:导游啊。

B:今天是纺织厂,明天是幼儿园,后天是乾陵。

平塚:真的啊!

B:在北京就是故宫,你都把这些背下来。学外语就是一个背。

平塚:对对对

B:我觉得孔夫子那个背。谁有本事谁就能。

平塚:对对对

B:另外呢,一定要脸皮厚,开口。

平塚:脸皮厚。

B:恩。开口。就是中国人,欧洲人都肯开口。韩国人也肯开口。相比之下,最不愿意开口的是日本人。

平塚:日本人。对对对,没错。

B:恩。

平塚:是是是,是的是的。

B:对吧。我们可能文章看不懂,会说。一开始就是,听最难吧。听

平塚:对对对。听。

B:听说读。

平塚:对。听说读的话,听比较难。对。是是是

B:完了就几个。然后呢,要求的标准很,就是说语法正确啊,除了这些呢,给你讲的是一个大方向的标准。是 信·达·雅

平塚:对。就是信达雅。

B:信达雅。首先要翻准确。

平塚:对。准确。

B:准确。然后你准确了,人家没听懂还不行。要传达到。最终呢,你翻译的应该美。就是

说，听上去以后用英文讲 NICE.

平塚:NICE, 恩。

B:听上去舒服。

平塚:舒服。

B:它有的时候，听众会给你讲。就是说，我都离开好多年了。我一说话，他们还说是不是那一次那一次翻译的。那是因为做同传，座小阁子里。看不见人。你是不是翻过哪一次哪一次，就是说他对你的声音的熟悉啊，什么的。那你的声音应该有穿透力。这些基本的，基本的条件。如果你基础很好。到时候你就哆里哆嗦地说话，声音也放不开。然后说话就会伦理性太强。或者说是都

平塚:不行

B:唉，都不会呢，就是说，就翻译应该，它是有的时候什么场合需要带一点而儿激情的。有的时候你得把他们调动起来。

平塚:唉唉唉，是啊是啊。

B:所以它呢，到这个雅。到了雅的这个程度。但这一切的基础，就是说，你首先拿出，拿出一个文章来，你得从头能读到，把声音放出来，从头能读到尾。找一个懂日文的听，人家听懂了没有。就找一个日本人听。听懂了没有。有的时候在那念半天，我都睡着了，我都一半没听懂。就是说，他用他的方式念。他就是念了。念得也很快，也很流利。那么学校里呢，就给你这些，你每天要练。要上午下午朗读很长时间。就是说自己成了一个习惯了。都在操场。我不是很用功的。我看那种，用功的是真用功。就在操场里。然后呢，那种老式的录音机。一个班 15 个学生一台录音机。那用工的学生很晚还在那里听，早上很早就来了。

平塚:这样啊。

B:像我们人太多了，又不听了，就完了。然后呢，一个人可能可以插一个耳机。因为当时没有那么多录音机呀什么的，这种设备。

平塚:对对对

B:恩。一定要呢。就是说，其实是熟能生巧。

平塚:对，熟能生巧。

B:那个时候，我记得那个 Y 先，T さん。

平塚:啊，T さん。

B:她来呢，给我们上过课。就是说，

平塚:真的？

B:上的就是翻译课。如果就是在一个宴会上，你应该怎么翻译。然后这翻译稿子应该怎么读。大家就录她那个。尊敬する S 先生。尊敬する、她就在那儿念，我们都觉得多好听啊。就这样，15 个人里，走到今天。有几个还在当翻译的。

平塚:啊，这样啊。

B:可以说没有。

平塚:啊，没有？

B:没有。就是大家干的各行各业。有干旅的，在旅行社的。有呢，干主人的。有呢，可能就是笔头的，有在大学教书的。有到国外去了。有干什么。真正呢，一直在翻译这儿干的差不多 50 岁的，我看也就是我。

平塚:是吗。

B:两个班，30 个人。

平塚:总共有 30 个人？

B:对。大概呢。

平塚:这样。

B:大概除了我吧，可能还有个别，在。我觉得吧，不超过 5 个人吧。或者说，三两个人。

平塚:真的。

B:唉。差不多。去这么做，就很不容易出来。很不容易出来。因为呢，它不像数理化，它没有一个标准。很无形。然后呢，就得靠你呢，要耐读性子。耐心。因为外面的社会多精彩，外面的社会多热闹。你可能都会坚持在你这个，

平塚:我这个行业。

B:对。因为很多人都会犹豫各种各样。有生活原因，可能就变化了。是吧。也许大学毕业，可能我更愿意到地方去。我回老家了。但是老家那个地方并不像北京上海，有很多交流的机会。另外可能有的人就说我这课出不来，太难了。或者说是什么，就是可能是，没有这个，这么一个。我呢，也比较偶然。我大学毕业，当时是分配工作。

平塚:啊，那个时候。对，分配工作。

B:分配了这附近的毛选编译局。

平塚:啊，编译局。

B:编译局呢，就是翻译那个，

平塚:是啊，是啊。

B:毛泽东选集，党代会，人代会文件。到后来翻刘少奇，朱德，邓小平文选。那个地方呢，它周围等于都是我的老师吧。都是那些呢，或者曾经在台湾，或者曾经在日的华侨。他

们的母语就是日语。所以日常听的机会比较多一点。

平塚:啊。比较多一点儿。

B:各种各样的口音都有啊。然后这个,你听的机会呢,或者呢,你翻译的东西呢,会给你改啊,什么的。

平塚:哦,这样啊。

B:唉。在这个地方差不多十年。

平塚:干了十年了?

B:啊。差不多十年。然后呢,就在这十年当中呢,可以说呢,就是说也有过好多次被当时的,中国改革开放刚刚开始,翻译人才不够。那么,无论是旅行社也好啊。这些共青团啊,这些交流机构也好啊,还有一些呢,做经济项目的中介。你比如说,我记得当时,台联,台湾联合会啊。他们都会有一些从日本来的,这个专家呀,给哪个企业将什么。反正会不会没办法,只有你了。现在有选择,谁会谁不会。那个时候,你就得啊。然后,我们那个时候机会相对多一些。但是这些没有钱。

平塚:啊?

B:一天十几块钱吧。就是那种。工资呢,工资一个月几十块钱一开始。

平塚:以工资的方式来啊。

B:后来做翻译可能会有很多收入。当时整个社会的收入水平也低。当时呢,做翻译也就求一个机会锻炼锻炼自己。并不是说,像现在这样,就是说他可以有多少的收入啊。现在想找一个能做导游的翻译太容易了。当年连这么一个都不容易。而且现在呢,各行各业的交流都比较专业化。当时都是通过国旅来啊,通过友协来啊,大概没有通过团中央,没有其他的途径。所以呢,很多日本的要人啊,您说农协,干局,这种专业的交流,也是通过旅行社来的。所以,你在旅行社接触很多专业的,那种交流。他们旅行社当时也是有非常好的翻译。

平塚:这样啊。

B:所以,它是有这么一个背景不同的。时代的背景不一样。

平塚:对对,时代也不一样。

B:时代的背景不同。就一直,后来到了一个中信公司当翻译。完全是金融领域了。

平塚:啊,金融领域了。

B:金融领域。经济关系了。然后又做翻译公司那就中和一点儿。差不多做这个公司。总而言之,如果说是这个,频率,

平塚:频率。

B:就是「頻度」。那必须得是天天有。

平塚:天天有。

B:必须得是天天有。

平塚:是的。是的。

B:随叫随到。如果说是，去跟团。那就是一个接一个。回来不会有两三天时间，就一个接一个。然后呢，什么都得干。对不对啊？

平塚:对对对

B:任何的事情都得干。如果说是在中信的话，那更是一会儿哪一个领导宴会需要人，一会儿那个，谁谁谁见翻译需要人。每天每天都在接触。

A:啊，这样啊。

B:翻译公司更是这样。所以呢，翻译需要年轻。趁年轻，大学毕业前5年。学了语言出身。用一定要求，我的标准的话，我要是有像，用中文学的外语。用母语学外语。

平塚:用母语学外语。知道知道。

B:如果学过以后，能有1,2年的留学。因为我是留学了1年吧。能有1,2年的留学，那当然更好。没有没关系。然后呢，就是这人需要一定的反应和口齿。还有呢，就是他的表达。表达能力。就是说，他不会是很紧张，或者说是那个。

平塚:对对对

B:差不多呢，一个基础的条件。但是基础上是一定要用母语。因为这不是学外语。这是学翻译。一定要母语好。

平塚:对，母语好。母语是最标准的。

B:母语不好吧，到一定程度，就是说你偏偏爬坡儿的时候，你爬不去。就是这看的就是母语。然后呢，要有一个相对的高频率的锻炼。

平塚:锻炼。

B:这个锻炼呢，你不能每天就是不变花样的就这样。你要自己学习。其实就是，作为一个母语学外语，对你这个外语来讲就是丰富的词汇。每个人都要有自己的单词表。

平塚:对对对。

B:あいうえお。我记得我有很多，あいうえお也行。或者你用这是纺织行业，

平塚:对对，各种行业。

B:也可以。最好是中日对意的。

平塚:恩恩恩，是的是的。

B:这种单词表。我记得我父亲一直到去世，可能还会有单词表，偶尔碰上两个单词表。

平塚:真的?

B:你就是说,当他想知道。我知道日文是这么说,但是我对不上中文。有的时候你会说,我知道中文是这个,但是我对不上日文。但是对于中国学生来讲,更多的是中文对不上日文。

平塚:对对对

B:对吧。中文对不上日文。不够丰富。那像有些行业来讲,像保险。在中国比较新的一个行业。中券保险,那可能是中英日,三个字摆起来。英文最长。

平塚:对。

B:日文到这儿,中文就这么一段儿。它是可能这么一个,因此有一些呢,你要去逐渐的。现在就说到这个翻译的标准。然后呢,翻译的工作啊,受ける際の判断、基準,やりたくない。你如果是一个合格的翻译,你应该什么都能应对。

平塚:对。应该是这样。我也这么。

B:除非是呢,就是说,比如说我会讲。在欧美国家,他们那些英文翻译吧,有的时候有点过分。就是说8小时,8小时以外,它标价的。

平塚:标价。恩恩恩

B:就8小时以外。但我认为和日本人打交道,这样好像有点太那个,就缺乏东方式的一种交朋友的方式。那么就应该说,只要是工作内容。你比如说,你不能说今天这顿饭到8点,你就要下班。

平塚:对呀,这是不可能的。

B:这些都不可以。但是如果你要去卡拉OK还要我陪,那这个算加班了。对不对啊?

平塚:对对对

B:比如说,通常情况下就是不会去的。比如说,这个呢,可能会选择这种工作的内容,其实不应该选择。只有你去准备。他告诉你一个基本内容,你去做准备。但是工作的性质呢,好像是那种非这种真正需要翻译的。有些人,比如说,你陪他就是一个陪。没有什么翻译。这个这个。

平塚:只是陪同。

B:只是陪同呢,也算是有翻译。比如说,我就是要,很不上档次吧。我要去卡拉OK,我要干什么。或者说我要去什么地方。特别是现在的这些。那个无非就是这种道德标准。不会有那种。

平塚:道德标准。啊,我知道。

B:对吧?就是你用中文讲,不正经的。

平塚:不正经的。恩恩,明白了,明白了。

B:当然我没有碰到过。也不会有人拿这个来找我做。那么这个的翻译的标准,也就是,其他呢,总有人说,这个我不会,这个我会。这是我的专业,这机械是我的专业。我只翻机械。你放心。到翻到他的专名,他准不会。这么去挑的人,肯定不会。这个我们遇到过无数次。

平塚:真的?

B:你比如说呢,农科院,有一次做那个,稻米加工机。那种设备。因为日本的精加工设备非常好。什么コシヒカリ啊,有多少碎米啊,有多少什么的。说你们来没关系。我们农科院有一个资料翻译。他呢,配合你们,应该说专业词汇都会的。

平塚:有他来做翻译。

B:对,然后那我们几个就去了。然后呢,就是同传啊,最翻不上来的是他。是他这个专业翻译。然后呢就说,来跟我商量。你能不能请他不要再翻了。我说这是你的人。如果说是翻译公司带来的人,由我说。对于你们农科院的人自己去说。

平塚:对呀。

B:反正你没有了,你找谁吧。我们都做后的听得懂,听不懂,反正说。所以说,他认为他这样,他就能翻懂了。其实不懂。翻译就应该。如果是翻译就应该是一个,

平塚:没错没错。

B:他涉及的面世很广了。

平塚:是的是的。

B:并不是说这个螺丝钉。

平塚:是是。

B:反过来呢,一个语言基础是翻译的重点。你比如用中文,你就是中文。英文你就是英文。他的重点是什么呢。一个是基本语言。一个是你所学语言覆盖的这个区域的文化知识。

平塚:对对对

B:比如说中国它还是一个国家。说实在比一个欧洲都大。它这一个,你对它的一个文化的了解。然后呢,英语就比较复杂。它覆盖着全世界 60%个国家。它的综合文化知识的掌握,可能会更有难度一些。对吧?那么,看看你自己是怎么。然后,那你就得有学殖民文化。

平塚:是是

B:就殖民地当年是怎么发展形成的。它可能会有一些,不列颠从那儿开始。所以呢,就是说一个这个,一个就是基础的语言。

至于专业知识,应该是呢,他都是有限的。你今天上午开始翻到下午,就应该比上午熟悉。

就呑み込みの早さ。

平塚:是是是

B:你就可以决定你的这个翻译。来的快的人，或者经验丰富的人，他可能很快。

平塚:恩，很快就适应了。

B:唉，就可以适应。就可以进入。所以呢，没有什么，由翻译可由翻译选择的。对吧？

平塚:明白了，明白了。

B:除非你是一个女的，告诉你一个男的，你要陪他一个人去出差。然后呢，会是什么呢。那你会判断。这个我也走过很多次。没有什么。

平塚:是啊，是啊

B:没有什么不可以的。

平塚:对对对，我也走过

B:也很好的朋友，对不对啊？有的时候女孩子会莫名其妙的这种因素吧。所以，没有这个。但是需要一个高频率的锻炼。

平塚:对对，是的，是的。

B:就是这个脑子每天处于那种，就是说它要锻炼一种什么能力呢，脑子的转换能力。

平塚:恩，转换。

B:这种转化能力是一种思维的转换。就是说，你用日文讲的时候你要用日文思维。你用中文讲的时候用中文思维。如果在你的脑子里在做翻译，这个就错了。因此呢，人们锻炼这种思维能力呢。就是一个是开口。开口讲。一个是呢，就是说，善于把你读到的东西使用出来。你比如，你读到可以是教材的，可以是报纸上的，可以是小说里的，也可以是电视剧里面的。你可能碰到这个时候你对它的一种理解。就是还要需要一种理解能力吧。你善于呢，可能通过你的表达方式。因为，往往有些语言很自然。你完全用教科书很难受的。

平塚:是是是

B:对吧？用教科书很难受的。就是，现在的我们那之后的教学，很日本化，很日文化的。不是那种很教科书式的。

平塚:日本化

B:就是人民日报语啊，那种的。北京周报语啊，那样的东西。对吧？它的教科书越来越和日本合作的一种产生的一个教科书。日语教学的，或者说有很多日本的志愿者，ボランティア

平塚:ボランティア

B:高中的老师啊。现在接触的机会多。我们那个时候，到我们的前辈更困难。像唐加玄他

们，周斌他们，没准就对着墙就朗读北京周报，北京周报就完全靠这种强化训练出来的。它可能真正日常生活当中接触日本人就比较少。

平塚:对，比较少。

B:不像现在有很多外教。

平塚:是的是的

B:他会告诉你会话教材应该是这样的，那个教材应该。原来是，中国的老师更多称此了华侨。他给你编。他觉得是什么样，就是什么样。语言也许跟现在社会上的语言不是那么对头。所以呢，在现场，就说翻译是什么呢。你就是一个工具。你最好是职业的。对吧？翻译呢，并不是那个交际。因此呢，有的时候那个，现在的人懂得尊重翻译。它让你也是个代表团，也是正式成员。但是，说实在一个代表团的名单。翻译完了以后。翻译是工作人员。应该是这样的。因此呢，从规范上讲，他的言·谈·举·止·着装还有所站的位置，都应该是不显眼的。都应该是主次分明的。

平塚:不显眼的。

B:都应该是主次分明的。特别是呢，如果你的代表团里有女士。或者现在中国的女领导比较多。中国的女领导比较职业。但是呢，曾经呢，通常情况下，女性领导。就不是领导，是团员了。你比如说，荣毅仁夫人。她就更是呢，社交型的。虽然她不说话，但她很高贵啊，很干什么。那么呢，在日本，可能在外国女人的，一个代表团里女人的位置，更多是这种，夫人的位置吧。

平塚:是的是的。

B:在这种时候呢，你去，给你自己。就是说，像我们从来都没有习惯化妆。连这个都没有。因为自己从来没做过主角。

平塚:知道了，知道了。

B:因此，这个心态一定要摆好。

平塚:对，不是主角。

B:然后，首先要有这个心态，才有方法。你的方法才会是，就是说一定是耐心。等人家讲完了，你再讲。你如何的把这个话记下来。那么一定是呢，反应。他这个话的位置，一定是你走在她后头。一定是跟包的。

平塚:跟包的。

B:都一块出头，，

平塚:这样啊。是啊是啊

B:我现在是，我这个太随便了。

平塚:没有没有。是, 您说的非常对。

B:要我教育翻译啊, 上课。我可能更多的讲。现在年轻人很聪明, 他都懂。他太容易就。现在的女孩子吧, 有点把自己, 有的时候啊, 说句不客气地话, 自己打扮成圣诞树一样。

平塚:圣诞树啊。

B:这儿挂一个, 那儿挂个。

平塚:对对对

B:如果是你做翻译的话, 尽量少一点。

平塚:对, 就是。我也这么讲。

B:服装是职业性的。尽量职业一点。

平塚:是的是的。

B:就是看上去顺眼。

平塚:这是。

B:基本就是。我觉得

平塚:这就是最基本的。

B:但是, 你也一定不要坍塌。一定不要坍塌, 叫人看着你, 因为你吧, 尽管你是一个工具, 但是你毕竟在万人瞩目之下。是不是啊?

平塚:是是是

B:说实在的, 最安全的就是黑白套装, 你买好一点的。

平塚:没错, 没错。

B:合身一点儿, 合适一点。

平塚:是的是的。

B:在日本是没有问题的。但是在中国整个发展过程来讲, 绝对是有问题。因为中国是从一个比较落后和文化大革命大家穿千篇一律的衣服, 那个时代过来的。当你呢, 接受这种外交场合, 或者国际交流场合, 规范的时候是有一个过程的。可能会不知道穿什么好。穿个花毛衣, 他也觉得, 在他来讲花了很多钱。在当年那个时候买的。这个礼仪, 还有吃西餐不知道该怎么办。这个礼仪, 在中国是有一个过程去学习的。你要去了解。不像呢, 国外呢, 可能从小的生活里, 他就有这个一个, 对吧?

平塚:是的是的。

B:规范。所以呢, 中国人已开始连系领带也都难受。把领带弄一圈儿, 摘下来。放在这儿, 坐在たたみ上开始吃饭。张生长, 该你讲话了。 他呢, 把领带先找来再挂上。然后呢, 中国人, 就日本人再年纪大了, 坐在たたみ, 现在都是ほりこたつ。当年没有。他都会站

起来。他呢，年纪大了以后，肚子挺大了，站不起来。你还得去拉他，给他拉起他就头晕。

平塚:真的?

B:完了还讲话呢，就是说，很多就是在交流的时候，他是那种。所以那个，他的可能，大家的着装，还是你翻译如果在宴会上，你又不要把你旁边坐得主人很替你操心。快吃点，快吃一点。我就烦这个。但是如果你总是翻，前头摆了一桌子，你吃不上饭，他可定要会说，闺女，你快吃一点，快吃一点。

平塚:对对对

B:反正我就有准备。反正我就有本事翻译，翻了菜我也吃完了。

平塚:是啊。

B:但是呢，你也不能呢，就是说，别人在讲话，你还在那儿

平塚:对呀，对呀

B:甚至拿着筷子，那么，

平塚:是啊。是啊

B:反正这些都是基本的礼节吧。我觉得这种位置的心态，你就是说，你就是这个人家使用的工具。没你不行。但你又不是谈话的主角。没有你自己的愿望。当然有的时候，人家请我作翻译，我就会问，朝哪一个方向もっていきますか?

平塚:还是问啊?

B:有的时候会问的。那有的时候如果我能够，納得できれば。我能够理解，这种方向性。我会去做努力。就是说，事情让他办成吧。事情让他办成。要不然会有文化冲突的。

平塚:对对，就是文化冲突。

B:容易文化冲突的。还有呢，就是说，

他有的时候会问你，如果同传的话，给你一个稿子，我念什么样的速度，我这稿子什么样的速度你能跟上。那我说无所谓，拿出你的速度念。只不过段落和段落中间，日文吧，語尾が来ないと。

平塚:对。不知道什么意思。

B:所以呢，你中间呢，要停顿个几分钟。停顿个几秒钟吧。就是说呢，后面还在说，没说完呢。你再开始按你这个速度。你如果，你中间太慢了，后边不来，还是白搭。ですが前に来ないと。

平塚:是的是的

B:所以呢，这是中日文的。英文可能没这么难。

平塚:对。好像是这样。对。

B:英文可能没有这么。俄语也没有这么难。

平塚:中日文还是比较难。

B:对,中国可以慢一点,日文呢,语速快。跟俄罗斯人讲话似的。永远不停地在那讲。其实说出来,也就是

平塚:就没有什么。

B:你看普京讲话。讲得非常快。所以就是说,这个,这个呢是,就是在现场的感觉。现场的感觉一定要通过现场去学习。没有任何人可以教你。如果我说的这些经验,在你身上绝对是不适用的。你一定要体会你自己的这个。然后呢,有的时候,你可能会学习了你先辈的一些做法。有的时候呢,你可能需要呢,完全靠你自己的经验,来呢,作出你自己的做法。那么呢,比较好的现场感觉就是说,你能把它呢,变成你自己的话,比较中文一点的话,不要是,有人开玩笑说,中文参考消息用语。

平塚:参考消息用语。

B:非常高兴的我。就是按着这个顺序讲。非常高兴的我。然后呢,日文里呢,当年廖公老听着那些年轻翻译,最后就取笑他们。协和语。就汉字,そのまま使って。然后廖公管这个叫协和语。「大変結構」。你就是说大便结构。非常极端的

平塚:真的?

B:就是这样。在日本的翻译当中,也有很多这种现象。他就读他那个中文的字,没有翻过的。株式会社。

平塚:株式会社。

B:比如说,股份公司。他这两个没有对异。他就用那个汉字。

平塚:是吗?

B:对,有很多翻译。

平塚:真的?

B:恩。翻译起步的时候,都会是这样。听上去也听懂了,很不舒服。

平塚:是啊

B:啊,也听懂了,很不舒服。

平塚:这不算是专业性的翻译啊。

B:就是有些词汇,特别是在专业词汇比较多。你比如说,石油,轻质油,重质油。肯定轻的在上头重的在底下。这一想就知道了。然后呢,中文叫拔顶。

平塚:把顶。

B:拔顶装置。日文可能就叫呢,蒸馏啦,或者说是轻松啦,抽出啦,或者是另外一个词。

平塚:这个叫什么。

B:一下想不起来了。然后这个词叫什么,我说拔顶啊。叫拔顶啊。她懂不懂拔顶。我说不就是轻的上去了重的在底下。他就照这个思路去蒙去吧。那有一个思路。认识的话,你要说准备的话,无非是你要去理解啊。然后你把它变成一个呢,中国人听了,像中国人在说的。这样呢,日文呢可能是最。我最近,这一两年没做,然后从去年开始做。在国家文物局和,因为现在有点时间了,做国家文物局和日本的,比如说,国立博物馆啦,东闻言啊,那些。

平塚:啊,真的?

B:3个月的课程吧。就是博物馆技术啦,文物保护的这些东西。

平塚:恩。文物保护。

B:这要做很多呢,关于化学知识,历史知识,还是要做一点这种准备。但是一定要呢,给他翻译通了。要不特别容易翻译不同。

就是他的理解和一些那种做法,有的时候,我也不知道。对不对?但是它每节课都有个老师在那儿听着。到底这个词是这个,咱们中文叫什么。也许我会在课堂上他们就告诉我,我就记下来。日文和中文的一种,那个什么。然后你都会,尽量用中文行业告诉你。因为日文有,「職人的世界」。

平塚:職人。

B:尽管他们都是大学毕业生,有干什么。他只认同他自己的那个。他可能不大认同日文的一些习惯说法,日文的习惯说法也不是外来语。可能自己的那种词汇吧。

平塚:对,是的。

B:就是说这种东西你给他,这种课堂教学的,让人家能够听懂,不困。

平塚:对对对,这个重要。对对

B:不困。就是培训翻译也好。培训翻译,一般到下午,就很枯燥的。你就睡着了。就是说你得调动起来。有的时候,老师却是不会调动。老师去很枯燥地念那个什么的,帮他一把,对吧?你就说,从翻译的时候回头看一下。我觉得就是,很工具,很辅助的。然后呢,现场的文化差异的感觉吧,是肯定,

平塚:肯定会有有的。

B:肯定会有有的。因为呢,来自于什么地方呢,来自于你原本两个国家的文化差异。国家体制的差异。

平塚:国家爱体制的。

B:国家体制的差异,然后呢,做事机智的差异。那这个的功夫完全在翻译之外。

平塚:翻译之外?

B:唉,不是语言学不出来。学不到这个文化的。那么回到刚才的话,就是综合文化知识的学习。首先你要对你自己的国家的综合文化的知识呢,你一定要有理解。才能去了解别人。只有了解了你自己,才有可能更好地了解别人。然后呢,对于别人呢,那种,你比如说,70,80年点,初期的时候,中国大量的引进技术。那么呢,比如说日立和黄河机械厂。日立的彩电最先进了,然后呢,日立的冰箱尽到陕西的时候。他可以,给你资料全都是数据。但是,温湿度相关的,他说他没法提供。那么,技术人员很死板。没法提供,他说不出来原因。或者说,这边儿说你为什么不提供。你为什么不提供,好像很对立。其实呢,你呢。这些数据,应该是你根据当地的温湿度自己去,

平塚:哦,是这个意思。

B:自己去测量。如果你没有,不理解的话,不理解他为什么要用温湿度。就为什么。那你就后来,我就说呢,作为翻译的时候,可能在这时候要花点时间。到底,当你理解了,可以出主意了。

平塚:出主意

B:你建议他,你给他日本的数据告诉他,就是在日本的环境下。日本的相对湿度60%,西安那儿20%,那种干旱的地方。那你这种时候呢,你的设备会发生一种什么问题。比如说呢,会有一种给技术人员做翻译的时候,往往卡克的地方。因为他们没有耐心做。就觉得当たり前。

平塚:对对对。他自己有他自己的世界。

B:他没有耐心。你们讲了好几天了,还在这种小问题上。他认为呢,但是他也不知道西安的数据有多么的可怕。我作为技术人员,我只做这个。我不做那个。很简单。然后这边想得到的,他也没弄清楚,这个应该是他自己测。如果他自己测。如果你再能「亲切」一点儿,告诉他你应该怎么测。现在他可能不耐烦,不爱听了。但是那个时候,你应该告诉他,比如说,日本测的结果呢,应该是都是取样的。Sample。然后,取样子的时候,他可能一个小时去测一次。中国也许一天一次,你告诉他,你有没有可能起码半天一次。或者说是,应该是什么样的最简单方法,他没有什么仪器的时候,那温湿度表应该怎么看,或者说是怎么观察。像这些东西。

平塚:这样。

B:对。因为只有你既了解他的风土也了解你的。西安的人对日本有多潮,毫无感觉。日本人对西安有多干,毫无感觉。所以呢,他就觉得,日本人会觉得你连这点事都不想干,你怎么这么懒啊。但是他这头觉得呢,唉,那是为什么呀?你为什么有这个数据,跟我们要

有这么大的差距。因为他不了解你有多湿。反正就是，通常情况下会有这个的差别。然后在体制上呢，有一次我。那个就是，也是日立给机械工业部吧。做，全都是。我说你日立，我就笑话他们。我说你平时想见都见不着，一汽的老总。全都是那些大的国有企业的老总。他是那种经营。关于日立的如何经营问题。但是中国是计划，这些国有企业都是计划经济当中走进来的。他的计划部，比如说有 100 人，他的呢，经理部，就说呢，财会部也许只有 5 个人。日本是相反的。

平塚:对对对

B:对不对？计划部 5 个人，这个经理部没准有 100 个人。所以说，底下都是一些老总。平时不可一世的。然后一听，不可能。就采取这种否认方式。不可能，你说的就是，台上台下的，没准就会有冲突。然后呢，冲突主要是由三五个来回，应该你作为翻译，如果说做培训翻译，你应该能听懂吧。来至于什么地方，这个矛盾。对不对啊？

平塚:是是

B:然后呢，我就笑话他们。我说怎么不可能啊。咱那个是计划经济。是不是啊？你那个，人家那个是。

平塚:对对

B:你比如说，一个钢厂，能源部。日本人太重视这个能源部了。日本觉得能源部包括检排，包括清洁能源，包括什么。他觉得能源部一定是一个高技术含量的地方。错了，中国的钢厂能源部是一个买煤的地方。对吧？哪个车间用多少煤，所有的煤都在我墙上一个表。我这个房间 5 个人就够了。是不是啊？

平塚:是

B:也许你那个能源呢，是他的技术部。

平塚:是啊，是啊。对呀

B:所以呢，就是说计划部。日本人不认同计划部。但是中国这里呢，精英人才都在计划部。也许这两年呢，强调治理结构。他会改。也许财务人员，看你财务报表。是西方财会吗？是啊，拿来了。然后还呢，递增递减，可能在明年的财务报表里也显示不清楚，到底怎么回事。我说您这收支两条线啊。还是计划经济的收支两条线。还没有过渡到这个。他有含糊的这一面。现在我们跟俄罗斯做生意，照样是这样。就好像原来的翻版。

平塚:真的？

B:现在的小孩就不懂怎么回事了。我说他这是收支两条线。他也都给写到了。西方财务报表到科目里去了。但是你碰到一起的时候，不是那个数。

平塚:真的？

B:中国当年也,这些国有企业会有这种现象。国有企业会有这种现象。所以呢,就是说呢,这种差异是随时随地都会有的。

平塚:是啊是啊,那比如说作为翻译的人就,

B:最好说清楚。

平塚:说清楚。

B:差异在哪儿。说不清楚的话,

平塚:只是就是认真的做他们的。

B:唉,你就打两架,你明天得说清楚。那一次也是。他自己,你机械工业部的,科研院所来了一个翻译。然后那意思就说,我给他帮帮忙。因为需要两个人。我给他帮帮忙就行了。到最后呢,两个会场嘛,到最后,我这个会场完了,我不能回家到晚上十点,把他那个会场翻过的再翻一遍。他就翻不清楚。他只会机械的这些,这个专业。但是,这个经理课讲的毫无,关于机械的常识。机械的专业词是一种辅助。你要需要理解的是两种 SYSTEM.

平塚:对呀,对呀。

B:两种不同的这个 SYSTEM 下,他是怎么经营的。然后人家的银行贷款是怎么运转的。他呢,不是政府拨款的。对不对?想当年,是无数个反复中国才可能,通过这个几十年的,30年的交流,他现在走到这一步。他还是在体制上和日本是存在差异的。因此呢,你要想了解这个体制,不是你这个翻译来了,提前准备一天能做到的。还是应该去接触。你应是在翻译的实践当中,不断的接触。碰到问题去问。另外一个呢,就是说你自己,日常要有一个,就是很漫无目的那种准备吧。作为翻译来讲,固然不要太精,了解一下什么都是有用的。都能用得着。所以,翻译呢,翻译就是说,博览群书。

平塚:博览群书。

B:何が、工夫されますかと。你博览群书。

平塚:对。

B:是不是。全世界的国家名背会,但有可能现在都出不出来的还有。全世界这些个国家的首都在哪儿,地形啊,面对地图啊,在哪一个位置。他随时都可能出现。这些基础应该在学校就会。所以呢,你只有,你了解他了,你才会具体的「对象類」的,就不会太有规范了案例交给你了。你只要是了解的,你会说清楚。

平塚:对。没错。

B:所以,我觉得呢,我就觉得呢,

平塚:对,了解,广方面的。

B:就是说,这种得这个。要是说翻译的规范吧,有的时候这个翻译,莫一个问题不会,转

圈儿。

平塚:转圈儿

B:对,他那么说,或者说他的表达不够简练啊。表达技巧不够的时候。你比如一个翻译同时做一个会议的话,开一个会的话,你中午12点完了大家吃饭,他那头一刻钟以后还没完。那他有问题了。对吧?他可能遇到些他并不熟悉的领域。

平塚:是的是的。

B:他就花的时间。双方没听懂吧。就是在反驳,在反驳。所以呢,这个呢,就应该讲,别人讲时间吧。如果说他准备10分钟讲话,翻译应该是10分钟以内吧。いづらか甘くみても。10分钟以内,最好7,8分钟。就是给他讲清楚,尽量抓紧时间。

平塚:啊,这样子。

B:你不能翻译占的时间少。对吧?

平塚:对啊。

B:最基本的规范。口译的规范。

平塚:快

B:笔译呢,就是说要看得懂。

平塚:看得懂。

B:要看得懂。看得舒服。有的出版社的编辑跟我讲,经济类的书吧,这个一桥大学毕业的研究生找来的。

平塚:一桥大学毕业。

B:翻完了以后,编辑说看不懂。然后呢,把钱给他了。再找个一桥大学的老师。中国人。翻完了,还没看懂。所以有的时候,翻译呢,这个东西呢,他呢,拿来的每个字你都看得懂。但是翻出来的语言是他自己的。不是一个读者适应的这个语言。很难受。也不简略。也很长。就日文多长,他能笔画多来多长。这个笔译有大量的有这种现象。极为,最简单的这个现象。我就是没有什么案例吧。就是一封信。那日本人那个信,很罗嗦的。他不敢简化。其实一封信,前客套用语,后是客套用语。你都让他,味道淡一点。但是中间的这个地方你要说清楚。因为呢,中国有过一个很古老的。古汉语的一个阶段。当时呢,在没有纸的时候,

平塚:没有纸的时候

B:中国人的文字记录是在骨头上。或者说是在竹简上。或者是在木简上。那个时候越短越好。然后呢,发展到现在的白话文。是比那个要长了。但是有的时候你要想说清楚一件事儿,你最起码你的语言的简练程度阿,还要强调啊,或者是。这个呢,有的时候,这些

年轻人啊，就看懂前头那客套话，后面那个客套话。就日本的那是套话。

平塚:对。只是套话。

B:套话啊。然后呢，你也可以有相应的套话给他套上去。但是呢，他这段翻译的特别长。底下三言两语没说清楚。后头又来了一个。所以呢，信的作用怎么没有答复。

平塚:对呀。

B:没说清楚他有什么答复。就翻译都给吃进去了。所以呢，就是说，翻译的东西，在中国也没什么资质嘛。谁会翻，谁不会翻，学几句外语，说敢说自己是翻译。所以。

平塚:还是没有什么资格啊。

B:对对对

平塚:现在中国好像有一些资格认证什么，

B:对对，有。也开始有了。但是好像没有什么，非常好的标准去，

平塚:是吗？

B:他就是有资格认证的翻译，未见得真正能做得好。然后那个，就是说，所以翻译呢，不分口笔译的话，

平塚:不分口笔译的话

B:他的最重要的就是交流。

平塚:交流

B:交流清楚。在古汉语里，最早出现【译】这个词。

平塚:译

B:应该是，这么说。我在故宫的录音导游公司。看到一个对联。应该是古代，应该是论语那个年代吧。就是这个，远方疏俗，重译而致。他讲的就是说，各种各样的远方的，不同的风俗，他也许呢，相互交流的，相互重译。这个译在这地方呢，是一种，大家可能互相认识，互相交流啊，互相沟通吧。重译而致。他就是同时就来了。然后作为他们公司的一个。这个给我的印象很深。所以呢，在古汉语里，没有翻译。通译是日本的。

平塚:对，通译就是日本的。

B:只有译。

平塚:对，译。

B:只有译。那么，他的作用呢，其实自古以来，是非常清楚的。在以往的交流呢，可能他没有一个特殊翻译的，那么一个专业。但是呢，他是这个很重要。你比如说呢，唐代三藏法师，他翻译佛经。他是那个时候的一个需要。

平塚:是的是的。

B:然后呢,可能,还有呢,这个出使西域,出使夜郎国在汉武帝的时候的外交,和匈奴作战的时候。他可能呢,需要那种,懂得。像咱们北朝的时候,北方的那种像契丹这样的民族啊,还有其他先辈的民族,他有的民族很崇尚汉文化。他把他的王子弄到大同来啊,或者说是什么啊。这种人回去,可能又呢,一种他之所以这么做,就是他希望跟你交流。因为他需要,采取需要一个培养一个媒介的这么一个人物,他来沟通你的交流。其实翻译,就是你去学外语,跟他当时给你送到汉朝去学中文其实一样的嘛。所以它是一种交流。交流的目的多方面的。有的是战争当中交流。

平塚:是,对。

B:有的是呢,为了挣钱。经济效益的角度。有的是为了进佛,把佛教传进来,那种交流。有各种各样的。甚至通婚。有各种各样不同的目的为了就是那种生活。但是呢,翻译,真正通过翻译,留下来的,只有文化交流。就是说战争结束了,经济也过去了,只有东方石窟留下来了。就是说,他是一种文化交流的载体吧。就是一切也都归结于。包括中日打完仗。一切恩怨都过去了。剩下的,可能还应该是一种文化。留在你的文化里面的痕迹。战争是,也是严格意义上的也是一种交流。他有很多人员上的那种往来啊。他呢,也可以留在你的文化痕迹里。就是说,他有这个,文化里头有你这个。特别呢,鲜明呢,就是说不说中日这样现代战争。就说古代的那些战争。战争。成吉思汗入土中原以后,元代的文化多发达呀。元代的戏曲,元代的那种官僚体制,元代的什么,都是被后代采纳的。

平塚:是的。是的。

B:另外一个呢,中国每一次改朝换代,像汉代唐代什么的。他们的王后都是少数民族。有李白,就是只有这种,或者是竞争当中,战争当中,或者杂交当中,他那种优势群体就,优势的那种人种啊,比较敢斗,比较敢于有一些新的变革精神。这都是。李世民的王后,窦太后,可能是当年的鲜卑人。她都是在那种,北方的那种地缘。不同民族,比较含糊的地区,他都会有这种。王昭君会出使到匈奴。然后那些蒙古族,这些民族的交流,更是一种人员的,突厥人和当地蒙古人的激烈碰撞。之间产生了人种。往往呢,他在混乱当中也许会脱营而出成为一个非常优秀的那种。就是,每次到后来是更是。汉代,汉代之后吧,应该说就有这个倾向。李白本人就出生在碎叶城。然后呢到那个,一通乱,农民起义,一通乱,乱中之乱,又出现一个李世民的时候。也许呢,你去查他的祖父,他的母亲,也许有过什么样的血统。然后你像那种契丹的民族什么的,在中原王朝每次衰败的时候,他都会在北方兴起一些,然后呢,等到中原王朝等到宋的时候不行了,正好元出来了。又是一个异民族的群体。

平塚:是的。是的。

B:然后元呢，就是被明给取代了。这个明呢，在竞争当中，在挤压当中，自己被取代了以后呢，这个时候呢，清又出来了。又是一个少数民族。

平塚:是是是

B:每一个少数民族进来的时候，他都大量的接受你汉族的文化。他跟你汉族人通婚。这里都是一种，他就接受你文化跟你通婚的时候，有一种语言的融合和沟通。

平塚:沟通

B:语言的融合和文字的融合和沟通是最重要的。因为呢，语言比文字还重要。因为有的时候是没有文字的。

平塚:对，是是

B:都是从小部落不断的成了一个，这重大的这个。所以我觉得，这就是翻译很有历史作用的。翻译是包括日本的那个，那个鉴真和尚，

平塚:鉴真和尚。

B:遣唐使

平塚:遣唐使，是的是的。

B:遣唐使带给日本的这个文化，无论怎么高估他，都不会高。如果没有正仓院，三千件的那种唐代文物，你中国本土没有。中国本土的文物都是地底下挖过来，经过药水处理。留下来了。颜色，跟正仓院的颜色绝对有差别。然后呢，中国因为战乱比较多嘛。很多东西就没有了。在中国的记载里面，有那个五个弦的琵琶。一个琵琶在这儿，然后呢，这儿有几根弦。对吧？

平塚:是是是

B:这边两根，这边两根。是通常情况下，它这个弦，那个弦，然后他这么扒。这只有记载上，文字记载上有五个弦的。但是你看不见。中国找不着。正仓院有一把。

平塚:这样啊？

B:而且正仓院的那个琵琶这个弦，这边是牡丹花。镶嵌的那个贝壳吧，这种红木的东西，跟中国出土的那个色鲜的琵琶，完全是一样的。只不过他那个颜色更是柔和的原本的那个颜色。这边呢，是土里埋的几百年出来的，墓葬的出来以后，你经过化学处理，它可能发暗了，发黑了，或者说是什么东西的。他遣唐使带回去的这个东西特别丰富。包括家具，包括什么。

平塚:家具啊。

B:就是包括，皇室的。日本的皇室很完整啊。

平塚:是是是

B:改朝换代的也少,完全就留下了。据说是,正仓院就是,文物的保存箱,有一种叫唐箱。
平塚:唐箱。

B:就是说唐箱它会不会是带个腿儿啦,带个什么的,他可能有些呢,很无形当中呢,留在了其他国家。可能在东南亚也有。只要你去他。或者呢,留在了少数民族的生活习惯当中。在研究一个,在中国的民族学家在研究民族的一个习惯的时候,会从几个角度婚俗丧俗。就是结婚和死亡的葬礼。然后呢,过节日的时候。恐怕呢,还会有一种语言。语言的那个翻译。他会保留的。他会,每个民族,凡是有文化的民族,顽固的保留自己的特点。轻易的不让它,就是说丧失的无影无踪。但是怎么保留呢。他日常生活中用不着了。它都在这些风俗里面保留。特别顽固。所以呢,我觉得这里面呢,就是说可能很无形。这翻译在哪儿你也不知道。

平塚:对呀对呀

B:但是呢,语言就是这么在沟通。就是这么在沟通。那么真正你要形成一个佛经,形成一个文学著作,形成一个什么东西。那就是,你比如说,日本的元人和尚。他用古汉语写了一个游记。世界三大游记之一。也正因为有了他古汉语的游记,那么呢,也许能够看到当年唐代,他登陆了以后,如何的一个经历。什么五台山是个怎么一个回事儿。然后他遇到了晚唐的灭佛运动。然后呢,新罗和尚。韩国的这新罗的和尚,又是怎么给他帮了忙,又怎么给他。这个游记是非常完整地。他保留下来。这是一个文字的保留,而且是一个用古汉语保留。它可以用现代的手法,翻成日语,翻成其他语种的。

平塚:是是是

B:所以说,就是说在古代文字啊,是个很重要的载体。它不像现在可能还有其他手段。因此都是不远万里背着经书啊。所以,像遣唐使那样,一呆就是十年。就是前几年,这两年在西安的那个施工当中,在西安的哪一条河,出了一个碑。

平塚:对,是是

B:这都很重要。

平塚:是是是

B:不知道这次发水,有没有关系。

平塚:啊,这个啊。

B:这些东西之所以能出来,就是可能在历史上发大水。

平塚:是是,有可能。

B:淹没了。所以就是说他会有那个。就是说文字的遗留是最重要的。用文字留下他的,最重要的。用文字的传达是最可贵的。

平塚：最可贵的。

B：就是说，你把它翻译成书。

平塚：是是，

B：但是呢，就是如果没有的话，

平塚：没有的话，

B：会在他的语言里面口口相传的那种，也许会有。再没有的话，也许会在它的风俗习惯里还有这个影子。我觉得这种都可以。也许古人把这些都叫译。

平塚：译。这样。

B：跟我们现在译上所说的，偏文字的这种译呢，是不一样的。所以，我觉得这就是翻译的。因为当时呢，国际化的流通呢，还需要，一个是呢，蒸汽机的发明。铁路的发明。贝尔的电话的发明。

平塚：对，通信。

B：电话发明以后呢，比如说有飞机轮船啊，这些呢，在之后很久很久没有什么。这样堪称革命的发明呢，有一个，现在有一个 IT。

平塚：是是，I T.

B：I T 这种技术，这些呢，带来的都是一种，革命化的扩大，交流的扩大。它呢，它会反过来逼这个文字上面。可能给他一种。那么其他没有这些。都是文字在引领。就是引领这些，这些变化的。所以翻译，真正称得上翻译的，像三藏法师的那种翻译，还有像康有为的那种，近代康有为的翻译。在那之前很封闭。一个国家没有交通工具的情况下，很少有人出去能看到。但是往往出去看到的，他会带来，给这个国家带来一个不可估量的历史。你看伊藤博文。

平塚：伊藤博文。

B：是吧？伊藤博文的游历几年。中国呢，也有过。他那个怪怪的样子，中国人那个鞭子，日本人那种。对不对啊？

平塚：对对对

B：他那种游历，他那种对西方的感受，还有呢，像以往的遣唐使到中国来，他对中国感受带给日本的。还有呢，就是草原民族进入到中原来。中原的农耕文化带给它的。也许以往北京到长城就是草原。但是呢，汉族。汉武帝打仗不断地去扩大了疆土。也许永远在这个像张北这样的地区，就是说，只要是游牧民族强盛，他就把农田恢复成草原。只要是农耕民族强盛，他就把草原恢复成农田。永远在这儿像拉锯一样的，就文化的那种东西。但是它产生的就是你中有我，我中也有你。他那样的人啊，都极为有能力掌握语言。他是会两

种语言的。所以，中国人的语言能力强就在于呢，他这一个国土啊，他国土上的多少个民族，它比一个欧洲都大。所以你让我学两句上海话，弄两句广东话，他呢听不懂，不是说很懂也能听懂一点儿。

平塚:是啊。

B:或者说是干什么，他接触的语言的方式比较广。所以他呢，能给你这个，也有这个模仿，也有这个。所以他是一种。现在逐渐又变普通话在。

平塚:是是

B:上海人的那阁楼话，快都没了。大家所有的年轻人都会讲普通话了。

平塚:对呀，对呀

B:跟以往还不一样了。所以这个的，那种沟通吧，都称之为译吧。最重要的是语言，沟通的载体是语言。一个好翻译，很难的。

平塚:是是，有这个，翻译的译。很多。

B:你在中文的百度网上，

平塚:百度网。对对对

B:你可以去查。有人做这个研究就是说，

平塚:真的？

B:有不同的意见。就古代汉语里面，首先什么地方出现译啊，这个词。当时的语言习惯，他们翻过来的东西。也是很那个，就用当时的语言，也许也很懂。但是你想，用梵语。

平塚:梵语。

B:印度的那个梵语，翻过来的，他都用汉字去标他。你比如说，阿富汗人。当时叫嚧哒人。

平塚:嚧哒。

B:那个字很难写。一个口子旁，一个讨厌的厌，再一个口子旁一个达到的达。嚧哒。

平塚:嚧哒

B:我觉得我来念嚧哒，也可叫 ANDA。

平塚:ANDA.

B:或者说是，我觉得应该叫阿呀，那种词汇。

平塚:是这种发音。

B:对。就是说很多民族，在西迁的过程当中，从河西走廊往西迁的过程当中，他可能就是停留在了卡波尔河。就是说，他西迁，如果在，哈斯克斯坦草原，没有碰上什么强盛的国家，他会平淡的话，他会去伏尔加河，去俄罗斯。从匈奴开始就是这样。如果他在这碰到障碍，他就会去弗尔盖纳盆地。然后再佛尔盖纳盆地他还是没法生存。因为他不懂农耕。

他还无法生存。他继续往南。也许在阿富汗那高原上。他觉得他是一个非常强悍的民族。也许他就停留在那儿。就是说他这种交融当中，可能会有很多人呢，就是，不知道他们，因为翻译没有历史。你不知道他们的语言是怎么

平塚:怎么样，对。

B:那一定是已开始迷迷糊糊就懂了。最后有的人会，聪明的人会两种语言。我觉得是。然后有的民族会去创造语言。有的民族至今没有语言。

平塚:原来就没有语言，创造语言。

B:恩，但是，大多数的像突厥语言啊，这些都是有的。就是到现在世界上缺乏，已经这样的一个一体化的局面了，还缺乏相互的那种。可能用英文能够沟通的，已经有很多了。语言已经完全沟通了。但是呢，他对伊斯兰教不理解。

平塚:是的。

B:伊斯兰教也对你的也不理解。

平塚:伊斯兰教，他们有的是懂英文，但是还是只是了解这个，对方的语言还不够。还是，

B:对对，他那个，懂英文的人太少。

平塚:啊，是太少。

B:就像藏族人一样。他一定要孩子去寺庙去受几年教育。那，你这个下来的话，你无法用英语跟他去抗衡。除非你学外语的，你要这个干什么。

平塚:是的，是是是

B:无法用那个嘛。

平塚:还是要靠语言的。

B:恩。但是呢，加强教育。那如果，以色列的人口在减少。以色列的阿拉伯族和巴勒斯坦的那个。

平塚:巴勒斯坦

B:阿拉伯裔的人，人口呢，在多少倍的在增加。以色列人都去叫读书。他们的人也许很多儿童都没有读书。那就发展越来越可怕。将来你就被人家吃了。但是你如果让他读书，可以通过文字。

平塚:可以通过文字可以学到一些

B:可以了解其他的，当然不能说 he 了解了解其他的他就。完全跟你认同你的价值观。就像 9.11 似的。都是一些高智商的人在犯罪。

平塚:对。

B:这个的价值观，他来至于以色列教育。圣战。哪一个宗教有圣战。所以他呢，不能说完

全就，这个文化的差异呢，可能会很大。可能比中日之间在文化差异大的多。所以这个，中日之间在文化差异上不是很大。国家体制上差异比较大。

平塚:对。体制还是比较大的。文化呀，什么的都是亚洲国家，所以跟其他欧美的国家，还是蛮接近的

B:因此我觉得呢，在那个，中日间，现在呢，能做口头翻译的人越来越多了。中国学日文的人都比较多。但是我认为呢，由于两个国家的这种文字的东西偏少。因此，中国的那些，比如说运作政策的人，国家领导人，他更有能力读的是英文。所以他呢，跟日本比较近，但是他呢，更了解的也许是欧美。日本呢，近いようで。

平塚:我们也一样。对，是的。

B:因此我觉得呢，就是说。

平塚:近くて遠い国。

B:对，对。两国政府，应该合作，比如说，中国需要了解的，也许现在，他把环保技术可以花钱买过来，他把文物保护技术也可以花钱买过来。但是没有环保行政，没有文物保护的行政。等于是你学了一半儿。一旦中国的经济下滑，这一些的设备都停那儿了。这个时候又开始骂日本买破烂儿。但是为什么呢，到现在呢，好像谁也没有在这些方面呢，比如说，日本的公务员法。

平塚:公务员法。

B:日本的政策，有政府出台的这个，各种不同的政策。同时，现在有个名堂，叫独立行政法。对不对啊？

平塚:独立行政，是是。

B:他对独立行政法人通则，

平塚:有，有

B:他会相关呢，比如说是，那个公务员法。这个特别会计法。

平塚:特别会计法。是是

B:特别会计法里 36 项。从贸易到文物保护，到这个地震，叫重灾。现在中国的

平塚:重灾。

B:就是重灾的保险，应该就是个，现在你看中国的灾难多啊，然后就让那个，保健会的朋友就说，国务院上他们出台重灾保险。包括地震。但是呢，我说这个，但分是这种东西。应该有财政部，建设部。我说你以为保险就保打天下吗？如果你有建筑法，建筑法上有规定。

平塚:规定，恩

B:说,一定要有什么样的防震,措施的话,你才能给他保险。如果你去保险,什么你都保,那你就没有了。因此,这个行政是个学问。你应该把他这些都翻完。都来这个阅读。因此呢,日本的1945年,也来,包括前5年的战军时代的那些法规,都有必要。但是这种翻译,笔译本来就比口译要价格便宜得多。

平塚:是的是的

B:本来就没有人愿意干。那么如果,也没有人,都看小说去了。是不是啊?本来也没有市场。但是本来,比如说是文物保护管法,政府制定技术。就是这些法,如果你要翻了,应该说文物局,最起码有7万员工。这个需要政府。就是双方政府来。相对成熟的是日本。

平塚:是是

B:相对成熟的是日本。应该有一些呢,如果愿意做的话,可以是ボランティア

但是,你给人家一个哪怕一千字,一百块钱,两百块钱,有一个基础的费用,哪怕政府来掏一下。然后这些东西呢,采取哪些,比如小说。你小说可以面对许多青少年,这固然很重要。但是你这个呢,面对很对政策运作的人讲,他对你一个国家的真正的了解,才会有。否则的话呢,都会拿出笔,一部分就抖啊,然后呢,政府总是走一走觉得有困难了,在听下来问一问。因为日本毕竟比中国要成熟一点。可能需要了解日本的会多一些。在这个方面把,做不起来。因此很多,你比如说打开那个网,你去看美国的,彼特·德鲁克,这一个经济学家,你打开网上找德鲁克的书,308本。我数过。

平塚:是吗?

B:但是日本的经济学家,基本没有。

平塚:真的?

B:比如,宫崎勇先生,有一本。就没有。基本是没有的。这说明什么问题啊,就是说,你日文翻过来的东西,是没有的。因此呢,这个更不要去讲。

但是日本有非常完整的,通商产业政策史。日本哪一个生命保险,第一保险史,那就是政策史。

【C氏のオーラルヒストリー】

C: 不好意思。

平塚:没关系, 就别紧张了, 真的, 顺其自然就好了。

C: 顺其自然, 好, 好。

平塚:那想问一下, 对, 就随便讲一讲, 就是你的自己学习日语的经历, 做翻译的就是感想呀, 都可以。

平塚:那, 首先呢, 就想问一下, 就是您为什么就想到要学习日语的呢?

C: 学习日语, 其实也就是因为我大学专业就是日语。

平塚:哦, 这样子

C: 对, 在西安外国语大学。

平塚:对对, 是这样的, 那后来呢? 学到日语以后呢?

C: 大学是4年, 然后其中大学3年级的时候, 有一次到日本来公费留学的一个机会, 那个时候来日本留学了1年, 但是这个当时呢, 学校这个机会给我是有条件的, 就是说我大学毕业后, 必须留校做老师。

平塚:是这样啊! 啊!

C: 对, 然后就, 因为当时很想到日本来吗, 那个时候才是99年, 2000年有机会能来, 99年得到这个通知, 我自己也非常高兴, 就很想来, 所以也没有考虑那么多, 然后就先到日本留学, 然后回去的时候, 刚好是大四的下半学期, 然后就办了留校的手续。

平塚:是这样啊!

C: 对, 对, 和我的理想完全是不一样, 我自己本来想是进公司, 做一个 office lady, 嘿嘿哈哈。

平塚:啊!

C: 没想到要当老师, 当老师是一个很意外的。

平塚:很意外?

很意外。

平塚:是这样啊!

C: 对。

平塚:那您为什么当时学日语, 就是选择这个专业的理由是什么?

C: 哦, 本身就是我喜欢学习外语。

平塚:学习外语?

C: 对, 初中的时候、高中的时候, 那个英语就一直都特别喜欢, 当时中国高考的时候有

这个文科、理科。还有一个外语类，有3类，所以我当时报考的时候就报了外语类，外语类，就是想着将来我一定要进外大，学习外语，然后对于英语呢，我觉得已经学了6年了哈，初中3年，高中3年，学6年了，换一种，想学其他的，是想学其他的。

平塚:是这样啊！那就是说日语以外其他的语言也可以学，是吧，但是偏偏选择这个日语，是？

C: 日语呢，首先就是我觉得，日语是和我当时学的那个英语完全不同的一个语言，完全不同语言，我觉得比较新，如果是学习德语、法语或者是意大利语，它还是那个欧美语系，所以我想换一个的，然后就选择了日语。

平塚:啊，这样啊！就是以前完全没有关系的对吧

C: 对，完全没有，完全没有任何基础。对日语是一个什么样的语言，完全没有

平塚:真的？

C: 就是看过当时中国演得那个东京爱情故事，那个电视剧，看过那个

平塚:和我有代沟，嘿嘿

C: 那个时候不是日文原版的，翻译过，有配音的那种，但是看的时候，感觉啊，而且东京爱情故事的那首歌，不是特别好听吗，小田和正的那首歌，特别喜欢，觉得日语也不错吗，完全和我学的英语是两码子事，完全不同的语言，然后就

平塚:那您就是小的时候，在西安长大的是吗？

C: 西安旁边的一个城市，宝鸡，您去过吗？

平塚:去过，去过，对啊对啊，我去过。

C: 哦，天哪！

平塚:对啊对啊，啊！以前我在商社工作的时候，我的客人就在宝鸡，嗯

C: 很小很小的城市

平塚:对对

C: 其实我家在离宝鸡还比较远的地方，更小的一个镇，就是一个镇，一个很小的镇

平塚:我觉得西安那边的人，好像对日本有一些偏见，我觉得

C: 的吗？

平塚:你这样的新兴人类，就没有这样的。

C: 好像到了我们这一代，对过去的那种，心里没有在意那么多，好像

平塚:这样子啊！

C: 虽然我当时选的时候，家里人也没有什么特别反对

平塚:真的？

C: 也没有说为什么学日语, 好像也没有这样反对的, 然后就选择了日语, 就进了大学, 就从あいうえお开始学习

平塚: 啊, 这样的, 那后来呢, 您来到了日本以后, 感觉如何呢? 就是在日本过日子的感觉

C: 现在因为时间比较长了, 就完全没有, 但刚开始来的时候吧, 虽然学过, 但日本毕竟是第一次来, 很多习惯什么的都还不是很清楚, 比如说很简单一个例子, 我去买衣服, 第一次去买衣服, 试衣服, 我不知道还要拖鞋, 我就穿着鞋上去, 然后我出来的时候, 人家那个店员已经拿好那个胶带, 缠在手上, 已经要去粘我踩过的地方, 都准备好了, 站在外面, 我才知道原来是这样, 这个习惯。

平塚: 第一次听说, 这样, 哈哈

C: 对, 那个时候的一年, 但是那一年, 印象还是比较好的, 因为我去的那个城市是三重县的灵鹿市, 很小的城市, 所以那些人吧, 当地老师和同学, 还有我接触的一些日本人, 他们好像对中国人也没有什么特别的偏见, 都很热情, 所以那一年我觉得过得还是很开心的, 很美好的回忆。

平塚: 小城市

C: 对, 小城市, 民风淳朴。

平塚: 是这样啊, 那您回去以后呢, 然后是怎么过日子呢

C: 回到中国?

平塚: 回到中国

C: 回到中国以后, 因为我们在日本留学的这一年, 也算我们学习的单位, 就不用重新在上一年, 所以我回去后就自动就是大四的学生。所以3月底回到西安, 7月我就大学毕业了, 然后两个与月的暑假之后, 9月我就开始当老师了

平塚: 是这样啊, 那当了几年的老师?

C: 从2001年9月开始, 到来日本之前2007年9月, 当了6年的日语老师, 一直到我来日本。

平塚: 这样啊, 教的是日语吗?

C: 我教了6年的大学一年级, 我教精读课, 每年都是从あいうえお开始教, 但是在这6年之间有一年, 2005年, 我到京都外国语大学又留学了1年, 刚好那时候我是上大学院, 研究生的2年级, 所以实际上做老师是5年时间。

平塚: 啊, 条件不错

C: 条件不错, 对, 我觉得运气就是比较好, 就是学生的时候, 当上大学的时候就有一次

机会来到日本,我觉得这个机会很难得,因为我们每个班就挑一个人,每个年级就两个人,就这样子的,我觉得很幸运就被选上了。然后工作以后再回来日本,这也是我们老师每年都轮的,所有有这样的机会,运气比较好。

平塚:运气好,也不是运气好,是靠你自己的,优秀的,所以有这样的大运

C: 然后就是,两次来日本,然后呢第三次就是 2007 年 9 月到现在,一直在日本,这样子。

平塚:那就是来的目的是工作,还是?

C: 本来准备打算上博士,继续上博士。

平塚:这样子啊?

C: 本来,对,然后没上,我觉得我不是搞研究的那块料。

平塚:是吗?

C: 对,我还是不能安心坐下来那种,我还是喜欢到外面去接触人,和人打交道这个工作我还是比较喜欢,在研究室坐一天,我觉得我不适合,跟老师说了说,就放弃上博士了。我不想上博士了,后来就结婚了。

平塚:对呀!你的爱人是?

C: 我的爱人是日本人

平塚:什么时候认识的?

C: 就是第二次到京都留学的那一年,我认识他的。

平塚:他是京都人?

C: 他是京都人,对,土生土长的京都人。

平塚:真的,但是你们现在在千葉,是吧。

C: 他是换工作换过来的,他以前在京都的公司做了好多年,然后自己想换,想换工作。就换过来了,公司是东京的公司,但是我们住在千葉那边

平塚:哇,是这样!

C: 对对对,然后就结婚了,我在京都的那些时间呢,一直还是做汉语老师为主,一直还是到学校里面呀,公司里面呀,主要做这个工作,后来就是有了去上海世博会的机会,所以,去年对我和我的老公来说都是一个比较大的转变,他去年的时候换了工作,我去年是有了机会去上海世博会,所以我们就是一个大的转变,他到了东京来,我去了上海,是这样。

平塚:那您后来怎么就想到要做一个翻译人员呢?

C: 我在京都住的时候,我都完全不知道有这种翻译学校,有这样可以学同声传译的地方,

后来是我的一个朋友，她是日本人，她在东京的サイマル上学，然后我们见面的时候，她就和我说了这个事，我就说这么好，有这样的地方，我也想试试，然后我就在大阪去找，去找了サイマル和 INTER。因为我们当时是元旦见的面，见完面我马上就去找，当时找的是インター，短期的课，4次的课，我就去试了一下，感觉特别好，就是把我的自信都打消了，打没了，我才知道，日语原来是可以这么学习的，因为我当时还觉得自己日语不错，挺自信的，其实去学了一下，才发现其实自己差得很远很远，学了一下后，觉得自己对这个特别感兴趣，我就打算继续学下去4月份春天的那个学期，我就去报了サイマル，大阪的サイマル学校，开始去学习，考试结果没想到是考到了最高的班上，我觉得自己的水平不行，没有那么高，自己觉得应该是本科2，没想到他们把我调到了最高的那个班上，他们叫那个班 Seminar。

平塚:哦，真的！

平塚:东京他们叫 Workshop，大阪叫 Seminar

平塚:是这样的

C: 到那个班去学了以后，打击特别大，刚开始我觉得我没有接受过翻译的训练，我只是在 INTER 上了4次的短期课，那天也是做简单的基础训练，老师您讲的那些基础训练，去了那个 seminar 的课，直接就是进到 workshop 里面去，放一大段，开始让你翻译，我 note taking 什么的都没有学了，哇，刚才说什么？然后就傻了，就这样，我都快崩溃了。我觉得受到很大打击，我才知道，自己原来离这个翻译还差的很远很远，所以就开始自己努力学习，然后，过了两三次以后，老师就对我说李洁，你和刚开始已经不一样了，开始有变化了，感觉到你是很努力的。然后后来我就在那里学习了一年，下来一年，我才明白了原来翻译是这样学习，这样训练的，这是我对翻译最开始的一个了解。

平塚:是这样啊

C: 对，从4月开始，上了サイマル的大阪学校，那年的秋天我又同时报了インター的班，所以从秋天开始我是既上サイマル又上インター。

平塚:是这样

C: 对，我就觉得，因为大阪的サイマル是两个星期才上一次课，对我来说感觉特别少，我觉得练习不够。

平塚:是这样的？

C: 对

平塚:为什么呀

C: 我也不知道为什么，两个星期才上一次对我来说等的时间太长了，我想多接收训练，

我就同时去报了インターの班，所以从秋天开始，是星期六上インター，星期天上サイマル。在インター也学到了很多，老师讲的、用到的资料也是特别的好，也是两个老师换着上，サイマル也是两个老师换着上，所以从那个秋天开始，我自己都感觉我的水平慢慢慢慢上来了，然后，上完1年，就到了第二年3月，实际上我已经被上海世博会录取了，已经要去上海世博会了，我能感觉出来インター对我挺重视的，他们做广告让我当学生代表，给我照相呀，采访的，最后老师也说，希望我能留下来在他们学校教课，我说我不行了，我要去上海世博会了，我觉得在那儿学习收获很多，老师对我很重视，挺谢谢他们的，然后就去了上海，在上海世博会，从4月去到11月才回来。

平塚:去了半年？

C:去了7个月

平塚:这么长时间呢？

C:对，5月开幕，开半年，我们这些Staff要提前一个月去，在那半年，11月回来，回来以后，马上找学校，

平塚:那时候您家已经搬到船桥了

C:对，去年的3月他要到新的单位来，所以我们3月底就搬过来了，收拾1个星期我就到上海去了，对就是这样，对对对，时间很紧张，就到上海去了，就把他一个人撂在这儿，就走了，也挺狠心的，现在想一想

平塚:应该的

C:应该的，然后就在上海忙活的大半年，然后回来以后就到ISS来上课了。第一次就上的您的课，唉，是上的H老师的课。第二次是您的课，做张艺谋的翻译，我记得很清楚

平塚:记得太久了

C:对，张艺谋的翻译

平塚:啊，是这样啊

C:对，是整个过程就是这样的

平塚:啊，那您到目前为止做过具体的翻译业务？

C:具体的翻译业务很少，其实很少，我觉我差就差在这儿，经验很少，像今年吧，就做过两次，一个是三月的时候，做展示会，在BIG SIGHT

平塚:这是谁的介绍？

C:是サイマル给我的工作。然后，第二次就是让去北京。

平塚:这样子啊！

C: 对, 本来这个星期还有一次工作, 就是这个星期, 还有一次工作, ISS 给我的, 突然就取消了。

平塚: 取消了?

C: 对。

平塚: 是什么样的工作?

C: 也是在 BIG SIGHT 展示会上的商谈翻译, 我也不知道, 挺意外的, 8 月就和我联系, 10 月有工作, 我就说 OK, 我把时间空出来, 等快到时间了, 怎么还不和我联系呀。我就上个星期发短信联系问他们, 他们说客人联系不上了。我不知道为什么。

平塚: 啊, 真的, 怎么回事? 这是学校的客户?

C: 不是, 是 9 层的。联系不上就联系不上算了。

平塚: 挺奇怪的。

C: 就是, 因为我说东京工作并不是很多, 我就想着这是不是常有的事啊。

平塚: 没有, 没有, 没见过。那就太可惜了。工作经验。

C: 对, 我现在觉得缺的就是工作经验。

平塚: 慢慢来, 慢慢来, 没关系, 肯定会有。这样子。就是说, 谈到工作, 上次您跟 J 先生一起去北京的工作, 我看了那些视频。

C: 啊, 看过了! 可以看了!

平塚: 对呀, 可以看了。我觉得你翻译水平真的非常高, 有一个, 就是, 您自己有什么感觉, 好紧张? 还是怎么样?

C: 就是第一个在记者招待会的时候, 之前我已经拿到招待会记者招待会的流程, 整个他们给我的流程, 就是主持人会问什么, 我已经知道, 而且我与 J 先生的助手, 彩排过一次, 就是说、

平塚: 彩排?

C: 对, 就是大概会怎么回答, 因为他对 J 非常了解, 说大概会怎么回答, 结果就真的是在正式时真的和他的助手说得差不多。所以在记者招待会的时候我觉得还好, 比想象的好。刚开始时非常紧张。

平塚: 对对对, 有点紧张, 看的出来。

C: 后来就慢慢慢慢就好了, 大概 40 多分钟, 将近 1 个小时。那个时候我觉得还好, 但是到了舞台上的时候, 我觉得有点紧张, 他们是在两三个小时之前才通知我, 你要上台给他做翻译, 我都不知道有这个事, 因为我是第一次, 其实后来问了问他们, 他们说每次都有人做翻译, 每次都有人跟他上台, 我要上台给他做翻译, 我都蒙了, 好紧张好紧张

平塚:提前两三个小时,好像还可以嘛。

C:这两三个小时,我觉得最主要抚平自己的情绪,很重要,我觉得他不会说什么太难的,就是自己把自己的情绪调整好就是最重要的。然后,我就那么上台了,跟着他说,后来我反复听了很多遍,我觉得我翻译的时候有的地方是自己编的,可能不是完全按照他说的,J先生下来后,对我说:“C,非常好!”,我不知道他听懂了没听懂,他可能是感受到了我说的那种感觉吧。

平塚:啊,这样的呀。是呀,已经超过了,已经超过了原文。

李:对,我记得您上课,还有H老师上课是曾说过,说话要怎么把话说圆了,整个要把他说的话给串起来,串好。我觉得就是把握着这个,而且是这么大的场面,要让所有的人都能听懂,那天是1万1千人,人特别多。

平塚:1万1千人!

C:对,1万1千人,在国家体育馆。

平塚:国家体育馆,天呀!

C:我下面其实光特别强,根本看不到下面作了多少人,看不清楚刚好,我就不看了,我就自己瞎说,那时候也不可能做笔记吗,因为要拿着话筒,怎么做笔记,全靠自己脑子记下来,记者招待会我也没有做笔记,全是我脑子记下来。

平塚:天呀!

C:因为我没有这方面经验,我想着自己拿着笔也不好看,有那么多摄像机,新浪视频它现场直播呀,拿着笔不好看,我就一直盯着他,然后我爸我妈也在家看了,说我怎么老点头呀,我说我点头不是在说他说的对,而是在确认他所说的东西,我得把他所说的东西都记下来,我做了个大胆的决定,其实应该用笔记。

平塚:啊。

C:其实应该拿着笔记下来,我全是用脑子记下来的,因为之前我和助手对过一遍,主持人的问题我不需要记,我都知道,我只需要把J先生的话记住就好了。

平塚:这种场面太特殊了。

C:对,我没经验,我都不知道这些。我下次肯定会拿支笔记笔记。

平塚:笔记也有缺点,没关系,你的脑子这么好,不用记笔记。

C:主要是跟那个助手对过一次,那个助手真是,说的和他说的差不多。

平塚:对对对,这是一次很好的经验。

C:而且记者招待会还有音乐会之前的,您是看过的,还有您没看过的,在彩排的时候,您都不知道,我就傻在一边。

平塚:啊?

C: 彩排的时候, 他说的专业术语我都不知道。

平塚:是吗? 什么样的专业术语?

C: 音乐的音频, 音乐从几小结开始, 他说的全是英语, 我不知道他在说什么, 比如他 four bars before, 我刚开始翻译不出来, 就站在那儿, 我拿着话筒我也什么都不说。因为第一小提琴是中国人, 但他们都在海外留学过, 这些英语他们都知道, 第一小提琴就帮我翻译了好多, 所以在他翻译的时候我就记他说的是什么, 他在说什么, 然后我就慢慢知道了。

平塚:是这样呀。

C: 对, 在第一天彩排的前半场, 我就跟傻子一样照在那儿, 觉得特别尴尬, 中间休息的时候, J先生的经纪人, 那个 Manger 过来就问我, 说: “four bars before 你不知道是什么意思呀。”我说我不知道, 他说: “就是四小结前”。啊我知道了, 明白了。然后有说了渐强呀什么的, 乐器的名字呀, 铜管乐器, 他说 brass 我也不知道, 事前我也查过, 但还是不清楚, 彩排的时候别提多尴尬。可是后来就慢慢慢慢的就好了。

平塚:太辛苦了。

C: 不, 我觉得我就得接受这样的锻炼, 多接受几次, 下次要再让我给 J先生做翻译, 我觉得有信心, 这种感觉。

平塚:是这样的呀。

C: 铜管乐器, 还有小提琴。那个第一小提琴, 和第一大提琴真是帮了我不少忙, 他们翻译了很多, 他们都能听得懂那些英语, 他们都互相共通的。像第一小提琴在意大利留过学, 第二小提琴在法国上的音乐大学, 我才知道这种专业人士之间是不需要翻译的。

平塚:对, 这样啊, 这次翻译当中, 日语和中文当中, 有没有感觉到有文化的差异?

C: 文化的差异, 因为 J先生是比较严格, 比如有人迟到什么的。

平塚:谁迟到啊, 胆子太大了。

C: 我们中午从酒店出发, 女高音跟我们的人一起走, 有一天, 而且是最后一天, 演出的时候, 女高音迟到了, 他就坐在后面不说话, 我感觉他是生气了, 还好迟到时间不算太长, 迟到了大约 5 分钟左右, 而且他在彩排、练习的时候很多地方要求重复, 我们重来一遍, 再重来一遍, 我觉得一些中国人开始不耐烦了, 对 J先生来说, 他觉得是应该的, 没练好就是应该重新开始, 但是中国人就开始不耐烦, 有些人就开始嚷嚷了, 我是能听得懂的, 但是我不能翻译给他, 但是我觉得他能感觉出来, 乐队的人坐的比我离他近。

平塚:对对, 你就在乐队和他之间。

C：我站在他的后面，他是指挥和小提琴。

平塚：就是在心理上，夹在他们的中间。

C：对对对。

平塚：那您是怎么处理？

C：第一天练完的时候，第一小提琴他有点不太满意，他觉得J先生怎么要重复这么多呀，比如说有的时候刚开始，还没开始多少呢，啪就说停，这种情况有好几次，第一小提琴在第一天结束的时候就发了点牢骚，而且是当着J先生的面，虽然J先生听不懂，但我能听得懂，但是我就稍微安慰了一下他，就是这种感觉。但是最后，到最后整个彩排完成，整个演出结束后，我觉得他们还是比较高兴的，第一天他好像……因为，他们之前也没见过面，他们都互相不认识的。

平塚：真的！

C：对，我也是当时才知道，我以为他们之间都熟了。

平塚：那更难练了。

C：对，他跟一个乐队，不是说每次我到北京都是跟这个乐队，今年和这个乐队合作，明年可能和另外一个乐队合作。而且当时乐谱上面都是日语，题目都日语，比如说“旁边的トトロ”，“ナウシカ”都是日语，让中国人找那个顺序，中国人找不出来。

平塚：对呀。

C：所以我觉得这个时候就有一点冲突，大家有些不满，所以我就赶快帮第一小提琴找出来，让第一小提琴的人给大家再说，第一天有点儿小摩擦。在回去的车上，久石让先生坐在后面，我听见他小声说：“呀，我感觉这个乐队不行。”他也是小声地说。还好，最后我感觉还是很成功的。最后那个 encore 呀，还是一个很激动的场面。还好，第一天是有这样的。

平塚：要是没有像你这样的翻译，恐怕要有别的情况发生。

C：我听说他在台湾演出的时候，台湾交响乐团有人迟到，他就直接和负责人说，让负责人扣他的工资，我看过他的专访的时候知道的。我觉得翻译也是一个非常微妙的位置，我觉得，可能和我的性格也有关吧，觉得我要在中间把两边都哄开心。

平塚：这是很重要的，所以呀，您认为翻译是一个怎样的角色？

C：角色，我觉得很重要，但要把握好分寸，不能太出头，做你做的工作就好，不要越雷池一步，不要太出风头，我觉得是这样子，所以我在翻译的时候，我在乐队排练的时候，我从来不多说一句多余的话，他们让我说什么我就说什么，我从来不把自己主观的东西加进去。比如说，有一次J先生批评后面的合唱团，问你们合唱团那些词都记住没有啊，就

是非常严厉地用日语说，但是我翻译的时候，我就说 J 先生问大家为什么总是低着头啊，你们词是不是没记住呀。稍微把语气缓和一下，我害怕说的太严厉了，因为中国人很容易火起来的，我就说大家是不是没有记住歌词呀，J 先生说为什么大家都老师看着手里的谱子不抬头呀，都抬头看他的指挥呀。久石让先生说：“拜托，请看着我”，我就说，J 先生对大家有一个要求，希望大家唱的时候都看着他，不要看手里的谱子。就是这样子，稍微把这个话……。

平塚: J 先生的表情如何呀？就是你翻译的时候

C: 还可以把，还可以。中间有那么一次，我觉得他着急了一次，就是铜管吹的不好，小号、大号、长号吹的不好，他比较着急，他就冲着我说“Crescendo”，我就说：“渐强”。有一次他急了一次。

平塚: 这样的翻译，和一般的翻译完全不一样。

C: 我觉得也是很特殊，因为就他一个日本人和那么多中国人，交响乐团和合唱团加起来是两百人，阵势很大，所以他说什么我就要给两百人说。

平塚: 这，太难了。

C: 而且有一次我们中场休息，乐队和合唱团一起要排练，合唱团站位都没有站好，后面没人，然后他就一下生气了，他就给我说：“Chorus 呢”，我就赶快找合唱团，他就觉得以日本人的要求很严格，你们时间到了为什么位置都没站好，还要我们请你们站位呀。日本人要求比较严格。

平塚: 对对，这就是文化差异。

C: 中国人就觉得，领头还没来呢，我们干什么要先站好呀。可能就是这种，但是我觉得他还是相当人气的，就是在中国排练的时候，合唱团和交响乐团的人都有人拿照相机拍他。

平塚: 真的！

C: 在不唱的时候都拿出手机拍他，中场休息的时候，那些拉小提琴的那些人，就跑到我们的休息室来，说让久石先生给我们前个名呗，我想和他照相呗，还不是那些歌迷、影迷，就是一般合唱团的人都跑来，我觉得他非常人气。

平塚: 不是人气的问题，太不专业了。

C: 哦，中国人就觉得有这个特权，特殊的权利，我离 J 先生那么近，赶快给我们签个名呗。

在最后一天的庆功宴上，第一小提琴、第一大提琴还有女高音都跑来找久石让先生签名。在中国真是特别受欢迎。

平塚: J 先生的反应怎样呢？

C: 对, 他好像习惯这种阵势, 他非常习惯。

平塚: 那很好啊。

C: 对, 他好像很习惯, 我觉得。还有就是当时表演结束以后, 表演结束后, 有很多人到后台找他, 向他表示感谢, 给他送花, 我要在旁边翻译, 我觉得他都很习惯了, 我觉得他好像还是有那种大腕的感觉, 有的人就要拒绝, 有的人就很好。那天, 姜文太太的妹妹, 代表姜文一家来给他送花, 因为姜文的很多电影是他给, 让子弹飞, 还有那个太阳照常升起, 当时让子弹飞前奏一响起来, 那全场的掌声, 哗, 因为让子弹飞去年票房最高, 掌声一起来, 我的妈呀。

平塚: 太好玩了

C: 很好玩, 现在回忆起来, 虽然是差不多 3 个月前的事情了, 但现在回忆起来, 很好玩。

平塚: 总共在北京待了...?

C: 5 天, 总共待了 5 天, 我觉得很有意思。

平塚: 不错, 不错。

C: 您刚才说起的, 我以前做过一次翻译, 就是中国的总经理来日本视察很多公司, 跟他做过随行翻译。当时有个小插曲, 就是这个总经理一直打电话, 坐在车上的时候一直打电话, 前面那个日本的老板很生气, 下车的时候就跟我很严厉地说, 说打电话在一边打, 不要在车上打, 那么吵, 车上静静的, 他一直在打电话, 说话, 很大声。日本的老板很反感, 非常反感, 让我去说, 我当时夹在中间也不好说, 刚好他那个电话打完了, 救了我一命。所以对文化上的差异, 中国人觉得打电话就打电话呀。

平塚: 对呀。

C: 日本人觉得打电话应该这样, 应该小声, 赶快处理完呀。

平塚: 这没办法, 这就是习惯不同。

C: 很难。

平塚: 比如说你们在做翻译时, 在他们的对话当中, 有没有感觉到语言文化方面的差异, 觉得很难做翻译, 有没有这样的情况?

C: 有, 那个总经理在跟日本面谈的时候, 一直在说对方的不好, 都是你们公司怎样怎样, 而且就是这个人, 而且这个人就在面前坐着, 就说都是你们公司的这个人出了什么问题, 应该把事情处理好, 说了很长时间, 发牢骚。我觉得那个人挺尴尬的, 有苦说不出来, 那种。

平塚: 你怎样处理?

C: 我就只能照常翻译, 因为那个人说了很长时间, 说的太多了, 我也没办法, 只能说是

这个人的错，这个人的不好。

平塚:您按照这个原文……。

C:对,我觉得当时那个气氛已经不能再遮遮掩掩的,真的是,当时那个气氛,反正那次……。

平塚:后来对方的反应是怎样的。

C:对方也有反驳,就是你们公司谁谁谁,在处理的时候没有处理好,反正就是吵架,我觉得他两个人就像在吵架,我翻译过那个一次,在京都的时候,很有意思,两个人吵架。

平塚:不是翻译人的错。

C:要吵架也没办法。

平塚:对呀,一般场合的话,按照原文要忠实地翻译出来吗?

C:我觉得应忠实地,看情况吧,我觉得一般情况下,做普通翻译的时候不需要特别,不需要特殊处理,除了那些特殊场面,像我刚才说的那样,一般情况都是忠实的。

化妆品的宣传也做过,有个日本神奈川的公司在西安做那种美发的,还有化妆品的宣传。跟着他们做过一次翻译,我觉得那次也是很和平的状态下,没有吵架什么的,就是忠实的翻译。

就是在我接受翻译训练之前不知道还要做笔记这个方法,我都不知道,翻译还要做笔记。

平塚:真的?

C:我以前做翻译从来都没有做笔记,就是自己说。我还做过什么翻译,做过龙谷大学的,龙谷大学的教授,他是专门研究中国环境的,他去西安找各个大学的教授,在一起座谈会的时候,我也没做笔记,全部都是我脑子记下来再说。后来我学习了才知道,原来还有做笔记这一说,当时座谈会是在宾馆的一个房间里,我和龙谷大学的这个老师,大概还有四个中国西安大学的教授,我当时也没做笔记,就是这样。

平塚:是同传,还是?

C:不是同传,就是交传,他说完了,我再说。所以,在我学了翻译以后我才知道,哦,要做笔记。

平塚:太伟大了。

C:我都不知道要做笔记。

平塚:真的!

C:后来才知道原来要做笔记,刚开始接触翻译,笔记真的作不下来,我不会做笔记,我做不下来,做下来我都不知道写说了些什么,不知道我写了些什么,但却回忆不起来说了些什么。

但是我接的现在就好多了,我也不知道为什么,我也不知道为什么我能记下来他说的那么

多，那么长的我也能记下来，而且您上课说的记笔记，我觉得我能记下来，以前刚刚开始的时候怎么也学不会，当时就上网找了很多资料，当时就找到了Y老师的很多资料，我才知道，原来是这样做笔记的。但是，可能就是现在因为接收训练学习比较长吧，现在进入这条道里来了，慢慢慢慢会做笔记了，以前刚开始根本就做不下来。

平塚:原来是这样的

C:让您吃惊了，不好意思。

平塚:没关系，没关系，所以我们的学校是有意义的。

C:对，对，我才知道要做笔记了，而且我觉得学了这个翻译给我最大的启示就是翻译和会说是不一样的，完全不一样的。我以前完全没有想到这么多，而且我在上大学的时候，西外也有口译的课，但是我没有上，因为那一年我在日本留学，我没有去上过这个课。

平塚:大三的时候。

C:大三，对的，所以也没有上过，就不知道怎么学，现在才知道，会翻和会说完全是两码事，所以我现在自己在上课，常常和学生说这样的道理，对他们说会说是和会翻完全是两码事，一定要让他们知道这一点。

平塚:心得。

C:对，我觉得是这样子，我觉得这是我最大的收获，我才知道，以前还对自己的日语特别有自信，一学这个，完全自信被打得烟消云散。

平塚:烟消云散。

我才知道原来是要这样、这样。

平塚:你这样的优秀人才也会有这样的经历。

C:有，有，有，每次上完课，尤其在サイマル后，每次在回家电车上我都郁闷得要死。

平塚:真的？

C:就觉得我为什么翻不下来，为什么记不下来，就特别恨自己。后来，在一个月之后我觉得才慢慢赶上来，老师也给了我鼓励，唉，我当时还觉得，天呀，我学了10几年日语，才这种水平呀，当时就觉得特别灰心丧气。所以现在才知道学习是多重要

平塚:对呀，你认为翻译人员的规范是什么，就是标准是？

C:规范，首先，就是要一定确保自己的能力，我觉得尤其是作为一名真正的翻译，学习是不能停止的，一定要坚持学习，继续学习，这一点很重要，另外一个就是，我觉得翻译有适合和不适合，有的人就是适合，有的人就是不适合。

平塚:比如说，具体地说怎样的人？

C:内向和表达能力比较差的，我觉得可能就不适合，而且，用汉语说就是有眼色没有眼

色很重要。

平塚:明白了,明白了。

C:这个是重要,另外,我经验很少啊,以自己仅有的经验来说,要把握好分寸,该说的说,不该说的不说。

C:我觉得大概就这这三点吧,第一就是学习不能停止,要永远学习下去,第二就是要知道自己的长处和短处,第三就是要掌握好分寸,我觉得掌握好翻译的技巧。我现在缺的就是实战经验。

平塚:对呀,实战经验。

【D氏のオーラルヒストリー】

平塚：Dさん、ええと、もともとは、もう、おじい様の関係で、ずっと小さい頃から中国と接していたんですね。

D：あのね、まあ、あの、祖父がMですので、

平塚：はい、そうですね。ええ。

D：それですからね、まあ、でもね、私はMにとってみたら、16人いる孫のうちの9番目なんです。

平塚：16人いらっしゃるんですか。

D：息子、娘が全部で8人いるんですね。

平塚：そうですか。

D：それで、それぞれ、こう、みんな子どもたちがいるでしょう？ だから、16人のうちのナンバリングナインなんですよ。

平塚：あはは、ナンバリングなんかできません。

D：多分、ナンバリングナインだ、9番目なはずだと思う。前にそう数えた記憶があるから。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：だから、別に長男の家の長男でもなければ、

平塚：ああ、はいはい。ご長男ではないんですね。

D：四男で、下から2番目の、7番目の子どものうちの長女なんですね。ええ。7番目がたまたま四男ということなんですけど。で、うちはね、おかしなうちでね、あの、そもそも祖父は富山の出身なんですね。

平塚：そうですね、そうですね。

D：で、富山から、あの、大隈先生の関係があったので、早稲田の政経にきてたんですね。で、そこで中国語を少しやってたA先生という方がいらしたらしいんだけど、そこでやってたの。で、母方の祖父はね、あの、宮崎なんです。それもね、9番目の子どもなんですって。それで、9番目の子どもだから、分ける財産ないから、あの、長男が東京で船会社を、造船やってたので、多分ね、それこそ、その、なんか、第一次世界大戦とか日清・日露とか、あの頃に多分船って必要だったでしょ、きっと。だから、そういうようなことがあって船会社やってたと思うんだけど。それで、だから、そこに頼って出てきながら、学だけは、学問だけはやらせてやるっていうあれで、早稲田に行っただけです。で、やっぱりA先生に中国語を習っているの。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：そう。だから、両方の祖父が若い時に中国語やってたの。で、それが、でも、それでもものになったかどうかというのには知りませんよ。私、その父方の祖父だって中国語しゃべったの、聞いたこともなけりゃあね。

平塚：それって、大体どのぐらいの年代の……

D：明治の人ですよ。

平塚：そうですね。

D：そう。祖父がね、この間ね、うんとね、88歳で祖父はね、1971年に死んでるんですね。で、今年の8月の21日に没後40周年を富山のほうでやっていただいたのね。40周年足す84、88だから、128？

平塚：128、はい、はい、はい。

D：生きていたら128歳ですよ。で、だから、母はそれよりも、母方の祖父は多分、それよりちょっと若いと思うけど。そのうち、だから、明治の時代ですよ。

平塚：そうですね。

D：明治の時代に、だから、両方の祖父は中国語をやった。

平塚：は一。その頃って、結構、英語とかの時代……

D：いやいや。やっぱりね、まだ、もう日清・日露のあれですからね。だから、日本は十分中国のほうには……。

平塚：そうですね。

D：うん。当時、同文書院の前身があったかどうか私は知らないけど。だけど、明治っていうと中国半分……

平塚：まあ、確かにね。そうですね。

D：ええと、ちょうど今年が……私、昨日「1911」というくだらない映画を見てきましたけど。

平塚：くだらなかつたですか。

D：だって、ジャッキー・チェンがやってたんだからさ、半分武打でしょう？

平塚：あ、そうか。そちらのね。そちらのね。もうひとつありましたよね。辛亥革命を扱った。

D：あった？ ああ、そうなの？

平塚：ああ、ジャッキー・チェンのほうですね。

D：ジャッキー・チャンのほう見たら、もうね、「クー」って感じで寝てた。「もう、なに、これ？」とか思いながらね。

平塚：彼が監督をやった話ですよ。

D：そうそうそうそうそうそうそう。そう。で、それを見てきて、あ、ちょうど、ね、辛亥革命 100 年ですよ。

平塚：はいはいはい。100 周年。はい。

D：だから、多分、辛亥革命、あの頃に 18 歳ですね、計算すれば、その頃はね。

平塚：ですよ。ええ。

D：ね。だから、

平塚：その頃ですね。

D：その頃に中国語をやり始めたわけでしょ。大学、18 歳ってことは。だから、辛亥革命、そのぐらいに祖父たちは中国語をやったりとか、そういう時代ですよ。

平塚：なんか生き字引のよう。ほんとに。そうですね。

D：で、あと、うちはね、中国語をやる人がほかにもいましてね。うちの父のすぐ下に弟が、腹違いなんですけどね、うちの父の母親が亡くなっ……もう父が三つで亡くなっているんで、すぐにまた後妻さんがくるんだけど、その腹違いのほうの、あの、まあ息子っていう……姓はね、M ではなくて H というんです。H っていうんですけどね。東大の名誉教授なんですよ。東大で、あの、音韻学です。音韻学で……

平塚：あ、はいはい。

D：うん。あの、南のほうの、あの五韻音だとか、そういうのを研究しているんですけど、それは、祖父にくっついて行った、中国行った時に一緒にくっついていたりなんかもしてますけど、中国語が大学のほうで、こう、だったんですね。で、だから、その叔父も中国語、もちろん、私なんかより全然難しい学問的なことをやっているわけですよ。それとあとね、その嫁さんがね、まあ、嫁さんだから関係ないっちゃ関係ないんだけど、嫁さんがね、S って聞いたことありますか？

平塚：S……

D：S って、広辞苑をつくった人って分かる？

平塚：ああ。

D：はい。で、広辞苑をつくった人が、S っていう人なんですけれども、その息子が T って書くんですけど。その、だから、その H の家の嫁さんっていうのは、T の娘なんです。

D：それでね、

平塚：そうなんですか。

D：うん。それでね、その、その猛にはうちの叔母以外に、もう1人男の子がいて、それはね、やっぱり、あの、ええと、名前出てこないな。早くに亡くなっちゃったの、交通事故でね。だけど、やっぱり中国語を教えた。

平塚：そうですか。

D：大東じゃなくてね、どこだっけな、桜美林でね、教授やってた。

平塚：桜美林。

D：うん。で、中国語教えた。だから、結構、中国語やる人はいたんです。

平塚：そうなんですか。

D：ええ、ええ。はい。でも、それは私の人生とは全く関係のない話で。で、ただ、まあ、祖父のことがあったので、まあ、あの……たとえば中国から、まだ国交回復のない時ですからね。

平塚：そうですよね。

D：その時にも、父や祖父は中国にも行くことも何回かあったし。合計して戦後で、戦後は5回行ってますから、そのうちの最初の頃行ってた頃は50……まあ、私が小さい時ですよ。その頃なんかは、まあ、もちろん羽田に送りに行かされたことももちろんあるし。その頃、海外にはめったに行かないわけだから。それからあと、あの、中国からお客様がみえるっていうと、そこらへんに近所に住んでいる孫たちで、みんなで啦啦隊じゃないけどさ、お出迎え。

平塚：そうなんですか。

D：そういうのでね、お客様みえるからね、あの、みなさん、「みんな来なさい」って。お出迎えって。

平塚：そうですか。

D：狭い家の廊下のところに並ばされて「いらっしゃいませ」とかね、なんか……

平塚：ああ、そうですか。

D：そう。そういう教育はね、多分ね、10歳ぐらいの時に。うん。でも、それだけ。うん。で、あとは、中国語をやろうと思ったのは、高校の時に適性検査があるでしょ。適性検査があったんです、高校の時に。

平塚：適性検査。

D：うん。「あなた、何に向いてますか」みたいな適性検査。

平塚：そういうのがあったんですか？

D：うん、あったんです。高校のね、2年かな、1年かな、ぐらいの時に。

平塚：え、ど、ど、どういう内容なんですか。

D：いや、だから、いろんなこう、まあ、適性検査をやったんですよ、高校で。どんなんだか、よく覚えてないけど。で、その結果がね、「通訳」って出たの。

平塚：えーっ！？

D：それでね、私ね、英語大嫌いだったの。

平塚：はい。

D：で、うちの、私の学校、女の子の私立の学校なんですけど、英語とスペイン語はできたのね。ミッションの学校なんで……

平塚：高校で。

D：ええ。だけど、別にスペイン語もやんなかったし、英語は大嫌いだし、まして落ちこぼれだし。

平塚：そんな。そんな。

D：だからね、「この結果、絶対間違ってるよな」って思ったんですよ。でも、やっぱり頭の中にはそれが少し残ってたの。それで、大学のほうに入った時には、あの、大学は私はもともと日本文化がやりたかった。歴史がやりたいわけじゃなくて、日本文化

が好きだったっていうか。

平塚：あ、文化ですね。

D：うん。で、日本文化学科なんてね、あるのは、その、すごい難しい筑波とかそういうところはまた別としてですよ。あとは、そんなにすごい、あの、難しいところはないんですよ。で、まあ、あの、大学に入って日本文化やろうと思ってた……

平塚：ああ、そういう学部が、でも、あった……

D：あるんですよ。ありましたよ。

平塚：そうですか。

D：あの、人文学部日本文化学科っていうんですけどね。うん。そう。それで、だから、まあ、そういう学科に。で、それもね、あの、叔父が、父の兄ですけどね、三菱のほうにいたもんだから、「短大行くんなら」、私の時代はね、「短大行くんなら就職世話してやるけど、四年制の大学行くんなら就職の世話できんぞ」って言われたわけ。

平塚：はあー。

D：ね。そういう時代ですよ、まだね。だけど、私はそんな2年間学校行くつもりないし、それしかないし、みたいな。うん。

平塚：そうだったんですか。

D：で、結局、4年のほうに行ったんですけどね。で、あの、で、その大学に入って、最初にクラブ活動探しに行くでしょ？ で、私、スキーやりたかったの。今もスキー、大好きなんです。しょっちゅう行くんですよ。

平塚：へえー。

D：だけど、スキー部、誰もね、まわりに誘ってくれる人、いなかったのよ。声掛けてくれる人がなくて。それで、ワンダーフォーゲルの人がね、「僕の、あの、この部の説明会にきませんか」って誘ってくれたの。

平塚：ワンダーフォーゲルって、登山……

D：山登り。登山。

平塚：ですよ。

D：うん。だから、ワンダーフォーゲルの部とスキー部の部が、部室が隣だった。

平塚：ああ、そうか。

D：で、たまたまその大学にはね、あの、たまたま従兄が二人いたのね。

平塚：うわー、すごい。同じ学部ですか。

D：同じ……いや、学部は違いますけど。

平塚：ああ、違って。

D：うん。それで、その、そのうちの一人がワンゲルだったんですよ。

平塚：そうなんですか。

D：うん、うん、うん。それで、あの、じゃあ、説明会っていうんで行ったわけ。そしたら、隣に座った人がね、その時、私が18の時に、多分22ぐらい、23、4だったと思うんだけど、もうなんとか大学行って嫌で辞めて、またなんとか大学行って辞めて、またなんとか大学行ったみたいな形で、3つ目の大学の人だったの。

平塚：へえー。

D：変わり者ですよ、すごく。うん。

平塚：すごい。

D：今どうしているか、全然知らないけどね。

平塚：そうですよね。

D：で、その人が「中国語に興味ある人、いませんか」ってワンゲルの説明会で言うの。たまたま隣に座った人なんですよ。で、私、第三外国……ま、当然ですよ。あの、最初は英語で、第二取れるのは、うちはドイツ語かフランス語しかないから、

平塚：ああ、そうなの。

D：ドイツ語取るつもりにしてて、で、「第三外国語でね、だから、やるつもりです」なんて言ったらね、「第三外国語でやったって身に付かない」って言うわけですよ。そうですね。で、駅の反対側……私、武蔵っていう大学なんです。武蔵高校の。で、その武蔵の駅の反対側に、その当時ね、練馬日中学院っていうのがあったの。今ないですよ。うん。Oさんっていうの……

平塚：あの日中学院とは違うんですか。

D：ああ、どういう関係か分かんない。そこに行ってた人がやったのかもしれない。女性がやってたんですけどね。で、その、あの……まあ、「そこでね、中国語教えてくれるからね、興味があるんなら、僕、これから行くから行かない？」って言われたわけ(笑)。

平塚：それ、ワングルの……

D：ワングルの説明会。ね、若い女の子、17、8の子がさ、22ぐらいのお兄さんにね、「中国語」って連れていかれて、どっか、どんなところに連れ込まれるか分かんないじゃないですか。ね、だとは思いつつもね、まあ、ついていったわけですよ。

平塚：そうなんですか。

D：そうしたら、そしたら、そこに、その、まあ、女性の先生がいて、まあ、生徒が何人、10人はいなかったわね。で、そこに行って中国語、まあ、近いしね。学校の、駅の反対側でしょ。だから、別にダブルスクールで行ったって、たいしたお金かかるわけじゃないし。で、それで少し、あの、ボポモフォを勉強し始めた。

平塚：そうなんですか。

D：うん。

平塚：それが最初なんですか。

D：うん。そう。だから、全然、なんか、ね、その、系統立って「これをやる」とかなんか、全然なにもないの。たまたま隣に座った人が連れてったんだ、私を。

平塚：で、それ、でも、ずっと通ってらっしゃったんですか。

D：それでね、

平塚：ええ。

D：一年半、ああ、それとまたちょっと話が前後しますけどね、祖父が私が高校三年の時、死んでるんですね。で、祖父が亡くなった時に、まあ、中国の周さん、周恩来さんなんか、まだご存命でいらしたんで、非常にあの、まあ、あの悼んでくださって、えー、向こうから特使をね、あの、国交回復してないんだけど、特使を派遣してくださるって言ってね、王国権、王様に国の権利の権ですけど、その人が特使として、あの、葬儀に参加してくれたんですね。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：で、その当時、まだ国交回復じゃない、前だし、佐藤政権の時代だから、で、佐藤さんが、だから、そこで王国権さんと佐藤さんが私、うちの祖父の葬儀のところで握手をするかどうかっていうのが、そのメディアのちょっと注目したホットポイントでもあったわけ。で、目の前で、私たち出ているところの目の前でね、あの、「ああ、ありがとうございました」って握手したようなのは、定かじゃないんだけど、なんか、とにかく二人とも出てたのは確かなの。佐藤さんもいたし、王うにもいたし。で、「ああ、そういうのがあるんだ」っていうのはちょっとあって。

それで、その、うちの父はね、あの、四男、八、まあ、八番目の四男ですけど、まあ、一番出来が悪いんです。兄弟の中で。

平塚：そんなご謙遜を。

D：それでね……いや、本当に。それでね、あの、まあ、祖父に反抗して、えー、16で予科練行って、予科練終わってから、今度、価値観が全部ひっくり返っちゃったもんだからすごく荒れて、あの、まあ、ちょうどその当時、祖父が農林大臣やってた時期だったのもあったんで、「今、足りないのは食糧だから、まあ、食糧増産に励め」って言わ

れて、それで、その、今で言ったらええと、国立の、ええと、東京農工大学っていう大学ありますけど、そこの農家のほうですね、のほうに入って、それで養鶏とか、要するにそういうことを勉強したんですね。だから、その、卒業したあとも、あの、うちでずっと養鶏をやってたんです。私、子どもの時は、ええと、中野のほうだったんですけども、まあ、まだ、その、雑木林もいっぱいあったのね、そこで、あの、養鶏業で、あの、白色レグホンっていう種類の鳥があるんですけど、その品種改良とか、そういうことやってたんですね。だけど、お金になんないわけ。食べていけないの、それじゃあ。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：うん。で、それでそのうちもうブロイラーが入ってくるっていうことになって、やっていけなくなっちゃって。まあ、それまで私たちの教育費だなんだっていうのは、結局、土地を切り売りなんかして、あの、出してはいたんだけど。で、もう母のほうで祖父に泣きついて、「なんとかやめさせてくれないと」っていうんで。それで、私が中学三年の時に父がやめて。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：ええ。それで、ちょうど祖父が最後、あと1、2年でもう衆議院を辞めるっていう直前だったので、85、6だったんでしょうね。それで、そう、父はその祖父の手伝いに行くようになって。1年ぐらいで、あの、祖父がもう辞めて、じきに自分、もう、病気になっちゃうんだけど。だから、最後のほう、ちょっと秘書みたいなことをしてたんです。で、そんなんで、その王国権さんがみえたあとに、やっぱり松村の家として向こうに、いらしていただいたことに、あの、お礼行かなきゃいけないっていうんで。で、父と、それからナンバリングの1、2、3番。

平塚：はいはい。ナンバリング。

D：3番の叔母なんですけどね、それが、出戻りっていうか、戦争未亡人なもんだから、あの、祖父が世話をずっとしてたのね。その二人で、松村の家を代表して向こうに行つて、あの、ご挨拶にあがったんです。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：うん。そしたら、あの、周さんが、父たちに対して、「あなた、今、仕事ないそうだけど」って。そうですね。面倒みてた祖父が死んじゃったんだから、仕事ないんです。それで、もう、あの、そういう時期だそうだっていうから、なんかその、日中間の人の交流のね、寄与するようなことをしませんかっておっしゃって。で、ちょうどね、それまでLT貿易とか……廖承志さんとね、Tさんの名前ですけど。

平塚：そうですね、はい。

D：もともと、あの、祖父が、あの、名前をって言っていたこともありますが、一応、祖父はそういうの、名前を出すなんて、なんかそういうのは絶対嫌だからって言って、Tさんなら、あの人ならね、あの商売、ビジネスマンだから、あなたの名前にしなさいよって、そういう人だったからあれですけど。

それで、まあ、そのLT貿易も、ちょうど国交回復に、そのすぐ次の年にはなるので、そうすると、そのLT貿易の事務所も解散して日中経済協会になったりとか、というふうになるのですね、そういうその解散、ちょうど改定、こういう、そういう時期だったから、LT貿易の事務所にいた人の一部と父とで会社をつくって。で、ちょうど10年前までかな、合計で28年間、中国と関係の旅行社をしてたんですね。それで、まあ、旅行社してたもんだから、あの……それが、私が、だから、大学の一年生になったのと父が旅行社始めたのが、ほぼ同じ時期なんですね。

平塚：ああ、そうですか。

D：うん。で、ですから、まあ、あの、そういう意味では、まあ、あの、祖父の晩年から、父も中国の人たちとの往来があるようになってね。

平塚：うん、そうですね。

D: で、あの、ちょうど私が大学の、二十歳の頃か、2年ぐらいの時、中国語を、まあ、やり始めてちょっとの時に、父のところで、あの、グループ組織している若い青少年の団体があって、それで「中国に行くグループがあるけど、行ってみるか？」っていう話になって。それで、あの、19歳ぐらいだったかな、その時。で、中国に一回、行ったんですね。

平塚: はい。あ、それが初めて。

D: 初めて。

平塚: ああ、そうですか。

D: 1973年かしら、4年かしら。

平塚: 72年だから1年目か2年目ですかね。

D: そうです、そうそう、74年だったと思います。

平塚: はいはい。ああ、そうですか。

D: うん。まるで猿山の中の檻の中に入った猿ですよ。つまり、どこに行ってもこっちが囲まれるわけ。もう、うわーっと人が出て。外人、珍しいでしょ。

平塚: そうですよね。

D: うん、そう。で、外にはね、自由に出ちゃいけないのね。もうね、外に出るとね、あの、付いてたガイドさんっていうかしら、なんかがね、追っかけてきてね、「出ないでください」っていう、言われるの。民族飯店からね、あの、

平塚: 民族飯店。はいはいはい。

D: 民族飯店に泊って、あそこからね、あの、西単の角、民族宮の。あそこまで行っただけで、もう、戻された。

平塚: えー!?

D: その時にね、私たちのグループに付いていった人がね、今でも交流あるんですよ。Sさんっていうんだけど、ええとね、昔ね、Rさん、分かりますね?

平塚: はいはい、はいはい。

D: Rさんの下に4人の四天王がいたんです。四天王ということはない、

平塚: 四天王。

D: 4人の部下。ね。4人の部下がいて、それは、その、さっきの孫平化さんもしかり。

平塚: はいはい、そうですよね、そうですよね。

D: それから、張香山さんだとか、それから肖向前さん、とかね。

平塚: 名前だけは。はい。

D: うん。それからあとはね、ええと、ええ……名前が出てこなくなっちゃった。そのうちの一人ね。私、名前が出てこないんだけど、の人のお嬢さんなの、Sさんというのは。その、その後外交部に移って、で、福岡総領事もやったし、駐仏総領事もやったんです。

D: で、ついこの間まで、旦那は、ええと、ええと、呉从勇さん、っていう人で、ついこの間まで、うんと、中日友好会館の中国側の理事長だった。

平塚: ああー。

D: なんですね。で、まあ、そういう、その、カミさんのほうが遅江っていうんですけど、姉は趙安伯さん。趙安伯のお嬢さんなんです。

平塚: そう……なんか、歴史上の人物ですね。ハッキリ言って。みなさん。そうですか。

D: そう。それで、だから、私たちのグループに付いたのはね、兆波のお嬢さんがまだ若い時で、まだ独身時代でね、

平塚: そうですか。

D: それで、まだ外交部にも入らないで旅行社だったのね。彼女ね。で、私たちについて……「ダメ。西単まで行っちゃダメ」とかって女の、走ってきて引きとめたの、彼女を。

平塚: そうですか。

D：そうそう。そういう……。

平塚：74……あ、

D：74年。

平塚：74年、そうですね。

D：74年のね、あの、冬。なったばかりの時。多分1月とかね、そんなでしたよ。

平塚：そうですか。

D：で、私にしてみればね、もうね、あの、その練馬の日中学院のね、中国語ってね、いつまで経ってもボポモフォなのよ。

平塚：ええ？

D：それから進歩がないの。

平塚：そうなんですか。

D：うん。もうね、いつまで経ってもボポモフォだけでね、もうね、ちょっと嫌になっちゃってて、1年経って辞めたの、一回。辞めて、それで、そしたら「中国行きませんか」っていう話になって。で、私、外国に行ったのはそれ初めてだったし、それから、言葉が外人と、に通じるっていうことを考えたことってなかったの。英語ってさ、その、勉強するためのものであって、話すための道具だって意識としてなかったの。

平塚：ああー。でも、そういう時代ですもんね、確かにね。

D：そうやってみなさん勉強するのかどうか知らないけど。だから私、日本……たまたまその前に、あの、電車の中でね……私、友だちと旅行に行ったんですよ、中央線に乗ってね。で、帰りの電車の中にね、なんか訳の分かんない中国系の人に乗ってきてね、電車の中でね、地図広げてね、あの、磁石のつけてね、「この電車はどっち向かって走ってるか」ってやってた。

平塚：へえー。

D：うん、やってたのね。それでね、私の拙い中国語でね、「あんた、どっから来たの？」とかね、それで「どこ行きたいの？」とかって言ったら、あの、「いや、とにかく大阪まで行きたいんだけど」、でも、夜だったんですよ。だから、結局、それ、中央線に乗り間違えちゃってるから、「じゃあ、新宿まで行って、それからその、えー、東京駅のほうまで行かせて、大垣行きの鈍行に乗んなさい」と。で、「大垣行きの鈍行に乗りさえすれば、大阪のほうに行けるからね」って言って、

平塚：まあそうですね。はいはい。

D：それをなんとか意味が通じたの。ね。それで、香港の人だったものだから、住所聞いといて、

平塚：ああ、香港だった。はい。

D：で、その時代まだ直行便ないから、私たち中国行くの、みんな香港経由なんですよ。

平塚：そうでしたよね。そうでしたよね。

D：で、そこでその人に電話をかけて、「もしもし」って「ウェイウェイ」って。通じたわけよね。で、その電車の中でも通じたんだけど、その「ウェイウェイ」が通じたっていうことが、私にとってみたらすごく新鮮？

平塚：あー、はいはい、はいはい。

D：ね。だって、言葉なんて通じるものだと思ってないしさ。ね。だから、「ああ、通じるんだ」って、その時ね。で、それで「面白いな」と思って、旅行から帰ってきてからは、もうちょっと真面目にやろうかなと思って。だけど私ね、もとが、まあ、左翼じゃないんです。

平塚：別に左翼じゃなくたって。

D：私、共産党、全然大っ嫌い、私。共産主義、大っ嫌い、私。全部、起こしといて。

平塚：いやいやいや。私も嫌いですよ、言っとくけど。

D：それでね、その当時、中国語を勉強するっていうとね、日中学院とかね、中研とか

ね、みんな左なんですよ。

平塚：確かにそうですよね。

D：うん。

平塚：その当時はそうですよね。

D：うん。

平塚：確かに、確かに。

D：でね、どうしようと思って。そうしたら、東亜同文書院の流れの東亜学院だったら、割とその生活に根差して、「これはいくらですか」みたいな。やれ「毛沢東、万歳」からではなくて、「これ、いくらですか」からの勉強ができると思って。それとあとは、大学がなにしろ、うち、富士見台から江古田までしか通わないから、繁華街通らないんですよ。するとね、東亜学院、霞が関なのね。池袋も行ければ銀座も行けるじゃないですか。

D：不純な動機。定期買ってもらえるし。

平塚：そうですか。

D：うん。それで、東亜学院に行こうと思って。多分、東亜学院に大学の3年生の途中か4年生ぐらいから、

平塚：ああ、そうですか。

D：うん、またそれから行って。それで、その時に教えて、最初教えていただいたのはね、Tさんという方とかね、Yさんって、あと日中経済協会にずっといらしてた方で、最近引退したって聞いたけど、とかにいろいろ教えていただいて。で、大学卒業して就職する時は、あの、霞が関ビルのね、ところに三井東圧化学っていうのが当時あったんですよ。

D：そこの企画部に、あの、一応お茶くみとコピー取りの仕事で就職したんですけど。そしたら、会社の隣が東亜学院なのよ。

平塚：あー、そうですよね。

D：ええ、すぐ隣なのでね。だから、就職してからも引き続きそこで中国語を勉強……。

平塚：そうなんですか。

D：ええ、ええ、ええ。だから、まあ、そういう意味ではOLと言っても、9時—5時のOLですからね、いくらでもそういうところには行けたので。

平塚：授業は夜から……。

D：うん、夜学。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：ええ、ええ、ええ、ええ。それだから、全部、語学は夜学です。東京では。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：うん、うん。大学の時もそうだし、そう。だから、本科生にはなったことがない。

平塚：ああ、そうですか。

D：うん、うん、うん、うん。でも、一応夜学でも、レベルはちょこっとずつ違うクラスがありましたから。だから、日本での勉強はそんなもんですね。そうこうしてて、あの、私、お茶くみが本当に嫌んなっちゃってね、もう苦痛だったのね(笑)。だけどね、

平塚：でも、苦痛だと思いますけど。

D：オイルショックのあとに入った会社ですから、就職口なかったんですよ。だから、大学四年制出ても、お願いして、それもその「短大卒の資格でいいですか」ということでしか就職はできなかったの。

平塚：そうなんですか。

D：うん。うん。だって、うちの主人が同じ年に就職してるんですけど、オイルショックですから、ええとね、何百人、何千人くらいだったかしら。読売15人しか採らなかったんですよ。

平塚：え、でも、し、新聞社ですよ。

D：そうです、そうです。

平塚：そうですか。

D：15人しか社員採らなかった時代なんです。

平塚：えー！？

D：そう。ものすごい大変だったみたい、入るの。だから、そのくらいに就職厳しかったの、あのオイルショックの時は。

平塚：そうなんですか。

D：70・・・76年。そうですよね。本当にね、あの、四年制出た女の子なんかね、就職、ちゃんとともに採ってくれませんでしたよ。うん。

平塚：そうなんですか。

D：そう。大体、普通で、主人の会社なんかだったら、まあ、60～70人採るんですよ、毎年。

平塚：そうですよね。

D：うん、うん。で、それも、その15人ぐらいしか採ってないんです。だから本当に厳しくて。だから、私の時なんか本当、完全にお願ひし・・・まだね、今みたいなのと違うから、お願ひして、なんとかって就職ができた時代だから。うん。それで。でもね、そうするとね、辞めれないのよ。お願ひして入っているから。

平塚：確かに、確かに、そうですよね。そんな簡単にはね。

D：簡単にはね。

平塚：そうですよね。

D：で、まあ、留学でもするとでも言やあね、辞めさせてくれるだろうと。大義名分は立つじゃないですか。悪知恵しか働かないんです。

平塚：あ、それで留学を決めたんですか。

D：そう。それで、だからね、「辞めたい」って言って、辞めたいんだけど留学をし・・・「どうかしら」みたいな話をしたら、私もずっと中国語をしてみましたしね、あの、その肖向前さんって、さっき申し上げた、ちょうど当時講師だったし、あの、この人、記憶ないな。まあ、昔から知っているのね、「なほ子ちゃん行きたいって言うんならね、すぐ孫平化さんのほうにね、連絡するから」って言って、で、孫さんのほうに連絡して、「はい、じゃあ、来年の留学受け入れは、日中友好協会10人だけど、1人はなほ子ちゃんにあげるから、友好協会9人ね」みたいな(笑)。

平塚：そうなんですか。

D：完全走后門ですよ。

平塚：いやいや、そうだったんですか。

D：うん。そうそうそうそう。

平塚：あれって70・・・

D：私は77年からです。

平塚：70・・・あ、一期生ですよ。

D：いえいえ、五期です。

平塚：あ、五期なんですか？

D：ええ。はい。

平塚：そうか、その前にいますよね。

D：その前にいます。

平塚：74年？

D：あの、まあ、完全な友好、友好人士の子弟ばかりです。

平塚：そうですよね。

D：ええ。あの、Sさんって、日中旅行社のSさんの息子さんですとかね。

平塚：旅行社ね。

D：あの、日中友好活動にいろいろ熱心な左翼系の人たちの子どもたちばかりなの。

平塚：そうですね。そうですね。そうですね。

D：うん、うん、うん。いや、そうじゃない人もいたんです、中に。Tさん。Tさんのうちのお嬢さんで、Yちゃんっていうんです。でも、彼女はね、高校出て行ったの。

平塚：えっ？

D：あ、みんな友好協会の子弟たちもみんなそうです。大学生いないんです。みんな高校出て行くんです。

平塚：そうなんですか。

D：そう。みんな高校出て、向こうに留学して、1年なりなんなりして、北京大学なり、みんなそれぞれ大学生になるんです。

平塚：そうなんですか。

D：だから、大学出て行った人はね、いない、ほとんど。

平塚：そうなんですか。

D：うん。あとは大学の途中で行った人はいますよ。Aさんなんかはそうね。

平塚：あ、はい、はい、はい。そうですね。

D：うん。でも、あのHさんなんかは高校出てるでしょ？

平塚：そうなんですか。

D：そう。あの人は多分ね、二期か三期。

平塚：あ、それは知りませんでした。

D：うん。乾さんなんかもそうです。みんなね、本当に大学は上がってない。

平塚：そうなんですか。

D：うん、うん、うん、うん。だから、あの時で一番学歴が高くて、高くて、日本の大学出て行ったのはAさんじゃない？

平塚：そうですか。

D：出てって、出てはいないわよ。

平塚：出てないですよ。

D：出てないですよ。

平塚：そうですね。

D：途中でいったんですよ。

平塚：中退ですよ。

D：そうそう。あの、私は大学を出て、1年OLをしてから行ったの。

平塚：そうですか。

D：うん。で、だから、歳……歳とってるって、まあ、あ、そうでもない。私と同じ同期で行った人の中には、お医者さんだ、の、で、もう就職してお仕事、お仕事、お医者さんしてるって人もいたし、あとはちょっと私より年上の人、あの人、大学出てたかな？まあ、よく分かんない。友好人種の子弟でしょうね。そういう人も、もちろんいましたから、私より年上の人はいたけど、でも、みんな、ほとんどその前に、みんな大体高校卒業してか、大学に入っても途中ぐらい……

平塚：ああ、そうだったんですか。

D：で、最初は半年、半年だったんですよ。で、私の時から、ええと、浅井と私たちは、私たちは9月から行ったでしょ？あの人、その前の年ぐらいかもしれない。で、その前はね、だからね、半年、半年、半年、半年、1年、1年ってこうあいてったんだと思う。1年、五期が。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：だから、五期っていうのは多分、えー、一期と比べると2年ぐらい、遅くなるっていうことじゃない……うん、3年か。は、半年あって、一期が行くでしょ？半年で

二期でしょ？ で、これで1年よね？ 3年、四期、三期、四期でしょ？ これ2年、丸2年でしょ？ だから、その後、5年だか6年……3年目だ。だから、76年、77年だから。ということは76、70……74年ぐらいから始まっているんじゃないかしら？

平塚：そうです。74年か5年ぐらいから。そうですね。

D：うん、うん、うん。そう。だと思います。

平塚：ああ、そうですか。

D：ええ。外務省の人たちは、私たちの時はちゃんと1年、あの、1年から行くようなのがあって、その前の人たちは、割と半年とか、

平塚：半年で。

D：あとは台湾でしたね。

平塚：ああ、そうですか、そうですか。

D：うん、うん、うん、うん、うん。そうですね。で、Yちゃんは、あの、全然私も面識ないんですけど、あの、彼女が高校出て行った時に、やっぱりまわりがみんな左翼の人たちばかりだから、私も随分いじめられたけど、あの、こっちは歳もとってるしあれだけど、Yちゃんは若かったから、すごく追い詰められちゃって、部屋から出られなくなって、精神的にちょっとおかしくなったりなんかしたことがあって、それで結局、1年経たないで帰ってきたんです。

平塚：そうだったんですか。

D：うん、うん。だから。で、私は、だから、それ知ってるもんだから、文革のあと、76年で毛沢東も周恩来も死んだから、文革も終わったし、変わっていくだろうと思ったし。行くからには、私は、やっぱり、あの、3年と思って決めてたので。あの、3年は途中で、あの、途中で辞めて帰ってくるということはできないという意識は、覚悟がありました。

平塚：そうですか。

D：うん。それで行ったけど、面白いことはいろいろありましたよ。左翼の人たちに、あの、かこ……、あの、なんていうのかしら、囲まれてということもないけど、あの……

平塚：え、に、日本人ですか？

D：うん、日本人が。

平塚：えっ！？

D：あの、たとえばね、ええと、私はもうOLしてましたから、日本人としての礼儀っていうかね、あれを知っ……そういうのはね、自分は一般的なね、決まり……

平塚：まあ、まあ、一般的なね。そうですね。社会的っていうか。

D：そうそうそうそう。そういうのを基本としてたってつもりなのね。で、行った時に、たまたま、その……最初に中国に74年に行った時のお友達のお父様が全日空の方だったんだけど、あの、駐在してらしたんですよ。だから、その方たち、その方々もお世話くださったし、あの、日中経済協会の方とか、結構、いろいろお世話下さっ……まあ、存じ上げていた方もあったし、お世話くださった方もあったんで、まあ、そういう方たちには、やっぱりお正月になれば挨拶に行くべきだと思ってたわけね。だけど、その、それを聞いてね、っていうのは、いちいちそんなもの、それぞれのお家に挨拶に、「明けましておめでとうございます」なんて回る必要もないし、回ったら向こう、向こうも迷惑だと思っているから、名刺交換会があるんだったら、そこで行けばみんなに挨拶できるかなと思ってそれに行こうと思ったわけ。そうしたら、その左翼の人たちがみんなに「来い」と言うわけね。それでビャーッと部屋に、みんなが集まっているところに私が入れられて、ね、「なんでそんなことに行くんだ」と。あの、政府のね、「大使館っていうのは政府の犬だ」と。「政府の犬だからね、そんなところにね、挨拶に行くべきではない」っていうわけ。私たちのね、身分を守ってくれるのは大使館だったり外交官でしょ。

平塚：そうですよね。ええ。

D：ね。あなたたち、あなたたちはどうなんですかって話なんだけど、でも、そういうことでもさんざん、こう、やられたりとかね。

平塚：へえー。

D：うん。そういう時代なんですよ。さ、左翼の人たちの。

平塚：そうなんですか。

D：うん、うん、うん、うん。だから、

平塚：でも、別に関係ないわけじゃないですか。

D：いや、でも、かん……

平塚：本当は自由でしょ？

D：自由ですよ。自由なの。そう、だから私は、「あなたたちがそう言っても、私は私の日本人としての規範があるから、行きますよ」って言って、

平塚：そうですよね。そうですよね。ええ。

D：まあ、その自由までは奪われるわけで、でも、そういうふうにいるいろいろないじめじゃないけれども、嫌がらせというか、そういうのはありましたよ。今やちょっとね、考えられないかもしれないけどね。だから、あの、まあ、そういう人たち、あの人たちはそういう考えだというのはね、すごく分かりましたから。

平塚：なおさら嫌になりますよね、左翼がね。

D：そう、そう、そう。うん。でもね、「捨てる神あれば拾う神あり」でね、そういう闘争を経て私がね、あの、新年の挨拶に行ったりとかね、そういうのがね、風のうわさでね、あの、日中経済協会の誰かの耳に入ったりとかなんかしたらしくてね、日本に帰ってきてからね、通訳を雇う時にね、あの、「松村さんはね、あの、そういう中でもね、あの、日本人としてのね、ちゃんと……」

平塚：くじけずにね。

D：そうそうそう。「だからね、通訳として雇おうと思った」って言ってくれた人いたから。

平塚：そうですか。

D：そう。

平塚：えー、そういう時代だったんですか。

D：うん、うん、うん。そうですね。だから、まあ、懐かしいっちゃあ懐かしいですけどね。まあ、あの、親しい……今、親しい、で付き合ってもいますけれども、でも、やっぱり、ひとつ、ちょっとそういうのがこう、壁にはなりますね。なりますね。

平塚：そうですね。

D：うん、うん、うん。まあ、まして、ほら、やっぱり、どう見たって、個人的な名前を出しちゃいけないけど、Hさんもしかり、えー、あの、Tさんもしかり、やっぱり、一生懸命いろんな今、運動をしてるでしょ。

平塚：そうですよ。そうなんです。ある意味ですごいですよ。初志貫徹というかね。

D：そう。だから、やっぱりね、そうなんです。あれは骨の髄まで左翼が元になってるの。

平塚：そうですよね。本当、すごいと思いますよ。

D：最近も P からなんか変なメールがきて、あの、いろいろくるの、送ってくるのよ。なんか「原発反対のなんとか活動をしているから署名しろ」とかね、なんか「フィルム、こういうのを見て、見て」とか言うてくるんだけど、「はいはい」って言って、それをまた別の部屋、別のファイルに入れているだけの話なんだけど。

平塚：そうですか。

D：うん。そんなことはあれよ。

平塚：大丈夫です、それは。本当ですか。

D：うん。だから、やっぱりね、あの、まあ、私はね、「ああ、分かりました」と。で、あの、うちもね、娘が今、函館にいるんですよ。

平塚：え、そうなんですか。

D：うん。あのね、

平塚：就職でですか？

D：そうです、そうです。二人、娘が双子でいるでしょ。27になったんですけど、長女は東京のほうの、あの、外資の、あの証券に行って、

平塚：証券でしたね。

D：ええ。で、次女のほうが、国内の証券にいたんだけど、あと転職したんです。

平塚：そうなんですか。

D：うん。今、あの、放送局の、あの、函館支局にいるんです。

平塚：あの放送局にいらっしゃるんですか。そうですか。

D：それで、その子がね、あの、大間の原発って、一番MOX燃料を使って、一番危険な原発があるもんだから、それをね、やっぱりすごく、あの、彼女が心痛めちゃってて、で、私たちのところにそれこそ反対の署名のとか送ってくるのね。そしたらね、主人がね、「お前さんが反対するって気持ちはね、分かるけど、僕たち、まあ、お前さんも含めてね、記者というのほど明らかに立ってしてはいけない」と。

平塚：そうなんですよ。

D：うん。だから、「反対だったら、ママにしてもらったりね、まあ、もう1人の双子の片割れにしてもらったりしてもらうのは絶対関係ないからいいけども、あの、自分が反対だと思ったら、じゃあ、その反対のほうの取材活動をいっぱいしてやれ」と。そういうふうに言ってましたけどね。だから、「うちはそういう状況だからね、ご協力できません」って。

平塚：ああ、でも、それ、言い訳になりますから。

D：そうですね。

平塚：そうですか。そうなんですか。

D：うん。だから、そんなこと言ってましたけど。この間もなんかその子がね、車で函館からね、あれは下北半島の一番北側のところのね、あの、ほうに、自分で、あの、車、自費でね、あの、フェリーにのっかって行って、一泊泊りで行ったって言ったかしら。函館から1時間ちょっとで行くんですよ。で、そこから車、ドライブで2時間半、2時間の範囲で陸奥も行ければ、それからその大間、大間のやっぱりその予定地、それからあと、その六ヶ所村、それから東通り、全部行けるんですけど。だけどね、一日一便乗ってるフェリーに対してね、往復したらね、3万円だって。要するに、フェリーは通ってるけど、利用者いないんですよ、そんなとこ。原発関係者しか。

平塚：そうなんですか。

D：うん。で、かっ……で、青森に出るにはね、こう、ずっと半島回ってこなきゃいけないでしょ？ だから、出るっていったら函館のほうに近いんだって。

平塚：そうですか。

D：うん。だからね、そんなんで行ってきたけどね、やっぱり大変なことだったって……

平塚：あ、でも、現場に足を運ばなきゃ分かんないですね。

D：分かんない。「これも行ってみないと分かんなかった」ってね、言ってましたけどね。

平塚：そうですよね。

D：まあ、全然余計な話だけど。

平塚：ああ、いえいえいえ。

D：まあ……

平塚：そうですか。転職されて。そうなんですか。

D：そうそう。だからね、それはあれですけど。だからまあ、あの、まあ、留学時代はね、いろんなそういう思い出がありますし。

平塚：そうですね。

D：うん。でも、いろんな方に、あの、可愛がっていただいたし、お世話になったし、あの、っていうのも同時にね、廖承志さんなんかもあれだったし。

平塚：そうですね。

D：それはいろいろありますけどね。で、まあ、帰ってきて、で、帰ってくる前に、直前に、父が旅行社してたがためにね、中国から、中国にいろんな旅行団っていうかみえるでしょ？ で、たまたま、その、裏千家の家元のGさんのほうですね。今の、そう、Sさんのお父さんね、Gさんのほうが、ええとね、父が八番、七番目でしょ？ ナンバリング5。三男。

平塚：はいはい。

D：ナンバリング5の三男のカミさんが、嫁さんっていうか、私の叔母ね。が、Gさんの母方のいとこなんですよ。

平塚：え？

D：Gさんのお母さんのお姉さんか妹か知らないけど、うちの娘が私の叔母になるの。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：うん、うん。なもんだから、それに入ってきているもんだから、まあ、遠縁っていうこともあって、それでそのGさんが中国行くとなると、まあ、もともと、その紹介したのも祖父だし、だから、そんなん、そのGさん中国に来るっていう時は、大体、父の会社を使ってくださってたんですよ。だから、私が卒業して、最初に通訳の真似事をしたのが、GさんがRさんにお茶を差し上げた時だった。

平塚：そうなんですか。

D：うん。うんうんうん。そう。それが一番最初ですね。卒業して日本に帰ってくる直前に、夏休みにみえたから。

平塚：で、その時はまだ中国にいらっしゃって。

D：そうそうそうそう。帰ってくる前ね。

平塚：ああ、そうですか。

D：6月ぐらいに学校終わって、Gさんが多分7月ぐらいにみえて、で、そのお茶のが終わって、私、荷物まとめて送るの送って。私、地球反対回りして帰ってきたんだけど。うん。

平塚：そうですか。香港じゃなくって。

D：ほん、香港に行って、妹と落ち合って、で、妹と一緒に、あの、オランダに飛んで、オランダからヨーロッパ、アメリカへずーっと行って、で、帰ってきたの。

平塚：はいはい。そうですか。

D：いや、あの、貧乏旅行だから、

平塚：グルッと回って

D：それで帰ってきてから、だから、その時はやっぱり、ちょっとね、あの、今から考えるとね、李先念さんなんてね、なかなか会えないですよ。

平塚：歴史上の人物……

D：歴史上の人物だからね。そう。だから、そういう意味ではね、「ああ、すごいな」と思ったのと、あとね、まあ、あの、その、その、なに、孫晓燕もそうだけど、あの、さっきのSさんっていうね、あの、赵安伯さんの娘さんもそうだけど、あと、郭沫若さんの娘さん……

平塚：いよいよ歴史上の人物……

D：うん。郭沫若さんの娘さんも、留学時代に、あの、やっぱり紹介してくださっ……まあ、先生からの紹介でね、「日本語ちょっと教えてあげた……ほしいっていう人がい

るんだけど、行ってくれるか？」って言われて、それで行ったのがね、あの、郭沫若さんのお嬢さんのところだったんですね。

平塚：そうだったんですか。

D：うん。うん。で、それもやっぱり、今に至っても、もうお姉ちゃんみたいな感じで付き合ってる。

平塚：そうですか。

D：もう、孫さんよりもっと親しい。

平塚：そうですか。

D：うん。それとかね、あとはね、あの、その彼女とそのあれ、みんな、みんな同じ学校だから、だから、彼女もそうだし、さっき言ったそのSさんもそうだし、あと、あの、朱穆之って文化部長がいたんです。新華社社長でもあったんだけど。その人の娘がいるんですけど、それも私の学校にいたんだけど、その人なんかもみんな仲間なのね。

平塚：そうですか。

D：うん。それとかね、みんな、だから、みんな学校……自分たちが子どもたちの時からの仲間です、あれは。それで、そのな……その人たちのまた仲間ね、あの、羅瑞卿、。

平塚：はいはいはいはい。

D：羅瑞卿の娘とかね。

平塚：そうですか。

D：それでね、私たちの学校の同じ向こうで、寮にいて、「なんか違うよな」とか思っていたのが、それがあとから考えてみれば、それ、羅瑞卿、二人娘がいるうちの、1人はそのさっきの、あの、郭さんたちと仲いいんだけど、そのお姉ちゃんのほうは言語で私、一緒だったのね。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：うん。だから、羅瑞卿もそうだし。だから、結構みんなね、その辺がね、

平塚：そうなんですか。

D：なんですよ。うん。だから、歴史上のね、どっか、考えてみればね、歴史上出てくるような、みたいな。

平塚：すごい。

D：そう。

平塚：そうなんですか。

D：うん。そういう人って結構ね、あの、いるか、いる。

平塚：へえー。

D：うん。だから、今でも付き合いがあるのは、だから、羅瑞卿のうちの娘は付き合いがあるし、私、朱穆之の娘と、郭さん、郭沫若の娘と、娘で。だけど、残念なのはね、あの、承志廖さんのところのね、息子……はやっぱり息子だから。だから、そういう意味ではね、連絡がなくなっちゃったのね。

平塚：そうですか。

D：偉くなっちゃって、まあ、廖淇なんか偉くなっちゃったしね。

平塚：はいはいはい。うんうんうんうん。

D：で、あと、あの……まあ、偉くならない人は、だから付き合ってるのよね。よく考えてみりゃあ。

平塚：いやいや、いやいや、そんなこと。

D：うん。そう。だから廖淇、あとは……うん、そうですね。なんかいろんな人にご縁はあって、ありがたかったね。人生としてはね。

平塚：そうですよ。

D：観察するという意味ではね。

平塚：いやいやいや、本当に。

D：に取り込まれないで、観察する対象としてね、見るにはね。

平塚：そ、そうですか。

D：いろんな……あと、私だったら「中国共産党はどう考える」とかね、意見は聞けるわけだから。

平塚：そうですよね。

D：うん。うん。そういうのはね。

平塚：ああ、素晴らしいですね。

D：あとはね、そう、で、中国から帰ってきたからは、まあ、だから学習歴はそれですよ。通訳者になるまでの経緯はそれですよ。学習歴ですよ。通訳……

平塚：でも、あれですよ。あの、お帰りになったあとは、もうずっと通訳で……

D：そう。

平塚：ですよ。

D：というのはね、あの、かい、会社を辞めた時に、4月で辞めたんです。4月の前で辞めたのか、3月末で辞めたか4月で辞めたか覚えてないけど、

平塚：はい、年度末で。はいはい。

D：そうそうそう。それで、その時にね、あの、あれ、どこの紹介だったんだかよく分かんないんだけど、ええと……中国から天津歌舞団っていうのがね、1977年に、の5月から6月にかけて日本に来たんです。で、それが中国から来た大型の歌舞団の最初なのね。それにはね、たとえば美空ひばりと島倉千代子みたいな、王坤さんとかカクライエンさんとかっていう人なんだけど、そういうような人たちも来たわけ。すごく有名な人たちが。で、「それにね、随行しませんか」って言われて。それで、あー、あの、まだ中国語よくできないんですよ、その頃。留学の前だから。で、でも、あの、「いいですよ」って言って、それで、あの、付かせてもらったの、2カ月間。で、ずっといろんなところ回って。それで、随分、その方たちと知り合いができたんですよ。それで9月から留学したから。そういうのが一個あったの。

それと、あともうひとつ言わなきゃいけないのは、私が二十歳の時に、中国の、あの毛沢東なのか周恩来なのか知らないけど、ええ、タイ……その当時のちゅう、外国に駐在してた外交官は、みんな妻子は不携帯だった。

平塚：あ、はいはい。

D：ね。

平塚：不携帯。はいはい。そうですね。はい。

D：みんな1人で行ってたでしょ？

平塚：そうですね。

D：だけど、それは非常に残念なことだから、せっかくだから、そういう人たちの子弟を、あの、そういうところのね、家庭に預けて、小さな外交官として、あの、育成しなきゃいけないっていうことを毛沢東か周恩来かが言い出したわけ。王効賢さんによれば「毛沢東だ」と言っているけど。で、それで5人、日本に来たんです。1人は、あの、なんだっけ、あの、劉徳有さんの息子。今、こっちで講談社にいます。男の子ね。それからあとはね、馬さんっていう人と石さんっていう人と、あともう1人なん……女の子が3人。あと、もう1人、男の子がいて。あなた、会ったことあんじゃないの？ 罗荔波って知ってます？ 知らないか。

平塚：あ、はい。

D：彼です。

平塚：そうなんですか。

D：うん。で、で、うちに預けられたの。彼、うちに来た時は7歳、8歳かな。

平塚：へえー。そうなんですか。

D：うん。うん。それで、8歳ぐらいですよ。日本……あの、最初にね、国貿促のNさんって家があるんですよ。Nさんっていうところに預け……、そこに預けられてたんだけど、その家、子どもさんが男の子二人いて、下の子がちょっと小児麻痺かなんかなんですよ。それで、公団の団地だったので、当時ね、もう、ちょっと、とてもじゃないけど、あの……。で、彼はね、ちっちゃい時にもものすごく……。あの、最初ね、彼の人生語っても仕方がないんだけど、まあ、いろいろ大変だったんですよ。あの、陝西の田舎にいたの。で、お母さんが北京で下の子たちといて、お父さんが日本だったわけね。それで、突然来ることになって、田舎の陝西のおばあちゃんのところから引っ剥がされて日本に来たわけですよ。だから、もう本当にかわいそうだったのね。で、1年間だから、その子行ってから。で、うちに預かってくれないかって。その時、金蘇城さんって人がいて、その人たちが親しかったもんだから、なんかね。それで、「じゃあ、預かりましょう」ということで。私のうちは、私と、5つ歳の違う妹しかいませんから。で、ひとつ、三畳が、物置があったから、そこ、荷物出して。で、彼、そこに。

平塚：そうなんですか。

D：で、多分、うちに大体2年半か3年ぐらいいたのかな。

平塚：そんなに長く……

D：うん、うん。で、じゅう、11歳になって中学校に、あの、外文の、附属の中学校に入る歳になったんで帰って。でも、帰ったって、もう中国語はできなかったから。

平塚：そうですね。

D：うん。それで帰ったでしょ。まあ、だから、彼が帰ったのが、彼が帰ってすぐ翌年から私、留学してるから。

平塚：ああ……

D：だから、「お姉ちゃん、カレーが食べたいよーっ」て来ればさ、つくってやらないとかわいそうだって思うじゃん？

平塚：そうなんですか。

D：うん。だから、カレー食べさせても、その当時ね、まあ、週末だけ彼は大使館に帰るんですよ。まあ、行ったって、お父さんだって、小さい時は一緒にいたお父さんじゃないから。

平塚：そうですね。

D：うん。だから、そんなにね、あれで。まあ、で、また帰ってくるでしょ。で、うちは、まあ、男の子いないし、ラジコンのおもちゃとかね、買ってあげるのも大好きなんだけど、中国に帰る時にラジコン持って帰らせられないのよ。持って帰ったかどうか記憶に……多分、持って帰らなかったんじゃない。

平塚：ああ、そう……

D：だってね、70ね……毛沢東が死んだ年ですよ。

平塚：そうか。そうか。

D：もう、ラジコンなんてないですよ、中国じゅうひっくり返したって。

平塚：そうですね。そうですね。

D：うん。これ、持って帰らせてあげたいけど、帰らせられないよね、みたいなね。

平塚：そうですね。

D：うん。

平塚：はあ……

D：そう。で、また、その子がいたから。それでまあ、そのあと過ぎてって、それからずっとそういうような、私が留学している間はそうだし、通訳して、になって、彼はずっと大学、高校から大学行って。私が向こう行けば、まあ、なんか持ってってやるとか。そのうち主人と結婚して転勤で向こう行ったりし、し、すれば、遊びに来させるなり。あの、最終的にはね、日本にね、いさせちゃったんだけど。

平塚：そうですか。

D：まあまあ、そういうような中国との縁がいっぱいありました。

平塚：本当ですね。

D：あ、あと、もう一個ね、あの、中国になぜ留学したかね。あの、すごく迷ったの。というのは、みんな、私の時代はクリスマスケーキだったの。24 で大体……25 ぐらいでお嫁に行くでしょ？

平塚：はいはい。

D：ね。で、私はもうその時にすでに 23 なんですよ。すごい迷ったのね。それで、でも、彼氏がいるわけじゃないんですよ。だけど、やっぱりちょっと迷っ……

平塚：あ、でも、

D：みんなね、そんな年だからね。そして、新宿の母に相談に行ったの。新宿の母がね、私のな……

平塚：新宿の母？

D：手相みる人よ。伊勢丹の角。

平塚：そうなんです……。その頃にもういらっしゃったんですか。

00 : 10 : 00

D：いたんですよ。あの方はもうすごく有名だったんですよ。

平塚：そうなんですか。

D：うん、うん。そう。K さん。

平塚：そうなんですか。えー、今、今もいらっしゃる……

D：今いらっしゃる方、今はね、あそこにはね、K さん自体は予約じゃなきゃダメなんですけど、息子さんがね、立ってらっしゃる。

平塚：そうですか。

D：うん。うちの娘、息子に会いに行ったけど、うまかったとは言ってたな。

平塚：そうですか。それでなんて言われたんですか？

D：ええ、それで私のね、手相を見て、生年月日言っ……見たとたんにな、「あなた、外国行くでしょ？」って言うの。何も言ってないんですよ。だからね、外国行きま……「外国行くでしょ？」って、「いや、行ったことありました」って、私、答えたの。そしたらね、「行ったことありますじゃなくって、行く予定があるんでしょ」って言うわけ。それだからね、「迷ってる」って。そしたらね、「行きなさい。行かなきゃね、あなたの人生、開かないわよ」って言うの。

平塚：へえー。本当ですか？

D：本当。それで「どっちの方向？」って言うからね、方向、彼女は当てられないのね。「どっちの方向」って言うから、「いや、中国のあっちのほう」って言ったら、

平塚：方向、当てられない。

D：うん。そしたら、「方向もいいわよ。行きなさい。行かなきゃ、あなたの人生は開きません」。もうすごい、すごい強い背中を押されちゃったの。

平塚：そうなんですか。

D：それで、多分、だからね、4月とか5月とかそのくらいだったと思うのよ。私、そのあとね、2回ぐらい並んだことあるのね。

平塚：本当ですか。

D：うん。で、2回並んだんだけどね、2回ともね、「あなた、何も相談することないでしょ、今日は。暇だから並んだの？」みたいな。確かに暇だから並んだのよ。時間があつたから。待ち合わせするのに。

平塚：ちゃんと顔覚えているんですか。

D：いやいや、そうじゃないんだけど、多分、顔に書いてあるって言うわけよ。

平塚：ええー？

D：「何も、あなた、今日、何も相談することないでしょ。帰りなさい」って言われたの、一回でしょ。それから、妹のことで心配で並んだのね。そしたら、「妹のことは本人が来なきゃ何もできません」って帰ったことある。

平塚：へえー。

D：だから、私、ほかの手相見ないけど、あの先生は信じる。

平塚：すごいですね。

D：うん。すごいだよ。

平塚：そうですか。

D：でも、確かに結果的に見ればそうなんですよ。私……

平塚：そうですよ。そうですよ。

D：そう。本当、そうなんですよ。

平塚：ああ、それが本当に背中を押して。

D：背中押されちゃった。そう。だから、本当に、あの、あっちに足向けて寝られない。

平塚：そうですか。

D：うん、うん。そう。

平塚：いやー。でもね、確かにそうですよね。

D：うん。うん。そうなの。だから、あれ行ってなければ、うちの主人とも出会わなかったのね。主人と出会ったのは、行って帰ってきて、通訳してて、まあ、い、いくつかの仕事であっちこっち行かされるじゃないですか。で、なぜかね、読売新聞、3回行ったんですよ。朝日も共同もどこも行かないのに、読売に3回行って、3回とも出てくる人は1人、知ってる人なわけ。

平塚：そうなんですか。

D：主人じゃないわよ。主人の上の方なんです。その方はうちの父のことも祖父のこともよくご存じの方だから、「Dちゃん、いつまでこんなことしてんの？ 誰かいい人、いないの？」って言うわけですよ。だから「いないからやってんだからね」……誰かその頃はいたんだけど、「いや、誰もいませんからね、いい方あったらね、紹……まあ、あの、よろしくお願いします」と、非常に社交儀礼的にね、頭を下げておいたわけよ。そうしたら、本当に紹介してきたの。

平塚：本当ですか？

D：そう。

平塚：そういう縁なんですか？

D：そうよ。

平塚：えっ。私、てっきり中国時代に知り合ったのかと。

D：全然、全然。お見合いだもん。

平塚：そうですか。

D：うん。そう。で、本当に紹介してきて、で、それで、そのね、その方の奥様も占いする人なの。

平塚：えー！？。

D：それで、彼のと、私のと、占ったら、「ああ、これ、うまくいきそうたがら、これ、紹介しなさいね」って言ったって。

平塚：いやー、そうですか。

D：うん。私の人生、肝心なところは全部、占いで決めてる。

平塚：そうですか。それは、じゃあ、留学から帰ってきて何年目の頃に……

D：ええと、帰ってきたのが8、なると77年に行って80年に帰ってきて、それから通訳の仕事をして、私は83年に結婚したんだから、82年の年末のクリスマス。

平塚：に、お見合いを。

D：うん、お見合い。12月25日。
平塚：そうですか。
D：うん、そう。サンタクロースが連れてきた。
平塚：そうなんですか。へえー、そんなことがあるんですか。
D：本当よ。「瓢箪から駒」じゃないけど、社交儀礼的にね、「どなたかいい方がありましたら、よろしくお願いします」って。真面目にちゃんとしてくださった。
平塚：通訳で行ってたわけですね？
D：そうです。通訳で3回、前後3回、同じ読売新聞に行ったんです。それで、そこに出てきたおじさまが。
平塚：すごいですね。
D：ね。だから、Kさん、バカにできないでしょ？
平塚：本当ですね。
D：うん、そうなんです。
平塚：へえー。
D：そう。
平塚：いやいやいや、それはちょっと、
D：うん。
平塚：すごい驚きという感じの……。
D：そう。
平塚：ねえ。
D：だから、「何がきっかけですか？」
平塚：「きっかけですか」っていうか……
D：「うーん、Kさんです」。
平塚：そうですよね。
D：占いです。
平塚：そうですよね。でも、その、まあ、ご結婚されて、でも、ずっと通訳はされてたわけですよね。
D：あ、でもね、私ね、あの、なにしろ82年のクリスマスに、ほら、サンタさんが連れてきて、それで、83年の6月に結婚したら、
平塚：半年で結婚……
D：半年で結婚しちゃってるわけ。そう。で、結婚したら、それから翌々月には、もうお腹に三人子どもがいるっていう話になったわけ。最初、三つ子って言われたんですよ。
平塚：三人？
D：うん。それで一カ月経ったら、「陰だった」って二人になったの。
平塚：そうなんですか。
D：そう。だから、もう、本当に結婚したら、1年経たない、10カ月で二人の母だったの。
平塚：そうですか。
D：うん、そう。だからもう、
平塚：じゃあ、もう、一時期は子育てのほうに専念……
D：だから、その時は、ええと、その頃ってね、結構ね、あの、ちょっと、全部いろんなプリントアウトしてみたんだけど……あの……。そう。
平塚：ありがとうございます。
D：いいえ。あの、いろんな人のやっててね、
平塚：ええ。
D：83年っていうとね、Cって分かる？ Cさんって女性の……分からないかな？ こういう……Cって、これ、女性のね、対外経済貿易部の部長ですよ。

平塚：いやー、存じ上げない。
D：うん。それからね、Kって外国部の部長。
平塚：ああー……
D：それから、Zって、これ、文化部の部長？
平塚：はい。
D：で、各、こういう大臣の……
平塚：その方は、はい、お名前は……
D：うん。大臣が来た時にくっついたりしてるわけね。だから、これ、82年でしょ？
平塚：ああ、
D：Oさんはね、あの……O先生は、あの、あれなんですよ。あの、祖父の関係がありますしね、
平塚：ああ、そうですよね。
D：うん。だから、私たちが結婚する時にも、メインで来ていただいたの。
平塚：そうなんですか。
D：うん。で、5分の話が、もう20分も話してくれてさ。もう、すごい喜んでくださったんだけど。そう。
D：花嫁、立って聞いているの、大変なのよ、20分。
平塚：ああ、ああ、そう、そうね。あの形式だとそうですよね。仲人さんが話して、その後、主賓が話してって。
D：そうそう。
平塚：そうですか。
D：立って20分聞かなきゃいけない。でも、とにかく、嘉平太先生が中国に行くっていう時は、大体私が付いていったの。
平塚：ああ、そうですか。
D：うんうん。だから、ええと、陳云さんと話しするだとかなんだっていうのも、全部一緒にあれしてるんですよ。
平塚：ああ、そうですか。
D：うん。だから、この頃はね、82年、83年、中国語の通訳少なかった時期なんですよ。まだする人があまりいない。私は、そうだ、「中国語の訓練、どこかで受けましたか」ってなってたけど、だから、語言学院以外だと、
平塚：語言学院と、
D：あとは、あの、サイマルはね、
平塚：ええ、ええ。そう、サイマルに一回行ってたんですよ。
D本：80……うん、3カ月。
平塚：ああ、そうなんですか。
D：学費は3カ月しか払ってない。サイ……一期生っていうのがあって、多分ね、80……81年の4月から9月、あれが、あの、一期なのね。で、9月から、あ、10月から3月までが二期だと思うの。で、私は、だから二期のほうにアプライしたんですよ。多分、Aも一緒だったから、つまり、あの、T夫人も一緒だった、同じですね、と思うのよ。それで、だけど、私はなにしろ、この時は一番忙しい頃なの。
平塚：うんうん、そうですよね。
D：うん。だから、学費は払ったものの、行けない。
平塚：ああ……
D：だから、結局、行くの、諦めちゃって……
平塚：そうなんですか。
D：うん。だから、3カ月で辞めちゃった。だから、卒業したことにもなってないし、
平塚：そうですか。

D：うん。そう。たった3カ月で。で、Tさん自体は、留学の前に、その、さっき言った天津楽団で仕事一緒にしてるから、その時からの知り合い。

平塚：そうですか。

D：うん。だから、留学の前も知ってて。で、帰ってきて。まだ彼も若いし。独身時代ですよ。で、ここでちょっと世話になって。で、Tさんもね、あの人、外語、外語出てるでしょ、ちょっと。東京外語に籍を入れてたことがあって。主人と同期なの。

平塚：そうですか。そうなんですか。

D：そう。だから、まあ、あれ、あれ、まあ、そんなに仲いいわけじゃないけど、まあ、知り合い。誰ともつるまない人だからあれだけ。まあ、そんなの関係ないけど。それで、だから、Tさんにはその時もちょっと世話になってるけど。だから、サイマルできちんと何か訓練を受けたことはないんですよ。

平塚：そうですか。

D：それから、その時代……

平塚：独自ですよ。

D：そうです。だから、メインはね、あの、あれです。81年からの、その、まあ、80年からやってる間にね、仕事をイクサに登録させてもらったから、イクサも30年。

平塚：はあー……

D：で、イクサに登録させもらっ……

平塚：一番長いんじゃないですか。

D：長いんじゃないかと私は思う。

平塚：そうですよね。

D：あの、HさんとかAさんも私のあとだから。

平塚：そうですよね。

D：うん、うん。

平塚：そうですか。

D：それで、その時、それと、日中経済協会。この2つがメインの仕事だったの。でも、それが本当にもう、毎月2個ずつぐらいありますでしょ。2、3、4、5、6……

平塚：そうですよね。

D：ちょっと細かく書いてるから。だから、それだけでも忙しかったの、すごく。

平塚：そうですよね。

D：うん。今、何も勉強しないで何もしないうちに全然なんかあれなんだけど、結局はその仕事の中で鍛えてもらったっていう感じよね。

平塚：そうですよね。

D：うん。だから、それで鍛えてもらったけど、同時通訳は鍛えてくれない……チャンスはなかったし、あの、そのサイマルも、同時通訳のブースで何かをやるなんて、そんな時代じゃないから、まだ。

平塚：そのあとですよ。

D：あとですから。

平塚：そうですよね。

D：うん。そんなもの、全然、なんか練習とかっていうことはしたことがない。

平塚：そうですよね。

D：うん。で、あの、だから、それですって主人と一緒にってから、ジャカルタに2年半行って、

平塚：ジャカルタも行ってらっしゃったんですか？

D：うん、うん。

平塚：そうですか。

D：子どもが10……1……10カ月の時に主人が行っちゃって、1歳になるまで予防注射

打ちまくって、

平塚：ああ、確かに、確かに。

D：うん。で、ジャカルタ 2 年半行って、フィリピンでマルコス大統領がすったもんだして逃げていくとあって、ああいう時代ですね。マラカニアン宮殿の前で。主人はそこに行っていたりしてたけど。それから今度、横滑りで上海に 1 年いて。その時は列車事故で、高知の中高生が 24 人……

平塚：87 年。

D：87 年。

平塚：私、留学で行ってます。

D：ああ、そう。

平塚：はい。復旦にいました。

D：ああ、復旦にいらしたの？

平塚：はい。

D：あの時は主人がね、ちょうど全人代かなんかやってたんですよ、あの時。

平塚：そうですか。

D：うん。それで北京に行っちゃってたの。

平塚：そうですか。

D：それで、北京……上海、私と子どもしかいなくて、

平塚：上海、どちらにいらっしゃったんですか？

D：瑞金。

平塚：え！？ 瑞金にいらっしゃったんですか。

D：うんうんうんうん。

平塚：ああ、そうか。私……あ、ごめんなさい。駐在の時に瑞金の近くにおいて、いたんです。ああ、そう……違いますね。その時はまだ留学生だったので、あの、復旦にいました。

D：いらした？

平塚：はいはい。そうですか。瑞金にいらっしゃったんですか。

D：うんうん。そう。それで瑞金から電話かかってきて、「どうも何かあったみたいだから、行け」って言うわけですよ、取材現場まで。だけど、取材現場まで行ったって、どうせ封鎖されては入れないの、分かっているから。で、子どもを、まあ、友達の家を押し込んで、それで、うちの運転手さんと一緒に、まあ、向こうの方向に向かって行ったら、あの、「ピーポー、ピーポー」いつてきたし、これはいつも行っている病院で、なんだっけ、東方医院だったっけ。なんか、いつも子どもみて、連れていっている病院がちょうど目の前だったから、「病院行こう」って言って。で、病院に行ったら、先生たち、ほら、私、いつもは二人こんなの連れていくからさ、顔見知りじゃない？ 「ああ、いい人が来た。通訳が必要なんだ。来い、来い、来い」とか言われちゃって。

平塚：ああ、確かに。

D：そう。それで、「いや、私、通訳っていうかね、こうこうこういう目的できたから、通訳できない」「取材してもいいからね、通訳してよ」とか言われて、「じゃあ」って言って。

平塚：そうですか。

D：それで、来てる子どもに「今、どういう状況なの？」とあって。そうしたらNHKから電話がかかってきて、「NHKなんですけど」って言って。病院は日本語分かんないからさ、「あんた、電話出て」とか言われて。「でも、私、こうこうこういう者なのでね、すみません、何か答えてあげてもいいけど、でも、読売新聞のほうにちゃんと連絡してくれるっていうことじゃないと答えられない」みたいな感じでバーターをして。

平塚：うんうんうん。そうですよね。そうですよね。うん、そうね。

D: 今はそんな、それで、あの、そんなことありますね。
平塚: そうですか。
D: それで1年いたあとに、北京に上がって、「6.4」が北京ね。
平塚: あ、その時、北京にいらっしやったんですか。
D: うん、うん。北京に2年半いて。
平塚: ああ、そうですか。
D: で、東京に戻って、東京に3……ええと4年ぐらい、3年か、ぐらい。2年半だ。2年半いて、それで香港に行って、94年から97年の返還まで香港。
平塚: そうですか。
D: で、まあ、帰ってきて。それであと主人がもう一回北京……は、SARSの時、また2年ぐらい北京に行って……っていう感じでしたね。うん。出たり入ったり、出たり入ったりですよ。
平塚: うん、そうですね。
D: まあ、だから、帰ってきてからも、あと、主人がまたアメリカにも半年ぐらい行ったりとかしてるんで、まあ、そういうので、こう、なんかいい口実になっていっつかね、真面目に通訳のお勉強もせず今に至ると。
平塚: そんなことないです。実地が一番ですから。
D: 本当に、だから……
平塚: そうですか。
D: うん。そういう……
平塚: いや、でも、貴重な経験ですよ。本当に。
D: だから、通訳家稼働歴はそんな感じなんで、日本にいた時だけ。
平塚: そうですよ。
D: うん。82年から97年までは、ほぼブランクですね。帰ってきて、97年からも、そういう意味では、ちゃんとなんか真面目な仕事もしてないので、
平塚: いえいえ、とんでもない。
D: そういう、なんかね、みなさん……。いや、この、最近は、「この方たちもみなさん、同通なさるのね」みたいなね、みんな偉くなっちゃってね、「おばあさんは、老兵退くのみだ」なんて。
平塚: 何をおっしゃってますか。
D: 本当に。
平塚: 何をおっしゃってますか。
D: 腰は痛いし。
平塚: そうなんですか。
D: そうそう。
平塚: そうなんですか。いやー、すごいですよね。
D: そういう意味ではね、そんな感じですよ。まあ、でも、ね、あの、あとは……
D: あの、実地をするチャンスがあればね、私は怠け者だから実地があればね、勉強するんだけど、実地がなければね、勉強しないから。
平塚: ああ、ああ。
D: で、まあ、帰って来た時にちょっとは、少しは逐次だけだから、会議だとか、化学兵器のこととかもちょこっとはさせていただいたけど、まあ、「あのおばちゃん、ちょっと向かないな」って思われたんでしょうね。そのあとの依頼がこないから。うん。まあ、それはだから、会議は、「もう、あの人は会議の時代ではない」と。「あの人はエスコートさんね」、の、「エスコートのどさ回りの、荷物持ちのおばちゃんがちょうどいいだろう」というふうに思われているに違いないと思う。うん。
平塚: そんなことないですよ。会議はあまりされないんですか？

D：会議の依頼なんかこないですよ。

平塚：そうなんですか。

D：皆無ですよ。くればさ、するけどさ、こないからさ。

平塚：そうですか。そうですか。

D：そう。「会議」って言われて、最近、なんか会議ってやったことない。会議なんかないですよ、最近、本当。

平塚：ああ……

D：で、随行通訳とかね。ほら、あの、こういう、最近のはさ、これ、11月、今年のでしょ。ううんと、北京大学の随行でしょ。衆議院のも随行でしょ。こんなもの、別になんともない。会議とかなんにもない。みんな随行ばかりですよ。

平塚：ああ……

D：これは、あの、会議っていうか、講習、講演会？ 講習だわね。うーん……でも、これなんかね、石炭グループだって、これだって随行でしょ？ 随行ばかりですよ。会議なんか、お声、なんにもかかかんない。

D：そう。だから、気の張るものはなんにもやってない。

平塚：ああ。いやいやいや、ある意味で、随行も気が張りますもんね。

D：いや、その……こういう交流会議なんていったって、別にね、たいしたところに行くわけじゃないし。大きな会議……これのあと、何かやったかな？ これのあと、まだ書いてないのがいくつかあるけど、だけど、そんな会議っていう会議もな……。で、最近、特にね、あの、よくね、前はそのけ……。あ、そう。ついこの間もね、日経協の仕事をしたんですけどね、日経協の仕事も……。日経協なんて、大昔から私は日経協は知っている人たちいっぱいいたしね。と思ってたら、あの、だから、で、日経協から通産省のほうによく紹介が行って、通産省の仕事をしていたことがあって、2年……でも、これ、あまりスケジュールが合わなくて受けてないんだけど、だから2年ぐらい前もあれしてたし、まあ、ついこの間もまた連絡があって「どうですか」とかって言うてくださるから。ただ、予定が合わないんだけど。だから、当然、その、これ、総務のほうから連絡がくるんだけど、業務部のほうも、当然、総務から連絡が行ったと思ったわけ。今度のは業務の仕事だったから。そうしたら、「いや、ご紹介いただいたのはね」、Sさんってご存じ？

平塚：え？

D：Sさんってご存じ？

平塚：Sさん。

D：知らないかな？

平塚：あ、存じ上げないですね。

D：まあ、うん、その、ある、「その方からご紹介いただきました」っていうから、「えー！？」って言うて。私、昔からね、けい、経済協会は、あの、さんざん仕事していただいたしね、わざわざ彼女から紹介してもらってね、仕事ができるなんていうところだって意識がなかったからビックリしたんですけどね。うん。まあ……

平塚：そうですよね、ずっとね、やっていらっしゃるんだから。

D：そう。そう。だから、今、経済協会は、だから、総務と業務が全然、こう、別だから、

平塚：そうなんですか。

D：みたいな感じなん……「ああ、そうなんだな」と思って。だから……あ、まあ、それ、総務のほうからの紹介は全部、要するに通産のほうに行くわけ。経済産業省のほうへの紹介。だから……で、またそれが極端な話で、「すみません、来週お暇ですか」。ひどいの、なんかね。「すみません。アジアプレスなんとかで、あの、経産大臣が、あの、フィリピンまで行くんですけど、行ってくれますか」とか言うの。それで、「はあ？

私がフィリピンまで行くんですか？」って。「そうです」「分かりました。じゃあ、ご一緒します」って言って、行ったんですよ。行ったんだけど、行って、会談キャンセルになった。

平塚：ええー！？

D：会談キャンセルになって、ちょっと、それこそ……会談たって、もうほんの、それこそ、立ち話の、この間の、誰だっけ、野田さんとオバマの話じゃないけど、誰？ あの中国、胡錦濤の話、5分どころの騒ぎじゃない。それこそ1、2分の立ち話だけみたいなの。

平塚：そうですか。

D：そんなのもあった。でも……そういうのもありましたよ。

平塚：そうですか。

D：だから、「私で、そんな、ね、大役、済ませられるのかしら」なんて思うけど。

平塚：いやいやいや。とんでもございません。

D：で、そんなのとか。あとは、忘れられないのは、あの、亡くなった中川昭一さんが大阪万博、名古屋万博の時、呉儀が来たのね。

平塚：ああ、そうですよね、そうですよね、はい。

D：うん、うん。で、あの時に、名古屋のほうに行って、「通訳してください」って言われて行って、目の前でね、お母さんがね、息子をあやすがごとくだった。うん。「あんたもね、若い時はねえ、あんなだかなんか、将来、有望なあれだと思ったら、まあ、いつの間にか経済産業大臣までなって良かったわね」みたいな、そういう……。

平塚：そうなんですか。

D：「おめでとうね」みたいな、なんかもうね、本当に……

平塚：本当ですか。そうですか。

D：そうそうそう。そういうような、そういうような……まあ、だから、本来ならばさ、私のような女がするべきでないような、なんか、そういうのを、時々ね、思いもかけない経済産業……

平塚：本当に外交の、本当に前面に立ってという感じですね。

D：ね。だから、本当は、だからそんなもの、すべきない、じゃないんだけど、

平塚：いやいやいや。

D：そういう時の声が突然かかってきたりはあったんですけど、まあ、もう今後、もうないと思いますけどね。

平塚：そうすると、結構、やっぱり、立ち位置としてはどんな感じなんでしょうね。中国側、日本語側。その、通訳者の立ち位置っていうか。

D：中国の人を表現する時は中国の立ち位置。日本の発言する時は、当然、日本です。だけど、私たちに求められることは、基本的には、日本語のものを中国語にすることが多いでしょ？ 中国語のものを日本語にすることって、私、ほとんどないですよ。

平塚：ま、どちらかという、クライアントさんは日本側という形になりますね。

D：そうですか。

平塚：そうですね。

D：日中……中国にやとわれたことはないですね。

平塚：そういうことですよ。ということで、まあ、立ち場はやはり日本の発言をやっていうことですよ。

D：うん。うんうんうん。

平塚：まあ、いわゆる役割としても、どちらかという日本側に立った……

D：役割としては別にどっちに立つということはないでしょう。その人の何を言うかによってですよ。で、たとえばね、あの、ある時に、ええと、あれはテレビ局、香港のテレビ局の取材だったと思うんだけど、ええと、靖国神社の参拝のすったもんだのあの

時期ですね。で、そのことについていろいろ調べたくて取材に来て。で、ある大学の先生のところと一緒にいったわけですよ。ね。それで、大学の先生たち、それ、それにもう1人、中国人が付いていったわけ。その人は、そういう、その、靖国とかそういうものはすごく、こう、燃えている中国人と一緒に付いて行ったのね。彼女の頭の中は、「この先生はこういうことを言うはずがない」という頭でものを聞いているわけ。

平塚：ああ、先入観だね。

D：先入観で。それだもんだから、私が訳したのに、「あなた、訳が違う」って言ってきたわけ。

平塚：ええ？

D：そこで。で、「訳が違うって、いや、そんなことはね、そう、そう思いませんが」って言って、先生に「もう一回、こう、訳が違うっておっしゃってますけどね、こうこういう意味ですよ……」

平塚：日本語もおできになる方だったんですか？

D：あの、その中国人が？

平塚：その中国人が。

D：うん、少しはできる。

平塚：あ、少しはできる。うんうんうん。

D：少しはできます。だから、それが危ないところなんです。それで、日本の先生には、「先生、こうおっしゃいましたよね」って。『違う』って言ってるんですけど、こうですよって言ったら「そうだ」っておっしゃるのね。だけど、「いや、そんなことは言わなかった」って言うから、「分かりました。先生、申し訳ないけどね、あの、ご納得いただけないのでね、先生、今の話、もう一回言ってください」って言って、もう一回言い直してもらって、それでもう一回、全部きちんと通訳して、やっと納得しましたけどね。

平塚：そうなんですか。

D：うん、うん。だから、そういう……ちょっと、自分としてはそういうふうなんで通訳をね、「意味が違う」って言われて、私は日本語のリスニングに対しては自信持ってますから。

平塚：いや、もちろん、もちろん、もちろん。

D：だから、日本語のリスニングと日本語の言葉のバックにあって意図することっていうのはなかなか表面に出てきにくいことがあるんだけど、それをその探ることも多分できていると思っているので、あの、そういう時に「あなたは間違って通訳した」って言われたのはものすごくショックだったから、もう、ブルブルc自分も震えたんですけどもね。だけど、あの、そういうことは、日本語を中国語に直すことに関しては、稚拙な表現能力でしかないけれども、精一杯意図することを忠実に訳したいと思います。

平塚：うんうん、そうですよね。

D：ただ、中国語のリスニング能力に関しては、最近自信がない。

平塚：ああ、そうですか。

D：うん。うん。あの、一般雑談とかは問題ないんですけど、えー、中国語の故事成語も忘れちゃってる。

平塚：あー、ああ、でも、それはもう……

D：いや、今言った故事成語、四字成語よね。

平塚：四字成語、四字成語。

D：日本語でもそうなの。

平塚：いやいや。

D：日本語でもそうなの。

平塚：ああ、でも、それは本当に日々の勉強ですよ、やっぱりね。それは……

D: うん。もうそういうのはね、もう歇后语なんか全然覚えてないしね。それから、そういう、その、なんていうんだろう、新しい言葉がいっぱい出てきているでしょ？ そういうものに、もうついていけないの。

平塚: ああ、そうですか。

D: そう。で、新しい言葉がいっぱい出てきますし、そのひとつのなんとかワードでも、そのバックにいろんな意味することがあったりすると、もうそういうものもついていけないですよ。だから、あの、中国語の理解力に関しては、最近はちょっと自信がない。100%はない。

平塚: 多分、その中国人の方の意図するところっていうのは、まず、やっぱり先入観からじゃないですか。

D: その方はね。その時は。

平塚: 聞くというよりは。

D: うんうん。その方は完全に先入観を持って、「この先生はこんなこと言うはずがない」と思って聞いているから。

平塚: そういうことですよ。そうですね。たとえば、なんかそういった例で、なんていうのかな、その、まあ、背景が分からないとか、やっぱり文化的に、あの、やっぱりね、背景が中国人と日本人ではやっぱり違うということで、まあ、通訳者がすごく、なんていいですかね、厳しい立場に立たされたとか、まあ、浜本さんが、まあ、そういう経験とかってほかにありますか。

D: 厳しい立場に立ったってことはないんですけど。

平塚: たとえば、訳出ですごく苦勞をされたとか。

D: そういうのは、でも、すべて忘れてしまう人だから。

D: ただ、あの、当然、日本の人が話しながら使ってる言葉で、「ああ、これは日本、バックが違うから、この人は理解できないな」というものは、若干の補足を加えながら通訳するようにしています。

平塚: そうですね。

D: 分かるように。

平塚: そうですね。

D: うん。この間もなんかそんなのあったんだけど、もうなんだったか覚えてないけど。

平塚: その時に、その、たとえば聞き手、まあ、中国人が聞き手だとしたら、やはり日本のそのバックグラウンドが分かってないと、直訳すると誤解を与えてしまうっていうことで、そういうのが……

D: ありますよね。

平塚: 働きますよね。そうですね。それはやっぱり、まあ、たとえば中国人の言葉を日本語に訳す時も同じような感じですかね。

D: うーん、そうなのかもしれないですね。でも、中国人の言葉を日本語に訳すってことって、本当に少ないんですよ、私。

平塚: ああ、そうですか、そうですか。

D: うん、うん。まあ、ついこの間は、中国人のを訳すだけのために雇われていったわね、1時間。

平塚: ああ、そうですか、そうですか。

D: うん。そういうのもありましたけど。でも、まあ、そんなには多くないですよ。多いですか、そういうのは。

平塚: うーん……昔は結構あったような気がするんですけども、

D: ああ、そうですか。

平塚: でも、ただ最近、お互いに、なんていうんですかね、やっぱりコミュニケーション

ヨンの量がすごく増えてきたっていうこともあるし、まあ、たとえばその、ね、あの、会議とかの場であれば、もうお互いにコンセンサスができていないじゃないですか。なので、そういった文化的な差異とか、そういうものが問題になることはあまりないんですけども、たとえば司法の通訳とか、あとは、どうしてもやっぱりその文化がね、あの、うしろにあって、それを訳さなければいけないっていう通訳だと、結構全面的に出て、「ああ、これはちょっと、もう少し解釈を加えなきゃいけないかな」とか、そういうのはありますよね。あんまり最近はないですけども、私も。

D：私は、あの、コンセンサスができていないとおっしゃったけど、ちゅう……基本的にコンセンサスはないという立場だから。

平塚：ないという……ないという立場ですね。

D：そう。そうです。完全に懐疑的な人間です。

平塚：そうですか、そうですか。まあ、あるように見えるだけだと思いますよ、やっぱり。まあ、実際は、本当は分かり合えないかなっていう、あの、気持ちが……

D：絶対分かり合えないと思っている。絶対分かり合えるわけがない、日本人と中国人が。

平塚：そうですか、そうですか。

D：いや、あの、この間もね、ドイツの友だちから電話がかかってきてね、

平塚：ドイツ……

D：ドイツ。うん。留学時代の友だちがいっぱいいるでしょ。ドイツの子もいるんですよ。ドイツの、あの、ベルリン自由大学で、あの、中国語の先生をしている友だちとかね、電話かかってきてね、まあ、地震とか、地震があったりなんかするとすごい心配してくれんのね。「ドイツに避難してこい」とか言う。ドイツ人だからさ、原発はものすごく気にしてね。

平塚：そうですよね。特に敏感ですよね。

D：それで、その時にね、今ね、ドイツっていうのはね、あの、ものすごい中国熱がすごいんだって。

平塚：ええ？

D：で、私がね、「なに、それ？」って言ったらね、「あんたんどこね、孔子学院、ない？」って言うからね、「それはあるよ」って言った。だからね、あの、ドイツはね、それね、そのね、ベルリンだけで8カ所なのか、それともドイツ全部で8カ所なのか、私、よく分かんないんだけど、で、とにかく8カ所でしょう、きっと。ベルリンで8カ所だと思うのよ、多分。とにかくね、8カ所ね、あの、孔子学院があるんだって。それでね、その孔子学院でね、いろいろ、その、ま、中国側の、からのやってる孔子学院もあればね、自分たち、ドイツ人の中で自発的に組織していった孔子学院って認めてもらったみたいなものもあるんだって。だけど、いずれにしろね、託児所からね、養老院までね、中国熱がすごいんだって。それで私はすごいビックリしてね、「私は恐怖だよ」って言ったのね。

それでね、とにかく「何をやるの、そこで」って言ったら、幼稚園にしても、老人のじいさん、ばあさんにしても、その、要するに中国の文化に対してね、興味を持って、それで中国の歌を歌いましょうとかね、それからね、中国のね、

平塚：ドイツ人が？

D：ドイツ人が。子どもが、託児所で。それで、養老院ではね、おばあさんとおじいさんたちがね、筆でね、字を書いて、漢字をひとつずつ書き写したりとかね、その漢字はどうやってできたとかね、そういうことをね、やってるんだって。

平塚：えー！？

D：それで、もうね、じゃあ、私は思わずね、「あなた、大学の教職の仕事がね、食いつぶぐれてなくなってもね、いくらでも、じゃあ、中国語を教えるところはあるわね」

って冗談を言ったらね、

平塚：まあまあまあ、そういうことはそういうことですよ。

D：「私はそこまでいなくても、いくらでも仕事はある」とは言ってたけど。もちろん、そうだろうけど。うん。だけど、あの、すごいんだって。私、だから、中国は今、孔子学院を通じて、一生懸命その共産主義っていうか、思想輸出をしているわけでしょ？ それがもう、ドイツの中ではもう、うまいこと成功しているみたいよ。

平塚：すごい成功ですね。

D：うん、うん。もうすごいホットなんですって。

平塚：日本はまだそこまでいってないじゃないですか。

D：そこまでいってないですよ。日本はだって、尖閣だなんだで、一応、毎回毎回、懐疑的にならされざるを得ないからね。

平塚：そうですね。

D：で、私は「だって日本はこうこうこうだから、そんな、冗談じゃない」って言ったからね、「なによ。そんなちっちゃな島ぐらい。あなた、一緒にすればそれで済むことじゃない」。

D：「おいおい」とか言ってね。やっぱりね。

平塚：そうですか。

D：だから。ということはね、日本は尖閣ひとつにしてもね、そこで何か声を挙げれば、そこに問題があることの証明だからって言って、何も言わないでしょ？ だけど中国は、「なんだ、これはうちのものだ、うちのものだ、うちのものだ」って言って、言ってるから、みんな、ほかの人は「ああ、あんたのものなのに取られているのね」っていう意識持つでしょ？ だから、言わなきゃダメなんですよ。

平塚：そうなんですよ。そうなんです。その通りなんです。

D：ね。でしょ？ だから、そういうことをね……

平塚：発言する人が勝つんですよ。

D：勝つんですよ。

平塚：そうなんですよ。

D：そういうことがね、全然理解できてないの。

平塚：日本人、分かってないんですよ。

D：分かってないんですよ。

平塚：本当、そうなんですよ。

D：ねえ。本当にそうなんですよ。

平塚：本当にね、「沈黙は金」だと思っている。

D：そう。

平塚：沈黙、銅以下ですよ。鉄ですよ。

D：本当に。そう。と言って。そう。

平塚：そうですか。

D：いや、私はだからね、基本的にはね、私の立ち位置としては、そういう意味ではね、あの、日本人として、日本の国を守るための役に立つことの日本人でありたいと思っ
てはおります。うん。あの、決してその、向こうが言うことに迎合してね、「はいはい」
って言うんじゃないでね。あの、特にあの国に関してはね、私、自分の祖父のことをね、
だんだん、引き合いに出すのはおかしい話なんだけど、うちの祖父はね、ある時に
ね、その中国の方からね、あの、佐藤さんについてのものすごく悪口言われたんです
って。佐藤さんとか池田さんに対しての悪口を言われたんですって。それに対してね、「私
はね、あなたたちはそう思うかもしれないけど、私は、あの、なんとしてもね、やっぱ
り日本の、まあ、自由民主党のね、に属する人間だし、日本人だからね、あなたたちは
そう思うかもしれないけれども、私は私、あの、私の前でね、あなたの前でね、私たち

の国のね、そのリーダーの悪口を言うつもりもないし、それをあなたたちが言うものを聞くつもりもない」と、ピシッと言ったっていうんですね。だから、あの、やっぱりそういう立場ってすごい大事だと思うのね。

平塚：そうですね。大事ですね。

D：今の日本の政治家って、みんなさ、あっち行ってもこっち行ってもさ、「うちの政治家はこんなに悪くて」って、言い付けばっかりしてるでしょ？

平塚：本当ですよ。

D：うん。特に私、日教組は大嫌いなんだけど、日教組の、その教科書だって、なんだかんだって言ったって、そんなもの、まあ、採用率がさ、あなた、あの、ひとつなっただって0.03%でしょ？ あっちは、もう一本の新しいのは、今度は竹島があるから4%ぐらいになっちゃうけど、それだけの比率しかないものに対してね、そのパーセンテージをきちんと言わないでね、その、自分たちが使いたくない教科書ができたからって言ってね、言い付けにわざわざ言ってね、向こうでさ、向こうの力を利用して自分たちを対処してもらおうという目的はみえみえだからね、そういうのが腹が立つのよ。だからね、そういうようなことにはしたくない。ただ、だけど、やっぱりあくまでも日本だから、日本の国益を守っていく手伝いはしたいと思うんだけど、なかなか今の人はみんな迎合する政治家ばかりだし。

平塚：そうですね。

D：うん。みんなね、「会っていただいて光栄」みたいな。それが本当に腹が立つんだけど。おかしいですよ。

平塚：いや、本当、その通りですよ。ただ、ね、通訳者って、あの、まあ、出す人……昔はHさんがね、Hさんのお話、Dさんに聞いたんでしたっけ？ なんかなんか話をしてる時に、それはなんか違う……

D：違うでしょうって、そうそうそう、うちの主人に向かって言ったのよ、あの人。

平塚：そうそう、そうそうそう。

D：給料をさ、なんか、この、「いくらですか」とか言われてさ、「このくらい」とか言ったらさ、「そんなことないでしょ」とか言ったよ。

平塚：そうそう、そうそう。それって、やっぱり、ある意味、ちょっとね、通訳者としては多分、逸脱しているところですけども。結構、ど、どうでしょうかね、Hさん、そういう、やっぱり、なんていうのかな、ま、思想的に相容れないものを通訳しなきゃいけない場合ってあるじゃないですか。そういう時って、やっぱり、どうですかね。自分の、その立ち位置としては。

D：自分としては、やっぱり自己矛盾はありますよね。

平塚：ああ、自己矛盾……

D：まあ、なるべく受けたくないよね、日教組の仕事とかね。

平塚：ああ。そういうのは、やっぱり受けないっていうか、形になっちゃいますか。というよりも、受けて……

D：だって、私、別に選べるほどの仕事こないから。

平塚：いやいやいや。

D：だから……

平塚：まあ、そういうニュアンスを……。どちらかという、自分とは思想が合わなくて。

D：でも、今のところ、私の仕事っていうのの中できて、頼んでくださるのは、結局はイクサの仕事がメインだし、うーん……まあ、イクサから日教組の仕事にいかされたこともあるけど。それで、私、イクサに文句言ったのよ。日教組でね、呼んだ人はね、上海でね、すごい反日的な教科書をね、編集した人を呼んできてね、その人のことを「なんて素晴らしい教科書をつくってくれたか」ってね、拍手喝さいのね、そういう学会、

日教組の大会だったのね。だからね、「なんなんですか、あれは」って、ガンガン怒ったことあるけど。

平塚：そうですか。

D：うん。だから、そういうのはあるけど、でも、そうじゃないような、その、仕事はきたことがないですね。それ、それがひとつよく覚えている。ただ、あとね、もうひとつはね、一回、すごく私が仕事をしてよかったなと思ったのはね、江沢民が来たでしょ？ 江沢民が来て、あの時まだね、あの、友好段階ももちろんあれだけど、あの、割ときちっと言える人がまだ生きてたのね。それで、江沢民がね、中曽根さんとか橋本さんとかと朝ごはんを食べて、あの、仲良くしたわけよ。で、友好7団体の人達を呼んできて、それで日中間をすごい批判したわけですよ。友好協会の人たちに対してね。それだもんで、そのあとでね、そのあと、新聞办公室の主になった曹という人がいるんですけどね。今は政協の发言人かなんかな、なんですけど。その彼が来て、彼、ほぼ1人で来たかな。ほぼ1人で来たかな。で、私と……私、彼に3回ぐらい付いたことがあるんだけど、最初の時なんだけど、要するに、外務省としてなぜ呼んだかというのと、その江沢民のその大成功……訪日のあとの結果を分かってもらいたいという目的で彼を呼んだわけ。それで彼を連れていろんなところに行ったわけね。で、彼は最初来たばかりは、「いや、江沢民の訪日は大成功でよかったでしょう」みたいな感じだったの。だけど、行けば行くほど、話を聞けば話を聞くほど、「そうじゃない。大失敗だった」っていうことが分かっていくわけ。

D：特にね、N新聞のね、なんだっけな、Sさんだったかな、誰だっけ。でも、誰かと誰かに行った時にね、まあ、彼……あ、Sさんよね。Sさんだからあれ言えたと思うんだけど、Sさんっていうのは、あの人は、文革の時に向こうに駐在してて、向こうの、あの牢獄に囚われの身になっていた人なんですよ。文革中に囚われちゃったマスメディアの人なんですよ。で、それだもんだから、で、その、ハッキリと言ったね、彼はね。「あんたね、江沢民っていうのはなんだ。ひでえ奴だ」と。ね。「靖国神社の参拝だなんだって、中曽根が始めたことじゃないか」と。「あいつらと飯食ってね、仲良くしておいてね、うちたち、こんな友好7団体はね、どれだけ中国の日本の関係改善のためにね、努力をしてきたんだ」と。「それなのにね、よりもよってね、7団体の人間をね、集めて、それも立食で集めておいて、立たせておいてね、それでね、あんたたちはね、日中友好のためにはね、あの、靖国のこととか、ものすごい批判してね、何の役にも立たなかった」みたいな話をしてね、「もうね、友好団体の人はね、『私たちの今までの努力はなんだったんだ』って言ってね、非常にカンカンに怒っている」ということをね、ズバリ言った。そうしたらね、そのあとね、あの、江沢民の対日姿勢が若干変わりましたよ。

平塚：はあ……

D：うん。若干変わった。だから、あれはね、あの、外務省はね。あの、找対人でね、彼に、あの、来させたということと、彼にアレンジして話を言える人をアレンジしたっていうことね。

平塚：そうですよね。

D：そう。それによって、それでやっぱり、中国の対日姿勢が若干でも変わるっていうこととして、あの、非常に役に立ったと思うし、意義のあることだったと思いましたよ。うん。まあ、そういう……。ちょうど、なんかね、ちょこっとちっちゃなね、仕事の役割をね、させてもらったのはね、ありがたかったなと思います。

平塚：そうですね。なんかスカッとすそう。通訳してても。

D：でも、すごく大変だったの。

平塚：初めてだったんですか？

D：えっ？

平塚：あ、そ、その時ですか？

D：だって、結構神経遣うでしょ？

平塚：ええ。まあまあまあ、確かに。

D：言葉はね。

平塚：確かに言葉はそうですよね。

D：そう。そう。そして、だって、外交政策が変わってくるんだから。

平塚：そうですよね。うん。

D：で、あ、会ってくる人たちっていうのは、あの、森ビルの社長さんがまだあのビル建ててない時だからさ。

平塚：ああ……

D：うん。ちょうどこれから建てますとかっていう話の時だったりしてるし。

平塚：そうですか。

D：うん。はまっちゃう前かな。うん。なんかそんな時だったりとか、なんかいろんな、やっぱり偉い人のところに会いに行くし、話は結構、きわどい話はきちんとするから。うん。私、だからね、そっちのほうかね……会議ってね、まあ、仕事がかないのもありますけどね、あの、自分……それはね、あの、私、前にね、大阪の人でね、通訳、すごい上手な人が通訳してね、細見さんってご存じ？ 細見ゆかりさんっていう人がいるんだけど。すごく上手なの、中国語。それでね、「ああ、この人、上手だなあ」と思ってたのね。そしてね、そしたら彼女がね、「私、同通しないんです」とおっしゃるわけ。「え、私と同じこと言う人いるんだ」とか思って。で、結局、だから、あの、まあ、私は慰められたところがあったんだけど。

でも、私、なんでね、あの、こういう仕事をし続けているのかなって思うとね、やっぱりね、あの、人を観察するのが面白いのね。

平塚：ああ……

D：うん。そこがやっぱりね、あの、一番の楽しみでやってるんじゃないかなっていう気がする。だからといって、その人のこと覚えているわけじゃないんだけど。要するに、その、ま、できない人がそんなようなことを言ってね、その、あの、ブースの中に入っているとさ、その、もちろんそれはそれで、その、技巧的に、それから、それできるかできないかという意味での満足感は多分あると思うんだ。だけど、その、そこで終わって、人との接触はきつとないんだと思うの。ブースで、「はい、終わり」で帰っちゃうでしょ？

平塚：うん、そうですね。

D：そうすると、私がやっぱり興味を持っているのは、そこじゃないんだよね。私はやっぱりね、その人たちがどういうものを考えたりするのか、血の通った人間なのかとか、そういうことのほうが面白いの。だから、その楽しみでやってるんじゃないかって気がする。その間なんかは、フェニックスTV。

平塚：フェニックスTV。はい。

D：そこの、あの、まあ、みのもんと池上彰を足したみたいな人に……

平塚：あー……、あの、なんでしたっけ。オウム持ってた方ですよね。

D：Pっていう人です。に、ずっと随行してあっちこっち、

平塚：そうなんですか。

D：うん。あっちこっち行って、それでいろんな話をしたんですよね。だから、そういう時に、まあ、たとえばMさんのところに行ったりとか、それから、あの、なんだ、うーんと、面白かったのはあれ、海上自衛隊行ったりとか。そうすると、そこで、その、海上自衛隊の学校の校長先生が出てきて、いろんな話をして、日本と中国の軍事交流の話とかしてくれたりとか、やっぱりそういうのが面白い。

平塚：ああー……

D：うん。あ、こう……日本と中国は対立しているようなところもあるけど、その実、それぞれの間で、こういうふうな形で相手を、まあ、観察してるというか、交流を持ちながらね、警戒しているというか、そういう交流もあるんだっていうのが分かったりとか。私はそういうのが好きだね。

平塚：それって、おじい様の血筋ではないですかね。

D：なんで、なんで、なんで。どうして。

平塚：そういう、まあ、なん……やっぱり。やっぱり、その、なんていうんですかね、ま、外交じゃないんですけれども、やっぱりそこに魅力を感じるっていうか。

D：そこに魅力を感じる。ああ。うん。

平塚：うーん。まあ、やっぱり、外交と言ったって、人と人との交流。交流って言ったら、いろんな交流の形がありますけれども、なんかそんな気がしますね。「言語」というよりは、まず「人」ですよ。

D：うん。そうそうそうそう。

平塚：やっぱり、政治の世界もそうじゃないですか。まあ、もちろん、言葉を使って交流はするんですけれども。なんか、なんか、根っこにそういうものが……

D：あるのかしら。

平塚：もしかしたら、Dさんに。

D：それはどうか分かんないけど、でも、とにかく、あの……まあ、多分、あの……同通も何回かはやったことがあるんですよ。で、多分、

平塚：あまり魅力を感じなかったんですかね。

D：うーん……うん、それは機械の中でしかないし、それは、なんていうんだらう、いろんなものを積み重ねて……たとえばね、契約、条約を結ぶ時に、条約の下準備はいっぱいやっていくわけじゃないですか。で、案文の原稿が出来上がって、それなりに提携するとすれば、多分、同通の部分って、その案文の条項だと思うの。ね。私はその下のほうが面白いの。

平塚：だから、本当に、その、なんていうんですかね、最初の交流の、交流っていうか……

D：詰めている最中。詰めている最中ね。

平塚：そう、そうですね。

D：うん。

平塚：ですよ。

D：そこが面白いっていう気がする。だから、その最後の仕上げで、ただ読み終わっ……読み終えて、サインっていうのは、あまり興味がない。

平塚：すごく分かる気がします。

D：うん。興味がないって言ったら、「あなた、できないからそういうこと言ってるんでしょ」って言われたら、もうそれで終わりなんだけど、でも、その、できる、できない……仮にできたとしても……まあ、もう、本当に、そろそろ、あと数年で60ですからね、あの、そうなる、もうすぐ人生の仕上げ、仕上げですからね。そうなる、やっぱり、その記憶力……。それは楽なことあるわよ、同通って。いちいち全部覚えてなくてさ、

平塚：そうなんですよ。

D：言ったのをピーピー、ピーピー言ってくるから。

平塚：どんどん訳出していくことですからね。

D：そう。楽なところはあるのよ。だけど、うーん……そういう意味では、同通のほう年寄りには向いているのかなあっていうところあるのかなあ。本当に覚えているの、大変になってきてはいるんだけど。うーん、だけど、その……

平塚：でも、そういう部分じゃないですね。起稿の部分じゃなくって、やっぱり興味の分野で、やっぱりそういうの、人と直接接するほうが……

D: そうそうそうそう。好きなの。

平塚: 興味があるっていうことですよ。

D: うん。自分……「ああ、この人はこんなふうに考えているのか」とか。だから、あの……。あのさあ、いつだったかね、ある通訳会社のね、あの、忘年会の時に、あの……問題が出て、こっち行ったり、こっち行ったり、こう、問題、正解が出た人はだんだん残っていく、そういうのを……あなた、いらしたかしら？

平塚: いや、全然。

D: そういうのをやってね、それで、名だたる同通の方たちがみえてたわけね。それで、その、まあ、中国語だけじゃないから、ほかの言語の人たちもいたんだけど、質問の中で、えー……「北京ダックと上海ダックはどこが違うでしょう」という話になって、で、ええと、「皮だけじゃなくて肉もついているのは北京ダックですか、上海ダックですか」みたいな、そういう質問だったの。

平塚: はい。

D: ね。

平塚: はい。

D: あなたもお住みになってらっしゃったし、私も住んでるでしょ。分かる、少し分かるでしょ。北京ダックは肉も食べるけど、上海は皮だけっていうのがあるでしょ。ところが、その名だたる通訳さんたちは、同通はやるけども、生活は経験がないの。

平塚: えー！？

D: 生活経験がないの。だから、

平塚: そうなんですか？

D: Oさんに経験ある？

平塚: あー、確かに。

D: あと、あの、なんだっけ、あの人。旦那さんが中国人の人。ええと、誰だっけ。えー……なんていったっけ？

平塚: え、おいくつぐらいの方ですか？

D: 平塚さんと同じぐらいじゃない？

平塚: そうですか？

D: ええと、なんていったっけ？ 名前、名前に出てないかな。ええと……そんなこと言っちゃいけない……

平塚: ご主人が中国人の？

D: Sさん。

平塚: ああ、Sさん。

D: 生活経験があったとか、私、知らないわよ。

平塚: Sさん、でも、確か、北京に結構長くいたような……

D: 長くいてらしたの？ そうなの？

平塚: ええ。

D: まあ、じゃあ、Sさんだったかしら、ほかの人だったかよく覚えてないけど、とにかくね、そういう、まあ、同通をなさる有名な人たちが何人……3, 4人残ってたの。あと外人……がい、ほかは英語の人たちだったの。その3, 4人が全員答えられなかったの。英語の人が残った……

平塚: そうなんですか？

D: 情けなかったよ。

平塚: えーっ？

D: だから、文化のことが分かってないのよ。言葉はできても。

平塚: そうなんですか？

D: うん。文化が抜けてんの。言葉ができても。

平塚：あ、でも、そうかもしれない。同通だけやってた方、そうかもしれない。

D：うん、うん。だから、言葉、ね、ふれあいがないから、それで帰っちゃうわけだから、それはそれは分かるわけじゃないよね。私はやっぱりもともと日本文化専攻だから、文化興味あるから。

平塚：そうですね。

D：うん。

平塚：あ、でも、それはちょっと由々しき問題ですね。

D：うん。だから、私はビックリしたのね。「あの人たち、なんでこんな簡単なことを答えられないの?」と思って。「ああ、そうか。この人たち、生活経験ないな、そう言えば」と思って見たんだけど。分かんないけど。だから……

平塚：だけど、本当に表裏一体じゃないですか、言語と文化って。

D：うん。

平塚：と思うんですけれどもね。だから……ああ、でも、それってちょっと怖いんですね。

D：うん。

平塚：えー、でも、サイマルとかではそういうことを、訓練の時に教えてないんじゃないかな。

D：そんなこと教えないでしょう。

平塚：教えないんですかね。

D：教えないでしょう? だって、そんな……文化なんて教えないですよ。ただ言葉勉強するだけなんだから。

平塚：そうなんですか。結構、私、ISSで今、プログラムを、あの、つくってるんですけど、結構そういうのを知るようになっていうのを意図して、実はつくってるんですよ。で、まあ、ちょっとね、普通の訓練を受けるだけで来てる子たちには、ちょっと「え、何、これ」っていう、ちょっとあまりね、あの評判は良くないみたいなんですけれども、

D：ああ、そう。

平塚：でも、やっぱり、それが分からないと、本当の通訳はできないんじゃないかなって……

D：だって、それぞれの文化の違いっていうのは、ものの考え方の違いのバックグラウンドですよ。

平塚：そうですね。そうそう、そうなんですよ。バックグラウンドですよ。

D：そう。うん。

平塚：はー……でも、そうか。え、でも、それって、すごい恐ろしいことを私、今日、聞いてしまったような気がする。

D：私はちょっと啞然だったんだよね。「なんだこりゃ?」と思って。

平塚：そうですか。

D：うん。そう。だからさ、まあ、あの、言葉が、言葉……うーん……

平塚：えー、ちょっと怖いんですけど。

D：だからね、言葉の背景には文化的なものもあるし。

平塚：ええ、ええ。

D：まあ、でも、ただ言葉やってるっていうことだけなのか、まあ、ものの考え方は無視したことなのか。

平塚：でも、それってあり得ないですよ。と、私は思うんですけどね。

D：ものの考え方っていうのは、やっぱり文化と密接な関係がありますでしょ。

平塚：そうです、そうです、そうです、そうですよ。

D：で、発言している時に、その発言のそのバックにあるものっていうのは、当然関係してくると思うのね。

平塚：そうです。それをやっぱり含めた訳出しないとイケないと思うんですよ。

D：だから……だから、ちょっと私はあの時はすごいショックだった。「そうかー」と思ってね。ほかの人はどう思っただか知らないけどね。だから、「あー」と思ったんだけど。まあ、でも……まあ、それはね、人の話でさ。悪口になっちゃうから。

平塚：すごく貴重なお話です。ちょっと……不安ですね。それって、日本語＝母語話者＝だからですかね。

D：えっ？

平塚：そういう……日本語母語話者の通訳者だから、そういう考えだったのかなっていう気が、今、したんですよ。中国語母語話者の方は、あまりそういう……でも、やっぱり、「文化が分からないと言葉ができない」っていうぐらい考えらっしゃる方が多いような気がする……

D：そうですか。そうですか。

平塚：私は、あの、独断かもしれませんがね。で、特に日本語母語話者の方って、すごくそういう……

D：日本語ゴガイシャ？

平塚：日本語の母語話者。

D：母語話者っていうのね。

平塚：母語、母語ね。そういう人が今、いるんですよ。まあね、あの、日本で生まれ育った方ですよ。すごくね、あの、ある意味、ちょっと言語と、その文化をちょっと分けて考えてらっしゃるといふか、まあ、若干、そういう方はお見受けしていたので……

D：ああ、そうですか。

平塚：うーん。ただ、中国語のその母語話者の方は、それをね、本当に表裏一体だっというふうに考えていらっしゃる方のほうが、私は多いような気がしたんですね。

D：うん、そうですか。ふーん……

平塚：あの、そういうふうには言わなかったとしても、ま、あの、なんていうか、それが前提にあって通訳をしてらっしゃるっていう方のほうが多いような気がするんですよ。それってちょっと、言語教育といふか、ちよつと問題……ですよ。

D：うーん、まあ……。でも、生活経験なけりゃ、仕方がないことですよ。いや、私はね、やっぱりね、私はすごく恵まれてたなと思います。そういう意味では、生活した時間も長いし、それから、前にね、その向こうで、まあ、フラフラしている時に、ある方がね、あの、一生懸命中国語を勉強しにね、学校通ってらっしゃるんですけどね、だけど話しする相手がいないんです」。住んでいるの、北京なのよ。要するに話す相手がいないのよ。ね。で、そういう意味では、私は友だちがいっぱいいるから、

平塚：そうですよね。

D：そういう意味ではね、あの、こう、分かんないことは何でも聞ける。で、ある程度、文化レベルのある人たちだから、

平塚：そうですよね。

D：ちゃんとそれを、ちゃんと説明してくれる。

平塚：そうですよね。そうですよね。

D：うん。そういう人がいるっていうのはありがたかったんだろうなと思いますよね。

平塚：そうですね。ああ、そうかもしれない。

D：うん。だから、なかなかね、言葉だけ勉強しに行っても、

平塚：あ、すごく分かります。

D：ね。

平塚：すごく分かりますね。

D：「どこ行って探せばいいかしら？」って言われて、「いやー」って言って困っちゃったけどね。

平塚：あ、でもね、本当にね、通訳者でも、留学をしていて、ね、留学経験があっても、本当にね、現地の友人が1人もいないっていう人がいるんですよ。

D：あー……

平塚：私はそれがすごく不思議でしょうがないんですけども、やっぱりそういう方って、本当に事情をご存じないですよ。中国の事情をね。

D：そうですね。

平塚：うん。

D：そうですね。

平塚：その考え方とか。そうなんですよ。

D：うん。だから、やっぱり、そういう意味ではね、知り合いついていうか。みんな、若い友だちはいないけど、みんな、お姉さんたちばかりだけど

平塚：いや、でも大事ですよ、本当に。

D：うん、そういう意味ではありがたいですよ。

平塚：ふーん。そうですか。でも、本当に、あの、貴重な半生ですよ。

D：うん、うん。

平塚：本当に貴重な半生ですよ、本当に。あと、そうですね、あの、通訳をやる上での規範というか、ちょっと大げさかもしれないんですけども、まあ、こういうふうに出すべきだとか、そういう何かご自分で持っている信条みたいなものありますか。

D：その人が言わんとする、意図することを、ちゃんと、きちんと伝えるということですよ。それが一番……

平塚：意図するという事は、まあ、いわゆる、その、言語的に直訳ではなくて、さっき言ったように、まあ、何を言わんとしているのかっていうのを……

D：ちょっと汲み取りながら補充してということですよ。

平塚：汲み取ってということですよ。うん。

D：ただ、それがちゃんと、なんていうのかしら、あの……汲み取らないで言ったら意味が分からないこともあるじゃないですか。ただ、その言っている字面のものをそのまま翻訳したらね、何を言いたい、言わんとしているのか分からないことが、特に日本人の話は多いから。だから、そういう意味で、やっぱりその人が言わんとしていることは何なのかを確認しつつもね、補充しながらいかなきゃいけないというのはありますよね。

平塚：ある意味、その、やっぱり、まあ、文化的な差異とか言語的な差異を、まあ、ある程度はご自分の解釈にのっとして、少し付け加えたりとかしながらっていう……

D：あります。

平塚：そういうことですよ。

D：そうです。だから、だから私はそういう意味でも、同通つていうのは何かしらと思うのね。だって、あんなのね、あんなのって言ったら怒られちゃうけど、私の性格にやっぱり向かないんだと思うのね。あの、ある程度、完全に100%できないのは当然なわけですよ。それを、まあ、そのままやりっ放しっていうかね、その……

平塚：ええ、ええ、流しっ放し。

D：その……、それに対してね、あの、あの、何とも思わずに、過ごさせてしまうわけですよ。私、絶対そういうの、許せないから、あとで、もう、すごく嫌な思いするだけなのね。それ……

平塚：ご自分が納得いかないっていうことですか？

D：そう。絶対に……だって絶対100%できるわけないんだもん。

平塚：うん、もちろんそうですね。

D：ね。で……だから、そういう、そういう……それで、じゃあ、補充できるかっていうと、字面で並んでいるものをね、そのままいくしかないわけだから、補充できるわけがないでしょう？

平塚：できませんよね。

D：でも、絶対あれは限界があるんだし。

平塚：うん、そうですね。

D：だから、本当に「条約文の最後の仕上げ」っていう、私はそういう感じがするわけ。

平塚：確かに、確かに。それを、やっぱり、その、スピーカーの言わんとしていることを100%伝えてあげたいっていう、まあ、それが通訳者の役割だっていうのが根底にあるんですかね。

D：私はそうなんです。だから、あの……ちゃんと、きちんと話ししてくれる人がさ、いさえすれば、その人の言わんとすることをきちんと伝えるということには自信がありますよっていう感じ。うんうん。私にできるのはそれだけよね。うん。その人のを勝手に解釈して何か付け加えてっていうことも、もちろんするつもりもないし、えー、かといって、その人がついた、書いた文章をそのまま、あの、相手が聞いて分かって分かってまいが、ただ読み続けていくっていうこともしたくない。

平塚：まあ、いわゆる直訳調でっていうことですよ。やっぱり、それはご自身が、その、なんていいますかね、スピーカーになり切ってじゃないですけども、

D：一回消化しないと理解できない。

平塚：一回消化してっていうことですよ。そうですね。その意味で、あの……まあ、ある意味、トレースじゃないですけども、言語ではなくて、その思想のトレースをして訳出をするっていうことですよ。

D：そうですね。うん。あの、同通はね、多分ね、私は分からないけど、私が一番最近同通をしたのはね、1982年です。

平塚：82年。

D：はい。82年のね、第二回のね、日本と中国閣僚会議。11月。あ、81年だ。81年の11月。多分、これが日中間では最初の同通。日中閣僚会議第二回、1981年。

平塚：そうですか。

D：これはね、ええと、同通だったんです。Tさんとね、それからYさんと、私と。あと誰だったかな、やったの。

平塚：そうですか。

D：うん。私が一番最初のペーパーだったの。まあ、これが最初で……私、いなくなっちゃったんだ。あとは、もうね、このお腹大きくなっちゃったりなんかでね、でしたけど、多分、これが最初だと思う、同通は。

平塚：そうですか。

D：まあ、懐かしいと言えば懐かしい。

平塚：その時は、どうでした？ ご自分でやっています。

D：その時は……だから、私もその時、一番あぶらがのっている時期だったから。だから、でも、大分準備はしたつもりがあります。

平塚：ああ、そうですか。

D：うん。あの時は準備もして、あの、初めてのあれで。まだ、英語は同通あったけど、中国語は同通なかった時代だから。

平塚：そうですか。

D：だから、あの、その最初の時も……まあ、それ、Tさんだったらもっと、Yさんに聞いたら、「もっと前もやっているわよ」って言われるかもしれないけど。

平塚：そうですか。それは、会場はどちらだったんですか。

D：どこだったんだろう。なんか全然覚えていない。

平塚：ブースが……簡易ブースではないですよ。ブース付きの……

D：ブースなんてまだなかったと思う。

平塚：え？

D：あれ、どうやってやったんだろう。どうやってやったんだろう。でも、一応、閣僚会議だったんだから。

平塚：それなりの場所でしょうね。

D：まあ、それなりのところでやったでしょう？ あそこかしら。あの、六本木の、あの、なんて言ったっけ。飯倉の……

平塚：ああ、飯倉……

D：え、飯倉じゃない。なんだっけ。あの……やー、どこだったんだろう。全然どこって記憶にない。

平塚：そうですか。

D：うん。記憶に……家帰れば分かると思いますけど。

平塚：そうですか。

D：でも、多分、それからじゃないの？ それからみなさん……

平塚：ああ、じゃあ、まだ、やっぱり 20 年だ。経ってない……

D：20 年ですよ、ちょうど。

平塚：ちょうど 20 年ぐらいですね。

D：ちょうど 20 年。そう。81 年だとすれば、ちょうど 20……11 月、今年ちょうど 20 年だ。今月。

平塚：そうですか。

D：うん。今月 20 年。そのへんはね、だから、Y さんとか、あの……

平塚：そうですよね。そうですよね。そうですか。まだ 20 年なんですね。

D：そうそうそう。多分、そのはずですよ。今年、今月で 20 周年なんです。

平塚：そうですか。

D：多分ね。で、私、一回ね、いや、日本に行って、ウロウロ……転勤で帰ってきてね、いつだったかな、一回だけね、なんかね、I S S に頼まれたことがあるの。I S S で、ええと、N さんが引き受けられる前にやってた、あの、私の先生……

平塚：ええと、ええと、ええと、ええと、お名前……

D：映画のキャプションなんか書ける……

平塚：この間、お話をいただいた方。すみません、名前を失念しました。

D：名前、忘れました。女の先生ね。あの先生がやってらした時に、ちょっと I S S にからんだことがあるでしょ？

平塚：ええ。

D：そのあとで、あの、I S S からね、あの、K 先生と一緒にね、翻訳、あ、同時通訳やってくださいますかって言われたのよ。それで、私、その同時通訳の同時通訳たるがね、そんなに日本で普及しているのが、そういうの全然、全く準備、何もなかったの。それで、これいつだ。これ、93 年かしらね。だから、香港に行く前か、北京から帰ってきてちょっとの時に、なんか、ちょっとお手伝いをしたのよ。それでね、K 先生が「なに、この人」って。あなた、K 先生に会ったことあったかな？

平塚：はい。

D：で、なんか、で、「なに、この人？」って、多分言ったんだと思うのよ。

で、もう「ペケ」って言ったんじゃないの。で、それからは、だから……。それから全然、だから……。で、あとはもう、そのあとの同時通訳の仕事は、来ても全部断る。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：うん。だから、もう私はすべては、逐次なら、あの、あの……発展研究センターの主任の講演会でやってはいるんだが、一度はやっているだけ、あの、「逐次ならばレベルの高いものは受けます」と。「だけど、同時通訳の中途半端なものはやりたくない」って言って。あの、J E T のプログラムとかで、どうでもいい会議のね、

平塚：J E T。はいはいはい。

D: どうでもいいような会議のね、同通とかね、それから、そんな、そういうもののウイスパリングとかね、そんなのはいくらでもやるけど、大きな、なんか会議の、その、ああいうのはね、「私はそういうの嫌です」って言って。「気が重いから結構です」って。
平塚: そうですか。

D: で、面白いのは、うーん……特許のことも随分やらせてもらって、特許も面白かったし、あとあの、この20年、30年の間に、みんな一生懸命中国の人が勉強に来るじゃない? そして、やれ「公務員って制度はどうですか」みたいな勉強に来たりさ、それから、「特許の制度はどうですか」とかって勉強に来たりしてさ、教えているうちにみんなが全然、どんどん仕事あれしてさ、みんな全部自分のものになってっちゃう。

平塚: そうですね。

D: うん。そういうのも……

平塚: いや、でも、それってやっぱり、ねえ、通訳者がいたからってという背景もあるじゃないですか。

D: そうそうそうそう。

平塚: そういうことですよね。

D: だから、ああ、時代の変化でね、今、みんなね、公務員でね、なんて言って威張ってるけどね、昔、私が通訳して教えたね、教えた結果だとかね。

平塚: そうですよ。そうですよ、そうですよ。そうですよ、そうですよ。

D: そう。税制だとかね、みんなそうだよなって思ったりする。

平塚: うんうん、そうですよね。

D: うん、そう、そう。

平塚: もうね、多大な貢献をされてきているんですよ。

D: 多大な貢献……全然そんなことはないんだけど、でも、みんな中国の進歩ですよ。そういうので一生懸命吸収していった進歩なんだろうなあと思うのよね。

平塚: そうですよね。

D: まあ、面白いですよ。

平塚: うーん……。浜本さんの、その通訳者の役割感っていうのは。

D: 役割感?

平塚: うん。どういう役割を果たすものが通訳者だって思ってるじゃないですか?

D: ?

平塚: もしくは、ご自分が果たしてきた役割でも結構ですし。

D: 私、何も別に役割を果たしてきているとは思わない。ただ、自分の興味?

平塚: 興味……。

D: そう。興味のみですよ、私の場合は。興味だけだわね。余計な……。最近は何、もうほんと、ババタリアンだから、一言多いわけ。

平塚: ええっ?

D: 自分で、自分でね、本当は諫めなきゃいけないなっということ、すごくつくづく思ったりするんだけど。

平塚: 一言って? え、でも、訳出の時?

D: いえ、そうじゃなくって。

平塚: そうじゃないですよ。

D: その……エージェントの人に対してとか、に対してこんなことは言わないほうがいいんだろうなって思うところもね、言うがために嫌われるんじゃないかなって思うところはあつた。

平塚: エージェントに対して?

D: うん。エージェントにも対してだし、エージェントじゃなくて、ま、イクサにしてもそうだけど、うーん、余計なことを言わないほうが、ただ黙ってやっていたらいいつ

という話だとも思うし。

平塚：まあ、そ、それは中身にもよりますよね。言わなきゃいけないことも中には……

D：たとえばね、あの、こういう時だったらどうします？ あの、この間、そういうことがあったんだけど、まあ、まあ、中央党校の人が来ますよね。それでまあ、みんな党校でいろいろ勉強している、ある一定の基礎のある人だし、地位もある人だし。地位があるっていうことは、バックグラ……バックがあるっていうことだから、それだけ背負っているものもでかいし、それだけコレもあるし。ね。そういう人が来て、それに対して、まあ、某大学の先生にも講義いただいたりするでしょ。で、講義してもらって、し終わったあとでね、「あの先生、なんだ」と。「あの先生の内容、全く内容がなかった」と。それでね、あの、「あんなもんだったらね、もう二度とあの先生の授業は、僕たちの次から来る人、聞かせる必要は全然意味がない」って。「レベルが低過ぎる」と。「準備、何もしてこなかったんじゃないの」と。あー……ね。そういう反応がいっぱいあったりするわけよ。どうします？

平塚：一応、でも、あの……お伝えしますね。

D：やっぱりお伝えするでしょ。

平塚：うんうん。

D：いや、お伝えすべきかな、どうかなと思いつながらね。

平塚：あの、そういう背景があるっていうことだと、結局、お伝えしないと、それこそ国益をね、に影響するわけじゃないですか。そういうことが分かった時はお伝えすると思います。

D：うんうんうんうん。それ、すごく迷ったわけ。

平塚：はい。

D：有名な先生でもいらっしゃるし。

平塚：あ、あ、そうなんですか。

D：そう。有名な先生でいらっしゃるしね。それでどうしようかなと思ったんだけど、やっぱりそういうふうには、まあ、あの、直接私のところに言ってきたわけではないけど、私のほかにもエスコートさん何人もいるわけだから。で、外務省から来ているのは私だけだから。で、ほかのエスコートはみんな J I C E とか J I C A のあれだから。

平塚：ああ、そうなんですか。

D：そうすると、彼らが意見、仮に出したとしても、外務省に直接反応として出ないわけです。

平塚：あー、ないですよ。ないですよ。

D：そうすると、J I C E 関係、J I C A 関係で行くかどうか。まあ、来年、J I C E、J I C A が果たしてとれるかどうか分からないから、そして、その次っていうことになると、また日中友好協会経由で、友好協会のアレンジでっていう話になったら、もっと分かんない、わけ分かんなくなるから。っていう状況のもとにおいてね、言うべきかどうか、すごく迷ったんだけど、まあ、書いた。

平塚：はいはい。

D：書いたのね。

平塚：そう、あの、そうですね。レポートありますからね。

D：うん。特に、今度、ほら、レポート厳しくなったでしょ？

平塚：そうですね。

D：ね。それだもんだから、仕方がない、これはね、あの、そちらで送りをしたほうがいい、外務省のほうへ伝えないほうがいいと各自判断されれば、それでも結構ですけれどもっていうことで。

平塚：そうですね、そうですね。はいはい。

D：ただ、こうこうこういう意見があったので、まあ、再考されるなり、あの、内容を

ね。っていうのはね、本当に隔靴搔痒のね、話なのよ。つまり、いろんな話、日中間の関係について話。尖閣は一個も出てこない、尖閣が。尖閣の話、一個も言わないの。尖閣の「せ」の字も言わないの。それで日中の関係の話をしますなんて、まるで、このオーバーからここ搔くもない、ここら辺にもなんにもないよ、それじゃあ。

平塚：東大の先生？ 東大の先生……あの先生？

D：もちろんそう。

平塚：ああ、そうですか。

D：だから……私はね、だから、そこにつけ加えてね、だから、そこはもう本当に、もう彼、外務省に出したかどうか知りませんよ、それはね。やっぱり、彼らは日本の立場を勉強する機会として来ているわけで、中国の立場、中国の見方をここで勉強しているわけだから、日本に来たら、日本の見方をきちんとね。これは日本の、まあ、「いろいろなみなさんのご意見あるかもしれないけれども、日本はこういう立場で、このようにものを考えていますということを断わって、日本の立場をきちんと説明する機会として利用すればいいんじゃないですか」とまで書いて出したの。それが、だから余計なひと言じゃないかなと思いつながらね。

平塚：まあ、でも、それはね、そのまま外務省に上げる、上げないはI協会のことだからね。

D：I協会のことです。そう、そう。うん。そう。だけど、ちょっとね……むしろ、お金が無駄なんですよ、逆を言えば。お金出して呼んでんだもん、日本が、外務省が。ね。お金出して呼んでる分だから、こっちで説明する、話を聞かせる、向こうが聞く権利があるわけ。聞かなくていい義務があるわけ。

平塚：そうですね。その通りですよ。

D：でしょ？ だから、こっちは……向こうは、あなたたちにね、いろんなあなたたちなりに勉強しててね、あなたたちはいろんな意見あるでしょうと。日本の立場、日本は勉強……日本ではこうなんですよっていうことを、ちゃんと区切っておいて、それに対して意見あったって、別に、あの、それはあなたたちの話で、うちはこうなんだからっていう形でね、説明すべきなんです。

平塚：そうですね。その通りです、本当に。いつも思いますよ。

D：だからさ、私はよ、オバタリアンは余計なことを言っちゃうって。

平塚：いやいや、余計じゃないと思いますよ、それは。

D：でも、通訳さんがやることじゃないですよ、そんなこと。

平塚：というか、基本……ある意味、イクサからの依頼って、本当に純粋な通訳だけで終わらないことがあるじゃないですか。確かに訳出する時はそうなんですけれども、だからやっぱりレポートとかも書かせるわけじゃないですか。そういう意味では、本当に役割を全うしようと思ったら、やっぱり書くと思いますよ、そういうことは。本当に、本当にその、いわゆる会議の通訳だけではないと思うので。ほぼ、それって、頼まれた浜本さんが本当の役割を果たしたいって思うから、そういう行動に出たんじゃないですか。

D：うーん……

平塚：という気がするんですけど。

D：というか、せっかくお金を使って呼んでいるのに、もったいないと思うから。

平塚：そうですね。うん。外国からね。

D：彼らも「日本の立場を聞きたい」という意識はあると思うのね。だから……

平塚：そうなんですよねー……

D：そう。で……

平塚：すごくそういうケース、多いですよ。

D：うん。

平塚：ですよね。

D：中高生から話してるって言うから。中高生やら、青年指導者やら何かに全部、全部、彼がやってるんだとすれば、

平塚：そう、そう。そうみたい、そうみたい。

D：ね。

平塚：そうみたい。

D：友好協会、彼なんでしょ？ きっと。だから、そうだとすればね、問題大きいなと思ってね。お金の無駄だと思って。「オバタリアン、うるさい」と思われるのは覚悟でね、書いたんですけどね。まあ、いや、私はだから……

平塚：それは最近の話ですか。

D：つい数日前ですね。

平塚：ああ、数日前。

D：あ、数日っていうことはない。1カ月以内ですけどね。

平塚：ああ、そうですか。

D：うん、うん。最近ですね。なんか……それが、ね、彼らの考えと違っていいんですよ。いいんだけど、日本の立場は日本の立場としてきちんとね。

平塚：うん、そうなんですよね。

D：それはね、やっぱり、ちゃんと外務省としてきちんと話すべきだと思う。

平塚：そうですよね。そうなんですよね。

D：うん。

平塚：浜本さん、外交官のほうが向いてたんじゃないでしょうか。

D：まさか。

平塚：本当に。

D：いや、うちは、ほらね、夫婦でこんなだからさ。

平塚：そうですか。うーん……

D：うーん、本当にね。

平塚：そういう意味で、やっぱりそれって、多分、Dさんの中で「通訳者だから」っていう、その、ある意味、多分、その基本をもとにそういうふう考えられているんじゃないでしょうかね。だから、「そういうことは言うべきではない」とか。そういうのがもともとあって、でも、止むに止まれず書いてしまったっていうことですよ。

D：うんうん。うんうんうんうんうんうん。

平塚：ですよね。

D：それは、私は通訳者は別にそんなことは言う必要はないと思っている。そんな外務省なり、雇われているところのやっていることに対して口をはさむ必要性は全然ないと思う。

平塚：そうですよね。そうですよね。

D：言うべきじゃないと思う。だけど、日本の外交ということを考えると、ましてお金、税金を使ってやっている事業であるということを考えると、それはやっぱり向こうも、向こうもね、「また次から来る時、同じ話、こんなの、また来る時間かされたらかなわない」って言ってるかも、言ってるのもあるけども。だけど……と同時に、やっぱり、と思うんです。だから……

平塚：それってやっぱり、ある意味、違いは違いとして、その、ね、受け入れられない点は受け入れられない点として、やっぱり、とりあえずさらけ出すべきっていうのがあるんじゃないですか、Dさんの中で。

D：そうかもしれない。

平塚：そのコンセンサスうんぬんっていうよりも、やっぱり違いは違いとして、まずは認めなきゃいけないっていう。そこですよ。そうなんです。その……そう、そうな

んですよ。なんだけど、身分としては通訳者だから、

D：一通訳者が言うような、口はさむようなことではないですよ。

平塚：ね、そういうことなんですよ。

D：そう。だから、ちょっとね……

平塚：でも、それってどうなんだろう。あの、中国の通訳者の方って、まあ、結構ね、それこそ外交部の方がそのままやってらっしゃるケースがありますけども、もうちょっと違う役割意識なのかなっていう気がするんですけども。ある意味、その外交の一端の通訳者としても両方担っているというか。

D：でも、この間来た女の子ね、「今年の8月までね、筑波に1年間来てました」っていう女の子だったの。もう典型的なね、その一人っ子政策の、あの、お家も結構恵まれたお家の子どもではないかと私は思ったんだけど。プラザ合意の話になって、その、団長がね、挨拶で広場協定でなんとかかんとか言っているわけですよ。全部すっ飛ばし、カット。で、あとで、で、彼女は、彼女、そのメンツがあるんでしょ。私には聞けなかったんだと思うんだけど、あとでほかの人にね、「すみません。広場協定ってなんですか」って聞いたって。「それはどうやって訳せばいいんですか」って聞いた。「それは一体、そのあと、どうなったんですか」って。「日本はプラザ合意のあと、どうなったんですか」って。

平塚：え、え、通訳者ですよ？

D：うん。27歳の通訳者。まあ、無理もないなあと。うちの子どもと一緒にだから。うちの子どもにプラザ合意なんて知ってるわけない、あの子たち。

平塚：え、でも、通訳者として付いてきているんですよ。

D：うん、うん。うん。

平塚：そんなのありですか？

D：うん。今はそうなんです。

平塚：そうですか？

D：そう。今はそう。それでさ、このね、もそもそしたおぼさんに対してね、だから、きっとその……あれ、ルートのアレンジがね、あの、彼女は気に入らなかったと思うのね。

平塚：えー？

D：お買い物のルートについてはね。それとは全然別な話でね、お買い物のルートで。あの、買物したいのは、あの、「あなたが買物したいんですか」って言ったら、「そうじゃなくて、団長が買物したい」って言うわけ。で、「団長が買物したいの、何が買物したいんですか」って言ったら、ええと、まあ、マツキヨみたいところで髪の毛の染めるやつね、買って、それから背広を買って、それから文房具屋さんに行って筆を買って、それからなんだっけかな。あと、婦人用のバックって言ったわけね。「分かりました。じゃあ、銀座に行きましょう」って言ったわけ。そしたらね、自分も銀座行ったことがあると。言うの。「いつも行くのは銀座だからね、銀座はね、いいです」って言うわけね。

平塚：自分がでしよう？

D：そう。「銀座はいいですって、だけどね、じゃあ、銀座じゃなくてどこに行くんですか」って言ったら、「新宿どうですか」「渋谷どうですか」って言うわけよね。「ちょっと待ってください」って言って。渋谷でしょ。紳士服でしょ。まして、この中年のおじさんが買うんでしょ。「渋谷ダメです」って。

平塚：渋谷。

D：「新宿もダメです」って。ね。それで、「そして、また文房具屋行くんでしょ」って。銀座ならば、今ね、松屋が、あ、じゃない、阪急がね、紳士館になったし、伊東屋もあるし、

平塚：まあね、ありますよね。

D：ね、マツキヨもあるし、「だから銀座行きましょう」って。あなた、それでビックカメラもあって。で、ビックカメラも何か買ったかったんだ。だから、「ビックカメラもあるし、だから銀座行きましょう」って言ったの。それで行っ……で、そのあと、「じゃあ、どうしようかな」とかって考えてて、そしたら「伊東屋ですか。伊東屋は文房具屋ですか。デパートに行けばいいじゃないですか。デパートは必ず文房具屋が入ってます」って言うわけよ。だから、そんなこと聞かなくたって分かっていることだって、つい……。言われなくたって分かっているんだ。「はいはい、分かっていますよ」。まず、とにかく、このオバタリアンがどんなところに連れていくか、非常に懐疑的だったね、彼女はね。

平塚：そうなんですか。

D：うん。で、それでもものすごいね……すごく自己主張が強い。

平塚：へえー。

D：すごい、なんていうんだろうか、あの、高圧的。

平塚：所属はどこだったんですか。

D：外交部。

平塚：えー！？

D：高圧的。すごい高圧的。たかが26、7の女の子でさ、お母さんと同い年のね、オバタン、おばちゃんだから、もそもそしたおばちゃんにね、なんだかんだって、多分、そう思ったのかもしれないけど、もう、とにかくね、「なん、なんなの、この子？」みたいな私なんか思っちゃったんだけど。だけど、まあ、まあ、

平塚：いや、誰でも思いますよ、それは。

D：うん。結果的にはね、あの、一応、ビックカメラで買いたいものを買わせて、マツキヨも行って、それで阪急の紳士館行ったけど、「あ、これはダメだな」と思ったのね。

平塚：ああ、そうなんですか？

D：うん。それで……バーゲンもやってなかったし。で、そしたら、「男市やっているところないかな」と思ったら、電話でパパパッと調べたら、日本橋の三越の本館、本店で男市やってるから、「団長、日本橋の三越でね、男市やってるっていうしね、あの、バーゲン製品だけじゃなくてね、いいものから何からかなり広い面積でやってるっていうからそっち行きましょう」って言ってね、そっちにバーッと連れてっちゃって。それで、そこで背広だとかジャケットだとかお気に召したもの買えたし、それからそのあと、なんだ、筆もそれこそ文房具屋とかで買えたし、ピーする時のさ、サイン、サインペン筆あるじゃない。

平塚：あー……

D：あれ、30本ぐらい買ってったよ。「ああ、そうか」と思った。

平塚：そうですか。

D：うん、うん、うん。で、それと、それからあとバックのところ行ったのね。そしたらさ、そのまた女の子がさ、なんかさ、これくらいのオレンジっぽくてさ、持ち……なんかこう、要するにデザインが若いの。彼女が持つならいいけどさ、奥様にだったらさ、全然ダメじゃない？

平塚：全然違うじゃないですか。

D：それでさ、それもさ、一個5万何千円するわけ。ちょっと高いしね。で、私がさ、ウロウロ、ちょっと、その、まあ、ちょっとほかにないかなと。まあ、中年だからさ、中年が持つの、分かるじゃない？ それでウロウロしたらさ、なんだかキタムラのバック屋さんがあったから、キタムラのこっちのバック、これ持ってって、「これ、3つも色あるけど、これどうですか」って言ったら、で、3万ぐらいだったし、「ああ、こっちがいい。こっちがいい」って。結果的には彼女のものは却下されたんだけどさ。

平塚：そうですか。

D：だけども、もう、本当にああいう子が外務省の外交部で今後を担っていく交渉相手だと思えば、本当に大変。

平塚：へえー、そうなんですかー。

D：もう、本当に大変だと思うでしょ、日本のこの今後の外交は。特に中国に、対中外交は本当に大変だと思う。

平塚：いやー……。

D：うん。一人っ子政策はね、本当、バカ。

平塚：絶対に影響が出てますよね。

D：出てます、出てます。

平塚：ですよ。あー、それはちょっとひど過ぎますよね。

D：でもね、あの、だから、そういうことを見てね、その、日本の将来の外交とか、日本のそういうもの、対外政策だけじゃないけど、日本のそういうものを考え……考えるって言っちゃおかしいけど、そういうことが楽しいのよ。私の楽しみは。「ああ、こういうふうになっていくんだな」とかね。「日本はまだこんなだけ、全部物真似をやってるけど、今はいいけど、そのうち大変なことになるな」と思いながらとか。それはやっぱね、ブースに入ってちゃ、絶対できない。

平塚：分かんないですね。そうですね。確かに。

D：そう。それは本当にそう。あの、その前のPさんでも本当、面白かったし。

平塚：そうですか。

D：0さんっているでしょ？ 軍事アナリスト。

平塚：あ、はいはいはい。

D：彼はね、

平塚：軍事アナリストですね。はい。

D：うん。英語が……あの人、中卒なのよ。

平塚：えっ？

D：私、ビックリしちゃったけど。

平塚：ウソッ？

D：中卒でね、それで自衛隊行ったの。それで、自衛隊行ってから、えー、自衛隊辞めて、それでね、ええとね、

平塚：えっ？

D：上智だったかな？ どこ？ 南山、南山だか、どっかのね、神学部に行ったの。神学部も中退なの。

平塚：えーっ？

D：それでね、どっかの高校のね、それこそね、自衛隊行きながら高校の定時制みたいなんで、そのね、大検取って、それでどっかの神学部に行ったのよ。それで神学部を中退で、それで、ええと……なんかジャーナリストにだんだんなっていくんだけど。だからね、英語ができなくて中国語もできないの。外国語、全然できないの、あの人。

平塚：そうなんですか。

D：うん。それでね、だからね、私はね、で、声はいいしね、温和だしね、と思って、あの、Pさんと一緒に話を聞きに行ったわけよね。

平塚：あー、そうですか、そうですか。はい。

D：けどもね、いかんせんね、甘い。

平塚：そうなんですか。

D：うん。あの、「日本と中国はね、戦争なんかするわけじゃないじゃないですか」って。私、私たち……

平塚：あ、そういう考えですか？

D：そう。「だって、隣に住んでいるんですから」って、「ばかやろう、日本と中国は隣だって喧嘩しただろう」って。

平塚：え、え、え、ちょっと待って、ちょっと待って、ちょっと待って。え、あのOさんですよ？

D：そうです。そうです。私はビックリしましたよ。

平塚：え、なんか、い……正反対のことを言いそうな気がするんですけど、そうなんですか？

D：うん。だから、今、だから、中国側の人を見るだけじゃなくて、日本側の人から見方も、中国に対してもいろんな人に接している話が聞けるかに面白いってところあるんですけどね。

平塚：ちょっと意外ですね。

D：私もね、ビックリしちゃった。それで、だってね、「自衛隊とね、中国の人民解放軍はね、しょっちゅう交流してますから、お互いのことを分かっていますから」。

平塚：交流はしてますけど、いや、そんな薄っぺらいことでどうしますか、アナリストが。

D：そうでしょうか？　そうでしょうか？

平塚：ええ。

D：それで、自分は英語ができませんから、ね。だから、自分の事務所は、あの……

平塚：英語の論文って、なんかないんですか？

D：読めないんですよ。全く読めないの。だから、「自分のところに英語……日本語下手だけど、英語の使える、あの、事務所員が、アメリカ人がいます」って言ってた。

D：で、それで、そういう、自分でそのオフィスを構えてて、そして、そこの人たちを雇ってるから、オフィス代の家賃とかそういう、その、自分の生活費とか以外に、毎月、なんとしても200万の収入を得なきゃいけないんですよ。で、その人たちの給料払ったりしなきゃいけないから、で、「それをやるのが大変ですよ」って。だから、「いろいろ、そのメルマガとかやって、会費を取ったりして、それでやってるんです」っていうことは言ってたけど。まあ、多分、そういうのが難しい、経営していくのが難しいってことは事実なんだと思うんだけど。だけどね、私、ビックリこけちゃった。隣……「隣の国なんですから、日本と中国は喧嘩するわけがないじゃないですか」って言われた時には、「へー」と思っちゃった。私、それ聞きながら、「へー」と思いながら通訳してたんですけどさ。

平塚：そうですか。

D：うん。

平塚：私ね、実は、ツイッターをね、最近やり始めたんですけども、Oさん、結構、あの、昔ちょっと話を聞いて、非常に共感を得たところがあったので、Oさんを、フォローしたんですよ。だけど、発言がちょっとね、やっぱり、薄いような気がしたので、フォローをやめたんですよ。最近の話なんです。

D：ふーん。

平塚：でも、それって、そうか、見方は合ってたのか、私。

D：合ってたのよ。合ってた。合ってたの。合ってたと思う。私、だから、その彼と一緒にね、あと、あの、Mのところ行ったでしょ？　それからあと、前のね、えーと、誰、大使。うーん、誰だっけな。大使のところにも行ったのよ。えー、ちょっと待って。なんだっけ。駐中大使……うん？　じゃない。誰だっけな？　まあ、誰かのところに行ったんです。その人たちはね、さすがに昔の外交官だったし、えー、まあ、ちゃんと、きちんとしてましたね。

平塚：そうですか。

D：だから、そういう……そういうのも面白いのよ。

平塚：面白いですね。

D：ね。だから、それでやった。そういう刺激を受けることが楽しみで私はやってるって感じかな。

平塚：すごいですね。

D：そう。そう。ま、まさにそうよ。だから、自分のボケ防止よ。最終的な目的は。

平塚：そんな、そんな。うわー。それはちょっと、うーん……。でもね、だから、私は「あ、ツイッターだから、こういうことしか書けないのかな」って思っ……。でも、本当に魅力を感じなかったの。「すみません。フォロー、辞めさせていただきます」とかって言って辞めたんですけどもね。そうですか。

D：いや、なかなかね、いろんな人のところにくっついて行ってね、あの、随行通訳だから。

平塚：やはり、すごく刺激を受けますよね。

D：受けます。

平塚：そうなんですよね。

D：うん。そこが魅力なんです。

平塚：そうなんですよね。

D：うん。

平塚：そうなんですよ。

D：ブースの中でそういう刺激がある人は、きっと、それはそれであるんでしょうね。

平塚：それはそれで、またあるだと思いますけどね。

D：うん。私は、やっぱりね、どっちかっていうと、そういうほうがずっと面白くてやってきているから。

平塚：そうですね。

D：まあ、だから、雇ってくれる人がいる限りね、やりますけどね。

平塚：そうですか。でも、訳出する時に、ちょっとビックリしますよね。それも。

D：うん。ビックリしますよ。そう。だから、「困った時、どうしますか」って、さっきおっしゃったけど、その、そのまま訳すしかないからさ、

平塚：それしかないですね。

D：「へー」とか思いながら訳してさ、家帰ってきて、「ねー、ねー、ねー」って。

平塚：そうですか。

D：だから、うちの娘が言うの。「パパは幸せだよ」って言うから、「なんで？」って。「ママ帰ってきてからね、あんなにいろんな内部情報教えてくれるから」とかってさ。だから、契約事項は違反ばかりよね。でも、うちの旦那がほかに何かに、別のところに書いたりするわけじゃないから、

平塚：そうですね、そうですね。

D：そうそうそうそう。参考情報にしかないしね。

平塚：そうですか。

D：そう。

平塚：二人三脚ですね、でも。

D：うーん……。

平塚：おかしい。いやー、そうですか。

D：だから……ねえ……

平塚：それが一番ビックリしますね。さっきのその、ね、中国人で、「なんか通訳間違ってます」って言った人じゃないですけども、やっぱり、ある程度先入観ってあるじゃないですか。やっぱり通訳者で、もう、それこそまっさらじゃないって思うけれども、でも、「まあ、こういうスピーカーだったら、こういう話するだろう」っていうのは、通訳者も思っているわけで、それを見事に裏切られると、結構……。まあ、あんま

りないですけどね。

D：私は、でも、本当に、あの、別にこういう話をするとか、そういう……もうね、あの、予想っていうのはあまりできない……

平塚：あまり……ああ、そうですか、そうですか。

D：できません。うん。どんな話するのか、行ってみて、出たところ勝負で聞くしかないですよ。

平塚：うん。いや、でも……

D：やあ、まあ、でも、

平塚：そうですね。

D：そういう意味では、余計なね、ほかのね、あの、こういう仕事をしてない方たちに言ってみたら、「何の話をしてるんじゃ」って話をすると、みんな、ね、誤解されたりとかすると困るんだけど、でも、まあ、平塚さんだからね、こんなこと……面白いですね。

【E氏のオーラルヒストリー】

E：読んじゃうといけないから、ちゃんと、あの、箇条書きっぽくしたんですけど、

平塚：ああ、そうですか。

E：ああ、忘れるといけない……あ、で、出会いはですね、ええと、中学2年の時に、

平塚：え、中学2年……、

E：社会科の先生が、あの、歴史をずっと教えてって、最後のほうで、最後のほうは、最初は丁寧に教えるけど、最後のほう、時間なくなるじゃないですか。で、中国史の現代史のところプリントを配ってくれたんですよ。で、それが、文化大革命はもう終わっていましたがけれども、人民公社のこととか書いてあって、で、これは読まなくちゃ。で、プリントに書いてあったのが、中国が、「中国で国民全員が平等であって、労働に応じて働き、必要に応じて分配する」というのが書かれていたので、「こんな素晴らしい国があるのか」と感動して。

平塚：そうなんですか。

E：それで、中国とか共産主義とか、「その頃は共産主義が輝いていた時代、光を放っていた時代」と、ある学者が言ってたんですけども、まあ、共産圏の国もいくつかありましたが、で、まあ、ベールに包まれていたから、知らなかったんですよ。

平塚：ああ、確かに。

E：ふたを開けたら貧困国でしたけれども、それを知らなかったから、すごく素晴らしいと思って憧れて、それで中国語をやるようになって。

平塚：え、中2の時から。

E：そうです。

平塚：えーっ、えーっ。

E：そうです。

平塚：そうなんですか。

E：そうです。それで、内山書店とかに通って、毛沢東語録を買ったりとか、あの、国歌とかインターナショナルのレコードを買ったりとか。超アカですよ。

平塚：本当に？

E：はい。

平塚：中学生で？

E：ええと、マルクス、エンゲルスの共産主義宣言とかも買いました。

平塚：読んで？

E：読んだけど、よく分かりませんでした。

平塚：え、それは中文で、じゃなくて、日文の。

E：日本語で。

平塚：日本語の。

E：日本語で。それで、

平塚：ああ、本当に。

E：そうなんです。で、勉強の話に入っちゃうんですけども、そうすると。中学2年生の時に、ラジオ講座を聞き始めて、

平塚：あ、中国語の。はいはい。

E：で、半年で終わるじゃないですか。

平塚：はい。

E：それを3クールやりました。

平塚：は一。

E：発音をその時に覚えたと思います。珍しくないですか？

平塚：すごく珍しいと思います。

E：でしょ？

平塚：中学で……分かんない気がするって。すごいですね。

E：だから、英語、英語とかやるじゃないですか、みんな。

平塚：普通はね。

E：うん。

平塚：え、それって、Eさん、もともと地元がC県ですか？ あ、じゃなくて、

E：それは狛江。

平塚：あ、狛江だよね。

E：うん。

平塚：狛江って、あそこの狛江だよね。

E：狛江二中です。

平塚：狛江二中だよね。

E：狛江二中は、ミスチルの、ミスチルの……桜井以来の……。

平塚：そうですね。

E：はい。

平塚：えー、っていうことは、結構、じゃあ、どちらかっていうと、あの、我が道を行く子どもだったんですかね。

E：そうです。すごい生意気で、もう先生を泣かせて。

平塚：そうなんだ。

E：きつかったですね、だから。

平塚：ああ、そうですか。

E：言うこととか、書くこととか。

平塚：へえー。それって、別に、特に自分でそれは、じゃあ、吸収して、中国語をやるうって思ったんですか。

E：うん、そうです。

平塚：別に、ご両親の何か影響とか。

E：全然ないです。

平塚：全然そういうのじゃなくて。

E：両親は、まあ、その後は、まあ、進学をするんですけど、むしろ反対ですよ。で、母は何も言わなかったけれども、父はやっぱり、もう、共産主義アレルギーがある世代ですから、「そんなことやったら殺されるぞ」って言われて、すごい反対しました。だから、そのあと、「留学する」とか言ったら、もう、「とんでもないから」って自分で決めました。全部、自分で決めました。

平塚：本当？ 本当に？ え、でも、そんな時代じゃなかったでしょ？ そんな……時代でした？

E：いやー、あ、また、そんなレッドページとか、そんなことする時代では……。

平塚：でしょ？ でしょ？

E：戦後ですから。

平塚：でしょ？ それはですけど……そうだけど。

E：だけど、

平塚：そうなんだ。

E：うん。でも、父の世代が、やっぱりアカとか、そういうのにアレルギーもあるし。

平塚：ああ、そうですか。

E：うん。でも、中学、高校でそういうのに染まる人もいないし。で、高校入って、高校のちょっと上の世代だと、ちょっと上でもないですね。あの、学生運動とかで、大学

と同じように、うちの高校はすごい運動で荒れた高校なんですよ。

平塚：えーっ！？ 高校で？

E：うん。で、その時は私は、それはもっと前の世代の先輩たちですけれども、それですごい……修学旅行が廃止になってしまったりとか、そういう高校だったんですよ。あとは、壁新聞があって、国語の先生が「授業の質が、クオリティが悪い」って言われて、「退職を要求する」というのが出て、で、先生辞めてしまったりとか。

平塚：それは都立ですか？

E：都立です。

平塚：えー、すごいですね。そうですか。あ、で、この、じゃあ、そのまま高校も中国語は引き続き勉強して……

E：中国語は勉強してないですね。

平塚：あ、

E：で、高校の時はあえてやってなかったんです。で、大学でやろうと思って。

平塚：ああ……

E：そうなんです。

平塚：それはなぜ。

E：それは、うーん、と、とにかく大学でやろうと思ったから、やってなかったんだと思います。

平塚：ああ、本当に。ああ……

E：だから、何も、その時、その時には、もう全然、その、毛沢東に憧れるとか、そういう思想は何もなかったですし。あと、もうひとつ、中学校の時に始めたことがもうひとつあって、天気図を書くことなんですよ。

平塚：ああ、じゃあ、ちゃんとその二つはつながってるわけですね。

E：つながってるんです。で、中学校の時に、あの、理科の授業で天気図書くじゃないですか。

平塚：書きます、書きます。はい。

E：すごい面白いと思って、で、「毎日書きたい」って理科の先生に言ったら、用紙を、こう、30枚コピーしてくれて、ひと月分書いて、出すと、次の30枚くれるっていうのを、やっぱり中学2年から3年までずっとやったんですよ。

平塚：素晴らしい。先生も素晴らしいですね。

E：いい先生ですね。

平塚：そうですか。わー、そういうことがあったんですか。そうなんだ。あ、でも、すごい、将来にちゃんとつながってるわけじゃないですか。その中学校の時の土台が。

E：だから……そうなんです。あ、でもね、そのふたつを、ずっとね、あの、まあ、高校の時は何も考えないで、大学に行くということが、まあ、本当は、あと、大学か専門学校かというのもあったんですけれども、高校の時は何も考えなかったんですけれども、でも、やっぱり進路の時に、気象学にするか、中国語にするかっていうのが、結構、

平塚：悩んで。

E：悩んで。

平塚：あー。で、最終的に、進路……

E：最終的には、でも、中国語のほう、中国語をやるんだっていう考えがずっと強かったんで、そのまま、ちょっと迷いもありましたけれども、中国語を勉強することになったんです。

平塚：あー、ええと、専門だったんですか、中国語は。

E：そうですね。

平塚：専門というか、専攻というか。

E：実質的には中国文学科だったんですけれども。

平塚：中国文学科。あー……

E：ええと、現代文学もやったので。

平塚：現代文学。あー……、そうですか。

E：そうですね。でも、それ以外に、これ、忘れるといけないから書きましたけど、ええと……専攻して、夜はですね、津田スクールオブビジネスで会話と作文を週に2日、行きました。

平塚：ああ、そうなんですか。

E：で、大学4年からは、週末、サイマルアカデミーに行きました。

平塚：ああ、そうですか、そうですか。ということはダブルスクールじゃなくて、トリプルスクール？

E：トリプル……、トリプルスクールですね。

平塚：へえー。ということは、もう、大学に行っている間に、まあ、すでに通訳っていう道は……

E：もう、あの……

平塚：もう考えてらした……

E：考えてました。

平塚：ああ、そうですか。

E：だから、あの、語学をやっているからには、通訳が最高峰の仕事だろうと思っていたので。それは大学に行く前から薄々思ってたかもしれないですね。

平塚：へえー、そうですか。じゃあ、もう、それは迷うことなくずっとそのまま？

E：そうなんです。うん。もっと、でも、選択肢が考え方としてあったほうが良いなど今は後悔してます。

平塚：そうですか。

E：何も知らなかった。

平塚：そうですか。

E：子ども……なの。子どもの時に子どもの考えで決めてしまったので、失敗したなど思っ……

平塚：えー、そうですかね。

E：うん。

平塚：いや、ある意味、うらやましいですけどね。それだけ早くから自分の道が決まっていたというか。

E：それがいいのか、悪いのかねえ。

平塚：うん。

E：でも、まあ、野球選手とかだったらいいですもんね。

平塚：ですよ。ですよ、やっぱり、それ……

E：野球選手みたい……。

平塚：そうでないと、やっぱりね、プロにはなれないわけだから。

E：ああ、そうか。でも、そうか。

平塚：そう。そうですよ。やっぱり、高校時代、中学時代、大事ですよ。

E：うんうんうんうんうん。

平塚：なので……ああ、そうか。そういう感じで。ふーん。で、じゃあ、そうしたら、もう大学に出て、あ、ちょっと待っててね。

E：はい。

平塚：あ、大丈夫です。うん。そうか。そうしたら、

E：珍しいでしょう？

平塚：すごく珍しいかもしれません。

E：だからやめといたほうがいいって言って……。

平塚：そうですか。いやいやいやいや。ある意味、だから、し、新鮮ですよ。そういう方は、多分……

E：いないと思うんですよ。

平塚：いらっしやらなかった……

E：だから、家族がなんか中国と関係があるとかね、中国で生まれましたとかね、そういう人がほとんどなんです。

平塚：あー……、そうですか。で、ええと、大学にいらしてる時に留学をされたんですか。

E：いえ、大学を出てからです。

平塚：あ、出てからなんですか。

E：うん。

平塚：あー。ええ、じゃあ、ええと、就職する前になるんですかね。

E：そうですね。就職はしていないので、あの……まあ、そう、していないというか、大学を出てからです。

平塚：出てから、じゃあ、すぐ中国に行かれて。

E：そうですね。はい。

平塚：ええと、留学先は……

E：留学先は、人民大学です。

平塚：ああ、北京だったんですね。

E：そうです。

平塚：ああ、そうか。

E：で、その頃は大学を選ぶことができなかったもので、あの、悪知恵を使いまして、で、あの、たとえばね、ええと、「中文系に行きたい」というと、遼寧とか、いろんな、南京とか、いろんなところに分配される可能性があったので、こう、ジーンと見て、経済だったら人民大学しかないんですよ。

平塚：ああー……

E：経済は確か、国際経済だと人民大学しかないもので、それを専攻すると申請して、で、なんか試験があったんですけど、枠が決まっていたので、で、それで、あの、通知がきて、「人民大学に決まりました」って。「当たり前だ」って。

平塚：そうですか。そうなんだ。

E：そうなんです。

平塚：そういうことができたんですか。

E：そういう悪知恵を働かせて。北京に行かないと、発音が悪くなるんじゃないかと思
って。

平塚：あー……

E：ですね。

平塚：それでねえ。

E：あとは、あの、その、語文系という語学のクラスに入ると、テキストの字もでっか
いし、レベルも低いので、普通の学生と同じ授業を受けたいと思ったんですね。なので、
経済学部に行くことにしたんです。

平塚：ふーん。すごい。そうですか。そうか、そうか、そういうことが……できたんだ。
そうなんですか。

E：そうですよ。

平塚：そうなんですか。

E：うん、うん。

平塚：へー。で、ええと、そこには何年ぐらい。

E：2年いました。

平塚：2年間。

E：はい。

平塚：ああ、じゃあ、ええと経済学部で、ええと中国の学生と一緒に2年間。

E：そうです。で、本来は、あの、私が出ているのは文学部なので、文学部から経済学
部に行くと、1年生から本当は4年間いなくちゃ卒業できない。私は、まあ、実際には
卒業はしていないんですけども、で、あの、一応4年行くということで大学を騙して
行ったんですよ。行ってから「2年にしてくれ」って、あの、経済学部で直談判をしに
行って、それで、あの、「哲学とかね、体育とかいいですから」っていう話をして。

平塚：あ、そうか。そういう単位はね、もう取ってます……

E：「数学とかね、そういうのはいいので、あの、できれば自分の取りたいカリキュラム
を半年ごとに選ぶようなことはできないか」という話をして、で、学部の先生が困って、
担当の人が。「学部長の＝シーチュレン＝に聞かなくっちゃ」って言った。そしたら、
「あ、そこにシーチュレンが」って。シーチュレンが来た、学部長が来たんですよ。そ
れで、「どうですか」って相談したら、「＝クイー＝」って言って、決まったんです、そ

れで。

平塚：えー、そうなんですか。

E：それで、あの、学期が始まる前に、ええと、学部の3年、4年生と、大学院の、あの、カリキュラムの表をもらって、時間が合うように組み合わせて、これを、「これこれを履修します」って届けて、で、あとはまあ、2年目には論文も書いて、それで一応卒業という、あの、の学位はないんですけども、一応、まあ、修了しましたと。

平塚：修了。え、そうですか。すごい。まあ、要はすべて交渉術で。

E：交渉術ですね。そうなんです。それで、授業ビッシリ入れて、朝の8時から夜の10時まで。

平塚：夜の10時まで？

E：ありました。

平塚：あ、そうなんですか。

E：うん。で、夜の10時は割とゆるい、あの……本当に、ええと、日本語をやっている学生向けの、あ、補講でもないですけど、そういうのがあったりとかするのにな、そういうのに出てみたりとかして。

平塚：へー、それは素晴らしく充実した留学生活ですね。

E：すごい……そうですね。もったいないと思ったのかなんか知らないですけど、

平塚：さすが……

E：すごい勉強しましたよ。

平塚：それはもう4年分に匹敵しますね。

E：うん。

平塚：本当に。

E：そう思います。

平塚：そうですか。それで、じゃあ、ええと、まあ、そこで2年しっかり修了して、それから日本に帰……帰国をされるんですね。

E：そうです。うん。そうなんです。それで、その前、行く前に、もう大学4年からサイマルに行っていたので、帰ってきても別に就職はどうだとかいう心配は何もしてなくて。先生ももう、「帰ってきたら通訳をやるんだ」って思っていたので、

平塚：ああ、そうなのね。

E：何の心配もなく帰国しました。何の心配もなく帰ってきました。

平塚：何の心配……うん、心配もなく。

E：そう。

平塚：で、実際、

E：そう。

平塚：もう、そのまま稼働をされるっていう感じで……

E：そうですね。はい。

平塚：ああ、そうですか。それは素晴らしい。

E：ラッキーですね。

平塚：そうですか。で、じゃあ、ええと、基本的には日本に帰って、日本で通訳を開始されたっていう感じですかね。

E：そうです。当時は、そんな北京で働くとかいう環境、全然ないですし。

平塚：そうですね。

E：で、北京に残って、北京に就職してとか……

平塚：ええ。ああ、そうか、そうですね。

E：そんなの、まったくないですよ。

平塚：そうですね。そうですか。じゃあ、たとえば、その、まあ、いわゆる通訳として受けた仕事っていうのはどういう分野というか。

E：当時。

平塚：ええ、当時ですね。

E：当時はね、一番最初に受けたのが、ええと……あー、なんだっけな。キリスト教の関係の「キリスト者国際会議」とかいうので、韓国とか、あと台湾の人と日本の人と……

平塚：まあ、そうか。中国はないか。そうか。

E：遠藤周作とかが出てきてるんですよ。

平塚：ああ、そうなんですか。

E：うん。一番最初に受けたのがそんな仕事で。で、そのあとは、あの一、まだ JICA が ODA を対中向けにやってた頃だったので、JICE の試験を受けて、受かったんで、そこからの仕事がすごく多かったんで、

平塚：ああ、そうですか。

E：まあ、稼働も結構多かったし、すごく勉強にもなったので、最初にそのステップがあったのがすごくラッキーだったと思うんです。

平塚：それでやっぱり、あの、まあ、2週間とか1カ月単位で同じような内容の……

E：うん。研修ですよ。

平塚：そうですよね。

E：そうですね。

平塚：あー、そうですか、そうですか。のおかげで。

E：そうですね。で、あと、調査団って、海外に行くことが多くて。それもなんか、初めて2週間の研修を、船舶解体っていう船を壊す技術の研修の担当をさせてもらったんですね。で、ベテランの人と二人でやって。で、そしたらそのあと、急に、あの、「調査団に行ってほしい」って言われて。で、前にやってた同じ案件が出た人が、あまりにもこう、大使館の講師にいじわるとかされて、

平塚：えっ？

E：ストレスで行けなくなっちゃったので、「Tさん、お願いします」、私、旧姓Tですけど。で、あの、「持ち前の明るさで頑張ってください」って、なんかわけも分からずに行って。

平塚：そうですか。

E：で、そんな上手に通訳なんかもできるわけないんですけども、まあ、とにかく一生懸命やって。でも、そうしたらなんか、まあ、山東省に行って。で、そしたら、あの、まあ、その、政府だけの調査団で、結構偉い人も今思えばいて、緊張したんですけど、でも、やっぱり、最後には「いや、よく通訳してくれたね」って言われて。で、なんか中国側の人も、「本格調査の時も、この人、来てもらえないか」って言われるぐらいになって、「よかった」と。でも、帰ってきたら、40度ぐらいの熱を出して、1週間ぐらい寝込んでしまいました。

平塚：えー！ あ、そうなんですか。結構過酷だった……

E：ストレスですかねえ。

平塚：あー……。そうですよねー。

E：うん。

平塚：そのストレスとの戦いは本当にそうですよね。

E：。そうです、そうです。

平塚：そうですか。でも、そのまま、結構順調に……

E：そうですね。

平塚：ずっと。

E：そうですね。

平塚：そうですか、そうですか。

E：うん。だから、その、まだ帰ってきた時だから 24 歳とかそのぐらいだったんですけど、よく JICE もそんな大事な案件に、何を考えているのか。

平塚：あー、そうですね。

E：ベテランが「嫌だ」って言ってできなくなったものをね。

平塚：あー……

E：でね、なんか、それ、JICA の人が聞いて、「こんな若い人で大丈夫なのか」って。「大丈夫です」って言われて。

平塚：あ、そうですか。

E：なんでそう思えたのかが分からないです。

平塚：あー、いやいやいや。あの、分かります。

E：いや、だって、それって 20 年以上前の話ですよ。

平塚：そうですか、そうですか。

E：でも、やっぱり、なんか、そう……なんかあった……強そうだったのかもしれないですね。

平塚：いや、もう、それ、中学の時から筋金入りなところが。

E：そんで……筋金入りですからね。

平塚：そうですよ。そうですよ。

E：「こいつなら、なんとか」って。それに、「若いから許してもらえるかな」っていうのがあったのかもしれないですよ。

平塚：素晴らしいですね。

E：うん。でも、ビックリしたのが、JICA の人に 2 回呼び出されて、2 回会いに行きましたけど。でも、なんか、それでよかったみたいで。

平塚：あ、あ、まあ、面接みたいな感じですかねえ。

E：うん、うん。

平塚：はあー……ものすごい。

E：最初の仕事って、なんかすごい……

平塚：すごい。

E：衝撃的な。

平塚：衝撃ですね。はー、じゃあ、それで、まあ徐々に、なんていうですかね、あの、分野の幅を……

E：そうですね。

平塚：広げていったっていう感じですかねえ。

E：そうですね。うん。

平塚：基本的には、じゃあ、もうそのままずっと今まで順調にっていう感じで……

E：そうですね。それで、途中で、あの、関西に住んでたことがあります。

平塚：関西？

E：うん、そうなんです。で、それは、あの、大阪で1990年に「花の万博」というのがあって、

平塚：ああ、花博。はい、はい。

E：花博に行って。ああいう制服が着たかったの、通訳コンパニオンの。

平塚：はあ！

E：「絶対やりたい」と思って、で、試験をまた親に内緒に受けて、で……あ、東京海上で、あの、一次試験も二次試験も面接もあったので、それで受かって、で、大阪で半年間、

平塚：半年、そうですね。

E：そう、そう。コスプレをしたいために、

平塚：えーっ！？

E：行ったんですよ。

平塚：ああ、そうなんですか。

E：うん。で、そのあとも、あの、少し関西にいたいなと思って。関西の水が結構合うというか、関西人と結構合うので。で、あの、たまたまハローワークとかに行ったら、奈良の新聞社で中国語をできる人を募集していたので、そこで文化交流の仕事とかを2年ぐらいやって、

平塚：あ、そうなんですか。

E：そうなんです。で、本当は、あの、フリーの、フリーランスとして活動したかったんですけど、その頃、大阪の市場はやっぱ小さくて、今でも小さいと思うんです。

平塚：ああ、確かに今でもそうですね。

E：だから、そういう自活していくのは無理なので、結局、なんかスゴスゴと東京に帰ってきました。

平塚：ああ、そうなんですか。

E：うん。

平塚：え、でも、じゃあ、奈良にも2年間いらしたんですか？

E：いましたね。はい。

平塚：はー！

E：うん。で、その時も、まあ、その時は JICA の仕事とかできないんですけど、なんか翻訳の、JICA から翻訳の仕事だけは、なぜかね、「もう原稿を送りました」とか言って、で、奈良でワープロを叩いてやってたりとかして。

平塚：ああ、じゃあ、もう本当に二足の草鞋状態で。

E：そう。そうなんです。

平塚：そうですか。

E：それでまた東京に帰ったら、やっぱり JICE の人、すごく大事にしてくれて、それでまた仕事を……

平塚：あ、じゃあ、復帰をね……

E：うん、復帰しました。

平塚：そうですか。すごいですね。じゃあ、本当に……

E：持ってる？ あ、違う。

平塚：すごい持ってる。

E：そんなことない。持ってない、持ってない、持ってない。

平塚：すごい、もう佑ちゃん以上に「持ってる」っていう感じで。で、じゃあ、それで、まあ、東京で、まあ、引き続き＝リーダー＝さんをされて……

E：され……していたんですけども、でも、途中でまた嫌になって、あの、

平塚：通訳が？

E：通訳が本当に嫌になって、それであの、気象の仕事をするようになったんです。

平塚：それは……あの、20代の時ですか？

E：ええ、もう……いや、30代の時です。

平塚：30代に入ってから。

E：うん。

平塚：その嫌になったきっかけって……

E：嫌になったというのはね、あの、やっぱり、JICA の仕事を中心にしたりとか、あと、その延長でいろんなところを紹介してもらって、技術系の仕事をする人が多いんですよ。それで、やっぱり私も技術的なものは好きですし、あとはその、なるべく中味を理解して、こう、通訳をしたいということで、で、その頃はインターネットも普及……なかったの、

平塚：はいはい、そうですね。

E：専門書を買って勉強したりとかしてて、そっちのほうが面白いんです、実は。技術的な内容のほうが。で、技術者がすごくうらやましくて。何年も何年も仕事をしていけば、ひとつの技術がどんどん蓄積されていくでしょ？ 通訳ってそういうのがないんじゃないかと思って。

平塚：ないですからね。ないですよ。

E：広く浅くで、このプロジェクト終わったら、もう次のものをやって、せつかくこの、たとえばね、空港の建設とか土木とかそういうのを覚えても、何も蓄積されていかないと思って、すごくつまらなく思えて。なんか道具じゃないかと思って。で、しかも、なんか、忙し過ぎたってということもあって。忙しいと、やっぱり、やっぱり蓄積されないから、

平塚：そうですね。

E：なんか自分の、自分を切り売りしているような気が本当にあって、

平塚：アウトプットだけでね。

E：で、なんか、もう、自分のための勉強もしたいし、で、気象予報士という資格もできて。で、あの、気象大学校とか、なんか物理学科とかに行かなくても気象の勉強ができるようになった。「テキストも売ってるし」と思って、それでも絶対勉強しようと思って。それでまた、それが持ってて、で、忙しくて全然勉強できなかったんですよ。で、2週間ぐらいすごい勉強して、受けたら、それ、気象予報士の試験は3つに分かれて、で、学科1、学科2と、それから実技があるんですね。で、学科1、学科2っていうのが、学科1が本当に基本的な理論で、学科2っていうのがちょっと実践に近いマニアックな理論で、で、実技は本当に図を書いたり計算をしたりとかで、2週間ぐらい勉強したのに、1が受かってしまったんです。

平塚：はいはい。

E：それで、全然歯が立たないと思っていたんですけど、で、「これなら、もしかしたらいけるかもしれない」と思って、

平塚：いけるかも……

E：なんか勉強を続けようと思って。それで、あの、半年ぐらい、一生懸命勉強したのがそのぐらいかと思うんですけども。で、それでも通訳の仕事をして、で、最後の1カ月ぐらいはもう全部断って、実技の練習に毎日あけ……

平塚：ああ、そうですか。

E：もう時間測って、60分以内で問題を書かなくちゃいけないっていうんで、すごい勉強して、それで試験に受かって。で、まあ、あの、そういう講座にも通いましたし、通信教育も受けたんですよ。で、合格したら、通信教育をやっている会社が気象会社もやっているところで、そこから声がかかって、それで「派遣で気象協会に行ってくれないか」というふうに言われたんです。それで、「じゃあ、まあ、失うものも何もまあないし」と思って、で、なんか「面接がありますから」と言っていて、なんか気象協会の偉い人に会いに行っていて、で、「別に、落ちたら落ちたで別にいいし」と思って、一度見に行こうと思って行って。「あなた、テレビに出たいんですか」と言われて、「違います。キャスターになりたいんじゃないです」と。で、私は、その気象をやるのは、人の役に立って……まあ、もちろんキャスターも役に立ちますけど、本当はね、あの、その時は「農業気象やりたい」と言ったんですよ。農業気象っていうのは、本当に、たとえば、その雹の被害を減らしたりとか、作物の収量がアップしたりとか、そういうことにつながりますから。冷害を防げたりとかね。だから、「そういうことができないかと思ってるんですけど」と言ったんですけども。で、まあ、そういう話をして、「キャスターだったら、私、やりません」という話をしたんですよ。そうしたら、まあ、農業気象は気象協会にないんですけども、

平塚：ああ、そうなんですか。

E：ないんです。でも、あの、もうその時に、なんか「ぜひ来ていただきたい」とか言われて。また「持ってる」んですけども。結局、あの、行ったら、あの、外交船舶ですね。あの、日本から主に北米に行く太平洋航路とか、あとはインド洋に行ったりとか、いろんなその船舶に対して予報を出すという業務が、英語も必要だったので、すごい英語できる人があんまりいないとかいうこともあって、で、そこに配属をされて。で、その派遣の期間2年間で、もっと延ばしてもよかったんですけど、ちょっとそこで翻訳も一緒に受けてたりとかしてたので、ちょっと身体も具合が悪くなって。それで、一応、そのフルタイムで働いたのは2年で、辞めたんですけど。

平塚：そうですか。

E：冬、忙しいんですね。

平塚：冬？

E：海が荒れる、時化るので。

平塚：そうか、そうか。

E：夏は暇過ぎて、すごい時間がもったいないなと思ったんですよ。

平塚：そうなんですか。

E：うん。で、冬は、で、あの、頼まれたので、全部で6年ぐらい、だから気象業務やったことになるんですけど、プラス4年ぐらい冬だけとか、10月からなんか3月いっぱいまでとか、

平塚：それでも……

E：「お願いします」と言われて。

平塚：通訳の繁忙期と重なってますよね。

E：重なってますね。

平塚：そうですね。

E：だから断って。で、あの、それをやってた間は、あの、同業者の人は「最近見ない」とか、「神秘的だ」とか、「何してるんだ」とか言って。

平塚：そうですね。そうですね。はー……。えー、じゃあ、もう両方やってらっしゃったわけですね。

E：両方やってましたね。

平塚：そうですね。

E：でも、一時はそのフルタイムだったので、通訳一切やってなかった。

平塚：ああ、そうか。でも、翻訳ものだけは受けて。

E：翻訳は受けて。そう。すごい、でも、忙しくなっちゃって。

平塚：そうですね。うわー。Eさん、もう一生分、働いてますよ。

E：そうですね。

平塚：本当に。

E：だから、病気になるんだと思う。

平塚：本当に働き過ぎ……働き過ぎ。

E：もう、もう死ねっていう……

平塚：ちょっと、いやいやいや。もう……まあ、あの、少しね、あの、少し病気があったほうが長生きするんですよ。

E：ああ……そうそうそう。あの……

平塚：気をつけますから。

E：気をつけるからね。

平塚：そうなの、そうなの。

E：そうですね。

平塚：それが大事なことなんですよ。

E：そうかもしれないですね。

平塚：いや、すごいですね。え、じゃあ、ええと、その気象協会のほうも、その冬の船舶の仕事が、まあ、まあ、まあ終わってからは、もうずっとそのまま通訳一本でという感じですかね。

E：そうですね。それは、うん、あの……事業主体というか……。ええとね、船舶の事業を、結局、ほかの会社に丸投げして、スタッフも全部丸投げするような形になって、
平塚：あー、そうですか。

E：だから、ツテがなくなったんですよ。それで、私はもう、それ、「助かった」と思ったんですよ。もう、だから、忙しい時期だし、

平塚：そうですね。

E：でも、断ると悪いし。「じゃあ、週2回ぐらいなら」って言ったら、ある年、あの、ほかのセクションで局地予報をしていたおじさんが死んじゃったりとかして。もう、あの、自衛隊のOBとかが来てるので、年寄り、結構多いんですよ。

平塚：そうですか。

E：それで、Lさんっていう、「Lさんが死んじゃった。死んじゃったんで、ちょっと穴が開いちゃったんで」っていうんで、航路から何人か回し……こっちに回すのって。で、「Eさんは週に4回来てもらえませんか」って。「分かりました」って。4回っていったら、何もできないじゃないですか。

平塚：えー、できないですよー。えー。うわー。

E：いいんですよ。ほかのことしなかったらいいんですけど、でも、あの、冬はやっぱり繁忙期だから、もう、なんか頼んでくる船がいっぱいいて、それでもう、なんか、毎日、残業9時までとかして。

平塚：そうですか。

E：疲れました。でもね、みんな、朝からそういう日はね、「今日はいっぱいあるから」とか言ってね。「いっぱいある」とか言って、「どうしよう」とかって。なんか、まあ、6時までに終わればすごくハッピーなので。

平塚：えー……

E：でも、もう終われなさそうだっていうのが、最初の仕事入ってきて、「今、一回の表ぐらいですけど」って、みんな野球にたとえながらね、仕事をしているんですよ。で、「うーんと、どうしよう」とか言って、もう、だんだんダメだっていうのが分かってく

ると、もう、あの、「敗北宣言」とか言って、みんな家に電話して、「今日、遅くなるから」とか言って、そういうことして。「どのくらいですか」、「今、大体3回の表ぐらいまでできました」とか言いながらね、やってるんですよ。

平塚：えー、本当ですか？

E：それでね、ちょっとトラブルがあったりとかすると、「ちょっと今、観客が乱入した」とかね、みんなで言いながら。

平塚：そうですか。え、もうその時は結婚されてたんですか。

E：してました。

平塚：えー。

E：あ、〇〇協会の人と結婚したんです。

平塚：えー？ ご主人、〇〇協会？

E：そうです。

平塚：そうなんですか。

E：すみません。

平塚：あ、じゃあ、その時にそういう出会いもあったということですね。

E：そうなんです。

平塚：そうですか。

E：そうなんですよ。

平塚：それは、それは。

E：もう、それは恥ずかしい話ですが。

平塚：え、なんで恥ずかしいんですか。

E：いえ、なんとなく。

平塚：ええ、ええ、ええ。そうですか。

E：うん。

平塚：は一。それで野球。

E：うん。

平塚：ああ、そうですか。そうですか。

E：野球選手じゃないですよ、だから、主人は。

平塚：あ、まあまあまあ。それは知ってましたけどね。それは分かりますけど。そうですか。まあ、でも、そういう意味では、ある意味、仕事に対して、まあ、理解があるというか……

E：もちろん。

平塚：ですよ。そうですよね。

E：そうですね。うん。

平塚：まあ、それは別に、もう、本題ではないんですけどもね。

E：いいんです、いいんです、それは。いいですよ。私、あのね、だから、サイマルの時に、あの、爆弾発言をしてしまったことがあって、

平塚：え、なん、なんですか？

E：あのね、あの、サイマルって、お聞きになったかもしれないですけど、ま、ある先生が牛耳ってて、天皇制みたいな感じになってて。毛沢東さんです。

平塚：あ、あ、な、なんとなく小耳には。はいはいはい。

E：そうなんです。で、いつも、こう招集をかけて、いつもお茶をしたりとかしなくちゃいけなかったんですけど、ある時ね、みんな、その時は私も20代とかで若かったし、仲間もみんな若かったので、「結婚するならどんな人がいい？」とか言って。で、私は、その時、中国語をやっている人ってみんなダサイし、なんかオタクだし、

平塚：ああ、男性ね。

E：うん。嫌だと思ったから、「私は中国語をやっている人と結婚はしたくないんです」って。それに、家に帰ってまで中国の話とかして、中国語で中国映画とか……。お茶すると、みんな中国映画の話とかしからないから、嫌で嫌で参加したくなかったんですね。で、だから、「それ嫌です」って言ってしまったら、その天皇が、天皇は中国語やっている人同士で結婚しているので、「じゃあ、私のうちはどうなるんだ」って言って、「あ、しまった」とか思って。みんながその時、シーンってなっちゃって。

平塚：本当に？

E：うん。それで、でも、もう1人の先生が、「私は、あの、同じ中国関係の主人と結婚したけど、ハッピーよ。すごく楽しい。今でも大好き」とか言って、そういう話をして。この間もね、ちょうど出張に行った時に、その時の一緒にいた仲間とその話が出て。で、あのあと、みんなにね、「あなたはあの時、爆弾発言したよな」って言われて。私、全然そんなこと思ってなかったんだけど、その時に、その天皇の人間の小ささと、もう1人の先生との人間の大きさが出たっていうのが、

平塚：そうなんですか。

E：それが印象に残った。みんなの印象に残ってるんですけどね。

平塚：そうなんですか。

E：うん。で、あとでね、その、その爆弾発言についてはいろんな子とあとで話したり、「私、まずいこと言ったかなあ」とか言って、「いや」とか言って、ほかの男の子も「その気持ちは分かるよ。家帰っても、なんとか飯店のなんとかがなんとかだったとか、そんな話したくないだろう」という話をして。

平塚：確かにそうですね。そうか。そういう……

E：それだったら、ねえ、家帰って、「今、雨降っている。どういう事象でおきてる」とか、そういう話をしているので、そのほうがうれしいです。私としては。

平塚：あ、そういう……

E：そう。

平塚：判断で選択をされたわけですね。

E：はん……。それはもっと中国語をやっている人で、なんか素敵なY投手みたいな人がいるとか、それだったら結婚するかもしれないけど、いないですよ。でも、もしかしたら……

平塚：中国語やっている人で、いないですよ。

E：英語の通訳とかだったらいたかもしれない。でも、女性ばかりじゃないですか。

平塚：女性がメインですよ。

E：女性と結婚していいんだったら。

平塚：そうか。なんか話がどんどんズレてくる。

E：すみません。

平塚：いや、いいんです、いいんです。面白い……。

E：なんでそんな……あ、結婚の話をしたからですよ。

平塚：ああ、でも、本当、本当にそうなんですよ。ちょっとね、小耳には、あの、某、某サイマルの話は聞いてたんですけども、本当にそんな感じなんですよ。

E：そう、そう、そう。

平塚：そうなんだ。

E：うん。だから、私もそれでね、多分、あの、その天皇から嫌われてしまったし、

平塚：え、そうなんですか。

E：それもあるし、あの、そのあと大阪に、関西に行ってしまったって、サイマルに行かなくなったので、もう全然、あの、コンタクトしてなかったんだけど。でも、その間、和解しましたからね。

平塚：ああ、和解を……

E：和解って、この間、偶然会っちゃって、「あ、挨拶しないわけにはいかない」とか言
って。それで別に普通に……

平塚：ああ、そうなんですか。

E：うん。ちょっと、そこで逃げたらいけないなと思って。

平塚：そうですか。ああ、面白いですね。いろいろあるんですね。

E：本当に嫌われてたのか、なんか、離れたから、あの、コンタクトがなくなったのか
は謎です。

平塚：ああ、そうですか。

E：でも、あの、あの人は根に持つタイプだから、根に持っているのかもしれない。

平塚：そうなんですか。へえー。記憶力いいんですかねえ。ふーん。ふーん、面白いで
すね。

E：でも、覚えてないかもしれない。

平塚：うーん。結構、でも、もうお年ですよ。

E：そうなんですよ。

平塚：そうですよ。今、でも、まだサイマルにいらっしゃるんですか？

E：うん。この間も……

平塚：やってらっしゃるんだ。

E：ちょっと用事があって行ったら、やっぱり一番先生の頂点として君臨してましたね。

平塚：やってらっしゃるんですか。そうですか。それはある意味、すごいですね。

E：もうね、30……

平塚：30……

E：何歳の時から。

平塚：そうですよ。

E：主任、主任講師だから。

平塚：で、杏林でも確か、今。

E：そうです。

平塚：そうですよ。

E：奥さんもね、大学でどンドン、メキメキと偉くなり。

平塚：そうですよ。

E：うん。

平塚：そうですよ。へえー。ふーん。

E：その話、関係なかった。

平塚：まあ、関係ないっちゃ関係ないですけども。

E：どうしてもね……そうなんです。

平塚：まあ、どうしても出ますよね。

E：どうしてもね、サイマルの話ってね、サイマルの人としても、サイマルじゃない人としてもね、出るんですよ。

平塚：そうです。

E：「〇〇先生が」ってね。

平塚：なかなか。いやー、いやー、なんか、あの、この間、Sさんに話を聞いたんですけど、なんか、「もう、早々に破門になったのよ、私は」とかって言ってましたけどね。

E：あ、そうなんですか。私、知らな……私、Sさんと同じクラスにいたんだけど、

平塚：そうなんですか？

E：Sさん、覚えてらっしゃらないと思いますけど。

平塚：いや、そんなことはないでしょう。

E：そう。私なんかもうその頃、もう大学生だったし、

平塚：ああ、そうですか。

E：うん。

平塚：そうなんだ。

E：そうなんです。

平塚：え、どう、どう……同じ時期に行ってらっしゃったんだ。

E：行ってたと思いますよ。あ、行ってたと思いますよ、で、行ってますから。Sさんでした。

平塚：そうですか。

E：はい。知って……たので。お財布開けたらね、丸井のカードが入ってるのも知ってました。

平塚：そうですか。やっぱり、この世界、狭いんだ。

E：狭いですよ。

平塚：そうですね。

E：うん。破門になったっていうのは本当かも。分かりますね。だから、自分でね、その、サイマルでただ教わってるだけじゃなくて、自分で勉強会を立ち上げようとか、そういう動きをして、こう、実際立ち上げたりとかしたりとかする人は、すごい嫌われま

すから。

平塚：そうなんですか。でも、サイマルの方とか、結構、勉強会やってません？ それはまた別なのかな。

E：なんか、クラス……今はあるんですよね。なんとかOBクラス？

平塚：ワークショップクラスかな。なんか、なんでしたっけ、OB……なんかね、あるって聞きましたけど。

E：そうですね。ありますよね。

平塚：それとはまた違うんですかね。

E：それとは、当時なかったから。

平塚：ああ、そうか、そうか、そうか。そうですか。

E：うん。それで立ち上げ……積極的な人は、積極分子が立ち上げると、嫌がるんです。

平塚：そうなんですか。難しいですね。

E：それは、その人のキャラクターによるものだと思います。

平塚：ああ、そうですか。は一。まあ、いろいろ……

E：うん。その人が失脚しないから、しょうがないですけど。

平塚：そうですね。そりゃそうですよ。

E：だから、私もいろんなところでその爆弾発言をしたっていうのが、私、爆弾発言したんだって、もうこの世界ではやっていけないのだろうなと思ってましたけど。

平塚：いやいや。そうですか。そこまでは影響力はないような気がしますけどね。

E：そうですね。だから、サイマルの仕事さえしなければいいんですからね。

平塚：そうですね、そうですね。いやー、奥が深い。

E：深くはない……。

平塚：なんだろう？ はあ。ああ、話題を変えましょう。話題を変えましょう、じゃあ。

E：ああ、すみません。なんか。

平塚：いやいやいや、いやいや。そしたら、あの……じゃあ、今は特に、その、どちらかというと同通のほうが多いですかね。

E：多いです。はい。

平塚：同通のほうが多い。

E：はい。

平塚：ですかね。で、まあ、で、あの、たとえばその、仕事をね、あの、まあ、このテーマは受ける、受けるとか、このテーマは受けないとかっていうのは、何かありますか。

E：ないんです。

平塚：特にないんですか。

E：うん。だから、判断基準は、先着順なんです。

平塚：ああ、先着順ね。はいはい。

E：だから、あとから、あの、好きな分野の案件がきたりとかして、すごい残念に思うことはたびたびあります。

平塚：そうですね、そうですね。まあ、じゃあ、基本的に、あの、早くオファーがきたものだっていうことですね。

E：そうなんです。そうなんです。

平塚：で、分野では断ることはないっていう感じですかね。

E：ないです。「なににはできません」とか言って断ることはないです。

平塚：ないですね。Eさん、あの、司法通訳とかはされたことがあります？

E：司法通訳は……ないですね。

平塚：ないですか。法廷とかはないんですかね。

E：うん。法廷というかね、あの、千葉地検……

平塚：地裁。

E：ああ、そうか。地裁。地裁と地検となんかセットになって、何回か行ったことがあります。

平塚：ああ、そうですか。

E：だから、その、法廷とかいうような、あの、すごい大々的なものじゃなくて、3人ぐらい……全部で部屋にいるのが3、4人ぐらいかな。でも、それでもね、法廷なんですよね。それでなんか、宣誓書とかにサインさせられて。それ、法廷ですよ。

平塚：はい、そうですね。

E：それはやったことがあります。

平塚：ああ、そうですか。

E：うん。

平塚：っていうことは、じゃあ、分野は会議だけではなくて、法定も受けらっしゃるっていうことですよ。

E：そうですね。でも、それは……

平塚：そんなに頻繁ではないですか。

E：頻繁ではないです。

平塚：ああ、そうですか、そうですか。

E：会議が主です。

平塚：そうですよね。

E：主というか、ほとんどですね。

平塚：ほとんど、そうですよね。ということは、じゃあ、あの、まあ、たとえば、その会議通訳をね、ずっとやってらっしゃって、何か、あの、自分のその通訳の基準というか規範というか、何か訳出の時にこうやるべきだとか、そういうものって何かありますか。

E：訳出だったらね……。訳出の時には……。うーん……。基本的には忠実に訳すのではないですね、考えてみたら。分かりやすくするっていうのが、

平塚：分かりやすくする。ええ。

E：一番ですよ。だから、だらだらする人は、結論を最初にまとめて、その、まあ、遂次だったらあれですよ。だらだら言って、ひとかたまりあって、結論がこの辺にきてたら、それを先に言っちゃうとか、そういうことは……。そうやって組み替えたりすることはあります。あとは、もう、あの、どなたもあると思いますけれども、揉めているとか、険悪であるとか、そういう時は、あの、ちょっと失礼な言い方を回避したりとか、うーん、あとは場を和ませるように。でも、中国語ってそんなに失礼って……。丁寧とか丁寧じゃないところ、ないじゃないですか。

平塚：あんまりね。そうですね。

E：だから、言い方とか雰囲気だけなんですよ。

平塚：あ、あとは語気がとかね。

E：語気です。

平塚：そうですよね。ああ、そういう感じで、まあ、いわゆる円滑に進むようになっていく感じですかね。

E：そうです。そうですね。雰囲気が良くなるようになっていくことですね。

平塚：たとえば、その、うーん、そうですね……。相手が、まあ、そういう、その……。険悪な状況って何度かありました？　そういった現場。

E：書いてきました。

平塚：あ、そうなんですか。

E：これはね……。でも、昔はたくさんあったんですよ。JICAでODAの案件っていうのが、無償資金協力担当が結構多かったんですけども、そうすると日本でくれる金は決

まっていると。で、中国側は安い見積りを、優待価格という名の見積りを商社からたくさんもらっていて、ほとんど中国側のもくろみで、20 億円あるんだったら、これがあって、これがあって、これがあって、これがあるだろうって。日本が、日本は日本側が買うから、そんなにたくさん買えないんです。それですごい揉めるんですよ。

平塚：そうですか。え、で、その揉め事の交渉にも通訳が入る。

E：何回もやりました。

平塚：そうですか。

E：うん。で、決裂したりとか。大体、日本ほうが無条件降伏になってしまうんですけども。なんか、「商社のほうに泣いてもらいましょう」とか、決裂して、何回も何回もこう詰めて、だんだん、まあ、歩み寄ったりとか。何回も説明して、「あなたたちが持っているプライスは、優待価格で、あの、特殊なんです」みたいなことを何回も訴えられまして。

平塚：そうですか。

E：大変でしたね、昔は。

平塚：ああー。え、そういう時に、やっぱり、まあ、双方の、なんていうですかね、わだかまりを少しずつ緩和させるようにっていう感じで。

E：そうですね。そう。緩和させるように。あまりにも、こう。まあ、日本のほうはもう攻められるばかりで弱い立場だから、日本側から失礼なことを言うことはないですけども、中国側のほうがあまりにも、こう、ひどい言い方とか、ちょっとそれは昔のことなんで、思い出そうと思っても思い出せなかった……

平塚：ですよ。

E：だけど、それはなるべく、こう、円滑にするために、こう、和らげたりとか、それから、もう、私自身も中国側の人と個人的にたくさん話をして、仲良くなって、話を聞いてもらいやすい環境にするとかね。

平塚：ああ、雰囲気ね。

E：そういうことはすごいしました。うん、で、あと、和らげる例がひとつ書いてきました。あっちが間違っていないといいですけど。ええと、国際結婚のカップルで揉めていると。

平塚：国際結婚のカップルで揉めている？

E：言葉が通じないと。

平塚：ええ、

E：そういうのは、ここ2、3年の間に1個ありました。すごい珍しいケースなんですけれども。

平塚：え、それはエージェント経由で依頼があったんですか？

E：そうです。

平塚：えー。

E：で、ええと、そう、クライアントは夫の父親。で、奥さんがね、こういうこと言うんですよ。「他说的屁話」で、「それは」と思うと、

平塚：ああ、それをね。

E：「嘘をついていらっしゃいませんか？」って。これ、結構おもしろかったです。こういうのも。

平塚：えー、ああ、じゃあ、こういうふうには。

E：うん、こう、極端に……これはすごい極端な例なんですけれども、何事もこういうことが、ここまではないですけど、こんなのドラマでしか聞いたことない言葉ですけど、まあ、こんなふうに中国人は激昂していれば、こういうふうになると。しちゃいますね。言えないですもん、そのまま。

平塚：そうですよね。

E：「甲斐性あれば、すぐ50万円持ってこい」ってんだったら、言えないでしょ？ あ、すみません。

平塚：そうですか。あ、で、これは実際にEさんがこういうふうに出出をされたんですね。

E：はい。これはすごいハッキリ覚えてます。

平塚：そうですか。

E：うん。で、この時は、なんとか、これまた話それますが、この夫婦に別れてほしくなかったんです、私は。結局……

平塚：え、お知り合い……

E：いや、知り合いじゃなくて、初めて会ったんですけど。でも、せっかく縁があって結婚したんだから、しかも、せっかく私がこれで、まあ、仲裁でもないですけど、話のために行ったのに、別れたとかいったら残念だから。

平塚：あ、そうか。

E：で、途中になんかトイレ休憩とかいって。あの、そして、私がトイレ行きたかったんで1人で行ったら、この夫婦2人だけになってまた喧嘩するといけないと思ったから、

奥さん連れ出して、「一緒にトイレ行こうよ」って言って、一生懸命トイレでね、「最初は好きで結婚したんでしょ？」って。一生懸命ね、「いや、別れちゃダメだよ」って言って。

平塚：説得を。

E：そう、説得。まあ、「日本にはね、ある言葉が、ひとつ言葉があって、『結婚は忍耐である』っていうのがあるんだよ」って言って。そしたら、「日本の女は我慢する、我慢するけど、中国の女は我慢しない」って。まあ、ちょっとご主人のほうあまり誠実ではないので、怪しい動きがあったりとかして。

平塚：ああ、そうなんですか。ああー……

E：そういうことがあって。まあ、だから、それも、あの、多分、私のひとつのスタイルではあると思うんですけども、それもなんとか円滑にとか、なんとか2人がうまく話をしてほしいとか、そのためにちょっと連れ出して説得をするとか。

平塚：そうか。いや、それはそうですよ。できますもんね、そういう……

E：これ、極端な例ですよ。だから、やっぱり、少しでもこう、スピーカーと仲良くなっていくと、スピーカーが私の話を、敵意を持って聞くんじゃないで、こう、

平塚：まあ、受容度がね。

E：知ってる、「あ、知ってる人だ、この人、好きだ」と思って聞いてくれれば、あの、受け入れてくれるし。

平塚：そうですね。

E：なんか言葉尻をとられて何か言ったりとかすることがなくなるじゃないですか。

平塚：そうですね、そうですね。

E：うん。

平塚：ああ、大事ですね。

E：うん。でも、この例はちょっと、うん、普通、ないです。

平塚：あー……、ですね。そう……でも、たとえばね、この、この奥さん、結構、語気が多分強いんだと思うんだけど、

E：そうそうそうそう。バレちゃいますもんね。

平塚：バレますよね。

E：まあ、その前のあの話としては、夫のほうね、「うちの会社は家庭的だから、いろんなところにね、そのバーベキュー大会があったりして。でも、奥さん、全然一回も一緒に、うちだけ子ども連れて参加したことがないから」とか言って、子どもは保育園に

預けちやってるんですよ。で、奥さんは清掃の仕事をしていなくちゃいけなかったから、みてもらえないと言って。で、世田谷のご両親に「子どもをみてくれないか」って言うたら、お母さんにね、「日本人は子どもは自分で育てます」って言って断られたって言って。それで、子どもは福建省にいて。で、奥さん、あ、夫は夫で、奥さんは清掃をして、夫としては本当は自分の思い描く家庭像というのがあって、子どもを連れてバーベキュー大会に行ったりとかね、みんなと一緒に仲良くね、ドライブに行きたいと。怒るの。夫婦なんです。

平塚：でも、それって、結構その表情とかが大きいね。「なんか、少しズレてませんか」って言われませんでした？

E：それ、大丈夫ですね。

平塚：でしたか。そうですか。

E：あとはね、あんまりね、もうね、冷めてるから、割とね、語気がね、まあ、冷めた語気なんですよ。

平塚：ああ、そうなんですか。

E：うん。だから、割と、その、「ちょっと現実離れしてないですか」って言っても、そんなにおかしくはない。

平塚：ああ、そうですか、そうですか。あ、でも、それは……それも……へー。でも、やっぱり多いんですね。こういう。

E：うん。

平塚：うーん、多いですね。

E：多いですね。

平塚：まわりにも私もたくさんいるので、結構……

E：ああ、そうなんですか。

平塚：多いんですよ。ほとんど離婚しちゃったかなあ。

E：ねえ。だから、あの、なぜ私が呼ばれたかっていうと、まあ、何回か交渉事はあったんだけど、いつも奥さんの友だちに頼むと。そうすると、奥さんの友だちは奥さんの味方するから、

平塚：ああ、それは確かにね。

E：公正なことを言ってくれる人がいいって言って、

平塚：それはそうですよね。

E：頼まれたんですよ。

平塚：あ、それはそうですよ。

E：うん。

平塚：やっぱり、うーん、通訳としてね、

E：そう。

平塚：中間に入るわけですからね。それを友だちに頼むっていうのも不思議でしょうがないですけどね。

E：そう。でも、二度とその案件なかったの、

平塚：ああ、そうなんですか。

E：どうなったか分からないです。

平塚：えー、そうですか。でも、こういう話がエージェントからくるっていうのもすごいと思う。

E：すごいでしょう？ それで、資料、「資料ないですか」って変な話ですけど、

平塚：資料。

E：そしたら、お父さんが手書きで、なんか、これまでの経緯を書いた……

平塚：ああ、そうなんですか。

E：「何々と何々は何年に知り合って、結婚して、子どもがいて」とかね、きました、資料がちゃんと。

平塚：そうですか。

E：それを見てね、「面白い」とか言ってね。おかしかったですよ。

平塚：でもね……

E：この仕事はすごい……

平塚：そうですか。

E：ま、ちょっと野次馬根性出したらね、おもしろいですね。こういうのが、その国際結婚……これは1回しかなかったんですけども、あとは、あとは何があったのかな。中国側で高圧的なのは、ええと、強制認証。CCCからくる監査官ですね。

平塚：あー、はい、はい、はい、はい。

E：で、それは、まあ、本当に揉めないように、失礼にならないように。というのは、なんか、なんとか、「何日までになんとかを出せ」みたいな感じの言い方になるので、なる人もいますよ、中国側の監査官って。

平塚：ああ、そうですか。

E：で、それは、あの、本当に、まあ決裂でもないですけど、あまりにも日本人がかわ

いそうなので、そういうのは、あの、もう少しマイルドに言ってあげるとか。そういうこととね、あとは、もうひとつ、そうだ、最近の例では、日系企業で世界的に展開をしていて、で、中国に支社があつて、中国と電話会議をするとかというのが結構あつたのと、最近のたとえば IT とかベンチャー系とかは、社長がワンマンで、で、社長に、まあくつついている人も、それもワンマンじゃないんですけども、その人たちもキツイですよ。で、もう決断も早いし。で、あの、中国の現地法人の人たちに対して、ものすごい高圧的なものの言い方をすることがあるんですよ。たとえば、店舗を新しく出しますっていう時に、「この賃料はもう少し下がらないの？」とか、「ここに今出しているのがベストな数字なわけ？」みたいな言い方をするので。で、その、私が行く前に中国語ネイティブの中国人が行ったら、すごくビックリして高圧的だと感じたということで……

平塚：それは日本語でしゃべっているわけですよ。

E：そうです。で、それを中国語で。別にそれは、たとえば、あの、「賃料高過ぎるんじゃないの？」とか、「これがベストなわけ？」とか言って、それ、中国語で普通に言えば変じゃないんです。なんか高圧的ではないんですけど、ただ、通訳者が言って、すごい中国語ネイティブの人は怖いと感じたみたいで、それをなんか、なんとなく、日本人が中国人に高圧的に何かを言うっていうのは、これまでの歴史的経緯から考えてもちょっとまずいぞと。

平塚：あんまりないですよ。そうですね。

E：いや、なんか……

平塚：ちょっとまずいっていうかね。

E：なんか、なんか、その辺も、

平塚：ああ、そうですか。

E：「高過ぎないか？」とか言って。太高了！とか、そんなことは言わないで、会不会太高とか、そういう。やっぱり語気です、そこらへんも。

平塚：そうですね。そうですね。

E：うん。それも、それは同通だったので。

平塚：ああ、そうですか。

E：うん。

平塚：だから、今、できるだけ同通とかでも……

E：そう。そうですね。

平塚：やっぱり、あの、ね、その場の雰囲気のを和らげるっていうほうが、前に立つ……

E：そうですね。もう、なんか、そういうのが染みついちやってるのかもしれないですね。なんか「揉めないでください」っていう感じで。で、特に、だから、「どっちかが怒って、どっちかがかわいそう」っていうシチュエーションを和らげたいっていう気持ちがあるんだと思います。

平塚：それは……どこからくるんでしょうね。

E：それは ODA で揉めたからかもしれないですね。中国人に日本人がさんざんいじめられたとかあって。今は逆で、特に日本人が中国人になんか命令してなんとなかっていうのは、それは中国人がもしひどい言い方をしているのが、日本語分かっちゃう人ならしよがないですけど、それ聞いたら、なんか日本人から言われたら余計嫌な気持ちするでしょ？

平塚：余計にね。そうですね。

E：もしかしたら背景に、その、もともとのその日中関係の悪さ、お互いの対中感情、対日感情の悪さっていうのは、ちょっと離れると、やっぱり日本人同士で、こう、作戦会議とかっていうと、「なんか中国人は」とかって、まあ、そんなに言わないですけどね。中国人のほう行くと、結構ひどいこと言っている人もを。

平塚：そうですね。

E：そういうのがあると交渉の障壁になるので、そういうのをやめてもらいたいと言って……

平塚：それを、やっぱり、できるだけ取り外したいっていうか。うーん、そうですか。

E：気遣っているかもしれないですね。

平塚：そうですね。相当気を遣っていると思いますよ。通訳の時に。

E：そう思います。

平塚：へえー。で、たとえば、ま、あんまりないと思うんですけどね、たとえば、お互いに揉めたい場合っていうのは。

E：あ、揉めたい場合。

平塚：そういうことはなくもないのかなって思ったりするんですけども。

E：そうしたら、そういうふうに……

平塚：不打不成交っていうね、そういう、まあ「雨降って地固まる」じゃないですけども。

E：だから、それは……うーん、結局、語気を和らげても、内容的には揉めるから、それでいいんだと思います。

平塚：ああ、そうか。伝わりますよね。

E：だから、ひどい語気でやり合う……わざわざやり合わなくても、結局、内容的にダメなものはダメなんだから、

平塚：そうか、そうか。そうですね。

E：それで一応、雨降っているんだと思うので。

平塚：そうですね、そうですね。そうか。それもそうですね。

E：そうしたほうがいいんじゃないですか。

平塚：そうですね。

E：だって、そのあと、交渉したあと、すぐ宴会とかいったら、すごい気まずくて嫌じゃないですか。

平塚：そうですね。うーん。

E：そういうパターン、よくありますから。

平塚：ありますね、ありますね。

E：やりたくもないのに、答谢宴会、謝なんてしてないのに、

平塚：謝。そうですね。

E：あの、日程がつまってるよね、最初、あの、歓迎宴会とか言って、歓迎もしてないのにやって、その謝もしてないのに答谢宴会をやって。

平塚：そうですね。ああ、その通りですね。

E：そう。そうなんですよ。揉めるとね、「答谢宴会やりたい」とか言ってね。「いいじゃないですか」、中国ビール、ババーッとかいってよばれて、「まあ、そう言わずに」って言ってね。「一緒に飯なんか食いたくないよ」とかって、そういう感じですからね。

平塚：そうですねー……

E：だから、会議の時は、そのぐらい……でも、あとで一緒に食事できるぐらいの雰囲気は、ちょっと、最低限保たないと。

平塚：あー、それって、すごく、なんか通訳の役割が非常に大きいというか。

E：うん。

平塚：うん。

E：大きいと思いますよ。

平塚：ですね。

E：うん。あとはね、あの、中国の人が、やっぱり序列を気にするじゃないですか。で、日本人であまり慣れてない人だと、たとえば、ええと、政府の人を尊敬するなんとか

となんとかとか言って名前言う時に、最初に政府系の人を言わないといけないとか、

平塚：はいはい、もちろん、もちろん。はい。

E：で、そのあとに、なんか外郭団体を言うとか。あんまりこだわらない人だと、いる順に言っちゃったりとかするから、

平塚：ああ、います、います、います。

E：それを、なんか、全部……

平塚：ああ、やっぱり変えられますか？

E：入れ替えます。

平塚：ああ、そうですね、そうですね。そうなの。やっぱりね、相手の文化に合わせないと失礼になりますからね。

E：そ、そうですね。

平塚：そうですね。やっぱり、そういう意味では、Eさんのその通訳の訳出の規範って、忠実よりも、やっぱりその文化差とか、あとはやっぱり、その雰囲気とか、

E：そうですね。

平塚：そっちのほうを重視するっていうことですよね。

E：そうになってしまうのかもしれないですね。

平塚：うんうん、そうですね。

E：本当はよくないかもしれないですね。

平塚：いやいやいや。ま、いい……よしあしではないと思うので。

E：司法通訳とかだったら、忠実のほうがいいかもしれないですけども、

平塚：うん、そうですね。

E：でも、人と人とが何かを、こう、交流する場であるならば、やっぱり場をよくするってというのが、自分でできる範囲でできるのであれば、ということを考えているかもしれないですね。

平塚：それってやっぱり、あの、なんていうんですかね、その「両国の関係をよくしたい」っていう大前提があるんじゃないですか？

E：そうなんですよ。で、あともうひとつは、忠実っていうのはできて当たり前だと思うんですよ。だから、内容は全部ちゃんと盛り込んだ上で……できているか分からないですけど。でも、その上で、その関係をよくできるような、雰囲気をよくするようなやり方にするということができればいいんじゃないかなと思いますけどね。

平塚：それって、なんか、今、ずっと聞いてて、やっぱり、その、もう本当に中学校の

時から中国に傾倒されて、なんか、そういう思い入れが今の規範にもなんか反映されているような気がしますよね。

E：そうかもしれないですね。

平塚：へー、いやー、すごく、すごく興味深いというか。うん、あの、そういうお話をしてくださったのは初めてなので。

E：ああ、そうなんですか。

平塚：うん。あの、何人が聞いてますけれどもね。ふーん、そうですか。ま、ある意味、なんか、それがあから通訳者としてずっとやっていたらしゃったのかもしれないんですね。その、なんていうんですかね、その、はじめに、その、日本と中国の橋渡しありきじゃないですけども、なんかそんな気が……。そうでもないですかね。橋渡しというか、まあ、その思い入れというか。

E：橋渡しというほど大げさな、大きなものではないかもしれない。

平塚：あ、ではないですかね。

E：ええ。

平塚：うーん。すごく、あの……ある意味、なんていうんですかね、通訳者って、まあ、たとえば、今までインタビューを聞いてきた方なんかは、やっぱり忠実であるべき、忠実であるべきっていうのが。だから、そんな、あの、なんていうんですかね、まあ、自分の役割としては、その場をとにかく忠実に訳出を、訳出をすることっていう。ま、でも、そう言いながらも、結構いろんな役割を果たしてるんですよ。

E：そうですね。

平塚：みなさんね。うん。あの、言葉とは裏腹に。なので、でも、真正面から、青山さんみたいに言ってくださった方はちょっと初めてだったので。

E：ああ、そう……

平塚：そう。ちょっと……。うーん……

E：え、忠実にできるのは当たり前。そうだよ。できなきゃいけないことですよ。

平塚：そう、そう、そう、そう。

E：うん。

平塚：で、その上で、ですよ。ある意味、通訳者としての、

E：人、人としてですかね、だから。

平塚：ああ、人として。

E：その場にいる者として。うん。まあ、だから、橋渡しでもないですけど、仲立ちと

して両方の言葉を分かるのは、もし1人しかいないのであれば、「お互いに喧嘩しないでくださいよ」みたいなところがあるのかもしれないですね。

平塚：そうですね。ふーん、そうですか。

E：うん。確かにね、だから、忠実ということを第一に考えてないかもしれないです。で、聞きながら、逐次の時とか、聞きながら「なんて言ったらいいかなあ」っていうのを、やっぱり考えているところがありますね。

平塚：それは、たとえば、分かりにくいっていう発言の場合……

E：あ、分かりにくいとか、分かりにくいとか失礼だとか、そういう時。分かりにくいもありますね。分かりやすい言葉……

平塚：分かりやすい。

E：分かりやすいっていうのも、こう、雰囲気の良いにつながるじゃないですか。

平塚：ああ、確かにそうですね。そうですね。

E：だから、効率は……効率よく進むっていうのも、やっぱり雰囲気がいいほうが効率がいいですね。

平塚：そうですね。その会議が円満に終わる。

E：うん。そう。円滑に、

平塚：円滑に。

E：効率よく、いい会議になる。

平塚：それが、まあ、通訳者として、まあ、

E：果たす……

平塚：果たすべき役割というか。

E：お客さんが言う語気とかね。

平塚：そうですね。うーん……そうですね。あとは、たとえば、その、そうか、さっき、あの、司法のそのお話が出ましたけれども、またやっぱり、その、役割違うのかなという気がするんですよ。その、たとえば会議の場合とか、あとその法廷の場合だとかっていうの。そんな感じで、

E：そうですね。

平塚：自分で役割を、なんていうんですかね、まあ、変えているというか。

E：そうです。それは、あの……

平塚：そんな気は、自覚としてありますか。

E：そうですね。司法と会議ということで考えたことはないんですけど、あの、この質

間を拝見して考えたのは、ケースバイケースで、たとえば、あの、もう、形がもう、こう、様式みたいに決まってしまうセミナーとかで、たとえば展示会に併設されるセミナーっていうのは、もう完全に形が決まって、会場も大きくて、打ち合わせもちゃんとセットされてという場合の通訳と、代表団がきます、で、お客さんを迎えるために主催者というか受け入れ側と一緒に打ち合わせを最初、ブリーフィングをして、スタンバイをして、お迎えをして、会議をして、お見送りをしてっていうのとは全然役割が違うと思うんですよ。

平塚：た、たとえば。

E：どっちもスタッフなんですけれども、で、あの、その、もうルーチン的になっている会議っていうのは、それはもうきちんと、その、大きな会場ですけれども、その会議を、まあ、ほとんど一方的な講演ですよ。で、それを、まあ、ちゃんとやること。それは別に陰悪になったりとかしないで、それをちゃんと忠実に。

平塚：まあ、そうですね。そうですね。

E：でも、分かりやすく。台湾人とかもロジカルなところが無茶苦茶なので、それを分かりやすく伝えるとか、リレーがあることもあるので、なおさら分かりにくくしてしまうと、英語の人がかわいそうですから、そういうところは考えると思います。だから、それもやっぱり効率よく、分かりやすく、このたくさん聞いている人に伝えるっていうことができればそれでいいと思いますし。

もうひとつは、その、遂次でお客様をお迎えするという場合は、その主催者の会社とか団体の一員になってとけ込んでしまうことが必要だと常に思っています。

平塚：ああ、立ち位置としては、だから、中間ではないわけですよ。

E：中間じゃないんです。日本側なんです。で、日本側としてお客さんを迎える時に、そうすると、その、あの、最初にブリーフィングのために入ったりとかすると、会議室用意してあって、「どうですか？ 旗の位置はこんなんでもいいんですか」とか、そういうことがよく、こう……。

平塚：ありますね。はいはい。

E：で、あとは、その、宴会の前だと、「宴会の時に」とか言って、式次第決まってないと、「最初にご挨拶して、最後の締めは中国のほうがいいんですか」とか、そういうこと、かなり頼られるので、

平塚：はいはいはい、そうですね。

E：そういうことを、まあ、アドバイスでもないんですけれども、そういう話をして、

どういうふうになればちゃんと中国の人をちゃんとお迎えして、ちゃんと送り出されて、失礼……送り出せて失礼がないかということで、あの、その中の一員の、一員の、ある一スタッフであるという役割になると思いますけど。

平塚：はい、はい、はい、そうですね。

E：うん。

平塚：うーん、あ、確かにその通りなんですよ。

E：だから、同通とちょっと……同通って全然お客さんの顔見ないと。講演者の顔は見るけども、お客さんの顔見ないっていうのと、お客さんの顔見てなんかするっていうのと、だと役割違うし、服装も違うし。

平塚：うん、そうなのね。うーん、そうか、そうか。その、単に、ね、通訳者として訳出だけじゃないじゃないですか。そのね、さっき言った……

E：そう。そう。

平塚：自分の話になって恐縮なんですけど、あの、地元が木更津なので、で、木更津市としてなんか、その、中国人をね、とにかく呼び込もうと。観光で呼び込もうっていつて、あの、市を挙げてやったことがあったんです、去年の年末。で、もうそれこそ最初から、中国語講座から全部みんなそういったことから携わって、今はその、市長のその、あの、市長との勉強会とかまでやってしまっ、もう、とにかく「中国なんか」、「なんか」ってどうなんだろう、って思いつつ。でも、それもある意味、通訳者だからできることなんですよ。

E：そうなんです。そうなんです。うん。

平塚：そういうことなんですよ。

E：そう。どうしたら、その中国の人をちゃんとお迎えできるんだろうかって。「こっちは中国のこと何も知らないよ」とかいう場合は……まあ、知ってるならその流儀でやってしまう人もいるし、知らなくても、なんか日本の人を迎えるような流儀で、間違い、間違っているけどやってしまう人もいるかもしれない。それはそれで仕方ないですよ。その時はちょっと修正を、訳出する中で修正するっていう必要もあるんですよ。

平塚：そうですね。だから、その訳出でその修正をする場合もあるし、その以前にね、そういうことを……

E：うん。そう。修正がきけば。

平塚：きけば。そういうことですよ。

E：でも、きかない場合もありますけど。

平塚：そうですね。

E：固まっちゃってて。

平塚：そうですね。そうなんですよ。そうなんですよね。「あれだけ言ったのに」とかね。

E：こんな変なね。

平塚：そうなんですよ。

E：「変じゃん、これ」ってね。

平塚：そう。言ったことが何も実現されてないとか。

E：そう。そう。

平塚：本当に困ったんですよ、もう。あの田舎の、田舎の方たちにはね、本当に。

E：分かりますよ。かなり、田舎の人が、田舎なりの接待の仕方しか。

平塚：そうなんです。

E：1パターン……

平塚：抜け出せないの。

E：そう。だから……

平塚：抜け出せない。

E：外国人が来るっていうんで緊張はするんですけど、何もできないんですよ。

平塚：そうなんです。本当にね。もう、見事でした。それって、本当に先回りをして、「ああ、これはどうだったんだろう、ああだったんだらう」って見ていかないと、

E：うん、そう。

平塚：本当に、全部、あの、裏目に出るので。いや、本当に。でも、それをずっとやってらっしゃったら、本当に疲れますよね、Eさん。

E：あ、でも、そんなことはないですけど。

平塚：そうですか？

E：だから、多分、そんな、あの、お客様を迎えたりとかするのは、あの、嫌いではないと思うんですよ。むしろ、なんか、そういう中のスタッフの一員になって動くことが楽しいというか。

平塚：ああ、そうですか、そうですか。

E：うん。そうですね。割とすぐとけ込みます。

平塚：そうですね。そうですね。

E：なんか服装もそれっぽくしてみたりとか。そして、こう、違和感のないように。「私

は通訳として招かれているお客さんです」っていう雰囲気は、そこでは出しちゃいけないじゃないですか。

平塚：うん、そうですよね。そうですよね。一員としてということですからね。そうか、そうか、そういう意味では、うーん、なんかすごく具体的に、あの……すごくね、私もその役割論を研究しようと思った時に、というか、今までの研究がどちらかというところ、その訳出行為にすごく焦点が当たっていて、でも、実はそうじゃないんじゃないかっていうのを、まあ、修論終わってから少し気がつき始めて。で、でも、なかなかね、そこまで語ってくれる方があんまりなくてですね、

E：あ、それはね、だから、通訳者は自分が「職人」だと思っているからじゃないですか？

平塚：あー……

E：だから……。私は「職人」じゃなくて「サービス業」だと思ってるんですよ。●の芸人であったりとか、サービス業寄りだと思うんですよ。だから、いろんなものに形を変えなくちゃいけない。

平塚：変幻自在ですね。

E：そう。そう。そうだと思うんですよ。だから、たとえばどっかの会社がお客さんを迎えて接待するなら、その会社の社員みたいにならなくちゃいけない。

平塚：そうですね、そうですね。

E：で、イベントのスタッフとして入るのであれば、そのイベントの主催者にならなくちゃいけないですよ。

平塚：でも、それって、その、なり切るためには、よっぽど、やっぱり、きちんと準備をしていかないとできないですよ。

E：もちろんです。もちろんです。

平塚：そうですね。

E：うん。

平塚：そういう意味では職人でもあり、

E：うん。でも……

平塚：サービスというか……

E：そうですね。だから、職人……「職人以上」って言ったら職人に失礼なんじゃないか。

平塚：そうですね。うん、うん、うん。まあ、まあ、まあ。

E：職人的なことは、やって当たり前なんですよ。

平塚：それ以上の、プラスアルファのところですよ。

E：そう、そう、そう。

平塚：そこですよ。

E：だから、そこでスタッフとして果たす役割は訳出だと。だけど、その中の、そのチームの一員なんだっていうことで。だから、そのチームの一員に加えてもらえるっていうことがすごくうれしいですし、楽しいと思います。

平塚：分かりました。そうか、そういうことなんですよ。変幻自在で当然だということですよ。

E：そう、そう。

平塚：だから、それこそケースバスケースで、その果たす役割も違ってしかるべきだということですよ。うーん……

E：だから、訳がいい加減であっていいとかいうことではなくて、

平塚：もちろん、もちろん。

E：ちゃんとできるのは当たり前。

平塚：それはもう最低限のことですよ。

E：準備をするのは当たり前。で、そうしないと、お客さんにも迷惑かかるし、パートナーにも迷惑かかると。

平塚：なるほどね。そうですね。あと、たとえばですね、その、ま、さっき、いろいろこういうお話をしてくださったんですけども、あの、文化的な、その、言語的な差とかではなくって、その文化差で、たとえば、特にね、同通なんかだと、非常に、あの、その文化差を伝えるというのが難しいような気がするんですけども、それでちょっと大変だったとか困ったっていうことは、今までにありますかね。

E：その場合、その文化差がある中で、その、同通をしなくてはいけないという……

平塚：そうそう、そうそう。そういう状態。

E：その大変さ。

平塚：そうですね。まあ、ただ、同通の場合は結構、もう、常にコンセンサスができてるんですよ。なので、ある意味、それほどね、文化的な差異が問題になるとかということは、多分ないとは思んですけどね。

E：そうですね。あの、あんまり何かを考えながらっていう……まあ、それも、でも、ありますけどね。交渉事がありますけど、講演とかである場合は……

平塚：あんまりないですよ。

E：ないですね。

平塚：ないですよ。

E：だから、あえて、もう、そのまま伝えるしかないんですよ。

平塚：その場合はそうですね。そうですね。

E：うん。

平塚：あ、そうか通訳訓練は、そのサイマル、サイマルでずっと受けられたんですね。

E：そうです。そうです。

平塚：わー、すごい、こんなにやってもらっちゃって、ありがとう……

E：おな、同じことが書いてあるので。

平塚：ああ、ありがとうございます。そうか、立ち位置は「スタッフ」なんですね。

E：そすです。「スタッフ」って一言しか書いてない。

平塚：そうですか。

E：これ、あの、ここもそうですね。だから、「扱いにくい」「プライド全開」というのはNGっていうのは。

平塚：プライド全開っていうのは？

E：「私は通訳ですから、何々しません」。

平塚：あー、あー。まだいるんですかね、そういう方って。

E：あんまりいないですけど、

平塚：ねえ。

E：扱いにくい人の場合……

平塚：なんか英語ではね、まだいらっしゃるっていう……

E：いますよ。え、韓国語とかもそうですよ。

平塚：そうですか？

E：うん。

平塚：韓国語？

E：だから、何か、追加の業務が発生したとか、そういう時は、あの、英語の人も拒否したりとか、まずエージェントに聞くとか、そういうことが多いですけど。韓国語の人も「やらないよね」と言いながらやったことがあります。

平塚：そうなんです。

E：うん。で、それは、ええと、中国から日本に向けての説明会、投資の説明会で、で、

中・日をやってくれと。あとは日本の建築事務所から、中・日だから、そこはいらないと。でも、突然、お客さんのほうからね、中国の偉い人が来てるから、日・中もやって、中国の人、その人に日本語の人の、日本人向けの説明を中国語訳をしてくれないかと言われたことがあって。そうしたら、なんか業務量がすごい倍ぐらいになるんですが、言われていた。で、その、1日拘束だけど2人体制でっていうことで受けてて、それは途中すごい時間が空くからなんですよ。で、そのあとになんかパーティとかがあるということ。で、やるか、やらないかっていうので、私はもうパートナーと相談する前に、「じゃあ、資料いただければ」とか言って、もうやることにしちゃったんです。で、パートナーの人にも、うーん、ちょっとどうかかと……

平塚：でも、やらざるを得ないですよ。

E：そう。どうかなって言っても、やらない人もいますよ。「韓国語だったらやらないね」って言って。私なんかもう有無を言わさない状況で、もうやるということにしてしまってやったんですよ。でも、そのあとまたパーティでお会いしたりとかするから、やるのとやらないのと、雰囲気100倍違うじゃないですか。

平塚：そうですよ。違いますよ。

E：「この通訳、何もしてくれなかった」って。

平塚：そうですよね。

E：途中、途中休んでいる間だって、針のむしろじゃないですか、それだったら。

平塚：そうですよね。

E：そうしたら、やってあげて喜んでもらって、

平塚：なおさら……そうですね。

E：そうしたら「ありがとうございました」とか言って。

平塚：そうですよね。

E：100倍感謝されるでしょ？

平塚：そうですよね。

E：もう、満塁ホームランか、満塁で凡退かの違いですよ。だから、それを終わったあとに、パートナーにも、もう何回言って、「絶対、今、すごい感謝してもらってるから、やるとやらないのとでは100倍違うんだよね」って言ってたんですけど。

平塚：へー。でも、だって、やらざるを得ないじゃないですか。

E：うん。

平塚：でしょ？

E：でしょ？ で、それはね、いろんな人にあとから聞いて。でも、もうほとんど……もう、みんなは、みんな、だって、サービス業なんだから、お客さんにやってほしいって言われれば、やっぱり、2人できつくなってもやってあげたほうがいいでしょう。そうしたら、お客さん感謝するし、エージェントだって、もう、後日、もうお礼のメールもくるし、

平塚：そりゃそうです。そりゃそうですよ。

E：うん。

平塚：うん。だって、そこにはいないんだもの、ほかにね、

E：そう。そう。

平塚：ああ、でも、それでもやらないっていう人がいるんだ。

E：それはね、英語とか韓国語だったらやらないねって言って。そういう、そこに、その場にいなかったですけど、

平塚：ああ、そうですか。

E：でも、やらないですよ、多分。

平塚：えー、そうですか。

E：うん。で、あと、人によっては中国語で……その人は別に、あの、悪気はないんですが、クオリティという面で、あの、あるセッションを拒否したことがあったんですね。それは医学の関係で、薬物依存のセミナーで。で、薬物を使うと脳が委縮してなんとかというので、中国の解放軍のお医者さんだったんで、資料を事前に全くくれなかったんです。それで、あの、「直前まで出せないから」って言って。でも、先生が、「そうしたら、じゃあ、それは中国語を流すだけにします」って言って。でも、日本のおいじさん聞いているのに……

平塚：そうですよね。

E：そう。それで、「それはそれでいいんです」っていう話になったんですけど、でも、やっぱり解放軍のお医者さんとしては、あの、じゃあ……

平塚：なんのために来たんだっていうね。

E：「できるところだけでもいいから」とか言って、あの、「どんなでもいいから、できるところでもいいからやってくれないか」って言われて、「いや、できません」って、その、その担当の2人。私は……3人体制で、ABC かなんかに分けられると、私なんかたとえばCだったとして、AB の分だったんですよ。だから、私は何も口を挟めなくて。私だったらもう、もう、即決で「やります」っていうことで、グラフとかいっぱ

いあって、すごい難しそうだったんですけど、でも、なんかそういうののほうがチャレンジ精神が、スリルもあるし、結構好きなんですけど、そういうののほうが。で、だけど、そっちの2人は、1人はちょっと「揺れる派」で、1人は「それは言葉にならないと思うからできません。やりません」の一点張りで、エージェントの人が控室で、行って、何回も何回も行き来して、で、資料をね、直前に来ました。そしたらもうグラフばっかり。グラフとか図ばっかりで、で、「できません」って。「ブリーフィングもしてもらいますから」って。「いや、できません」って言って。

平塚：え、それですか？ ブリーフィングもするのに？

E：そうなんです。だから、でも、その場になってみたら、まあ、その場になってみて、あの、聞いたならそんなにできない内容じゃなかったんです。

平塚：そうなんですか。

E：でも、やってあげなくて、その、先生も始まる前に冒頭でね、あの、「誰も私の講演を今日は通訳してくれる人がいませんから、中国語でやります」って言って、

平塚：えー、うそー。うそー。

E：で、ずっと中国語のままになっちゃったんですよ。で、すごくそれはね、せっかくの学会なのにもったいないし、

平塚：えー、そんなことがあったんですか？

E：うん。それはやってあげるべきだったと思います。

平塚：ですよ。えー！？

E：だから、そういうのは、確かに、事前の、たとえば、

平塚：まあ、分かりますけどね。

E：契約ですから、契約の内容に入っていないことですよ。で、やらなくてもいいです。そんな条件も、向こうも資料を出さないって言ったら向こうも悪いし。

平塚：まあ、確かにその通りです。うん。だけどね……

E：でも、やっぱり発生したらやってあげなきゃいけないし、

平塚：だってね……

E：よくね、あと、会場で「何々の DVD 流します」って言って、「できません」「やりません」っていう人いますけど、それもやっぱり、

平塚：それもね……

E：会場の人が、DVD 流れてるのに、内容分からないとつまんないじゃんと思ってね。

平塚：いくら、あの、ね、完璧にできなくっても、

E：そう。「いいから」って、それも言ってたんですよ。

平塚：そうですね。

E：だって、完璧に同通ができるわけじゃないじゃないですか。

平塚：そうですね、そうですね。なんだけど……

E：で、できる範囲だけ、2人で、パートナーで協力し合ってやれば、それこそ、こう、5割なんて低いパフォーマンスにはなり得ないし、6、7割はいくんですよ。

平塚：そうですね。

E：そこまでいけば。

平塚：そうですね。

E：で、パワポも出てるし、結構いけると思うんですよ。

平塚：へえー。そうですか。

E：だから、それはプライド全開じゃなくて、あの、クオリティが……

平塚：うん、クオリティ……

E：できませんって。自信がないのか、なんか分からないんですけど。

平塚：でも、実際、その現場になったら、対応せざるを得ないことってほとんどですよね。

E：そうですね。だから、それはね、職人としてはNGでやりたくないですけども、

平塚：しょく、職人……職人……

E：職人だったら、「俺はこんな条件じゃできねえ」って。

平塚：宮大工ですか、それ。宮大工ですかね。「普通の家なんか建てられるか」みたいなね。

E：リフォーム屋さんとかだったら全然ねえ……

平塚：そうですね。ああ、でも、そうですか。実際はね、まあ、確かに、その、欧米のほうでアイクでしたっけ？ あの、AIICの規定には、確かに「直前にそういうふうに出された場合、やらなくていい」とかってあるんですけどもね。

E：そうなんですか。

平塚：でもね、それは時と場合ですよ。

E：うん。だから、一番こう考えて、想像してみて、「こういう場合に中国語だけだったら、聞いている人はどう思うだろうか」とかね。

平塚：そう。中国語……だって、基本的には解さないわけでしょ？

E：そう。

平塚：解さないから通訳が呼ばれているわけでしょ。

E：そう。そう。

平塚：だから、ちょっ……

E：そしたら、まあ、もちろん解放軍のお医者さんの話だから、ほかのなんか協和病院だ、なんだ病院だとかいう中国のおじさんも聞いているだろうけれども、

平塚：でも、そっちにね、講演するわけじゃないでしょ？

E：そっちは少数ですよ。

平塚：そうでしょ。そうでしょ。

E：せっかく中国の話が聞きたくて、日本のお医者さんがたくさん来てるのに、

平塚：そうですよね。

E：それはね、なんか、自分で「クオリティーが出せないからダメです」って言っちゃうのは、あまりにも、あまりにもひどいかなど。

平塚：そうですね。うーん……。や、っていうか、私だったら、両方……。うん、完璧にも当然できないし、

E：いや、そんなことない。

平塚：できないし、で、その断る勇気もないし。なんかね……

E：でも、かわいそう。エージェントの人はね、

平塚：なんか、中途半端に終わりそうな気がする。

E：いえいえ、大丈夫ですよ。「ああ、ああ、分かりました」とかって。

平塚：「ああ、じゃあ、しょうがないですね」って言って。

E：だって、1人でやるんじゃないんだから。

平塚：まあ、そうですよね。

E：2人でやるんだから。

平塚：そうですよね。えー、でも、そうですか。

E：そう。でも、もしね、だから、すごい条件悪いけど、やるって決まったら、「じゃあ」とか言って、私も無理やりブースに入って、一生懸命だからね、

平塚：それしかないですよ。

E：協力はしたのに。でも、その2人が結局やらないって決……1人がやらないって決めちゃったから。もう1人はね、エージェントが何回も行ったり来たりして交渉して、で、「あの、お願いですからって言ってるんですけど」って、「いいえ、ダメです」って言って、もう1人の人がね、「あの、それでどうしてもかわいそうだったら、やってあ

げようか」って言ったんですけど、

平塚：ああ、そうですか。

E：でも、やっぱり、もう1人の人が「ダメ」って言って。「言葉にならないと思う」って。「だから」って言って。

平塚：そんなに内容が違ってたんですか、その、そのほかの講演の内容と。

E：いや、全然。

平塚：一応、共通項はあるわけですよね？

E：もちろん、そうです。

平塚：ふーん、そうですか。うーん、ちょっと残念ですよ。

E：うん。

平塚：なんか、自分がなんのために呼ばれてるのかっていうのが。ねえ……

E：そう。

平塚：ああ、でもね……

E：でも、それで、そのままその会が進んでいる場にいられるっていう神経もね、

平塚：すごい、それはね、私はね、絶対いられない。いられない。

E：ねえ。

平塚：ダメ、ダメ。

E：まあ、どっちもひどい訳をしていられる……

平塚：両方嫌だけど、両方嫌だけど。

E：ひどい訳をしていられないかもしれないし、

平塚：多分、そっちになりそうだけど。

E：でも、何もやらないっていうと、必ずこうやって見て、

平塚：何もやらないっていうのはもっといづらいかもしれない、ある意味。

E：うーん。

平塚：そうか、どうなんでしょうね。難しいですね、なんか。

E：難しいです。だから、もう、別にそれもありだとは思いますが。

平塚：うんうん。だから、それでね、あの、ある意味、安易に受けちゃうと、また、「それでも対応できるんだ」というふうに誤解を招く可能性がありますからね。

E：あ、そうね。そう。次の人たちのためっていうのがあるんですよね。

平塚：そう、次の時にね。そう、それはありますよね。

E：それをやってしまうのはちょっとよくないかもしれないですね。

平塚：うーん、難しいですね。

E：だけど、その場のお客さんのことを考えると……

平塚：そうですよね。そうですね。いろんな人がいるから。一概に中国語通訳と言ってもね。

E：そうなんですよ。

平塚：そうなんですよ。いやー……いやー、勉強になりました、本当に、今日はありがとうございました。

E：いやいや、とんでもないです。

【F氏のオーラルヒストリー】

F： うちにですね、唐代詩人選集があったんですね。うちの父、両親が、漢詩が好きだったので、だから、普通はまあ絵本の読み聞かせとかしますよね、小さい小学1年とか2年とか、幼稚園とか、うちの母は陶淵明の詩が好きでね、その唐代詩人選集、まだ家にあるんですけど、父親のもんですけど、そこから適当にピックアップして漢詩を読んでもらったりしてたんですね。

平塚： えっ、それは小学生のとき……

F： もっと小さいとき、だから意味は全く分からないですよ。

平塚： ええー。

F： だから、漢文読んだ、耳から聞いた漢文のリズムっていうのは、結構、刷り込まれているんですよ。

平塚： はあー。それは、例えば幼稚園に上がる前ぐらいから。

F： そうなんでしょうね。小学校低学年までぐらいでしょうね。

平塚： そうですか。

F： 自分が字が読めるようになったら、自分で読むわけだから。

平塚： ええー、そうですか。じゃあもうだいぶもう、もう本当に生まれてから……

F： そうですね。まあ暗記したりとかはしないんですけど、あとは、そうですね。

あと、お正月の遊びも百人一首とかだから、ちょっと古文、漢文は、うちの中にはあったんですよ。

平塚： はあー、あっ、じゃあ、中国語も日本語も……

F： そうですね。

平塚： いわゆる古文と呼ばれるもの。ええー。

F： 違和感ないんですよ。あんまり。

平塚： そうですか。

F： 親しんできたものですから。

平塚： Fさん、一人っ子じゃないですよ？確か……

F： あっ。弟がいますけど……

平塚： 弟さん。弟さんもそんな感じで、一緒に……

F： ううん、でも、彼は、それほどその詩歌とか漢詩とかにはあまり興味はない。

平塚： ああ、でも、まあ、同じ環境でそうやって育って。

F：　そうですね。

平塚：　ああ、ということはじゃあもう小学校に入るくらいには、普通に古文とかが読めるようになっていた・・・

F：　いや、読めはしない、意味も分からないし、読めもしないけれども、その耳から入ったリズムみたいなもの。

平塚：　はあー、それは素晴らしいご両親ですね。

F：　いえいえ。

平塚：　そうですか。ふーん、っていうことは、どこか潜在意識というか、そこに・・・

F：　うーん、そうですね。はい。

平塚：　そういう音感というか、ところが植えつけられて・・・

F：　あると思いますよ。実際には漢文っていうのは中学以降しか習わないんですけど、ああこういうことだったのかって分かるわけね。なんか、古今和歌集でも、陶淵明の詩でも、李白の詩でもいいんだけど、「あっ、聞いたことある。これは、こういうことだったわけね」っていうのが、それは思春期以降に分かるわけですよ。13、4歳以降に・・・

平塚：　すごいですね。ハッハッハッ。すごい環境ですね。ああ、そうなんですか。

　で、ええと、でも、実際、中国語勉強しようと思ったのは大学以降ですよ。

F：　いや、中国語じゃないですよ、私。だから、漢文なんですよ、やりたいのは、漢文ですよ。

平塚：　あっ、そうか、そうですね。T大・・・

F：　漢文はもう、日本語ですから。

平塚：　あっ、そっか、そっか。そうですね。

F：　日本の中の、日本文学の中の一部としての漢文なんですね。

平塚：　ああー、そうですね。

F：　はい。

平塚：　それで、じゃあ大学はそちらのほうに・・・

F：　はい。そうですね。

平塚：　進まれて・・・

F：　漢文やりたいと思って。

平塚：　ということは、じゃあ、中高は、特に中国語に触れたことは・・・

F：　全然ないですね。

平塚：　ないということですよ。で、大学で・・・

F： 大学で、あの漢文を学べるから、中国哲学科だから、第1外国語は中国語、第2外国語が英語っていう、普通とは逆になるような感じです、はい。

平塚： そうなんですか。はあー、コマ数も違う？

F： そのときが、もちろん違います。

平塚： やっぱり。

F： 英語なんて週1回ぐらいしかなかったです。

平塚： そうなんですか。

F： もう、あの学科が、少人数、30人しかいないから、学科に・・・

平塚： ええっ、そうなんですか。

F： 哲学と文学と合わせて、2つの専攻合わせて30人だから、15人、15人しかいないので、「君たちは漢文さえ読めればいいです」っていう学科ですから、ほかのことはどうでもいい。

平塚： へえー、で、将来的には、じゃあそちらのほうで教鞭をとっていこうということ
で・・・

F： 教鞭をとるつもりはなかったんですけど。

平塚： あっ、そうなんですか。へえー。

F： はい。あの一漢和辞典の編さんとか、ああいうことをしたかった。

平塚： 編集者。

F： 編集者。

平塚： 兼研究者。

F： 研究者。

平塚： ですよ。そう、そうなんですか。

F： はい。

平塚： で、それで、えっと大学のときに留学をされたんですっけ？

F： いえ、あの大学を出てからですね。香港に行けるのは。

平塚： 卒業してからでしたね。それはどういうきっかけで・・・

F： あれは、あの、えっと卒業論文を書くにあたっては、漢文だけ読めてちゃいけない
っていうことがあって、もちろん、扱うものは古典なんですけれども、その教科書には、
現代中国語の注釈が振っているんですね。

平塚： はい、はい、はい、はい、はい。

F： ね、あの写真本とかだったら、漢字だけなんですけど、そのほかに印刷されたテキストは、論語なら論語で、論語のこう1句があると、その下に細かい字で注釈が出てるじゃないですか？

平塚： はい、はい。

F： その注釈が案外、現代中国語的なものなんです。現代っていうか、近代？

平塚： 近代、はい、はい。

F： 近代中国語で、そうすると返り点打つのがとても苦勞するんですね。

平塚： うーん、そうですね。

F： もう、無理やり返り点打って、魯迅の作品にも返り点打って読んでいたぐらいだから、返り点打って無理やり読んでいたんですけど、どうもこううまくないので、あの、古典について書かれている注釈とか、評論とか、そういうものを読むために現代中国語が分からなきゃいけないですねっていう話で、それで、学校でやっているだけでは、全然足りないのね、それは、大人の書き言葉の現代中国語読みには、それで、あの大学3年のときに、えっと専門学校行ったんですね

平塚： はい、はい。K(学校) ですよ。はい、はい。

F： そうですね。で、3年と4年のときに、毎日、午前中は専門学校行って・・・

平塚： えー。そうなんですか。

F： あの、当時はですね。1年間に取れる単位の上限の数とかあまり決まっていなかったというか、かなり自由だったんですよ。

平塚： そうなんですか。

F： 1、2年生で頑張ると、3、4年生はすごく暇なんですよ。

平塚： あー、はい、はい、はい、はい。

F： で、4年生なんかは、もう、卒業論文書くだけでいいっていう感じなんで。

平塚： そうですね、そうですね。

F： 学校に毎日縛られないから、まっ、必要な必修のものとかを除けば、あと午後にはちょっとポツポツと入れれば、午前中いっぱい専門学校行っても平気だったんですね。

月曜日から土曜日までは、午前中2時間は帯で専門学校の授業に行って、週に2、3回大学行って、あとバイトとかでやってたんですね。

平塚： で、じゃあそれで卒論は、一応クリアしたんですね。

F： そうですね、そうですね。それで、別に就職する気もなかったんですね。

平塚： えっ、そうなんですか？

F： まっ、どうにか自分が食べていけるだけだったらバイトでもどうにかなるから、あの、勉強しながらバイトして、ある程度お金がたまったら、大学院受けようかなって思っていた。

平塚： で、それが、なぜ香港に？

F： うちの父が香港中文大学の先生とお友達で、知り合いで、なんか、何を思ったのか。

平塚： 中文大でしたっけ？

F： はい。

平塚： あー、そうですか。はい、はい。

F： あの一、私が中国語の専門学校に通って勉強していることを、どういうふうに思ったのか分からないのですが、もうちょっと本格的に勉強させたいと思ったらしくて・・・

平塚： あっ、お父さまが？

F： はい。勝手に話をつけて帰ってきちゃったんですね。「行け」っていうことなんで、で、しょうがないからって思って、そんなに行きたかったわけじゃないですけど、読み書きできればいいんですから、私は、しゃべるのとかあんまり好きじゃないですね、もともと。だから、それこそさっき言ったように辞書の編さんとか、あまり人と会わないで、漢籍に囲まれて穴みたいなのところにいるような仕事が自分には向いているとずっと思っていましたから。

平塚： そうですか。

F： はい。

平塚： で、そうお膳立てをされてしまって・・・

F： されてしまったので、しょうがないから、行ったんですね。

平塚： それも、ハッハッハッ。すごいですね。素直に。

F： やっぱあの、その当時は、あの、親に逆らうってことはあまり考えないですよ。

平塚： そうなんですか。

F： はい。しょうがないなって。

平塚： 先生、そんなに離れてないと思うんですけど・・・

F： いやあ、どうなのかな？うちがそうなのかな？あまりねえ、あの、反抗できないですね。

平塚： ええっー。

F： 「ああ、そうですか」 っていう感じだった。

平塚： ハッハッハッ。ですか。まあでも、親御さんが・・・

F： はい。

平塚： その学費は出して・・・

F： いや、それが出さなかったんですよね。大学のと時から自分のバイトで行ってたんですけど。

平塚： ですよ。前、そんなお話を・・・

F： あの、留学しても、やっぱり出さなかったですね。

平塚： ええー、それなのに。

F： はい。

平塚： ええー。

F： だから、まあ、夏休みバイト一生懸命してたための学費とか、バイト代とかで全部払って、また今度、冬休み戻ってきて、ガァーっと働いて、また払ってっていうようなあれだった。

だからもう、そうね。1日、例えばごはん食べるの500円って決めたら500円っていう生活をずっと香港でしてて、疲れますよ。

平塚： そうですか。

F： はい。もう歩いて行けるところは全部歩いて行くし・・・

平塚： はい、はい、はい。

F： もぐりのバイトもするし・・・

平塚： もぐり？

F： 当時、あの留学生バイトしちゃいけなかったんですよ、香港で。

平塚： あっ、そうですか。えっと、香港もですか？

F： 学生ビザ。今は知らないんですけど、駄目でした。

平塚： 今はしてますよね。ガンガンね。

F： そうですか？

平塚： ええ、ええ、確か。

F： だから日本語の家庭教師とか、ちょっと割のいいアルバイトを紹介してもらって。

平塚： はい、はい、はい、そうですか。すごいですねえ。なんて孝行娘なんでしょう。

F： いえ、いえ、いえ。しょうがないですよ。ほかにだってやりようがないですから。

平塚：　そうですか。だって自分でそれで、学費も払って・・・

F：　「もう、疲れちゃうな」と思いながらも、まっ、しょうがない。

平塚：　そうですか。

F：　あんまり文句言わないほうだから。

平塚：　そうですか。いや、そう。

F：　そうなんです。それで、あの中文大学の、その、一応留学生、外国人の留学生向けの語学センターがあるから、そこに一応入ったのね。

でも、2年間、3年と4年のときに専門学校でやってたから、あの、7段階のクラスの内4番目、そうですね、上から4番、ちょうど真ん中ですね、あの4番目に編入さしてもらって、えっと今まで使っていた教科書を見せたり、インタビュー受けてりとかして、「じゃあ、4番目」とかなって、で、4、5、6、7やって帰ってきたんですね。

平塚：　そうですか。じゃあ、一応終わって・・・

F：　で、もう、あの、現代中国語でペラペラしゃべるなんてなんていうこと目的には、あまり思っていないから、まっ、「やれ」って言えばやるんだけど、そんなに気が進む勉強でもないんですから、でも、聴講で文選の授業とか受けたんですけど、ちょっと分かんなかったです、やっぱり。

平塚：　そうなんですか。

F：　はい。ほかの大学院生たちが言っていることも、あまりよく分かんないし、あの読めるのは漢文だけで、先生の講義の内容も聞いてもあまりよくピッとこない。

平塚：　行ってたのは、1年半？

F：　そうですね。だいたい1年8カ月ぐらいになったですかね。

平塚：　そうですか。

F：　でも、その間、ちょっと帰ってきてはバイトしてとかいうのもあったから、そんなみっちりじゃないですけど。

平塚：　ああ、そうですか。いやー、そのモチベーションを保持できた・・・

F：　モチベーションなんかはないですよ、それは。

平塚：　なかったですか。

F：　そういうところに、そういう境遇に放り込まれたらサバイバルするしかしょうがないじゃないですか。

平塚：　ああー。

F： 会社の仕事も同じですよ。

平塚： まあ、まあ、会社はね、ルーティンになってしまえば、できる。留学もそういうもんですかねえ。あっ、でもそういう方もいたかなあ。ハッハッハッ。そうですか。

F： だから、そんなに、あの、自分がやりたいからとか好きだからとか、あまりないからね。

平塚： そうですか。でも、漢文は、好きだったんですよね、そうですね。

F： 漢文は、楽しみなんですよ。でも、それほど情熱的でもないです。ただ楽しみっただけで。

平塚： いいですね。うーん。人ってやっぱり思ったようにしか生きられないという感じかな、ハッハッハッ。

F： そうですね。

平塚： そうですか。で、えっとまあ留学を終えて、戻られて・・・

F： 戻ってきてまた、あのK先生のところに行ったんですね。

平塚： あっ、そうなんですか。

F： で、前は大学のときに通っていたのは、えっと現代中国語学院っていう名前だったんですけど、その後、K先生は自分で学校をつくって、K中国語学院ってなって・・・

平塚： あれは独立されてなったのではなくって。

F： それで、私はK先生のところに行ったんですね。ほかの学校もできてたんですね。分裂、独立みたいな形で。

平塚： ああ、そうですか、はい。へえー。で、そこで、どのくらい？

F： で、K先生のところで、一番上のクラスで、やっぱり趣味的に習ってたんですよね。

そしたら、商社の方が中国語勉強しにきていて、ちょうど中国との貿易がすごく伸びて、人手が足りない時期で、「誰か紹介してください」って言われたんです。

で、K先生が私に、「なんか働き口があるらしいから、電話して面接してみたら」って言ってくれて、で、それも面倒くさいなと思ったんだけど・・・

平塚： そうなんですか。

F： でも、先生がわざわざあの、選んで紹介してくれるから・・・

平塚： そうですね。

F： やっぱり、顔を立てなきゃいけないから、もう面接に出掛けたんですね。

そして、えっとあれはですね、多分中国の北のほうで育ったバイリンガルのおじさんだ

と思うんですけど、上司に、後に上司になる人、その出てきて、中国語で面接があつてね、履歴書、「じゃあ履歴書、中国語でね、読んで、説明して」ってそういうような感じ、それあの採用されたもんですから、入っちゃったんですね、横入りですよ。

平塚： それがN社だった。

F： ですね。N社、はい。正面突破したらは入れない会社ですけど・・・

平塚： 正面突破。ハッハッハッ。

F： 横入りで、入っちゃったんですよ。

平塚： ああ、確かに日中貿易がすごくて・・・。

F： ええ。

平塚： あの、こう急激に増えてきた。

F： そのときあの、中国語ができる人、あのとりあえずちゃんとした文が読み書きできる人っていうのが足りなくてしょうがなかった時期だから・・・

平塚： それって80・・・

F： それは84年？

平塚： 84年ぐらいですかね、それぐらいですかね。そうですか。

F： そう。

平塚： ということは・・・

F： 帰ってきて、私すぐに結婚しちゃっていたもんだから、既婚者で入って・・・

平塚： そうですね。就職より結婚のほうが早かったっておっしゃってましたよね。

F： そうなんですね。

平塚： うん、うん、うん。でもそれは、一応条件で・・・

F： 別に構わなかったみたいなんですけど・・・

平塚： そうですね。だからやっぱり語学要員というか、そういう方がとにかく欲しいっていう・・・

F： それだけ人が足りなかった時期なんですね。

平塚： そうですね。

F： だから、忙しかったですね、数年間。

平塚： へえー。でも、もともと先生、ご興味、漢文ですよ。

F： はい。

平塚： で、その、商社といたら全く別世界じゃないですか。とにかくしゃべること

すよね。

F： まあ、翻訳も結構たくさんあるんですね。

平塚： あっ、そうか翻訳が、はい、はい、はい。そうですね。でも、あの出張業務ありますよね。

F： 出張多かったですね。

平塚： ありますよね。それは、特にあまり不満なく・・・

F： まあ、しょうがないじゃないですか。そういうところに自分入っちゃったんだから・・・

平塚： そうです。ハッハッハッ。「しょうがない」っていう言葉が・・・

F： しょうがない、うん。

平塚： 先生の人生のキーワードになりそうなんですけど。

F： そんなことないですけど。

平塚： そうですか、そうですか。

F： まあ、あの、のちのちのことも考えたら、その中国と全く縁のない仕事をするよりはね、そのそれこそ、単純なバイトをするよりは、いいんじゃないですか。

平塚： そうですね、そうですね。

F： 中国人とか中国語とか触れ合うチャンスも多いですし・・・

平塚： ただ、ええと、まあ、そうすると中国貿易ということで、どちらかという、ねえ、どちらかという、先生が習っていたまあ、香港でのその言葉と、またちよっと違うじゃないですか、大陸の・・・

F： ええ一つ。香港は、大陸の先生が半分、台湾の先生が半分なんです。

平塚： そうなんですか。それはじゃあまり違和感なく、そうですか、そうですか。

F： はい。はい。だから当時はレポートを出すのも、大陸の先生には簡体字で書いて、台湾の先生は繁体字で書いて・・・

平塚： そうなんですか。

F： はい、やってみました。まっ、簡体字か繁体字かどっちか一方で押し通す人もいたんですけど、あの、私はどちらかという、気が弱いのかな、相手に合わせちゃう。

先生が見るにも「こっちのほうが見やすいだろうな」と思うから・・・

平塚： 素晴らしい。そうですか。

F： だから全然違和感もないですし、教科書も両方ありましたし・・・

平塚： そうですか。そういう意味では、いい環境なんですね、香港って。

F： うん。で、ほかの人と違うのは、もともと中国哲学科なんで、漢文読んでたから繁体字のほうに分かるのね、もともとはね。でも、専門学校は全部簡体字だったから・・・

平塚： あっ、そうなんですか。

F： そうなんです。はい。そうなんですね。専門学校のほうは大陸の教科書を使っていたので・・・

平塚： そうですか。

F： 簡体字で、学校行けば古文だから、繁体字で、もともと両方ですから、どちらでも構わないんです。

平塚： そうですか、そうですか。それは、それは、まっ、今、考えれば理想的というか・・・

F： そうですね。今の学生は繁体字ものすごく嫌がるんですよ。

平塚： そうですね。そうですか。で、商社でえっと、何年でしたっけ？勤めたの。

F： 約6年ぐらいですかね。

平塚： 6年ぐらい。そうですか。

F： 90年で辞めたから・・・

平塚： あっ、じゃあ6年間。

F： はい、およそ6年ぐらい。

平塚： で、まあ、そのときはもう違う学校通ってらっしゃって・・・

F： あの、商社に入って、4月1日入社ですよ。で、5月に、あっ、そのちょっと前かな。入って割と早い時期に、あの、通訳みたいなことさせられたんですね。

平塚： はい、はい、はい。入ってすぐ・・・

F： その最初に面接してくれた人が、すぐに上司になって・・・

平塚： はい、はい、はい。

F： 「あの一、船積みの講習に行くから行きましょう」って言って、どっかの船会社に行って、中国の人がきていて、そこに、で、あのなんか基礎知識もほとんどないのにね、「ちょっと通訳してみて」って言って、やったわけですよ。で、「これ、いいのかな？」って、でもなんとなく通じてて、話は済んだんですよ。「なるほど、じゃあ、9月のなんとかで、何トン」とかなんとかとかいって、そんなに難しい話じゃなかったからやらせたんだと思うけど、で、上司が横のほうに、端っこに座ってこうほおづえつきながら、ニヤニヤしながら見ている、あれテストだったかもしれないですね。

平塚： ああー。

F： 使えるかどうかの・・・

平塚： はい、はい、はい、はい。えー、そうなんですか。

F： うん。

平塚： で、一応そのじゃあテストには合格したということで・・・

F： じゃないですかね。それからあの、「じゃあ、翻訳、通訳やっってもらうから」、それから、新人に中国語教えてやってくださいって言われて、お昼休みにごはん食べながら、若い新卒の男の子ね、中国貿易をこれからやっってもらうことになっている、その子たちに中国語教えてっていうことをやっていて、業務時間外なんですけど。

平塚： えー、じゃあそれからは、通訳翻訳をメインに、ジョブでやってらっしゃったという。

F： そうですね。ほとんどそうですね。あのほかの仕事ができないですね、だから・・・

平塚： 営業とかは別にかかわってほしいとか・・・

F： 英語？

平塚： 営業っていう。

F： 営業は、営業の人にくっついて、通訳、翻訳をするという立場なので、あくまでも人が言ったこと、人が書いたことですよ。だから、それはそれで気が楽じゃないですか。

平塚： そうですよ。

F： 自分が表立って契約を取ってくるとか、なんかあの一生懸命交渉したりとか、値段ね、これはドル建てだからとか、為替予約がなにかっていうそういうことは、あんまりしなくて、通関の仕事もしなくていいし・・・

平塚： そうですか。それはもう完全に、通訳、翻訳業務・・・

F： 完全に、社内通訳、翻訳者っていう形の仕事ですよ。

平塚： そうですか。

F： それでずっとやってました。結構、あの、業務の範囲が広がったんですね。物資部門ってところに最初入ったから・・・

平塚： 物資はなんでもありますね。

F： 機械もあるし、木材もあるし、なんかありとあらゆるものがあるんですよ。

平塚： そうですよね。あっ、でもそういう意味では、いろんな分野に触れられたという意味でもよかったかもしれないですよ。

F：　そうですね。で、出張について、お客さん連れて出張についていくっていうのが、だんだん増えてくんですね。それで、なんだろう、自分の気に入ってた仕事は、出張報告を書くことですね。

平塚：　ええー、そうなんですか。

F：　はい。

平塚：　私、出張報告が一番苦手でしたけど・・・

F：　あっ、そうですか。

平塚：　あれと、精算業務が一番嫌で、そうですか。

F：　まあ、翻訳とか通訳もある意味面白いのだけでも、その、あの出張中にどこに行って、何をして、どういう話をして、こういうことが起こっててということをレポートにまとめるのがすごい好きで・・・

平塚：　そうなんですか。

F：　面白い仕事だなと思っていた。

平塚：　そうなんですか。それは営業マンじゃなくて先生の仕事だったんですか。

F：　いや、みんな書くんだけど・・・

平塚：　全員が書くんだ。

F：　でも、私が一番詳しく書いてたんですよ。

平塚：　そうですか。

F：　だから今でもちょっとねえ、あの通訳って、あとに記録を残す仕事じゃないって、建前上教えるわけじゃない？

平塚：　そうですね。

F：　ノート取るけど、それを再現して議事録にしなくていいって、でもそれをまさに自分やってたんだけど・・・

平塚：　あー、そうなんですか。

F：　で、その中には、例えばこういう言葉遣いだから誤解が生じるけど、これをこう言い換えれば、あの分かりやすいというようなことも、メモとしては残していたんです。

平塚：　メモで残してたんですか。それは貴重ですね。

F：　それから、翻訳の文章がありますね、商業通信部の翻訳、それも全部ファイルにして集めておいて、で、あるとき、いいこと思いついたと思って、こう切り張りしてね、始めの言葉こんな感じとかね。で、あのおわびするときにはこんな感じっていうの、全部切

り張りして、それ本になったんですよ。

平塚： そう、そう、そう、そう。私もよく使わせていただきましたよ。

F： あっ、そうなんですか。

平塚： 商社にいたときに、あっ、これはすごい良いテキストと思って・・・

F： ただこっちで集めて、本場の人が書いたのだから間違いないしと思って・・・

平塚： ですよ。

F： でも、今、見てみるとちょっとへんてこなのもあるんですけど・・・

平塚： 今、絶版になっちゃったんですよ、あれね。

F： はい。あとからあの、もっといいのが出てきました、あれ、薄い本だし。

平塚： そう、そう、そう、そう。いや、でも、でも、ほんとに使わせていただきました。

F： でも、みんなが使えるようにと思って、冊子にしてコピー取って、中国関係やっているとところにあげてたんですね、そしたらその上司が見つけて、広報に掛け合ってくれて、本にしてくれたんです。

平塚： そうですか。素晴らしい。

F： だから、なんかそういう、ちまちまものを書いて、あの、分類してっていうのは、結構好きなんですね。

平塚： あー、素晴らしい。

F： そのあと、食料部門に移ったから、食べ物のね、食品関係の仕事になりました。で、そのときもあの、えっと、各品目ごとに分類して、全部辞めるときにファイル。残してきただんです。

平塚： そうですか。

F： はい。だから大豆の商売だったら、相場いくらぐらいになって、1ロットがどのくらいの量で、で、交渉時期は何月で、交渉相手はどこどこか、そういうのを1つ1つ、ファイルメーカーみたいなもんだよね、今で言うね。

平塚： はい、はい、はい、はい。そうですね。

F： それをつくって置いてきたら・・・

平塚： 素晴らしい、素晴らしい。

F： そしたら、なんかその部署の人から、「これがあったら君いらぬ」って言われた。で、まあ、それはそれでいいことじゃないんですか、はい。

平塚： そうですよ、そうですよ。さすがですね。

F： ちゃんとあの自分が書いたものが、すごく高く評価されたってことですよね、はい。

平塚： そうですよ、そうですよ。いやー、でもすごい。じゃあ本当にそれこそ、ねえ、円満退社ができたわけですね、そんな感じで。

F： そうですね。まあ、いろいろ言われましたけどね。

平塚： あっ、そうなんですか。

F： 私も悪かったですから。あの、「ここで月給もらうより、フリーになったほうが3倍稼げるんですよ」とか言って辞めてったから。

平塚： そうなんですか。

F： そう言われたからね。

平塚： そうなんですか、強烈な辞め方ですね、そうですか。

F： ただもう出張の回数とか、期間が長くなって疲れちゃって。

平塚： えっ、中国出張ですか？

F： 営業日数の半分くらい中国に行っているとか、信じられないですよ。

平塚： えっ、月の半分ってということですか？営業日数の・・・

F： えっと、全部足すとね、営業日数のね。

平塚： えー。

F： ときには、今、ハルピンにいるのに、「これから上海行ってくれ」とか電話かかってきたりして、冗談じゃない、「着る服がないです」って。

平塚： そうですよね。そういう使い方をするんですか。

F： うん。

平塚： それはちょっとつらいかもしれない。

F： そう、だから、まあ、既婚女性にとっては無理ですね。

平塚： ですよ。

F： はい。

平塚： そうですよね。

F： 辞めたいって言ったら、「お疲れなんですか」とか言うから、「体は大丈夫ですけど、家庭の危機です」って言って辞めたんです。

平塚： ですよ。えー、でもご主人はちゃんとでも、それは理解してくださってたんですか？

F： そうですね。まあ、なんにも文句は言わないけど、でも、嫌でしょ。いくらなんで

も・・・

平塚： 半分はちょっと、ですよ。で、じゃあそのN社にいるときに、もうすでにサイマルに行かれてたんですよ。

F： だから、商社に入って、一応、通訳とか翻訳とかさせられたけど、あんまりできないから、自分で納得できてなかったですね。これ、一応通じてるけど、上手じゃないとか、すごい分かるじゃない？自分で、言うとおりに言えなかったとか、それで、あの、その商社に入った年の4月はもう間に合わないからね、秋から早速・・・

平塚： あっ、9月に、はい、はい。

F： 習いに行きました。

平塚： じゃあそれこそ、立ち上がってすぐぐらいじゃないですか、サイマルも。

F： はい、はい。目白にあったときですからね。

平塚： ああ、そうですか。ということは、Hさんとかと同期ですか。

F： Hさん？

平塚： Hさん。あっ、そのときは結婚してないか、ええっと、あの、松、えっ、政治家のお孫さん、ええっと、お名前なんてったっけ、忘れちゃった。

F： ええっと、同期なのはOさんとかですよ。O・Kさんとか。

平塚： じゃあ、じゃあ、もう少しあの方たちはもうちょっと昔ですね。そうですか、そうですか。Oさんが同期ですか。何年ぐらいいらっしゃったんですか、サイマルに。

F： 2年半ですね、はい。

平塚： 2年半ですか。

F： 上に行こうとしたら破門されましたからね。

平塚： えっ。そうなんですか。

F： はい。

平塚： あの、あの方、あの方。

F： ええ、まあ、それがもちろん一番大きい原因だと思うんですけど、あの、そのとき言われたのは、会社を辞めてサイマルの専属の通訳者になる人が上に行けるんだっていう話だったから、あっ、じゃあ駄目だって思って、まだね、商社を辞めるつもりはなかったので、それなりにまあ面白い、仕事自体は面白いし、フリーになるつもりも、どっかの専属の通訳者になるつもりもなかったんで・・・

平塚： ああー、そうですか。

F： 通訳者として働いているっていうつもりではなかったんですね。

平塚： あくまでも業務の一環というか・・・

F： 一環ですけど、ほとんどなんですけど・・・

平塚： ああ、まあ、そうですね。そうですか。

F： で、今、辞められないしって、会社で本まで出してくれちゃってるから・・・

平塚： そうですね、そうですね。

F： そんなね・・・

平塚： すぐね、切り替えるわけにはいかないですよ、ああ、そうですか。

F： そんな不義理なこともできないじゃないですか。

平塚： そう、それでじゃあ。

F： まあ、いつかって・・・

平塚： 辞められて、学校は辞められて・・・

F： そうなんです。でも、もともと、何かを習うのが好きだからね、で、ISS 行って、でもサマーコースと・・・

平塚： ISS は、でも先生、最初から教えてらっしゃったんですよ。

F： いいえ、えっと最初からじゃないと思いますよ。だって最初は K・M 先生とか、S・E 先生とか、ああいう大御所の方々が教えてらして・・・

平塚： ああ、そうですか。それは何年ぐらい。

F： だから、サイマル辞めたすぐあとの夏のコースですよ。

平塚： そうですか。87 年とか・・・

F： 86、7 年とか、なんかそんなのじゃないかな。87 とか 88 とかかもしれませんけれども。

平塚： で、じゃあ、まあそこで ISS に移られて、それからもうすぐですよ、教鞭とられるようになったの。

F： あの、ISS の通常のコースには通ってないんですよ。

平塚： あっ、そうなんですか。

F： 夏の短期のコースだけです。

平塚： サマーコース、はい、はい。そうですか。

F： 結構楽しかったですね。まあ、やってることも。

平塚： じゃ、どういうきっかけで ISS に・・・

F： あの、そこで、ええと、すごい話なんだけど、まだ会社員だったのに、電話がかかってきて、国際会議のね、通訳をね、1人足りないからね、入りませんかと言われてたの。

なんかすごく大型の会議で、たくさん人数が必要だったのね。でも、まあ、誰でもよかったんじゃないかと思いますが、で、やったことないけど、それこそ同時通訳なんか、教室の中でしかやったことないですから・・・

平塚： ああ、そう、じゃあ、OJTみたいな感じで・・・

F： でも、と、思いますよ、OJT だったんだと思うんですけど、いきなり、えっとやったんですよ。そのときは、えっと誰と、Eさんがここにいる、Hさんがここにいる、なんか挟まれて座らされちゃって、できるところだけやればいよいよみたいなね。

平塚： そうなんですか？

F： だから司会とか、途中で「これ原稿あるから、これちょっとやってみ」とか、そういうふうな、なんかほんと、なんていうんですか、みそっかす扱い、見習い扱いみたいなので、ちょっとやってみて、すごくできなかったのね、めちゃくちゃと思って、自分で、最初はもう失敗するに決まっていますけど、「困ったなあ」と思ったんですよ。

それでも、さっき言った話じゃないんですけど、毎日ね、満員電車で揺られて遠いところ、会社通って、それで月給いくら、年収いくらぐらい、フリーになればずっと楽に、ずっとたくさん稼げるよ、みたいなことを言うんです。

で、そのときもらったギャラが自分としては破格に高かったですよ。こんなにくれていいのって思うほど、まあ、国際会議の通訳ですから、OJT で多分ほかの先生の半分くらいだと思うんですけど、それでもすごいなって思ったのね。そんなに、一生懸命働きたくないので、もともと、でも、ほら、やることはさ、あの一応の水準になってないと嫌じゃないですか。

平塚： はい、はい。そうですね、そうですね。

F： いくらあの、いいかげんでも、ある程度はもう、自分として合格点が取れてないと、嫌じゃない？だから一生懸命やっちゃうじゃないですか。一生懸命やっちゃうと、時間もなくなるし、エネルギーも奪われるし、で、同じことをやるんだったら、じゃあ、フリーのほうがいいな—と思ったのと、もう一つは、天安門事件で、あの89年の天安門事件で、あの、中国関係の仕事、だあ—って減って、会社に行ってもあまりやることなくって・・・

平塚： 私、あの年に入社したので、もう入社してすぐあれが起きて、全く仕事がなくて・・・

F： そうですね。

平塚： あっ、そうですか、そのときに。

F： そしたら、その仕事がないければ、あの、ほかの女子社員と同じ仕事をすればいいわけなんだけど、それができないのね。今までやらされてこなかったから、今まで全部翻訳とか通訳でやってたので、通関書類とか書けないし・・・

平塚： そうですよ。つくれって言われてもねえ。

F： つくれって言われてもつくれないし、なんだかねえ、せいぜい机ふいたり、お茶入れたりとかしかできないじゃないですか、女子社員の仕事が・・・

平塚： はい、はい、はい。そうですよね。

F： だからちょっとつまらない感じになってった。だから辞めちゃおうかなって、思い始める・・・

平塚： それで、最終的にお辞めになったのが・・・

F： あの、90年です。でも、まだグズグズしてたんですね。なんか、ほかの人は会社員としてちゃんとできてるのに、自分は辞めるっていうの、なんか負け犬になっちゃったような気がするじゃないですか。

平塚： あー、はい、はい。

F：なんで、ここで、自分は続かないのかなって思うじゃない？

平塚： あー、でも6年いらっしゃったら十分なような気がしますけど・・・

F：あとまだ紹介してくれたK先生がご存命だったので、悪いかなと。

平塚： そうですか、そうですか。ああ、そういうこともありますよね。そっか、そっか、紹介で・・・

F：ちゃんとやっておかないと。

平塚： そうですよね、それありますよね。

F：メンツつぶしちゃうかなとか、でも、まあ、今考えれば、6年しっかり働けば、もうメンツも立つとは思うんですけどね。

平塚： そうですね。

F： 「もう、あなたが紹介してくれた人辞めちゃったよ」とか言われると、やっぱりがっかりするんだろうとか。で1年、1年でもないかな。夏ぐらい、6月に天安門事件が起きて、夏、秋ぐらいまで、全然なんにもならなくて、その次の年の12月で辞めたんですね。

平塚： そうなんですか。

F： だから辞める前に、全部自分の仕事をまとめたものをつくって、このファイルがこのくらいありましたよ。

平塚： 十分ですよ、それはもう。飛んでも立つ鳥あの、跡を濁しまくって辞める人がほとんどなのに、私の前任者なんかもう濁しまくって辞めましたから、そうですか。で、それで、まあ、お辞めになられて、で、もうすぐに・・・

F： はい。でも、あの、勤め人はもうやるのをやめようと思って・・・

平塚： はい、はい、はい。それじゃフリーでということ・・・

F： はい、フリーになって、で、フリーになったら結構仕事いっぱいあって、翻訳も通訳もすごく順調に走ったんですね。だからほんとにですね、どんくらいですかね、ええっと、元の年収100%とすると、次の年160%ぐらいになったんですよ。すごいんですよ。

平塚： そうなんですか。まあ、3倍まではいかななくても。

F： 3倍まではいかなかったですけど、さすがに。

平塚： そうですね。

F： だから6割増しになってと思って、すごいなって、でも、忙しかったからね。

平塚： うん、うん。そうですね。でもある意味、それだけ通訳業務が入ってくると、会社員をやったときより忙しくなったんじゃないですか。

F： そうですね。はい。でも、会社と違って、あの、出張しても、その仕事の時間だけやればいいのか、すごくうれしい。

平塚： あー、確かに、確かに。そうですね。拘束時間が違いますよね。

F： 国内出張で、すぐ帰ってこられるのも多いし、辺りなどに行かなくて済むし、あの、会社の出張のときは、すごく田舎が多かったんです。食料とか、ほら、畑で取れるもの。

平塚： ああー、物資関係はそうですね。

F： はい、田舎が多かったです。でも、フリーの通訳者って、町が多いですよ。で、いいホテルに泊まらせてくれますよね。

平塚： 都会、だいぶ違いますよね。

F： だいぶ違うし、それ、朝起こしてから夜寝かせるまで面倒みるってことないですよ。ね・・・

平塚： ああ、確かにそうですね。

F： フリーだと。ああ、これはうれしい。

平塚： 確かにそうですよね、割り切れますからね、そういう、うーん、そっか。それでも・・・

F： だから、まあ、翻訳も結構いっぱいあったから、家でできる仕事・・・

平塚： そうですか。じゃあもう本当にそれこそ理想的な働き方ということに・・・

F： そうですね。

平塚 うーん。そうですか。で、フリーで、ほぼ10年くらいですか。

F： 10年なんですけど、あのその間に、輔仁大学に行ったのが入ってるので・・・

平塚： そっか、そっか、そうですよね、そうですよね。

F： 93年に輔仁大学に1年間ですから、その間は、国内ではあんまり働いてない。

平塚： そうですよね、そうですよね。で、94年に戻られて、また引き続きいて。

F： そうですね。94年でまた、ISSにですね。

平塚： そうですよね。そのころお世話になったので。

F： そうです、そうです。そうなんですよ。

だから、ISSで教えてたのは、実は89年の天安門のあとの秋からなんですよね、実はね、だからそのときはまだ会社員だったんです。会社暇で、毎週土曜日にクラスがあっても平気になっているような状態だから、なんかISSから「教えてくれませんか」って頼まれて、アルバイト禁止だけど、暇だからいいかなと・・・

平塚： あっ、やっぱり禁止なんですね。

F： 禁止ですね。副業禁止。

平塚： そうですよね。

F： でも、黙って・・・

平塚： みんな、みんなって何人か知ってますけど、そうですよね。

F： そこからですね、ISSで教えて・・・

平塚： そう、そう、そう。輔仁大学から帰られて戻られて、あの、自己紹介されてたのを覚えてるので、そうですよね。94年の10月にお世話になったので・・・

F： だから輔仁大学もISSを通じてね、Y先生がISSでちょっと同時通訳の訓練を受けたんですよ、あの、翻訳研究所を立ち上げるに際して、その縁でね。

ほかの先生にも聞いたらしいんだけど、会議通訳をしている先生たちは、みんな、あの仕事を失うの怖いでしょう。1年間も日本を空けたくないって、全員断ったんですね。

でも、私はちょっと興味があったんですね。その通訳教育法みたいなことを全然やって

いないから、どうやって教えてるのとか、ちょっと興味があつて、で、仕事はさ、フリーで翻訳とか通訳とかしていると、絶対この仕事を失いたくないとかいうことでもないの
で・・・

平塚： そこがいいんですよ、先生の場合、その、あの、あまり執着心がないというか。

F： そうですね、私。

平塚： なので、そこがいいんだと思うんですよ。

F： 執着心ないんですよ。どっちでもいいやっということがすごく多くて。

平塚： ほどほどの好奇心とね、そうですね。じゃあ、これでいいやっ。それが、すごく順調にきた理由じゃないかと思うんですけどもね、うん。

F： でも、やるからにはね、ある程度はやらないとね。

平塚： まあ、まあね。フッフッフッフ。いやーなんかあらためて話を聞くと、本当に・・・

F： あとは、じゃあちょっと勉強できるし、行ってみたいなど、で、台湾だから近いしね、あの一、1学期教えたら帰って来て、あの旧正月とか休んで帰って、またちょっと行って、だから1年間いたと行っても、半年、うん、せいぜい。

平塚： そうですね、そうですね。それで、家庭のほうもなんとかということですね。

F： そしたら、あの、S先生が所長でね、R・S先生、あんまりとっつきのいい人じゃないんだけど・・・

平塚： あっ、そうなんですか。

F： うん、愛想はよくないし・・・

平塚： そうですね。

F： 厳しいし、でも、あそこに行ったからね、ヨーロッパの通訳理論とかね、そういうのが・・・

平塚： そうですね。

F： ちょっと目が開かれる感じするじゃない？通訳についてもこんなにちゃんと研究されてて、それ知らないで自分ずっとやってて、なんたることかと思ったですね。

平塚： はい、はい。でも、大多数の方知らないですよ、それこそ。

F： そして、図書室にもいろんな通訳に関する本あるじゃない？

平塚： ああ、そうですね。ということは、だから最終的に、まあね、大学教員になるとか研究者になるとかいうのはそこから、つながってきてるのですよ。

F： つながった、結果的にはですね。

平塚： 結果的には、はい。

F： だから、あの、あっ通訳、翻訳に関しても、まだこんなに勉強できることいっぱいあるんじゃないですかというのが、そこで分かるじゃないですか、ほかの先生方は大学院出て、博士取ってとか、そういう人が、わーっていて、自分だけなんか単なる会議通訳の経験だけでできてるから、まっ、教えてることはね、中国語から日本語への通訳とかだから、まあ、教えるのはいいんだけど、でも、教授法とか分からない、理論も分からないで、ただ経験だけに頼って教えるだと弱いですね、やっぱりね。

平塚： そうですよ。あっ、それで、なんか全部つながってるんですね、先生。

F： 为什么呢かね。だから、それで、あっじゃあ、もうちょっとこれ勉強しないといけないなって思って帰ってきたんですね。

平塚： そうですか。

F： で、94年にそんなことを言ってたんですね、私がね。

平塚： ええ、ええ、ええ。そうなんです、そうなんです。

F： で、そのとき、日本の大学院ね、もう台湾の大学院のほうは行けないからさ、行けないっていうよりは、外国に住みたくないので、あんまり外国に住みたくないんですね。日本が大好き、それで調べて、準備をしていて、95年に大学院に入ったじゃん。

平塚： あー、そっか、95年でしたっけ。そっか。

F： 受験勉強してる時だったんですね、だからね、ちょうどね。

平塚： そうです、そうです。東大の試験で、はい・・・

F： そう、そう、そう。だから、輔仁大学に93年行って、状況が分かって、あっ、世界ではこんなにちゃんと研究されていて、自分は何も知らなかったと思って、で、すぐ、一時帰国したときに、大学院の案内みたいのをいろいろ集めたりして、で、あっ、こういう試験があつて、こういう先生がいてっていうのが分かって、で、だいたい1年間ぐらい、受験勉強とか準備をしてみて、それで95年から東大の大学院行ったんですね。

平塚： あー、そうですか。そうですよね。

F： だから結構面白かったですよ。

平塚： そうですよね。で、修士2年間で、博士にそのまま行かれて・・・

F： そうですね。

平塚： で、2000年から専任でしたっけ？

F： 2000年、1年間は非常勤だけで行って、2001年から専任になったんだけど・・・

平塚： あっ、そうだったんですか。そうですか、そうですか。で、まあ、ちょうど10年ですかね、今年、そうですよね。

F： そうです、そうです。そのときに、それがやっぱりISSの人に紹介されて、T先生に会ったのね。

平塚： はい、はい、はい。

F： 大学院行ってるるときか、そんなときもISSで教えてたから、あのT先生が、文化大革命十年史とか、いろんな本を中国語の本を訳すのにチームをつくって、やってるから、この行ってみたら勉強になるって言われて、で、行って、翻訳のチームに入れてもらって・・・

平塚： そうなんですか。

F： それで2、3冊みんなで訳したんです。

平塚： はい、はい、はい。そうなんですか。

F： で、T先生が獨協大学の学科長をやってたから、もうじきドクターね3年でね、一応期限は終わるんだけどどうしようかなあとか思ってるんですよーみたいなことを言ったら、じゃあって、すぐ専任になりませんかとお話なので、みんな、なんですかね、ズルズル引きずられてですね。会社入ったのも、中国語学校のK先生の紹介・・・

平塚： そうですか。

F： そう。だから、大学入ったのも、T先生の引きで、自分で積極的に行ったのは、大学院だけでね、香港中文大も父親が勝手に決めちゃったしね。

平塚： まっ、そうですよね。ちゃんとそれで人生の駒が回っているというのが、すごいですね。

F： まあ、皆さんのお引き立てです、はい。だって考えてみたら通訳の仕事だって、みんな人の紹介ですもんね。

平塚： そうですよね、そうですよね。あー、なんか結構、あの先生5時から確かどちらですか？学校。

F： 7時ですよ。

平塚： あっ。

F： 19時ですよ。

平塚： 19時？ごめんなさい、私、5時からだと。

F： 大丈夫ですよ。私その前にごはん食べなきゃいけないから。

平塚：ほんとですか、すみません。私、5時だと思って、じゃあ、ちょっと2時間ぐらいでと考えてた、すみません。なので、こんなに早く来て・・・

F：場所はね、この向かい側。

平塚：えっ、この近くですか。

F：ちょうどこの道の向かい側です。

平塚：おや、おや、それは、それは。

F：でも、ゆっくりごはん食べてから行くから、大丈夫です。

平塚：失礼いたしました。はい。そうですか、そうですか。いやーでも、私結構存じ上げているつもりだったんですけども、存じ上げてないことのほうが多かったですわ。

F：あっ、そうですか。

平塚：はい、はい。

F：あっ、そうですかね。

平塚：はい。

F：断片的にしか知らないですものね。

平塚：そう、そう、そう。そうなんですよ。今、ずうーっと流れを消化していて。

F：そう流れがようやくという・・・

平塚：そうです。いやー、そうですか。

F：でももう大学もね、10年でもうなんとなくいいかなって感じになってきた。

平塚：そうですか。そんな、そんな。なんかこの間T先生から「F先生、博論はどうするつもりなの？」って私に・・・

F：あー。博論どうしようかね。

平塚：聞かれるんですけども、「どうする、どうするつもりなの？」って、ふっふっふっ。どうするのかねって、先生、先生、ご自身のです、ご自身の。

F：もう同じ学科の先生にも言われるんですよ。博士号取って、大学院でも教えられるようにしてって。

平塚：あー、そうですねえ。

F：あっ、それで気が付いた。気が付いた、思い出した、気が付くことじゃない。

平塚：はい、はい、はい、はい。

F：Sさんって会ったじゃない？

平塚：はい、はい、はい、はい。

F : 一緒に来たよね、
平塚 : 忘年会、あっ、新年会。
F : 新年会。あの人の博士論文がU大学で出て・・・
平塚 : 今年書くって言ってましたからね。
F : これから審査をする・・・
平塚 : 外部審査員なんですか。
F : それ頼まれたけど、断ろうと思って。
平塚 : そうなんですか。
F : だって、なんかメールできて、書状もきてて、その書状はまだ見てないんですけど、
〇〇で自分が博士持ってないのにちょっとそれ無理でしょうと思って、
平塚 : ああそうか。博士論文ですものね。
F : ね、マル合のない人、審査する資格ないでしょう。
平塚 : ああ、そっか。
F : なんか。
平塚 : ええ、ええ。
F : ちょっと難しいタイトルだったよ。
平塚 : あっ、そうなんですか。
F : 忘れちゃうほど難しい。
平塚 : 翻訳、翻訳ですよ、確か。
F : はい。
平塚 : 翻訳でそうですもんね。あっそうですか。
F : だから誰かいないかな、ほかに、中国語関係だから・・・
平塚 : 中国語でドクター取っている人？
F : Sさんってどこの人？
平塚 : Sさん、台湾です。
F : じゃあ、Y先生とかに頼めばいいの？
平塚 : Y先生、そうですね。U大、そういうコネはないんでしょうかね。
F : でも、勝手にさ、決めちゃってさあ・・・
平塚 : あっ、そうなんですか。
F : 決めちゃってというか、ぜひお受けいただきたいみたいにメールが来ちゃって、S

さんと会ったことはあるらしいしとか書いて・・・

平塚： えー、そういうことじゃないでしょう。

F： それ関係ないし。

平塚： 関係ないですよ、何それ。エッ。U大もなんだかよく分かんない。

F： ちょっとよく分からない。

平塚： そうなんですか。

F： こう私が何者かを知らないで頼んでないですかと思って。

平塚： どなたからきたんですかそのメールは・・・

F： えっとね。その所属している専攻の主任とかなんとか・・・

平塚： 指導教授ではなくて。

F： 指導教官ではなかったみたい。

平塚： ああ、そうですか。副指導教官は、私、知り合いなんです。あの、前、Kにいた人なんですけれども、うん。あっ、准教授かな、まだ若い人なんですけれども。

F： 博士号取っちゃうと、絶対教授じゃない？

平塚： そうですね。

F： それで、教授になるとなんとか委員会の部長とかの資格ができるじゃない？で、大学院で教えてって言われるじゃない？それがさあ、そこまでしたくない。

平塚： まっ、今までの話の流れからいうと、すごくよく分かりますよ。それは、そうですね。

F： 選べるものならやりたくない。

平塚： うん、うん。

F： もう、選べなくて、「それがあなたの義務です」って言われちゃえばしょうがないけど、でも、論文全然書かない人もいないじゃない？先生の中には、大学の先生。

平塚： いますかね。

F： いるんです。

平塚： そうなんですか。

F： 生涯専任講師だった人もいますよ。

平塚： ひえー、そうなんですか。

F： かたくなに書かない。

平塚： それは、書かないでっていうこと？

F： 自分がその道を選んだ人もいますよ。

平塚： ふーん。

F： 嫌みを言われようと頑として、業績をつくらないと・・・

平塚： でも、それは居づらいですよ。

F： 居づらいと思うんですけど・・・

平塚： そうですか。でも、業績を・・・

F： このまま辞めないで、大学にいるんだったら、やっぱり博士論文書いて教授になっ
てって道じゃない？

平塚： そうですよ。

F： 辞めちゃえば関係ないからね。

平塚： えっ、でも先生、別にお辞めに。

F： 辞めちゃおうかなって思って。

平塚： ええええっ。ほんとですか。

F： あと何年かしたら、なんとなくフェードアウトして、だからいつゼミ募集止めても
らおうかなとか思って。

平塚： ほんとですか？えっ、次はどうされるんですか。

F： 私ね。

平塚： この、このソムリエ？違いますか？・・・

F： いえ、あの会社辞めたときに、実は、女子栄養大学に行きたかったんですよ。

平塚： ええー。

F： 願書も取り寄せたんですけど・・・

平塚： ええ。

F： バイトしながら行けばいいかなって思って、そしたら、なんか通訳の仕事とか翻訳
の仕事ガンガン入って・・・

平塚： はい、はい、はい。

F： 忙しくなっちゃって、行けなくなっちゃったの。

平塚： そりゃそうですよ。そりゃそうですよ。

F： だから、まあ、定年退職がさ、D大学70歳なんだけど・・・

平塚： 70っておっしゃってましたよね。

F： 70までやっちゃうと、そのあとの人生がないんで。

平塚： ほんとですよ。

F： 自分でちょっと区切って、早く退職して、今度は栄養学の勉強してやろうかなと・・・

平塚： そっか、でも先生、もともとでもそちらのほうに進みたかったって、前おっしゃってましたものね、そっか。

F： そのあとは、もう仕事にするのは無理だろと思うけど・・・

平塚： うーん。えっ、ということは、趣味としてってということですか。

F： そうですね。

平塚： はーん。いや、普通は趣味だったら、大学まで行ってまでやらないと思うんですけど。

F： 漢文はもともと趣味なんですよ、だって。

平塚： そうですか。

F： それを、仕事でなんとかしようと思ってなかったです。

平塚： はあー、そうか。栄養科、女子栄養大、あの、私も実は最初は栄養士になる予定だったんですよ。

F： あっ、そうなんですか。

平塚： 高校は実は、理系のほうだったんですね。で、まあ、栄養士を目指してたので、それこそ女子栄養大とか、結構願書を取り寄せてたんですけども、ちょっとね、学費が高かったんで、ほとんど私立は受けられず、公立だけ、まあ、2つしかないんですけども、千葉にあの女子栄養短大ってある、なんでしたっけ、確か短大だったと思うんですけども、できた年だったので、そこを受けたんですよ。そこが駄目で、それでまあ、浪人して、ちょっと人生をもう1回考え直そうって言って、それで全然別の方向に行ってしまったんですよ。なので、もともとはそちらに興味があったんですよ。ただ、今、考えると、一番向いていなかった方向だったのかしらと思いますけどね。

F： そう？

平塚： 女子栄養大、ってことは、今、先生学校行かれているのは、その一環なんですか。その野菜ソムリエのほうは。

F： うーん、そうかもしれません。

平塚： はあー。

F： だから、その女子栄養大学に行けてないから、そこを埋める環境室とかこれとか、あと、家庭料理技能検定っていうのを受けてみたいなと思って。

平塚： なんです、それ？そんなのあるんですか？

F： はい、それも女子栄養大学と文科省がやっているんです。家庭料理技能検定っていうんです。

平塚： ええ、ええ、ええ。

F： それは、お料理の技術を、まっ、栄養学とかも入るんですけど・・・

平塚： ええ、ええ、ええ。そうですか。へえー。

F： なんかいつも思いつきでやるんだけど、いつも、その思いつきがどんどん大げさなほうにいつちやうんです。

平塚： そうですよね、より深く、ふっふっふっ。行かれますよね。

F： なんかちょっとやり始める面白くなっちゃって、どんどん本格的になっちゃって、お金もかかる、時間もかかる・・・

平塚： そうですね。そうですよ。

F： すごい、だから、商社に入ったときのその翻訳や通訳とかやってねって言われて、普通そのなんかな、下手くそなままいっちゃう人が多いんだよね。仕事でしか通用しないような、その翻訳、通訳のやり方っていうの？その会社の中で適当になんだろう、深くはない・・・

平塚： 社内では通じるけれども。

F： その商売上のことだけしか言えないとか、それでいつちやってもよかったわけですよ。普通はそういうふうになんかわけですよ。

平塚： そうですよね。

F： でも、それ違うよねって、で、思って、やっぱりあの勉強するじゃないですか？その関連の本も読むし、通訳学校にも行くし、そうすると大変なことになってきちゃうんですね。

平塚： うん、そうですね。

F： まだ足りない、まだ足りないってどんどんなっていますよね、勉強って。

平塚： そうですね。

F： ただそれやとくと、次に。

平塚： 活かされますよね。そうです、つながるし、そうですね。

F： つながるんだなって思うんですね。

平塚： 本当に、まさにそうですね。先生の、今までの人生は。

F： それも、あの、無理やりやっているわけではないから、興味があつてやってるから、あんまり努力とか苦勞とか思わないでやっているから平氣なんですよ。

平塚： いや、いや、努力はされてますけれどもね。

F： でも、好きなことを興味持ってやることは努力とは言わないんですよ。

平塚： あっ、そっか。そうですか。

F： 楽しみって言ってるだけです。

平塚： そっか、それがちゃんとね自分にもメリットがあるし、ちゃんとね。人の役にも立つしっていう、そういうことですよ。

F： そう、だから今、大学でね、論語読む授業とか持っててね、あっ、やっど、大学のときに勉強したことが、今、生かされてるなと思う。

平塚： それまでは、そういう授業は受け持ってなかったのですか。

F： はい。あの。

平塚： そうなんですか。

F： 国際教養学部になって、えっと、授業の内容がだいぶこう変わったので、そのときから中国のその思想とか古典とかも扱っていい。

平塚： あっ、そうなんですか。もともと先生入られたのは国際教養学部ではなかったんですか？

F： 最初は外国語学部で。

平塚： あっ、そうですか。

F： ほんとに、普通に会話の授業か、作文の授業。

平塚： そうですか。えっ、じゃあ。先生の計画では、あとどれぐらい獨協にいらっしやって、どれぐらい。

F： 5年くらいあと。

平塚： そうなんですか。学部長聞いたら卒倒するんじゃないでしょうか。そうですか。

F： そうですね。5、6年ってとこですかね

平塚： あっ、そうですか。へえー。

F： ただ、博士号取るんだったら、今から書いて、博士号取ってから辞めてもいいんだよね。

平塚： あっ、そうですよね。そうですよね。

F： そうするとその次がね、もし、女子栄養大とか行こうと思ったら、履歴書見てなん

て思われるかが心配なんですよね。「なんであなたが、今、ここに来るんですか」って、「趣味です」っていう、ふっふっふ。

平塚： そしたらですね、すいません。なんか、あのだいぶこちら辺が出て相当時間を使っちゃったんですけども。

F： はい。

平塚： じゃあ、現在ですね、一応、通訳の現場のお話を。

F： はい。

平塚： 聞きたいんですけども、そうですね。まあ、でも仕事を受ける際の判断基準って何かありますか。特に・・・

F： 特にはないですけど。今は、だいたい決まったエージェントからしか受けていないので。

平塚： あー、そうなんですか。

F： その1日のペイが、かけ離れて安いとか、そういう心配がないですから。

平塚： ええ、ええ、ええ、ええ。

F： 新規のところはあまりやっていないので、交渉しないで済むようなところだけなんですよね。

平塚： そうですよ。

F： あとは、内容的にはそんなに選んでないですね。

平塚： そうですよ。で、やっぱり同通のほうが多いですかね。

F： そうですね。だから、長い期間出張するとかができないから、それはまあ、一応の基準になるかもしれない。東京近郊で、1日、2日で終わるものだけっていう。

平塚： それじゃないと休講にしなければいけないわけですからね、そうですね。

F： 休講はもう、大変ですから。

平塚： そうですよ。

F： 1日も休講してないですから。

平塚： 素晴らしい。そうですね、あとは、じゃあ、今までそれこそ通訳をやってきた中で、あの訳しにくいっていうか、まっ、文化的な背景が違うとか、そういうことで、ちょっとこれは訳しづらいなっていうことはありましたか。

F： 文化的背景が違うより、その個人個人のロジックがグズグズな発言とか、自分が理解できないことっていうのが一番困るんですよ。

平塚： 訳せないですよ、そうですね。ああ、それはだから、あの中国人だからとか日本人だからとかではなくて。

F： うん、そうですね。

平塚： パーソナルな・・・

F： だから、時々、日本人の中にも、日本語をしゃべっているながら、周りの人に伝わっていないという人がいますよね。

平塚： あります、あります。

F： それはちょっと、訳したときに、このままグズグズで分かりにくく訳しちゃったら、どうなるんだろうって思うときがあるのね。

平塚： そういう場合とかって。

F： そういうときには、自分なりに解釈しちゃうんですよ。多分こういうことが言いたいのでしょうかっていう、あの、エイヤって判断して、これでいっちゃう、私の解釈でいっちゃうっていうふうにしか訳せないですよ。

平塚： そうですね。だから本当にあの、文意が破たんしている状態で、それを訳せ・・・

F： 最初の内は、確認すると思いますよ、こういう意味ですかって、でもずうっと訳の分からないままだと、もういちいち全部聞き返すわけにいかないんで、ちょっとじゃあ、申し訳ないけど預けてもらってって、思うときがあるんですよ。

平塚： 本当にそうですね。あんまりその言語的な差異とか文化的な差異で、難しいっていう場面にはあまり・・・

F： えっと、会議通訳の場合には、お互いに同じトピックスで話しているからいいけど、雑談なんかでね。

平塚： ええ、ええ、ええ。

F： 晩ごはん食べながら雑談なんかしてるときには、それ分かりにくいかもしれないなあって思うことはあるよね。中国のあの制度的なものとか。

平塚： そうですね。食事時が一番怖いですよ。

F： うん。

平塚： 何が出てくるか分からないというか。

F： ああ、そうですね。やっぱり日常生活にすごく密着しているものっていうのが、分かりにくいですよ。

平塚： そうですね。

F： 特に中国に住んだことがないのでね。

平塚： ああー、そうですね。で、日本はあまり知らない、中国の方とかそうですね。

そっか、そっか、そういうことでそういう、あとは例えば、同通の場合とかで、まっ、会議の場なので、そんなにないかもしれないんだけど、やっぱりその文化が背景にあつて、非常に分かりづらいので、その付け足しをしながらとか、説明を加えながら、ご自分で訳されたりとかっていうのはありますよね。あまり同通ではないんですかね。

F： その時々ですね。自分で説明とか補足とか加えちゃっていい場合と、分からない、お互いに分からないままにしといて、本当に知りたければ質問をしましょう、って思うときと、両方あるのですね。

平塚： ああ。

F： 様子を見ながらでしょうね。

平塚： 様子を見ながら、その判断ってやっぱり、その周りの状況を見ながら。

F： そうですね。周りの顔色を見ながら、っていうことで、中には通訳者に頼り切ってしまう人っていますよね。

平塚： はい、はい、はい。

F： もう、いいように訳してっていう感じで。

平塚： そうですね。

F： それだったら、もうかたくなにね、あの、「いえ、私は言われたことしか訳しませんから」とかいうのだと、やっぱり評価も悪くなるだろうし、雰囲気もおかしくなりますよね。

平塚： そうですね。やっぱりその場の雰囲気とか、まっ、クライアントの方向。

F： ええ、そうですね。中には逆に、割と神経質な人で、言われてもないことを訳されるのは困ると、言ったことだけ訳してっていう人もいますから、どっちのタイプかちょっと見極めてかからないと・・・

平塚： うん、うん。そうですね。その見極めができる方とできない方がいるような気がするんですよね。

F： そうですね、はい。

平塚： うーん。それはやっぱり。

F： まっ、場合もあるしね。楽しい雑談のときに、そんなに硬い態度をとらなくてもいいけど・・・

平塚：　そうですね。だからその場のコンテキストをやっぱりどこかで判断するわけですよ。そうですね。うーん、そうですねえ。

F：　まあ、中にはね、あの同じテーブルに外国人のゲストがいるのに、外国ゲストを構ってくれない人も結構いるじゃないですか？

平塚：　ああ、います、います、はい。

F：　で、私が隣にいと、私としゃべりたがるっていうおじさんもいるんですね。

平塚：　います、います、います。

F：　そういう場合はもうしょうがないですね。

平塚：　そうなんですよ。

F：　こっちから、「ちゃんとあの人にしゃべって」とか言えないですからね。

平塚：　そうです、そうです。でも「ちょこっと、今、こういう話をしてたんですよ」っていうのはね・・・

F：　そうですね、ちょっと伝えることは伝えますけれども、外国人とのコミュニケーションに興味がないっていうのは、分からないでもないんですね、面倒くさいですから。

平塚：　確かにそうなんですけどね。でも、目の前に座ってるのに、なぜそういう態度がとれるっていうときに、結構ありますよね。で、こちらに直接伝えればいいのに、あの通訳者に・・・

F：　はい。

平塚：「こういうふうに言ってください」とか・・・

F：　はい。

平塚：　もう目線すら合わせないというか、そういう・・・

F：　やっぱり、外人って苦手な人多いですよ。

平塚：　ですかね。ウッフッフッフ。だからあの、コミュニケーション以前というか。

F：　でもそれはさ、自分がその立場に立ってみたらさあ、ねえ。

平塚：　まあ、確かにそうかもしれませんね。

F：　なんかアフリカ人がいるとかさ、スペイン人がいるとかさ、アメリカ人がいるとか、韓国人がいるとか、そういう状況を自分が思い浮かべて、言葉が通じない人がいっぱいいて、それで、通訳がいるんだけど、初めて会う人で、目は青いし、この人顔黒いし、えっ、何しゃべっていいかの分らないって思うじゃない？

平塚： いや、確かにね。

F： そんなに日本人得意じゃないですよ。

平塚： そうかもしれないですね。

F： そしたら、無理強いしてコミュニケーション無理強いさせることは、通訳者の役目じゃないでしょう？

平塚： そうか、まあそうですね、そうですね。

F： 自分が、あの、この人とコミュニケーションしたいと願っている人のためにいるわけだから・・・

平塚： そうですね。通訳者はそうですね。

F： 願ってもいないことを無理強いする必要はない。

平塚： まあそうですね。確かにそうですね。そうなんですよね。でも結構そういう場にいるとストレスがたまるっていうのは、それが理想的なコミュニケーションの場ではないからでしょうけどもね。

F： まあ、われわれはね、人間だからそうなっちゃうね、機械とか空気だったらそうはならないけれども。

平塚： 確かにね、そうですね。でも先生は、そういうところでは、あまりストレスは感じませんか？そういう場では。

F： 感じないほうですね、はい。

平塚： そうですか。

F： 黙ってるなら、黙ってても別に。

平塚： あっ、そうですか。うーん。

F： まっ、あまりにも静かだと、ちょっと中国の人にちょっと自分から話しかけたりとかはするんですけど。

平塚： あー、そうですか、そうですか。

F： あとは、まあお料理持ってきてくれればね、これ紹介するとね。

平塚： そうですね。でも、通訳者はあくまでも主役ではないわけだから、そういうところではねえ、自分から積極的に動くよりは・・・

F： どうするかね。ちょっと難しいところあるけどね、通訳者がその宴会を盛り上げてくれるってことまで期待されてるかどうかね。

平塚： あー、そこですよね。商社にいらっしやったときって、そういう役割も・・・

F： はい、あの含まれてます。

平塚： そうですよ。

F： ですから、そのときはやりました。乾杯もやりましたし、いろいろ話題を振ったりしとかしました。でもね、あの、フリーランスの場合には、自分こそ外部の人ですからね。

平塚： そうですよ。自分だけが外部の人間なんですよ。そうですね。

F： はい。

平塚： 確かに、確かに。

F： それであんまり活躍しちゃったらおかしくないですか。

平塚： 「なんだこいつは」ってなりますよね。

F： そう。やけに張り切っている通訳っておかしくないですか？

平塚： たまーにいらっしゃいますけどもね。うーん。そうですね。そうか。まあ、そういう意味では、先生が考えてらっしゃる役割、通訳者の役割っていうのは、黒子ですかね。

黒子と言うか・・・

F： 黒子、どうですかね。まあ、相手があ願っていることのために働くんだからね、なんか、コミュニケーションのお手伝いですよ、あくまでもね。全くの黒子っていうわけにはいかないと思うんですけども・・・

平塚： そうですよ。

F： それこそ通訳にしか顔を向けない人もいるんだから、「ちょっとおじさん、あっち向いてよ」っていうわけにはいかないですね。

平塚： そうですね、そうですね。だからいるんですよ、やっぱりね。

F： はい、います。

平塚 その場には確実にいて、顔も見えるっていう、そうですね。

F： でもそれがね、その人にとってストレスになるんだったら・・・

平塚： その人っていうのは、あの使い方・・・

F： あの、発言者、通訳者を使っている人にとって言葉の通じない相手、例えば通訳を介してであっても、そのコミュニケーションすることがストレスになるのであれば、そのストレスを覚悟でやらなきゃならないっていう立場の人もいるかもしれないけど、そうでない人もいるわけでね、したら無理にやることもないし、私としゃべって楽しいんならそれでもいいかって思う。

平塚： そうですか。確かにそうですね。

F： で、まあ、結果としてどうなるか分かりませんよ。あの、通訳しないでおしゃべりしてたって、自分が批判されることになる可能性もありますよね。あるいはその話し手が、もっと外国人のゲストを立てて、コミュニケーションをしなければ駄目じゃないかってその人が、怒られることになるかもしれませんよね。あとからね。

平塚 あーそうですね、そうですね。それは可能性としてありますよね。うーん。でもそれって使い、使う側の問題のような気がするんですよね。

F： そうですよ。だから、まあ、一生懸命しゃべりかけられても、あんまり熱心には話題には乗りませんけどね。

平塚： あっ、そうですね。

F： 必要最低限の受け答えしかしませんけど、でも興味持ちちゃう人いますからね、「どこで中国語勉強したんですか」とか、「最近どんな仕事が多いんですか」とか、プライベートなこと・・・

平塚： そうです。ありますよね。

F： 通訳者自身に興味を持つ人って、結構いますからね。

平塚： 多いです、多いです、多いです。この間も、あの全人代の方たち、まあ、代表団が来て・・・

F： はい。

平塚： で、日本の議員たちとの懇談会だったんですけどね、まあ、会食会かな、会食会でやったときも、私はなぜか中国側につかされたんですよ。日本側ではなくて、で、中国側について、2人のところにちょうど後ろについて話を、前の議員さんとの会話を訳してたんですけども、なんかあんまりその議員さんたちの話題が豊富でなかった方たちで、たまたま、どうも話が途切れてしまって、そうするともうね、黙っているしかないじゃないですか。

今度、中国の人たちが「君はどこで中国語を学んだ」というそちらの話になってしまっただけで、やっぱりねえ、かとは言ってね、「いや私は通訳者ですから、あの通訳以外は話しません」というわけにももちろんいかないし、ある程度話したんですけど、そうするとですね、なんかその議員さんたちが、何を話しているんだっていう顔をして、見るわけですよ。

F： まあ、こういうことをしゃべってるんですよとは言うんですけどもね。

平塚： そうなんです、言うんですけども、なんかちょっと面白くなさそうな顔をされて。

F： だから、見えないってうそなのね、やっぱりね。

平塚： そうなんですよ、そうなんですよ。

F： 確実に見えちゃってるんです。

平塚： 見えるんですよ、そうなんです。

F： 結構、目立っちゃってます。

平塚： そうなんですよ、もう。なんかね、やっぱり、対面通訳の場合は、やっぱり黒子っていうメタファーは絶対当てはまらないですよ。ある意味、うーん。そうなんです、見えてるんですよ。

あと、例えば、立ち位置の問題で、まあでも先生が、今、おっしゃった、今、そういう発言からだ、やっぱり中立というか。

F： そうですね。

平塚： もちろんクライアントには雇われているのだけれども、やっぱり普通の場合にやっぱり中立で、立場としては中立ってことですよ。

F： そうですね。訳すときには中立でしょうね。

平塚： そうですよ。あとは例えば、通訳に臨む場合の、なんかこれはこうするべきとか、規範みたいなものってあります？

F： まあちょっと、あれだよ。矛盾するみたいに聞こえるかも、やっぱり出しゃばらないですね。そこにいるんですけどね、目立たない、だから服装とかも目立たないように、変に目立つと、派手だと。

平塚： まっ、そうですね。

F： 派手でも、地味すぎても、両方とも駄目。

平塚： そう、地味すぎるのもなんですよ。そうなんです。

F： はい。

平塚： それはいわゆる TPO に即したということでしょうかね。

F： ええ。

平塚： あとは例えば、その訳をしていく中で、これだけはしちゃいけないとか、何かありますか。

F： しちゃいけない。ごまかす？なんだろうしちゃいけないこと。

平塚： しちゃいけないとか、あとは、あのいわゆる訳出に臨む上でできれば・・・

F： 自分の意見が入っちゃう。

平塚： 自分の、あー、はい、はい、はい、はい。ただそれって、さっきおっしゃった解釈っていう部分と・・・

F： そうですね。だから解釈するのと、「自分はこう思う」っていうのは、また違うんですよ。

平塚： 「こう思う」っていうのは、それを発言者が、さも発言者が言ったように、訳出にのっけてしまうっていうことですかね。そこが微妙なんですけれども。

F： そうですね。

平塚： そうなんですよね。それが、まあ、話者の言ったことを分かり、分かりやすくというかまあ、あのロジックがね、分かりにくいものを分かりやすく整理して話しているのか、それとも、それも多分自分の解釈が入るわけじゃないですか？

F： そう、まあ、それはそうなんだけど、自分が解釈したというのは、私はこのように聞いたっていうことを、ただ再現するっていうことだけであって、それはまあ、解釈なんですけれども、自分がこのように聞いたっていうことを言うのと、それは通訳なんだけど、あの、私はそれを聞いてこう思った。ということとは、また別でね。

平塚： はい、はい、はい。「こう思った」の部分はあくまで通訳者の意見なわけですね。

F： そう。

平塚： そうですね。それを言ってしまっちはいけない。

F： こういう凶悪な犯罪があったんですよということを伝えてもいい、こんな凶悪な犯罪は言語道断ですねと言っちゃ駄目ですね。

平塚： そうですね。

F： だから、その人が言っていることがね、非常に凄惨だとか、凶悪だと言っているのは、そのままいけるんだけど、でも、通訳者がそこに「ひどいですよね」とか言ってしまったら、それはもうちょっと・・・

平塚： 逸脱行為ですよ。そうですね。やっぱりそういう意味では、なんていうんですかね、聞いてもいけないし、付け足してもいけない。付け足してもいけないっていうとまたちょっと違うのかなあ。うーん。通訳者として、どうですかね。形は整えてもいいけれども・・・

F： うん、だから材料をそのままにしといて、お砂糖付け加えたりとか駄目でしょう。

平塚： うん、うん、うん、うん。

F： 全然なかった材料が入っている。ここレモングラスしか入ってなかったら、レモングラスだけの通訳しないといけないでしょう。これの中にハイビスカス入れてみたりとかしたらちょっと困る。

平塚： そういうことですよ。

F： 味が変わってしまう。

平塚： うん、うん、うん、うん。

F： 効き目も変わってしまう。

平塚： うん、うん。そうですね。そうするとやはり、ある意味忠実についていう、話者スピーチを内容に忠実に。

F： 言われたことに忠実にですね。

平塚： そうですね。言われたことに忠実に、そうですね。

F： 言われたことと、本当に言いたいこと、違うかもしれないけど・・・

平塚： そうですね。

F： でも、あくまでも言われたことしか訳せないの。

平塚： うん、うん。そうするとなんかね、あの、まっ、これは多分個人差もあると思うんだけど、ちょっと何人かの中国の方に聞くと、言ったことよりも、その人が言わんとしていることを通訳するっていう方もいらっしゃるの・・・

F： うん、うん。ただ、その言わんとしてるのが、うまくきっちり分かればいいんだけど、分かんなかったりしたときに困る。誤解しちゃったりするとね。

平塚： そうですね、そうなんですよ。

F： だから、まあ、ほんとに、あの、価格交渉とかであつたら、「100ドルですか。うーん」って言ったら、それだけ訳せばいいのね、「ちょっとまけて」ということはできないですよ。

平塚： それはもちろん、そうですね。

F： 分かっててもですよ。「それは高いね」って思っても。

平塚： そうですね。それはそうですね。うーん、話者よりも前にはいかない、そういうことですよ。

F： うーんそうですね。

平塚： そういうことですよ。

F： まあ、難しいですね。それで・・・

平塚：　そこが、うん。

F：　うん。相手がどう受け止めるか、聞いている方がね、聞き手がどう受け止めるかっていう問題もあるのでね・・・

　まあ、言ったことだけ訳すんだけど、聞き手がそれをどんなふうを受け止めるかまで考えるとちょっと難しいですけどね。

平塚：　そうですね。

F：　でも、もし、その言葉の真意が分からなければ、聞いている人がまた問い返してくれるの期待するしかないんですよね。

平塚：　で、まあ、何度かね、やっていく中で、実際のシーンが・・・

F：　あるいはまあ、あの、こちらとして、話し手をサポートする気持ちがあれば、もうちょっとはっきり言わないと、分からないですよ。「それ、高いですよ」というふうに、あのね、こっちで打ち合わせをちょこっとした結果、その言い方を変えてもらうってことはできますけどね。

平塚：　ただ、スピーチというか、話者が言い方を変えるということですよ、あくまでも。

F：　話者が変えてもらわないと、こちらとしてはどうしようも助けようがないんですからね。

平塚：　うん、うん、うん、うん、うん。そうですね。だから例えば、その「うーん」と言ったときに、あっ、この人は、「高いんですよ」と言いたいんだなって思って先走ることだけはしないということですよ。

F：　ちょっと、したら怖いですね。

平塚：　ああ、確かに、確かに。

F：　うん、別の条件出てくるかもしれないね。じゃあ、もうちょっと納期早めてくださいとかいう方向に行くかもしれないのに、こっちで「まけてよ」といっちゃったら、話おかしくなっちゃうから。

平塚：　そうですね。

F：　全体の話見えないからね、通訳って。

平塚：　ええ、ええ。そうですね。

F：　原稿でもない限り。

平塚：　うん、うん。そうですね。確かにだから交渉の現場の通訳だったらとしてもやっ

ぱり・・・

F： うん、そうなりますよね。

平塚： 言葉、その表層の部分っていうかね。そこの通訳にとどめるべきっていうことですよ。うーん。

F： でも時々、先走っちゃうことあるもんね。

平塚： ありますよね。

F： 同時通訳とか。

平塚： ありますよね。

F： 前に一度、有給休暇の話をしたときがあったの、労働組合かなんかの人がね・・・

平塚： はい、はい。

F： その人の会社で、有給休暇が年に何か、2週間、14日とかあるんですけどって、ほとんどの社員が、っていうふうにね。だから取りませんと思っちゃったんですね。

平塚： あるんですけども、ほとんどの社員が、そうですね。

F： だから、取りませんかって、取りませんで出しちゃったら、100%取得してるんですよっていうほうにいっちゃって、あつ、ごめんなさい上でテレビついている内に・・・

平塚： そうなんですか。

F： そう、そう、そう。だから、予測が外れるっていうのは、同時通訳であるんですね。

まっ、そのときは訂正しますけれどね・・・

平塚： はい、はい、はい。

F： そのときに、先走り怖いってちょっと、すごく思ったんです。

平塚： はあー。でも文脈からいうとそうですね。

F： 文脈からいうとね。だから笑い話とか難しいのね。突如としてシチュエーションが覆されるから、難しい。

平塚： 分かりますよね。ああ、それはありますね。あと、あの駄じゃれとか。

F： ああ、もう駄じゃれはもうしょうがない、訳せませんね。

平塚： そうですね。

F： それはあきらめるしかないですね。

平塚： そうですね。ああ、先生から伺ったんでしたっけ？鉄人？

F： ああ、はい。鉄人政治家かな。そうです、そうです。あれはもう「えー」ってピンチ。

平塚： とんでもないですよ。それで通じると。

F： それが最初いきなりそれですからね。

平塚： 最初だったんですか。

F： はい、司会の最初の言葉がアジアの鉄人政治家。

平塚： あの方ですよ。

F： はい、あの政治評論家の方。

平塚： そうですか。うーん。最初にそれこそ、えーっと、あの方、先生と入るはずだったあのブースなんですけれども、音楽関係のコンテンツの、なんだっけ、アジアンミュージックマーケットっていう、あの前の受講生の方の紹介していただいて、2人でやったんですけれども、あのときも最悪だったんですよ。日本のその方たちが結構、そういう駄じゃれとか、あとは、あのなんていうのかな、ハラキリ、ゲイシャ、フジヤマの日本へようこそとかで、え、実は、ハラキリはもう、去年から禁止になりましてとか、もう冗談なのかなんなのか、これはそのまま訳してもねえっていう・・・

F： でもそれ訳すしかないね、しょうがないです、そのまま。

平塚： もうそのまま訳しましたけれども・・・

F： それで聞いている人たちがしらけたり、腹を立てたりしてもしょうがないですね。

平塚： しょうがないですよ。そうなんです。もうそういうオンパレードで・・・

F： まあ、われわれは言葉の上でしかお手伝いできませんのでね。

平塚： そうですよね。

F： はい。そこまで責任持てないです。「あんたが訳したから怒っちゃったじゃないか」と言われても、「それは、あなたが言ったことです」はい。

平塚： そうですよね。

F： 怒っちゃうこと分かっててそのまま訳さないでいろって言われるかもしれないけど、しょうがないよね。

平塚： そうですよね。

F： でも、そう思う人もいますよね。このまま訳したら、怒ったり、泣いたりしちゃうのに、なんでそのまま訳すんだよって。

平塚： そう、そうですよね、そうですよね。

F： そういう人もいますよね。だけどそこまでは面倒見られないじゃないですか。

平塚： うーん。なので、それは、はっきり言ってコミュニケーション取るための通訳者

として見てないわけですよ、ですよ。

F： まあ、どういうのがいいのか分からない。その、話し手によって要求が変わるっていうこともあるんで、じゃあOK私たち2人チームでコミュニケーションしましょっていうふうにしてほしいのかなっていうことですよ。

平塚： あー、そうですね。

F： あー、それを言ったら怒るからねっていうふうに言ってほしいのかなって思うときもあるんですけど・・・

平塚： そうですよ。

F： でも、そこまではね、初めて会った人ですからね、何しろ。いつもの人ならいいんですよ。

平塚： いつも、そうなんです。だからそこを考えて、やっぱり質問考えられますけれども、そうなんです。私、この間、社内でやっている方、(インハウス)でとか、あとはその毎回その仕事を受けていて・・・

F： ええ。

平塚： それこそ、話者とはね、懇意になっているという状態だったらまだ、いかようにでもそれこそ・・・

F： なんのつもりで言っているのか分からないときもありますからね。

平塚： そうなんです。

F： 勝手に言い換えちゃって、オブラートにくるんだような言い方をしたら、逆に、本人は、わざと怒らせるつもりで言ったっていうこともあるんですよ。

平塚： そうなんです。

F： はい。

平塚： だから、そこ、あの、ほぼ、ブリーフィングがない状態で・・・

F： そうですね。

平塚： そういうところで、こちらに判断を委ねられてもね。

F： はい。

平塚： 難しいですよ。うーん。基本的に先生は、あまりそういうご経験とかってないですか？

F： あんまりないですね、はい。

平塚： ないですか、そうですか、はい。

F： そんなに深刻なものはないですね。

平塚： あー、そうですかね。うーん。

F： 相手が誤解するときはありますよね。

平塚： えっ、例えば・・・

F： あの、あまりにこう、本人になり代わって乗り移ったように通訳していると、たまに聞いている人が、「通訳さんにそういうことを言われる覚えはないんですけど」って言われたことが2回ぐらいありました。

平塚： えっ。それは同通ですか？

F： いえ、逐次なんでね、はい。

平塚： 逐次で。えっと、聞き手の方ですか、それは？

F： そう、そう、そう、そう。中国側がいろいろ熱心にしゃべってくるのね。

平塚： はい、はい、はい、はい。

F： それを日本語に一生懸命訳していたら、日本人の人が、「なんであなたにそんなこと言われなきゃいけないの」それを訳そうとしたら、「この人じゃない、君」って。

平塚： あー。

F： だから、「私、言われたことしか訳してないです」って。

平塚： 私、この間、裁判で同じこと言われました。

F： あっ、そうですか。

平塚： 民事裁判で。

F： あるんですね。時々、勘違いしちゃう人ね。

平塚： はい、はい、はい、はい。急に怒りだすんですよ、弁護士が、「なんでそんなこと言うんですか」いやっ、私は言われたことしか訳してませんって、あー、そうですか。

それは特殊な事例だなと私、思ったんですけども。

F： あるんですね。

平塚： あるんですか。

F： 通訳に言われたって思っちゃった。

平塚： ええー、そうなんですか、えっ、それは会議の場ですか。

F： 会議、やっぱり商売の話ですよ。でも、私はその場にだって初めて行くのだから。

平塚： そうですよね。

F： うん。別に誰に対しても普通の目でしか見てないんですけど。

平塚：　ということは、だからそれだけ感情が、感情移入していたってということですかねえ。

F：　感情移入・・・

平塚：　少なくとも、その聞き手の・・・

F：　淡々としゃべってなかったんですね、多分ね。

平塚：　ああー。

F：　やっぱり、ものすごく熱心に主張があったものだから、一緒になって同じような口調になっていたんでしょうね。

平塚：　でも、それってよくある話ですよ。

F：　よくあることと思いますけどね。つまりあの、その人にとっては、中国側と私が仲間って見えちゃったんですね。

平塚：　セット、はい、はい、はい、はい、はい。

F：　仲間になってと。

平塚：　あー、えっ、それは、F先生がフリーになってからの話ですか？それとも。

F：　そうです。フリーになってからもありますね。会社有的时候にも1回ぐらいあったんです。だから、でも10年で2回だから珍しいことだけどもね。あなた、通訳がしゃべったことを訳じゃなくて、通訳者本人が言ったことと勘違いした人っていうのが2人、今までで。

平塚：　そうですか。社内だったら・・・

F：　あり得るかもしれない。

平塚：　あり得るかなって気がするんですけども。まるっきりのフリーだったら、まずあり得ないですけどもね。そっか、いらっしゃるんだ、そういう不思議な方が、私はその弁護士は、何を考えているんだと思いましたけれども、そうですか。

F：　いや、でも、言うはずがないってことを言ったのかもしれないですね。もしかしたらね。聞き手にとっては、「そんなことをこの人が言うはずがないだろう」というようなことを言ったのかもしれないですね。

平塚：　あー、それで、こちらが一瞬見えなくなって、通訳者の音声しか聞こえなく、届かなくなった。

F：　だから、ほんとだったら、もう一段階あって、本当にそんなこと言ったんですかっていうのを飛び越えて、「あなたにそれは言われたくない」

平塚：　うんうん、そうですよね。それが最初にあるべきですよ。あっ、そうそう、そ

のときも、その民事のときも、それがあとからきました。「ほんとにそんなこと言ったんですか」っていうのがあとにきました。あつた、あつた、そうですね。うーん。それっていうのが、ある意味、通訳者がそれこそスピーカーになり代わってというか・・・

F： ええ。

平塚： それだけ、いい通訳ができたということなんじゃないんですかね。

F： そうなのかもしれませんね。ほんとに、自分自身を完全になくしての通訳ということですからねえ。

平塚： そうですね。それで非難されるというのは、どうも割に合わないというふうに思いますけれども。

F： まあ、私が通訳をするときに結構、なんかキャラつくってんのかなもしれないですね。

平塚： えっ？

F： 口調とかで。

平塚： そうですね。

F： うん。

平塚： というのは・・・

F： 淡々と訳してないのかもしれないですよ。だから余計に・・・

平塚： 淡々というのも、何が淡々かっていうのが分からないですけど。

F： うーん。目立っちゃってんのかなもしれないですね。その口調とか、声色とか・・・

平塚 声色？えっ、例えばそのスピーチが男性だったら、男性っぽくとか、じゃなくて？

F： えっと、例えばそのスピーカーがおじさんでね、うちの娘がこんなこと言うんですよみたいなことで、娘っぽく言っちゃったりとか。

平塚： あー、はい、はい、はい。でも、それは、みんなやりませんか？

F： うーん。やるのかなあ。どうなんだろう。

平塚： ある程度は・・・

F： ある程度ですよね。

平塚： でもそういうことも、語感とかそういうのも含めて、訳出しているような気がしているんですけどねえ。どうなんだろう、違うのかな。まっ、でも同通のときはね、淡々とやりますけどねえ。

F： そうね。結構、入っちゃってんのかなもしれませんね。

平塚： 入っちゃってる。そうですか。

F： もう、娘がね、お父さんウザいって言うのよっ、とか。ウッフッフッフッ。

平塚： 完全にこう・・・

F： そういうふうに、なっちゃいがちなところがあるのかもしれないですね。

平塚： ああー。でもそれは、かえっていい反応力というか、なんていうんですかね。それは非難されるべきことではないような。

F： ないかもしれないけどねえ。まっ、やりすぎると困るけどね。

平塚： まあまあまあ、そうですね。やっぱりほどほどですよ。

F： 前一番あの通訳がうまくいくのは、話している人の、その考え方の道筋に乗れて、共感できたときじゃない？

平塚： そうですね。うん、うん、うん、うん。

F： その共感が、自分はできているって思ってる状態だと、うまく通訳いくんだけど、それ正しいかどうか確かめる術はないですね。

平塚： ないですね。そうですね。うーん。そうなんです。だけれども、そういう通訳ができたときっていうのは・・・

F： うん。

平塚： あっ。本当に今日は出来たって思うじゃないですか？

F： はい。

平塚： そうなんです。確かに、それはあとから客観的には、まあ、証明できないですけどね。ああ、そう言われてみればそうですね。

平塚： まあね、エージェントからお褒めの言葉いただいたりっていうものだけはありませんけれども、それとはまた違いますからね。うーん。どういう状態になったときに、あっ、きょうの通訳はきちんと話し手のね、言わんとすることを全部というか、きちんと伝えられたかって思うんでしょうね。

F： どういうとき、うーん。やっぱりちょっとこう、話し手がしゃべっていることと、隔靴搔痒の感があるときは、駄目なんだよね。やっぱり一体化しないと。

平塚： あー、うん、うん、うん、そうですね。うん。

F： だから言葉を言葉として、単語と文法レベルで、一生懸命分析してあの絞り出しているときには、駄目なんですね。

平塚： うん、うん、うん、そうですね。

F： 意識しないで、分析とか検討しないで出てくるとき、一番いいんですけど。

平塚： そうですね。

F： でも、うまく乗ったと思っても、あくまでもパラレルなものでね。

平塚： そうですね。

F： 1本にはなっていないはずと思うんですけどね。

平塚： そうですね。うーん。そっか、客観的に検証できないですもんね。

F： そうなんですよ。

平塚： そうですよ。

F： ええ。

平塚： いやでもだから、それこそその通訳の現場って、今ここですもんね。終わってしまったらもうそれはないわけだから、そうですね。すみません、なんか自分に問いかけて。でもそうですね。

F： でも、人と話すと新しいアイデア浮かぶから。

平塚： うんうん、そうですね。そうなんです。そうなんです。うーん。なんかねえ、こうやっっているいろいろお話を聞きつつ、あの、壁にぶち当たり、研究の壁にぶち当たり、また、ああなんか壁が突破できたかなって思いつつ、また壁にぶち当たりという、なんかその繰り返しなんですけれども。そうですね。うーん。そうですね、検証作業って無理ですよ。ふっ。

F： ねえ。全部録音しておいて、通訳がしゃべったことを、バック・トランスレーションして比較するっていうことはできるかもしれないけど。

平塚： だけれども・・・

F： ただまあ、比較できるのはあの、コンテンツだけなので。

平塚： そうですね、そうなんです。そこなんです。そこには、だから、話し手と聞き手もいるわけで・・・

F： テキスト全体として等価かどうかっていうのは、言えないんだよね。

参考文献

- Anderson, R.B.W. (1978). Interpreter roles and interpretation situations: Cross-cutting typologies: In Gerver, D. & Sinaiko, H. W. (Eds.), *Language interpretation and communication*. (pp. 217-230). New York: Plenum Press.
- Baker, M. (1998). Norm. In M. Baker (Ed.), *Routledge encyclopedia of translation studies*. (pp. 163-165). London & New York: Routledge.
- ベイカー, M.・サルダナーニャ, G. (2013). 『翻訳研究のキーワード』(藤崎文子・伊原紀子・田辺希久子・訳). 研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge encyclopedia of translation studies* (2nd ed.). London & New York: Routledge].
- 陈福康 (2000/2008). 『中国翻译理论史稿』上海. 上海外语教育出版社.
- Cheung, M. P. Y. (2006). *An anthology of Chinese discourse on translation, Volume 1: From Earliest Times to the Buddhist Project*. Manchester: St. Jerome Publishing
- 程永生 (2006). 「国内现当代研究翻译理论之概况篇」马祖毅等 (著) 『中国翻译通史现当代部分第四卷』(279-406 頁). 武漢. 湖北教育出版社.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 「访李越然: 毛泽东说, 涉及主权的问题不能谈」(1992 年 6 月 14 日). 『中国共产党新闻』2012 年 8 月 29 日 <http://cpc.people.com.cn/GB/69112/70190/70193/5230867.html> より情報取得.
- フリック, U. (2002). 『質的研究入門: 〈人間の科学〉のための方法論』(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子・訳). 春秋社. [原著: Flick, U. (1995). *Qualitative forschung: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg*].
- 藤井省三(2009). 『東アジアが読む村上春樹: 東京大学文学部中国文学科国際共同研究』若草書房.
- 船山徹 (2013). 『仏典はどう訳されたのか: スートラが経典になるとき』岩波書店.
- 古野ゆり (2002). 「日本の翻訳: 変化の表れた 1970 年代」『通訳研究』2 号, 114-122 頁. 日本通訳学会.
- 葛校琴 (2006). 『后现代语境下的译者主体性研究』上海. 上海译文出版社.
- Gile, D. (1999). Norms in research on conference interpreting: A response to Theo Hermans and Gideon Toury. In Schaffner, C. (ed.), *Translation and norms*. (pp.98-105). Briminham:

Multilingual Matters

- 賀麟(1984[1925]). 「严复的翻译」羅新璋(編)『翻譯論集』(150-151 頁). 北京. 商務印書館.
- Hermans, T. (1991). Translational norms and correct translations. In K.M. van Lewben-Zwat and Naaijkens, T. (eds.), *Translation Studies: The State of the Art* . (pp. 165-169). Amsterdam: Rodopi.
- 平塚ゆかり (2008). 「『信、達、雅』再考:現代日中通訳者の役割分析から」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科修士学位論文. [未刊行].
- 平塚ゆかり(2010a). 「現代日中通訳者の『信達雅』:インタビュー分析を通して」『異文化コミュニケーション学会論集』第8号, 45-55 頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション学会.
- 平塚ゆかり (2010b). 「中国翻訳規範概念『形似』, 『意似』, 『神似』と日中通訳者の規範意識」『立教・異文化コミュニケーション学会第7回大会発表論文集』19-22 頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション学会.
- 平塚ゆかり(2011). 「村上春樹『1Q84』中国語簡体字翻訳版から見る中国の文学翻訳規範」『立教・異文化コミュニケーション学会第8回大会発表論文集』17-20 頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション学会.
- 平塚ゆかり(2012). 「オーラルヒストリー・インタビューから見る日中通訳者の規範形成」『通訳翻訳研究』第12号, 69-82 頁.
- 平塚ゆかり(2013). 「中国の通訳」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(32-33 頁). ミネルヴァ書房.
- 平塚ゆかり(2013). 「中国の翻訳史と仏典翻訳」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(40-41 頁). ミネルヴァ書房.
- 平塚ゆかり(2013). 「通訳者の役割」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(46-47 頁). ミネルヴァ書房.
- 平塚ゆかり・齊藤美野(2013). 「透明性, 中立性」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(50-51 頁). ミネルヴァ書房.
- 平塚ゆかり(2013). 「中国の通訳論: 嚴復の『信達雅』」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(148-149 頁). ミネルヴァ書房.
- 法政大学大原社会問題研究所編 (2009). 『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房.

- 胡適 (2010). 『胡適口述自傳』 (唐德剛譯註). 台北. 源流出版事業股份有限公司.
- 猪俣祐介 (2010). 「オーラリティにおいて当事者性を問う意味」『日本オーラル・ヒストリー研究』第6号, 49-51頁. 日本オーラル・ヒストリー学会.
- 季传锋(2009). 「论口译中译者主体性限度」『常州工学院学报』第27卷第4期, 79-83頁. 常州工学院
- 季羨林·许国璋(1986). 「翻译」季羨林研究所(編)『季羨林谈翻译』(1-7頁). 北京. 当代中国出版社.
- 季羨林 (1995) 「中国翻译词典序」『中国翻译』第6期, 2-3頁. 中国翻译工作者协会.
- 季羨林 (2007). 『季羨林谈翻译』北京, 中国: 当代中国出版社.
- 姜椿芳(1953). 「略谈口译问题」『翻译研究论文集』「頁不明」中国翻译工作者协会.
- 姜椿芳(1983). 「翻译工作要有一个新局面」『翻译通讯』第2期, 1-3頁. 中国翻译工作者协会.
- 姜椿芳(1984). 「翻译工作新貌」『中国翻译』第10期, 1-2頁. 中国翻译工作者协会.
- 姜椿芳(1997). 『怀念集』北京. 奥林匹克出版社.
- 北村彰秀 (2007). 『東洋の翻訳論：蔵蒙対訳「学者基本典」から』 ウランバードル. 「出版社不明」
- 北村彰秀 (2008). 『続東洋の翻訳論：学者基本典を中心として』 ウランバードル. 「出版社不明」
- 金藤行雄(1985). 「『周礼』の命について」『待兼山論叢, 哲学編』18卷, 31-47頁. 大阪大学.
- 李丽·陈蓓(2005). 「翻译规范研究概述」『青海师专学报(教育科学)』第3期, 98-102頁. 青海民族大学.
- 黎难秋(2002). 『中国口译史』青岛, 青島出版社.
- 李越然(1980). 「谈谈口译工作」『外语教学与研究』第02期, 51-56頁, 北京外国语学院.
- 李越然(1983). 「建议开展口译工作的研究」『翻译通讯』第1期, 36-39頁, 中国翻译工作者协会.
- 李越然(2001). 『中苏外交亲历记：李越然回忆录』北京. 世界知识出版社.
- 劉徳有(2006). 『日本語と中国語』講談社.
- 劉靖之(主編)(1989/2004). 『翻譯論集—修訂版』台灣. 書林出版有限公司.
- 罗新璋·陈应年(2009). 『翻譯論集』北京. 商务印书馆.

- マンデイ, J. (2009). 『翻訳学入門』 (鳥飼玖美子監訳). みすず書房. [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies*. London & New York: Routledge].
- 马祖毅(等著)(2006). 『中国翻译通史—古代部分/现当代部分』武汉. 湖北教育出版社.
- 马祖毅 (1980). 「徐光启与科学翻译」『翻译通讯』第 5 期. 23-25 頁 北京. 中国翻译工作者协会.
- 水野的 (2007). 「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相—直訳の系譜」『翻訳研究への招待 2』日本通訳学会翻訳研究分科会.
http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol1/02_vol1_Mizuno.pdf (2012 年 7 月 28 日)より情報取得
- 水野的 (2011). 「明治・大正期の翻訳規範と日本近代文学の成立」佐藤・ロスベアグ・ナナ (編著) 『トランスレーション・スタディーズ』(69-93 頁). みすず書房.
- 廖七一(2010). 『中国近代翻译思想的嬗变：五四前后文学翻译规范』天津. 南开大学出版社.
- 永田小絵(1997). 「『信、達、雅』をめぐる中国近代の翻訳論」『通訳理論研究論集』313-326 頁.
- 永田小絵(2003). 「林語堂:翻訳を論ず」『マテシス・ウニウエルサリス』第 5 号, 93-110 頁. 獨協大学外国語学部言語文化学科.
- 永田小絵(2007). 「中国翻訳史における小説翻訳と近代翻訳者の誕生—前編」『翻訳研究への招待』第 1 号, 69-78 頁. 2011 年 4 月 25 日
http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol1/05_vol1_Nagata.pdf より情報取得
- 永田小絵 (2008). 「中国翻訳史における小説翻訳と近代翻訳者の誕生—後編」『翻訳研究への招待』第 2 号, 55-74 頁. 2011 年 4 月 25 日
http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/shotai_vol2/04_vol2_Nagata.pdf より情報取得
- 永田小絵・平塚ゆかり (2009). 「翻訳者の内的世界における再構築としての翻訳—村上春樹『海辺のカフカ』の翻訳を例に—」『通訳翻訳研究』第 9 号. 211-233 頁. 日本通訳翻訳学会.
- 西倉実季 (2005). 「グラウンデット・セオリー」桜井厚・小林多寿子 (編著) 『ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門』(52-53 頁). せりか書房.
- 牛仰山・孙鸿宽(1990). 『严复研究资料』福州. 海峡文艺出版社.
- 丘山新(1983). 「漢訳仏典の文体論と翻訳論」『東洋哲学研究』22 卷, 2 号, 82-96 頁. 東洋哲学研究所.
- ポエヒハッカー, F. (2008). 『通訳学入門』 (鳥飼玖美子・監訳). みすず書房. [原著:

- Pöchhacker, F. (2004). *Introducing interpreting studies*. London & New York : Routledge].
- 銭鍾書(1990). 『銭鍾書論学文選第4巻』 广州. 花城出版社.
- 齐宗华(1983). 「略论口译」『翻译通讯』第2期, 36-38頁. 中国翻译工作者协会.
- 任继愈(主编)(1981). 『中国佛教史第一卷』 北京. 中国社会科学出版社.
- 任文(2010). 『联络口译过程中译员的主体性意识研究』 北京. 外语教学与研究出版社.
- 刘和平(2010). 「序」任文(著)『联络口译过程中译员的主体性意识研究』(13-17頁). 北京. 外语教学与研究出版社.
- ローリー・マーシエ(2006). 「歴史叙述にオーラルヒストリーを用いる際の様々なアプローチについて」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号, 4-9頁. 日本オーラル・ヒストリー学会.
- 桜井厚(2002). 『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子(編著)(2005). 『ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門』せりか書房.
- 桜井厚(2008). 「コメント 2：口述資料の重要性－「経験的語り」の歴史叙述－」『日本オーラル・ヒストリー研究』第4号, 53-64頁. 日本オーラル・ヒストリー学会.
- 桜井厚(2012). 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 佐藤美希(2008a). 「昭和前半の英文学翻訳規範と英文学研究」『翻訳研究への招待2』11-38頁. 日本通訳学会翻訳研究分科会.
- 佐藤美希(2008b). 『英文学翻訳の翻訳規範に関する一考察－『英語青年』誌に見られる英文学研究、及び社会思潮との関係から－』北海道大学博士学位取得論文. [未刊行].
- 佐藤俊樹(2011). 『社会学の方法－その歴史と構造』ミネルヴァ書房.
- Schaffner, C. (1999). The concept of norms in translation studies. In Schaffner, C. (ed.), *Translation and norms*. (pp.1-8). Briminham: Multilingual Matters
- Shlesinger, M. (1989). Extending the theory of Translation to interpretation: Norms as a Case in Point. *Target* 1(1): 111-115.
- 师哲(2001) 『我的一生－师哲自述』(师秋朗笔录). 北京. 人民出版社.
- 新崎隆子(2010). 『通訳者のコミュニケーション調整仮説－英日逐次通訳の事例から－』青山大学大学院国際政治経済学研究科博士論文. [未刊行].
- 孙平化(2009). 『中日友好随想录-孫平化が記録する中日関係』沈阳. 辽宁人民出版社.

- 孫芝夙(2003).「翻譯規範與主體意識」『中國翻譯』第24卷,第3期,3-9頁.
- 孫致禮(2002).「中國的文學翻譯:從歸化趨向異化」『中國翻譯』第23卷,第1期,40-44頁.
- 鈴木隆雄(2010).「當事者であることの利点と困難さー研究者として/当事者として」『日本オーラル・ヒストリー研究』第6号,67-77頁.日本オーラル・ヒストリー学会.
- 禰福輝(2010).「中國近代口述史學會簡介」中國近代口述史學會編輯委員會(編)『唐德剛口述歷史:唐德剛教授逝世周年紀念文集』(1-4頁).台北.源流出版事業股份有限公司.
- 高田幸男・大澤肇(2010).『新史料からみる中国現代史:口述(オーラル)・電子化(デジタル)・地方文献(ローカル)』東方書店.
- 武田珂代子(2008).『東京裁判における通訳』みすず出版.
- 武田珂代子(2013).「翻訳者・通訳者の倫理規定」鳥飼玖美子(編著).『よくわかる翻訳通訳学』(16-17頁).ミネルヴァ書房.
- 瀧本真人(2006).「AUSIT 倫理規定と通訳者の行動:ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合」『通訳研究』6号,143-154頁.日本通訳学会.
- 陶麗霞(2013).『文化観与翻譯観』北京.中国書籍出版社.
- トンプソン, P. (2002).『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』(酒井順子・訳).青木書店.[原著:Thompson, P. (1978/2000). *The voice of the past: Oral history*(3rd ed.).Oxford &New York:Oxford University Press].
- 友枝敏雄(2002).「規範の社会学1」『人間科学共生社会学』2巻,109-124頁.九州大学.
- 友枝敏雄(2006).「規範の社会学2」『人間科学共生社会学』5巻,17-38頁.九州大学.
- 鳥飼玖美子(2007).『通訳者と戦後日米外交』みすず書房.
- 鳥飼玖美子(2013).『戦後史の中の英語と私』みすず書房.
- 鳥飼玖美子・平塚ゆかり(2013).「長崎通詞」鳥飼玖美子(編著)『よくわかる翻訳通訳学』(16-17頁).ミネルヴァ書房.
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*.Amsterdam: John Benjamins.
- Toury, G. (2012). *Descriptive translation studies - and beyond.Revised edition*.Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.
- 若林ジュディ(2011).「日本におけるトランスレーション・スタディーズの位置づけーより広い視点から」佐藤・ロスベアグ・ナナ(編著)『トランスレーション・スタディーズ』

(271-289 頁). みすず書房.

- Wang, B. (2012a). A descriptive study of Norms in Interpreting - Based on Chinese-English Consecutive Interpreting Corpus of Chinese Premier Press Conferences. *Meta*, 57(1), 198-212.
- 王斌华(2012b). 「口译规范的描写研究:口译研究新的突破口」『语言与翻译』第 4 期. 43-48 页.
- 王斌华(2013). 『口译规范的描写研究—基于现场口译较大规模语料的分析』外语教学与研究出版社.
- 王恩科(2007). 「翻译与翻译研究」王恩科·李昕·奉霞(编著)『文化视角与翻译实践』(1-15 頁). 重庆. 国防工业出版社.
- 王宏志(2007). 『重译“信、达、雅”—20 世纪中国翻译研究』北京. 清华大学出版社.
- 王宏志(2011). 『翻译史研究』上海. 复旦大学出版社.
- 王铁钧(2006). 『中国佛典翻译史稿』北京. 中央编译出版社.
- 王少娣(2011). 『跨文化视角的林语堂翻译研究』上海. 上海外语教育出版社.
- 王勇萍(2006). 「外国文学在中国篇:日本文学」马祖毅等(著)『中国翻译通史现代部分第二卷』(525-580 頁). 武汉湖北教育出版社.
- 王向远(2001). 『二十世纪中国的日本翻译文学史』北京. 北京师范大学出版社.
- 王晓元(2010). 『翻译话语与意识形态—中国 1895-1911 文学翻译研究』上海. 上海外语教育出版社.
- 文军 (2007). 『中国翻译理论百年回眸』北京. 北京航空航天大学出版社.
- 许钧 (2009). 『翻译概论』北京. 外语教学与研究出版社.
- 山田優(2008). 「規範、ハビトゥス、ローカリゼーション」『翻訳研究への招待』第 2 号, 121-132 頁. 2012 年 7 月 28 日
- http://honyakukenkysakura.ne.jp/shotai_vol2/08_vol2_Yamada.pdf より情報取得.
- 嚴復(1898). 『天演論:嚴幾道譯述』北京. 商務印書館.
- 杨明星(2011). 「信息化视野下外交口译教学中的多层规范」『外语电化教学』第 141 期, 49-53 頁. 上海外国语大学.
- 安田三郎(1980). 「行動文化」(安田三郎·塩原勉·富永健一·吉田民人編). 『基礎社会学1社会的行為』東洋経済新報社.
- 尹永順 (2009). 「『春琴抄』の二つの中国語訳に見られる翻訳方略と規範について—記述的翻訳研究のケース・スタディーとして」『通訳翻訳研究』第 9 号. 195-209 頁. 日本通訳

翻訳学会.

横超慧日(1983). 「仏教經典の漢訳に関する諸問題」『東洋哲学研究』22 卷, 2 号, 1-12 頁. 東洋哲学研究所.

ヤウ, V.R. (2011). 『オーラルヒストリーの理論と実践』(吉田かよ子・監訳・平田光司・安倍尚紀・加藤直子・訳). インターブックス. [原著: Yow, V.R. (2005). *Recording Oral history: A Guide for the Humanities and Social Sciences, Second Edition*. Lanham, Md: Altamira Press].

「吴建民: 翻译链接全世界的梦」(2008 年 8 月 5 日). 『中国网 china.com.cn』
2011 年 4 月 18 日

http://www.china.com.cn/book/zhuanli/2008fy/2008-08/05/content_16138575.htm より情報取得.

张佩瑶 (2010). 『中国翻译话语英译选集(上册)』上海. 上海外国教育出版社.

章艳(2011). 『在规范和偏离之间: 清末民初小说翻译规范研究』北京. 外语教学与研究出版社.

中國近代口述史學會編輯委員會編(2010). 『唐德剛口述歷史: 唐德剛教授逝世周年紀念文集』台北. 源流出版事業股份有限公司.

中央研究院近代史研究所「口述歷史」編輯委員會(1993). 『二二八事件 (第 4 冊)』台北. 中央研究院近代史研究所.

中央研究院近代史研究所 (2008). 『海外台獨運動相關人物口述史』台北. 中央研究院近代史研究所.

朱志瑜・朱曉農 (2006). 『中国佛藉譯論選輯評注』北京. 清華大學出版社

謝辞

本論文執筆にあたり、多くの方からご指導、ご助言を頂きましたことに、心より御礼を申し上げます。

指導教授である鳥飼玖美子教授には、筆者の修士課程入学時から一貫してご指導賜り、筆者を厳しくも暖かく、拙論完成まで粘り強く懇切丁寧に導いてくださいました。ここに最大の敬意をもって深謝の意を表します。

副査の武田珂代子教授、副指導教授の灘光洋子教授には細かに拙論をご覧頂き、数々の示唆に富むご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

学外審査員を務めてくださった台湾天主教輔仁大学の楊承淑教授には、拙論を丁寧にお読み頂き、熱心なご指導を賜りました。今後の日中通訳研究の指針も種々ご教示頂き、感謝の思いで一杯です。

また、野田先生、平賀先生、小山先生はじめ、異文化コミュニケーション研究科のすべての先生から、さまざまな角度からのご助言、激励のお言葉を頂戴し論文執筆の励みとすることができました。心より感謝申し上げます。

研究科の院生先輩諸氏からも種々のご助言と温かい激励のお言葉を頂戴しましたこと、厚く御礼申し上げます。

本研究は通訳者の方々のご協力なしには成り立たないものでした。本研究にご賛同頂き、長時間に渡るライフストーリーを労も厭わず語って頂いた日中通訳者の皆様に最大の敬意を表すとともに、あたたかなご協力に心よりの御礼を申し上げます。

中国語文献調達などでは、陳平氏はじめ中国在住の友人諸氏にもお世話になりました。ここに感謝申し上げます。そして、本研究科入学時から今日の拙論完成までの長きに渡り、家を守り筆者を支えてくれた夫である平塚一弘と、実母、義母のふたりの母に感謝致します。また、異文化との出会いの素晴らしさを筆者に最初に教えてくれた亡き父に敬意を表します。

なお、本論文の執筆期間に、立教大学学術推進特別重点資金（SFR）の助成を頂きました。ご支援に心から感謝申し上げます。